

多摩川水系における川魚の技法と習俗

1983年

安 齋 忠 雄

安齋宣伝研究室代表

財団法人とうきゅう環境浄化財団助成報告書・一九八三年

多摩川水系における川漁の技法と習俗

安齋忠雄著

序

首都の西を流れる多摩川は、かつては清冽な流れの川として知られていた。生命力に溢れた多摩川は数多の魚族を育み、そこに漁する人たちは、英知の結晶とも言ふ可き創意に満ちた技法を駆使して、長い間に互り沢山の魚を捕らえてきた。

当時、流域の人びとの暮らしは、今日のように物質的に恵まれたものではなかったが、多摩川の流域を潤す清らかな流れは、川沿いの人たちの日常生活に深く関わり合っていた。現代ではすでに失われたが、その昔、清く大いなる流れは、その辺に住む人たちの精神的豊かさも育み続け、多摩川は文字通り流域の生命線としての役割を果たしていたのである。

清らかな流れの長い時代が過ぎて、この半世紀の間に、流域は大きく変貌し、多摩川もまたその様相を一変させた。いつの間にか流れに漁る人の姿が川面から

消えて、在りし日の伝統漁法の面影を伝える漁具だけが、流域の一部にとり残された。そして、現実に見る多摩川の荒廃は、それまでの長い間にわたって、流域の生活文化を育んできた人と川との絆を断ち切ったのである。

多摩川が過去に辿った栄光ある漁撈文化の歴史は、現在の汚濁の流れからは到底伺い知ることとはできないが、その昔、様々な創意に溢れた技法を駆使して川と共に生き抜いた先人たちの有り様は、川と心の荒廃に苛まれる現代のわれわれに、多くの示唆を与えてくれる。

この度、財団法人とうきゅう環境浄化財団の助成により、かつて多摩川で行われた川漁の技法について調査する機会を得たが、この拙い成果が、多摩川の蘇生へのよすがともなれば、著者の多とする所である。

調査、研究の概要と例言

- 一、本報告書は、財団法人とうきゅう環境浄化財団の助成により著者が行った、多摩川水系における伝統漁法の調査、研究に関する成果である。
- 二、フィールド調査並びに研究期間は、昭和五四年五月から昭和五八年三月である。
- 三、調査、研究の地域は、多摩川の全水系を対象にしたが、漁法の種類等に関しては、中流域が主体になっている。
- 四、調査方法については、各流域の伝統漁法経験者及び漁業組合関係者からの聞き取り、並びに各市町村所属の資料館収蔵漁具の写真撮影と漁具の一部についての計測を行った。
- 五、関係文献等による研究は、多摩川流域自治体所属の収蔵資料を利用し、現在廃絶された伝統漁法の解明にも当たった。
- 六、本書における多摩川の流域区分については、便宜上、次の区間を設定した。
 - 上流域 — 多摩川本流では青梅市地先水域より上流。秋川では五日市町地先水域より上流。
 - 下流域 — 世田谷砦地先水域より下流。
 - 中流域 — 上流域と下流域との中間の地域。但し、源流域については、日原川及び秋川、丹波川上流地区のイワナ域とし、汽水域については河口から多摩川大橋辺りまでを設定した。
- 七、本書における漁撈者の呼称区分については、左記による。
 - 職漁者、川漁師 — 川漁を専業とし、それによって生計を立てる者。
 - 半漁民 — 生計が川漁と川漁以外による者で、漁の技量の点では、職漁者と変らぬ者が多い。
- 八、本書に掲載した個人名並びに機関名称等に関しては、敬称を省略させて頂いた。

多摩川水系における川漁の技法と習俗

目次

序	三	一三、鮒筭	六二
序章 多摩川水系の伝統漁法	九	一四、泥鱈筭	六四
第一章 筭漁法	一五	一五、鯉筭	六八
一、多摩川水系の筭漁法	一七	一六、竹筒漁	六九
二、瀬張としら	一八	一七、蟹筭	七〇
瀬張	二〇	一八、ガラス筭	七一
しら	二九	第二章 網漁法	七三
多摩川水系のもじ	三一	一、多摩川水系の網漁法	七五
三、追い込みもじ漁	三六	二、投網	七九
四、雑魚筭	三七	三、山女魚投網	九〇
五、追い込み漁	四七	四、鯉投網、マルタ投網	九〇
六、鯰筭	四八	五、瀬付き	九二
七、鰻筭	四九	六、寄せ網	一〇〇
八、ドンドン	五〇	七、掬い網	一〇〇
九、天王筭	五二	八、鶺鴒漁	一〇四
一〇、桶筭	五五	九、撫網	一一六
一一、山女魚筭	五八	一〇、待網	一一九
一二、鰻筭	五九	一一、ゴリ網漁	一二一

一一、板もみ	一一一	六、ドブ釣り	一七二
一二、エビ掬い	一一二	七、友釣り	一七五
一四、跳網	一一五	八、さくり	一八〇
一五、受け網	一二九	九、ころがし	一八二
一六、鱒の網漁法	一三〇	一〇、鮎の置き鉤	一八三
一七、鱒の跳網	一三二	一一、マルタ釣り	一八四
一八、刺網漁	一三三	一二、眼鏡釣り	一八五
一九、張網	一三七	川の状況と眼鏡釣り	一八七
二〇、置網	一三九	ひっかき竿	一八九
二一、鮎刺網	一四〇	網魚籠	一九一
二二、巻網	一四〇	眼鏡釣りの箱眼鏡	一九二
二三、鯉刺網	一四一	一三、按摩釣り	一九四
二四、カマツカ網	一四一	一四、鯰釣り	一九六
二五、ペラ網	一四一	一五、ふつとばし	一九八
二六、投げ網	一五〇	一六、籠釣り	一九八
二七、四つ手網漁	一五二	一七、鯉釣り	一九九
二八、白魚網漁	一五四	一八、ぶつ込み釣り	二〇〇
第三章 釣漁法			
一、多摩川水系の釣漁法	一五九	一九、鮠釣り	二〇一
二、岩魚・山女魚釣り	一六一	二〇、とびつき	二〇三
三、流し鉤	一六二	二一、くいばり	二〇四
四、打ち釣り	一六五	二二、多摩川水系の小物釣り	二〇四
五、瀬釣り	一六八	鮎釣り	二〇五
	一七一	タナゴ釣り	二〇六

モロコ・クチボソ釣り	二〇六	多摩川の鵜飼漁	二四二
一三、穴釣り	二〇七	鵜使いと鵜	二四五
二四、数珠子釣り	二二〇	三、築	二四六
二五、ひつくくり	二二一	四、堰漁	二四八
二六、手長蝦釣り	二二二	五、手摺み漁	二五〇
二七、食用蛙捕り	二二三	六、川干し漁	二五一
第四章 刺突漁法	二二五	七、柴漬け	二五四
一、多摩水系の刺突漁法	二二七	八、石倉	二五六
二、岩魚・山女魚突き	二二七	九、石ぶち	二五八
三、鰍突き	二二九	一〇、ブツタイ	二六〇
四、雑魚突き	二三一	一、泥鰌掘り	二六二
五、鯉突き・マルタ突き	二三二	二、鰻掻き	二六三
六、潜り突き	二三四	一三、蜆漁	二六五
七、泥鰌刺し	二三五	一四、沢蟹捕り	二六五
八、火振り	二二六	一五、毒漁	二六六
九、鉄砲鉋	二二七		
一〇、多摩川水系の籍	二三七	附編 多摩川水系漁法一覧表	二六九
一一、刺突漁と箱眼鏡	二三二	おわりに	二八七
一二、火振り漁の照明具	二三五	参考文献	二九〇
第五章 雑漁法	二三七		
一、多摩川水系の雑漁法	二三九		
二、鵜飼	二三九		
明治以降の鵜飼漁	二四一		

序章

多摩川水系の伝統漁法

多摩川水系の伝統漁法

秩父山地の笠取山に源を発する多摩川は、延々一三八軒を流れて東京湾に注ぐが、この清らかな流れは数多の魚族を育み、かつて流域の人びとは様々な漁法で魚を捕っていた。

多摩川における漁撈の歴史は大変に古く、網漁に用いたと思われる石錘や土錘などが縄文時代の遺跡から出土しており、その出土例は多摩川の上、中流域の河岸段丘に多く見られる。このようなことから、縄

網漁に使われたと推定される縄文時代の石錘／都立五日市高校出土、同校所蔵



文期の多摩川では、すでに網漁法による漁撈が行われていたことは疑問の余地がない。

時代が降り平安期に入ると、多摩川では鵜飼漁が行われ、夜間に篝火を焚いて鵜を使う夜川鵜飼の記録が見られる。だが多摩川も、江戸時代以前は、単なる辺境の一河川に過ぎなかったが、徳川幕府が江戸に居を定めて以来、多摩川は豊富な魚族、特に鮎を産する最寄りの河川として注目され、多摩川の漁撈は多様な展開を見せて行く。

天正十八年（一五九〇）、徳川家康の江戸入府は、その後の多摩川の命運を大きく変えることになる。江戸の急激な発展と人口増加に伴う魚貝類の需要の多くは、内湾からの所謂江戸前の海産品で賄なわれたが、一方、川魚に対する需要も多く、多摩川は幕府の知行の下に、川魚供給河川としてその体制下に組み込まれて行く。

腐敗し易い魚を鮮度を落とさずに供給するために、供給水域と消費地が離れていたのでは、冷蔵技術を持たない当時としては望み得ぬことであり、どうしても最寄りの産地から短時間に輸送する他はない。かくして、多摩川に江戸の需要を満たす命題が課せられることになったが、豊饒な流れは長い歳月にわたってこれに代えてきた。

多摩川は江戸時代以降、流域に展開する政治的、

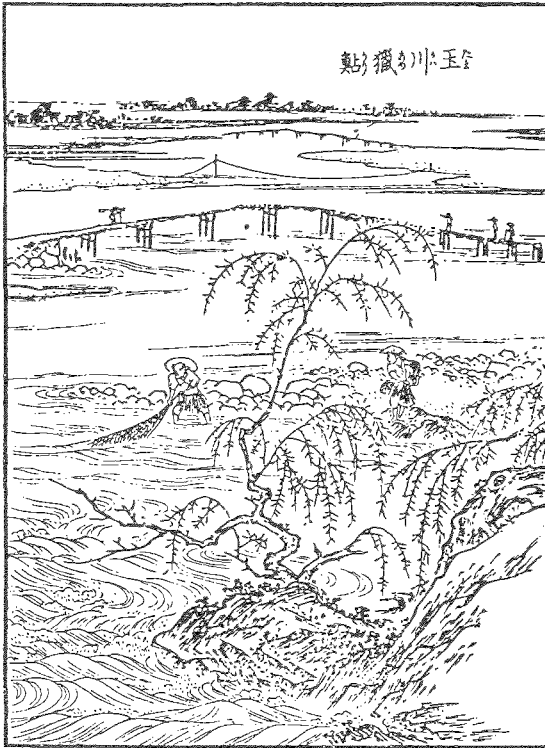
社会的、経済的影響を受けながら漁の技法を発展させて行くが、自然河川としての多摩川は、流路延長に占める中流水域の割合が高く、鮎をその指標に考えるならば、多摩川の約半分以上の長い水域が中流である。この中流水域には、鮎をはじめ数多の魚族が生息



多摩川の鮎／多摩中央信用金庫多摩文化資料室提供

する極めて生産性の高い流れで、多摩川は江戸の需要に対応する生産力に富む川として、また距離的にも江戸の中心から十五料程の位置にあって、多摩川の漁撈は益々発展することになる。

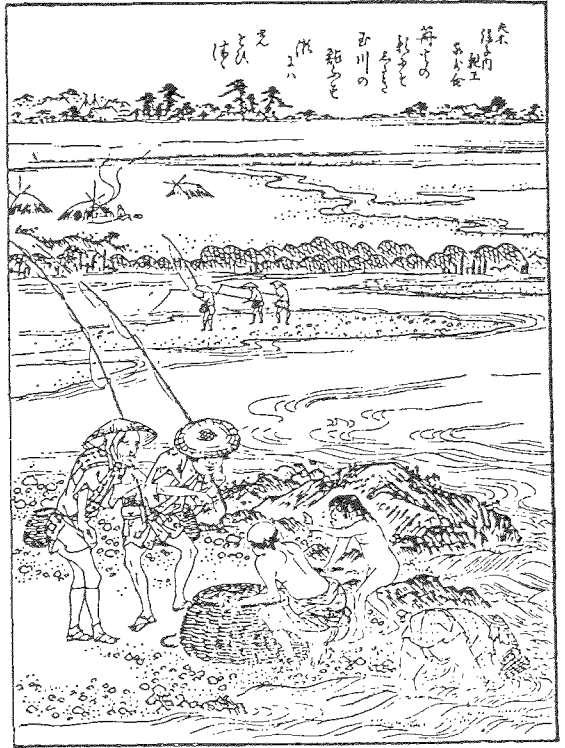
こうした時代的背景の中で、多摩川の漁撈は以前とは様相を変え、制度化された上納鮎を中心に飛躍的な発展をとげる。多摩川における様々な鮎漁法の進歩は、当然の事ながら他の漁法にも影響を与え、相互に技術的な交流と改良を加えながらそれを蓄積して行く。また、他の水系より多摩川にもたらされた新しい技法は、直ちにそれを消化、吸収して定着させると共に、更に洗練された合理的な漁法に発展させて行った。多摩川流域は、漁に關して昔から進取の気性に富む土地柄



で、川漁師たちは積極的に新しい技法を導入してきた。漁撈の技法が発達した川であると共に、その反面、多摩川は他の水系に比して漁法の消長が烈しい河川とも言える。これも時代の要求に応える当然の帰結であろうが、それでも百余種に及ぶ様々な漁法を今日に伝えている。明治から昭和の初期にかけて、多摩川に大勢の行楽客が訪れるようになり、人びとは清冽な流れに鮎料理を楽しんだ。こうした行楽客の前で「鵜飼」をはじめ、「跳網」や「投網」、「寄せ網」などの漁法を職漁者が実演して見せる観光漁業が、多摩川中流域を中心に盛んに行われた。川岸には川魚料理屋が立ち並び、川漁師たちは様々な漁法で魚を捕らえ料亭に供給していた。多摩川の川べり一帯は俄に華やいだが、流れは相変わらず豊かな魚族を育み、そこに漁りする人たちは様々な漁法で魚を捕っていた。多摩川の流れには職漁者や生計の一部を漁撈による半漁民たち、それに流域住民の老いも若きもが生業もしくは遊びのために、川漁を行っていたのである。

川漁の長い歴史の過程で生まれ、発達してきた多摩川の伝統漁法は百余を数えるが、これらは魚の捕採技法の種別によって、五つの漁法に分けられる。「釜漁法」および「網漁法」、「釣漁法」、「刺突漁法」それに「雑漁法」があるが、いずれも魚の習性を良く見極め、逆にそれを利用した創意にあふれる技法が多い。さらに、複雑に変化する川の状況と水の流れに応じた巧みな漁法もあり、一つ一つが甚だ変化に富んでいる。また、それぞれの漁法に使用される漁具も数多いが、簡素な中に優れた捕採機能を見えたものが少なくない。

多摩川水系で、昔から行われてきた伝統漁法の名称には、それぞれ



江戸時代の多摩川中流域の漁撈の様相を描いた
「玉川魚鮎」／『江戸名所図会』より

の漁法に用いられる特定の捕採漁具の名称に代表されたものが多い。例えば、「雑魚笈」や「寄せ網」など、漁具名が、即漁法を表す例は枚挙にいとまがない。こうした漁法の呼称については、漁という人と魚における直截な関わり合いの中で、漁法の名称には、最も密接な使用漁具名を冠するだけで、事足りた訳なのである。長年に亘って行われ続けてきた漁具名を付しただけの漁法名が多い事は、多摩川のみならず、こうした事例は他の水系にも見られる。

多摩川水系の漁法を俯瞰的に見ると、比較的に中流水域で行われた

漁法が多い。中流水域の長い多摩川では、そこに様々な漁法が集まって活況を呈することになり、多摩川の漁撈文化も、やはり中流を中心に展開してきた。そして幾星霜の時が移り、多摩川から伝統漁法の灯は消えたが、その流域一帯に残る漁具が、かつて盛んであった在りし日の面影を今日に伝えている。



葛飾北斎筆『富嶽三十六景・武州玉川』



和田英作画・『明治31年頃の玉川』

第一章 筌 漁 法

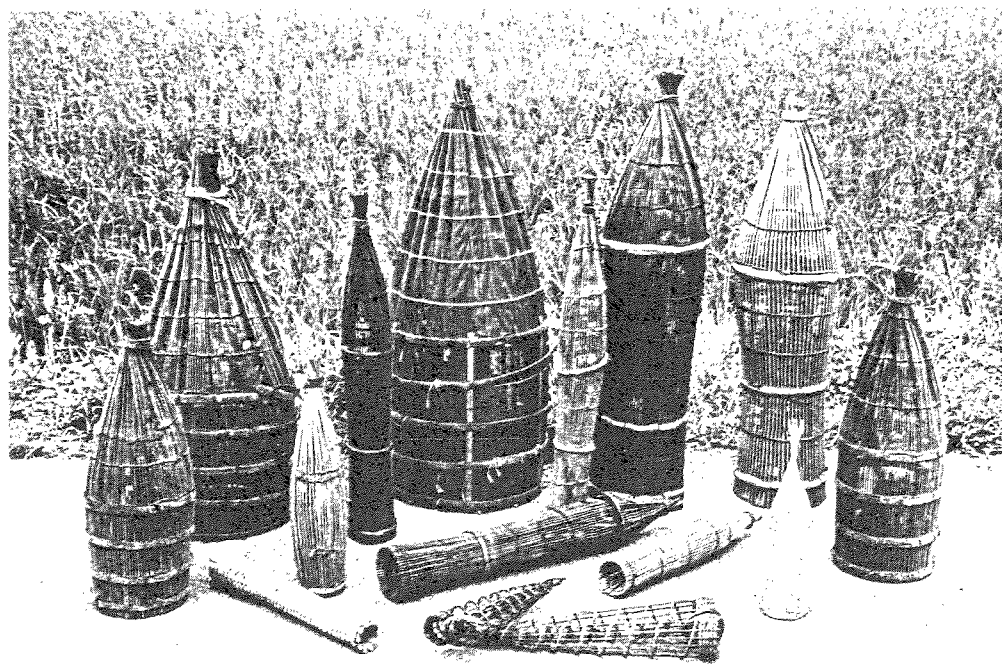
一、多摩川水系の筥漁法

多摩川水系の筥漁法は他の網漁法や釣漁法、刺突漁法、それに雑漁法などと共に、かつては流域の一带で盛んに行われていた漁法で、職漁者をはじめ老人や子供たちに至るまで、筥を用いて様々な魚を捕らえてきた。

多摩川の筥漁法はその長い歴史的経過の中で、対象魚別による技法が分化、発達し、それぞれの漁法に使用される筥の種類も多い。その中で「もじ」を用いた筥漁法は近隣の河川にもその例が見られるが、特に多摩川水系において技術的な発達が顕著であり、そうした技法上の成果が他の水系に及ぼした影響は見逃せない。

また多摩川の筥漁法について考える時、この川の広汎な水域にわたって、雑魚筥を使用している様々な漁法が成立し、分化して行った事は、一つの筥を通して川と人との長い関わり合いの歴史の中で、漁撈の技法が多様な展開を見せた好例である。一方において、多摩川の上流から下流、さらに支流や農業用排水路などの細流を含む水域で、鰻筥を使用した鰻捕りが行われている。普通、同一水系の上流と下流とは川相や生態的条件が異なり、従って、それぞれの漁法も違ってくるのが川漁に見られる一般的現象である。だが、鰻筥を用いた漁法は、多摩川の上、下、本、支流を問わず普遍的に行われており、技法上の点でも極めて地域差の少ない漁法として分布している。

またその反面において、移り変わる時代 trends の中で古来から行われ



多摩川中流域の筥

てきた漁法や漁具が多摩川から消えて、別に新たな技法と用具が導入される場合もあり、そうした事例を釜漁法にも見ることがができる。

明治以降、箱型横釜の一種と見られる「天王釜」の出現は、かつて多摩川中流で使われていた堅釜を駆逐する程の盛況振りであり、瀬の至る所にこの釜が仕掛けられた。また「桶笥」も新素材の利用によって、以前にも増してその漁法は盛んになった。

現在、多摩川の流域一帯から釜に関する考古品の出土例は報告されていないが、先史時代にすでに多摩川の流れては、雑魚笥型の釜に近い漁具を用いて漁撈が行われていたであろうことは想像に難くない。以後、釜による陥笥漁法は、長い時の経過の中で徐々に進化の途をたどることになるが、多摩川の釜漁法は江戸時代に至って一挙に開花する。

多摩川が鮎の川として江戸から東京までの三百有余年、その莫大な需要を賄い続ける間に、鮎の釜漁法を中心とする様々な技法は互に影響を与えながら、著しい進歩と発展を遂げることになる。

魚族の習性を巧みに利用した陥笥漁法は、その漁期と漁場さえ誤らなければ確実に漁獲が保証され、また操業も他の漁法より容易である。かつて、多摩川の流れに魚が群がり、いくらでも捕れた時代には、釜による漁法は大変に有効な技法であったと言える。釜を仕掛け後はただ魚が入るのを待ち、労作は魚の捕り上げだけである。この様に容易な手順で魚が得られる漁撈手段は、当時の多摩川といえども釜漁法をおいて他にない。かくして釜を用いる様々な漁法が多摩川水系で盛況を呈し、発展して行くことになる。

二、瀬張としら

瀬張りとしらは、鮎を捕るためにいずれも返しのない双胴型の釜を用いて、水深二尺前後の瀬で行う定置漁法である。この漁法は古い歴史を有する釜漁法で、多摩川水系ではかつて中流域を中心に盛んに行われていた。

享保十七年（一七三二）の資料に、瀬張としらが幕府に上納する鮎を捕るための特権漁法として、下流は世田谷の砦、二子地先から、上流は青梅、五日市地先に亘る広い範囲の水域で行われていた事が記されている。

瀬張としらは、いずれも流れの瀬を横切つて張り渡した威し具によつて鮎を驚かせ、川岸に設置した捕採部に「もじ」と呼ぶ釜に入る鮎を捕らえる漁法である。瀬張としらの違いは鮎の威し具の異なる点で區別されるが、その他鮎の捕採に使用される漁具や漁法の原理の点で、両者に何ら



鮎籠に並べた多摩川鮎

の差異はない。

然しながら、多摩川水系の瀬張漁法が初夏から秋期まで行われたのに対して、しらは降り鮎の場合に多く見られた漁法といえる。瀬張としらはいずれも川の瀬を横切つて捕採装置を仕掛け、昔から沢山の鮎を捕つてきたが、江戸時代には職漁者もしくは鮎上納を役務とする流域農民たちが、許可の下に行つていた漁法であつた。

鮎の習性を巧みに利用した瀬張としら漁法は、捕れた鮎が鵜飼などによる鮎と異なり、魚体に傷を負うことなくまた鮮度にも優れ、上納鮎を確保するためには恰好の漁法であつた。そのため多摩川に鮎の季節が訪れると、中流水域を中心に瀬張としらが盛んに行われ、捕れ

江戸時代のもじ漁を示す図絵。右下の流れに立ち込む人物は、もじを引き上げ中に入った鮎を捕り上げています。『玉川雑鮎』部分。『江戸名所図会』より

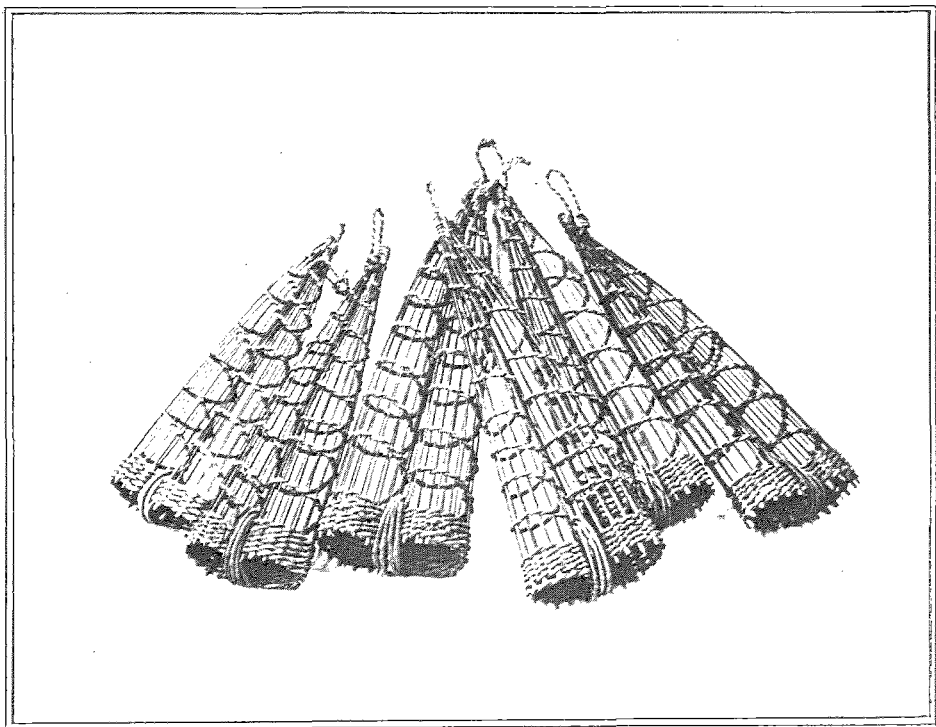


流れにもじを仕掛ける。江戸末期／二代廣重筆。『玉川乃鮎と里』部分



た生鮎は生賣場に集められ大量に江戸に廻送されたのである。

多摩川中流域のもじ／鈴木由太郎蔵



瀬 張

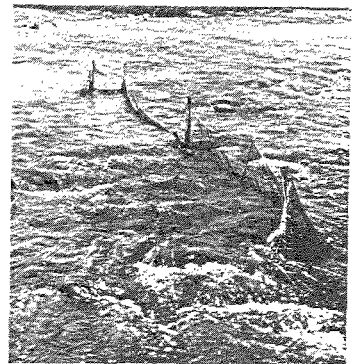
多摩川水系の瀬張漁は六月の初旬より始まり下り鮎の季節まで続くが、明治二十九年、府中の漁業組合が定めた規約によると、瀬張漁の漁期は毎年六月一日より十月十四日まで、それに十一月十六日から十二月三十一日までの二期間としており、これによると多摩川で瀬張が行われていた時期はかなりの長期に亘っていた事がわかる。

瀬張と呼ばれる漁法名は、多摩川水系では普遍的な名称になっているが、地域によって幾つかの別称がある。

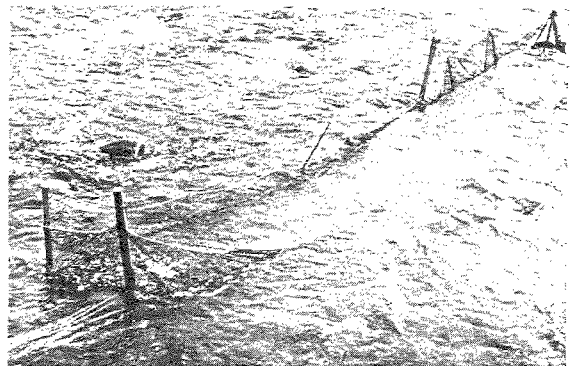
瀬張の異称については「もじ」又は「もじ漁」、「鮎笈(アイトウ)」（以上中流域）、「瀬張網」（南秋川）、「部屋網漁」（羽村）、「瀬網」（福生）、「もじづき」（浅川・平山）、「鮎瀬張網」（府中）などと呼び、また江戸時代の資料に、瀬張を「鵜縄もじとり」、「注連縄漁」と記しているが、いずれも川瀬に鮎威しを設け、仕切網に仕掛けたもじで捕らえる瀬張の異称に他ならない。

瀬張は鮎特有の習性を利用した漁法で、川を往来する鮎の流れに定置した威し具で驚かせ、進路を断たれて混乱した鮎を仕切網に誘い込んでそこに仕掛けた釜で捕らえる定置漁法である。瀬張はその名の示す如く、川の瀬の中段、水深二尺前後の瀬で行う。

まず瀬を横切って四尺程の間隔で木杭を打ち込む。これに五、六本の稲藁の先を四、五寸の間隔で荒縄に取り付け、注連縄状にする。これを通称「おかげり」と呼び、流れを横切って打込んだ木杭の川底か



下流から見た瀬張の部屋／昭和
五四年八月・多摩川日野栄町地
先水域での「伝統漁法実演」



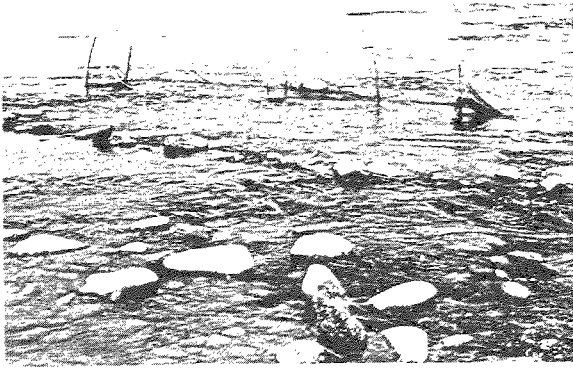
川岸の斜め上流からの部屋／昭和
五四年八月・多摩川日野栄町
地先水域での「伝統漁法実演」

ら五、六寸の位置に取付ける。こうした状態でおかげりは水の流れに漂い揺れ動く。

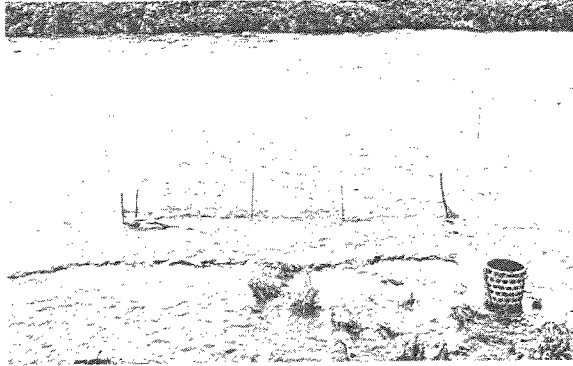
川に浸したばかりのおかげりの稲藁は、その表面に密生する細かい毛の隙間に気泡が宿り、これが水中で白銀色の鈍い光を放つ。流れの力で絶えず水中に揺らめき動く白銀色の細長い物は、川を移動する鮎の眼には異様に映るのであるうか、行く手にはだかるおかげりに色をなしてとっさの避難行動をとる。

今まで流れに平行して川を上下する鮎の進路が、川を横切るおかげ

りの存在で急に乱れ、それからは鮎の軌跡が狂ったように流れを右往左往する。そして、鮎は懸命におかざりを避けて、己れの避難場所を求めようとする。鮎という川魚に対しておかざりは極めて魔力的な威力効果を発揮するものであるが、さらに鮎への威しを徹底させるために、木杭の水面の位置に荒縄を少々たるませた状態で結び付け、流れの力で縄が絶えず水面を打つようにする。こうすることで縄が水勢の力によって引つ張られ、張りつめた縄が自らの弾力で戻る際、水面を叩くことになる。



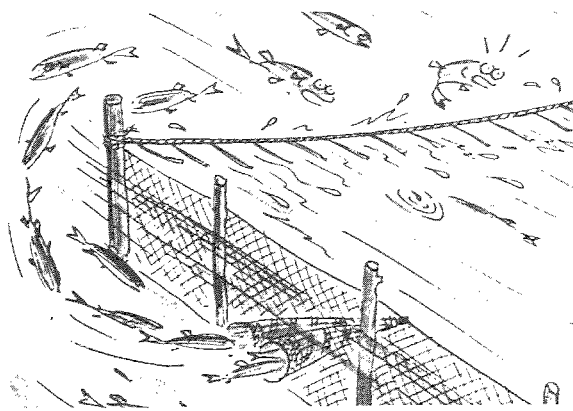
川岸からの部屋／昭和五八年八月・多摩川日野上宿地先水域での「伝統漁法実演」



浅川の瀬張／昭和五年八月・日野上田地先水域での「伝統漁法実演」

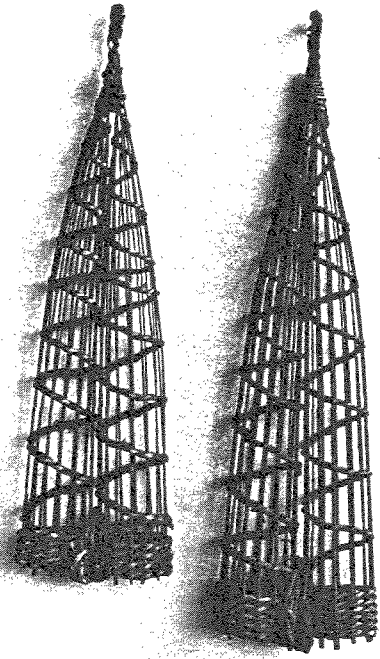
流れを遊弋する鮎の行く手に異様な物が立ちふさがっている。川底近くで白銀色のおかざりがヒラヒラと揺らぎ、水面に張られた荒縄が水しぶきをあげながら絶えず水面を叩いている。そうした事態に鮎は全く度を失ってしまい、易々と威しの策略に乗せられて自ら部屋網の方へ誘い寄せられる。

川漁経験者の言によれば、川を降る鮎はおかざりを恐れるが、不思議なことに、川を遡る鮎は降り鮎ほどそれを恐れず、おかざりを越えて流れを遡ると言う。そのため六月初旬から始まる瀬張の漁で、おかざりを川の中に張る事は上り鮎の障害にはならない。鮎などの川魚にとって川は生息場所であるとともに通路でもあり、流れを絶えず上下している。たまたま降りの際に流れに張られたおかざりに威かされ、もじに逃げ込む訳であるが、上りの際にさしたる抵抗を見せずにおかざりを泳ぎ切った鮎が、再び流れ降る時に困惑した警戒行動を見せるのは、鮎特有の習性によるものである。こうしてみると、鮎は正に「往きはよい、帰りは怖い」を地で行く



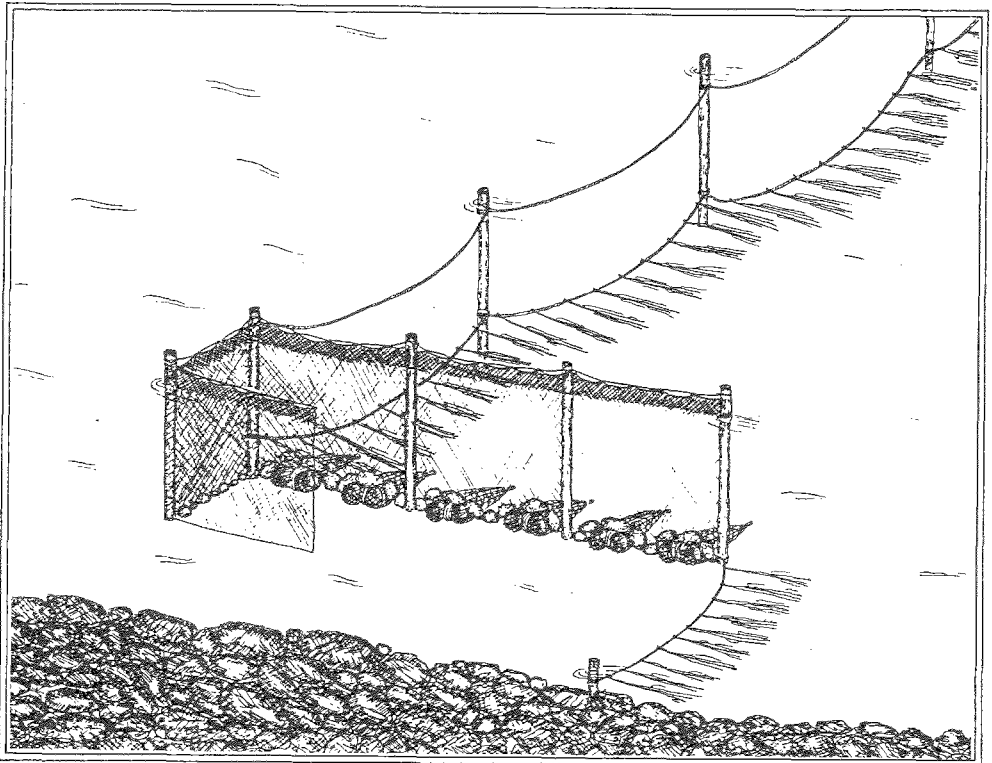
流れに張られたおかざりに驚く鮎／『瀬張漁法説明パネル』部分・世田谷区立郷土館蔵

夏もじ(左)と秋もじ(右) / 鈴木由太郎蔵
 魚であると言える。



瀬張における鮎の捕採部の設置は、まず川を横切つて張られたおかざりの川岸の一方或いは兩岸に、流れに平行して長方形に木杭を打ち込み、細かい絹糸製の建網を張つて仕切とする。網の下の川底に口を川岸方面に向けたもじを五〜七個並べ、川石で固定しておく。

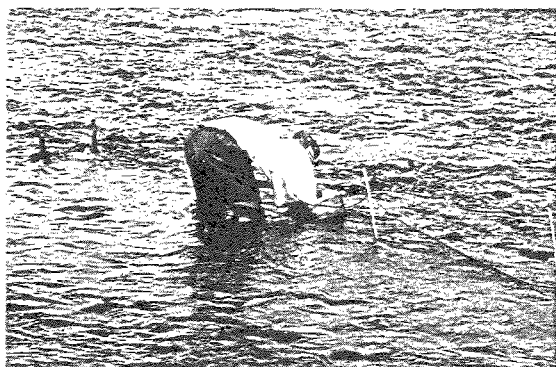
もじを設置し、瀬張網によつて仕切られた区画を通称「部屋(ハヤ)」と呼んでいる。部屋の上流部は鮎が入り易いように開けられていて、この個所には仕切網の一部が返しの役割を果たす構造になっており、その奥まった部分を「納戸(ナンド)」と呼んでいる。そして部屋の



瀬張魚の構造図

下流部には、鮎の逃走を防ぐためにおかざりを張ってヒラヒラさせておく。

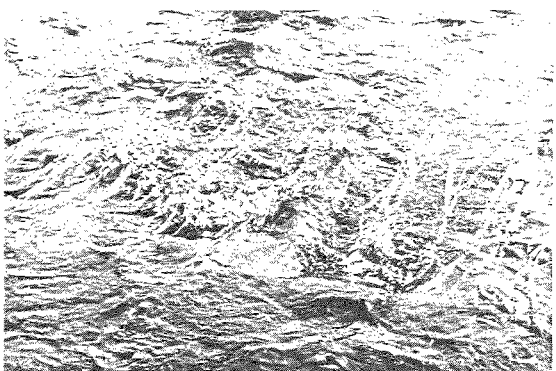
瀬張漁法におけるおかざりは鮎の威しと誘引を行い、それから逃がれようとする鮎が部屋に導き寄せられ仕掛けたもじに入るもので、もじを含めた部屋と言われる部分は、瀬張漁法における捕採部としての重要な役割を果たしている。



箱眼鏡を使ってもじに鮎が入っているかどうかを見る。／昭和五八年八月・多摩川日野上宿地先水域での「伝統漁法実演」



鮎を捕捉する部屋の上流部分。仕切網に囲まれた部分を納戸といふ手前の長さ一尺ほどの固定されぬ網は流れに揺れ、この部分を「返し」もしくは「あご」と言い、鮎の捕採に有効な役割を果たしている。／昭和五四年八月・多摩川

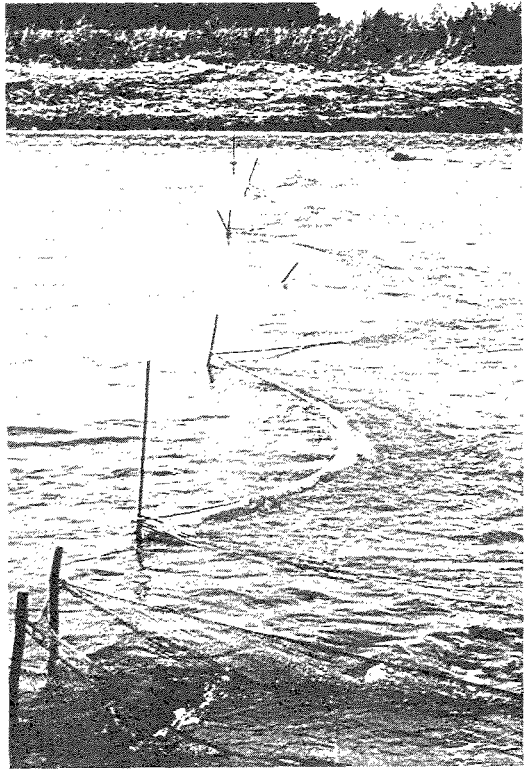


流れの上流から見たおかざり／昭和五四年八月・多摩川



瀬張用のおかざり／昭和五七年八月・浅川

鮎がおかざりや張り縄の存在に畏怖し、忌避行動に出るといふこの魚の習性は、何も瀬張に限らない。跳網漁における「ウラジロ」が鮎の威しに使われ、寄せ網漁の「シラタ」、ペラ漁の「ペラ」、それに古くは掬い叉手網漁における「鶉縄」などがある。こうした鮎の習性は、瀬張漁法の場合、鮎が威し具の存在を認めた瞬間に忌避行動を開始する。鮎が部屋の開口部に向かって逃げ、仕切網の川底に口を空けて横



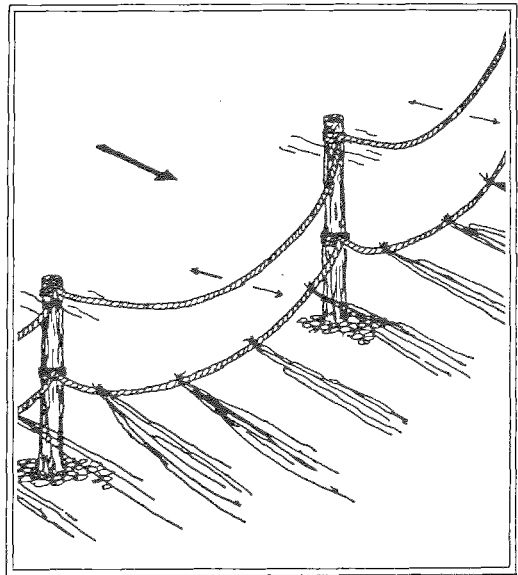
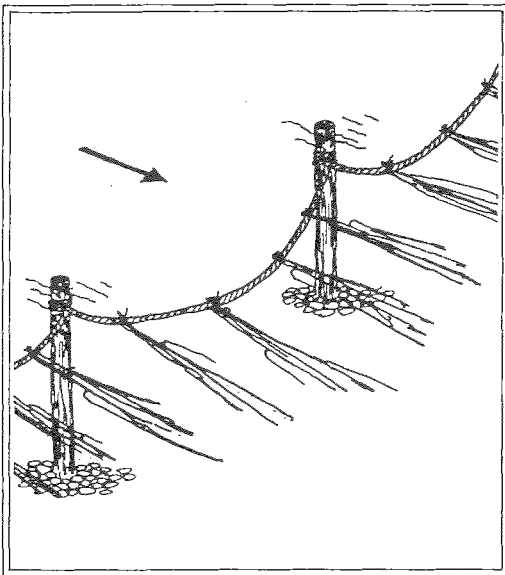
水面の張り縄が流れに勢よくはじけ、鮎威しの効果を發揮する。／昭和五七年八月・浅川日野上田地先水域での「伝統漁法実演」

たわる返しのない双胴型のもじの中に体を潜ませ、先程のおかざりや
威し縄の恐怖から逃避しようとする。

こうした威し具に驚いた鮎が次々ともじに身を潜ませ、時には一つ
のもじの中に十数匹もの鮎がぎっしりと入っている事もある。自ら威
しの存在に狼狽し、只ひたすら物の隙間に身を潜ませる事しか知らな
い鮎の習性は、投網漁の場合にも見られる。投網を打った瞬間、網の
中の鮎はじっと動こうともせず、川底の石の間に身を潜ませて機を伺い、
網を手繰り寄せた際に素早く逃げようとする。

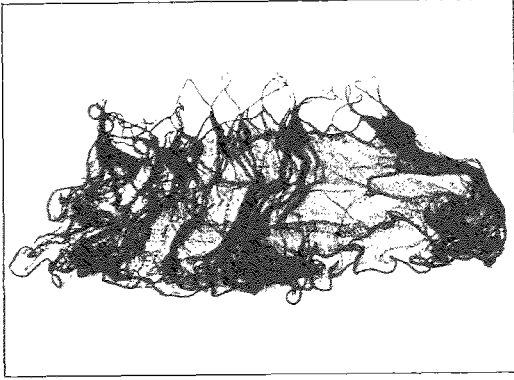
瀬張の鮎威し具

(左図はおかざりだけの場合で、右はおかざりにさらに張り縄を渡した図。)



もじは双胴型をした返しのないノッペラボーの無舌筈であるが、鮎はこの中に頭から体ごと入れたまま、もじから逃げようとはしない。一説には、もじに入った鮎の鱭がもじの構造材に引っ掛かり、それで戻る事ができないと言われる。しかし、一つのもじに十数匹もの鮎が入り、最後の鮎が先きに入っている鮎の尻にわずか頭だけを入れて、威しの恐怖から逃れようとしている。この鮎はもじに鱭が掛かっている訳でもなく戻ろうと思えば容易なはずであるが、この最後の鮎はもじの入り口に少しでも潜ろうと、わずかな隙間に頭を突っ込むのに懸命で、反転して逃げる気配は一向に見られない。

瀬張網／鈴木由太郎蔵



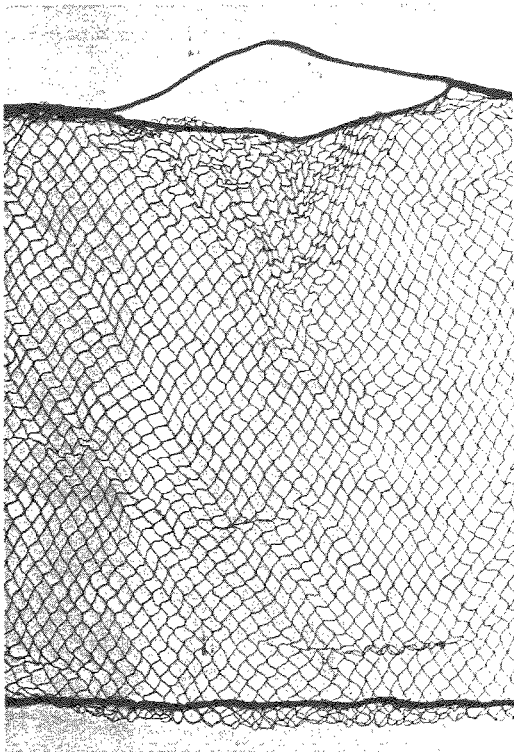
鮎の鱭掛り説はともかくとして、鮎という魚はこうした事態に到った時、金輪際、戻ろうとしない習性の魚なのである。もじに入った鮎を長い間見てきた川漁師たちは、皆一様に言う。「鮎は馬鹿な奴よ、一度入えつちめえば、決して戻ろうとはしねえんだから……」と。昔から、鮎は清流の女王、香魚、若鮎と、その容姿と香味を貴ばれた魚であるが、如何とも為し難い習性上の弱点を人間様に握られたものである。水中に

ヒラヒラする単純な藁細工にすぎないおかげりにかくも容易に驚かされ、やみくもにもじの中に身をあずけてしまう鮎の習性は、唯あわれという他はない。

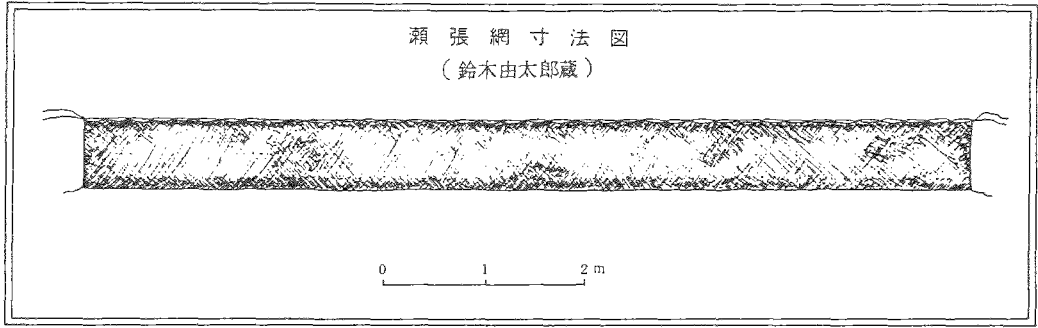
鮎の習性を利用した瀬張が、多摩川水系では江戸時代より昭和十年代に至るまで続けられたが、往時の技法と少しも変らずに継承された事は、文政六年（一八二三）の『武蔵名勝図会』が、今から百六十年前の瀬張漁法の内容を伝えた内容からも明らかである。

「……瀬張 竹を細く割いて、藤にて胴の如く小さく拵える。長さ

瀬張網部分。仕切網として部屋に張り、鮎をもじに誘導する役割をする。細絹糸編みで柿渋が塗ってある。



瀬張網寸法図
(鈴木由太郎蔵)

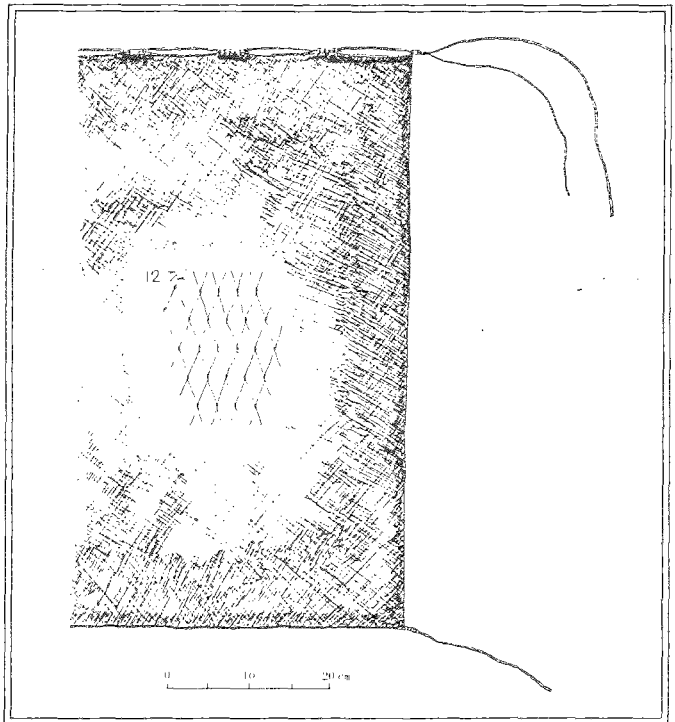


一尺二、三寸。入口差渡し二寸五分程。これをモジと云。末を細かく藤にてからみとめて、川瀬の底へ十も二十も並べ伏せて、その上に石を押えとする。その上へ水際まで驚しの網を張りおけば、鮎は川下へ行かんとして驚し網を見て、水底の石の間より下らんとすればモジに入り、すこし頭をその中へ差し入れれば跡へ戻らぬものなり。：府中より日野辺、すべてこの漁をなす。……」

と記し、鮎の威しにおかざりの代りに網を使用していた事が判る。多摩川水系の秋川の一部でも、おかざりの代りに網を川巾に横切つて用いる地域もある。この場合の網は木綿製のシラタと呼ばれる白網を使うが、一目一目手で編み上げた貴重な網を大量に必要とする。

だが当時といえども、多摩川水系では藁縄や藁、それにしら漁に使われた葉付きの竹や笹を利用した威し具が多く利用されていた。またおかざりは、

瀬張網寸法図・部分

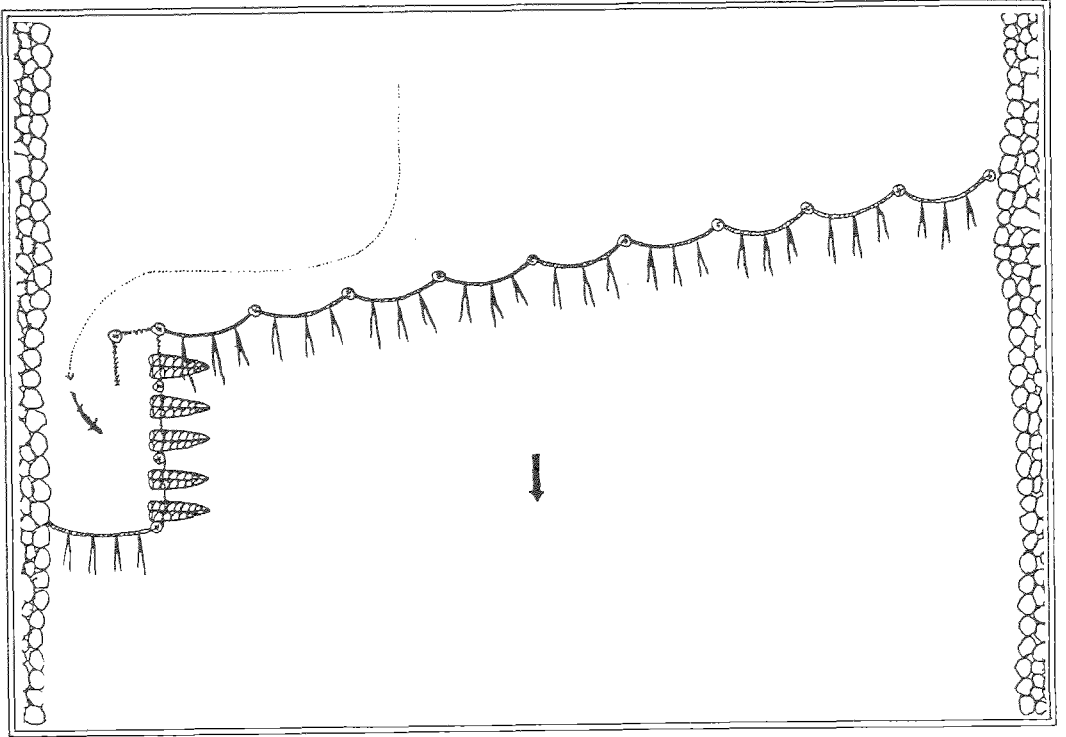


昔、羽村地方で「鶉縄」と言い、おかざりが川の魚を威して追い寄せするための機能を有するところから、広義の鶉縄に包含されていたと見るべきであろう。

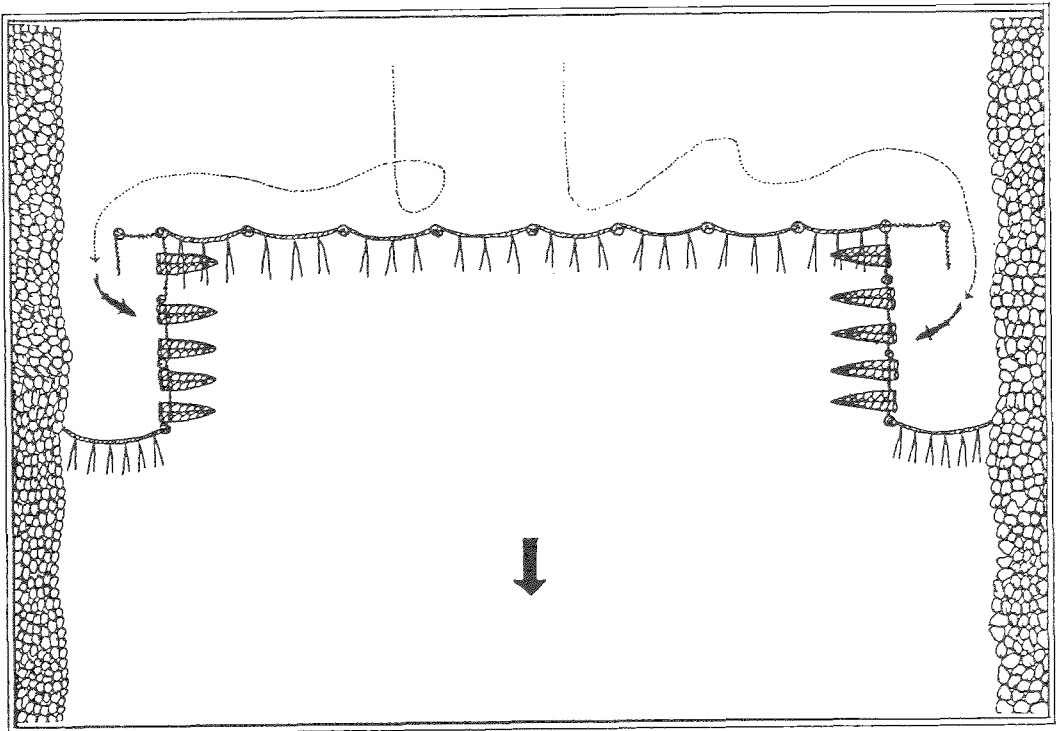
かつて多摩川水系で営まれた瀬張漁法は、技法上における地域差や漁撈者による個人差が見られる。その中で特に顕著なものは、川岸に設置する仕切網による「部屋」である。

瀬張における鮎の捕採部としての部屋では、いずれももじを用い、

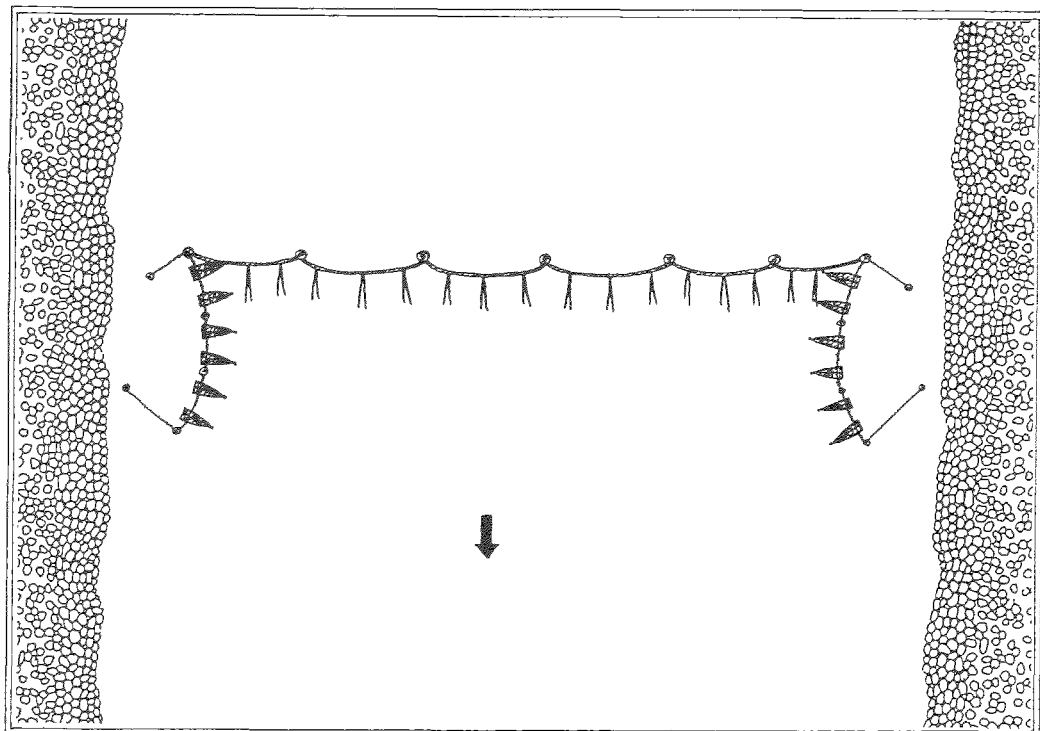
瀬張平面図・片部屋構造



瀬張平面図・両部屋構造

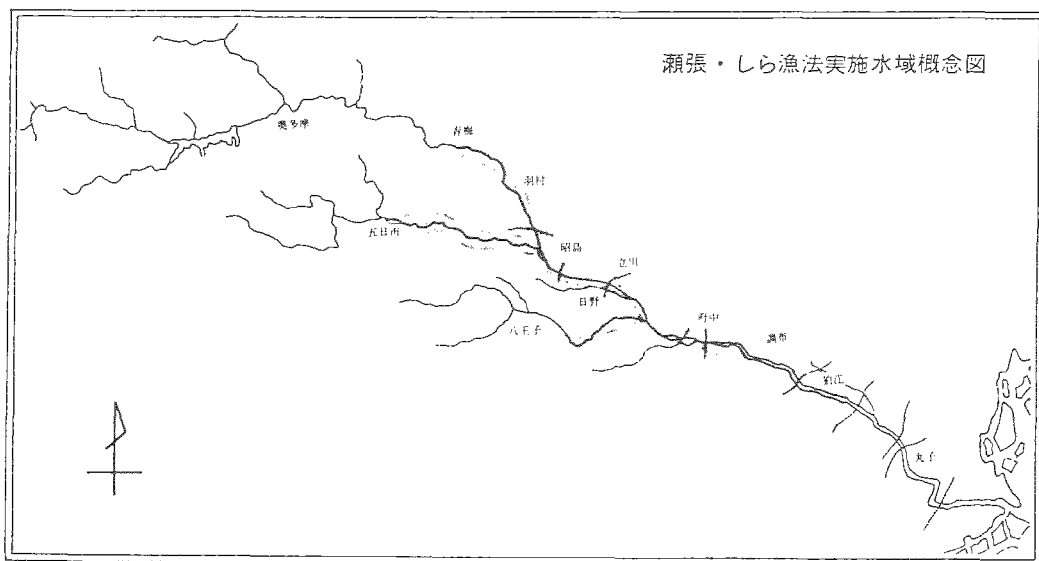


瀬張平面図・両部屋構造（羽村地方）



部屋が川の一方の岸寄りに設けられる片部屋型（単部屋型）と、川の兩岸に部屋のある構造の両部屋型（複部屋型）とがある。普通はこうした部屋の仕切網の川底部に六、七個のもじを仕掛けるが、片部屋構造ではおかざりが斜め上流の対岸に伸びるように木杭を打つ。また同じく片部屋型では、部屋尻におかざりを用いず、仕切り網を川岸近くに「ノ」の字状に

瀬張・しら漁法実施水域概念図



張り、その下に十二個のもじを仕掛ける方法が稲城地方で見られる。

また両部屋型では、瀬張網を「C」の字状に張り、その下に六個のもじを仕掛ける羽村地方の例などがあり、瀬張における技法上に微妙な異なりがある。しかし、そのいずれの場合においても、鮎の威しともじによる捕採という瀬張漁法の基本原理を踏まえたものである。

瀬張は水中を遊弋する鮎が、威しの存在に気付いてそれに反応する行動習性を利用したものであるが、川の水が澄んでいないと効果はない。職漁者の言う「川がセイスイ」で、しかも朝方が最も鮎が入る。

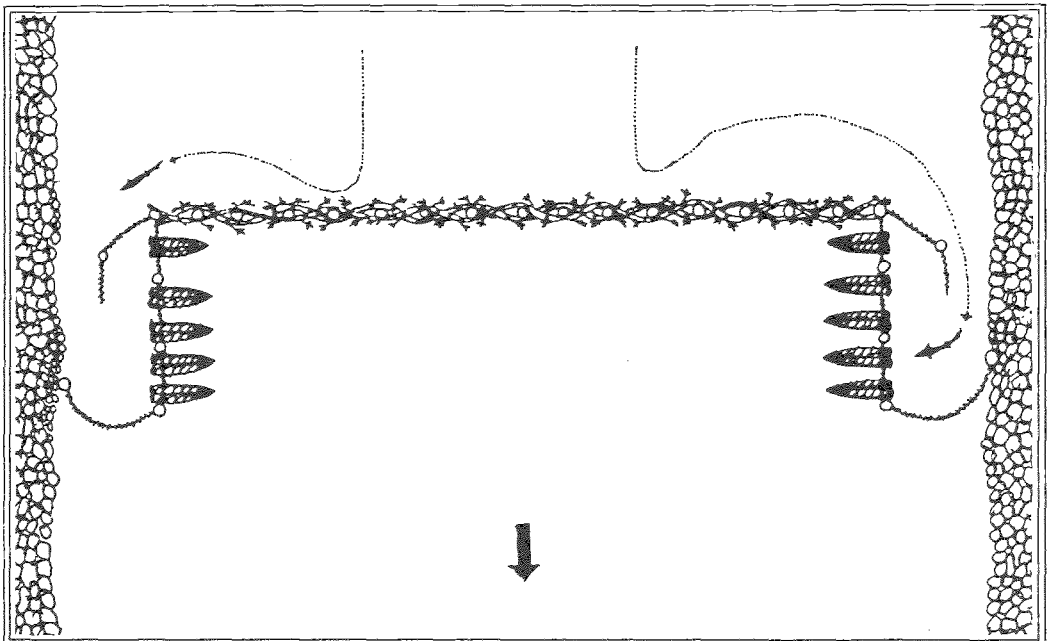
瀬張は一度流れに設置すれば、平常は維持・管理の極めて容易な定置漁法で、一日に五、六回、鮎の捕り上げを行うだけで、条件に恵まれば、一つの漁場で二百や三百の鮎が得られる。だが、簡単に零細な構造は出水に極めて脆く、張り網やもじは簡単に流出してしまう。川の増水の気配を感じると、漁撈者は直ちに網ともじを大急ぎで引き上げる。

し
ら

しらは別名「堰止め網漁」（羽村）、或いは「鮎シラ漁」（府中）とも呼ばれ、瀬張と同様に古くは鮎上納制度の下で盛んに行われた漁法である。

江戸時代の漁師言葉に、しら漁を行う事を「シラを切る」と言い、またしら漁に必要な漁撈装置を川に設ける事を「シラを掛ける」などと呼んでいた。しら漁の漁場は瀬張と同じ川の瀬で、漁期は瀬張より少し遅く、七月下旬以降から始まり十一月の降り鮎の季節まで続く。

しら平面図・両部屋構造



しらは瀬張と同様に流れの鮎を威し、もじに入ったところを捕らえるが、しら漁法ではおかざりを用いず、川を横切つて木杭を打ち、そこに葉付きの竹や笹などを組み込んで威しとする。その他の点では技法的に瀬張漁と大きな差異はない。だが、しらと瀬張は昔から区分され、竹や笹の威しを用いたものと藁製の威しとは、漁法上の呼称が明確にされている。

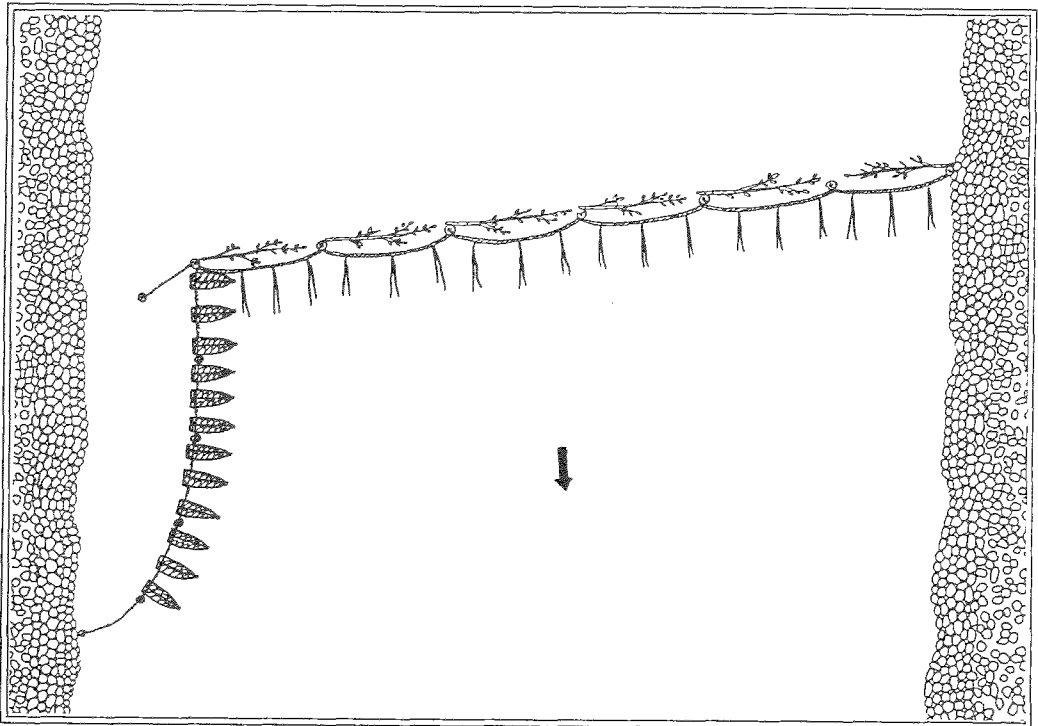
しらは、主として秋口の降り鮎の季節に行われた漁法である。産卵のために川を降る、所謂落ち鮎が、水中を横切つて設けられた竹や笹の葉が水中で光り、水流に揺れ動く様に畏怖し、川岸に設けられた部屋に逃避してもじに入るところを捕り上げるものである。

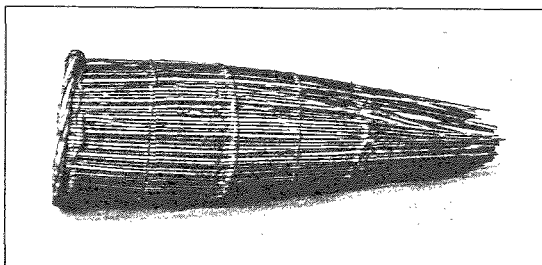
しらは漁法名であるが、川中に設けられた竹や笹の威しもしらと呼ぶ。しらの設置には、瀬張のおかざりよりも労力と費用を必要とするが、鮎の威し効果の点ではおかざりより優れている。

川を横切つて打ち込んだ木杭に、葉付きの竹や笹などを渡したり編み込んだりして、鮎の通行を遮断して捕らえる漁法は、しらの他に「堰漁」などにも見られ、鮎の習性を巧みに利用したものとは言え大変に原始的な漁法である。

しらの場合は漁網などの仕切を使わず、天然素材そのままを用いて魚の通行を妨げ、そこに魚を貯める事が可能である。群集した魚を捕らえるためには、手近な石を用いて「石ぶち漁」まがいの方法で十分に魚を捕る事ができる。こうしたしらによる魚の通行遮断の技法が、多摩川水系では何時の頃から行われていたかは判らぬが、われわれが想像するよりもはるかに古い時代であつたかも知れない。

しら平面図・片部屋構造（稲城地方）





多摩川下流水域の雑魚
笊／大田区立郷土博物
館蔵

をみた漁具である。

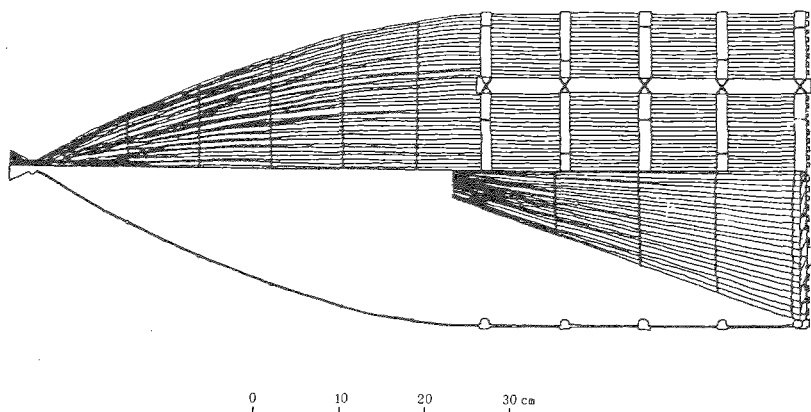
他の笊には見られぬ雑魚笊の性能は、長い年月の下で、漁撈者によつてその性能を十分に引き出され利用されてきた。雑魚笊には笊本来の基本的機能が具備されており、別名「ほんどう」と呼ばれる理由はそこにある。大型でしかも汎用的な機能を具えた雑魚笊が、多摩川流域の漁撈者たちから馬鹿笊の異称を冠せられた所以は、多目的の漁撈に有用な常備漁具に対する侮蔑とは全く逆の、身近で信頼のおける漁具に対する親しみの愛称としてであった。

業組合の規定によると、「……ドウ 但、構造竹簧ニテ長二尺五寸ヨリ五尺ヲ限丸ドウヲ用ヒ……」と記され、雑魚笊の長さには倍もの開きがある。

大きさが様々で単舌と複舌など、その構造も異なる笊が総て雑魚笊としてそれぞれの漁法の中で機能してきたが、多摩川水系における笊漁法と漁具の歴史の中で、雑魚笊はもじや鰻笊よりも遙かに古い時代から存在した。それは雑魚笊本来の汎用性によるもので、もじや鰻笊、それに鮎笊、泥鰌笊などに見られる専用笊としてではなく、雑魚笊は雑多な対象魚への対応が可能な多目的笊として、早くからその機能的な完結

雑魚笊寸法図

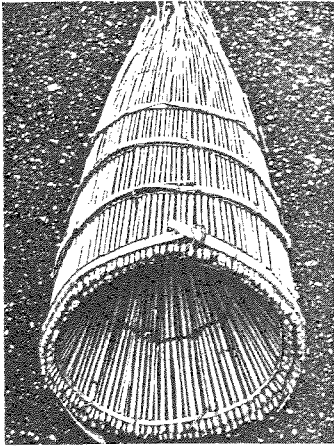
(鈴木由太郎蔵)



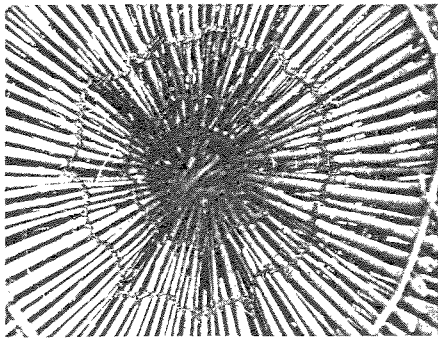
見られるが、中には篠竹を裂かず用いたものや、エビズルなどの蔓性植物を用いた雑魚笥もあるが、素材としては異例に属する。

多摩川流域で昔から需要が多かった雑魚笥は、専門の籠職人の手になる事もあり、漁撈者はこうした製品を近くの籠屋や荒物店から買い求めて使用したが、中には雑魚笥を自製する人も多く、身近な竹材を加工して雑魚笥を作った。

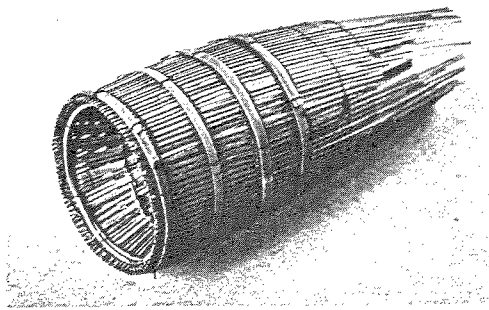
雑魚笥の材料は節間の長い十分に成長した真竹を用い、適当な寸法で切断し、それを二つ割り、四つ割り、八つ割りと定法に従って細かく割り裂き、棕櫚縄で竹簧に編み上げる。次に返しを簧編み台で編ん



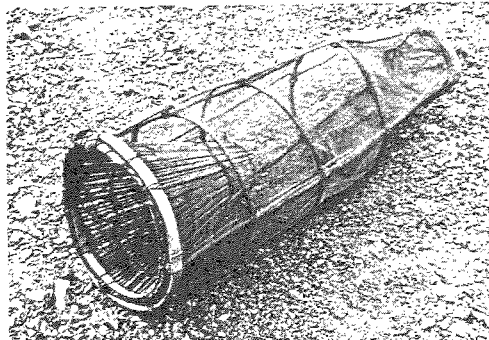
篠竹製の雑魚笥／調布市郷土博物館蔵



笥の入口の返しも篠の丸竹が使われている



多摩川水系の上流水域で用いられた雑魚笥／五日市町郷土館蔵



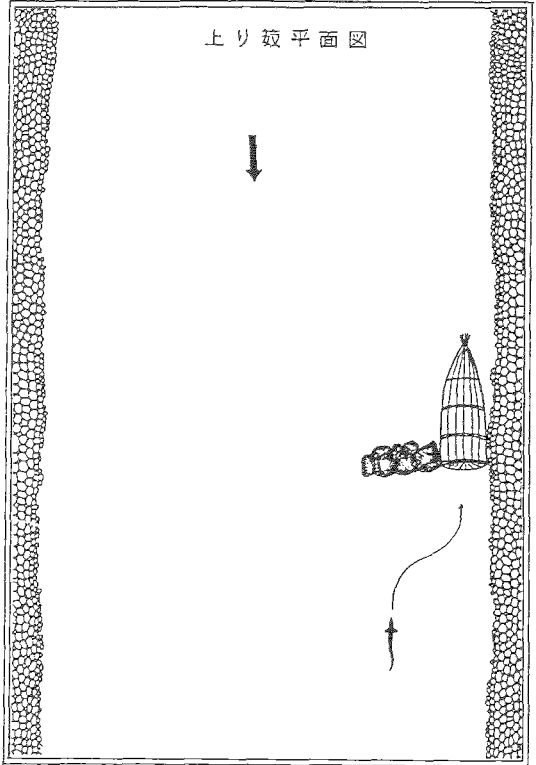
外側に合成繊維のネットを利用した自製の雑魚笥／府中市立郷土館蔵

で行くが、返しの編み上げには注意を要する。この舌部の出来具合如何が魚の入り方に大きく影響する。舌部の絞り込み口径と傾斜角を定めるのは、長年の経験から割り出される。雑魚笥で最も魚の入りが良いのは、製作経験者によると、雑魚笥の全長に対して返しはその半分の長さにしたものが良いと言うが、多摩川水系の雑魚笥は必ずしもそのような割合で作られたものばかりではない。また雑魚笥には鰻笥や泥籠笥、それに鮎用のものなどの様に、或る一定の標準的な寸法とか大き

さなどといった基準は見られない。

明治十九年、多摩川下流水域で操業する漁撈者が結成した多摩郡漁

上り笊 平面図

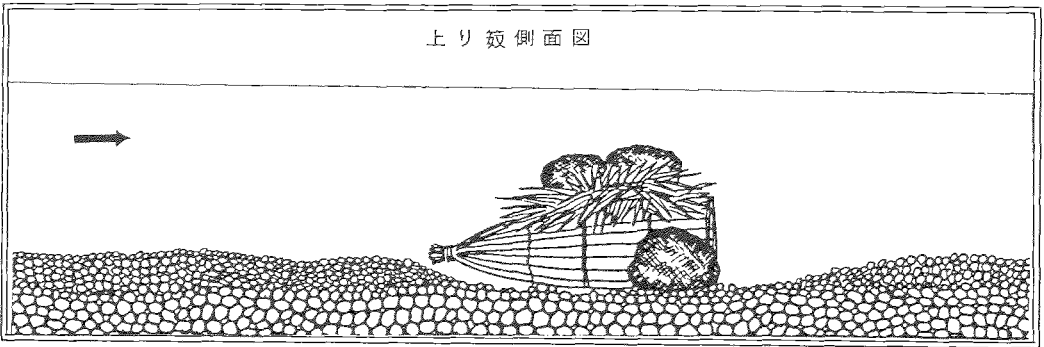


石倉漁では竹簧を囲んで石積み的一端に雑魚笊を伏せ、順次に石を取り除くと追われた魚が雑魚笊に入り、その時は鮎も捕れることがある。水垢の生えた石積みを縄張りになっていた鮎が石の間に逃げ込み、雑魚笊に入る訳である。

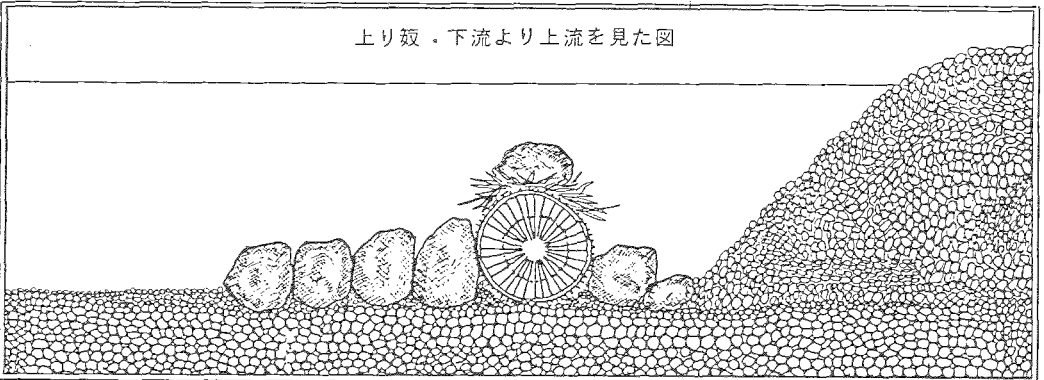
また瀬干し漁では、竹簧と共に雑魚笊は川魚の採捕に欠かせぬ補助具であり、伏漬け漁にも石倉漁と同様に雑魚笊が使われる。

雑魚笊の形状は砲弾形をした横笊で、割り竹を裂いたものを簧に編み、内側と外側からは丸型の力骨で支えて筒状にし、一方の口に返しを取り付けたものが一般的であるが、雑魚笊の中には鰻笊のように返しが二つある複舌構造をもつものもある。また素材は細割竹が普通に

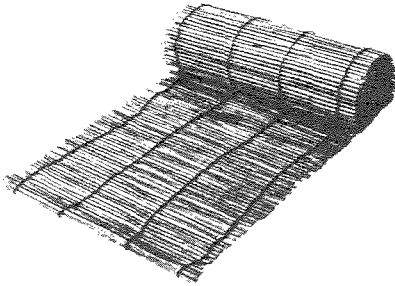
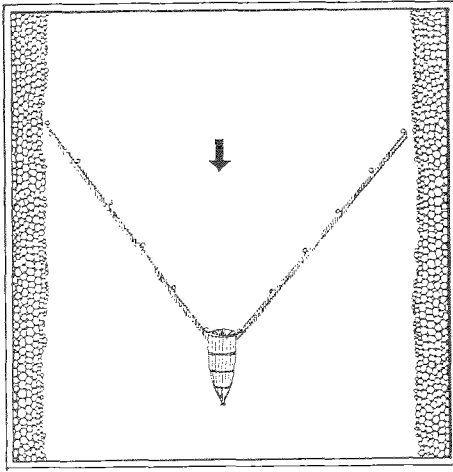
上り笊 側面図



上り笊・下流より上流を見た図

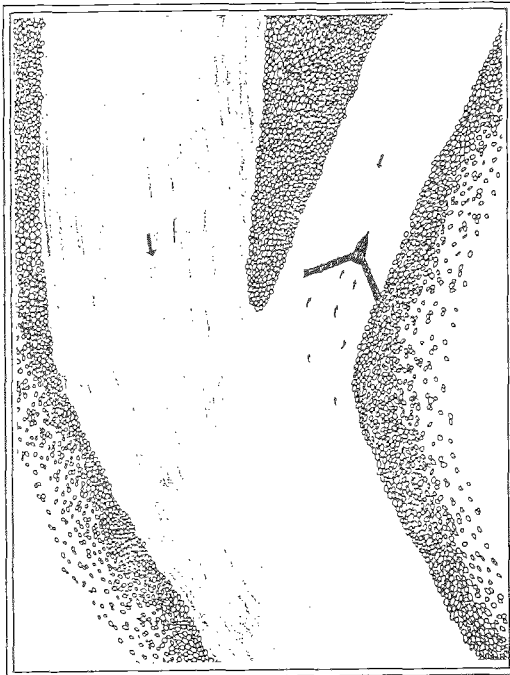


下り筈設置模式図



竹簀／立川市教育委員会蔵

本流が濁水の時、水の澄んだ支流に仕掛ける雑魚筈漁の図



川石や木や竹棒で流れに雑魚筈を固定し、場合によっては魚寄せのために人為的に八の字状に川石や礫、それに土を用いて盛り上げたり、竹簀や炭俵の簀、それに仕切り網などを用いることもある。また下流部の魚を誘い寄せる手段として、蚕の蛹を砕いたものや煎り糠、穀ごと潰した田螺、ドバミミズ、魚の臓腑などを泥土と混ぜ合わせた団子を、雑魚筈の中に入れておく方法も行われた。

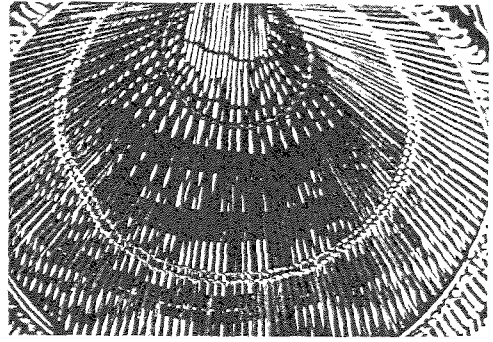
雑魚筈を用いた漁法の一例を掲げると――

降雨で多摩川の本流が増水し川が濁るが、支流は本流に比べて流路が短いので早く澄む。本流がまだ濁り川の時、それに注ぐ支流の水はすでに職漁者の言う「せいすい」となつて本流に合流し、清流を求め

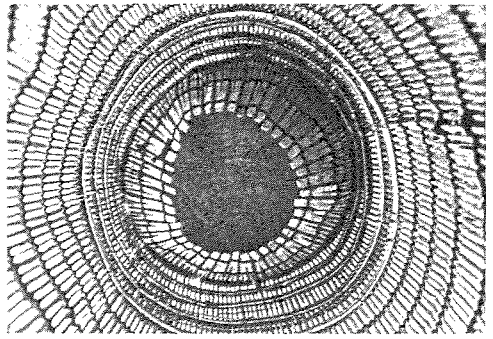
る魚たちは本流から支流へ盛んに移動する。

こうした魚の動きを知つて本流と合流する支流のやや上手に「上り筈」を仕掛け、本流から支流に移動して流れを遡る魚を捕る。雑魚筈を中心に八の字形に竹簀などを張り、下流より遡る魚を誘引して仕掛けた雑魚筈に陥穽させる。ウグイを始めオイカワ、カジカなどの魚が捕れるが、やがて多摩川本流の増水が治まり流れも元の清流に戻ると、支流へ遡つた魚は再び支流から本流に戻る。

またウグイなどの魚を対象にした雑魚筈ぶちでは、前日の夕方に仕掛けておき翌朝早くに引き上げると、筈の中にはウグイをはじめカジカ、ギバチ、カマツカなど種類も雑多な魚が沢山捕れ、上流域ではヤマメが入る。



雑魚笥の入口と返しの部分

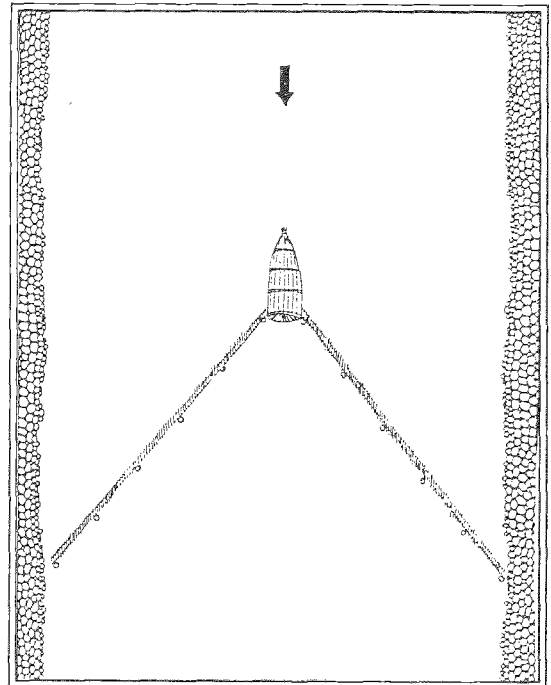


雑魚笥の中から入口の返しを見る。

川魚を育てていた頃、仕掛けた雑魚笥にぎっしりと魚が入り、馬鹿でも魚が捕れると言われ、それがこの有能な笥に対して馬鹿笥の名が冠せられたと言うが、雑魚笥が様々な漁法に使われた兼用漁具としての汎用性は、多摩川水系の数ある笥漁具の中で極めて特異な存在と言わねばならない。

馬鹿笥、即ち雑魚笥は、あらゆる川魚を対象にした漁具であり、それを用いて様々な漁法が行われ、取扱いが容易で誰でもできるといふ点でこの笥が多摩川の漁撈に果たした役割は無視出来ない。多摩川の本、支流及び流域の細流に至るまで雑魚笥が広汎に使用され、職漁者であるか否とを問わず多少でも川漁を行う人たちにとって、雑魚笥は備え

上り笥設置模式図



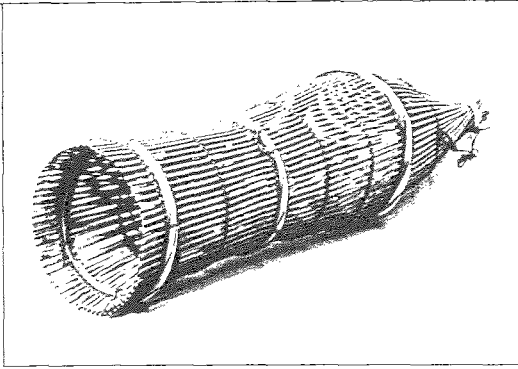
ておかねばならぬ常用漁具であつた。

雑魚笥による笥漁法は様々であるが、流れを上る魚に対しては「上りどう」、逆に下る魚では「下りどう」と呼び、基本的には魚族が季節や時間によつて流れを上下する方向に対し、笥の口をそれに向けて仕掛ける。多摩川流域では、笥を仕掛ける事を「笥ぶち」又は「笥をぶつ」、「笥伏せ」、「笥打ち」、「笥がけ」などと呼び、魚の通り、そのような淵の上流や下流、或いは物蔭のある流れなど、魚の最も捕採効率高い場所を漁撈者たちは長年の経験で熟知しており、そうした所に雑魚笥を仕掛けるのである。

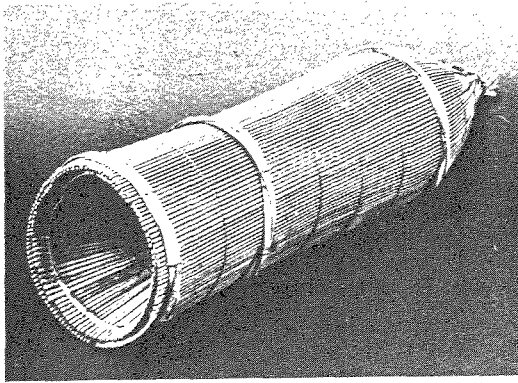
雑魚笥を用いての漁法は鯰を捕る「鯰笥」、鰍を対象とする「鰍笥」、シマドジョウを捕る「ドンドン」、ウグイの場合における「雑魚笥」など対象魚別に様々な漁法が行われてきたが、いずれも雑魚笥によるヴァリエーションである。

雑魚笥は、流れに生息する川魚の普遍的な習性を巧みに利用した笠漁具で、雑多な魚種に対応の可能な大型笠である。しかも魚の陥穽、捕採に優れた機能を有し、また極めて汎用性に富んでいる。こうした雑魚笥の特徴により、あらゆる川魚を捕捉する漁具に利用されたとしても何の不思議はない。そして、笠漁具として流れに仕掛けられる時、

複舌構造の雑魚笥／立川市
教育委員会蔵

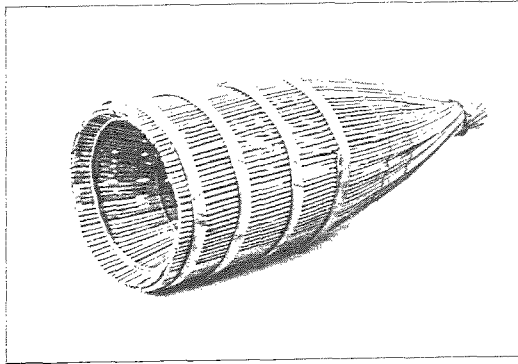


雑魚笥／立川市教育委員会蔵

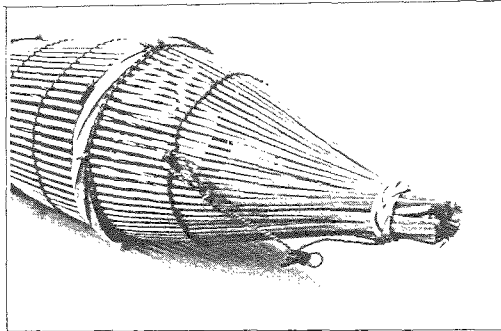


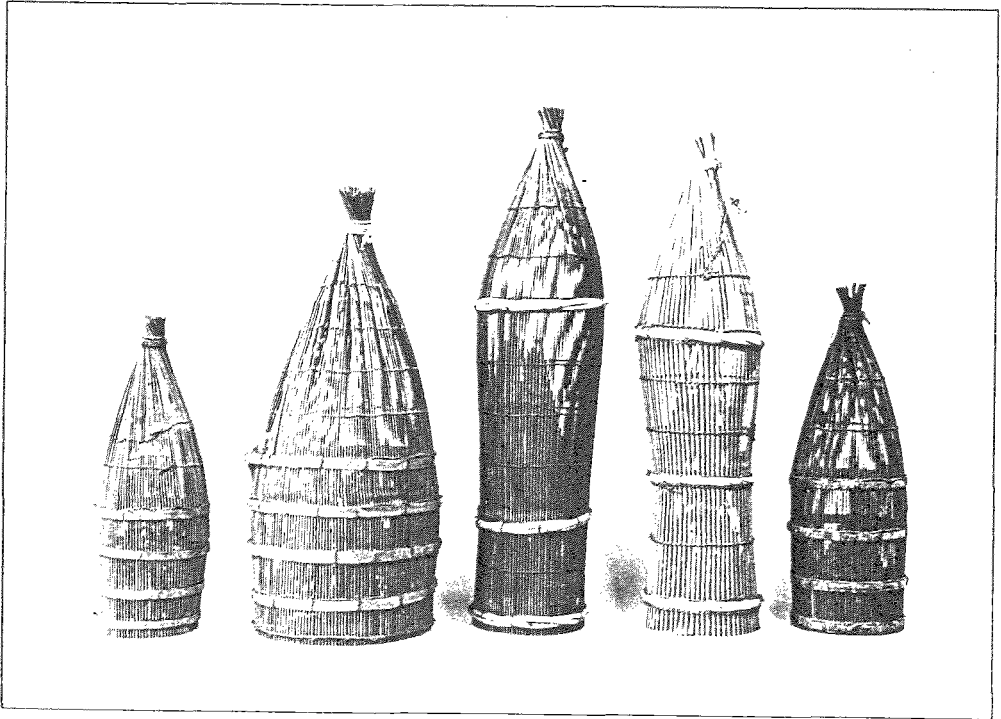
雑魚笥はその機能を如何なく発揮し様々な魚を呑み込むことになる。川魚の多くに見られる普遍的な習性の中で、魚が好んで物蔭に潜む魚の走光性や、流れに対して本能的に遡上しようとする走流性、また固体に触れることで己れの安全を確認するという走触性など、これら川魚の普遍的な習性に対して笠は極めて有効な漁具である。中でも雑魚笥はその汎用的機能を持つが故に、様々な魚種への対応に優れている。雑魚笥による漁法は多様で、その対象は多摩川水域に生息する殆どの魚種に及ぶと言っても過言ではない。ウグイを始めヤマメ、カジカ、ナマズ、ギバチ、ウナギ、カマツカ、コイ、フナ、タナゴそれらに俊敏なアユさえも雑魚笥で捕らえられる。かつて豊潤な流れが沢山の

比較的小型の雑魚笥／立川市
教育委員会蔵

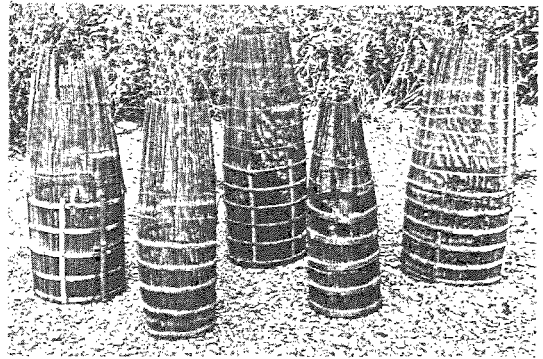


雑魚笥の尾部、中に入った魚はここから取り出す／立川市教育委員会蔵

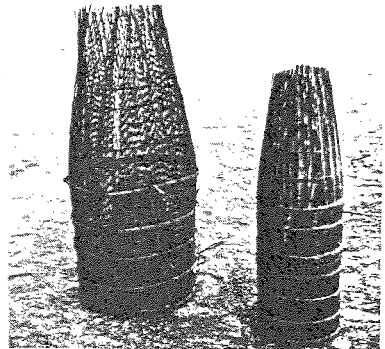




様々な形の雑魚笥／府中市立郷土館蔵



雑魚笥／国立市教育委員会蔵



いて、雑魚笥を馬鹿笥と呼ぶ地域が多い。

多摩川水系における雑魚笥は或る特定の漁法に限って使用される筈ではなく、昔から極めて汎用性に富む漁具として利用されてきた。様々な漁法の中にあつて雑魚笥は多様な使い方がなされ、その汎用的機能が多摩川の漁撈に果たした役割は無視できない。即ち、筈漁法本来の用具として対象魚の陥穽、捕採の目的に使われると同時に、筈漁法以外では補助漁具として雑魚笥の捕採機能を利用している。こうした例は「寄せ網漁」などの網漁法に、また「瀬干し」や「石倉」、「伏漬け」などの雑漁法の最終捕採部に利用されている。

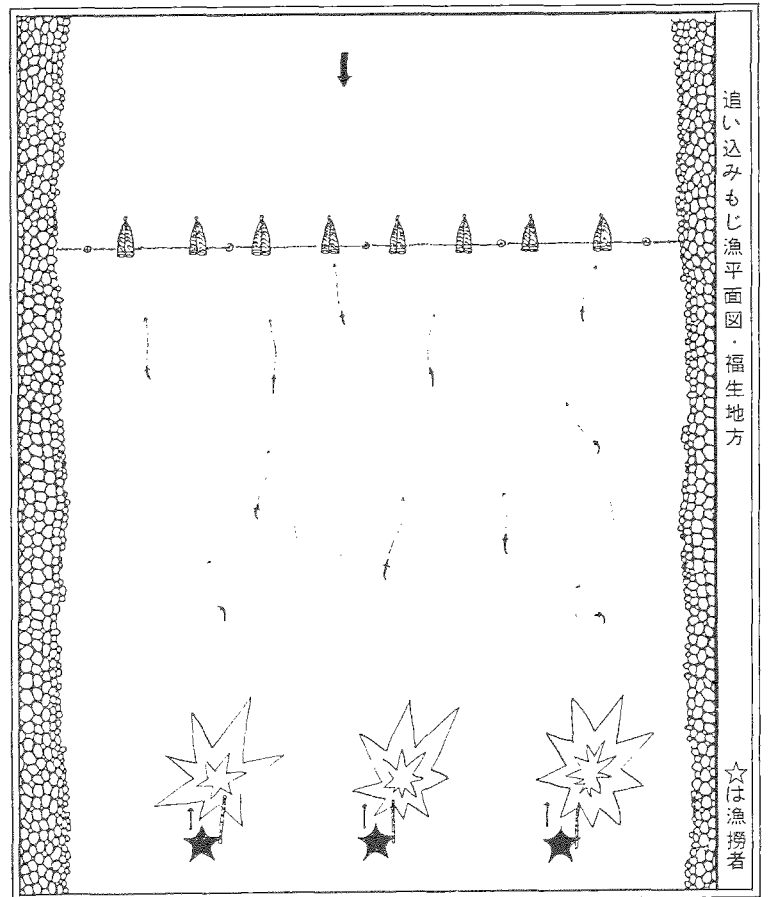
を叩いて鮎を驚かせ、追われた鮎がもじに潜るのを捕らえる。網や簀を張るのは深場所の前後にある流れで、下流より追い込む時はもじの口を下に向けて設置し、上流から追う場合はもじの口を上流に向けて仕掛けておく。福生地方で行われた鮎追いの漁法で、下流から鮎を追い上げる時は「上り」と称し、上流から下流に向けて鮎を追う時には「下り」と呼んでいた。

「瀬張」や「しら」などの漁法では、流れを遮断して張られたおかざりや竹笹が、定置の威し具として鮎を追い込むが、「上り」や「下り」に見られる追い込みもじ漁では、人為的な棒叩きによって鮎を威し、避難場所を求めて逃げる鮎が行く手に設けられた網にさえぎられ、川底に設けられたもじの中に入る。

突然の威嚇音と物影におびえて逃避し、努めて川石の間などの隙間に身を伏せようとする鮎の習性は、瀬張やしら、それに投網を打った時の行動と変らない。

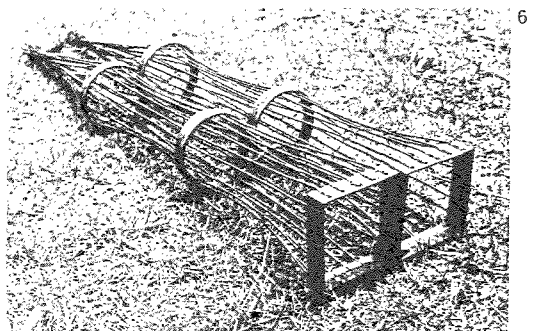
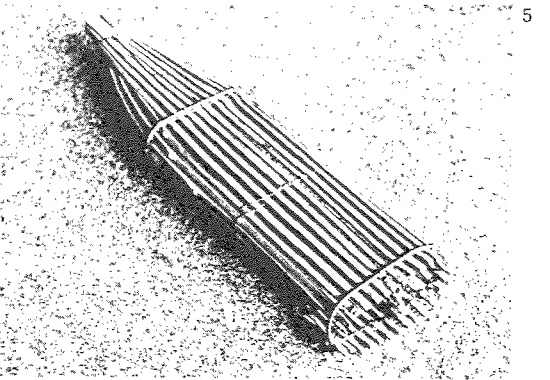
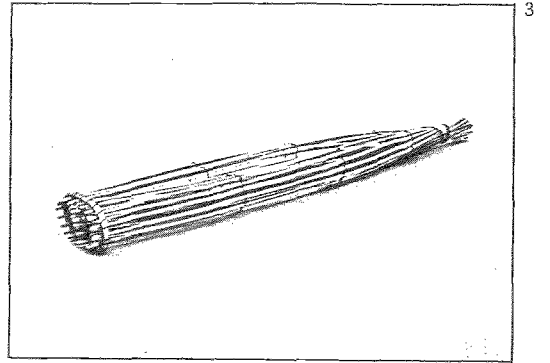
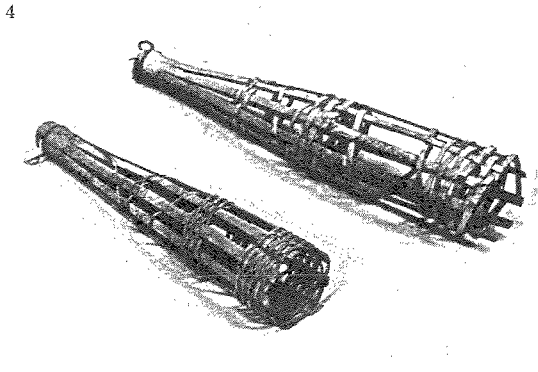
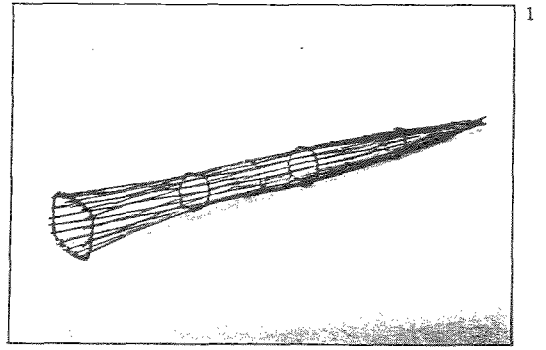
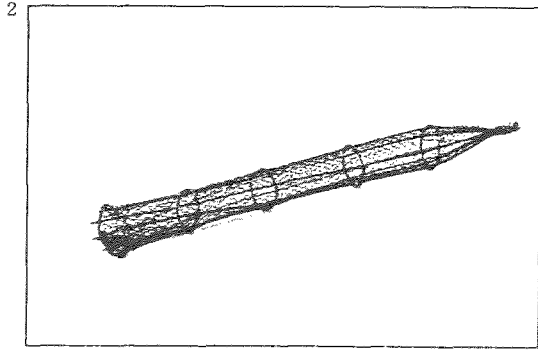
四、雑魚笈

多摩川水系で用いられた笈漁具の中で、雑魚笈ほど様々な目的の漁撈に使われ、また広汎な地域で使用された笈は他にない。雑魚笈の使用区域は多摩川の上流から下流及びその支流、さらにその兩岸に広がる



水田地域を含む農業用排水路の通じる水域にまで及んでおり、この笈で捕る魚種もまた多彩である。

雑魚笈は別名「ばか笈」、「ほん笈」とも呼ばれる。ほん笈については、雑魚笈が笈本来の基本的な機能、構造を有し、多目的、普遍的に用いられる笈に対する呼称として理解できる。一方、笈に馬鹿という侮蔑語を冠した名称は奇異に思われるが、事実、多摩川流域一帯にお



近隣水系のもじ
 1 〃 4 荒川水系 / 1 〃 3 小林颯英蔵 (3は重要有形民俗文化財) · 4 埼玉県立博物館蔵 · 5 利根川水系 鍋川 · 群馬県立歴史博物館蔵 · 6 狩野川水系 · 沼津市歴史博物館蔵

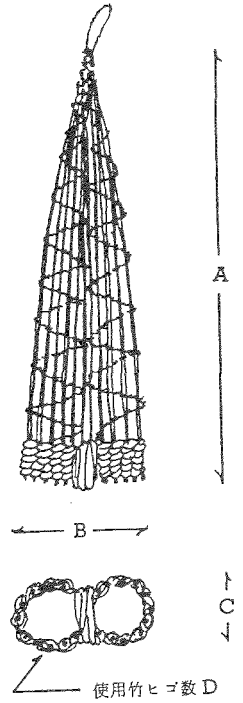
三、追い込みもじ漁

追い込みもじ漁は、主に多摩川中流水域を中心に行われた漁法で、流れを横切って仕切網を張り、川底には返しのない鮎用の筥、「もじ」を設置する。そして、下流もしくは上流から数人が一斉に竹棒で水面

もじ寸法表・多摩川中流域

個別	A	B	C	D	種別
I	380 ^{mm}	124 ^{mm}	60 ^{mm} φ	14本	夏もじ
II	390	128	62	16	〃
III	390	123	54	14	〃
IV	400	135	60	15	〃
V	435	138	62	14	秋もじ
VI	437	140	67	14	〃
VII	470	145	73	15	〃
VIII	477	150	73	15	〃
IX	554	156	74	14	〃

計測は鈴木由太郎(日野)の使用・収蔵もじによる。



多摩川水系地域別もじ寸法表

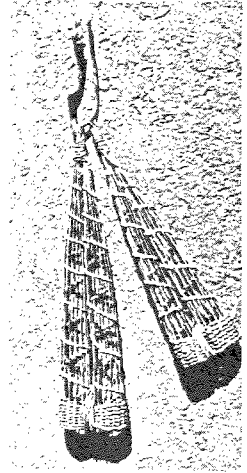
		A ^{mm}	B ^{mm}	C ^{mm} φ	摘要	所蔵 個数
五日市	I	340	123	52	最小のもじ	16
	II	395	145	56	最大のもじ	
青梅	I	407	125	—		5
	II	406	118	—		
	III	405	122	—		
	IV	383	105	—		
	V	353	122	—		
福生	I	355	88	48	最小のもじ	33
	II	412	155	75	最大のもじ	
国立	I	445	134	65	編み材は芯藁	2
府中	I	405	72	—	骨材は鉄線	16

各市・町立資料館の収蔵もじによる。

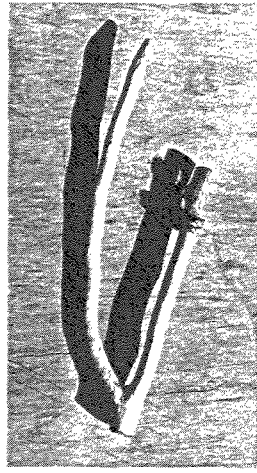
計測対象は昭和56年7月～11月現在の収蔵品。

の漁法ではどうしても魚体の損傷は免れない。だが狭いもじの中に重なり合って入る鮎ともじとの接触部などでは、陥穽鮎が長時間に及ぶと、鮎の体表が変色することがある。こうした事態を防止するためにも、もじに使用する細竹は成るべく角のない細く丸いヒゴを使用し、それを編み支える植物もなめらかな素材を用いるなどの工夫が凝らされている。

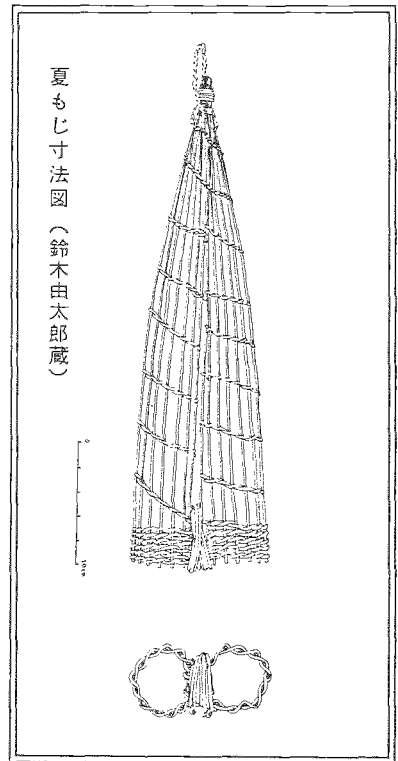
江戸時代、多摩川は江戸という一大消費地の最寄り河川として、幕府の上納用を始め、近世都市の莫大な需要を賄う鮎の供給地としての命題が課せられる事になり、長い間に互ってそれに応えてきた。当時、様々な漁法を駆使して捕採された多摩川の鮎は、都市向けの特産品であり、また為政者への貢納品であった。何よりも鮮度が貴ばれる鮎を大量に捕るための漁法と漁具が確立されなくては、その責務は果たせない。かくして、多摩川水系の瀬張やしらがその需要の多くを賄う漁



掛け鈎のもじ。休漁期には通風の良い冷暗所に吊した掛け鈎に幾つものもじを掛けて保存しておく。／福生市郷土資料室



もじ掛け鈎／府中市立郷土館蔵



夏もじ寸法図（鈴木由太郎蔵）

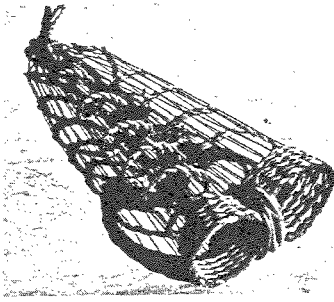
法として発達し、漁具であるもじもそれに応える可く改良され、少しでも魚体を傷つけぬ様に配慮された結果が、今日見られるような繊細にして優美な漁具となつたものである。そうした歴史的、社会・経済的な要因の中で洗練された多摩川のもじは、他の釜漁具に比して際立つた機能美を具え、水中に浸して魚を捕る漁具とは思えぬ程、調和のとれた優美な形状を今日に伝えている。

常民の手になり、長い歴史と生活文化の試練を経て優れた民具が伝わる中で、多摩川水系のもじは、漁具の進化の或る極点を示しながら今日に残るものであろう。多摩川のもじは機能と形状の優美さで、他水系のそれとは群を抜いている。そうした理由も、かつて、多摩川が担ってきた鮎の川としての使命が解き明かしてくるのである。

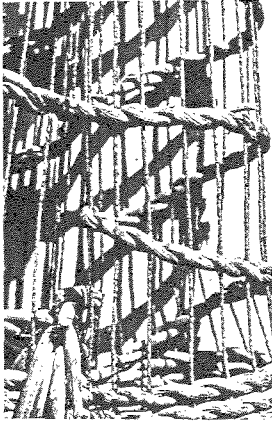
型に作られ、竹ひごやトブラも細めの素材が用いられた。

もじは他の筥に見られる様な返しがなく、しかも二つの筥を結着した双胴型で、このような形状と構造の筥は、多摩川水系の筥の中でも特異な存在として注目される。

一般の筥構造において重視される通称返しと言われる「舌部」は、魚の陥穽を容易にし且つ捕採を完璧ならしめる為のもので、筥の最重要部とされているが、もじの場合、対象魚である鮎の習性と漁法の内容から無舌筥が使用され、それで優れた漁獲効率を上げている。また同一の型の筥を結着して双胴型として用いるのは、「部屋」と称する限られた場所でも多く筥を仕掛ける必要がある、また双胴型は筥を川底に設置するにも、単胴の筥より安定性に優れ設置し易い事で



竹ひごの代りに鉄線を用いたもじ／府中市立郷土館蔵

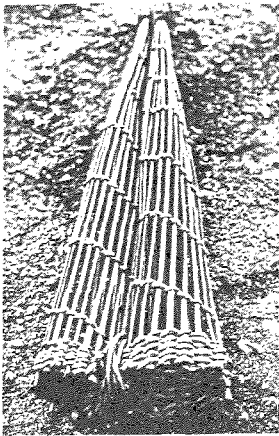


鉄線使用もじ部分

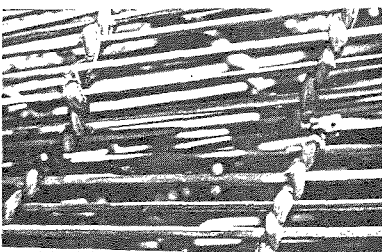
ある。また、双胴構造とする事による強度の点も見逃せない。そうした漁撈効率上の要請で、双胴（複筥）構造のもじが使用されるようになったものと考えられる。

もじが使用された当初、恐らくは単胴の筥を用いて鮎を捕っていたであろうが、双胴筥の漁獲効果と取扱上の利点に気付き、以後、双胴型が広く使われるようになったものであろう。

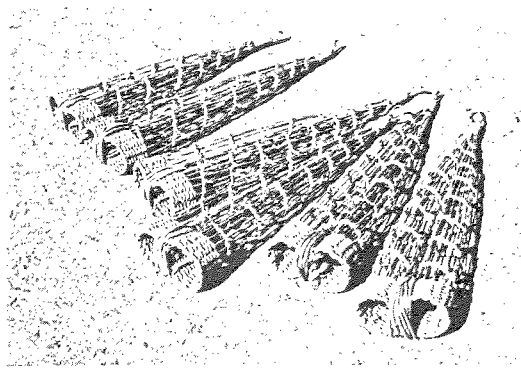
昔からもじで捕れた鮎は魚体に傷みが少なく、そのため上納用として盛んに利用されたが、魚体の損傷が少ないという事は、もじを用いた瀬張やしらの漁法が、鮎の習性を利用した極めて巧みな技法である事による。鮎の威しから誘導、それに陥穽に至る手順は総て鮎の自主的な行動にゆだねられ、漁人は唯、筥に入る鮎を捕り上げればよく、魚体の損傷が極めて少ない。「鶉飼」や「ひつかき」、「投網」など



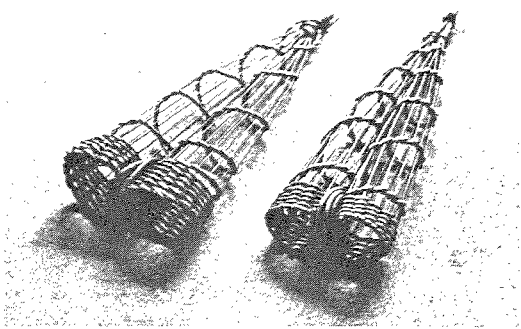
粗目の割竹を稲藁しべで編み上げた漁撈者自製の珍しい型のもじ。
／国立市教育委員会蔵



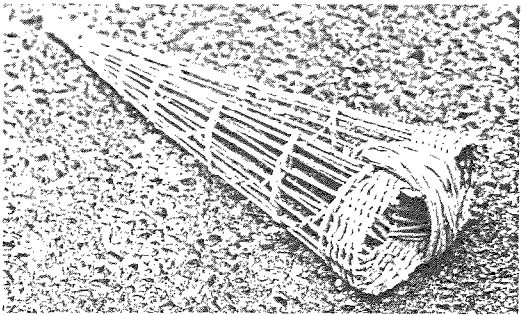
稲藁しべ編みのもじ部分



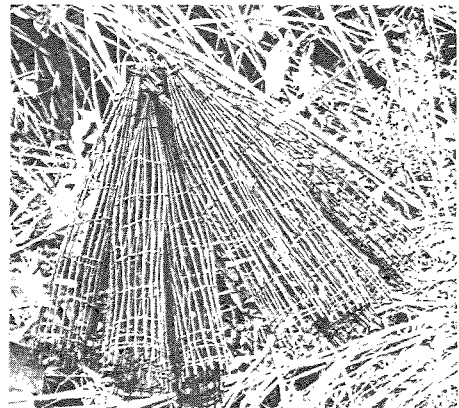
もじ／福生市郷土資料室蔵



もじ／五日市町郷土館蔵



もじ／青梅市郷土博物館蔵



割竹を針金で編んだ漁撈者自製のもじ
／鈴木由太郎蔵

んで行くが、もじを一定の型に保つため、杉や松材で作った砲弾型の「木型」を用いる。

もじに使う植物の蔓は、多摩川流域の山林地帯に自生する「トズラ」という蔓性の植物が使われる。トズラは多摩川の上流域一帯で「カナトズラ」或いは「カナフジ」とも呼ばれ、もじの需要が多かった大正頃まではこれを採る業者がいて、籠屋に卸していた。籠職人たちはもじの他にも竹細工製品の一部にトズラを用いるが、トズラを用いて螺旋状に編み固めたもじは、胴が固くしまり型が崩れない。こうした素材を用いた竹細工職人の手に成る多摩川水系のもじは、繊細にして優美な筈として今日に残っている。

一方、職漁者たちが手近な材料を用いて自製し使用したもじの中には、トズラや竹ひご以外の素材が使われる事もある。また竹ひごに代って角のある割り竹をそのまま用いたり、竹の代りに鉄線を使ったものなどもある。こうしたもじではトズラの代りに、編み上げ素材に針金や芯蘆を使ったものなどがあるが、鮎の捕採機能の点では竹ひごとトズラによるもじと変りはない。

多摩川の瀬張やしらで使われるもじは、季節によって成長する鮎の体長に合わせておおよそ大小二種のもじが使われた。初夏から真夏にかけて鮎は川を盛んに上るが、体長も秋の降り鮎に比べて小さい。このため、夏季に使用する「夏もじ」は、秋に用いる「秋もじ」より小

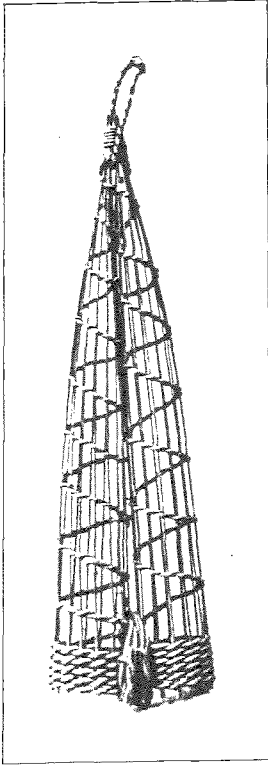
多摩川水系のもじ

瀬張としらに用いる筈は、多摩川の中流域で通称「もじ」と呼ばれるが、地方によって「もじり」（福生）、或いは「アイドゥ」（五日市、昭島、菅）、「下りドゥ」（菅）などの呼称がある。

天保年間（一八三〇〜四三）に刊行された『魚獵手引』に多摩川のもじが図入りで紹介されており、それによれば「……やなにてとるものは三四月は細き竹にて作りたるを用ひ五六月七八月と段々にあらきやなを用ゆ……」と記され、同書ではもじを「やな」としている。

天保七年（一八三六）に上梓された『江戸名所図会・玉川獵鮎』には、多摩川中流域での川漁の有り様が描かれている。清流に網を打つ人や釣人たちと共に、もじ漁を行う漁師の姿があり、また、二代廣重の筆になる『玉川乃鮎と里』と題する浮世絵にも、もじを取り上げる漁人が描かれている。それが瀬張であるか、又はしらによるものかは判らぬが、もじを用いた漁法である事だけは確かである。

機能的な美しさを誇る多摩川水系のもじ／鈴木由太郎蔵

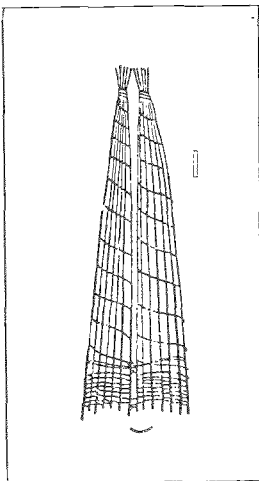
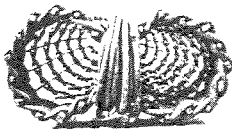


当時、もじによる瀬張やしらが、網漁や釣漁などと同様に、多摩川の中流水域で盛んに行われていた事がこれらの資料から良く判る。

かつて、多摩川水系で広く使用されたもじは、十五、六本の竹ひごを植物の蔓で螺旋状に編み固めたもの二個を結着した、双胴型の無舌筈である。

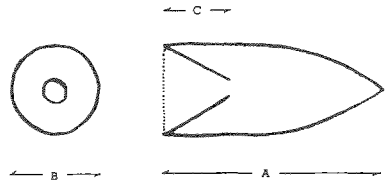
瀬張やしら漁に従事した昔の漁撈者たちは殆どもじを自製したが、多摩川でのもじの使用量が増加するにつれ、流域ではもじを専門に製作する竹細工職人たちが供給するようになった。常時水中に浸して置く漁具は数年の寿命であったと言われ、漁撈者たちは消耗分を補うために、漁撈の合い間に自製したり専門職人に製作を依頼した。一人の漁撈者は四、五十個のもじを常備しており、順次使用しながらも乾燥や収納などの保管に十分意を払っていた。

もじに使われる竹ひごは真竹の節のない部分を細かく割り、さらに「ひごこき」などで角を取り除く。そうしたひごを植物の蔓などで編み込んだ鮎はここから入る。



江戸時代に画かれたもじの図／『魚獵手引』（天保年間）より

多摩川水系雑魚筭寸法表



(単位：%)

所蔵		事項	A	B ϕ	C	舌	力骨	摘 要
奥多摩	I		560	140	170	1	—	自製筭、鯰捕り用と思われる
五日市	I		950	450	330	1	4	主にウグイを対象にした筭で、中流域のものと比較して、舌部の取付け角度が急で、テーパーがしぼりこまれている。この地方では舌を「ベロ」という。
	II		880	410	290	1	4	
	III		830	340	260	1	4	
	IV		670	250	180	1	3	
	V		510	175	170	1	4	
青梅	I		850	500	370	1	4	
	II		415	160	120	1	3	
福生	I		680	310	250	1	4	
	II		650	315	270	1	4	
鈴木由太郎	I		940	365	—	1	5	日野地区
三田鶴吉 (立川)	I		820	330	—	1	5	
	II		625	210	—	1	4	
	III		560	180	—	1	4	
	IV		940	215	—	2	3	
	V		900	220	—	2	3	
国立	I		960	300	430	1	7	大型
	II		1,130	450	500	1	5	
府中	I		900	410	340	1	6	
	II		900	315	330	1	6	
	III		900	330	250	1	5	
	IV		760	300	330	1	6	
	V		760	240	240	1	5	
	VI		750	260	240	1	5	
調布	I		990	315	420	1	4	総篠竹(丸)製 自製・大型
	II		920	430	410	1	5	
	III		735	277	300	1	4	
大田	I		820	260	430	1	2	

計測対象は各市・町立資料館及び個人の収蔵雑魚筭による。

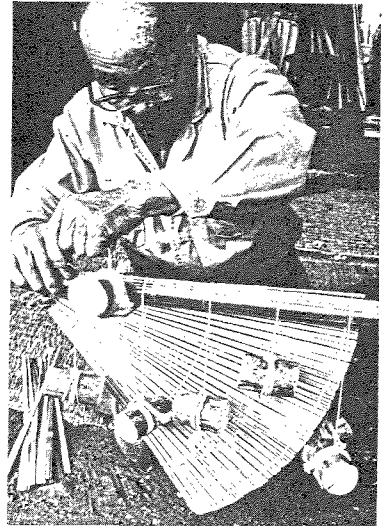
計測：昭和56年



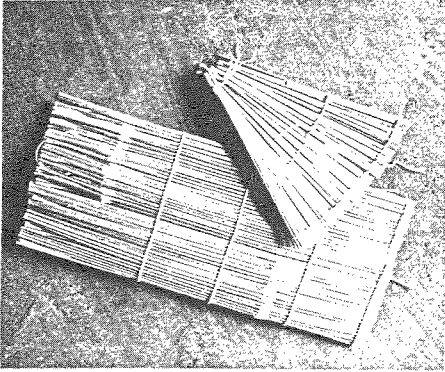
雑魚笥製作 1・真竹を割り裂く /
製作者・小林勝太郎(日野市)



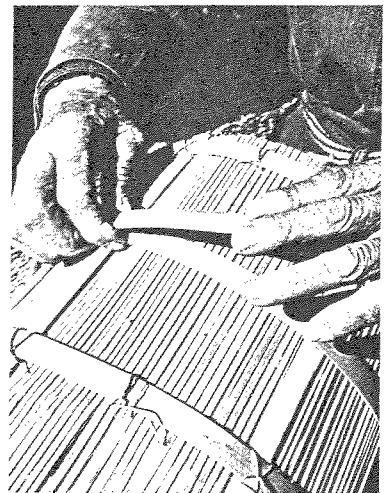
雑魚笥製作 2・割竹を削り、笥
の外側の竹簧編みの材料を作る



雑魚笥製作 3・返しの部分を編み
上げる



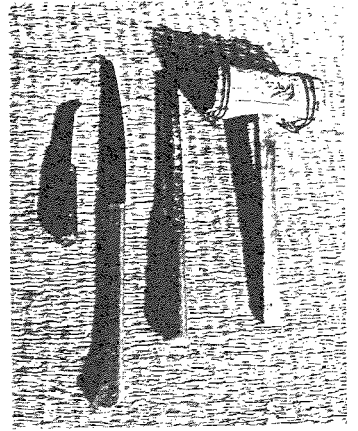
雑魚笥製作 4・編み上がった雑
魚笥の返しと外側の竹簧



雑魚笥製作 5・外側の力骨を取り
付ける



雑魚笥製作 6・尾部を結束して雑
魚笥が完成する

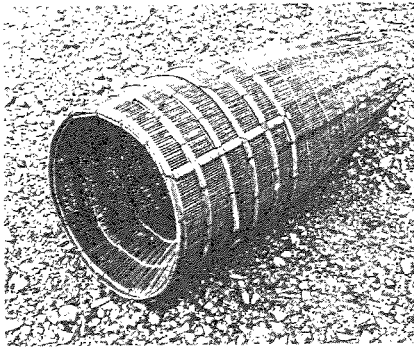


雑魚笈製作7・笈作りを使う竹細工道具

五、追い込み漁

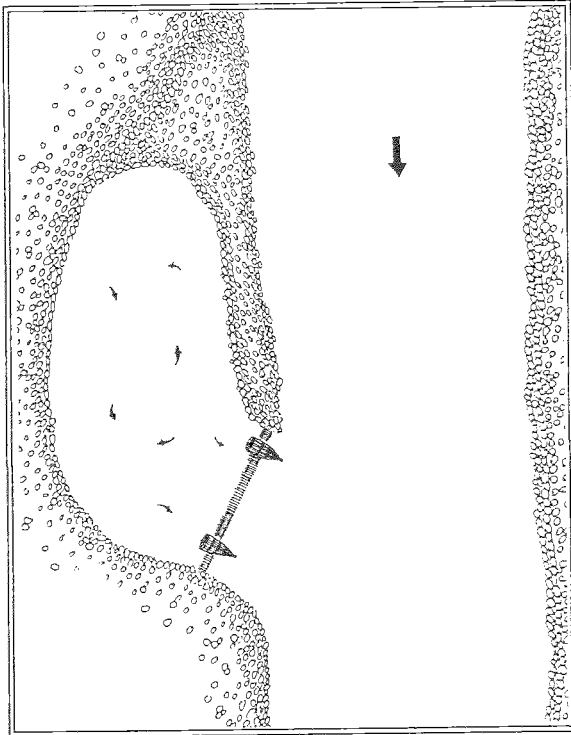
多摩川水系で本流の一部の川岸に水勢による溜りができ、そうした入り江状の小さな湾部を「ワンド」と呼んでいた。ワンドは水の流れが殆どなく、魚たちの恰好の生息場所であった。

ワンドから本流へ、本流からワンドへと魚たちは自由に往来するが、このワンドの口を簀や川砂利で封鎖し、入り口をワンドに向けて雑魚笈を仕掛ける。こうしてワンドの中の



雑魚笈／府中市立郷土館蔵

追い込み漁平面図



魚が本流に移動するのを笈で捕らえるのが追い込み漁で、四季を通じて行われ、ウグイやオイカワ、フナなどを捕った。

この漁法は魚たちの移動習性を利用したものであり、追い込み漁法を行ってきた農民たちは、魚がワンドで休み再び本流に戻るのを「魚が里に帰る」と表現している。魚が里に戻る時に仕掛けた雑魚笈に入るもので、追い込み漁は入り待ちの楽な漁法である。

追い込み漁法は川の地形的な条件に左右され、ワンドのような川沿いのえぐれた場所が無いと成り立たない。昔は水深が二尺前後のワンドが流れの各所にあつて、こうした場所で追い込み漁が行われたが、河川改修などで次第に川の形状が変わり、追い込み漁に適した場所が無く

なつた。この漁法は浅川の水域で、昭和四五年頃まで行われていた。

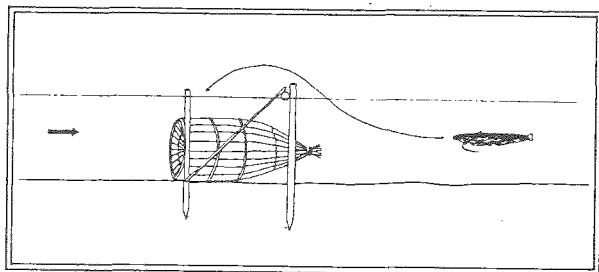
六、鯰 笊

多摩川の支流及び水田地帯を流れる農業用排水路には、かつて鯰が沢山生息しており笊を仕掛けて鯰を捕った。五、六月から秋にかけて、夜間に移動する鯰の通りそうな所に笊の口を下流に向けて「上りどう」を仕掛ける。夕方、草の生い茂る川岸寄りに笊を伏せ、翌朝早く引き上げる。

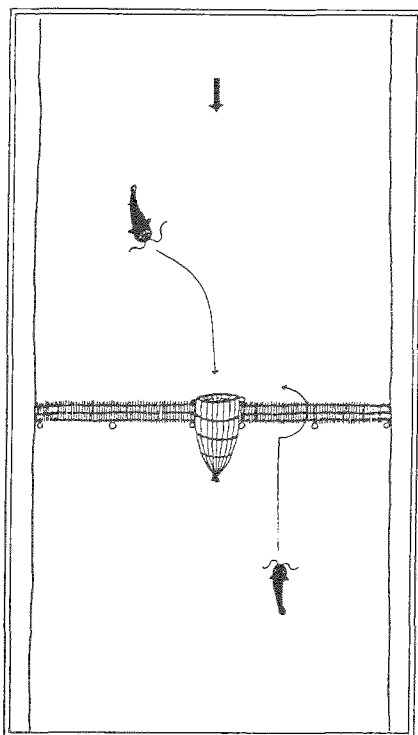
鯰捕り用の笊は返しが一つの大型の雑魚笊を用い、特に鯰捕り専用の笊は無い。雑魚笊はその名の示す通り、流れに生息する様々な魚の通り路に仕掛け、陥穽させて捕らえる、極めて汎用性の高い漁具である。多種の魚に対応できる構造は長さが四尺以上の大型笊もあり、その直径が二尺に及ぶものもある。雑魚笊には単舌と複舌構造があるが、鯰捕りには単舌の笊を用いる。

多摩川の支流、浅川流域の水田地帯では、春から夏の間、浅川から支流の用水堀に遡ってくる鯰を捕らえるために、水路を横切って木杭を打ち、そこに竹簧を張り、流心に「下りどう」の形で雑魚笊を仕掛ける。上流に口を向けた形で雑魚笊を伏せたことになるが、こうしておくと、夜間浅川から移動してきた鯰が用水堀を遡り、笊を仕掛けた竹簧に阻まれるが、鯰は容易に簧を跳び超える。夜間に水路を遡った鯰が、明け方近くになり元の浅川に戻ろうとして、上流に口を向けて開いている下り笊に入る。夜間の鯰の行動習性を巧みに利用した笊漁

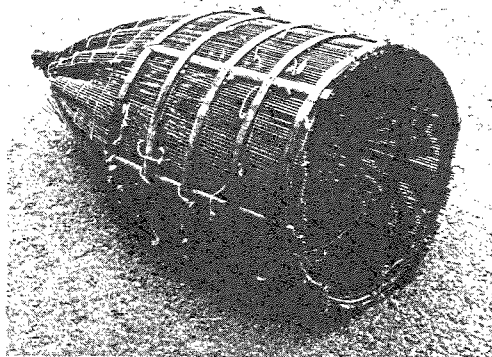
雑魚笊を用いた鯰漁・側面図

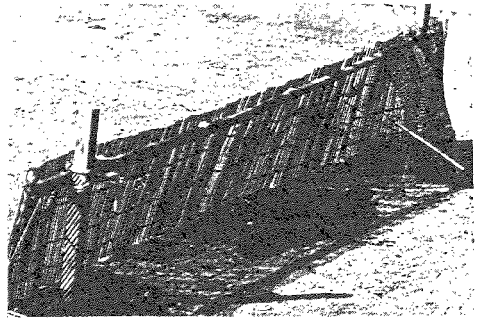


雑魚笊を用いた鯰漁・平面図



口の大きな雑魚笊／鈴木由太郎蔵





左側を上流に想定した場合の
簀の掛け方／模倣設置者・小
林勝太郎

法で、この様な方法で昔は面白いほど鯒が捕れた。



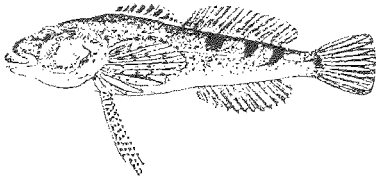
七、鯒 鮒

川床が玉砂利におおわれ多摩川が清冽であった頃、川底の石の間を徘徊する鯒の姿が何処でも見られた。特に多摩川の中流水域一帯に多く生息し、鮎やウグイほど動作が素早くないので老人や子供たちでも容易に捕ることができた。鯒は「瀬干し」や箱眼鏡で水中を覗き捕で突く「鯒突き」の対象魚であるが、釜を用いて捕る事も行われた。

多摩川の中流水域で一月から三月頃にかけて、鯒捕りの鯒鮒を流れに仕掛ける。長さ一尺五寸程の単舌の竹簀を筒型にした鯒鮒や、それ

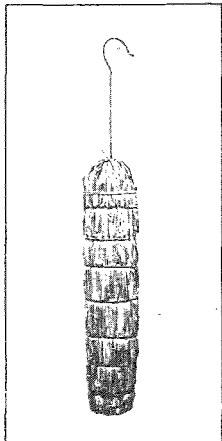
より大型の雑魚鮒を、瀬や急流の落口に「上りどう」の形で設置し、下流に向けて八の字状に竹簀や炭俵の簀を張る。簀の固定には間隔をおいた竹棒や細木の杭で支え、こうしておくのと流れの川底を伝って遡る鯒が、簀を伝って釜の中に入る。またこの時季は鯒の産卵期であり、産卵のために流れを移動する鯒を捕るが、鯒はこの時季に限らずいつでも釜で捕れる。秋には逆に釜の口を上流に向けた「下りどう」の形で仕掛け、流れに対して逆八の字状に川石や簀を設けて鯒を捕る方法もある。

鯒はその外形に似合わず肉質は淡白にして美味な魚で、特に寒期の食味は鮎に優るとさえ言われる。かつて川石の数ほどいた鯒は採の容易な川魚であるため、多摩川では盛んに捕られた魚である。焼干しにして薬つとの「ベンケイ」に刺し、蕎麦つゆや汁のだしなどに利用した。左党にとつて捕れた鯒の白焼に生醤油を付けた肴で、焼酎をチビチビ飲む味はとてこたえられぬと言う。

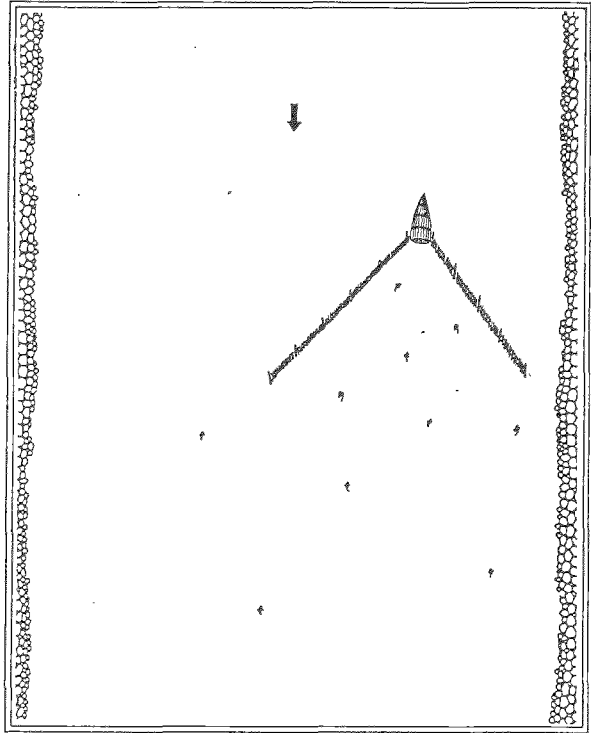


カジカ・かつて多摩川の
清流の広範囲にわたって
生息していた魚である

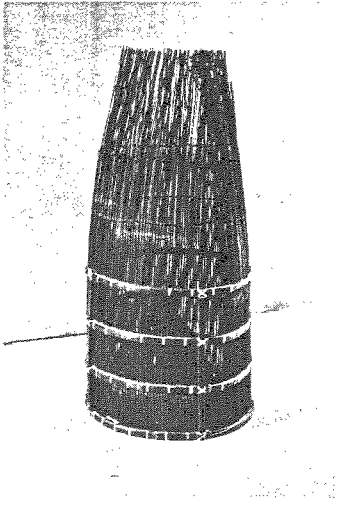
ベンケイ／立川市教育委員会蔵



鯿魚法平面図



かつては鯿捕りにも使われた雑魚筈／＼
日市町郷土館蔵



八、ドンドン

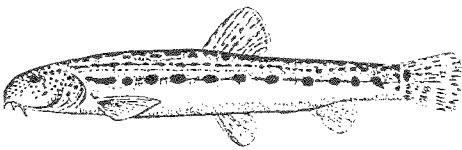
多摩川の中流及び浅川水系で、砂地の川底に生息するシマドジョウを雑魚筈で捕る漁法をドンドンと呼んでいる。ドンドンとはこの地方の方言である。

瀬などの川底に頭大の石などがあると、流水が抵抗を受けて急に流れ落ち時には白泡を呈する急流になり、そうした場所の状態をドンドンと呼んでいる。流れの一部に水勢を早めるために人工のドンドンを設け、仕掛けた雑魚筈に入るシマドジョウを捕らえる。

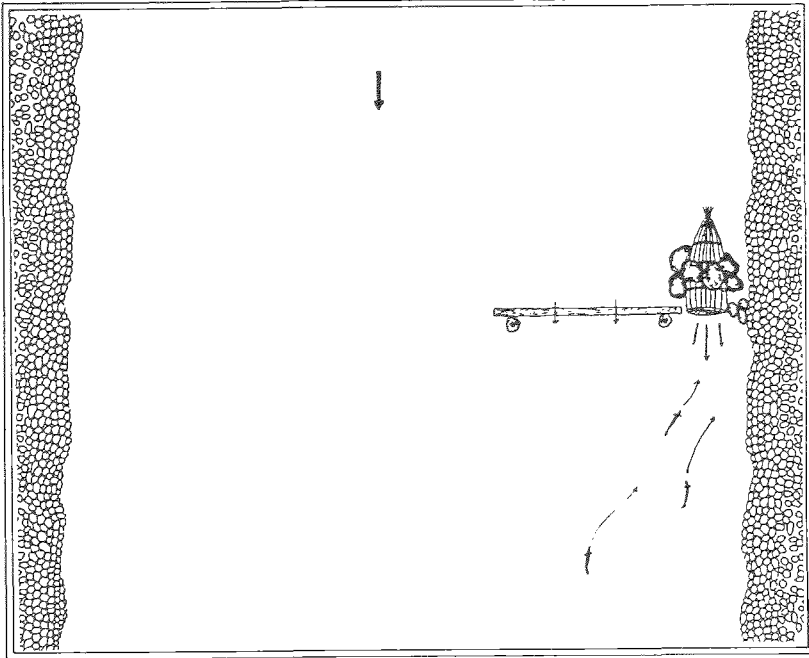
ドンドン漁は、深さ二尺前後の川岸近くの流れを横切つて川石や長板で溢流状態にし、その岸寄りに雑魚筈を仕掛ける。板を使う場合には巾一尺、長さ一間程の材料を用い、これを支える木杭を両側に二本川の中に打ち込み、流れと直角に板を取り付ける。すると流れはドンドン状態となり、さらに板の周囲を川石を使って補強し、その一端に雑魚筈を据え付ける。ドンドン漁ではドンドンの加減と雑魚筈の設置に微妙な技術を要し、この仕掛け方の如何がその後の漁獲に大きく影響することになる。

シマドジョウ

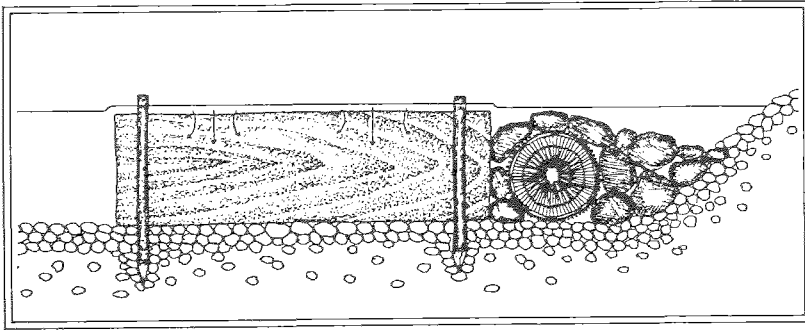
川底が砂地で、水がきれいな水域にしか棲まないシマドジョウ。多摩川中流に昔は美しい縞目模様のシマドジョウが沢山生息していた。



ドンドン漁平面図



ドンドン漁の下流から上流を見る



ドンドン漁法は水中の小魚が急速な流勢に刺激されて、上流に遡ろうとする習性を利用した漁法である。小魚たちがドンドンの下に集まり、流勢に抗しかねて流れを上ることができず、水勢の弱い雑魚紋の口から遡ろうとして釜に入ってしまう。

この漁法は四月から五月頃にかけて流れの小魚を捕るのに行うが、

その殆んどがシマドジョウで、条件に恵まれると一日で五、六回数を見回りその都度魚が捕れ、一日に六貫目（一斗五升）も捕れたことがあった。これは昭和六年頃の話である。

シマドジョウは多摩川流域で別名「スナムグリ」、「オイノメ」或

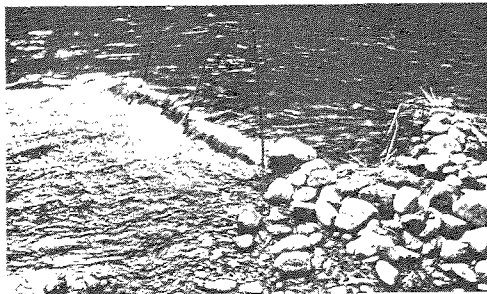
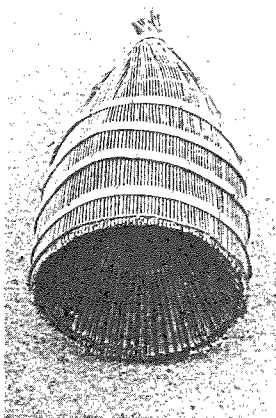
多摩川のドンドンと同じ漁の那珂川水系・荒川の「スナハビ漁」。スナハビはシマドジョウの方言。許可漁業だが現在でも鰻笮を用いて捕っている。

月上旬

／栃木県南那須町大金地先水域

・昭和五九年五

雑魚紋／鈴木由太郎蔵



いは「オイノメドジョウ」、また地方によつてはオイノメが訛り「オニノメ」、「オニノメドジョウ」とも呼ばれる。かつての多摩川水系で、シマドジョウは水の綺麗な砂質の川底の至る所に生息していた。浅川ではこのドンドン漁が昭和十年頃まで行われたが、以後魚の数も減りまたドンドンを行う場所も少なくなった。

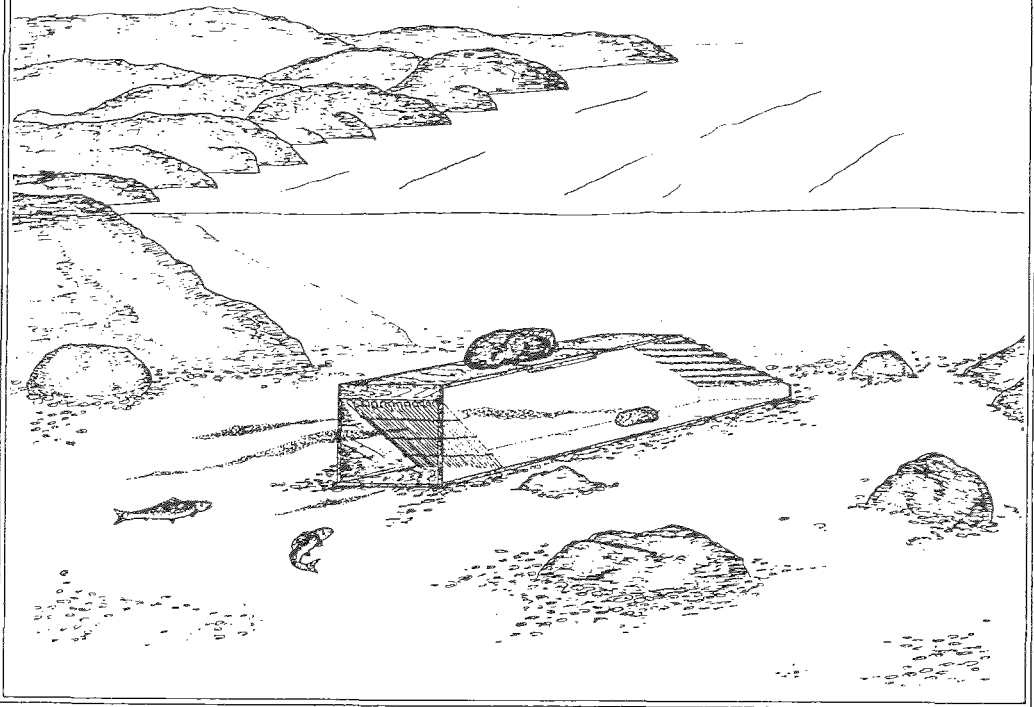
昔、流れにドンドンを作りそこに雑魚筍を仕掛けておくと、沢山の小魚が流れに抗して集まり、泳ぐ姿が見られた。四、五月頃に捕れるシマドジョウは抱卵しており、味は淡白である。こうしたドンドン漁で捕ったシマドジョウを、形を崩さぬように砂糖と醤油で煮つめ佃煮風に仕上げた。その軽やかな風味は、かつての味を知る人たちにとつて忘れ難いものがある。

九、天王筍

天王筍と称する箱筍を用いた筍漁法で、主に多摩川中流域を中心に行われた。天王筍は漁期や漁場、対象魚、それに筍設置の手順などの点で「桶筍」と共通する点が多い。天王筍を用いる漁法は職漁者から半漁民、それに素人などが行い、主にウグイを対象としたがその他にコイやカジカ、オイカワ、それにナマズやギバチなども捕れた。たまたまナマズが天王筍に入ると、他の魚は全く入らない。

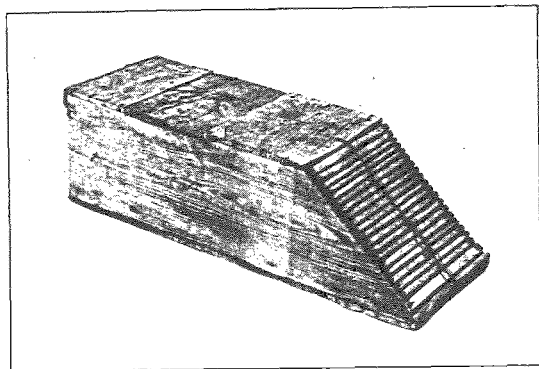
多摩川水系では天王筍という呼び名が通称になっているが、一部の地域では天王筍を「箱筍」もしくは「角筍」と言い、この筍を仕掛ける事を「箱伏せ」と呼んでいる。天王筍の漁期は主に八月から十二月

天王筍設置図

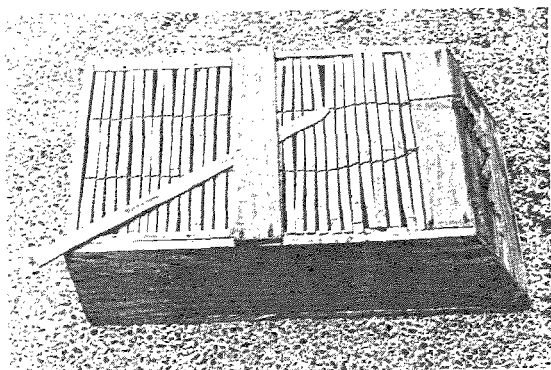


の間で、魚が寄る大淵の上流の水深が腰位までの瀬に、天王笈の口を下流に向けて仕掛ける。天王笈の入り口には竹製の返しを取り付けてあり、一度中に入った魚は出られないようになっており、この返しは他の笈とは異なり天王笈特有の構造をしている。

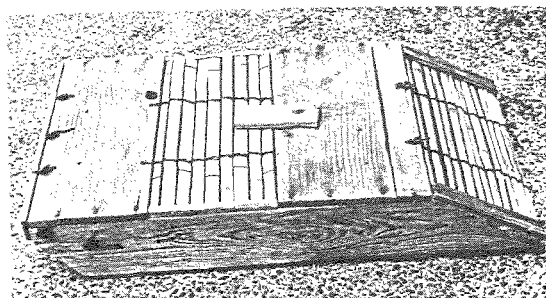
天王笈は漁撈者の自製による場合が多い。箱笈の長方形の外側部分は松や杉の板を用いて釘付けし、魚の入り口に竹製の返しを取り付ける。箱笈の入り口の反対側は割竹や細木を横に並べて簀状にし、笈の水通しを良くする。



天王笈／鈴木由太郎蔵



天王笈／青梅市郷土博物館蔵



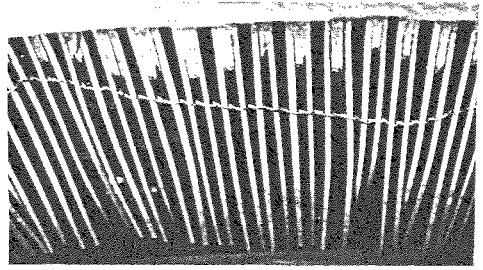
天王笈／青梅市郷土博物館蔵

天王笈の入り口の竹製の返しは、一本一本細工に手のこんだ部品をそれぞれ糸で綴り合わせ、一枚の返しとする。天王笈の返しは精巧にできていて、魚が箱笈に入る際に抵抗を感じさせない様に配慮されている。天王笈の機能の中で、魚の捕採に大きな影響を与える部分は返しの構造如何であり、板製の頑丈な外形に似合わず天王笈の返しは大変繊細にできている。また外形についてはそれぞれの製作者によって様々な形状の天王笈が作られ、実際に使用されたが、返しの部分に留意したものはいずれも魚の捕採に効果を上げている。

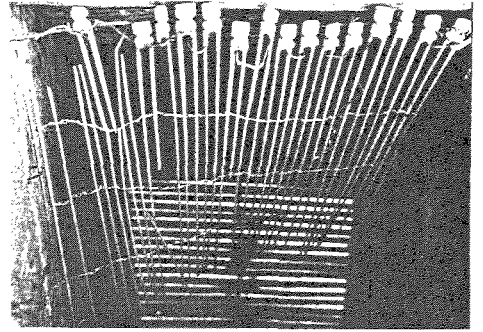
天王笈を仕掛ける時に下流の魚を誘引するため、蚕の蛹粉や魚の臓腑などを土と混ぜてよくこね、団子状にしたものを数個入れておく。笈の入り口を下流に向け、比較的流れのゆるやかな瀬などの川底に設置する。こう

しておく箱笈に入れた誘い餌の土団子が少しずつ水に溶け、下流の魚たちを寄せることになる。また天王笈を仕掛ける際には、笈の流失防止のため箱の上に川石を数個乗せておく。

天王笈を仕掛ける川の場合は、流れが少し薄濁り気味の所謂「柳っ葉」の状態が最も良く、夕方に笈を伏せて翌日の朝早く見廻り、中に入った魚を捕り上げる。魚の捕り上げは箱笈の下手を



天王笊の入口と返し



天王笊の入口と返し

やや斜め上にして引き上げる。そうしないと中に入った魚が返しを破って出てしまうことがある。

多摩川水系で用いられた天王笊は長方形の箱笊で、中流域ではウグイ漁に盛んに使用された。そのためであろうか、多摩川中流水域では相模川や荒川水系などの近隣河川でよく使われた、木の枝や割り竹を組み合わせた構造の籠笊が大変に少ない。これらの籠笊は丸型を「達磨笊」、角型を「角笊」などと呼んでいるが、多摩川水系での使用形跡は天王笊に比して極めて稀で、下流の一部で鯉を捕るのに用いられた鯉笊があるだけである。その理由として、天王笊を使った箱笊漁法が発達した事により、以前、多摩川で長い間に互って行われてきた籠

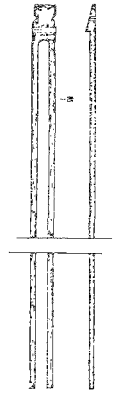
天王笊寸法図（鈴木由太郎所蔵）

側断面

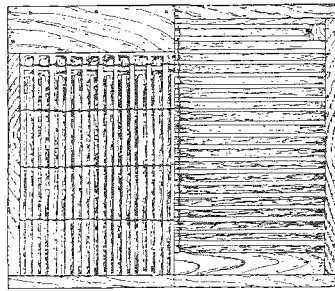


0 10 20

返しの竹製部品



0 10 20



正面入口部

0 10 20

笊による漁法に、天王笊が取って代つたものと考えられる。

笊の構造並びにその機能の点で、籠笊は天王笊よりもはるかにその歴史が古く、笊の原始的な形態を残している。製材技術が進み松板や杉板が容易に入手し易くなった明治になって、従来の籠笊は同一の陥穽機能を有する新しい天王笊に駆逐され、漁法のみが昔からそのまゝの姿で継承されてきたのである。

天王笊の場合は古来からの漁法がそのまま継承され、それに使用される漁具が新しい素材に代り新型漁具として登場した例であるが、こ



天王笈を作る／製作者・小林勝太郎

うした事例は同じ筌漁法の「桶笈」にも見ることが出来る。

一〇、桶 笈

桶笈は桶や一斗樽などで筌を自製し、それを用いて魚を捕る漁法の名称で、並びに漁具それ自体も桶笈と呼び、主に多摩川水系の中流域で行われた。桶笈は清流に生息するウグイを対象にした筌漁法で、オイカワなどの魚も捕れる。

夏の終り頃から十二月頃までが桶笈の漁期で、極めて簡単な構造の筌を用いるにもかかわらずかなりの漁獲が得られる漁法で、川が薄濁りの状態の時に最も効果があった。前の晩に仕掛けて朝早く取り上げ、多い時には一つの桶笈で一、二貫目ものウグイを捕ることがある。

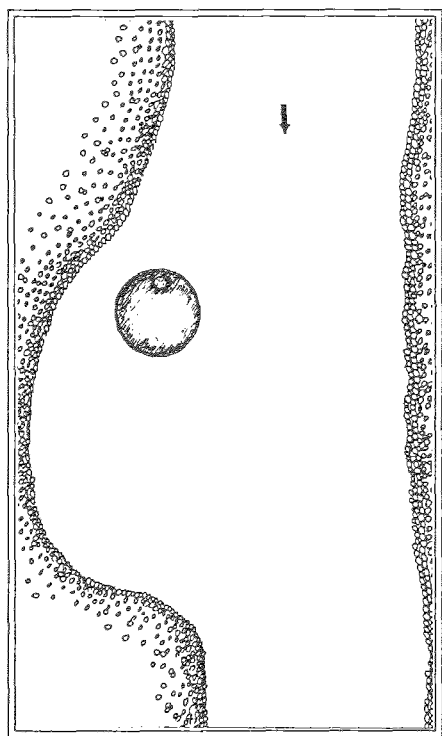
桶笈漁法は主に多摩川の中流水域を中心に、支流の秋川の戸倉地区など、川の上流地帯でも行われており、地域によってこの漁法を「樽

伏」、或いは「桶伏せ」、「鉢伏せ」などと呼んでいる。

江戸時代から行われた桶笈漁法は、漁具に桶や古樽を用い、その上部を麻布もしくは蚊帳の古布で覆う。布地の一部に共布で筒状の返しを取り付けたり、布製の返しの代りに竹筒を利用する場合もあり、布を桶や樽の上部に張って籐たがや綱で固定する。こうした筌を淵などの手の瀬に半ば埋めた状態で仕掛けておき、筌の中の餌に寄せられて集まる魚が返しを通過して中に入る。桶笈漁における魚の採手順や漁期、漁場などは、箱筌の天王笈と共通する点が多い。

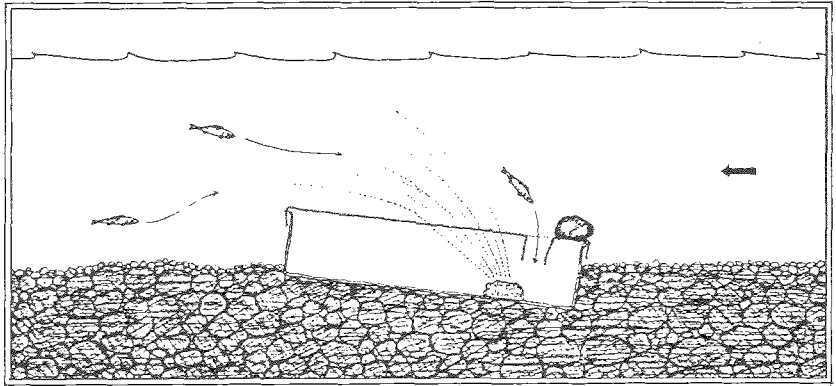
魚を誘い寄せる餌は、蚕の蛹粉や煎り糠、それに魚の臓腑などを泥土とよく練り込み、これを団子状にしたものを筌の底に入れ、或いは単にこうした寄せ餌を布にすり付けておく場合もある。川底への設置

桶笈設置図

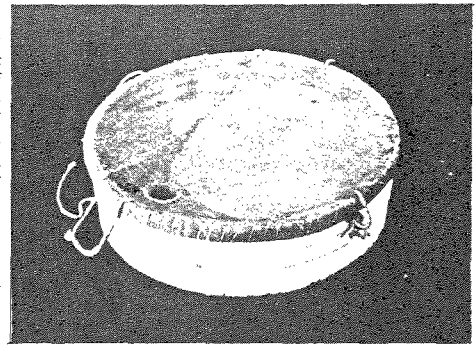


は桶や樽の上部が二、三寸川底から出る程度に埋め、釜が浮き上がらないように川石を載せておく。こうすると寄せ餌が少しずつ水に溶けて、下手の魚がその匂いに誘われて寄り集まってきて、返しの筒から釜に入る。桶笈は天王笈と同様に比較的流れのゆるい場所に仕掛ける。

桶笈設置側断面図



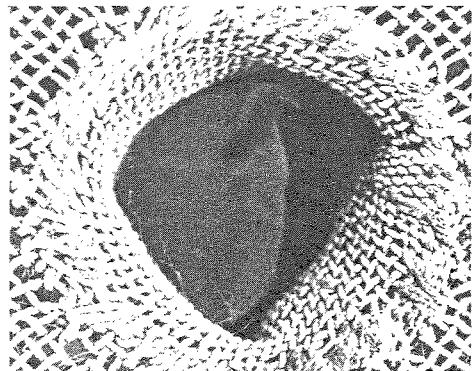
桶笈は、漁撈者各自が手に入る日常生活用品の廃物を利用して自製したものである。長い間に瓦り桶や樽を用いた桶笈に代って、鉄製のブリキ板が容易に普及する時代になると水盥形のブリキケースが市販され、漁撈者たちはこれを求めて上側の布地や返しを取り付けて使用した。水盥形の上部を覆う布地は南京袋や麻布、それに蚊帳などの古布地を用い、その一部に筒状の返しを取り付けるのは先きの桶や樽を利用した場合と変りない。この水盥形の釜をやはり桶笈と呼び、魚の捕採機能の点では桶や樽の



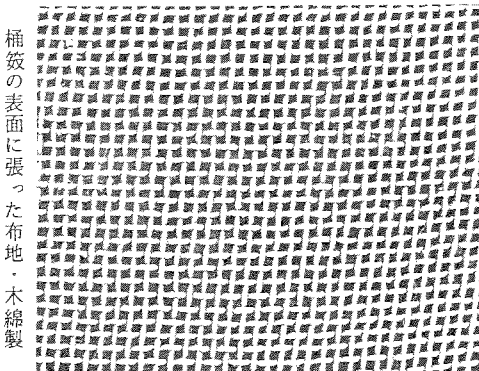
桶笈／立川市教育委員会蔵

場合と同様である。

水盥形ブリキ製の桶笈は、魚の誘引に餌を用いる事や仕掛ける場所などの点で、今までの桶笈と全く変りはない。川底への設置には、水盥形の表に返しがありその部分を上流に向け、川底に斜めにした状態で仕掛けると、漁獲の効率が良く魚の入りが違う。さらに釜の流失防止に重りの川石を数個のせておき、



桶笈の返し

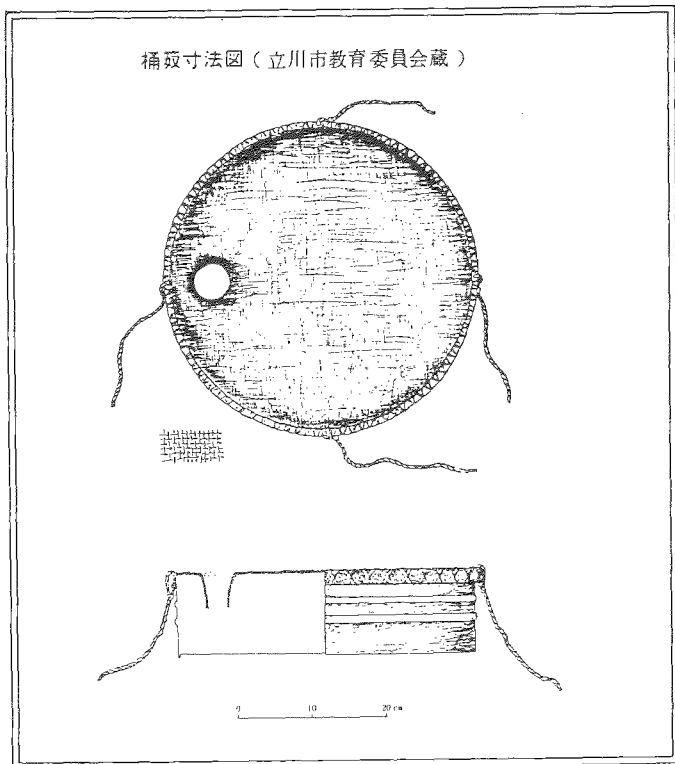


桶笈の表面に張った布地・木綿製

中に入れた誘いの餌に魚が寄せられて釜に入るのを待つ。

水深が腰ほどのゆるやかな流れの下流に大きな淵があり、そこにウグイやオイカワが沢山集まっている様な場所であれば、桶筈には恰好の漁場となる。多摩川中流ではウグイを「ホンバヤ」と呼び、桶筈漁の条件に恵まれると、ホンバヤは面白いうように釜に入る。桶筈は職漁者や半漁民などの間で昔から行われてきた古い漁法の一つである。

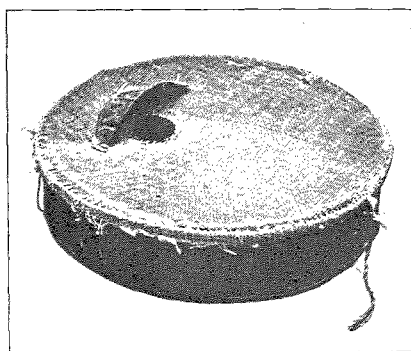
桶筈漁の別称で、羽村地方では「鉢伏せ」とも言うが、これは桶や



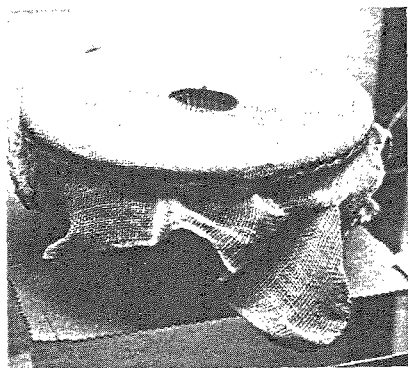
樽と共に、鉢などを用いて釜漁を行っていた事の名残りである。事実、使い古した鉢に布地と返し筒を用いた所謂鉢釜漁は他の水系でも多く見られ、「鉢伏せ」と呼ばれる漁法が残っている。多摩川流域では、水盥形のブリキ製品の出現によってその姿を消したが、原始的な漁具の形態を留める鉢や桶それに樽などを用いた漁法が、近隣の河川では数十年前まで行われていた。

多摩川水系における漁撈の特徴は、外からの優れた漁法や漁具が移入された際の対応が速やかで、新しい技法が短期間の中に流域一帯に拡散し定着する場合が多い。多摩川水系で行われた漁撈技術の変遷についてみると、この流域一帯の伝統的な風土は、優れた漁法への変革や漁具の改良などに関しては、従来の因習に囚われる事のない極めて積極的な基盤をもった水系であったと言える。

荒川水系の桶筈 / 埼玉県立博物館蔵



「モジリ・ウケの世界展」(沼津市歴史民俗資料館)に出品の鉢伏せ / 下諏訪町立博物館蔵



一一、山女魚笵

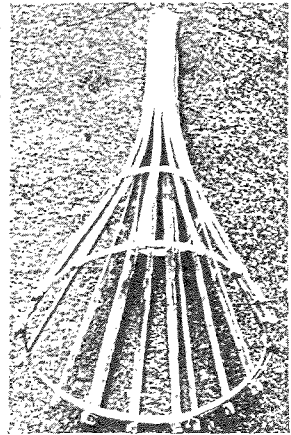
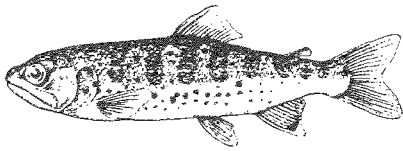
多摩川の上流水域の本流及び支流には、サケ科の山女魚や岩魚が生息している。これらの魚を捕るのに古くから釣りや網、簀などによる漁法が行われていたが、一部の地域では笵を使用した魚捕りが行われた。

主に秋期の山女魚を捕るために行われ、これに使用する笵は、長さ二〜三尺ほどの真竹の三分の二を細かく割り裂いて開き、そこにタガをはめた漏斗状の笵で、返しもなく極めて簡単な構造の笵を使用する。地方によってこの笵を単に「ドウ」と呼び、別に「ヘラ」、「オケ」、「ヨリオケ」などと呼んでいる。こうした山女魚笵を用いる漁法は、多摩川本流では青梅から上流の地域で行われ、山女魚が生息する本流や支流に仕掛けて魚を捕っていた。

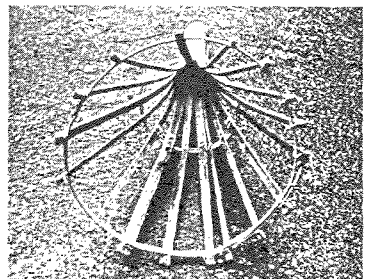
十月中旬から十一月上旬にかけて、多摩川水系の山女魚は産卵期に入る。この時季の山女魚は俗に「瀬すり山女魚」と呼ばれ、流れを移動し、しばしば浅瀬にも姿を見せる。

この頃になると、流れを川石などで逆八の字状にすばめて、その先に「下りどう」の状態で口を

ヤマメ・美しい姿の溪流魚で、動作の俊敏な美味な魚である。多摩川上流では昔から山間部の人たちの貴重な蛋白質になっていたが、現在では生息数が激減し、人工的な孵化・放流によっている。



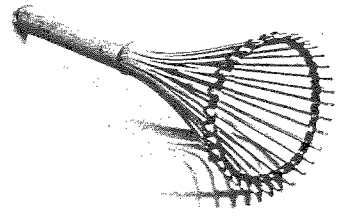
竹を割った簡単な構造の山女魚笵／青梅市郷土博物館蔵



山女魚笵の入口／青梅市郷土博物館蔵

上流に向け、山女魚笵を仕掛けておく。笵を仕掛ける場所は、水深が三〜四寸の傾斜のある流れで、笵の下部が水に浸る程度に笵を伏せてその周りを石で固定しておく。川水が笵の口から入り、割り竹の隙間を通って流下していく。こうしておくことで、流れを下った山女魚が割り竹の間にはさまり、笵に掛かる。

山女魚笵は、秋期に流れを下る山女魚の習性を利用した漁法であるが、それに用いる笵は数ある多摩川の水産漁具の中で最も単純な形態を具え、しかも有舌笵の多い笵漁具の中で、無舌構造の笵はこの山女魚笵と鰻の竹筒笵、それに瀬張り漁に用いるもじの三種である。そのいずれもが魚の習性を利用した無舌の効果が生かされており、無舌構造であっても、陷阱機能を有する捕採具としてその目的を十分に果たし



荒川水系の山女魚釜／
埼玉県立博物館蔵

ている。

山女魚釜は、近隣河川の荒川水系及び栃木県下の上流水域でも用いられ、昔からそこに生息する山女魚捕りに使われており、釜の構造、機能の点で多摩川のものとは変らない。

多摩川の山女魚釜漁は、昭和四十年頃まで上流域の支流で行われていた。

二二、鰻 簀

昔、多摩川水系には鰻が沢山生息していた。本流は勿論のこと、支流や山間部の細流や水田地帯の用水路など、鰻は至る所で見られ、様々な漁法で鰻を捕っていた。その中で鰻簀による釜漁法は、多摩川の上流から下流水域まで行われた、最も普遍的な漁法であった。

鰻は生来非常に貪欲な魚で、稚魚の頃に海から遡り、上流や細流の奥深くまで生息するが、夜行性で昼間は岩の隙間や倒木の沈みなど、流れの中の障害物を罅にしている。川岸の蛇籠の間や、沈床回りの菱

牛、護岸の乱杭や川底の

大石の下などは鰻が好ん

で棲みつく場所で、夜に

なると鰻はこの罅を出て



鰻簀／立川市教育委員会蔵

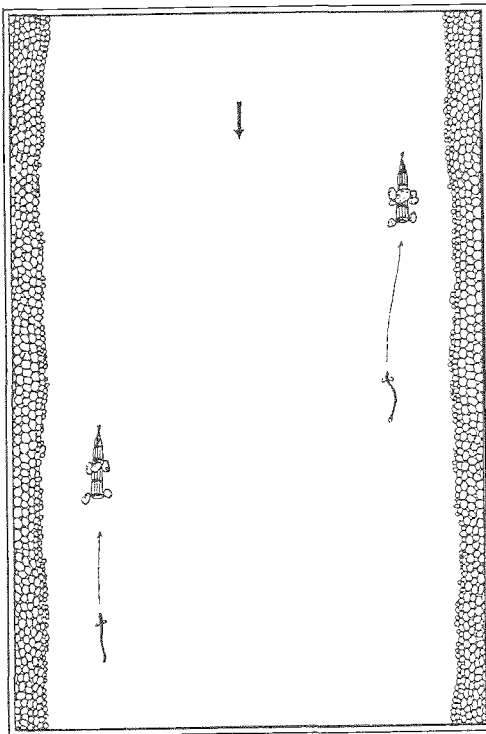
行動を開始する。

鰻簀漁は鰻のこうした習性を利用した釜漁法であり、春から秋まで行われ、水温の上昇する七月頃が最も鰻簀漁の盛んな時季である。釜を夕方に仕掛けて翌朝早くに取り上げ、多摩川では釜を仕掛ける事を「簀を打つ」とか「簀をぶつ」と称している。また鰻釜の名称については、「鰻簀」と呼ぶ場合が多く、一部では「鰻もじ」或いは単に「もじり」とも呼んでいる。

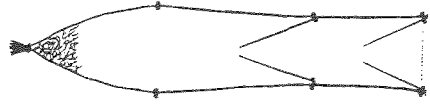
鰻簀は竹簧を丸め、内側と外側に簧を取り巻く力骨を数ヶ所取付け、これで釜の構造を支える。鰻簀の特徴は返しが二つあり、返しの一つは泥罅や稚魚簀とはこの点が異なっている。

返しは「舌」とも言い、鰻簀の複舌構造は釜に入った鰻を逃がさな

鰻簀設置図

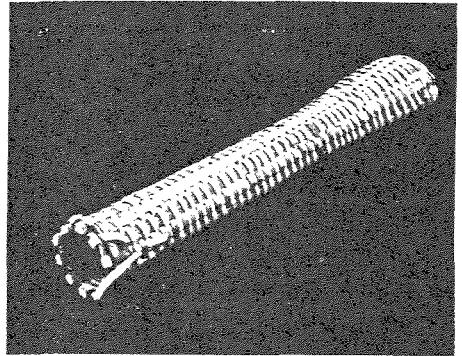


鰻筴に装餌した断面図



筴の尾部にドバミミズを入れ、逃走防止のため草や藻を当てておく。

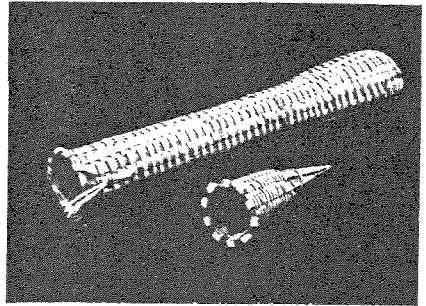
笹編みの鰻筴／立川市教育委員会蔵



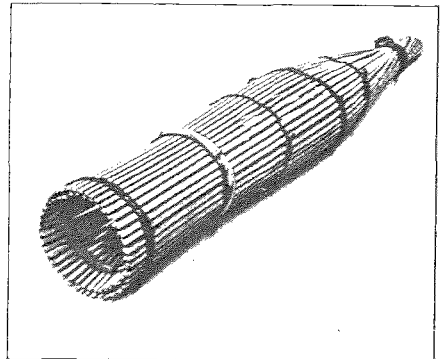
ためである。単舌筴であると、一度筴に入った鰻が、その強力な尻尾の力を利用して容易に逃げ出してしまふ。これを防ぐために竹簧による鰻筴は総て複舌構造になっており、入り口の第一の返しは比較的にゆるく、筴への進入が容易になっている。さらに第二の返しは、鋭い細竹の切り先が筴の内部に向けられ、返しが完全にしぼられた構造になっており、中に入った鰻は再び外に出ることはできない。

竹簧製の鰻筴は、多摩川水系で広く使われたごく一般的な鰻捕り用の筴であるが、一部では、これらとは構造を異にする鰻筴も使われていた。その筴は外見がヘチマ形をした笹編みの単舌筴で、単舌であってもその先は鋭く筴の内側に向けられ、舌の絞りは細竹を束ねた形状で、一度鰻が入ったら出られない。この返しの部分は同時に筴の蓋に

笹編み型の鰻筴は単舌構造で、蓋は返しを兼ねている。



多摩川水系で最も一般的に見られる竹簧型・複舌構造の鰻筴／立川市教育委員会蔵



なっていて、中の鰻を捕り上げる時にはこの返し兼用の蓋を取り外す。単舌型の鰻筴は専門職人の手に成るもので、また竹簧製の複舌筴は、一部では自製する人もあったが、多くの漁撈者は籠職人が作ったものを購入して使用した。昔は近くに籠職人がおり、荒物屋でも販売していて、こうした漁具は容易に入手できた。また筴は笹などの竹製品を売り歩く行商人たちから買い求めることもあった。

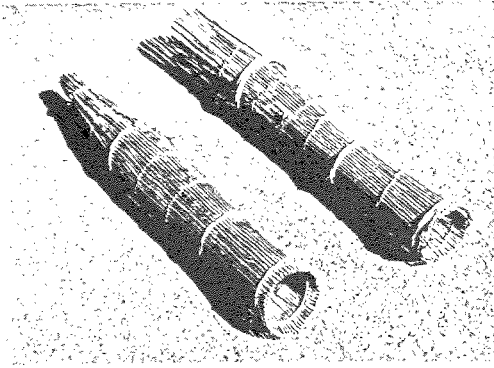
鰻筴を仕掛ける場合には、予め鰻を誘う餌を筴に入れておく。誘い餌に寄せられた鰻は、狭く、鋭い筴の返しを通り抜けて中に入る。

誘い餌には主にドバミミズやシマミミズ、それにヒルなどの環形動物が使われたが、地方によっては蚕の蛹や潰した田螺なども使用した。

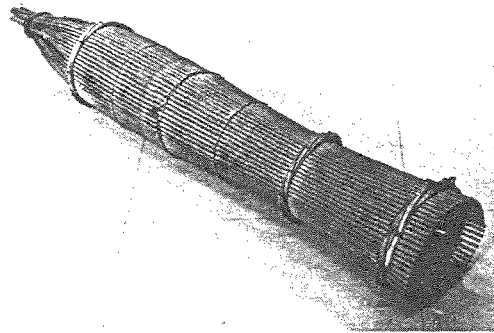
中でもドバミミズは有効な誘い餌で、竹藪などの落葉の下を細い棒で斜めに突いたり、落葉を足で踏みつけて出てくるのを捕らえる。

ミミズが生きていると竹藪の間から逃げてしまうので、竹串に通したり木綿袋などに入れて筥に装餌する。また筥の内側の尻にミミズを入れ、逃げられないように金魚草などの水藻や浮草で栓をする。要は餌の発する匂いで鰻を誘い寄せ、筥の陥穽機能を利用して鰻を捕らえるのが鰻笥による漁法である。

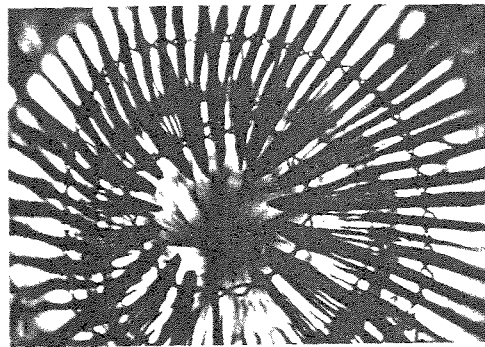
鰻笥を仕掛けるには、夕方、鰻が潜んでいそうな場所の少し上手の、流れのゆるやかな場所に筥の口を下に向け、所謂、「上りどう」の形



鰻笥／福生市郷土資料室蔵



多摩川上流水域で使われた鰻笥／奥多摩郷土資料館蔵

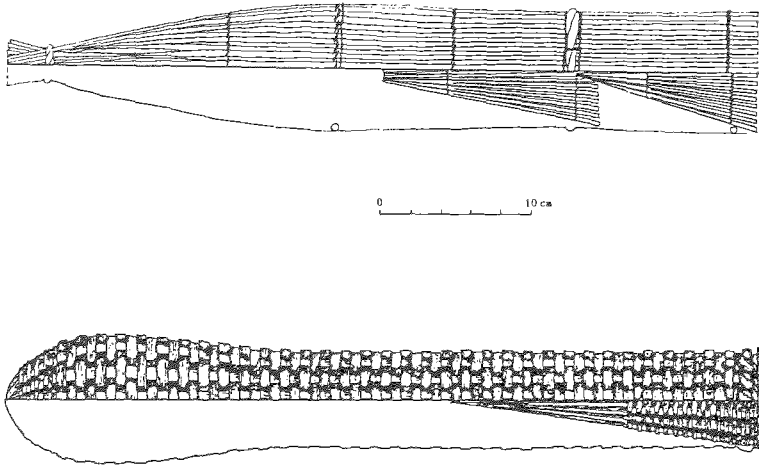


鰻笥の入口と返し部分

で仕掛ける。流れの中には自ずと鰻の往来する通路があり、漁人たちはこうした所を経験的に知っており、川底に人工的な手を加えず、鰻の通り道と読んだ場所に鰻笥を打つ。筥の流出防止に重しの川石を幾つか載せておき、翌朝早く鰻笥を取り上げる。一本の鰻笥に五、六匹の鰻が入っていることもあり、調布地方の水域で仕掛けた鰻笥には、一二匹も入っていたという記録がある。

多摩川流域では昔は鰻捕り専門の職漁者がいて、鰻笥を仕掛けて鰻を捕っていたが、職漁者に限らず、鰻笥漁は半漁民や農民、それに流域の少年たちなどが行っていた漁法である。また鰻の捕採が容易であるために、魚捕り好きの老人たちの隠居仕事として、遊びと実益を兼ねて鰻笥漁が行われた。捕った鰻は自家用に食べるか、或いは川魚仲買人や川魚料理屋に持ち込んで買ってもらい、結構手間賃稼ぎになったものである。

鰻 笊寸法図
(立川市教育委員会蔵)

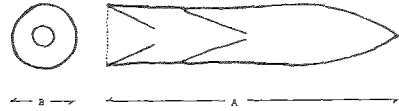


一三、鰻 笊

多摩川の中、下流に広がる水田地帯の用水路に、昔は鰻やタナゴが沢山生息していた。鰻笊漁は小川のこうした魚を捕るのに用いられ、鰻が産卵行動を始める三月頃から、水田の水が落ちて水路に魚が集まる十一月上旬頃まで行われた。春に魚が遡る時季には、笊の口を下流

鰻 笊寸法表

(単位：%)



		A	B ϕ	舌	力骨	摘 要
奥多摩	I	785	105	2	3	
	II	750	100	2	3	
五日市	I	760	100	2	4	
	II	730	105	2	3	記銘・古谷とあり
立 川	I	730	105	2	3	
	II	755	100	2	4	
	III	730	104	2	4	
	IV	500	78	2	1	
	V	445	58	1	0	ザル編み 舌蓋兼用型
府 中	I	690	110	2	4	第1舌 130 第2舌 190 (新作)

各市・町立資料館の收藏品による。

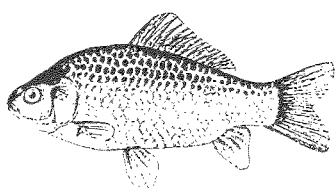
計測：昭和56年

に向けた「上りどう」を仕掛け、秋にはこれと逆に「下りどう」の形で流れに釜を伏せる。

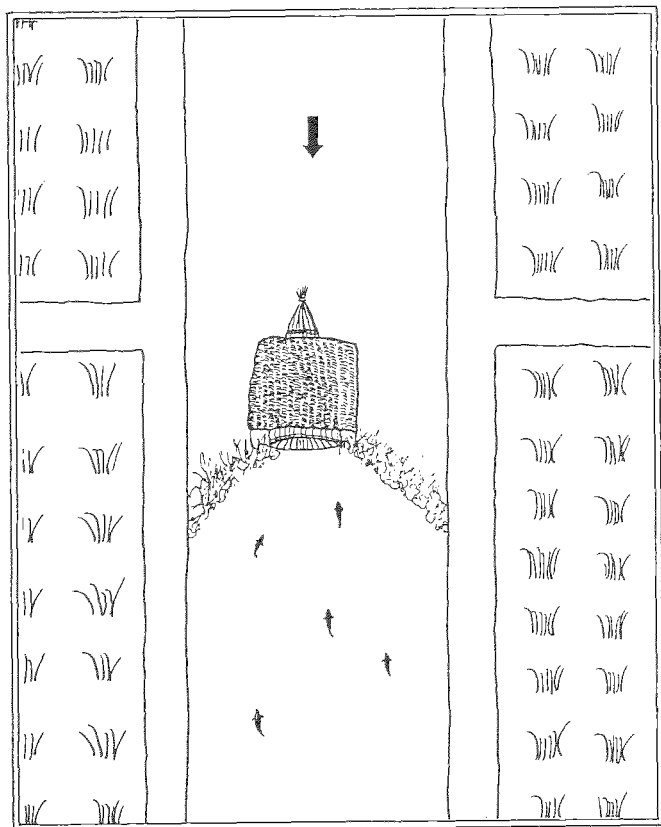
鮒笊は、多摩川水系で広く使われていた雑魚笊よりはるかに小型の釜で、泥鰌笊より少し大きく、竹簧を編みそれを筒型にした単舌釜である。こうした鮒笊を水流のある場所に棒で固定し、古藁などをかぶせ笊の中を暗くしておく。そして魚の誘導のために、釜の両側を八字型に、葉付きの小枝や竹笹を川底に挿しておく。

こうして前の夕方に釜を仕掛けておき、翌朝早く見廻って中に入っ

フナ・多摩川中、下流水域の支流や水路などに生息し、様々な漁法で捕られた。捕採が比較的容易なため、昔の人たちは遊びに、また自家の菜料に鮒捕りをした。

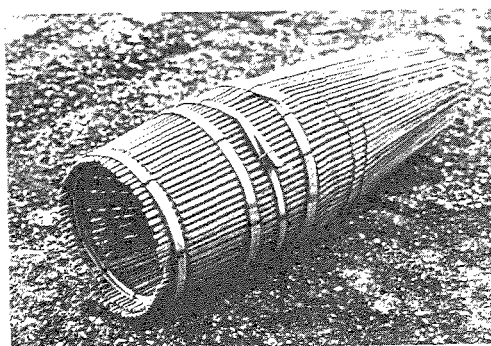


鮒笊設置図



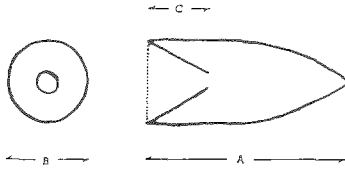
た魚を捕り上げる。場合によつては魚を誘い寄せるために、蚕の蛹粉または煎り糠や田螺を殻ごと砕いたものに田土を混ぜ、団子にしたものを鮒笊の中に入れておくこともある。

水田地帯の水域で釜を使った鮒捕りは、釜さえあれば容易にできる漁撈で、泥鰌笊などと同じ様に、多摩川流域の老人や少年たちが遊びを兼ねて行つた。



鮒笊 / 国立市教育委員会蔵

鮎笈寸法表



(単位：mm)

		A	Bφ	C	舌	力骨	摘要
国立	I	360	125	140	1	2	
	II	402	120	165	1	3	
	III	450	140	180	1	4	
府中	I	500	160	120	1	4	新作
調布	I	550	180	195	1	4	籠屋製
	II	490	133	215	1	4	自製

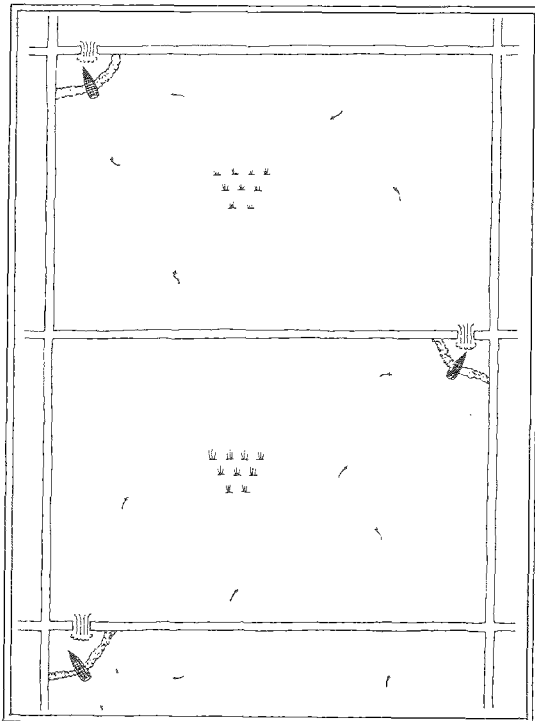
各市立資料館の収蔵品による。

計測：昭和56年

鮎笈を作る／製作者・小林勝太郎



水田に仕掛けた泥鰌笈

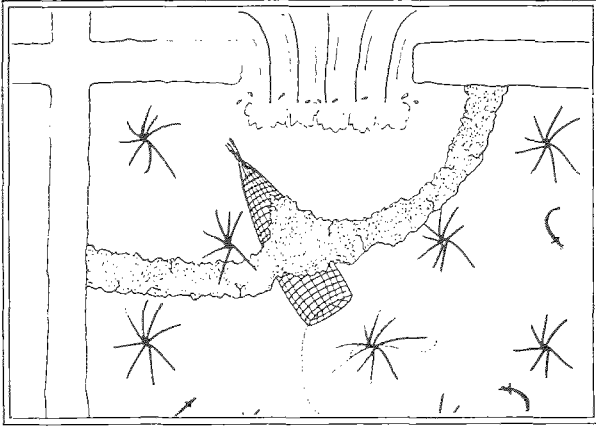


一四、泥鰌笈

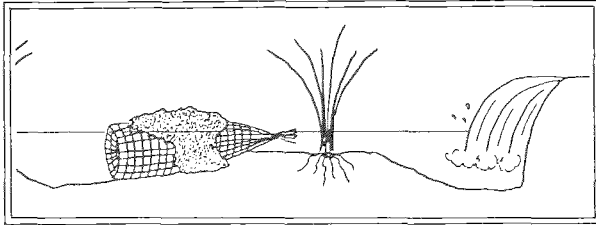
昔、多摩川流域一帯の水田地帯に泥鰌が生息しており、田植の季節から田圃の水が落ちる十月頃まで、泥鰌笈を水田や水路に仕掛け盛んに泥鰌を捕った。

その頃、田圃や水路には何処でも泥鰌の姿が見られ、上流の小河内や更に上の地域でも、水田や水路に泥鰌笈を仕掛けて泥鰌を捕っていた。泥鰌笈による漁法は、多摩川流域にひろがる水田地帯で行われた、最も普遍的な釜漁法であった。

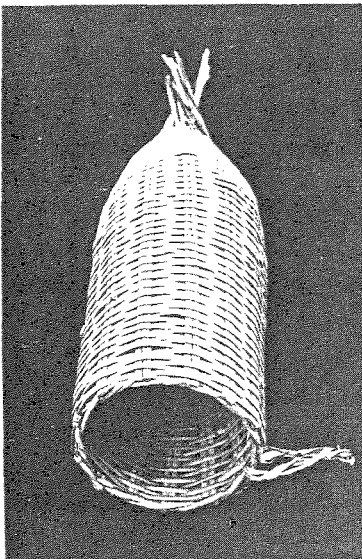
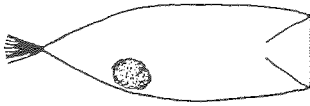
泥鰯笊仕掛け平面図



泥鰯笊仕掛け側面図



泥鰯笊に誘い餌を入れる



箕編み型の泥鰯笊／立川市教育委員会蔵

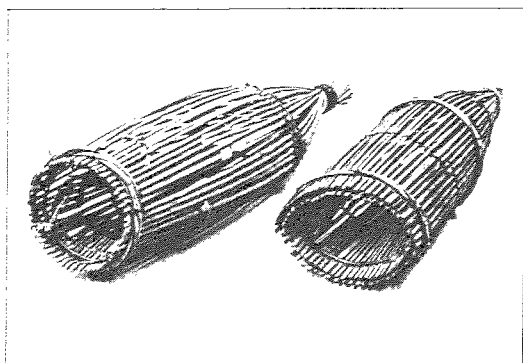
泥鰯を捕るための笊を泥鰯笊と呼び、或る地方では、泥鰯が後ろでも入ることから、泥鰯笊を「馬鹿笊」とも呼んでいるが、この呼称は、多摩川流域で一般に呼ばれる馬鹿笊とは異なる。

多摩川流域で用いられた泥鰯笊には、ヘネと称する真竹の割り竹を箕編みにしたものと、篠竹の皮を箕編みにした二種の型の笊がある。また、使用する材料を野山から切り取って自製するのと、籠職人の手になる市販品を使用する場合とがある。昔、水田地帯の大抵の農家にはこうした泥鰯笊が幾つかあつて、農事の合い間に笊を仕掛けて泥鰯を

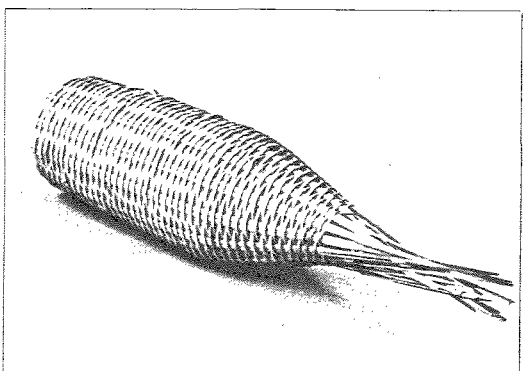
捕り、中でも泥鰯漁の好きな農民は、こうした笊を数十本も揃えていたものである。

泥鰯笊を用いる漁法では、泥鰯の誘引のため笊の中に餌を入れる。餌は田螺を砕き、煎り糠と田泥をそれぞれ等量に混ぜた団子を作り、それを一つの笊に二、三個入れて用いる。

笊を仕掛ける場所は水田の水口で、笊の口を下に向け上り笊の形にする。そして、田泥を寄せて水口の水が笊の中を流れるようにし、泥鰯笊を田泥で覆い重しとする。なおこの時、笊の入口の田泥を放射状に少し掘り下げておくと効果がある。こうしておき、四、五時間後に



黄編み型の泥鰯笊／
立川市教育委員会蔵

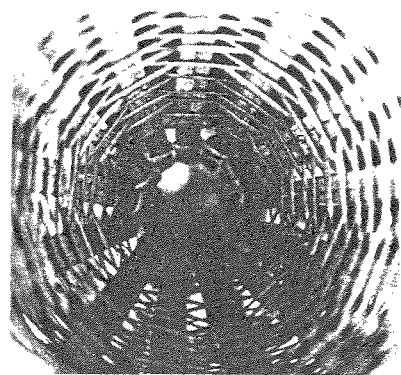


菅編み型泥鰯笊の尾部

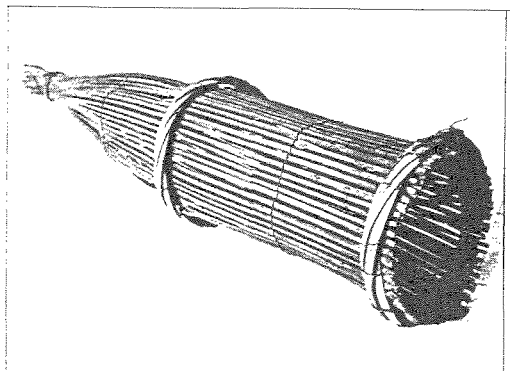
笊を引き上げ、中に入った泥鰯を捕り上げる。泥鰯笊は何時仕掛けても良いが、地方によっては「昼掛け、夕方上げ」と言われているように、日中に笊を仕掛けて、その日の夕方に笊を取り上げるのが良いとされている。

泥鰯笊漁の最盛期は、七、八月の稲田が青々と伸びた頃で、農民たちは昼食後の休みを利用して、田圃の水口や畦畔の傍の用水路に泥鰯笊を仕掛けに行く。幾本かの笊を仕掛けて田畑の農作業に出るが、夏の日射しは焼けつくように強い。

たまたまた夕雲が現われ、それが見る間に拡がったかと思うと、烈



菅編み型泥鰯笊の入口と
返し部分



多摩川上流で使われた泥鰯
笊／奥多摩町郷土資料館蔵

しい雨脚を伴った夕立雨が到来し、野も山もひとしきり強い雨に打たれる。先ほど笊を仕掛けた水田も雨水を溜めこんで溢れるばかりになり、田圃の水口では水が勢いよく流れ出す。

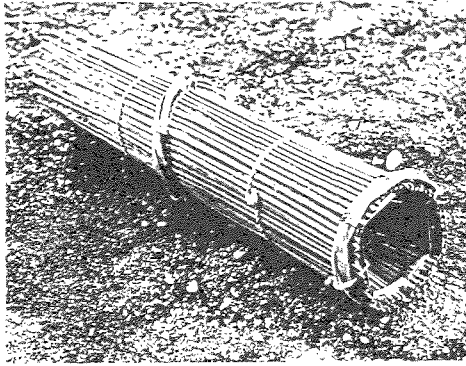
泥鰯笊漁にとって、又とない好機の到来である。

今まで日向水にあえいでいた泥鰯が、水口指して一斉に集まってくる。やがて雨雲が去り、雲間に日の光が射して微風が稲田を渡って行く。田圃の水も平常に戻り、先ほど泥鰯笊を仕掛けた農民は魚籠を抱え、期待に胸をはずませながら田の畦道をつつ走る。

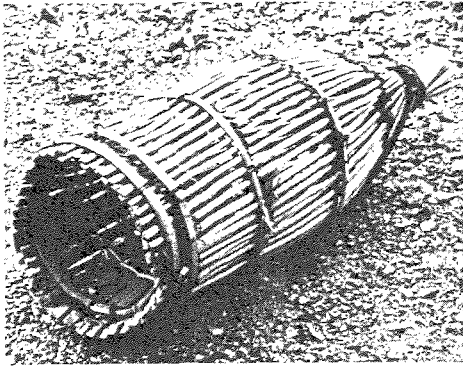
先刻仕掛けた泥鰯笊を一つづつ上げてゆくが、水田の泥の中に横たわる笊は今や満身に泥鰯を呑み込んでいる。そおと口の方から取り

上げると、ずしりとした確かな手ごたえが伝わってくる。途端に筈の中の泥鰌が驚いて狂ったようにはじけ、あばれ回る。藁の栓を外し、筈の尻を魚籠に当てがい泥鰌を捕り上げる。こうして次々と筈を引き上げ、ずしりと重い腰の魚籠は泥鰌で一杯になる。

泥鰌筈は泥鰌専用の筈を用い、泥鰌しか掛からないが、用水路などに仕掛けた筈には、泥鰌の近縁種であるホトケドジョウが捕れる事もあり、一部の地方ではこの魚を「婆々泥鰌」と呼んでいる。こうして泥鰌筈で捕った泥鰌を早速一昼夜水の中に入れて泥を吐かせ、泥鰌汁や玉子とじ、或いは泥鰌鍋や佃煮風に煮込んで調理して夕餉の菜にするのである。



泥鰌筈／国立市教育委員会蔵



泥鰌筈／府中市立郷土館蔵

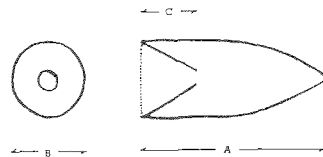
かつて多摩川の流域一帯に水田が展げていた頃、泥鰌筈による漁法は、専ら職漁者以外の農民や子供たちが自家の菜料用と遊びとを兼ねて行っていた。

当時、筈による泥鰌の採捕量は莫大なもので、かつての農村の食生活において泥鰌の果たしてきた役割は計り知れない。

昔の農業は、今日のような化学肥料と農業を使わない、所謂、有機物の利用による伝統的な農業が営まれ、その頃水田地帯には何処でも沢山の泥鰌が生息していた。そしてごく身近な存在の、しかも捕採の

泥鰌筈寸法表

(単位：mm)

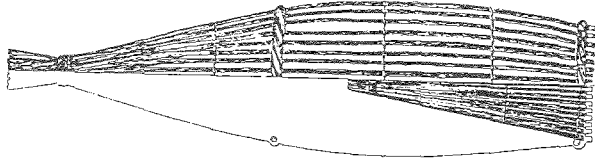


		A	B ϕ	C	舌	力骨	摘要
立川	I	480	90	—	1	2	竹簧編み・荒目
	II	394	92	—	1	0	ザル編み・尾部振り取り型
	III	396	90	—	1	0	" "
国立	I	410	90	130	1	2	竹簧編み
	II	400	100	150	1	2	"
府中	I	400	110	110	1	3	新作
調布	I	490	100	165	—	—	
	II	450	93	150	—	—	

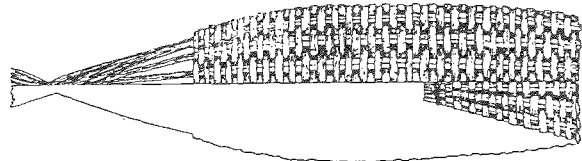
計測：昭和56年

力骨：簧編みの内外に補強する竹の曲輪
各市立資料館の収蔵品による

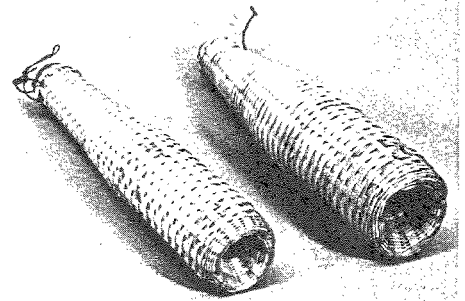
泥鰯笊・篋編み型
(立川市教育委員会蔵)



泥鰯笊・箆編み型
(立川市教育委員会蔵)



容易な泥鰯を農民たちが簡単な笊を仕掛けて捕り、それを自家の菜料にしていたのである。泥鰯は美味でしかも栄養価の高い魚であり、当時の農村における食生活にあつて、泥鰯は貴重な蛋白源であつた。農民が泥鰯をして田の蛆と言わしめる程、かつては捕つても捕つても水田や水路から湧いて出るように殖え続けていた。



埼玉県南部水域の泥鰯笊
埼玉県立博物館蔵

一杯もの泥鰯を捕つた話は、遠い昔の語り草になつた。

だが多摩川の流域一帯に開発が波及し、今までの水田は宅地化していった。生活污水が水路に流れ込むと共に、営農面での化学肥料の使用は、有機質土壌を好む泥鰯の生息環境を奪い、さらに農薬が彼等の息の根を止めたのである。かつてあれ程畦畔沿いの水路や水田に見られた泥鰯の姿は、急速に見られなくなつた。

今を去る数十年前、田圃や水路に泥鰯笊を仕掛け、一日に四斗樽

一五、鯉 笊

昔の多摩川は川底の殆どが石や玉砂利に覆われ、中流域は文字通り鮎の川として知られ、そうした流れに鯉も生息していたが、数は比較的にななかつた。その後、川砂利採取や放流などにより川の様相や生態系が変り、今まで多摩川の下流部に多く見られた鯉は、次第に中流域にも見られるようになった。

昔、多摩川の中流で鯉が捕れるのは、投網や寄せ網などの漁法の際にたまたま捕れる程度であつたが、当時の多摩川下流水域の深場所に

は鯉が生息し、「鯉投網」や「四つ手網」、それに箒で突き刺す鯉捕り漁法が行われていた。また、鯉の専門釜を用いた漁法があり、汽水域一帯で行われていた。

中村亮雄の「小向の漁」によると、流れの深みに生息する鯉を捕るために鯉釜を用い、鯉釜は四斗樽より少し大きく、樽を伏せたような形をしている。鯉釜の底は厚さが一寸ほどの板を用い、釜の周りと上部を竹で編み、一方に入口を設ける。入口は竹ひごで作り、入った鯉が出られなくするための返しを取付ける。そして、鯉釜を仕掛ける際、粟や田螺を潰したものに泥を混ぜ、これを釜の底板に塗りつけて寄せ餌にする。また新しい釜は鯉の入りが悪く、古い鯉釜ほど良く捕れる、と鯉釜漁法について記している。

鯉の釜漁に用いられる鯉釜は豎釜であり、多摩川水系で使用された釜の形態は、天王笈や桶笈を含め、その殆どが模型釜の中で、下流域の鯉釜は唯一の豎型釜である。豎釜の使用例は、多摩川におけるよりも、むしろ荒川や相模川、それに栃木県、静岡県など、近隣河川の下流域に見られ、鯉を捕る釜の他に、川海老や鮎などを捕る釜が用いられている。

さまざまな釜漁が行われた多摩川中流域一帯で、明治以降豎釜が発達しなかつた理由として、豎釜漁の対象魚が比較的少なく、また、豎釜に代るものとして、天王笈の使用が盛んであつた事による。豎釜はその大部分を割竹や細木を用いて編み固めるが、天王笈は、当時、入手の容易な木箱の廃材などを裁断して釘打ちするが、返しの部分に

さえ留意すれば素人でも簡単にできる。平板の普及と製作上の簡易性、また、その漁具に適した対象魚の生息する多摩川中流域では、かつてこの地域に古くから使われていた、より原始的な構造の豎釜を駆逐したのである。

一六、竹筒漁

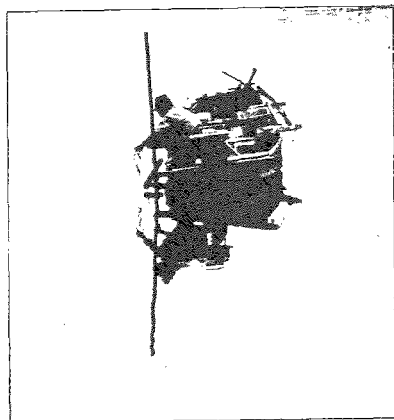
節を抜いた竹筒を水中に浸しておき、その中に入った鰻を捕り上げるもので、竹筒漁法は大変に原始的でしかも歴史の古い漁法である。主として職漁者の行う漁法で、竹筒漁は別に「鰻筒」や「筒っぼ」、「ポーポー」とも呼び、多摩川下流域から内湾一帯の水域で広く行われた。

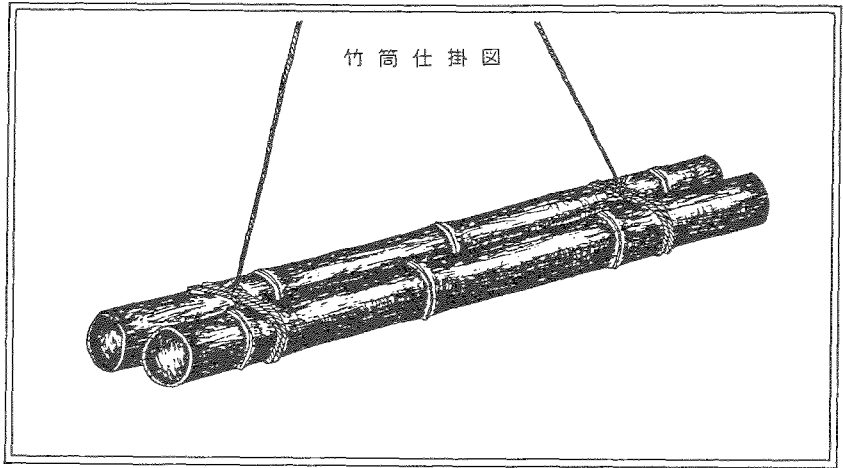
竹筒は釜漁の一種で、長さ四尺前後の孟宗竹の内側の節を抜いた竹筒を用い、この中に入る鰻を捕る。竹筒漁には竹筒を一本で使用する

場合と、二本ないし三本を一組にして束ねたものを二間おきに幹繩に結びつけ、順次に水中に浸す方法などがある。漁期は水温の上る五月から八月頃にかけて、鰻が移動する時季に行い、前の夕方に竹

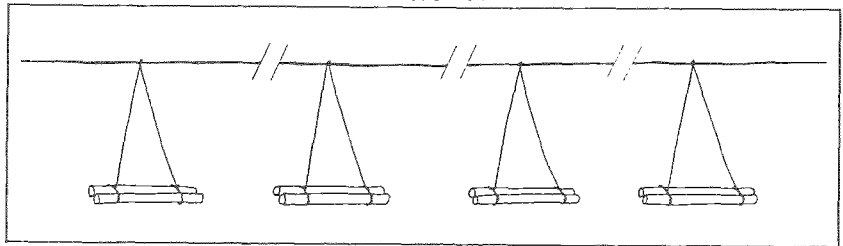
所
している
川・
大明寺
町彼
西岐
長崎
／
ある。
今でも竹筒漁が行い、鰻捕りをして

昭和57年3月





竹筒仕掛図



延縄式竹筒仕掛図

筒を仕掛けて早朝に取り上げ、竹筒の設置や取り上げは舟で行った。

筥の一種である竹筒は、筒の中が素通し構造になっていて、普通の筥に見られるような返しがなく、内部はノッペラポーの竹筒である。

だが、鰻は夜になると盛んに索餌行動を開始し、竹筒などの恰好の罠

を見つけると、その中に好んで潜る習性がある。そして揚句の果てに、易々と捕らえられてしまう事になるのだが、鰻の習性を熟知した竹筒漁の筥には返しを必要とせず、これで捕採の機能を十分に果たしている。

竹筒漁は漁撈者たちの長い間の経験により、鰻がこうした穴に好んで潜み、その狭い罠の中で努めて体を外周に触れようとする習性を利用した漁法である。そのため、竹筒のような単純な構造の漁具を用いても鰻は十分に捕れるのである。竹筒漁法は、人と鰻と竹との出会いに始まり、この技法の内容からしてその起源が先史時代にある事は推察に難くない。思えばこうした化石的な手法が、長い時の経過の下に延々と継承され、現代にまで至った事実は大変に興味深い。

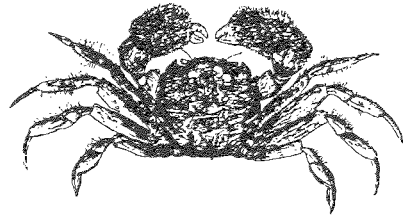
一七、蟹 簀

十一月頃になると多摩川では、降海性のモクズガニが産卵のために川を降る。夜間、特に出水のあった時などは大挙して流れを降り、こうした蟹を捕らえるために、多摩川の下流では蟹簀を仕掛ける。蟹簀はいわゆる「下りどう」の形で筥の口を上流に向け、川を降るモクズガニを誘い込む。

モクズガニは、鉄の部分に毛の密生した比較的大型の淡水性の蟹で、幼生時代を海で過ごし、変態期を過ぎた頃河口から遡り、下流や中流域に生息して育つ。モクズガニは、甲殻類に共通して見られる肉質の甚だ美味な蟹であるが、職漁者など一部の人たちが食する程度で、多

摩川に産する魚貝類の中ではあまり知られていない。

蟹筍は鰻筍や雑魚筍などの構造に比べると、粗大な造りの筍であるが、この様な筍で十分に蟹が捕れる。蟹筍は、篠竹もしくは金網などの材料を用いて漁撈者が自製したもので、返しは一つである。こうした筍を深みに移行する瀬などに夕方仕掛けておき、翌朝引き上げる。



モクスガニ・淡水産最大の蟹で、甲羅の大きさは十種を超えるのもあり美味である。多摩川でも秋になると産卵のため大挙して川を降るのを下流部で捕らえたが、水質汚濁で消滅した。

一八、ガラス筍

多摩川水系の中、下流で、主に少年たちが遊びに行っていたもので、魚捕り用のガラス製の筍を使用し、田圃わきの農業用排水路などの細流や池沼に仕掛けて魚を捕っていた。

ガラス筍は「瓶筍」又は「ガラス筍」と呼ばれ、近くの雑貨店や荒

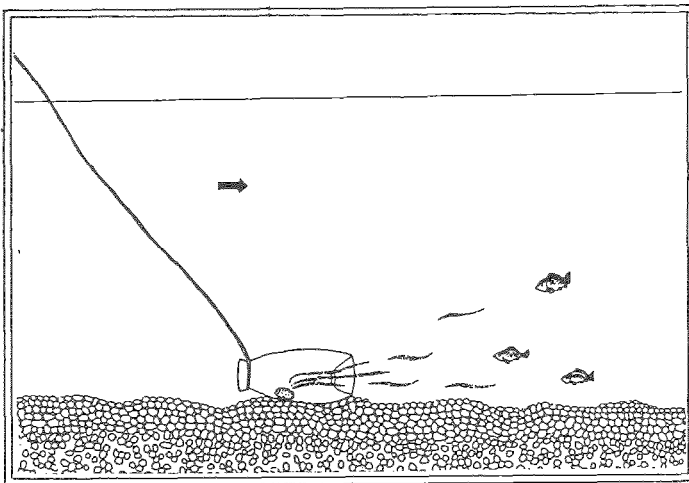
物屋で売っていたものを購入して用いた。ガラス筍は昭和の初め頃から多摩川流域で使われた比較的新しい漁具であるが、安価で容易に求められる事から、川遊びの少年たちの間に急速に普及した。

ガラス筍には魚の入り口となる返しがあり、その反対側に魚の取り出し口があつて、その口に麻布や古蚊帳などをあてがい紐で結んでおく。ガラス筍の中には、魚の誘引のために煎り糠や飯粒などを入れ、ガラス筍の口を下流に向けて流れに仕掛けておく。こうして筍の中に入つた魚を捕り上げるが、ガラス筍には

鮒やモロコ、タナゴ、ウグイ、ドジョウそれにスジエビなどが入り、このような簡単なガラス筍を用いて結構小魚が捕れた。

ガラス筍は、多摩川本流ではあまり使われなかつた。素材がガラス製で至る所川石だらけの川原では、取り扱い損ねると簡単に割れてしまい、その破片で怪我

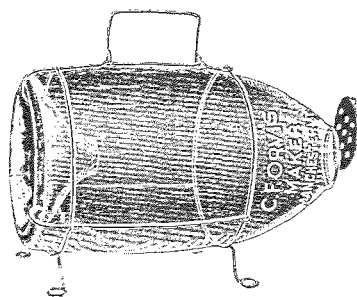
図 設置 筍 瓶





ガラス釜／調布市郷土
博物館蔵

1900年頃の米国ORVIS社製ガラス釜・Minnow trap / 『GREAT FISHING TACKLE CATALOGS of the golden age』より



造と機能は、一見、伝統漁具である従来の釜に類似している。だが、ガラス釜の発想は欧米よりもたらされたもので、彼の地では鱒釣りの餌に小魚を用いるため、その捕採用に考案された Minnow trap (小魚釜) と呼ばれる陥穽漁具である。

こうした今までの材料とは異なつた新しい素材による漁具の出現は、ガラス釜に限らず、合成樹脂製の魚籠やナイロン製の漁網やテグスなどが、長い間に亘って伝統の歴史を歩んできた漁法の実態も、少しづつ変様している。

をする人もいた。多摩川本流ではガラス釜漁に適した場所も少なく、専ら細流などで遊びに用いられたものである。

現在ではガラス製の釜に代り、プラスチック製となり、昭和四十年代以降、ガラス釜は姿を消した。

ガラス釜は、釜として魚の捕採に必要な最少限の機能を具えた単純な構造の漁具で、漁具の製法上でも従来の釜とは異質なものである。多摩川水系で使用された従来の釜は、竹や木などを用い、専門職人や素人による手作りの漁具であったが、ガラス製の釜は、ガラスという工業材料を用いた新しい漁具の出現であった。

ガラス釜の構成素材にガラスを用いた点を別にして、その明快な構

第二章 網 漁 法

一、多摩川水系の網漁法

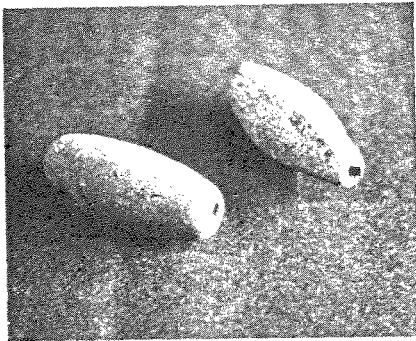
多摩川水系の網漁法は先史時代から行われ、流域の各地から網漁に用いた石錘や土錘が出土している。縄文時代の遺跡から、石斧や瓶などの生活用具とともに石錘が採掘され、当時、多摩川流域に居住した縄文人は、植物繊維から糸を撚り漁網を編んで魚を捕っていた。

その時代に、如何ような漁法で魚を捕らえていたかは明らかでないが、錘を用いる以上は、当然に浮子も使われたであろうし、網の上下に浮子と石錘を取り付けた漁網であれば、素材の違いはあるにしても、今日に見られる仕切網と同様の機能を持つ漁網が考えられる。大昔の

奥多摩町内から出土した石錘／奥多摩郷土資料館蔵



土錘／調布市郷土博物館蔵



古人たちは、多摩川の流れに網を繰り出して、魚を仕切網に追い込む、一種の追い寄せ漁法を行っていたものであろう。豊富な魚族を育む縄文時代の多摩川には、鮎やウグイ、それに大形魚の桜鱒など、追い寄せ漁法に適した沢山の魚が生息していたのである。

古い歴史を有する多摩川水系の網漁法の系譜は、その長い時の経過の中で、様々な技法を育み発展させてきた。それぞれの魚の習性を巧みに利用した数々の網漁法が、多摩川の流れの中で行われたが、魚族の捕採と言う点で、網漁法には幾つかのカテゴリーがあり、漁網の機能的な面から網漁法を区分すると、

一、網で魚を囲み捕る。この技法は「寄せ網漁」や「べら網漁」などに見られ、仕切網を用いた網漁法がある。

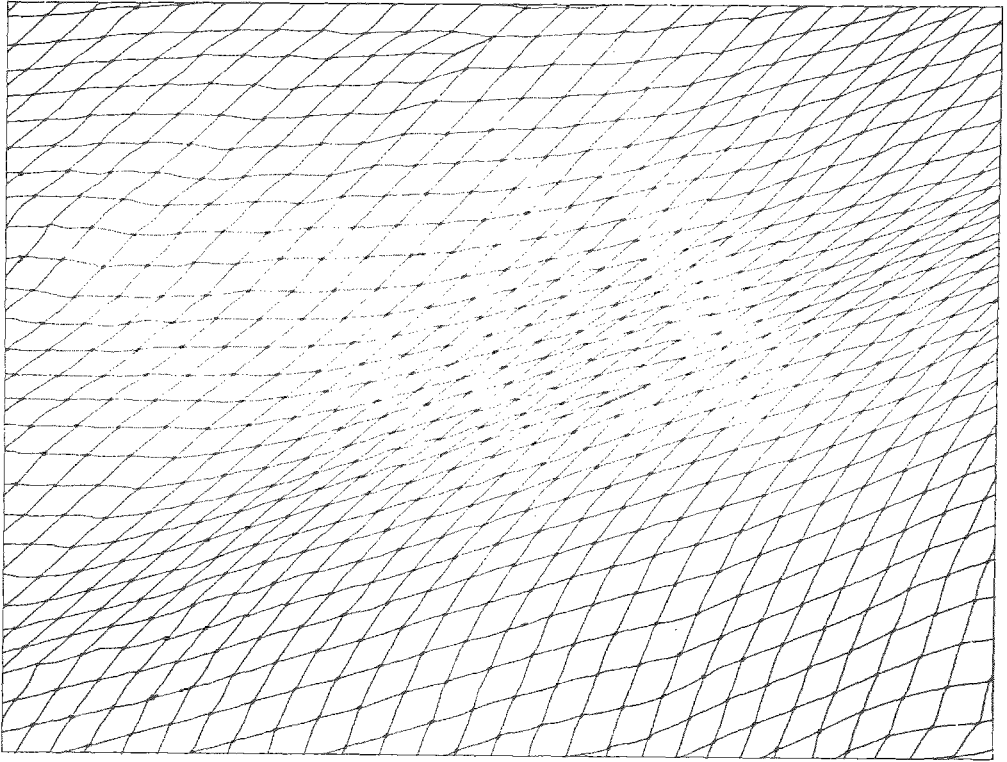
二、網に刺さる魚を捕る。この技法には「刺網漁」や「白魚刺網漁」などの刺網を用いた刺網漁法がある。

三、網で魚を掬い取る。この技法には「又手網漁」や「四つ手網漁」などの掬い網を用いた掬い網漁法がある。

四、網で魚を覆い捕る。この技法には「投網漁」など投網を用いた投網漁法がある。

などの網漁法が多摩川水系で行われていた。

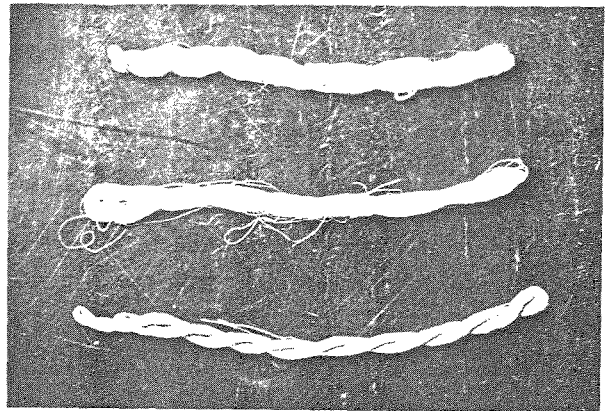
多摩川水系の網漁法は、職漁者から流域住民や子供に至るまで、多くの人たちが行っていた。簡単な掬い網を用い、細流で子鮎や泥鰌を掬い捕るのは子供の遊び漁であり、また、多人数が共同で行う「寄せ網漁」や「跳網漁」は、主に農民たちによるレクリエーションを兼ねた



漁撈であった。職漁者は「刺網漁」や「ペラ網漁」で大量の魚を捕り、「投網漁」は職漁者を含めた流域一帯の人たちが盛んに行った網漁法であった。かくして多摩川の網漁法は活況を呈し、漁法の種類は筥や釣りなどよりも多く、人びとはかつての豊饒な流れに網して、沢山の魚を捕っていた。

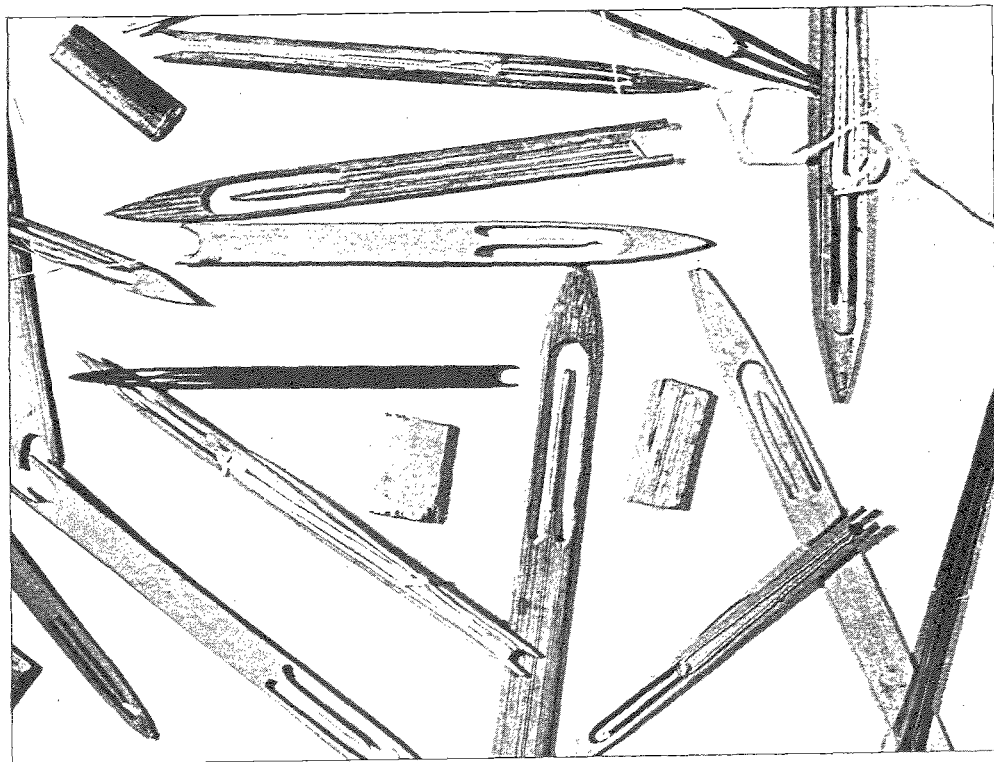
多摩川の長い漁撈の歴史の中で、時代により、また河川の変様や魚の生息状況の移り変りの下で、漁の技法は様々な消長の途を歩んできた。時の

流れの中で、網漁法も、そうした盛衰の軌跡をたどった技法も少なくない。江戸時代まで行われていた「鱒の掬い網漁」や「鮎の掬い網漁」は、明治に至って姿を消した漁法である。その逆に「ペラ網漁」は、大正末頃から多摩川で行われた漁法であり、また、九州から伝えられたとされる「カマツカ網漁」や、四国の水系よりもたらされた「投げ網漁」などは、昭和の初期以降わずか十数年間、多摩川で行われた網漁法である。また「張網漁」に至っては、戦後に行われた新しい技

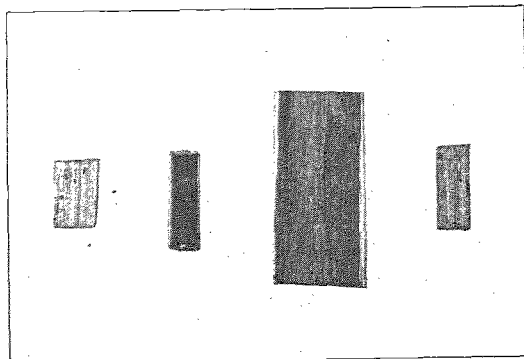


絹の撚糸。製網の材料で、漁網製作者は糸を購入するか、又は自家で繭から撚った。／青梅市郷土博物館蔵

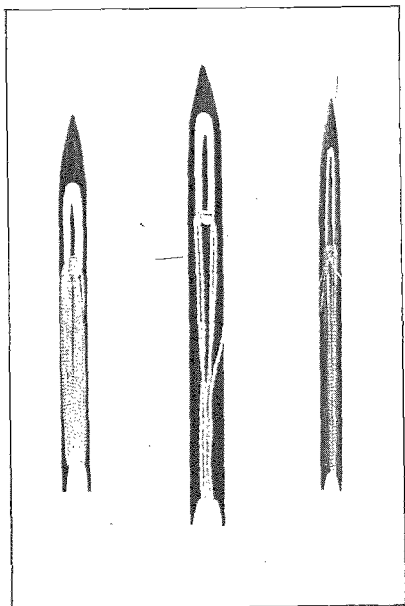
漁網の編み上げ用具、網針と桁／川辺昭吉郎蔵



桁。別に「へネ」とも言う。／川辺昭吉郎蔵

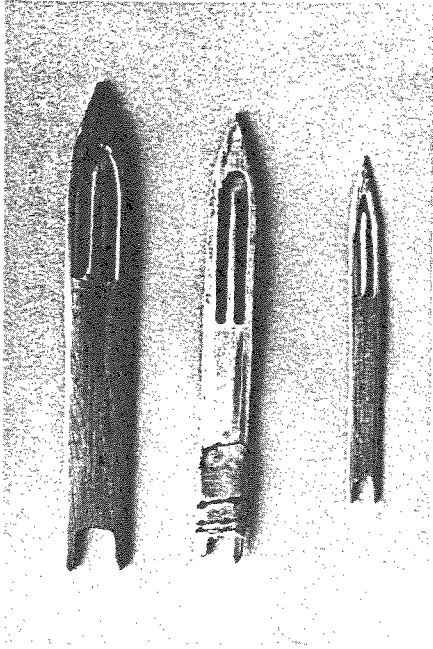


網針／川辺昭吉郎蔵

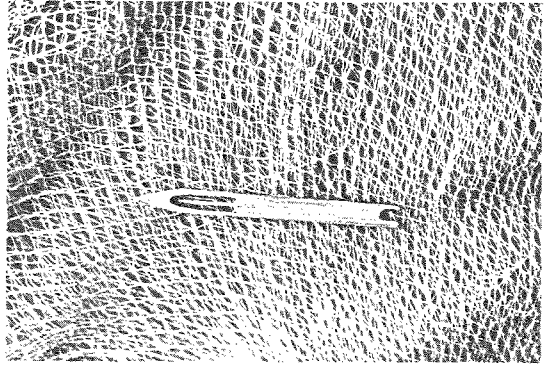


法であつた。だが現在では、こ
うした網漁法を多摩川の流れに
見ることはなく、ただ「投網漁」
だけが僅かに昔の面影を伝える
にすぎない。





網針 / 大田区立郷土博物館蔵

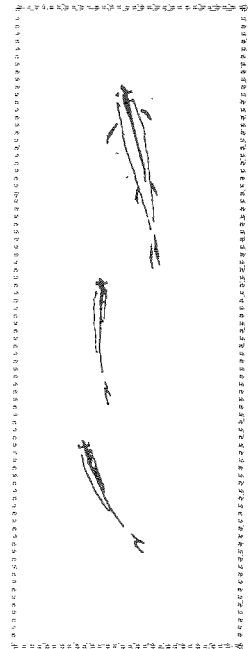
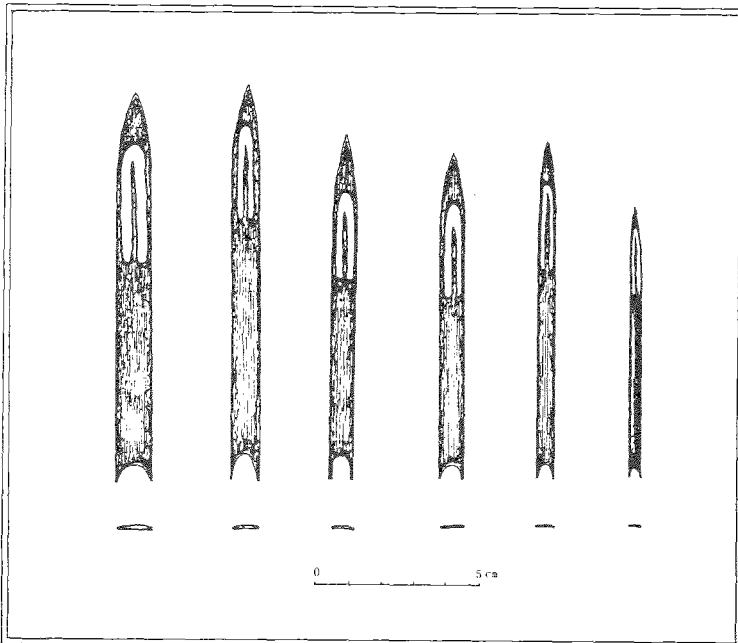


投網と網針 / 小林勝太郎蔵

漁網に塗る柿渋を入れた樽 / 埼玉県立博物館特別展『赤山柿渋展』より



網針寸法図 (川辺昭吉郎蔵)





網針を使って投網の繕いをする／小林勝太郎・日野

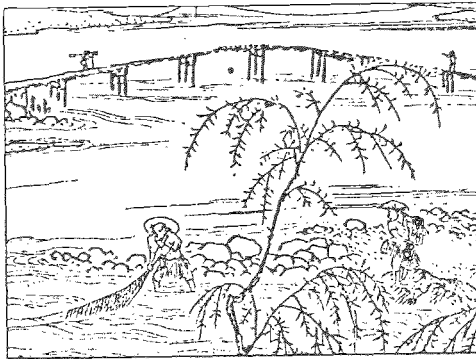
二、投網

多摩水系の投網漁は、長い歴史を有する網漁法で、現在でも行われている数少ない伝統漁法である。水中の魚を捕るのに、網の周辺に錘の付いた覆い網を素早く広げ、網を手繰り寄せて中の魚を捕り上げるが、投網は数ある多摩川の網漁法の中で、最も普遍的に行われた漁法である。

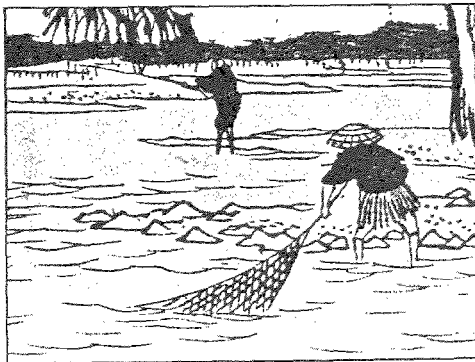
投網の優れた機能は、運用漁具としての簡便性と魚族捕採の迅速性にあり、水中に群がる魚に即刻対応できる漁具としては、投網が最も適している。漁撈水域において面的な捕採機能を発揮する投網は、運用が容易で、漁撈者は、魚の寄り場所を狙い打ちすることで漁獲効率を上げている。そうした投網の機能は、投網漁に限らず、他の漁法の

最終捕採に投網が使われ、「瀬付き」や「堰漁」、「鵜縄漁」それに「寄せ網」などで、魚の覆い捕りの機能を如何なく発揮している。

『武蔵名勝図会』（一八二三）に「唐網 此は何方にても用ゆることなり」と述べ、その頃すでに、投網の優れた機能が多くの漁撈者たちに認められ、投網漁が盛んに行われていた。また江戸時代の図絵などでは、多摩川の至る所で、投網漁を行う漁人が描かれている。そうした投網風景は、『江戸名所図会』（一八三六）の「玉川弾鮎」や「多摩川」、それに「調布玉川絵図」（一八四五）に見られ、また二代広重の「玉川の鮎と里」（一八五〇年代）にも、釣りや釜漁を行う人と共に、投網漁の様子が描かれている。当時、多摩川の投網漁は



投網漁の図絵「江戸名所図会・玉川弾鮎」



江戸時代の投網漁図／二代広重筆「玉川の鮎と里」部分



川遊び、川魚に描かれた投網。
『玉川遊漁の図』部分より。筆
者不詳



投網で捕れた鮎／昭和五八年八
月・日野地先水域「伝統漁法実
演」



多摩川の舟投網漁・大正末期／
『むかしの府中』より



大正初期の投網／『調布今
昔写真集』より

上流から下流にわたる全水域で盛んに行われていた。

多摩川流域では、一般に投網漁法を単に投網と呼ぶが、一部では「投
げ網」、「網打ち」、「網ぶち」、「打ち網」、また古くは「提網」

と称し、投網漁には陸伝いに網を打つ「徒打」と舟による「舟打ち」
とがある。また日中の投網漁を「昼投網」、一部では「ひるてん」と
も言い、夜間の投網漁を「夜投網」もしくは「夜川」、「夜網」と呼
ぶが、夜投網漁は江戸時代には禁制漁法であった。また対象魚別に投
網漁法には様々な名称があり、「山女魚投網」、「鮎投網」、「雑魚
投網」、「鯉投網」、「マルタ投網」などで、雑魚投網はウグイヤオ

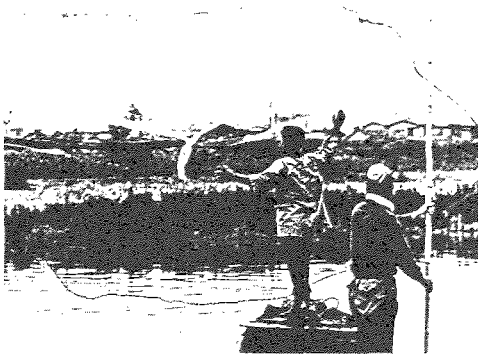
イカワを対象にした投網漁である。それに、漁撈者が、単独で投網漁
を行う場合と複数で打つのと、さらに網打ちの技法も川や魚の状況に
応じて分化し、投網漁法は変化に富んでいる。

多摩川の投網漁は、生息魚種が豊富であるために年中行われたが、
その中で漁期が明確なものもあり、特に鮎の投網漁は六月から十月ま
でに行われている。投網漁では網に入る魚を何でも捕り、水域によつ
て生息魚種も異なるが、上流からヤマメ、ウグイ、アユ、ニゴイ、オ
イカワ、コイ、フナ、モツゴ、それに汽水域ではマルタウグイやボラ
などを捕る。

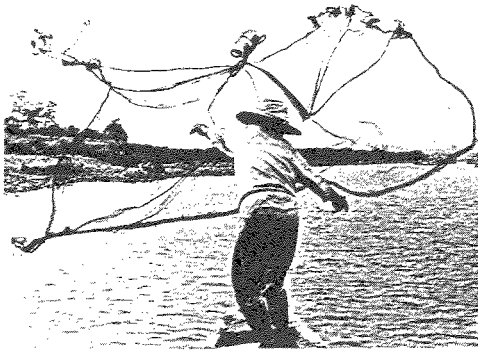
投網は、絹もしくは麻の燃り糸を、網針と桁を用いて一目一目編み上げる。投網一反を編むには数ヶ月から半年もの歳月を要し、昔は大変に貴重な漁具であった。当時、漁撈者の多くが投網を自製して用いたが、繭から糸を取って自家で紡ぐか、或いは加工した燃糸を購入して投網を編み上げた。普通、投網の底部には袋を取り付ける。漁撈者が投網を打ち、網を手繰り寄せの際、網から逃れようとする魚は袋に入るが、糸で綴られた袋の口は陥穽機能を具え、一度入った魚は袋から逃れることがない。

投網の底部に結着する鉛錘も、漁撈者が砥石を削り貫いて鑄型を作

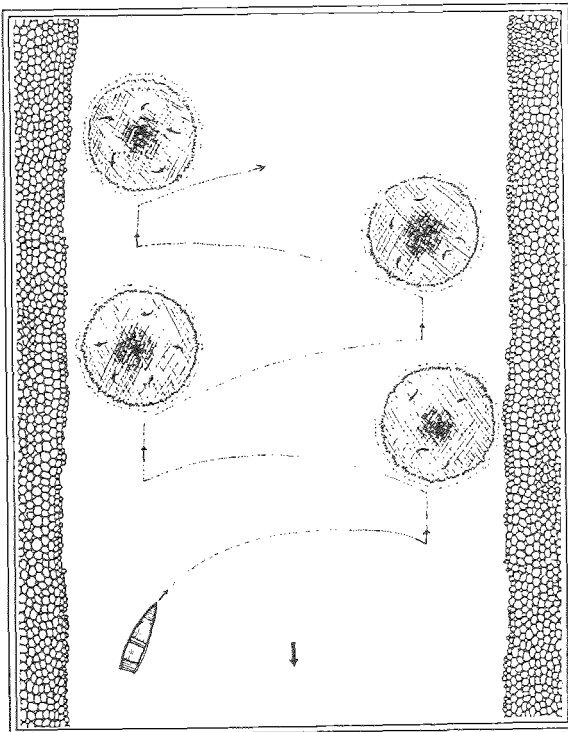
投網。調布「魚重」の子息（當時）は投網の名手であった、昭和四五〜六年／原田重久蔵



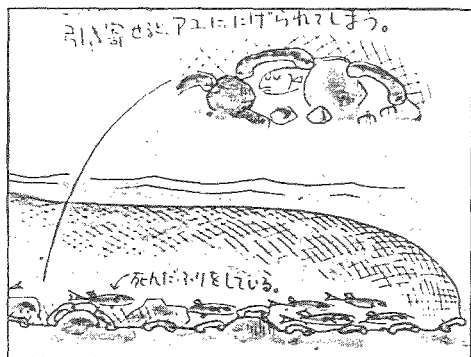
鯉投網を打つ川魚師・川辺七郎（碓）・昭和四〇年代／川辺昭吉郎蔵



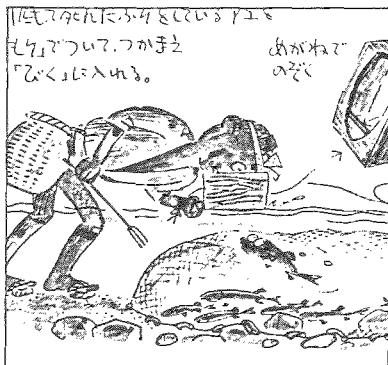
投網・迎え打ち操業図



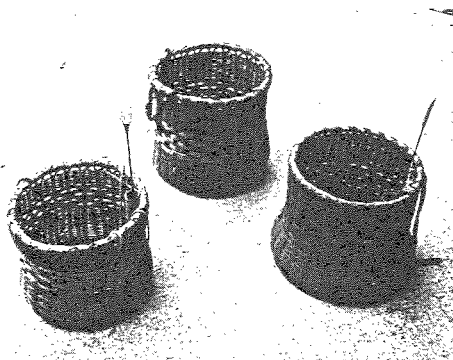
り、そこに溶かした鉛を流し込んで固めたものを用いた。投網も鮎や雑魚、それに鯉などの対象魚によつて燃り糸の太さや網目が異なり、漁撈者たちはそれぞれの目的に応じた投網を作り、網が仕上がると柿渋に浸して用いる。投網作りの工程には長い時間を要し、今日のように安価なナイロン製投網が普及する以前には、漁撈者たちは、自分が使う漁具を丹念に製作して用いていたのである。明治二十年の多摩郡漁業組合の規約には、投網の構造について述べている。「…投網 一名提網 構造ハ丈ケ四尋、丸サ十尋、網目鯨老尺ニ付廿目ヨリ十目ヲ用ヒ、鉛イヤヲ付老個十匁ヨリ十五匁ヲ用ヒ、目方老貫五百目ヨリ三貫



川底の石の間に身を潜め、逃走の機会を伺う投網の中の鮎。逃走した鮎は死んでしまっている。田谷区立郷土館蔵



網に入った鮎を小型の箱で突く。(同)

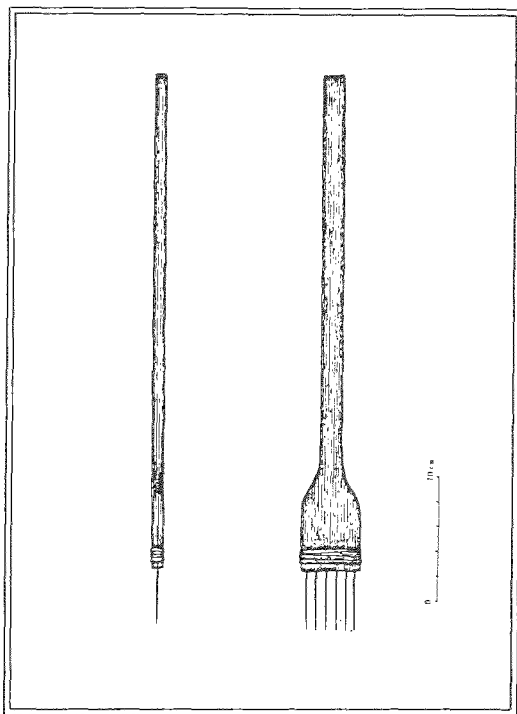


魚籠と鮎突き用の箱／調布市郷土博物館蔵

目迄」と記している。

多摩川は、昔から鮎の川として知られるが、流路延長に占める中流水域の割り合いが比較的長い河川である。従って、流れに生息する鮎の数も多く、職業者をはじめ流域の人たちは、様々な漁法で鮎を捕ってきたが、その中で鮎を対象とする投網漁

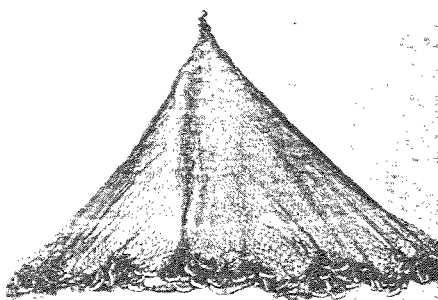
投網漁に用いる鮎突き用の箱
(川辺昭吉郎聞書より作図)



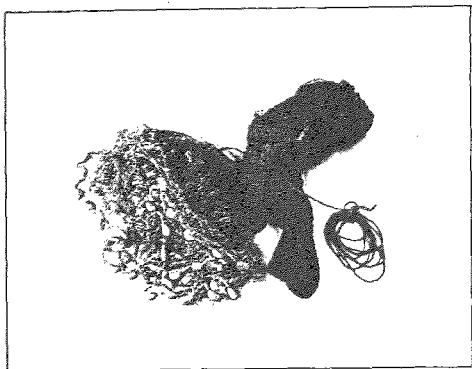
は、最も盛んに行われた漁法である。香味に優れた鮎は他の川魚より貴ばれ、また市場価値も高く、多摩川水系における鮎捕りの投網技法は多様な分化を見せている。

鮎の投網漁は昼も夜も行い、また徒打ちも舟打ちも行われた。鮎は俊敏な魚で、投網を打つと、網に入った鮎は素早く石の間に身を潜めて動かず、漁撈者が投網を手繰り寄せる間に、隙を伺って、錘と川石とのわずかな隙間を抜けてしまう。そうした鮎の行動習性を知る漁撈者は、投網を打つと、箱眼鏡を使って網の中に鮎がいるかどうかを確かめ、石の間に鮎が潜んでいれば、鮎突き用の細い箱を用いて網の上から鮎を刺し捕る。

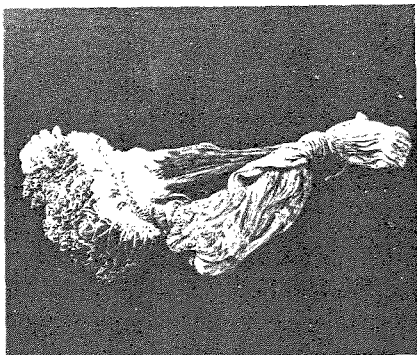
マルタ投網／川辺昭吉郎蔵



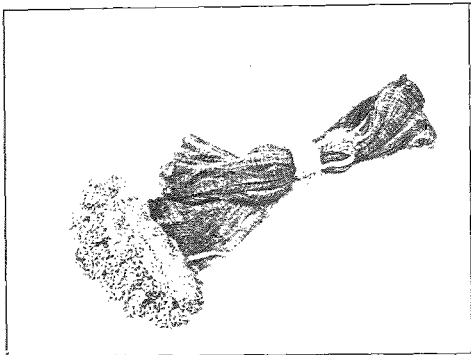
グミ型鍾付きの投網／立川市教育委員会蔵



投網・鎖型鍾／立川市教育委員会蔵

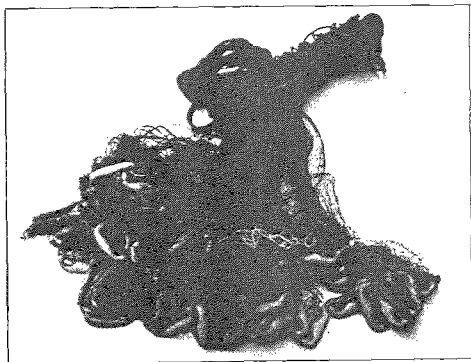


投網・鎖型鍾／立川市教育委員会蔵



昼の舟打ちでは、普通、一艘の舟に網手と漕ぎ手の二人で行うことが多い、両者の呼吸が合わないと、漁果に大きな差が生じることになる。昼投網の中で、大勢の漁撈者が共同で投網漁を行う「追川」と言う漁法があるが、これは舟打ちにも徒打ちにも見られる壮観な投網漁法である。追川は、十名前後の網手が二た手に分かれ、徒打ちの場合には、川の岸寄りに向い合つて並び、下流から次々に投網を打ち、また舟打ちでも、舟を二分してそれぞれ川の岸寄りに並び、下手より順次に投網を打つ。下手より第一段の投網が開き、次々と上手の網が空を切り、水面に丸い大きな濺沫を散らしての追川投網漁は川漁の華であり、かつては漁のシヨウとして明治中期から昭和の初期にかけて

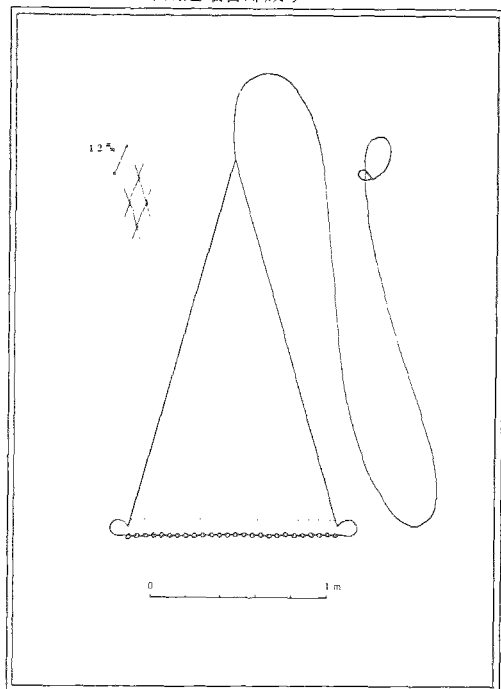
投網・蛭型鍾／青梅市郷土博物館蔵



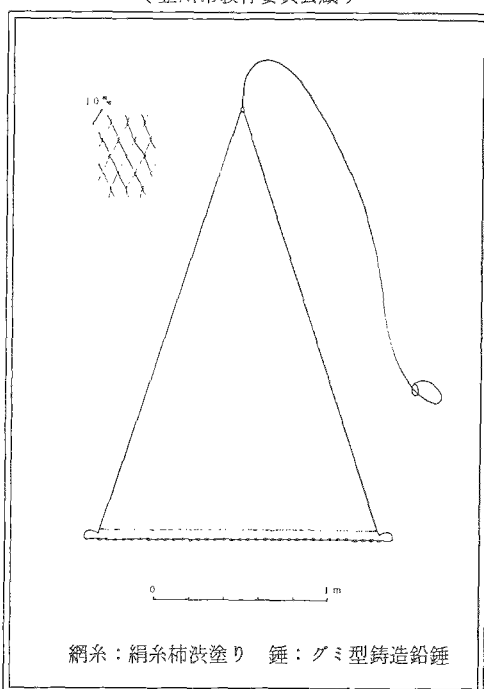
ナイロン製投網・鎖型鍾。この型式の投網は現在でも広く使われている。／青梅市郷土博物館蔵



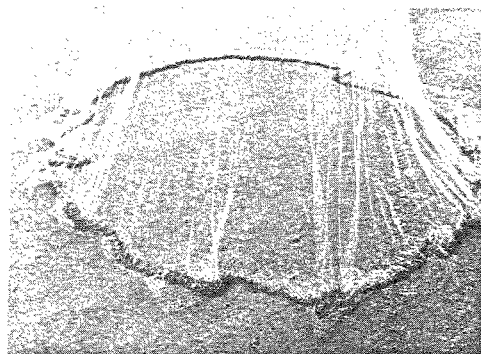
鎖型錘付ナイロン製投網寸法略図
(川辺昭吉郎蔵)



グミ型錘付投網寸法略図
(立川市教育委員会蔵)



網糸：絹糸柿渋塗り 錘：グミ型鋳造鉛錘



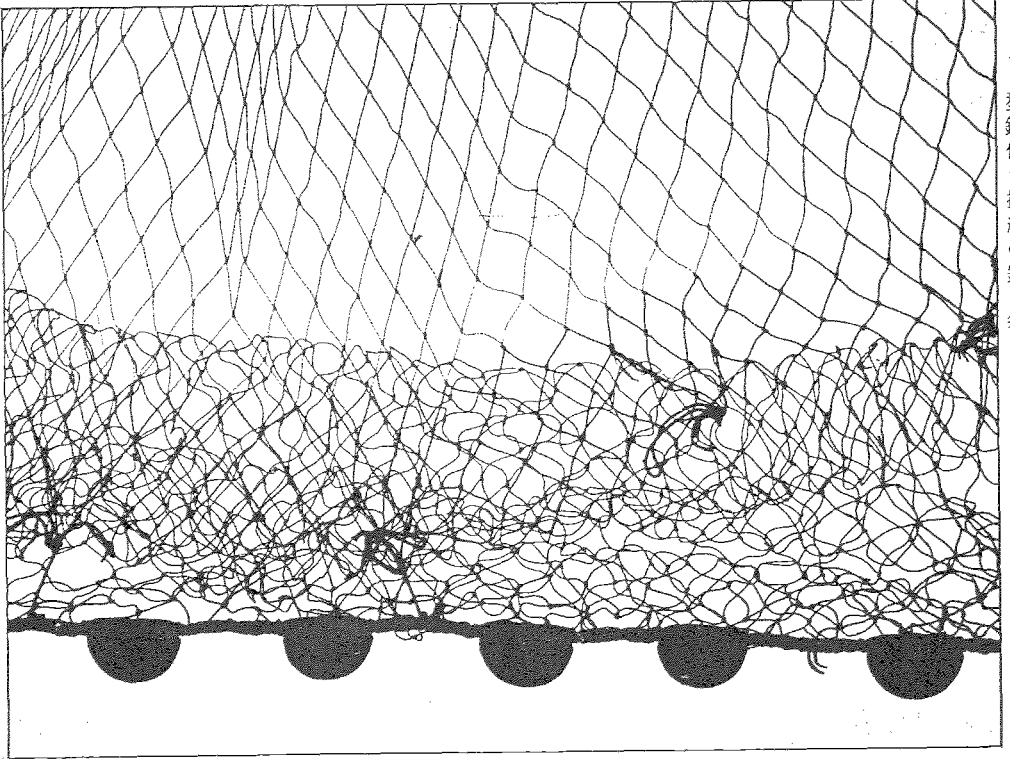
鎖型錘付ナイロン製投網／川
辺昭吉郎蔵

右から交互に網打ちを行い、散る魚を上流に追い寄せながら魚をする。また、水面下の魚影を確認しながら投網を打つ技法が「見打ち」で、逆に水中が見えない所で、およその見当をつけて網を打つことを「めっぽう」と言った。鮎やウグイは、淵から瀬に移行する、所謂「かけ上り」にすることが多く、漁撈者はこうした場所に投網を打つが、投網巧者と言われる人たちは、いずれも網の錘が直線を描いて、水面を叩きつける様に打っている。錘や網が空中に放物線を描く様では、その些かな時間に魚が散ってしまう。また沈床や蛇籠回りなど障害物の多い場所では、その地形に合わせて網の開きを加減し、自由に網を駆使して漁を行った。

て、鵜飼いととも、大勢の川遊び客の前で行われたこともある。追川は、通常流れに沿って打つが、川の状況次第では横列で投網を打つこともあり、追川では、先の投網が魚を追う所を順次打ち並べて捕採するという、大変に効果的な技法である。

一艘の舟から行う投網漁では「向え打ち」があり、漕ぎ手は上流に向ってジグザグに舟を操り、それぞれの岸寄りに舟が進んだ時に網手が投網を打つ。こうして川の左

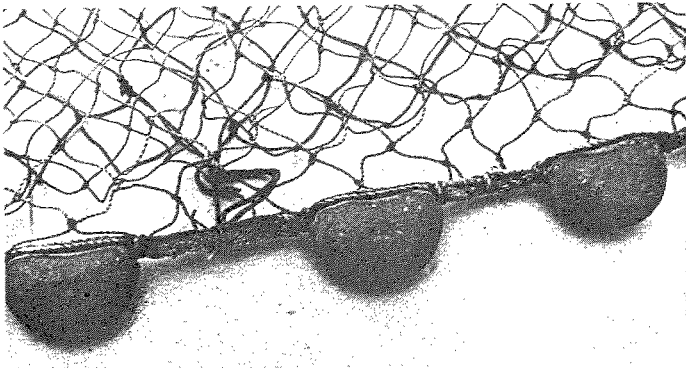
グミ型錘付き投網の錘と袋・シルエット



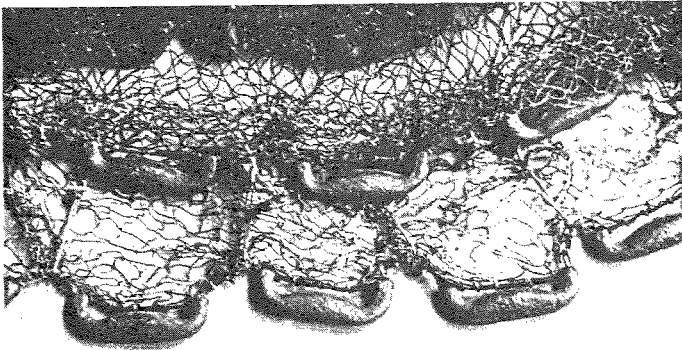
ウグイやオイカワなどを捕る「雑魚投網」は、鮎投網に準じた技法であるが、現在でも多摩川で行われている。



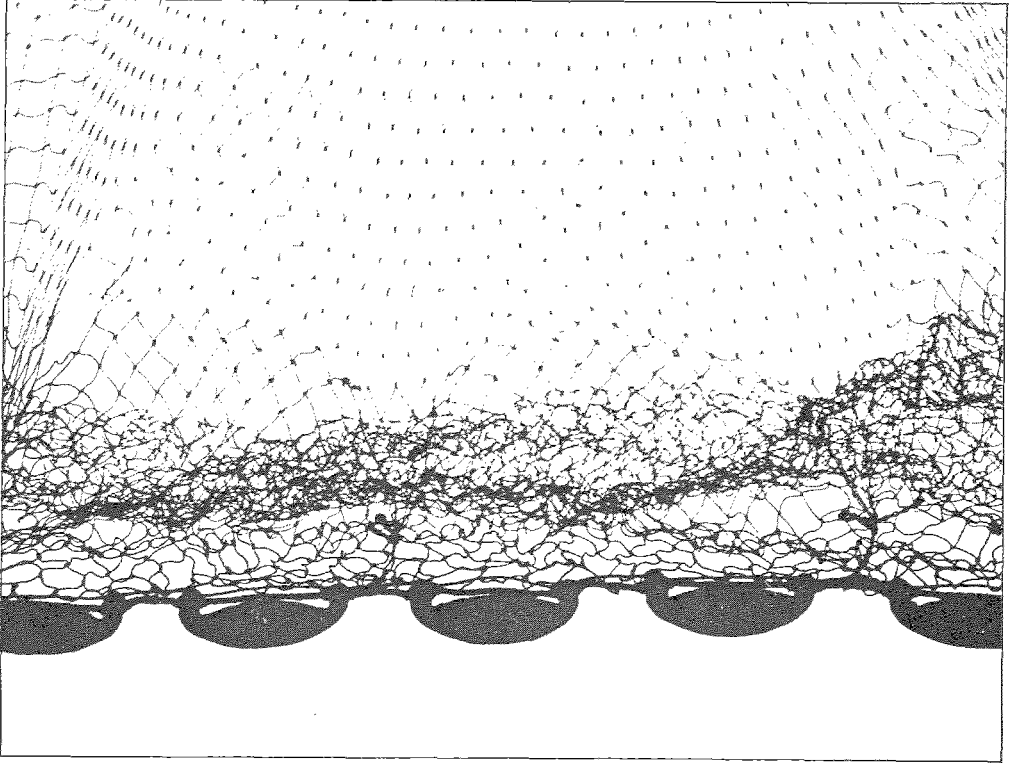
グミ型錘



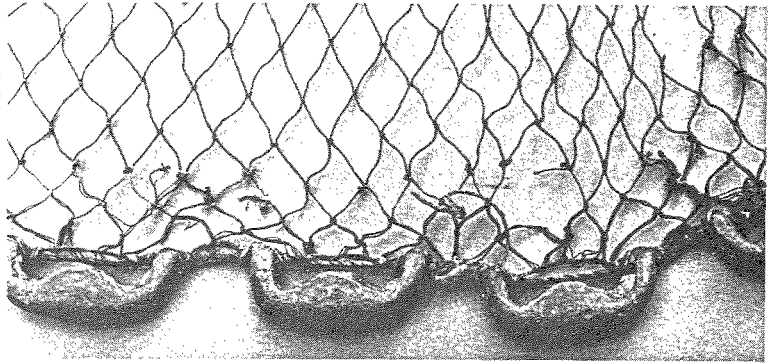
投網の蛭型錘



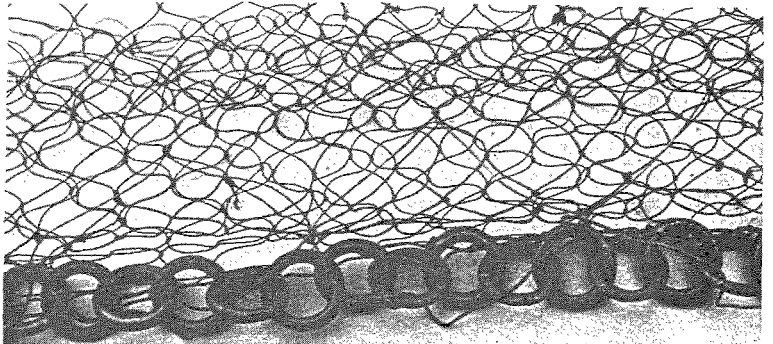
蛭型錘周辺部のシルネット



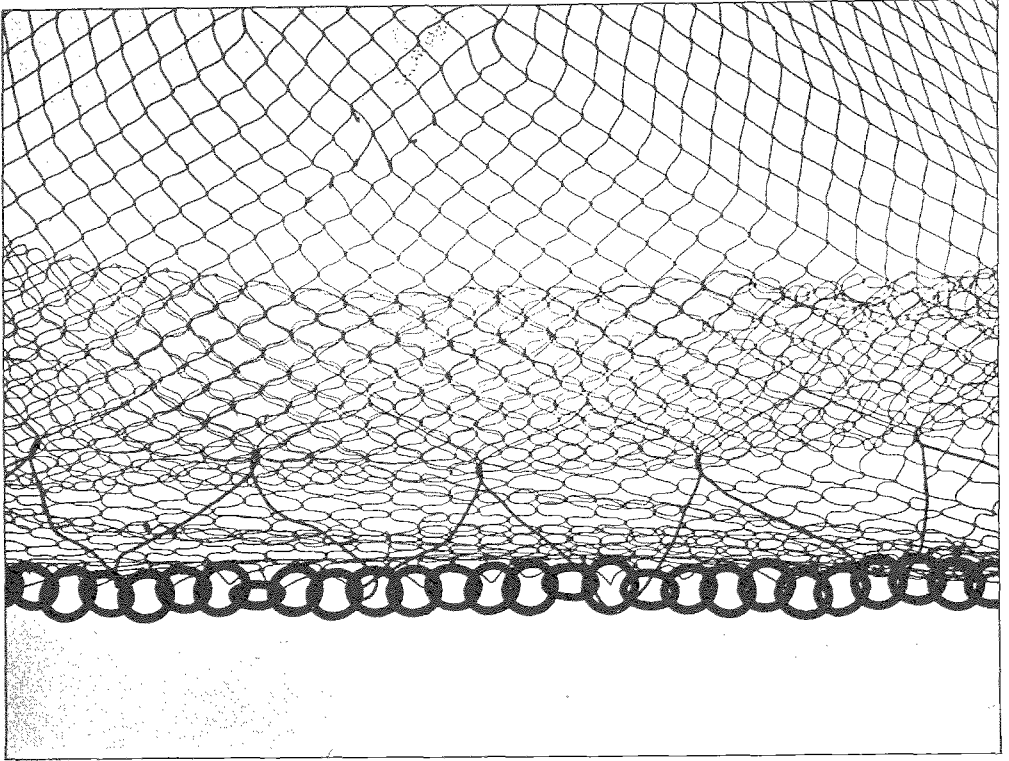
無袋投網の蛭型錘／青梅市郷土博物館蔵



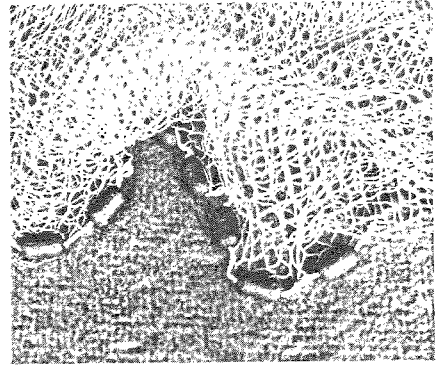
鎖型錘／川辺昭吉郎蔵



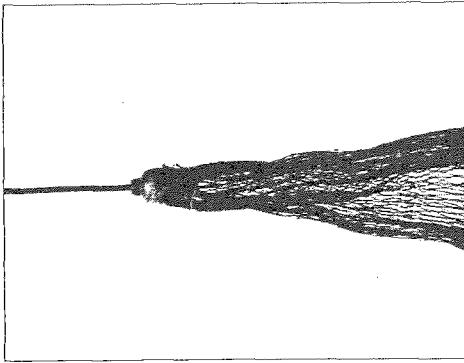
鎖型錘周辺部のシルネット



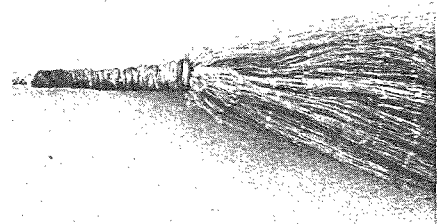
短棒型の錘／小林勝太郎蔵



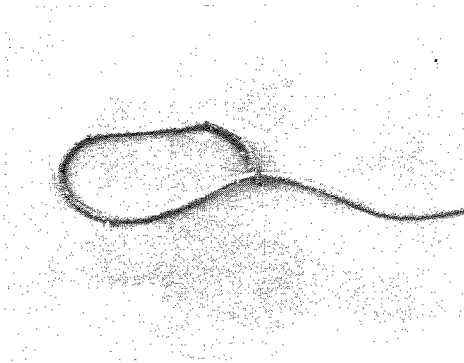
投網の竜頭は象牙製。こうした所に川漁師の心意気が同える。
／立川市教育委員会蔵



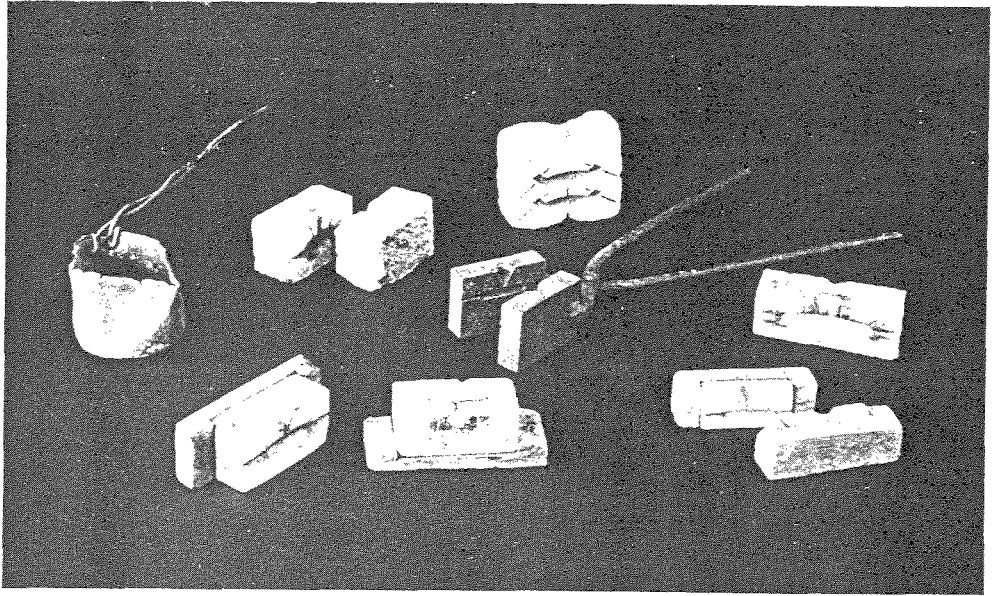
投網の竜頭／川辺昭吉郎蔵



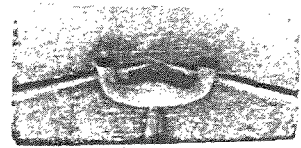
投網の手縄



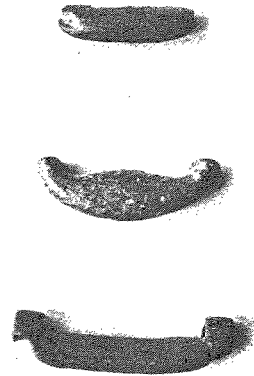
漁網用の錘を作る用具。多摩川流域では、錘のことを「や」と呼んでいる。／鈴木由太郎蔵



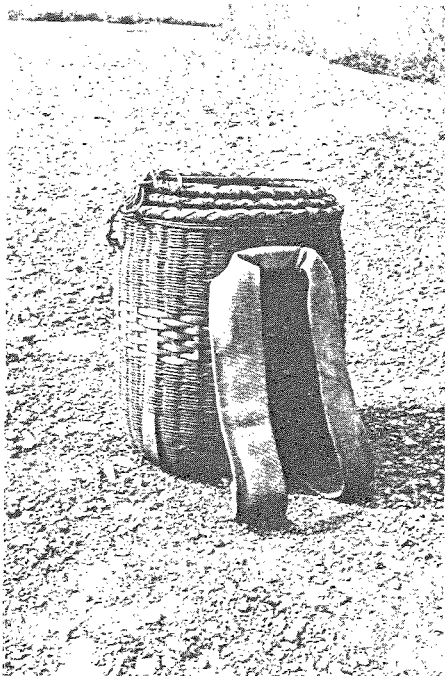
蛭型錘用の鋳型。多摩川流域では「や型」と呼んでいる。／鈴木由太郎蔵

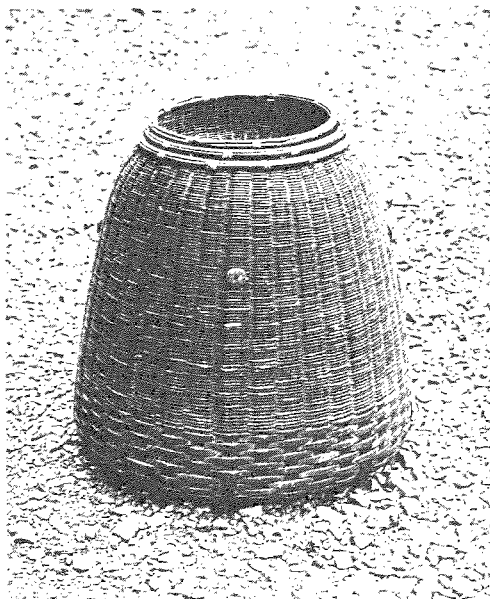


錘。上は棒型錘（鉛製）、中は蛭型錘（鉛製）、下は蛭型錘（鉄製）。／鈴木由太郎蔵

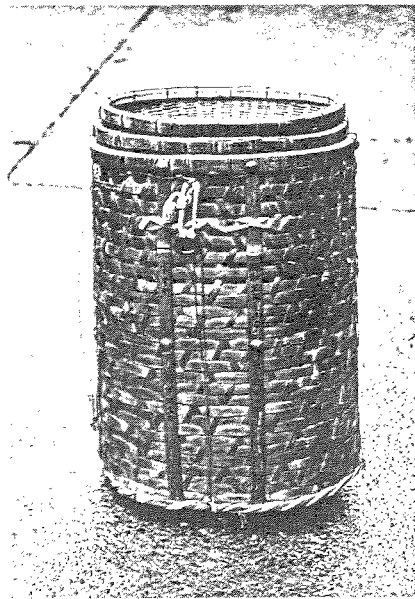


投網打ち用の背負い籠。投網入れと魚籠が兼用になっている。／府中市立郷土館蔵

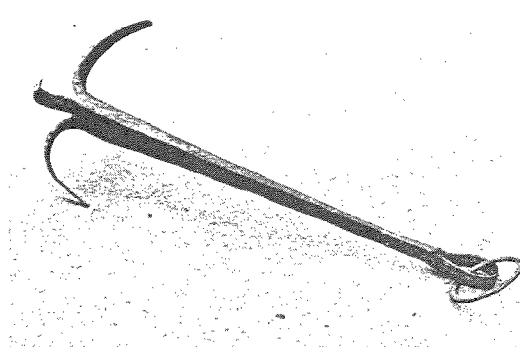




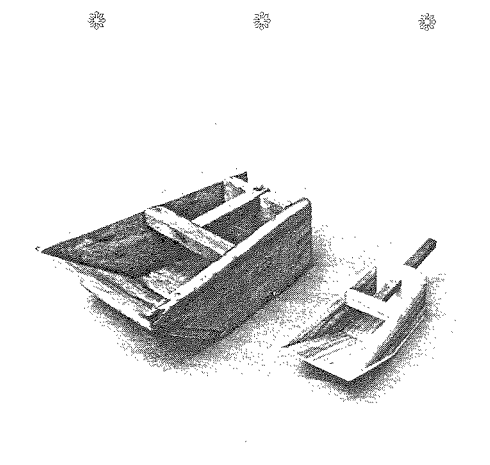
投網籠／青梅市郷土博物館蔵



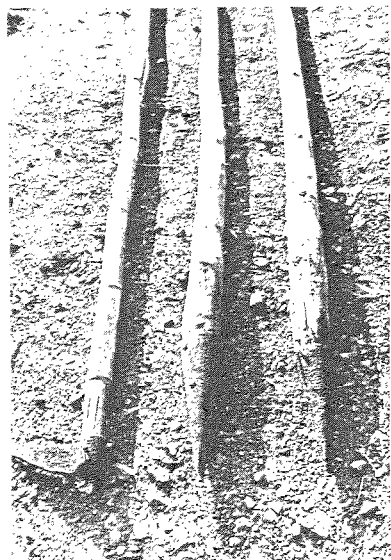
投網籠／青梅市郷土博物館蔵



舟用の錨／川辺昭吉郎蔵



アカ汲み。舟に溜った水をかき出す用具。／大田区立郷土博物館蔵



舟用具。右二本は丸棒の棹尻。左の溝口は置釣、釜などの引上げに使う。／川辺昭吉郎蔵

三、山女魚投網

多摩川の上流や源流では、投網を用いて岩魚や山女魚を捕っていた。特に山女魚は、開けた流れにも生息し、こうした場所で瀬にいる魚に網を打つが、俊敏で視力の優れた山女魚を捕るには、下流より静かに近づき、魚を散らさぬように素早く投網を打つ。

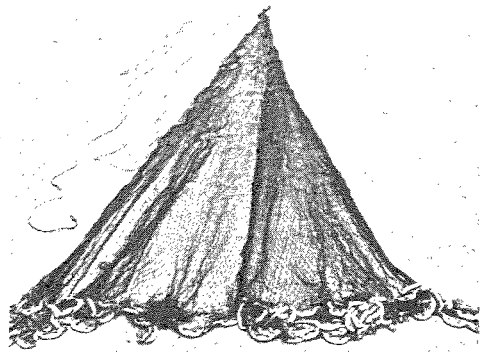
天保十三年（一八四二）に書かれた『玉川沂源日記』によると、多摩川の最上流に当る丹波川での山女魚投網漁が紹介されている。

「…ここは山蔭なれども、来し道のやうなる谷川ならで、すこぶる打開けて、河原は曠谿にて、さながら青梅あたりの川原に似たり。美景の川原に延まうけて、石を竈に茶を物す。…漁夫とともに網打てりやがて山目魚を漁れり。家より酒肴おこせつ。かたみに呑み交はしけるに、漁れる魚とみに調じて食ろひたる味はひ、いえばさらなり。…」と記し、著者の山田早苗が、丹波川の川原で捕れたての山女魚の饗応にあずかった事を述べている。

四、鯉投網、マルタ投網

多摩川水系に生息する魚の中で、鯉とマルタウグイは最も大きな魚種であるが、中流から下流では、これを捕る投網漁が行われた。

四月中旬から五月にかけて、マルタウグイが産卵のために河口から遡る時期になると、多摩川下流でマルタの投網漁が行われる。砧辺り



鯉投網／立川市教育委員会蔵



鯉投網／立川市教育委員会蔵

の職漁者が、大型の投網を使って舟で行うマルタ投網漁は、対象が大形魚であるだけに中々豪快である。

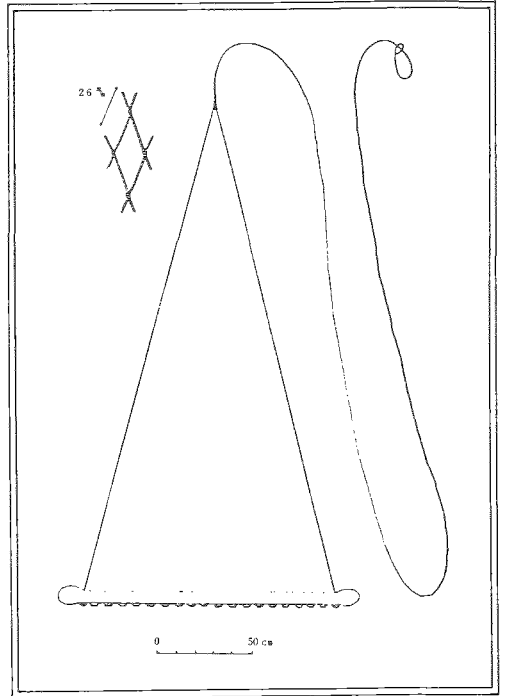
マルタ投網は、麻の撚糸で編んだ網目の粗い柿波塗りの投網で、蛭型の鉛錘も重いものが使われている。マルタ投網は普通の投網よりも重く、網目の粗い扱いにくい投網であった。

マルタウグイの季節になると、



鯉投網の錘周辺部シルエット

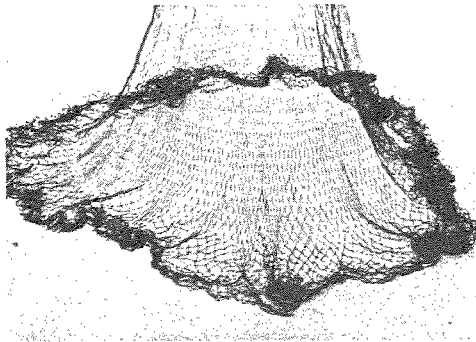
鯉投網寸法略図
(立川市教育委員会蔵)



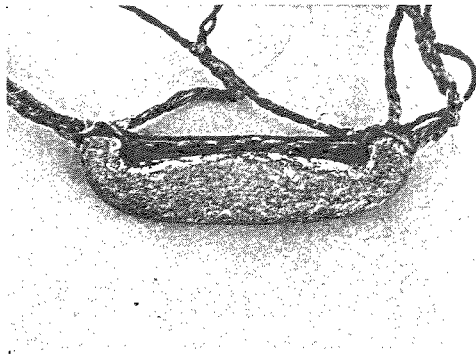
マルタ投網打ちの模倣操作／実演者・川辺昭吉郎(碇)



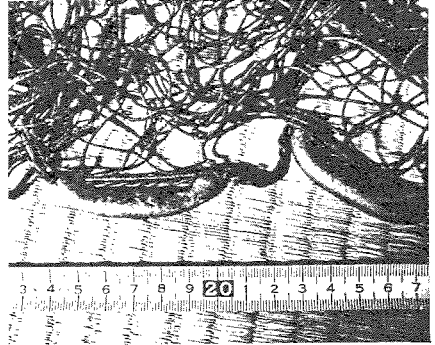
マルタ投網



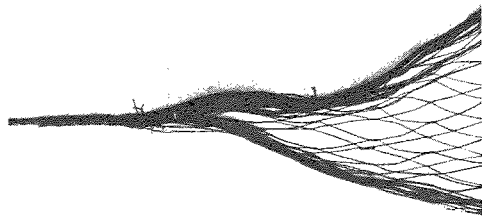
マルタ投網の蛭型鍔



大きな鍔、太目の麻然糸、マルタ投網は多摩川水系では最も大型の投網である。

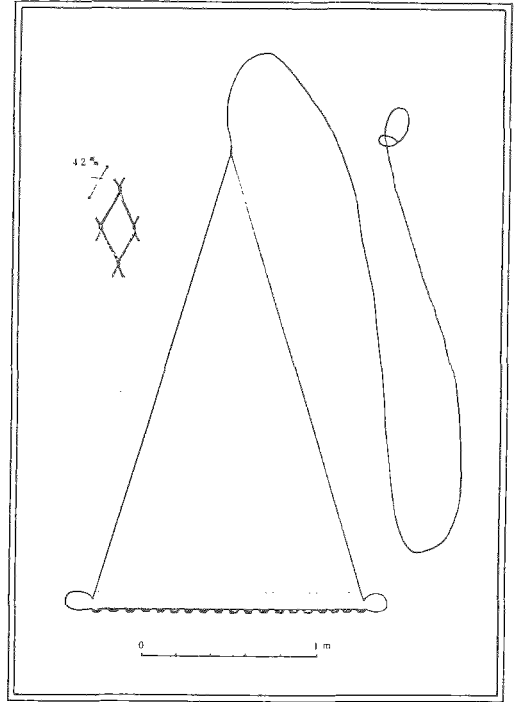


マルタ投網の竜頭



流れに舟を出して魚影を追い、水中に大形魚の姿を見付けると間髪を入れず投網を打つが、魚の進む一間以上先を狙って打たないと、魚は網に入らない。二尺近い魚が網の中で暴れ回り、捕り上げの豪快さは他の投網漁に無いものがあり、職漁者たちは、こうした大型投網漁の魅力に引かれて、マルタウグイが遡る季節になると、マルタ投網漁

マルタ投網寸法略図
(川辺昭吉郎蔵)

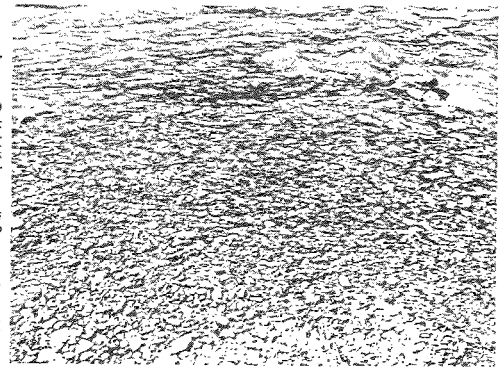


を行っていた。

鯉の投網漁も、マルタの場合と同様の大型投網を用いて、多摩川中流から下流にかけて行われ、マルタ投網漁が春の一時期であるのに対し、鯉投網漁は年中行われた。鯉投網は大形魚を捕るのに相応しい粗目の大型網で、蛭型の鉛錘も重いのが使われているが、網は絹糸編みで、マルタ投網と同様に柿渋を塗って用いた。

五、瀬付き

瀬付きは、ウグイの産卵期に、流水の一部に人工的な産床を作り、そこに集まる魚を捕らえる漁法である。瀬付き漁が行われた区域は、多摩川本流では青梅から砦までの広汎な水域で、特に日野、立川、府



ウグイの天然付き場。川底に礫のある流れに魚が寄り集り、産卵する。／青梅地先水域・昭和五六年五月

ルタウグイも捕っていた。

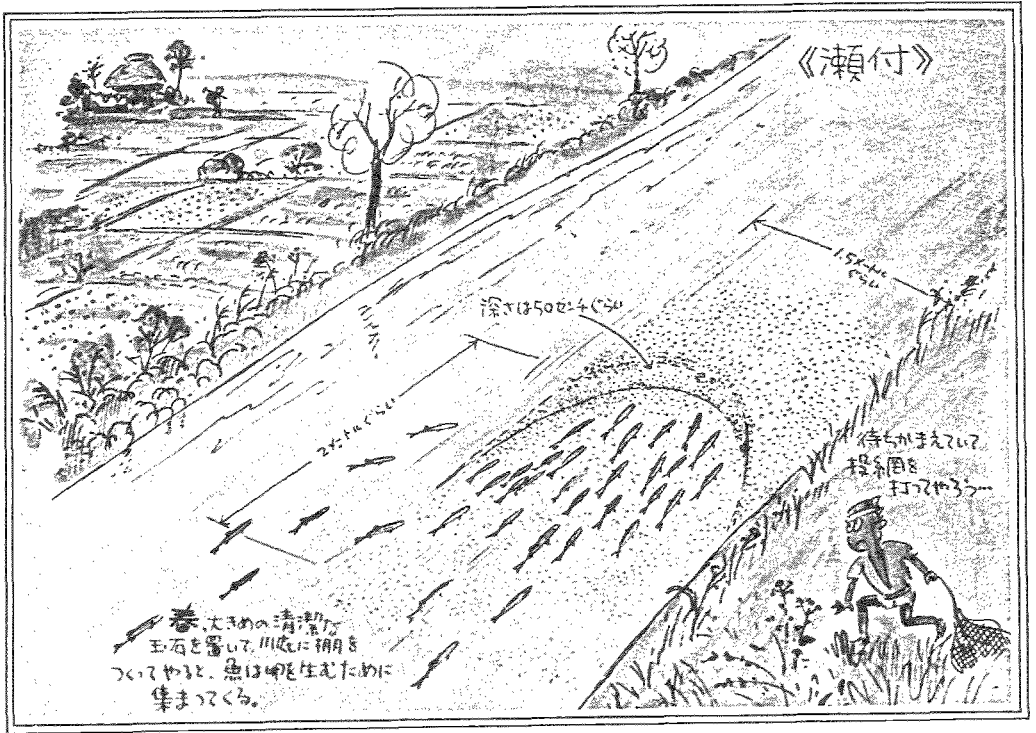
瀬付き漁は、地域によって様々な名称がある。一般に瀬付きと呼ばれるが、地域別の呼称について見ると、

「クキバヤ漁」、「ヨリオケ」―青梅。「クキアミ」―羽村。「ハヤのクキヨセ」―昭島。「ハヤヨセ」―戸倉・南秋川。「クキ漁」―立川・日野。「付きで」―立川・日野・稲城。「クキデ」―稲城。「ツキバヤ」、「ツキバヤとり」、「ツキッパ」―調布。「瀬付け」―世田谷などの呼び名があるが、いづれも漁法の内容には変りない。

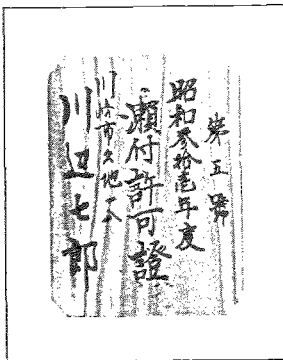
多摩川水系ではウグイをハヤと呼び、産卵期のハヤを「ツキバヤ」

中などの中流部が盛んで、また、支流の秋川や浅川でも瀬付き漁が行われていた。

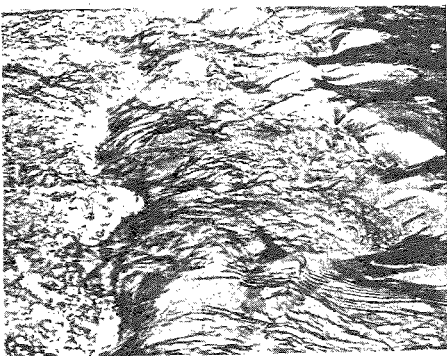
瀬付きは、三月下旬から五月の初旬にかけて、多摩川の各水域で行われ、季節につれて、漁場は毎年下流から順次上流に移るが、流域にコブシの花が咲く頃から始まり、山桜の開花期には瀬付き漁が最も盛んになる。一般にはウグイ捕りの漁であるが、砦や菅などの地先水域では、この頃になると、海からマルタウグイが産卵のため遡上するので、ウグイに混つてマ



『瀬付き漁法説明パネル』／世田谷区立郷土博物館蔵



瀬付漁業の鑑札／川辺昭吉郎蔵

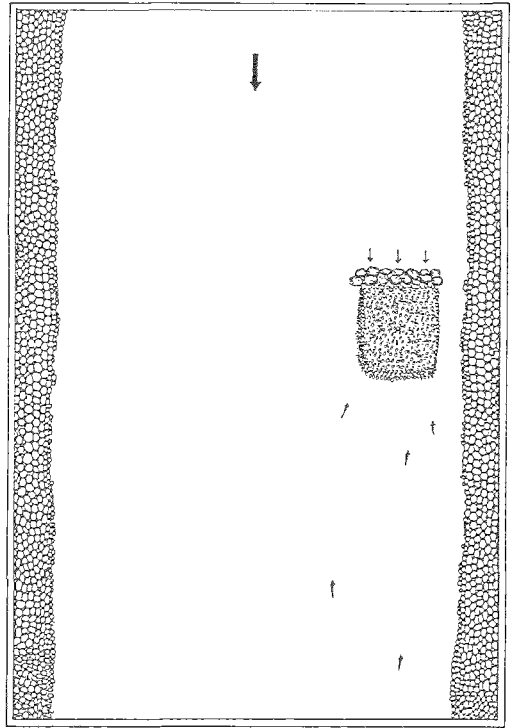


流れに頭石大の石を積み並べ、勢いが増した川水が落ち込む下手がウグイの人工産床で、この流れの状態を「ドンドン」と言う。／青梅地先の多摩川、昭和五八年五月

もしくは「ツキッパヤ」、「クキッパヤ」とも言う。特に雄パヤはこの頃になると、体表に顕著な婚姻色を呈し赤味がさしてくる。そして、産卵のために流れの緩い瀬を求め、川底に綺麗な礫のある場所に寄り集まって産卵する。職漁者はこれを「天然ツキ」と呼び、雌雄のハヤが真黒に群れて塊り、瀬の水面は魚で盛り上る。そこへ投網を打ってハヤを捕る事もあり、あまり魚が入りすぎて、どうにも網を手繰れなかつたという話もあり、とにかくハヤの瀬付きはすさまじい。

ハヤの天然ツキに対して、瀬付き漁法は、昔から、多摩川の職漁者が流れに人工的な産床を設け、そこに寄るツキパヤを投網で捕るが、

瀬付き漁平面図

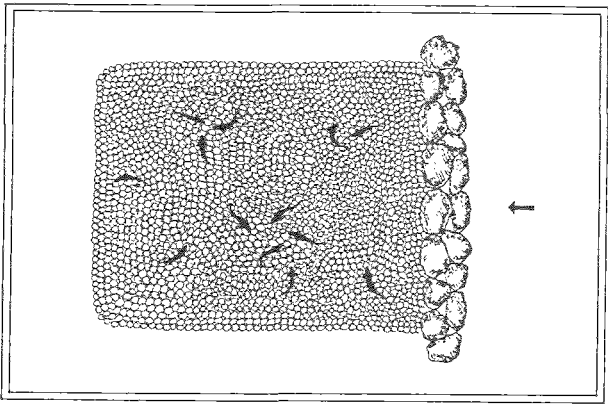


産卵床の作り方に微妙な技術を要し、また寄り集まったクキバヤを捕るためにも、独特な投網技法がある。それ故、瀬付き漁を行うのは専ら職漁者で、彼等の中でも、瀬付き漁に長じた者だけが行う難しい漁法とされていた。

ハヤの産卵習性を利用した瀬付きは、まず産床作りから始めるが、漁場は流れの比較的緩い、水深二尺前後の瀬を選ぶ。様々な川相の中で、クキバヤが沢山寄る様な場所は、当時の多摩川といえども、そうざらにあるものではない。

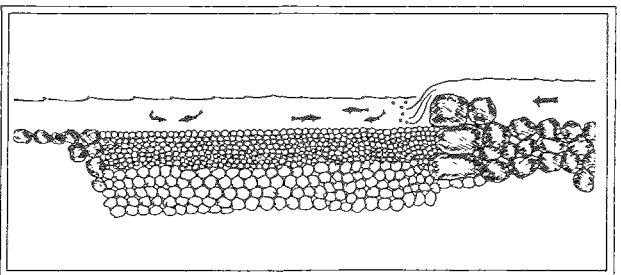
瀬付き漁を行う職漁者にとって、場所の選定は大変に重要で、皆が
良い漁場に目を付けるが、前年の暮れに川の中に杭を一本打った者が、

瀬付き場平面図



綺麗に敷きつめた礫の人工産床に魚が
集まり、やがて産卵行動に移る。

瀬付き場断面図

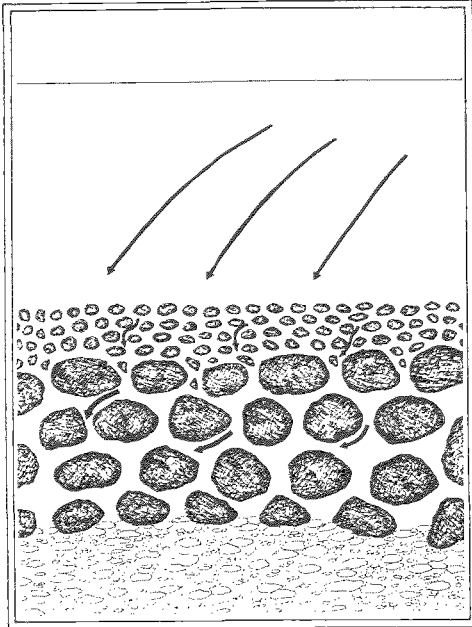


人工産床には、河原で採集した
た大小の石を選別して敷きつ
める。流れが産床を抜けてい

翌年の春になって、その場所で瀬付き漁の権利を取得する。これは職
漁者仲間の長年の慣行漁場権であり、そうした川漁師の仁義は、多摩
川で瀬付きが行われた昭和二十五年頃まで守られていた。川の或る場
所に木杭を一本打ち込むことで、漁場の先取特権を設定し、他の職漁
者もそれを認める川仲間の慣習は、瀬付き漁に限らず、もじによる鮎
捕り漁法の「瀬張」にも見られる。

多摩川の流域にユブシが白い花をつける頃になると、昨年暮れに

瀬付き場の構造断面と水の流れ



酸素を十分に含んだ流れが礫を洗い、大石の間を通して抜ける。ウグイの人工産床は、産卵の最適な条件を具えている。

杭を打った場所で、職漁者たちはハヤの人工産卵床作りにとりかかる。この場所を「付き場」と呼ぶが、他にも「クキバ」（青梅）、「瀬付け場」（調布）、「ツキデ」、「クキデ」（以上稲城）とも言う。

付き場は川床を二尺ほど掘り下げ、埋まった石や砂礫を取り除き、川原に露呈した石や礫を集め、大きさを選別したものをそこに投入する。ツキバヤの卵は粘性性の沈性卵で、直径一寸ほどの表面が粗い礫に産みつけられ、水垢の付いた礫には産卵しない。そのために漁撈者は陸の礫を使うが、川原を掘り起こしてツキバヤの好む礫を揃える作業は、川床掘りとともに可成りの重労働である。

先きに掘り起こした川床に、初めは子供の頭大の石を敷いて徐々に石を小さくして、最後に、産床となる直径一寸程の礫を敷きつめる。

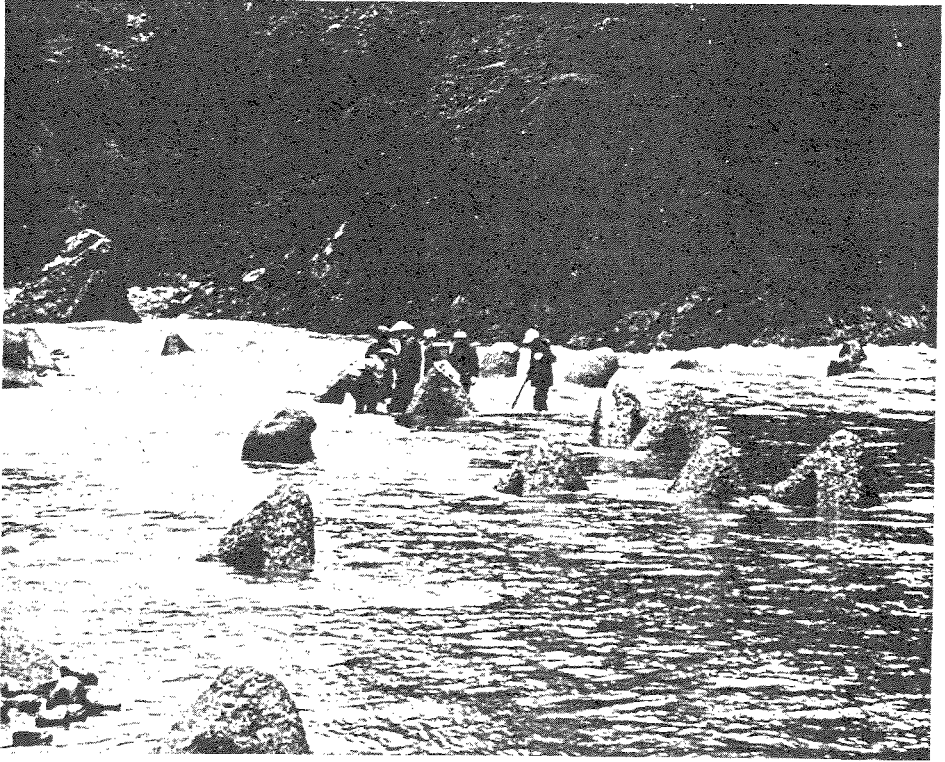
同時に、その場所の上流に流れと直角に大石を並べ、水流が勢いよく産卵床に当たる様にする。こうすると、水勢が礫の間を流って川床を抜け、水は付き場に滞留することがない。産床は常に溶存酸素の多い上流からの流水に触れて、絶えず新鮮な水に洗われる。

流れに直角に並べられた大石に当たった川水が、白泡をけたてて産床に散り、礫の隙間に吸い込まれていく。大石の並びを地方によって「石の堰」とも「アゴ」とも言い、またその流れの状態を多摩川中流では「ドンドン」と呼び、このドンドンの加減に微妙な技術があり、旨くできていないとクキバヤの寄りが思わしくない。

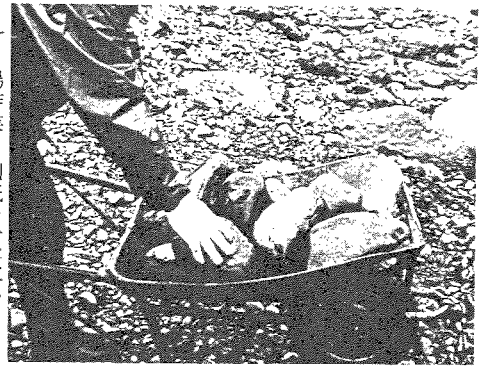
付き場が完成すると、漁撈者は上流から木の葉を流して水の具合を見る。流れた葉がドンドンの水の勢いで回転し、礫の上に吸い付く様に水が流れる様であれば、あとはクキバヤの寄りを待つばかりになる。

水深が一尺五寸から二尺ほどの付き場は、清冽な流れを通して、川底の礫の一つ一つがはっきりと見える。やがて産床に魚影が横切り、次第にその数を増して行く。産床には初め雄バヤが現れると言うが、群来するクキバヤは、やがて真黒な塊りとなって付き場を覆い、水面が沸き立つように水しぶきを散らす。

付き場から少し離れた位置で、魚の寄り具合を見守る漁撈者は、頃合いを見計らって下流から投網を持って近づき、間髪を入れず網を打ち下ろす。一坪ほどの付き場に群がるハヤは一網打尽となり、中に入った魚の重みで網が上らないこともある。



付き場作業1・現在、多摩川水系では、瀬付き漁は行われていないが、ウグイの増殖を助成するために、かつての付き場作りの技法により、奥多摩漁業協同組合員の手で毎年行われている。／青梅地先水域・昭和五八年五月



付き場作業2・川底を一米位に掘り、六〇〜七〇㎝程度の厚さに大石を敷き積む。



付き場作業3・大石の運搬

瀬付き漁における投網打ちの要領は、普通の川打ちの場合と異なり、広く打つ必要はない。一間四方に満たない小場所であるが、寄った魚を逃がさぬ様に打ち捕るには、正確に素早く網を打たねばならない。投網が空中に放物線を描くようでは、その間に魚は散ってしまう。狭い範囲を直線的に、水面に叩きつける要領で投網を打つのが、瀬付き漁のコツとされている。こうしたクキバヤを捕るのに、浅川などでは底を抜いた背負い籠を素早くかぶせ、中の魚を手網で掬う方法も行われていた。

瀬付き漁では、川水が澄んだ日中は魚の寄りが思わしくなく、夕方から夜明けにかけて、クキバヤが群集する。特に川水が少し濁り気味

の、職漁者が俗に言う「柳つ葉」の水況になると、魚は盛んに集まってくる。川が柳つ葉になると、途端に瀬付き漁は忙しくなる。抱卵したハヤが捕っても捕っても付き場に集まり、それを捕る職漁者たちは、昼も夜も付き場を離れることができない。付き場がハヤの卵で埋まると魚の寄りが悪くなるので、数度投網を打つと産床の礫を取り換える。礫を選別する事を「玉ぶるい」又は「玉抜き」と言うが、川が柳つ葉の時は、網打ちと玉抜きが昼夜を分かたず行われる。

瀬付き漁には、投網の他に、付き場を作るための用具を使うが、砂礫に混った石を掘り起す「砂利鎌」や、川石の礫を集める「川ジョレン」、「オカメジョレン」、それに爪付きの「マンガ」などを用い、

また、礫の篩いや運搬には「砂利篩い」や「篠目描い籠（シノメケイ）」などの用具を使う。

多摩川上流の青梅地先水域では、瀬付き漁の一種である「ヨリオケ漁」が古くから行われた。川底を掘り下げ、石や礫でクキバヤを寄せ、手法に変わりはないが、魚の捕り上げに手網を用い、動作の素早いハヤを逃がさぬために、予め付き場の両側に石囲いを施し、その上下を流水が通るように空けておく。こうして付き場の中にハヤが入った時、素早く上下の口を丸めた蓆で塞ぎ、中の魚を手網で掬い捕る。

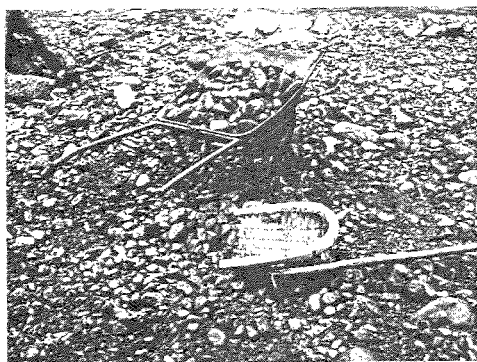
産卵に集まるハヤを、ことごとく捕り尽してしまう瀬付き漁法は、



付き場作業4・付き場作りはかなりの重労働である



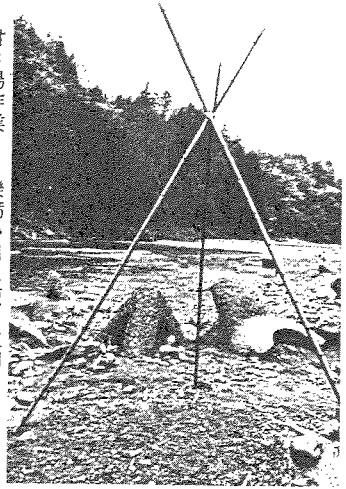
付き場作業5・石積み均等にす



付き場作業6・大石や礫は川原のものを使い、水垢の付いた水中の石や礫は用いない



付き場作業7・礫集め



付き場作業 8・礫篩い用に使う三脚



付き場作業 9・砂利篩い

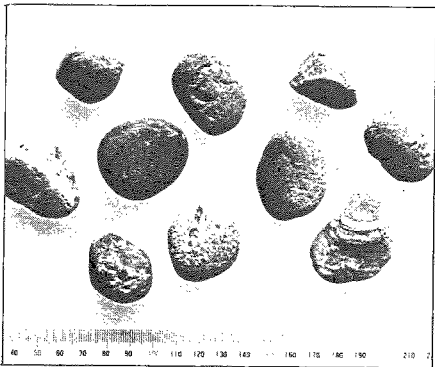
瀬付き漁が行われていた。特に栃木県下の那珂川や鬼怒川水系の瀬付き漁は、「アイソの瀬付」とか「アイソ掘り」、「アイソツカワ」と呼び、現在でも盛んに行われている。アイソとはウグイの地方名で、瀬付き漁を観光化した中禅寺湖の「アイソ祭り」は、千曲川のハヤ漁と共に有名である。また、荒川や久慈川など、ウグイの生息する河川では、現在でも、季節になると瀬付き漁が行われている。

今日では到底考えられないが、かつて多摩川が恵み豊かに流れていた頃、天然ゾキのハヤの繁殖力が、瀬付き漁で捕られる魚の減耗を穴埋めしていた。それでも徐々にハヤの数が減り、現在では人工の付き場を作って魚を寄せ、逆に保護対策を講じており、時代の変り様とはいえ皮肉な事である。

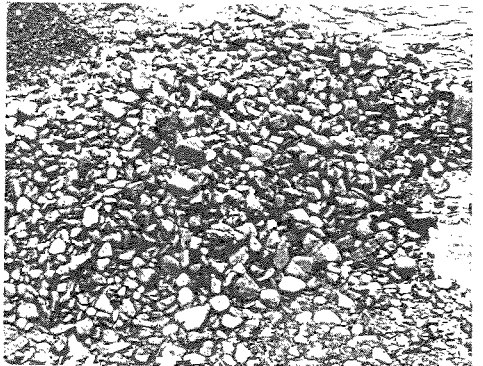
昔は多摩川に限らず、何処の河川でも



付き場作業 10・砂利を篩い分け、一定の大きさの礫を選ぶ。



付き場作業 11・人工産床の上部に敷きつめる選別された礫

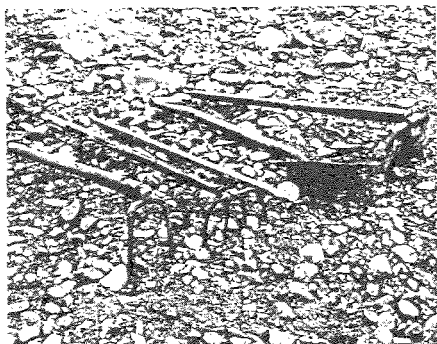


付き場作業 12・礫

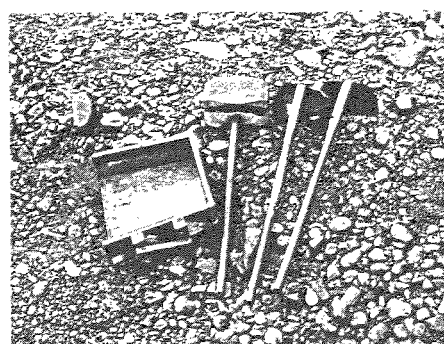


付き場作業 13・礫を均等にならす

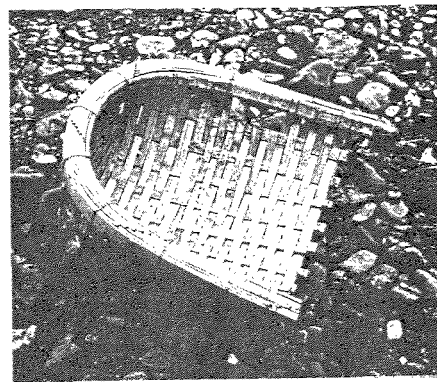
付き場作業14・作業用具。左より砂利鎌、まんが、金てこ、シャベル、おかめシロレン。



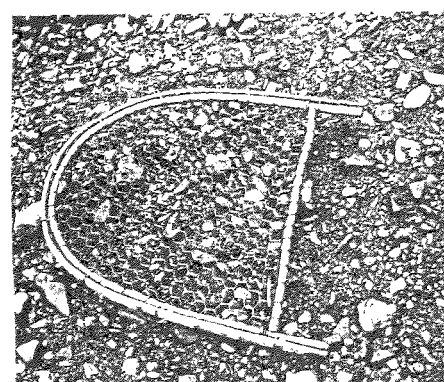
付き場作業15・作業用具。掛矢は杭打ち用。



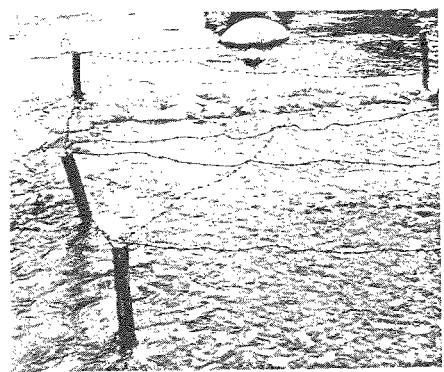
付き場作業16・礫運搬用具の竹箕



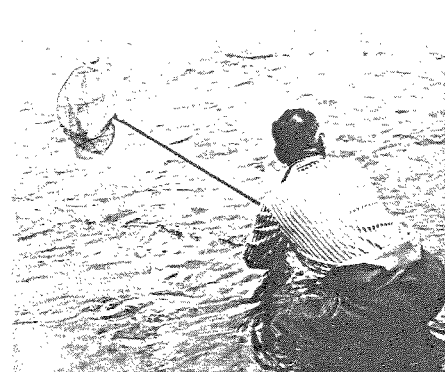
付き場作業17・石ぶるい。礫の型揃えに用いる。



付き場作業18・完成したウグイの付き場。但し、魚卵を保護するために、有刺鉄線が張られている。



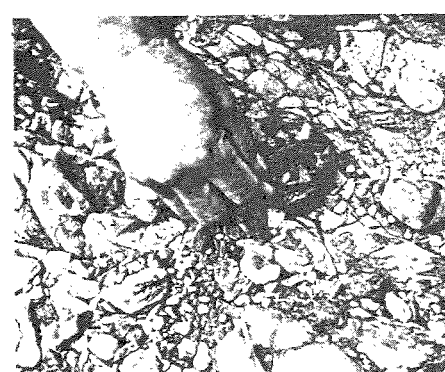
付き場作業19・稚魚を捕る。他所の人工付き場で雌ウグイを捕り、新しく完成した付き場に放つと、魚が早く寄る。



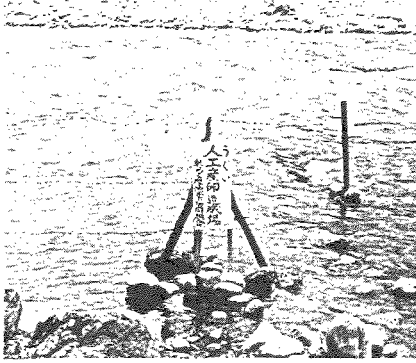
付き場作業20・礫に生み付けられた卵



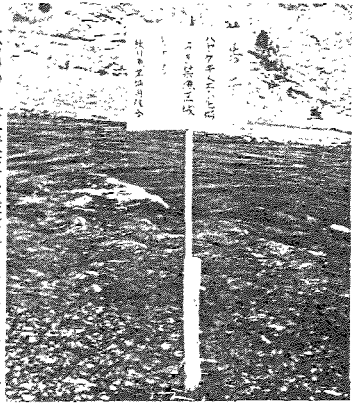
付き場作業21・付き場の礫に生みつけられたウグイの卵、直径一・五耗ほどの透明な粘着性卵である。



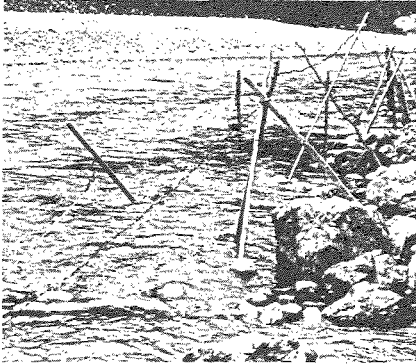
多摩川本流の人工産床保護区
域／青梅地先・昭和五八年
五月



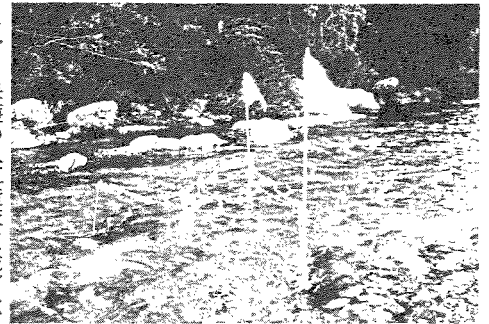
秋川の人工産床保護区／昭和五六年
五月



有刺鉄線は、卵が完全に孵化する
まで張っておく。



ウグイ保護の人工産床区域／秋
川・五六年五月

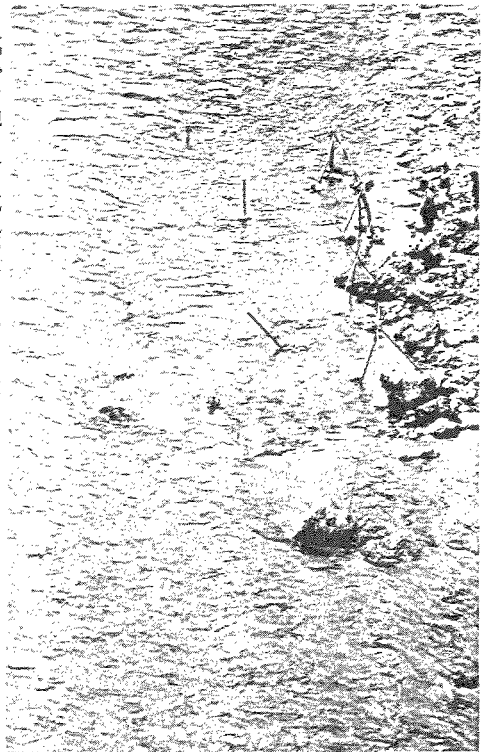


寄せ網漁の対象魚は、鮎をはじめ、ウグイ、オイカワ、鯉、鮒などで、多摩川中流域で盛んに行われ、寄せ網漁の漁期は、主として鮎の季節の六月から九月頃までの、川の水が澄んだ時に行った。川の水が

寄せ網漁法は、予め川の流れを網や簀で仕切り、遠巻きにした寄せ手が追い寄せ網を引き、魚を寄せて捕らえる漁法である。多摩川水系の寄せ網漁の名称は、別に「寄せ川」及び「回し網」、「巻網」、「地引網」、「大漁」などと呼び、また、江戸期の記録には、寄せ網を「なが網」（瀬田地区）と記している。

六、寄せ網

水中では抱卵した成魚が集まり、人工産床で産卵を始めている。

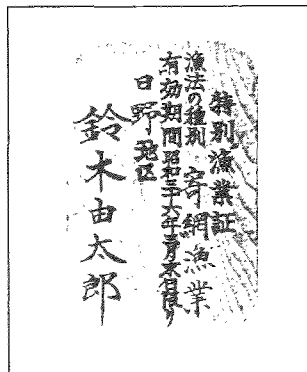


濁ったり或いは薄濁り状の、所謂、職漁者の言う「やなぎっぱ」の状態では、追い寄せのシラタ網に魚が反応しないので、寄せ網漁の効果が望めない。

寄せ網漁は、「跳網」などと同じく、大勢の人たちが行う共同漁法で、多摩川水系では大規模な漁法の一つである。寄せ網漁法の起源とその歴史は大変に古く、現在、流域各地から出土する数々の石錘や土錘などの存在は、遙か縄文時代に、一種の寄せ網漁法が行われていた事を示している。一方、石錘や土錘の出土例に対して、漁網の出土が見られないが、植物性繊維から作られた漁具は、経年変化に極めて弱い材質で、腐蝕によりその形骸を留めない。だが、一部の土器類の破

片には、網目紋様が印され、当時の漁網使用の事実を裏付けている。

寄せ網漁法には、凡そ三つの方法がある。予め川の一部分を簀や網で仕切って魚の移動を遮断し、その一端に捕採部を設けて、大勢で追い寄せ網を下流から上流に向けて引き、捕採個所に魚を追い込んで捕る場合と、川の地形や魚の生息条件などにより、逆に上流から網を引き下る場合とがあり、多くは下流から上流に向けて網を引く方法が一般的に行われている。また第三の場合には、流れの途中で仕切り網を設け、上流から下流に網を引いて魚を下流へ追い込み、さらに下手より網を上流に引いて、魚を捕採部に追い込んで捕る方法があり、これは、



寄せ網漁の鑑札／鈴木由太郎蔵



寄せ網漁・昭和十年代の多摩川中流域で／立川市教育委員会提供



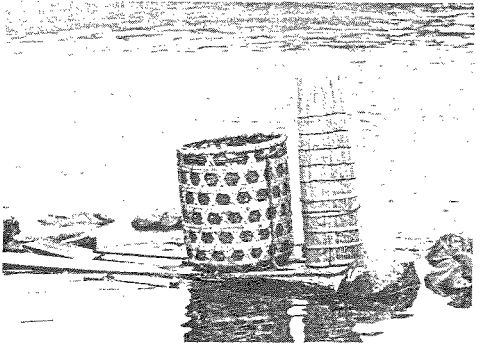
大正期の寄せ網漁／『むかしの府中』より



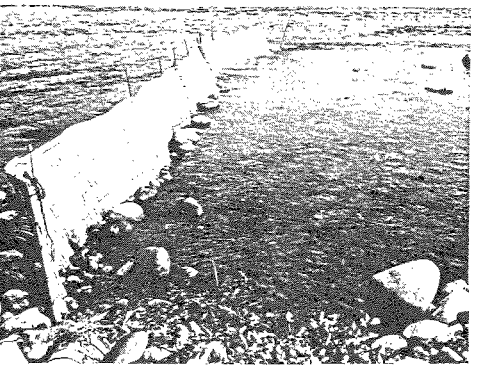
寄せ網漁の捕採部で魚を手掴みする人たち。昭和二二年・関戸橋付近／『むかしの府中』より



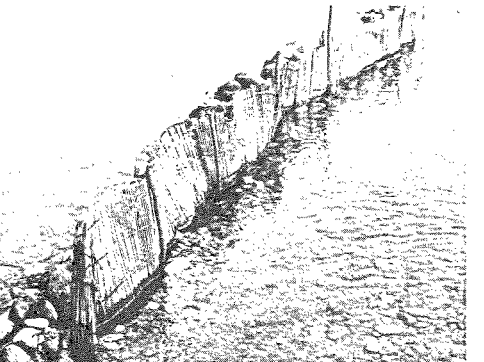
寄せ網漁の準備。まず川岸の一方に捕探部を設け、それより竹簀や建網で流れを仕切る。／昭和五四年八月・多摩川日野栄町地先水域での「伝統漁法」実演



用具を運ぶ背負い籠と雑魚笈



川中に伸びる竹簀。その先は建網が張られ、川岸には雑魚笈が仕掛けてある。／昭和五八年八月



流れを仕切った竹簀／昭和五六年八月

寄せ網漁の中で最も漁撈区域が広く、また多くの人数を必要とする漁法である。このように、同じ寄せ網漁であっても、漁の規模如何により、稼働人数が七、八名から三十名以上に及ぶことがある。

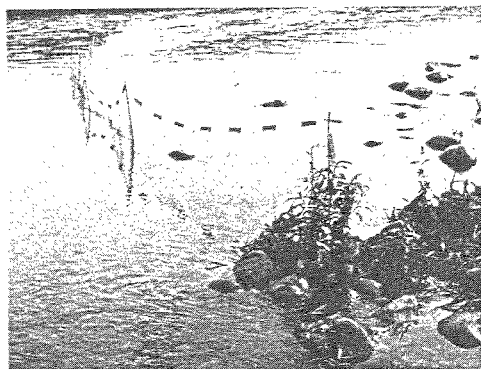
多摩川の寄せ網漁法は、近世以降、主として流域農民たちによって行われ、彼等の遊びと実益を兼ねた、村落共同体的性格が濃厚に反映された漁法である。寄せ網漁の作業には、多くの人たちによる共同作業が必要で、単独もしくは少数人数では成り立たない。目的を同じくする協業行為は、当時の農民たちが「ゆい」や「作事普請」などで共同労働の経験を積んでおり、従って彼等にとつて、寄せ網漁は恰好の漁

法といえる。この漁法では、指導者の下で統制のとれた共同漁撈を行い、漁獲物の配分は人数に応じて等分される。専業の職漁者が寄せ網漁を行う事は稀で、専ら農民たちが、長い間に亘って大勢で網を引いて魚を捕らえてきた。

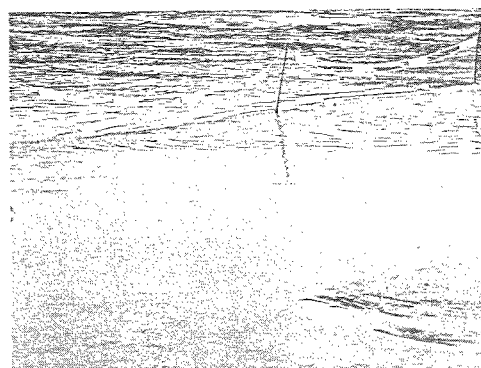
明治二十二年、甲武鉄道が多摩川中流域まで通じると、都会からは多勢の川遊び客が川辺を訪れた。この頃、一時下火になった多摩川の鶺鴒が復活し、以前にも増して活況を呈する様になった。こうした遊覧客たちに対して、川漁を実演して見せる漁法の中に寄せ網漁があ

り、半農半漁で生計を立てている人たちの手で、寄せ網が行われた。多摩の川原に、大勢の川遊び客が見守る中で、寄せ網漁が始まる。流れを横切って建網を張り、その片岸に竹簧や砂利で魚の捕採場を作る。そこに漁撈者たちが魚を追い込んで中の魚を観客に捕らせ、それを川原で調理して食べさせるもので、寄せ網漁は一種の観光漁法として、当時は大変な人気を博した。長い伝統を誇る寄せ網漁は、昭和の十五年頃まで多摩川で行われていた。

寄せ網に用いる漁具は、魚の追い寄せに、シラタと称する白地の網を使用する。シラタは木綿もしくは麻糸の網で、網の底に鉛又は鉄製



流れに張り出した仕切り建網／昭和五四年八月



建網／昭和五四年八月

の棒型錘、もしくは鎖型の錘が取付けてあり、網には袋がない。この網を大勢の漁撈者が川を横切って引き、流れの魚を捕採部に追い込んで行く。シラタを引くことで、網の白地が水中の魚を威し、追い寄せの効果を発揮する。シラタは柿渋を塗らない生地のままの網である。魚の追い寄せには、網糸が太く、丈夫に編んだシラタを幾反もつなぎ、川幅一杯に張って用いる。

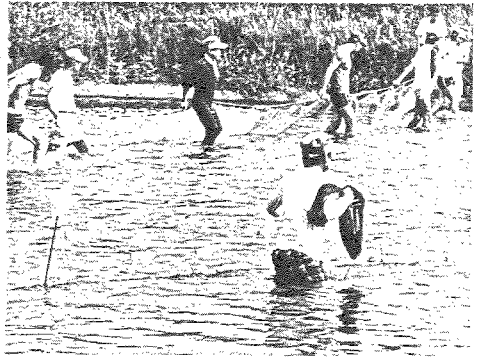
水中の魚の退路を遮断する仕切り建網は、川底に網支えの木杭を等間隔に打ち込み、そこに網を張る。建網は絹製の細い張り網を用い、網の上部には、桐又は檜製の浮子が等間隔に付いている。網の底部に棒型鉛錘を取り付け、この網の流れの一部に張って、追い寄せた魚を



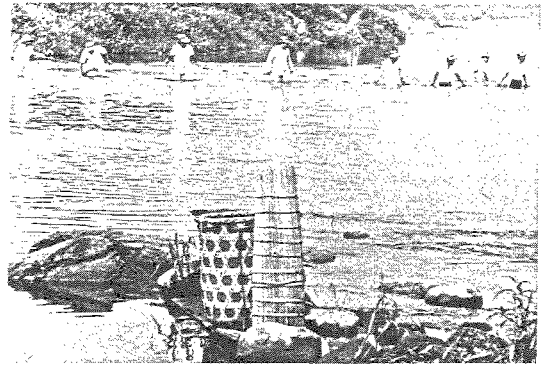
大勢でシラタを引き魚を追い寄せる／昭和五八年八月



シラタ／昭和五八年八月



流れの建網の一部が空いており、上から下へシラタを引いて、魚を下流に追いこむと、直ちに用意の仕切網で閉じる。／昭和五年八月



下流から捕採部に魚を追い寄せ
／昭和五年八月

逃がさぬようにしている。

追い寄せの捕採部は、川の一方の岸に川原石や砂利を積み並べた区画を設け、その中に大型の雑魚笈を仕掛ける。また、竹笈を用いて最終捕採の区画部とする場合もあり、この場合には、追い込んだ魚が逃げぬ様に、笈の下を川砂利で十分に埋めておく。そして、捕採部に追い詰めた魚を、投網や巻き取り刺網、或いはひっかき竿などの漁具を用いて捕り上げる。以上が寄せ網漁における基本的な技法であるが、さらに規模の大きな寄せ網になると、操業する漁場も広範囲になり、魚の追い寄せの手順もより複雑になってくる。

流れが緩く、水深が腰位いで川巾の広い場所が、寄せ網漁に適した漁場である。こうした場所が数百米も続き、流れに沢山の魚がいれば、規模の大きな寄せ網漁には恰好の場所となる。それに、大勢の人数で流れの魚を追い込む寄せ網漁は、大変に威勢が良い。捕採場に仕切り網を設け、その上、下流の魚を追い込む大規模な寄せ網では、三十人からの人が参加し、川面は漁の熱気につつまれる。この漁は経験ある指導者により、一糸乱れぬ操業の如何が漁業に大きく影響するので、皆が手順に従って素早く作業を行う。

壮観な大規模寄せ網漁の手順は、まず上流と下流の中間の一方の岸を魚の捕採場に決めると、川岸寄りに石と砂利で最終捕採部を設け、ここに大型の雑魚笈を仕掛ける。次に、流れをやや斜め下流に横切つて木杭を打ち、竹笈を四、五間並べ、笈の下部を砂利で埋め固めておき、魚の逃走に備える。その先は同じく木杭を打ち並べ、流れの魚の退路を遮断するために、仕切りの張り網を張る。ここまでは一般の寄せ網漁に共通した手順であるが、大規模寄せ網漁の場合には、張り網を対岸まで張らず、二、三間空けておき、上流からの魚の逃げ口として残しておく。上流から追い込まれた魚が、この間を通過して下流に移動した所を、待ち構えていた一人が、素早く対岸まで封鎖の張り網を渡すのである。

流れに魚の捕採と仕切りの作業が完了すると、次は魚の追い寄せに移る。仕切網の場所から百米ほど上流から、シラタを持った大勢の追い手が、流れを横切つて此岸から対岸まで一列に並ぶ。そして、シラ

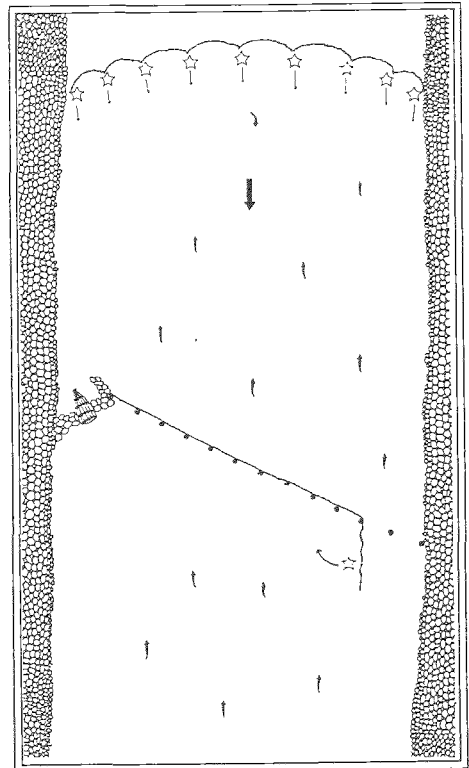
タを持つ追い手が、流れと平行に川を下り、魚を下流に追い込んで行く。魚たちは、先程張った仕切り網の端に空けられた二、三尺の間を通って、上流の魚が下流に移動する。直ちにその箇所を張り網で閉じ、下流の魚を封じてしまう。

それから、シラタを持った追い手は、陸を歩いて下流百米ほどの地点から、再び川をシラタで横切つて、川下から上流に向けて魚を追い込む。魚の追い込みは、シラタが一樣に水中を移動する様に、漁撈者が一斉に網を引張つて行く。シラタ引きの上りは、下りと違い水の抵抗もあるが、追い寄せのシラタが一直線に移動する様に、迅やかに行う。徐々にシラタを捕採部に向けて魚を追い込むと、水中の魚がシラタに驚き、また流れに仕切られた張網に狼狽して逃げまどう。

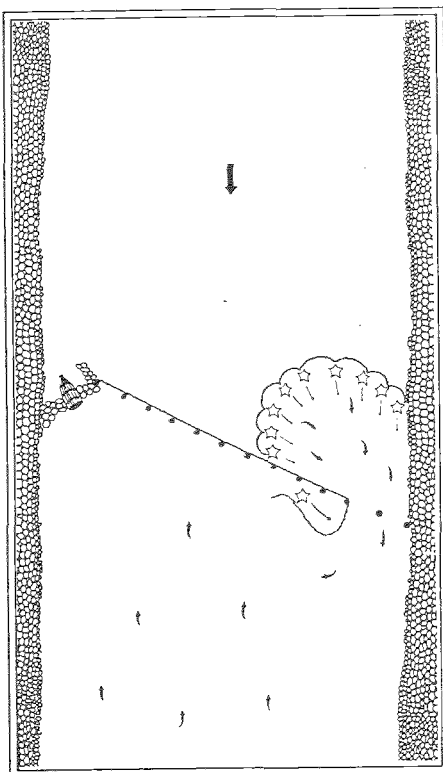
この時、捕採部の川岸に待ち構えた数人の者が、シラタの中の魚を取り囲む様に、巻き取り刺網を繰り出す。初めは比較的粗目の網を持った網手が先陣を務め、待機した二番手が、内側からさらに目の細かい網を素早く張る。また第三波の網を繰り出すこともあり、魚の逃げるいとまを与える間もなく、捕採網の操業は手際よく迅速に行う。こうして、大きさの異なる魚がそれぞれの巻き捕り刺網にかかり、また一部の魚が、仕掛けた筈の中に逃げ込んだ所を捕り上げる。

寄せ網漁における追い込みは、この漁法における総仕上げの場面であり、川辺は熱気にあふれた光景が展開する。川岸の一隅には、大勢の人と網と魚が入り乱れ、水しぶきが散り、怒号が走る。今まで川面を静かに引いてきた追い手と、そこで待ち構えた巻き捕りの網手と共に

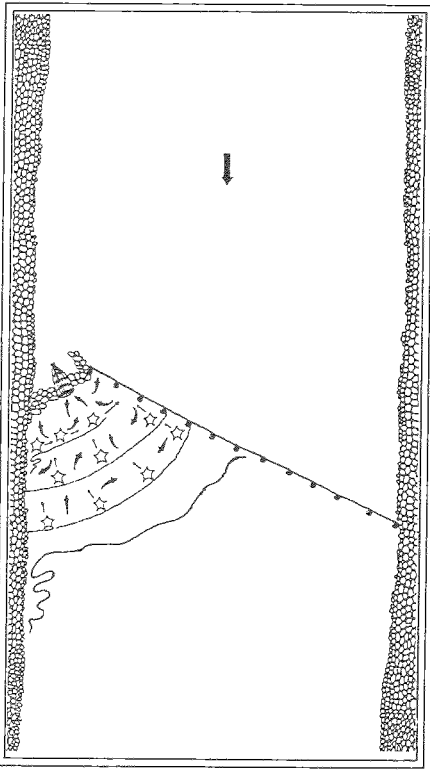
寄せ網漁の追い寄せ順序四―一 流れに仕切網を張り川岸に捕採部を設けると、寄せ手(☆印)が上流からシラタで魚を追い下げる。



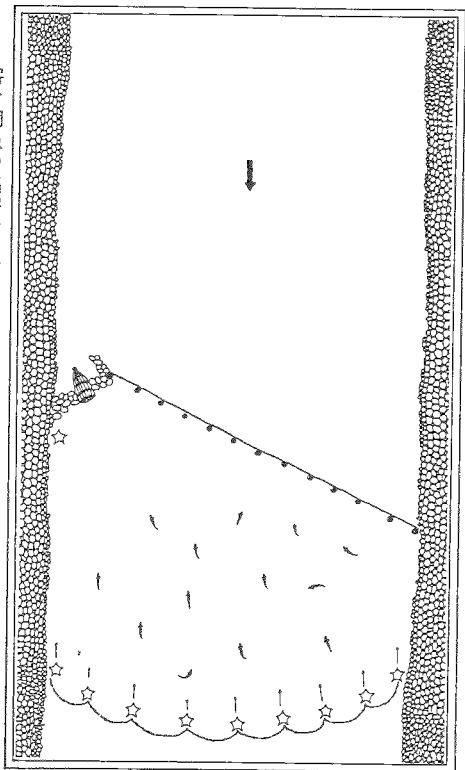
寄せ網漁の追い寄せ順序四―二 仕切網の開口部より魚を下流に追う。下に魚が移ると見るや、待機した漁人が早く仕切網を閉じる。



寄せ網漁の追寄せ順序四―四 捕採部に魚を追い込み、すかさず網目の異なる巻抽り刺網を次々に繰り出し、魚を捕り上げる。

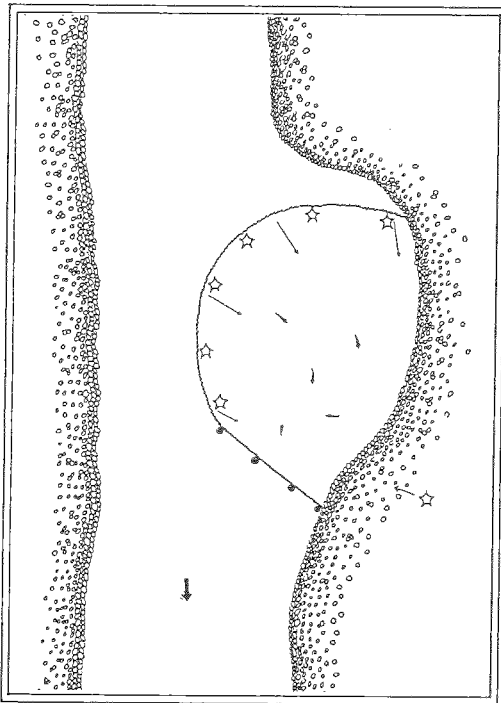


寄せ網漁の追寄せ順序四―三 下流からシラタで魚を追い上げる

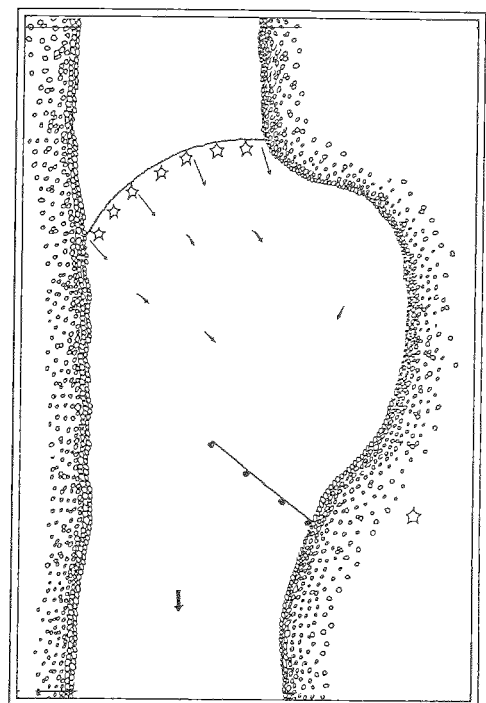


寄せ網漁図 3-2

寄せ網漁図 3-1

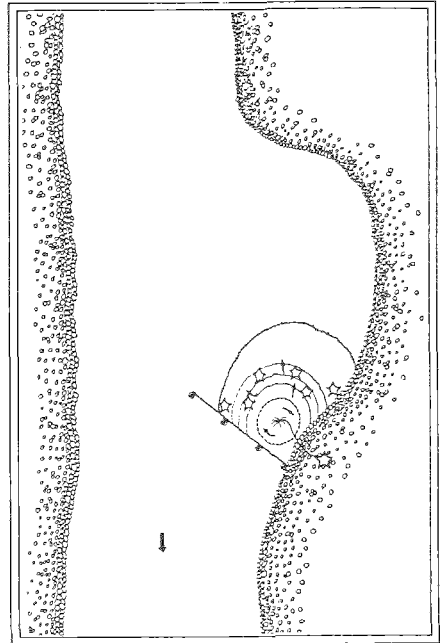


寄せ手(☆印)が魚群を取り囲み、シラタを絞り込んで行く。

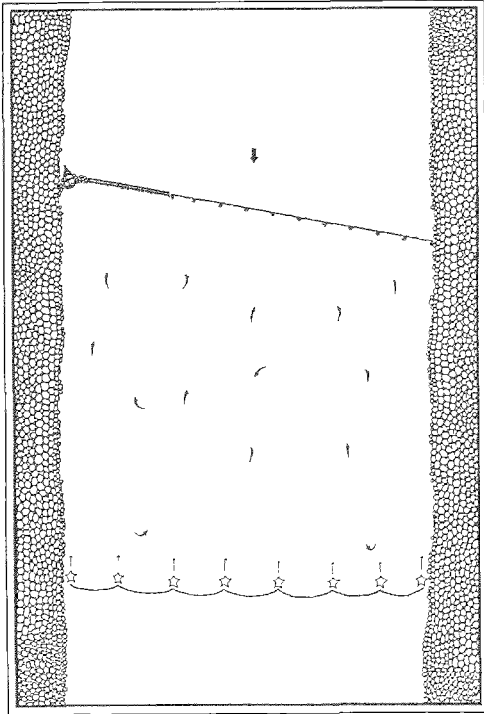


上流より川のえぐれの下手に設けた捕採部に向けてシラタで徐々に魚を追い込む。

寄せ網漁図 3-3



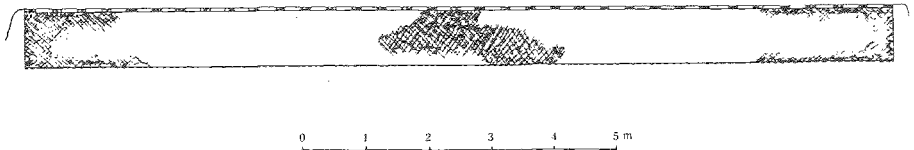
網目の異なる3段の巻捕り刺網を繰り出し、魚群目がけて投網が飛ぶ。寄せ網漁の最終捕採は、いつも熱気にあふれた修羅場となる。



寄せ網漁図・下流から上流へ追寄せ

注：☆印は漁撈者を示す

寄せ網漁用建網（張り網）図（立川教育委員会蔵）

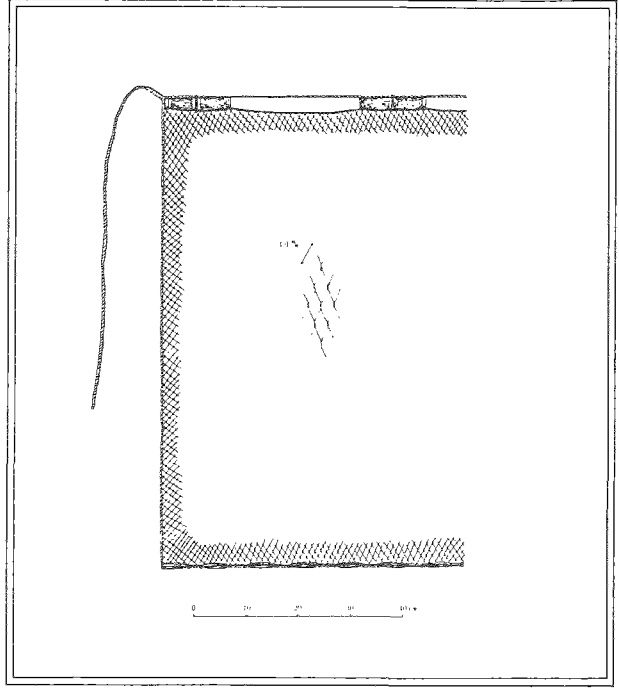


に、三十数人もが混り合い、途端に漁場は激しい熱気に包まれる。魚の捕り上げは誠に壮観で、観る者を引き込まずにはおかぬ、活気に満ちたスペクタクル・シーンが川辺に展開し、大漁にやんやの喝采が湧き起る。

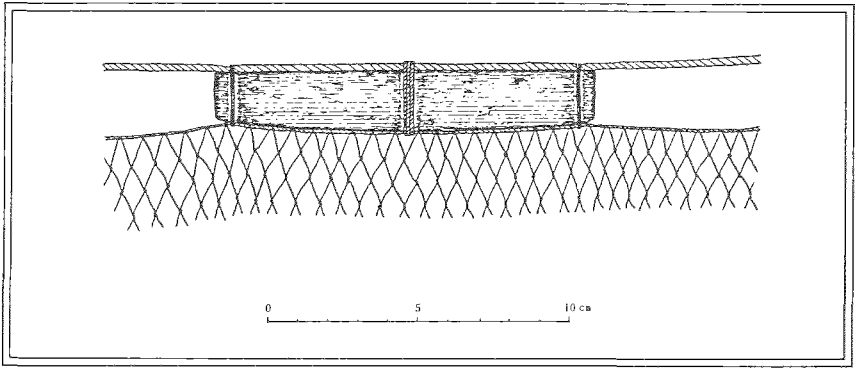
最終捕採部に追い込んだ魚が、次々と繰り込む網に捕らえられる様は、実に躍動的な漁撈場面であるが、これに使う張り網と称する巻き捕り刺網は、鮎の成長段階に応じて網目の大きさを変える。六月には五、六分目の網を用い、七月は六、七分、また八、九月には七、八分目の網を用いるが、時には寸目網と称し、網目が一寸もある、特大の張網を用いる事もある。多摩川中流域では、網目の大きさの基準を、糸の結び目の間隔の長さによって、それぞれ何分目網と称している。

多摩川水系の伝統漁法には、普通、単独もしくは少人数によるものが多

建網(張り網)部分図



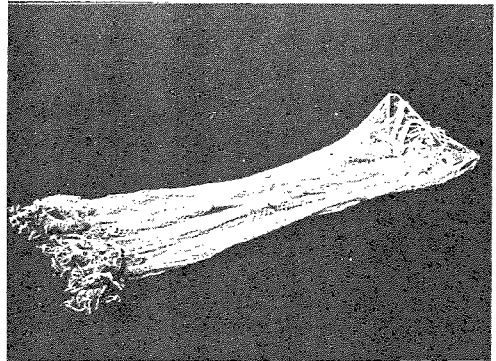
いが、大人数で操業する寄せ網は、「跳網」などと共に、甚だスベクタクル性に富んだ漁法と言える。そうした点で、多摩川の漁法の中では、「鶉飼」などと同様に、明治の中頃から昭和の初期までの間、寄せ網漁が、川遊びに訪れた都会の人びとに、大変な人気を博したことは容易に領ける。



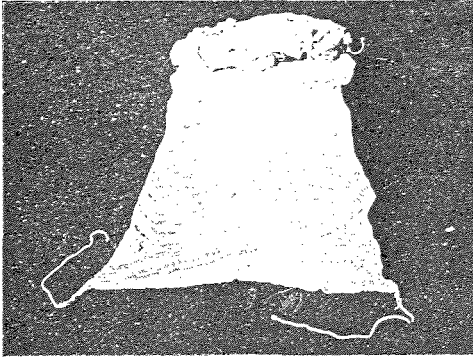
建網(張り網)浮子図
(桐製板浮子)



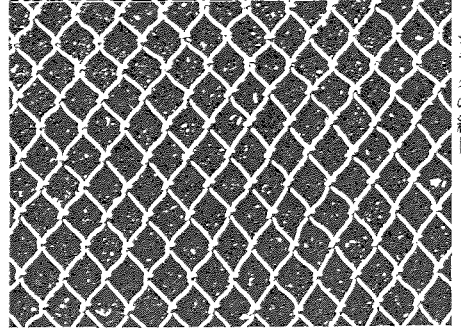
シラタノ立川市教育委員会蔵



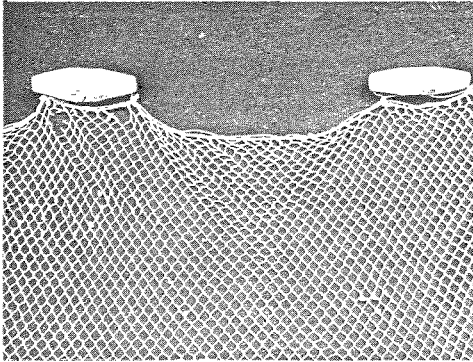
シラタノ立川市教育委員会蔵



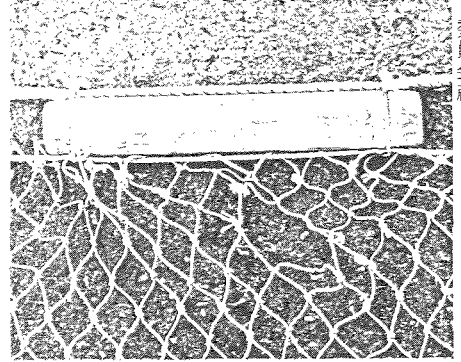
シラタ／福生市教育委員会蔵



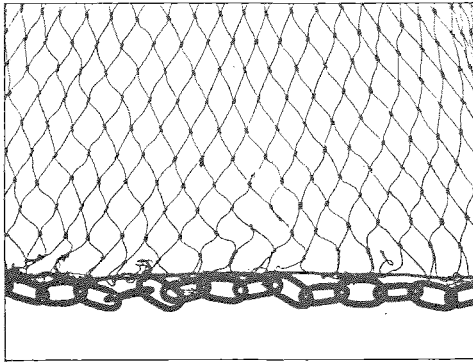
シラタの網目



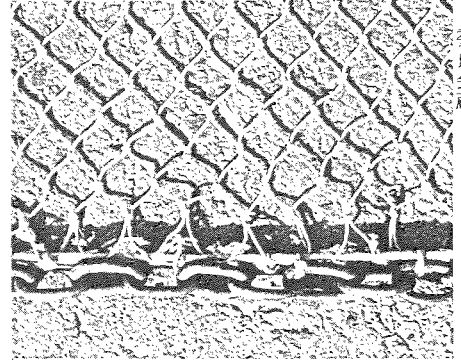
シラタの桐製浮子／青梅市郷土博物館蔵



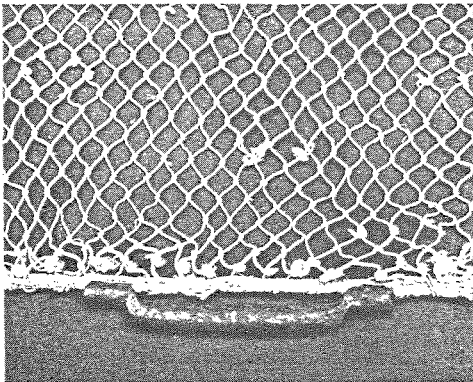
シラタの桐製浮子／立川市教育委員会蔵



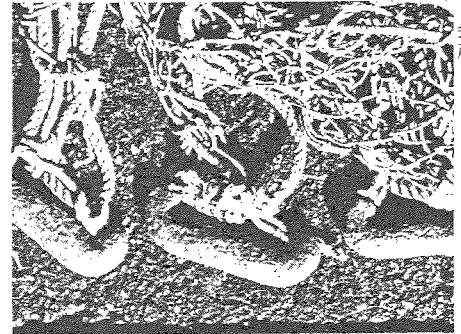
シラタ鉄鎖錘部のシルエット／立川市教育委員会蔵



シラタの鉄鎖錘／立川市教育委員会蔵

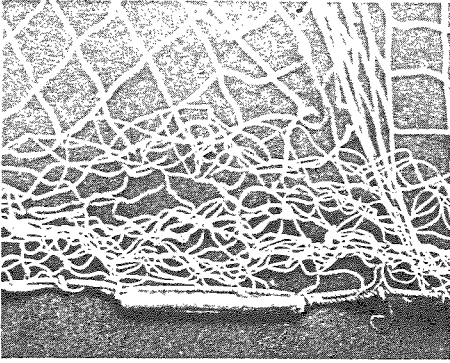


鍛鉄製蛭型錘の付いたシラタ／青梅市郷土博物館蔵

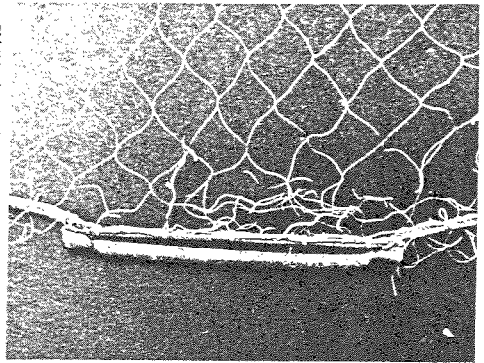


シラタの蛭型鉛錘／福生市教育委員会蔵

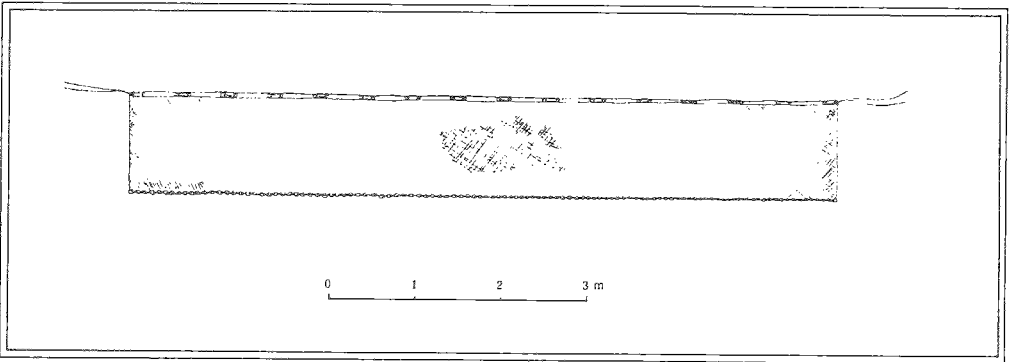
棒型鉛錘の付いたシラタ／立川市教育委員会蔵



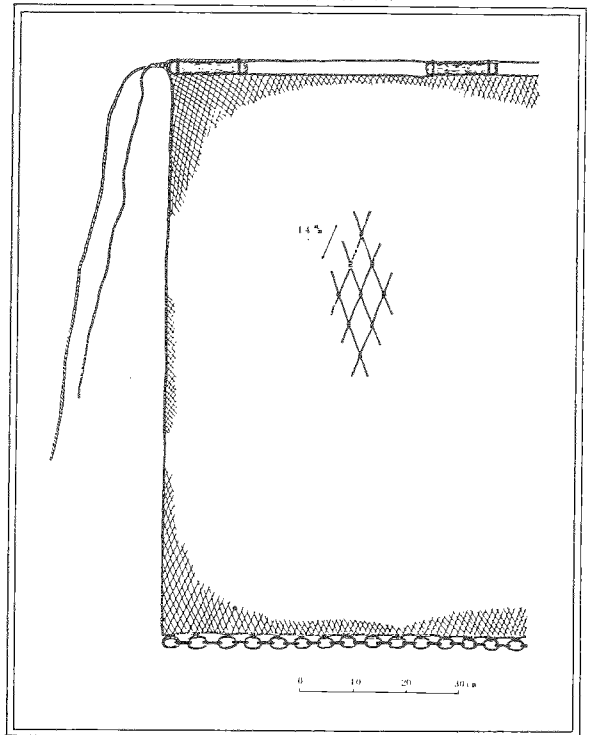
鍛鉄製の長蛭型錘の付いたシラタ／青梅市郷土博物館蔵



シラタ網図（立川市教育委員会蔵）



シラタ部分図



七、掬い網

多摩川で行われた掬い網漁の中で、大型四つ手網や叉手網による漁法は、職漁者や半漁民たちが行ったが、その他に、手網型や半円型の簡易な掬い網を用いる魚捕りは、流域の老いも若きもが行った最も一般的な網漁法であった。

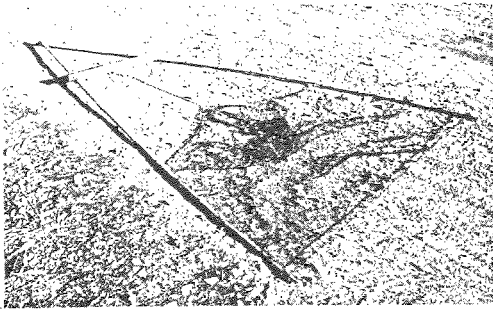
掬い漁に使う網の種類や形状も様々で、掬い漁法ほど多様な漁具を用いた漁法も珍しい。また掬い網で捕れる魚も雑多で、多摩川水系に生息する殆どの魚がその対象である。軽便で簡易な掬い具を用いて

魚を捕らえる水域は、多摩川の本、支流、それに農業用水路などの清流や池沼などで、水中に魚族が生息する所ならば、何処でも掬い漁を行った。

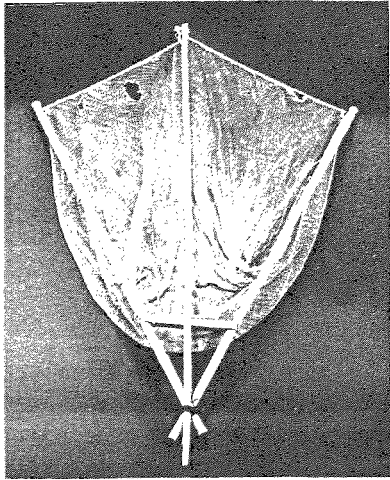
こうした魚掬いに用いる網漁具は、その形状が半月型のもので丸い手網型に大別される。半円型の掬い網は、外枠にカバノキ科に属するシデの枝などの細い幹を曲げた半円の両端に、丈夫な麻網を結び網を張る。網を枠いっぱい張るものと、半円の頂点近くの一部を素通しにしたものがある。また、この網に支持棒を取り付けた型も使われている。

一方、丸枠に網を張り、長い柄を付けた手網型の掬い具も使われ、丸枠の直径が一尺から二尺に及ぶものなど、様々な掬い網がある。ま

掬い又手網 / 川辺昭吉郎蔵



掬い又手網。待網などに用いられた。
立川市教育委員会蔵

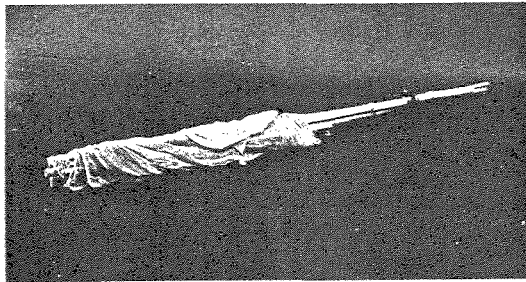


た、丸型の変型で、網枠が卵形をした網も使われている。手網型掬い網は、木綿や絹糸の網に柿渋を塗って用いるが、一部には目の細かな金網を利用した掬い網もある。金網は水切れが良く、止水域や流れの緩い場所でエビなどを掬う時によく使われた。

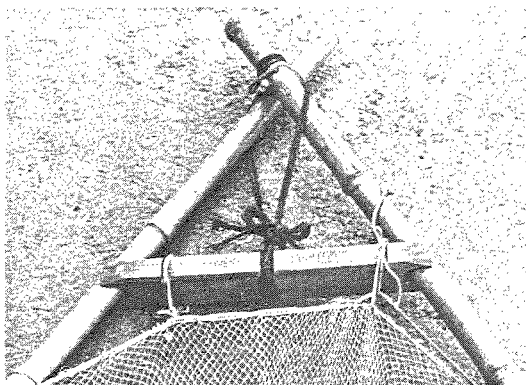
半円もしくは丸型の掬い網は、その殆どが漁撈者の自製によるもので、形状はそれぞれに異なっていて、中には細部に工夫を凝らした掬い具も多く見られる。掬い具の中には、箕の形に外枠を配しその内側に金網を張った、箕型金網張り掬い具とも言うべき創作物もあって、こうした簡易な掬い具の型状は多彩である。

掬い具といえば、網漁具ではないが、最も簡単で手近かに用いられ

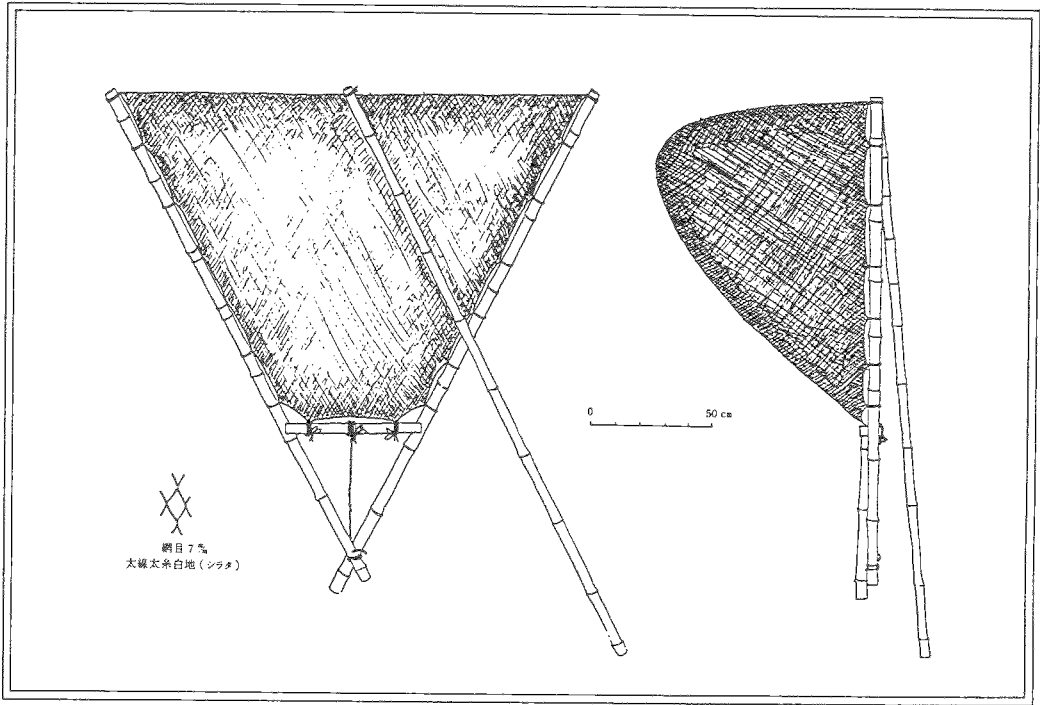
折りたたんだ状態の又手網



掬い又手網の手元部分



掬い叉手網図
(立川市教育委員会蔵)

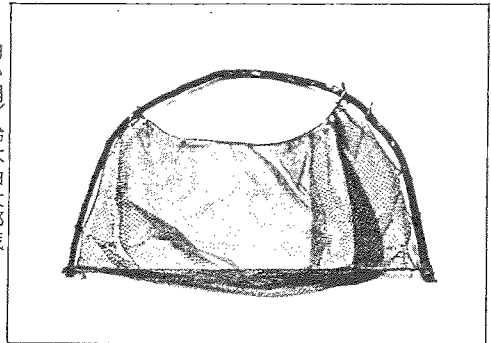


たのは、当時、どこの家庭でも使われていた笊類であろう。事実、多摩川流域の細流において、笊を用いて魚を捕るケースは、他の網製掬い具の場合よりも遙かに多かったのである。家庭用品としての笊は、本来、漁具の範疇には入らぬが、小川や水路で魚捕りに使われる時は、掬い具としての機能を十分に果し、また捕れた魚入れにもなる。かつて、何処の水域にも沢山の魚族が生息していた頃、米磨ぎ笊や箕笊を使っていた子鮎や泥鰌、それに川海老などを幾らでも捕ることができた。

多摩川水系では、昔から様々な掬い具が使われてきたが、掬い漁はそれぞれの水域や対象魚によってその内容も異なる。

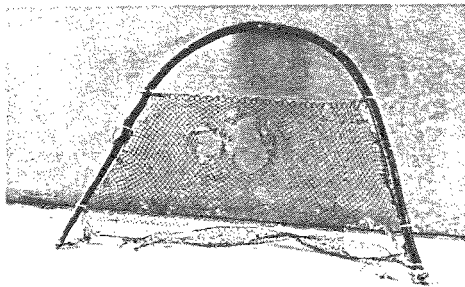
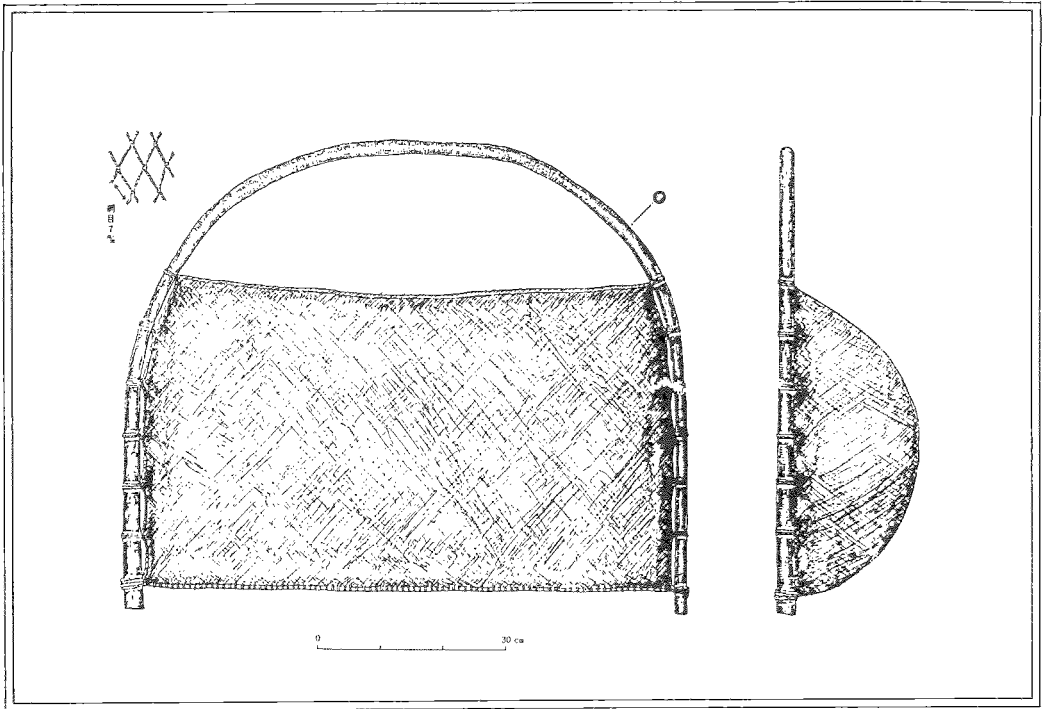
多摩川上流の支流や枝沢などで、夕立の後に流れが増水した時に、岸寄りを掬い網で上から下に掬い、ヤマメやウグイ、カジカなどを捕る。また平水時の本流では、下手に掬い網を置いて、上手から川底の石を足で踏み動かしながら追い寄せると、カジカが捕れる。

中、下流域の用水路や支流の細い流れでは、上手より足や魚追い棒を使って魚を追いつみ、下手の網に入る魚を掬い捕る。フナやオイカワ、タナゴ、ドジョウ、時にはナマズも網に入ることがある。また本

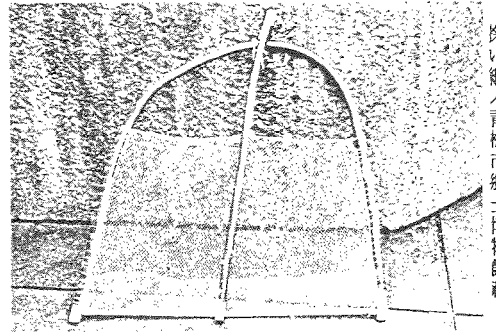


掬い網 / 鈴木由太郎蔵

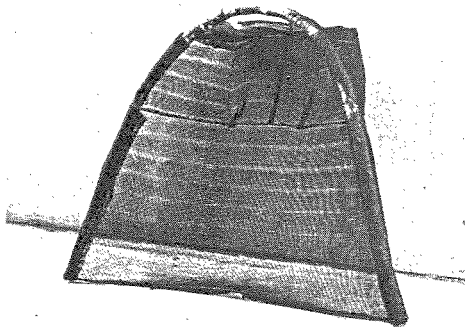
掬い網図
 (鈴木由太郎蔵)



掬い網／五日市町郷土館蔵

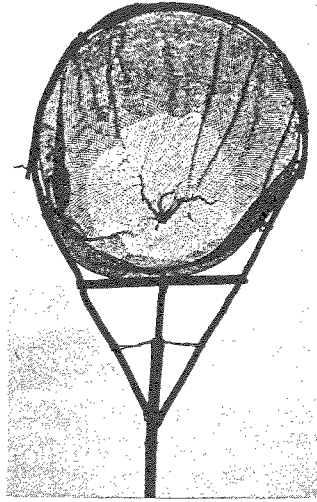
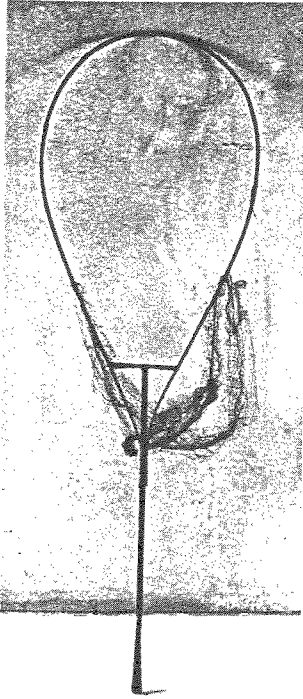


掬い網／青梅市郷土博物館蔵

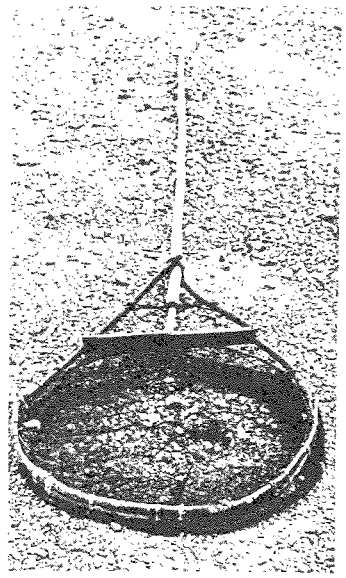


掬い網(金網製)／五日市町郷土館蔵

流が降雨で増水した時、半円型や丸型網を使って、川岸に寄る魚を掬い捕ることも行われたが、大変に危険で、漁撈者が誤って溺死することもある。自家の菜料と遊びを兼ねた掬い漁は、平易に過ぎ、また卑近であるために、あまり注目される事のない漁法であるが、多摩川水系の数ある漁法の中で、最も多くの人が行ってきた魚捕りが、網や笊などを用いての掬い漁であったと言えることができる。



手網型掬い網／
府中市立郷土館蔵



掬い網（手網型）／
府中市立郷土館蔵

手網型掬い網／五日市町郷土館蔵

八、鵜縄漁

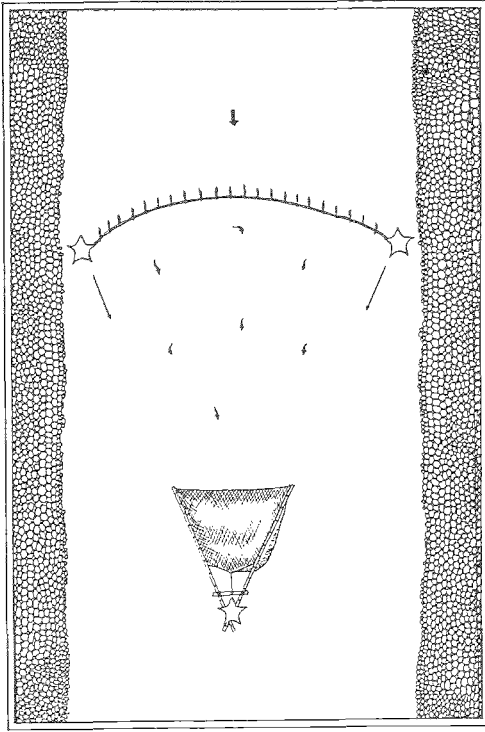
鵜縄漁は、多摩川中流を中心に行われた古い漁法で、鵜縄で水中の魚を追い寄せ、下手の網に入るのを掬い捕る。鵜縄漁は三月から十一月までの期間、職漁者や半漁民たちが行っていた。

鵜縄漁は「鮎鵜縄漁」とも呼び、その他、地域によっては「鵜縄」、「鵜縄網」、「ハネビキ」とも呼んでいる。鵜縄漁が行われた地域は広汎にわたり、秋川の五日市では江戸末期に鵜縄漁の記録があり、大正末頃まで行われていた。また多摩川中流の府中や登戸の鵜縄漁は大正まで続き、降って世田谷砦地先の水域では、昭和十年頃まで鵜縄漁が行われていた。

鵜縄漁は、水中の魚族に威しの追い寄せ具を用いて、アユやウグイ、コイ、ニゴイなどを捕る。鵜縄は、長さが二十間乃至三十間の麻繩に、鵜の羽又は烏や鶏の黒羽根を二尺毎に付け、別に十匁鉛の錘を三尺おきに麻繩に取り付ける。また鉛の代りに石を繩に結着する場合もある。これを用いて、流れの上流より二人が流れを横切って鵜縄を張り、そのまま下流に移動しながら魚を追い込んで行く。三、四十間下手には、又手網などの掬い網を持った網手が待ち構え、追い寄せられた魚が二、三間先に現われると素早く網を入れ、同時に追い手が鵜縄を絞り込んで魚を網に追いやり、網手が間髪を入れずに網を引き上げて、中の魚を掬い捕る。

鵜縄漁は、鵜縄の二人と網持ちの三人で行うが、威し具を使って水

鵜縄漁図(☆は漁撈者)



中の魚を騙し捕る技法なので、素早く行動しないと魚を散らすばかりで網に入らない。鵜縄で追い寄せた魚を捕るのに、半円型の大型掬い網を用いたり、また掬い網の他に、追い寄せた魚に投網を打つこともある。

鵜縄漁には大型の叉手網を用いる場合が多く、竹竿の長さが三間に及ぶのもあり、二本の交差した竹の先端の巾が二間以上にもなる。棹の竹の太さが物干し竿大で、こうした大型網を一人で操作するには、余程屈強な者でないと務まらない。また叉手網は大きさが様々で、鵜縄漁に限らず、多摩川水系では各種の漁法に使われている。

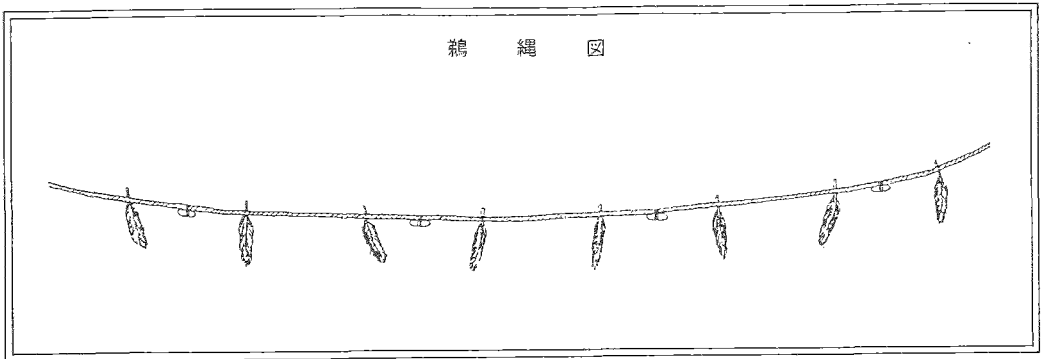
叉手網は、交差した二本の竹竿の手前に支えの細板を結着し、竿の開いた所に網を張った掬い具である。叉手網の特徴は、網の組み立て

や折りたたみが容易で、たたんだ網は持ち運びが簡単なことと、軽便性に優れている点である。掬い漁に漁撈者が網をたたんで持参し、現地で組み立てて使用するが、組み立てには時間を要しない。叉手網は収納と展開の迅速性が配慮され、機能的に無駄のない構造になっている。

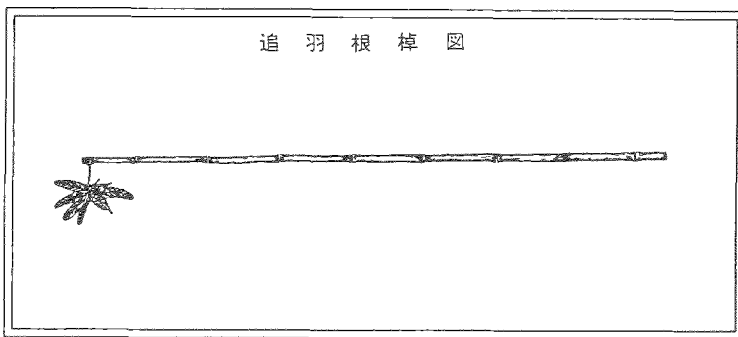
追羽根棹漁は、追羽根棹を用いて、水中の魚族を下手の網に追い寄せて掬い捕るもので、捕採原理の点で先きの鵜縄と変らない。追羽根漁は別に「ハヤ追い」とも呼び、漁期も鵜縄漁と同じである。

追羽根棹は、長さが二間前後の竹竿の先に、鵜縄と同じく鵜や烏などの羽を束ねて取り付け、それを水中で素早く動かしたり水面を叩いたりして魚を威し、追い寄せた魚を叉手網などの掬い網で捕らえるが、追羽根棹漁は、追い手と網

鵜 縄 図



追羽根棹 図



手の二人で行う。また、追羽根棹漁は鶉縄漁と同じく、魚の追い寄せに技術を要する難かしい漁法である。

鶉縄や追羽根棹による技法は、魚が本能的に黒い羽根に対して恐れる習性を利用した騙し漁で、こうした魚の威し追い寄せ具は、鳥の羽根の他に、多摩川の漁法では、ペラ網漁に用いる「ペラ」や跳網漁の「ウラジロ」、また瀬張の「オカザリ」などがある。鶉縄や追羽根棹は、川水が少し濁った、所謂「ヤナギツバ」の状態が、魚の追い寄せに効果がある。

黒い鳥の羽根を異常なまで忌避する魚の習性は、一説に、水鳥の飛来を錯覚した魚の逃避行動であるとしている。

だが、麻縄の二尺毎に取り付けた黒い羽根一枚一枚を、水鳥に擬する説明は理解できぬでもないが、羽根に代る黒い布切れでも魚は逃げるのである。そうして見ると、黒い物をはじめとして、ウラジロやオカザリなどの白銀色に光る物に対し、多くの魚は本能的に忌避行動をとる習性がある事が判る。人間がこうした魚の習性を見極めたのは、何時の頃よりかは判らぬが、威し追い漁法は、大変奸智に長けた技法と

言わねばならない。

多摩川水系で古くから行われた鶉縄漁は、ほぼ同様の捕採原理による「ペラ網漁法」が、大正末頃多摩川に導入されて以来、急速にその影をひそめて行く。従来の鶉縄漁や追羽根棹漁に対して、ペラ網漁法は魚の捕採に優れた機能を有し、職漁者たちは従来の古典的な漁法を放棄して、新しい技法を身につけて出漁した。だがこうした趨勢にもかかわらず、多摩川では昭和十年頃まで、一部の漁撈者が古色蒼然たる鶉の羽根を引いて漁を行っていた。

嘉永三年（一八五〇）九月、多摩川の瀬田地先水域で行われた鶉縄漁について、江口忠房が『瀬田之記』にその模様を記している。

「：魚とる人は小舟にのり、はた二人にて繩のはしとはしをもち出て、その繩に鶉の羽数々つけてあり、このなはにて川上よりかはしもへ魚をおひ、下にてあみをうちひくことにあまた鮎かかりて、こなたの舟なるうつはにいるれば、これを塩にやきてくふに、其味たとへんかたなし、：」。

と記し、今は昔、過ぎし日の多摩川での、伝統的鶉縄漁の情景を伝えていている。

九、撫網

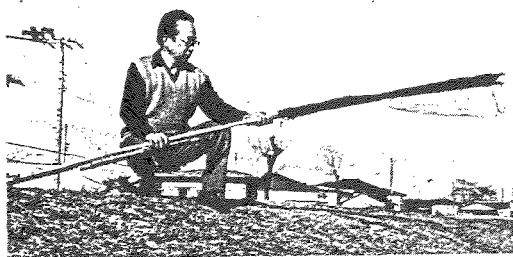
大雨が続くと、支流からの水を集めた多摩川の水位が増し、川は従来の様相を一変させて、濁流渦巻く激しい流れとなる。平水時には、それぞれの場所で生息していた魚たちは、次第に増大する水量と水勢

の激しさから逃れるために、川岸寄りの緩やかな水域に身を寄せて、水が引くのを待っている。川に棲む魚たちは、出水時には、こうした行動で身の安全を計っている。

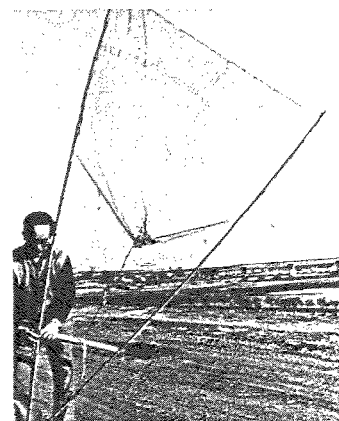
洪水時、魚が川岸に寄る習性を利用した漁法が無網漁で、又手網などの掬い網を用いて、増水した川の比較的流れの緩やかな場所に集まる魚を掬い捕る。無網漁の呼称は、手にした網を流れに沿って上流から下流へ向け、あたかも川の表面を撫でる様に網を使う事に由来するが、無網漁は、別に「なぜ網」（菅）、又は「なぜ網」（砵）、「ごり掬い」（南秋川）などとも呼ばれているが、いずれも、この漁法の特徴の一端を伺わせる名称である。

無網漁は、出水時に川岸で行うが、下流域の一部では、舟を使つて

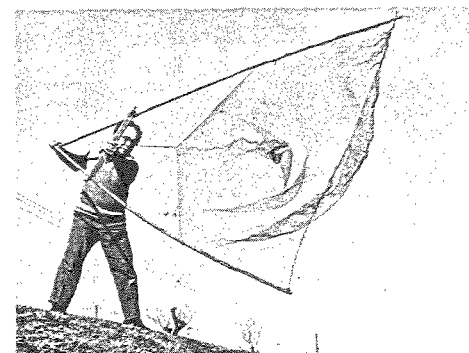
無網を折りたたんだ所／実演者・川辺昭吉郎



網を組み立てる



網は短時間で組み立てることができる



操業する場合もある。舟上に立って、濁流の表面を上流から下流に網を使うのは、川岸からの場合と同じである。無網漁は、特定の魚を対象にした漁法ではなく、アユを始め、ウグイ、コイ、フナ、オイカワ、ウナギなど、網に入る総ての魚を掬い捕る。

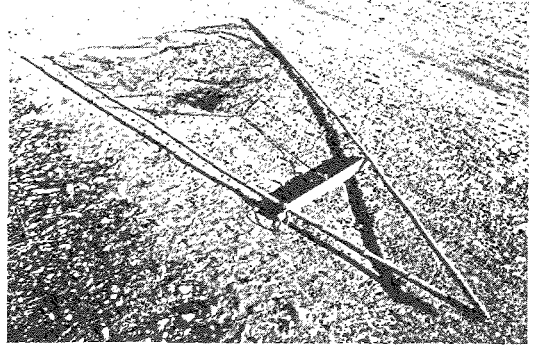
無網漁に用いる掬い具は、又手網もしくは丸い大型掬い網を使うが、この漁法には又手網が良く用いられた。又手網は細目の絹糸に柿渋を塗つた約五尺四方の網を、長さ二間程の真竹二本に取付け、中程手前寄りに三、四尺の横木を取り付けた、長三角形の掬い網である。これを使って、増水した流れの川岸から身を乗り出し、網を流れに垂直に入れ、流れより少し速く下手に撫でる様に引いて掬い上げて、網に入

無網漁の模擬実演

上流から下流へ、流れを撫でる
様に網を引く。



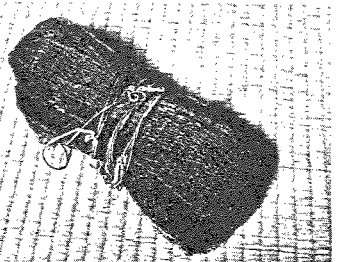
撫網 / 川辺昭吉郎蔵



折りたたんだ撫網



撫網の網部の収納状態。網
は細絹糸製柿渋塗り。川
辺昭吉郎蔵



る魚を捕り上げる。

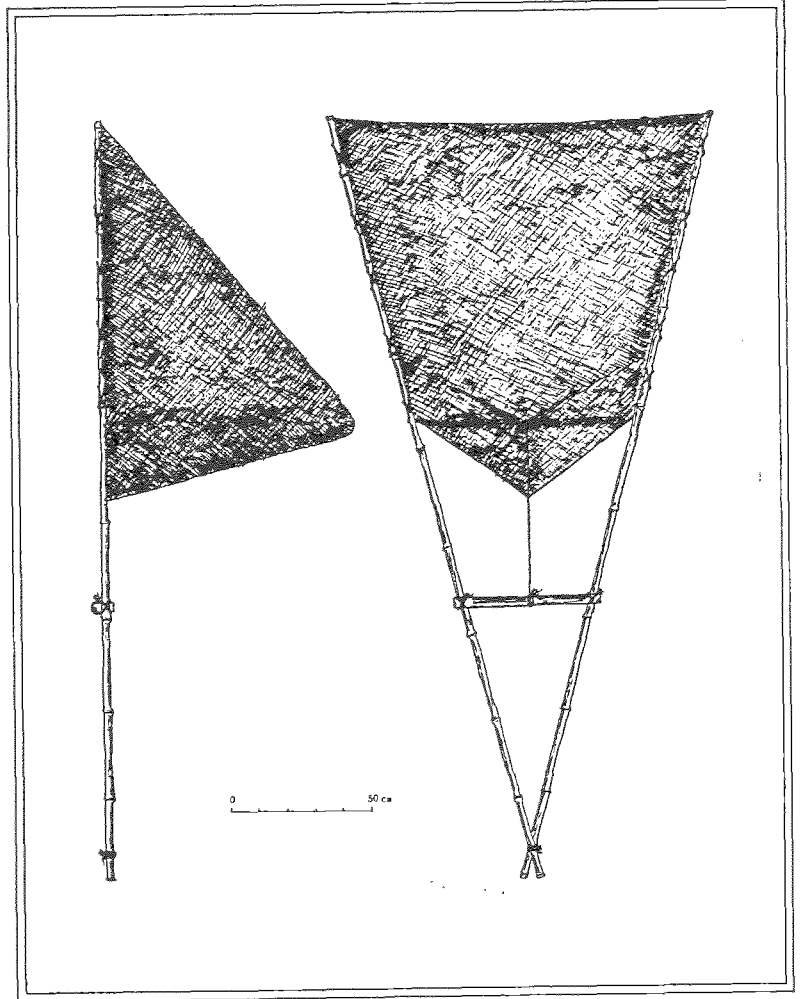
撫網漁法が、古くから行われた漁法であることは、使用漁具の叉手網の歴史と、掬い漁具としての簡単な構造から理解できる。平常では川の各所に生息している魚が、増水時、一斉に川岸寄りの緩やかな流れに集まり、川水が引くまで待機している所を掬い捕るといふ、容易でまた極めて原始的な漁法である点に、撫網漁法の歴史の古さが秘められている。

明治十九年の多摩川下流域の漁業組合規則にも、撫網漁について「…構造ハ長四尺巾三尺網目三十位ヲ用ヒ、九尺位ノ竹二本へ網ヲ付ケ三角ニ拵ヘ、季節ハ六月ヨリ十月迄。…」とあり、多摩川の出水時に限

られた網漁法とはいえ、盛んに行われていた事が判る。

撫網漁は、夏の夕立後、或いは秋の長雨の後などに行うことが多かったが、「待網」と同じく、川が増水した時の漁法で多分に危険を伴うが、水嵩を増した濁流での漁撈は、時により、思わぬ収獲に恵まれる事がある。川漁師たちは、降雨で川水が増すと、この時とばかり、川辺に叉手網持参で繰り出し、撫網漁にはげむ姿が多摩川の各所で見られた。

掬い又手網（撫網）図
（川辺昭吉郎蔵）



一〇、待網

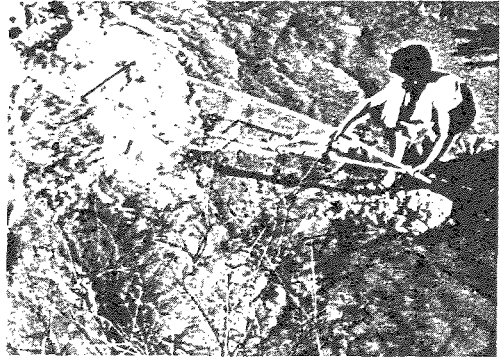
待網漁は、多摩川水系の中・下流水域の本・支流や細流で、古くか

長さ一間前後の竹棹二本を支えとした網で、急流で魚の入り待ちをする際、網の保持を容易にするのと、素早い引き上げをするため、網の先に棹と同じ長さの竹棹を結び付ける。これにより、漁撈者は又手網の手元を握り、もう一方の手で支え竹の棹を持ち、奔流で網の位置を

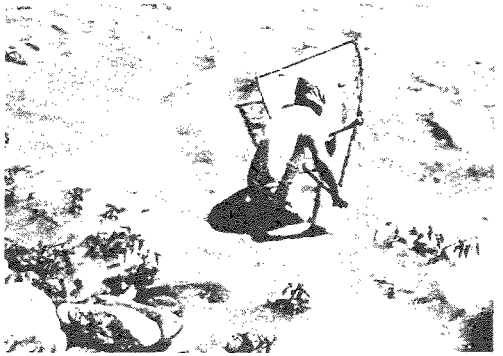
ら行われた原始的な掬い網漁法である。降雨で川水が増水した時に行い、特に九月以降の台風期に多かった。待網漁では、又手網もしくは半円型の網ブツタイを使い、増水時に川岸近くに寄ってくる魚を掬い捕る点で、「撫網」と共通した技法である。だが、撫網漁法は、川面の上流から下流に網を操作して魚を掬い捕るのに対し、待網は流れに直角に網を入れ、両手で固定したままで魚が網に入るのを待ち、入った瞬間に素早く引き上げる、入り待ちの掬い技法である。

待網漁の掬い具には、又手網もしくは半円型の網ブツタイが使われる。又手網は、長さ二間前後の二本の竹を用い、その一部に網を取付けた長三角状の掬い網で、撫網漁と同型式の網を用いる場合と、待網漁専用の又手網を使う場合がある。

待網の専用網は、前記の又手網より短く、



待網漁／昭和三十年代・立川市教育委員会提供

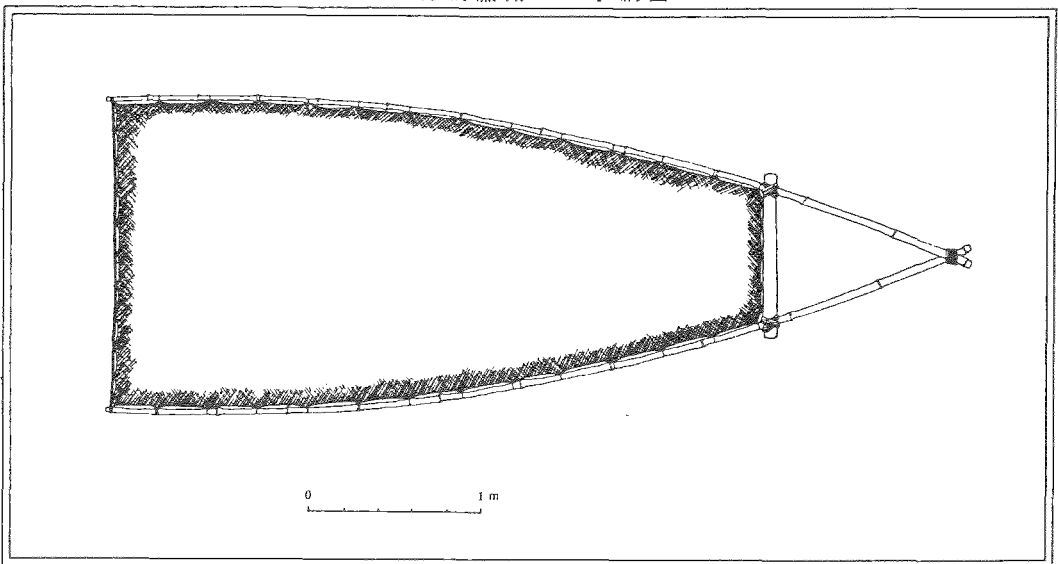


待網漁／昭和三十年代・立川市教育委員会提供

固定しながら、魚が入るのを待つ。

また待網漁では、比較的網の底を浅く作った、網ブツタイを使用することもある。半円型の頂部が素通しになった掬い網で、多摩川流域の一部では、網ブツタイと呼んでいる。こうした軽快な構造の掬い具は、増水時における水の激しい抵抗を、少しでも減らすための工夫が為され、また、危険な場所での取扱いや掬い捕りなどの動作が、素早くできる様な構造になっている。待網漁では、いずれの掬い具を使う場合でも、網に入った魚の魚信を取るため、アタリ糸を一本通し、それを直線状に伸して指先に結び、魚が入るのを待つ。アタリ糸は又手網では縦に、また網ブツタイでは横に、いずれも網の中心に張っておく。

待網漁用の又手網図



降水で水嵩を増した濁流は、流心では奔流が渦を巻き、時折、上流からは流木などが流れて来る。だが、川岸近くは流速も緩く、魚は本能的に危険を避けてこうした場所に集まるが、流れに直角に仕掛けた網に魚が入った瞬間、反転して逃げ出し

濁水のため、こうした魚の行動が判らないので、魚体がアタリ糸に触れた瞬間に、素早く網を引き上げる。待網漁法では、主にフナ、コイ、ウグイ、オイカワ、ギバチ、ウナギ、カジカ、それにアユなどの魚が捕れる。

待網漁は、川が最も荒れた状態の時に往う危険な漁法であり、魚の最中、昔は誤つて濁流に吞まれて命を失う人もいた。待網漁は体力を要する漁撈のため、腕に自信があり、また川を良く知る経験者以外は行わなかつた。だが、待網漁は普段に捕れない魚が、増水した川岸から容易に捕ることができた。待網経験者たちは、水嵩の状況を判断して流れに網を仕掛け、時には濁流に立ち込んで、危険な漁をする事もあつた。そして、胴の長い生簀代りの待網魚籠を流れに浸しておき、捕れた魚を生かしておくこともある。

一一、ゴリ網漁

ゴリは、多摩川の下流水域に生息するヨシノボリなどのハゼ科の小魚に対する俗称であるが、昭和初期の砂利採掘以前は、下流の川床も砂礫に覆われそこには沢山のゴリがいた。ゴリは美味で佃煮や甘露煮にして良く、そのためにゴリ捕りが行われ、明治二十年、多摩川下流域で結成された漁業組合規約では、ゴリ網漁について記している。

「：ゴリ網 構造長五尺巾四尺位ノ太布ニテ竹二本ヲ付ケシ角ノ網ヲ張、廿尋程ノ縄ヘヲモリノ石ヲ付ケ上流ヨリ追込ナリ、季節ハ五月ヨリ十月迄。…」と記し、ゴリ網漁が、世田谷地先水域から下流にか

けて行われていた事が判る。

ゴリの掬い捕りには、漁網の代りに太糸の布地を用いているが、縄に付けた石で川底のゴリを追い寄せる技法は、「金沢のゴリ」で知られる浅野川で、かつて行われた漁法と大変良く似ている。

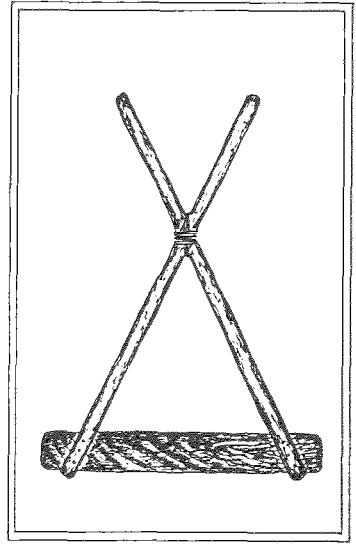
昭和の初期、多摩川下流部でも砂利採掘が盛んに行われ、その結果川床が沈下するとともに、今まで石や礫に覆われていたゴリの生息環境が破壊されてしまい、以後、多摩川下流のゴリ網漁は姿を消した。

一二、板もみ

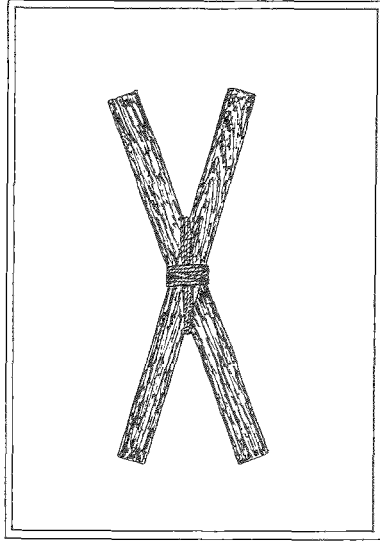
板もみは多摩川の上、中流で行われた掬い網漁で、降雨で川水が増水して濁り、その後、徐々に減水して薄濁り状になった時、最も漁獲のあつた漁法である。この薄濁り状の川水を、多摩川流域では一般に「ササニゴリ」と呼び、また「コマキ」とも称していた。板もみ漁は追い寄せ掬い網漁法の一種で、春から秋の終りにかけて、川がササニゴリであれば、多摩川の随所で行われていた。

板もみ漁法に用いる漁具は、雑魚網と呼ぶ掬い網やブツタイを用い、魚の追い寄せに揉み板を使用する。揉み板は二本の棒を交又させ、その下端に板を打ちつけたものや、二枚の板を単にX状にした用具を自製して用いる。この揉み板は、昔、芋の皮むきに用いた用具に似た形をしている。板もみ漁は、川の中の魚を追い出し、下手の網に寄せて魚を掬い捕るもので、普通は寄せ手と網持ちの二人で行う。

里芋洗い用具



カジカ追い寄せ用具



手が、それより一、二間ほど上手から、板を激しく交互に動かしながら追い下る。水中の魚は突然のことに驚いて下流に逃れ、用意した下手の網に入る。

板もみ漁は、揉み具を持った漁撈者が水中を掻き回し、やみくもに魚を追い立てるが、アユやウグイなど、行動の俊敏な魚は素早く逃げてしまい、掬い具で捕れることは稀である。捕れる魚の多くは川底に

降雨の増水後、

川の水が徐々に引き始めて流れが薄濁りになると、板もみに川に出る。流れの岸寄りの深さ二尺程の所が、この漁法に適した場所である。雑魚網やブツタイを持った掬い手は、掬い具を上流に向けて追いの魚寄せに備える。同時に揉み板を持つ追

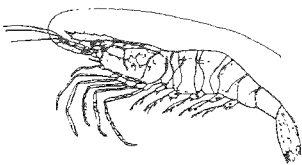
生息する鰍が多く、板もみ漁は別に「鰍すくい」とも呼ばれている。追い寄せに手洗い具もどきの揉み板を用い、しかも、板もみ動作は激しい割に何処となく間が抜けている。だが揉み板使用以前には、漁撈者が自分の足で魚を追い寄せて、鰍などの魚を捕っていた。

三、エビ掬い

かつて、多摩川や支流の小川、田圃の用水路などには、俗に川エビと呼ぶヌカエビやスジエビが沢山生息し、これらのエビを掬い捕って自家の菜料にした。ヌカエビは、川岸が草に覆われた流れのゆるい水域に群棲し、こうした川エビ類をエビ掬い専用の網で掬った。

エビ掬い用の網は網枠に金網を張り、長い柄を付けた用具を用いるが、金網以前は、網目の細かい掬い網に柿渋を塗って使用した。エビ掬い漁は、水温の低い季節に行う事が多く、川岸まで草が茂る深さ一尺前後の流れを、上流からエビ掬い網で二、三間下流に掬い下る。そうすると、草の下の流れに潜むエビが網に入る。こうして掬い集めたエビを、

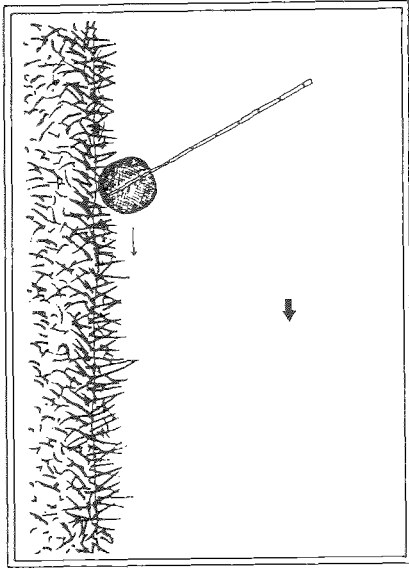
スジエビ



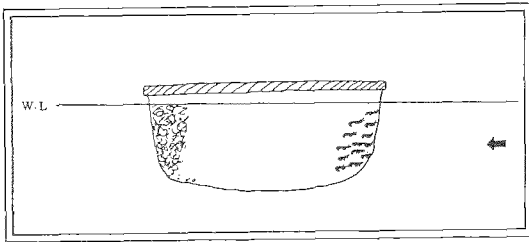
桶やバケツに入れて生かしておき、後で筥を用いて小さなゴミとエビを撰別する。

ゴミとエビの選り分けは、流れにエビとゴミが混り合ったものを浸けると、箆の中でゴミは流れの下手に溜まり、生きたエビは流れの上手に集まってくる。エビが死ぬと、ゴミの中にエビが混ったままで、選別が容易ではない。

当時、エビは流れに沢山生息し、一掬いで百匹以上のエビが捕れ、特に、川岸に川ゼリが生えている様な場所には、エビが沢山いた。秋から冬にかけてがエビ掬いの漁期で、早朝、まだエビが罅から散らない時が最も捕れる。昔は三、四時間も掬うと、三升位のエビが捕れたものである。こうしたエビ掬い専用の網を使う他に、ブツタイなどで



エビ掬い網によるエビ捕り



捕ったエビを箆に入れ、水の流れを利用してゴミとエビを選り分ける

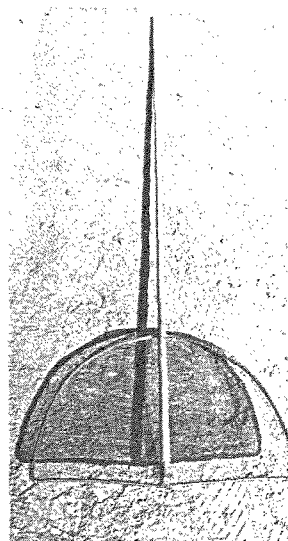
もエビを捕ったが、エビ掬いには専用の網が使い易く、また良く捕れた。

こうして捕ったエビを持ち帰り、かき揚げ天婦羅や、砂糖と醤油で煮込み甘露煮や佃煮にするが、鮮度の良い川エビは美味であった。

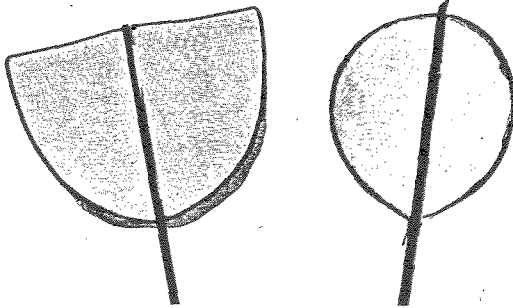


川岸寄りの上流から下流へ、川エビを掬う。／模擬実演者・小林勝太郎

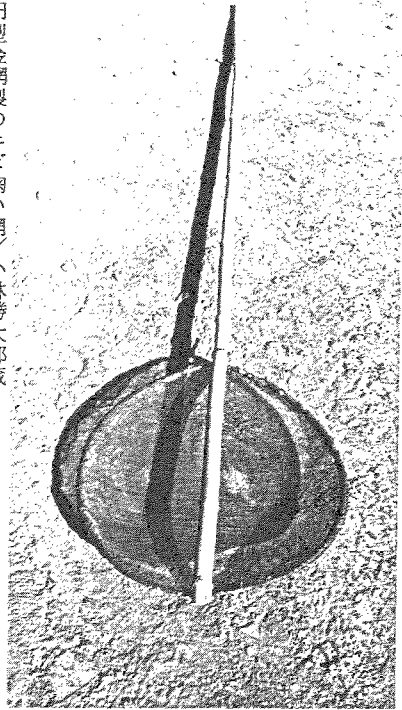
半円型金網製のエビ掬い網／小林勝太郎蔵



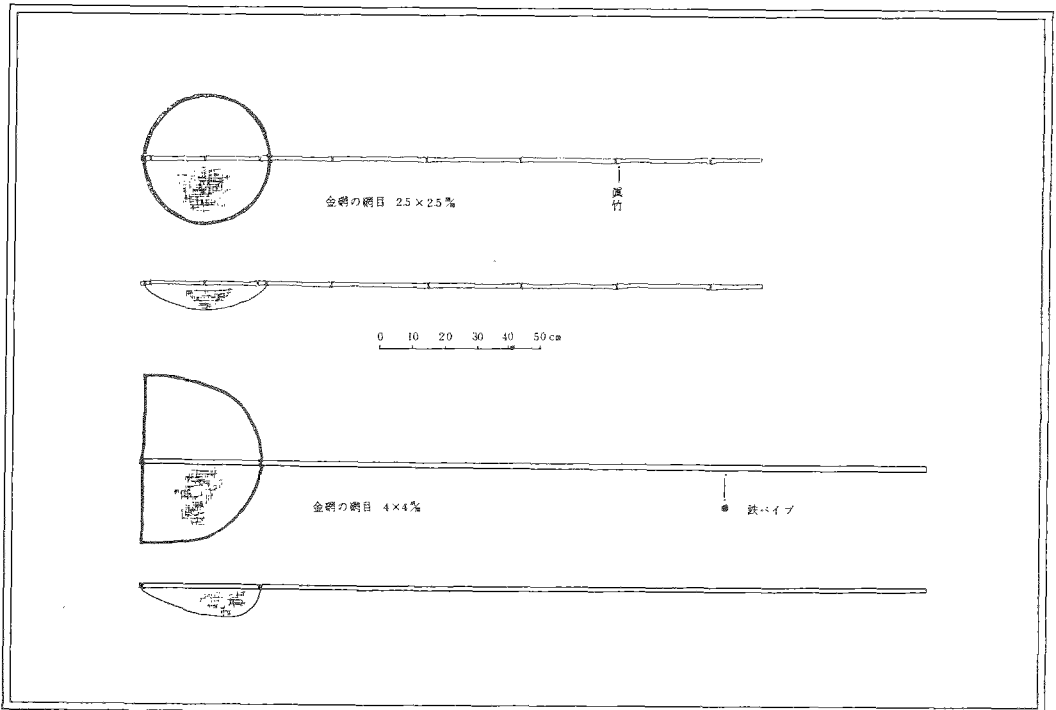
掬い網部。円型より半円型の方が掬い効率が優れている。



円型金網製のエビ掬い網／小林勝太郎蔵



エビ掬い網図
(小林勝太郎蔵)



一四、跳網

跳網は、七月頃から始まり、降り鮎の季節まで行われた漁法で、多摩川水系では特に中流域を中心に、江戸時代から続いた伝統的な網漁法である。跳網漁の対象魚は鮎であり、操業には数十名が参加し、寄せ手と網手による共同作業で行う。多摩川水系では、「寄せ網」と同様に、多人数による大規模な漁法である。

跳網漁には多数の人手を必要とするが、昔からこの漁では、捕れた鮎を参加者全員で等分する。こうした漁撈の性質上、古くから集落や村を単位とする協業の上で成り立つ漁法であり、専ら流域農民たちによつて行われ、個人の技量に依存して生計を立てていた職漁者たちは、協業的な平等配分を前提とする跳網漁を行う事は稀である。

明治三十年

の「水産に関

する書類」に、

多摩川の跳網

の説明があり、

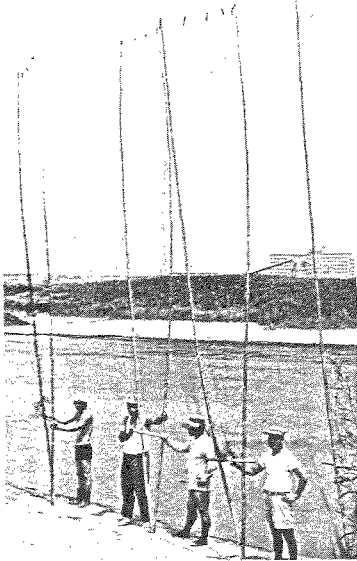
「…芻網漁

ハ長九尺巾三

尺網眼三十目

位ヲ用ヒ一丈

二尺許ノ竹二



跳網漁の漁人たち／昭和五四年八月・多摩川日野栄町地先水域での「伝統漁法実演」



跳網漁／昭和五四年八月



跳網漁／昭和五六年八月

本を該網ニ附着シ、三角形ニ製シ、上流ヨリ繩ヲ二尺ニテ水中へ曳キ、鮎魚ノ驚キ飛ヒ揚クルヲ掬ヒ捕ルモノナリ。…」と記している。

跳網漁が行われた水域は、多摩川本流の青梅付近から下流は菅の辺りまでで、支流の秋川でもこの漁法を行っている。跳網は別に「弾ね網」、「芻網」、「撥網」などとも書き、また地域によつて、跳網漁の呼称は「飛び網」（中神）、「羽子網」（稲城）、「跳ね込み」（菅）、「跳ねかし」（菅）、「受け網」（世田谷）などと呼んでいる。

跳網漁は、水中の鮎を威す用具と鮎を捕採する網を用い、漁撈者は流れの規模にもよるが、普通は二十人前後で操業し、多い時には三十人を越える場合もある。この様な大人数を動員する漁撈であるため、

跳網漁は農事の休みや盆の時節を見計らい、農民たちが大挙して行う。三人から五人の網手が、それぞれに鮎を受ける大型の叉手網を持ち、残りの人たちが、一本の追い寄せ鮎を川巾いっぱいに渡し、川の上流から下流に向かって、流れを上る鮎を追いつめて行く。

植物の葉を束ねて荒縄にくくり付けた威し具が、水勢で回転し、キラキラと鈍い光を放つと、流れを遡ろうとする鮎が、驚いて下流に逃げる。川巾に一列に並んだ追い手が下流に向かい、徐々に追い寄せまる威し具に、鮎はすっかり狼狽してしまふ。恐怖のあまり度を失なつた鮎は、進退極まつて、逆に威しの列を飛び越えようとして、一気に水面から跳躍し、威し具の後に待ち構える叉手網に受け捕られる。

狂気とも言える鮎のこうした習性と行動は、他の魚には見られぬものである。跳網漁法は、威しと追い寄せに対する鮎特有の反応を利用した漁法であり、鮎のこうした水面からの跳躍は、彼等にとつては、止むに止まれぬ切羽詰まつた上での行動であろうが、逆にそれが災いして、易々と人間の奸智に陥ち込んでしまうのである。鮎が追い寄せの威しにさからわず、そのまま下流へ何処までも逃げて行けば身の安全が計れるはずなのに、鮎はこうした威し具に追い寄せられると、下流に逃げようとはせず、すつかり混乱してしまい、逆に上流に向かつて水面を飛び上る。清流の香魚として讃えられる鮎も、或る種の外的刺激に対しては、如何とも説明し難い反応を示し、それが跳網漁に利用される事になって、結果的には、この俊敏な川魚の意外な習性が災いすることになる。

跳網漁法に用いる

鮎威しの漁具は、麻や棕櫚などの丈夫な荒縄に、約一間ばかりの間隔で小児の頭

ほどの川石を取付け、

その間に、水中に浸すと白銀色に光る植物の葉を、小枝ごと

取り付ける。威しに使う植物には様々な

ものが用いられ、それらの植物の葉は、

いずれも葉の裏や表面に細かい毛が密生し、水に浸すと、そ

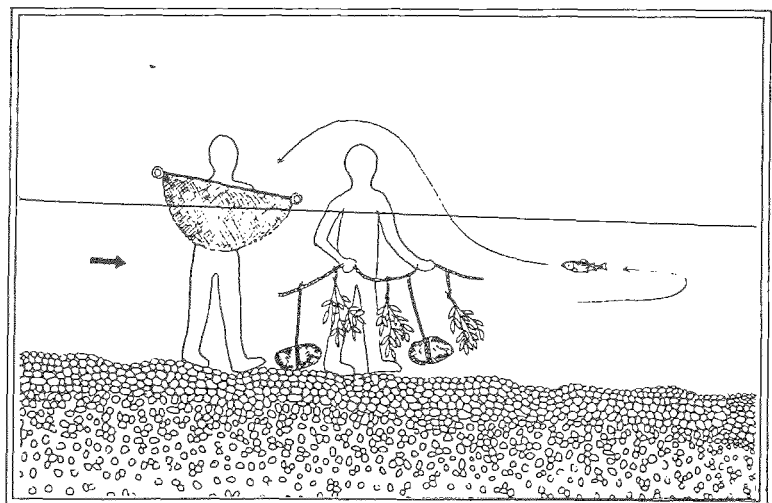
の間に含まれた細かい

空気粒が気泡となって、日の光を受けて白銀色に輝く。そうしたものが水中にヒラヒラするのを川魚は嫌い、且つ恐れるのである。

鮎威し用の植物には、多摩川流域で俗にウラシロと称する、シロダ

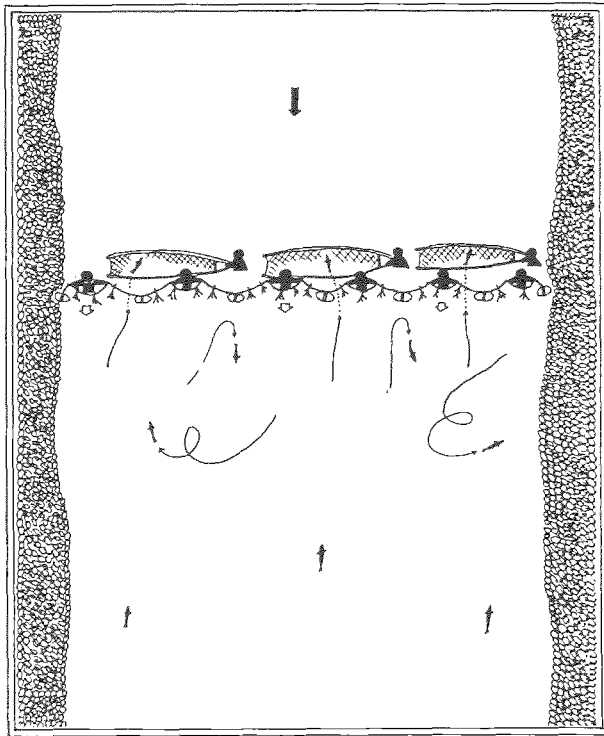
モの葉付きの小枝を束ねたものを用いる。シロダモはクスノキ科の常

緑高木で、葉の裏面は白粉色を呈し、若芽や若枝には黄褐色の毛が密



跳網漁様式側面図

跳網漁撈図



川の上流から下流へ、オカザリを持つ漁人（魚印）が鮎を追う。水面を跳ねた鮎に網が待ち構えている。

生しているため、鮎威しには最も効果的な植物である。そのため、跳網漁を行う農家では、庭先や畑にウラジロの木を植えている所がある。またシロダモの他に、ヨシや川柳、それに笹や熊笹、ヨモギなどの植物も有効で、シロダモが入手出来ない場合はこれらの材料を使うが、威しの効果はシロダモの葉に及ばない。多摩川の中流域では、この威し具を一般にウラジロと呼んでいるが、地域によっては「アジロ」又は「鶺鴒」とも言う。

跳網漁の網は、極細の絹撚糸を編んだもので、普通は四分から四分半の網目のものを用い、網に柿渋が塗ってある。網の手前が深く袋状となり、網手は、跳び込んできた鮎を網の袋にためておく。漁の間、網手は指で網をおさえ、中の鮎が逃げられぬように貯えておき、折を見て魚籠に移しかえる。

跳網漁は、追い手や網手が、川の中に立ち込んで操業する漁法である。水深が腰から胸あたりまでの瀬が、この漁法に適した場所であり、水深がこれより浅くても、また深くても具合が悪い。また、跳網漁に適した川の状態は、流れの水が澄み、日中の、しかも正午過ぎからが最も良く、こうした条件の川では、鮎からは水中の威し具が良く見えるので、漁獲の効果がある。

多摩川水系の跳網漁は、通常では十数人以上の人数を必要としたが、羽村地方で行われた跳網漁は、三人もしくは単独で行っていたと「羽村町の民具」が伝えている。それによると、一人で行う時は、川の中に網を竹棒などで固定しておき、鮎が跳ねて入るのを待つ、という方法で行っていた。

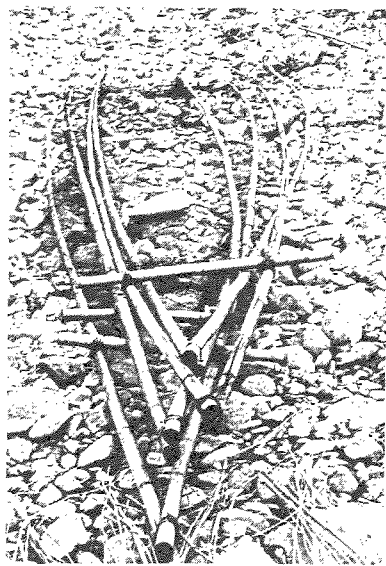
古くから、多摩川中流域の農民たちが、遊びと実益を兼ねて跳網漁を行ってきたが、そうした実状を『武蔵名勝図会』（一八二三）が伝えている。

「：跳網・この漁は日野辺にては絶えてなき漁なり。拜島辺にて、この漁をなす。六、七月の炎天の時、日中にこの漁をなす。その仕様は川の広狭にそいて繩を兩岸にて引っぱり、その繩に注連の如く藁を結

び付け、または
 本草を附けて、
 川下より川上へ
 両片にて石の縄
 を引き行く。そ
 の縄に随いて大
 きなる長き縄を
 両方より差し出
 して、同じく川
 上へ行けば、鮎
 はその驚縄を飛び
 越えんとして
 四、五尺ほども
 川下へ飛ぶとこ
 ろをこの縄にて
 捕うるなり。大
 抵鮎は五、六寸
 以上なり。望み
 見るに甚だ興あ
 り。……と記し、

戦前まで行われた跳網漁法が、上流から下流に向かって威し寄せる技法であり、それとは全く逆の方法を述べている点、いささか疑念が残るが、その他の跳網漁の要領については、簡潔な記録を残している。

ウラジロを付けた跳網漁の追い威し具。縄に石を取付ける代りに鉄鎖を用いている。／昭和五四年八月



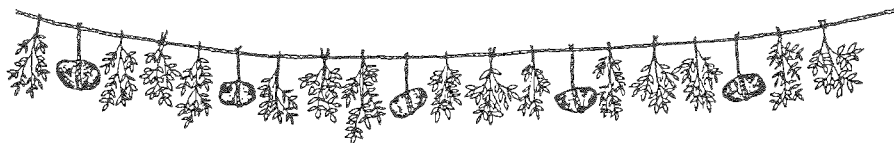
跳網漁に使う大型の受け又手網／鈴木由太郎蔵

先きの『武蔵名勝図会』でも「……望み見るに甚だ興あり……」と、跳網漁法の面白さを述べているが、数十名の漁撈者が流れに立ちこんで鮎を追ひ、その鮎が次々に用意の又手網に飛び跳ねる様子は壮観で、誰しもが興味をそそられる。明治中期に甲武鉄道が開設され、都心との交通が開けると、大勢の人たちが多摩川中流の川原を訪れるようになり、鮎料理と共に、鶺鴒や跳網などの漁の有り様を楽しんだ。

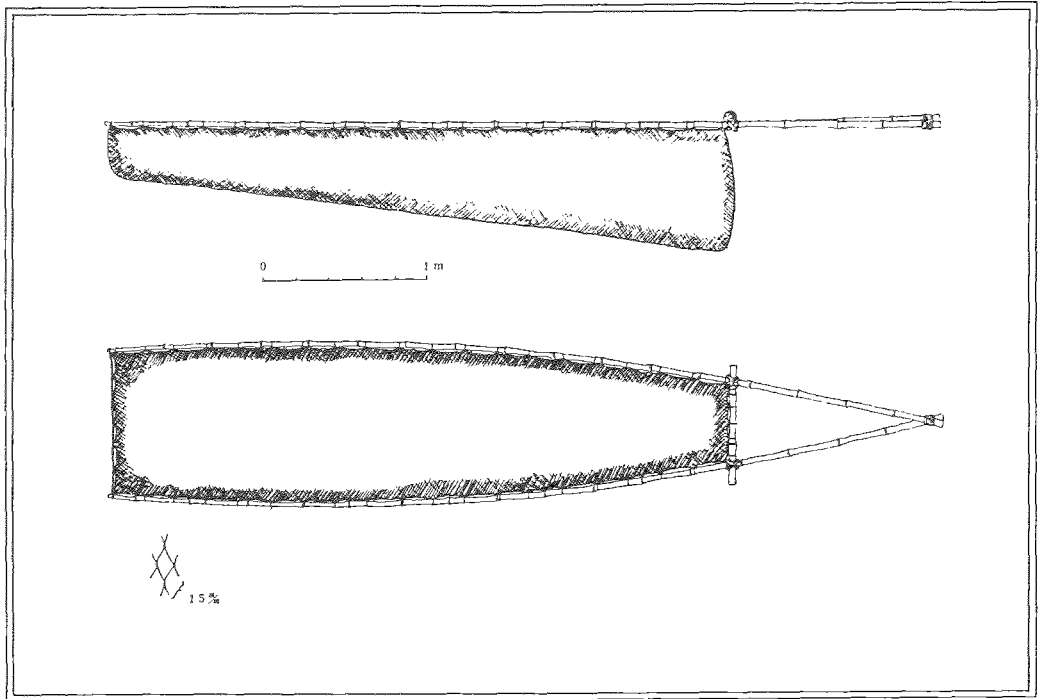
明治天皇も、明治十四年六月二日、府中地先の水域で行われた跳網漁をお楽しみ遊ばされている。『明治天皇記』によると、

「……午後一時、鮎を多摩川に捕ふるの状を覽たまはんがため、騎馬にて連光寺河原に幸して、天幕内なる玉座に著きたまふ……二時前岸の丘上に鼓声轟くや、漁夫各々其業に就く、先づ撥網三組一組に続き鶺鴒二組一組三人御覽所の前を漁して過ぎ、

ウラジロを付けた鮎の追い威し具



跳 網 図
(鈴木由太郎蔵)



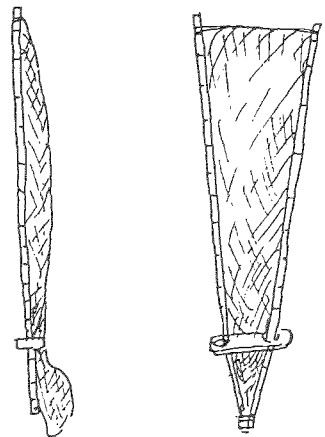
次に漁舟二隻
網を投じて天
覧に供す。...

と、当時の
天覧漁法の模
様を伝えてい
る。

鮎がこうし
た威し漁具に
反応し、飛び
跳ねる習性を

利用した跳網漁法は、全国的に行われた漁法で、東北から関東、それ
に遠く四国や九州などの地域にも分布している。

ハネ網漁の網



秋田県下の水域で用いられた跳網漁用の網
『秋田郡邑魚譚』より

一五、受け網

川は、流れに棲む魚たちの生息場であり、同時に、魚が成長するた
めに季節移動を繰り返す際の通路でもあって、さまざまな魚族が河口
から中、上流へ、又は上流から下流へと絶えず移動している。川魚た
ちの移動経路は、魚種によって季節的な違いがあり、また移動する範
囲も異なるが、魚たちは、絶えず流れを移動しながら生活している。
そうした流れに滝や堰があると、遡上を阻まれた魚がその下に群集し
て、なおも障害を越えようと果敢な跳躍を試みる。

昔、多摩川では、魚の移動が活発になる春から夏にかけて、障害物を跳び越えようとする魚を、網で捕らえる受け網漁が行われた。

川に堰などの、魚の遡上への障害物があると、水が溢流する下には魚が沢山集まり、流勢に抗しながら魚たちは果敢な跳躍を試みるが、流れに押し流されてしまう。特に、鮎は遡河行動の旺盛な魚で、こうした場所には、沢山の鮎がひしめき合い、しきりに跳躍を繰り返している。また降雨で川が増水し、川の一部に急な落ち込みができると、そこに沢山の魚が集まり、流れを遡ろうと盛んに跳躍する。こうした場所に四つ手網や又手網を仕掛けておき、跳躍する魚を網で受け止めて捕らえる漁法が受け網漁であり、条件次第で相当の漁獲がある。受け網漁は、ともすれば乱獲になり易い漁法であるため、地方によってはこの漁法を禁止している所もある。堰などの場所で、受け網漁法によつて大量の魚が捕れたのは、大正の末頃までで、以後、多摩川の魚は次第に少なくなり、こうした漁法は行われなくなった。

魚の捕採が容易な受け網漁は、古くから行われた漁法であるが、江戸時代の『新編武蔵風土記稿』では、秋川の鮎跳滝での受け網漁を述べた記録がある。

「…鮎跳瀧・或は中山瀧ともよぶ。村の東乙津村の境より二丁ほど秋川の上流にあり、兩岸岩石さし出たり。川幅は大抵二間許、磐石の上より六、七尺飛流して、其下に淵あり、年々三月中旬より土用あけ迄は、鮎を漁す。鮎の上流に溯るは半夏中なり。此時魚の大き五、六寸なり。瀧口にのぼりて又下り、ひたすらかくの如くするほどに、魚

の形瘦て跳躍自在にして上流に沂ることを得ると云。漁者その瀧口を上る比、さで網をもて受け捕ること最奇観なり。総て此瀧に登るものは鮎・鱒・鱒・鯊（やまめ）・鮠の類也。」（『新編武蔵風土記稿』巻之百十一）

と、滝壺での受け網漁法に又手網を用い、鮎や鱒などの他に、ウナギ（鱺）やヤマメ、カジカ（鯿）、ウグイ（鮠）など、滝を遡ろうとする魚を捕っていた。

受け網漁法は、江戸時代、滝壺の傍らで又手網を用いて鱒を捕る「鱒の跳網」（『武蔵名勝図会』）と原理的には同一の技法である。受け網といい、また鱒の跳網といい、共に往時の多摩川の豊饒さを物語るに相応しい古典的な漁法といえる。

一六、鱒の網漁法

昔から多摩川流域でカワマスと呼ばれている魚は、実は桜鱒のことです。桜鱒は川魚の中でも、最も味大な形魚として知られている。春から秋にかけて、多摩川の河口から上流に遡る桜鱒を捕るために、古くから様々な漁法を用いて捕ってきた。

『武蔵名勝図会』に由ると「…鱒は釣するなり。或は所によりて地引網を似て捕る。又時候によりて踊網を以て捕る地もあり。…」と記している。記述の中の「踊網」は、別に「鱒の跳網」とも言われ、滝などを上る鱒を、又手網などで受けて捕らえる漁法である。また、鱒を釣る技法については、詳しく述べられていないが、鱒釣り専用の

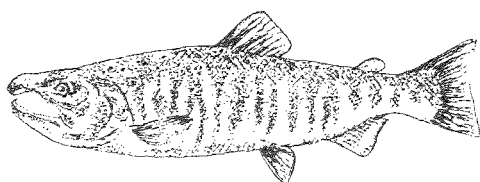
仕掛けを用いて釣り上げたものか、或いは外道として、他の釣漁法の際に捕られたものかは判然としない。だが昔の多摩川が、われわれの想像以上に豊かだった事は、様々な古い記録からも明らかであり、江戸時代の鱒の釣漁法については、鮎のサクリ漁法など掛け釣りに似た釣り方や、鱒の餌釣りなどの技法が行われていたと考えられる。

一方、昔に比して数が少なくなつたが、多摩川では、昭和二十年代頃まで、様々な網漁法で鱒が捕れた。主に「地曳網」や「寄せ網」、「ペラ」それに「刺網」などの漁法に鱒が掛かり、世田谷地先より下流では地引網が用いられ、日野・立川辺りでは、刺網や寄せ網、それに偶ペラ漁で捕れることがあつた。更に上流の羽村堰の辺りでは、堰に遡上を阻まれた鱒が蝟集している所を、専用の流し刺網を用いて鱒捕り漁法が行われていた。

羽村地方の享保四年（一七一九）

の記録に、鱒網使用の記述が見られる。「羽村町の民具」によると、多摩川本流の瀬と淵の中間に、巾が四、五尺、長さ十間、網目が一寸三分の刺網を夜間に流しておき、その網に鱒の歯が引掛かつた所を捕り上げる、と記している。この漁法は、秋に川を遡る鮭を捕るために行う、「鮭の流し刺網」と同様の技法である。また、「鮎の刺

サ ク ラ マ ス



網」に、偶鱒が張り網に歯をからみつかせてしまい、捕えられる事もある。

世田谷地先水域から下流にかけては、地曳網で鱒を捕り、明治十九年に多摩川下流に結成された漁業組合規則によると、「地曳網、構造ハ網目二十五目ヨリ至ル巾六間長三間鉄イヤ及土イヤヲ用ヒ、網ハ廿尋ヲ似テ人夫四人ニテ引ク。」とあり、当時、こうした地曳網を用いて、鯉やマルタウグイと共に、川を遡る鱒を捕っていた。

中村亮雄の『小向の漁』によれば、大正十年頃に行われた鱒の地曳網漁についての聞き書があり、要約すると、――白魚漁が終る五月初め頃から、鱒が河口から遡り始める。地曳網を引き、鱒がかかるとずつしりと手応えがあつて、多い時には三十四匹も網に入ることがあつた。捕れた鱒を鱗を落さないように取り扱い、鮮度を保つために、即座に鱒の頭部を叩いて殺し、市場に出荷した。――とある。

多摩川流域では、鱒は鮎よりも珍重された魚であつたが、何せ収穫量が少なかつたため、鮎ほど広く知られることはなく、一部の川漁師たちの間で珍重された。海から遡る桜鱒は、体長が一尺以上二尺にも成長する大形魚で、味は大変に美味な魚である。肉質は身離れが良く、昔の桜鱒の味をなつかしむ川漁師は、

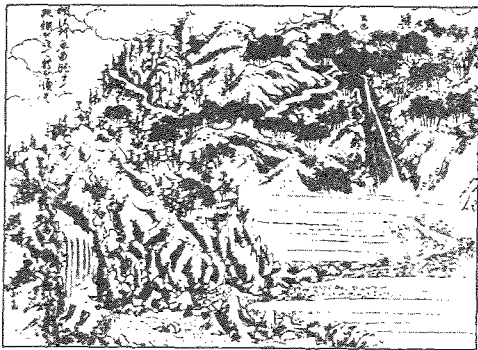
「カワマスほど美味しい魚はいない。食べるとシギシギして、塩焼きが最高だ。」と語り、その味を知る人たちにとっては、大変に珍重された魚だと言う。偶、網で捕れた鱒は、職漁者といえどもこの魚だけは仲買人に渡さず、特別の扱いをした。鱒は売らずに親しい人に贈つたり、自家で調理して食べたものである。

一七、鱒の跳網

多摩川水系の上流には、サケ科の魚である山女魚が生息し、この山女魚の一部が川を下り、海を回遊して数年の後に、産卵のため再び元の水域に回帰してくる。降海性の山女魚が、海から多摩川に回帰した時は、別種のように美事な桜鱒になっている。

昔から多摩川流域では、海から上る桜鱒を「カワマス」と呼び珍重した。桜鱒は食味に優れ、魚体も大きい。成魚では二尺近くにもなるが、多摩川流域で一般に呼ばれるカワマスは、北米原産のイワナ属に分類されるカワマスとは異なり、桜鱒のことである。

昔、多摩川の本流に滝があつて、降海の時、難なく通過した桜鱒の幼魚の山女魚が、海洋で成長し、桜鱒となつて母川に回帰した時に、その滝が障害となつて川を遡ることができない。何度も滝壺から身をひるがえして遡ろうとするが、その都度、滝の流勢に抗しかねて、魚体は宙に舞い、再び滝壺に落ちる。滝壺の中には、懸命に滝を越えようとする桜鱒がひしめいており、次々に果敢な跳躍を試みる。



魚留瀧での鱒魚の図／「武蔵名勝図会」より

こうした有り様を人間が見逃すはずはない。かつて、こうした魚止めの滝の下で、滝を遡る桜鱒が流れに抗しかねて、宙に舞う瞬間を狙い、又手網で掬い捕る鱒の跳網漁が行われた。現在では、そうした滝も流れが變つて川底に埋まり、また、魚族が著しく減少した流れとなつた多摩川には、海から桜鱒は遡らない。

鱒の跳網漁は、江戸時代に行われた漁法で、多摩川の本流に限らず、支流の秋川でも同様の網漁法が行われていた。また別の名を「踊網」とも呼び、当時の記録によると、滝に行く手を阻まれた魚は、桜鱒ばかりでなく、鮎やウグイなど、滝を遡ろうとして跳躍する魚を、又手網などの掬い網を用いて捕らえていた。

魚留瀧鱒魚図の拡大。瀧の水しぶきを浴びながら、二人の漁人が手にした又手網で、跳び落ちる鱒を待つ姿が描かれている。



この漁法は、『新編武蔵風土記稿』および『武蔵名勝図会』で紹介され、文中の魚留瀧は、かつては、現在の鳩の巢地先水域にあつた滝で、今は埋没して見られない。

「魚留瀧・村の中間にあり。高さ三間半餘、幅三間許。壺間よりそそぎ下す。此所は多磨川の本なる瀬ゆへ、四、五月の此小麥の花盛

なる時、鱒の魚下流より上り來り、瀧つぼにあつまり跳りこえんとし
て飛びあがること頻りなり、此時土人四、五尺許りなる網を竹にむす
び、それを楯て丸くなし、かの飛揚るをうかぐひ網を出してすくひと
るに、大なるは一尺六、七寸、小なるも八、九寸より下らず。此魚を
ひさぎて少しく生産の資をなす。：」（『新編武蔵風土記稿』巻之百
十六）

と記して、かつての滝場で、水しぶきを浴びながら、勇壮な鱒の跳
網漁を行う有り様を紹介している。また、

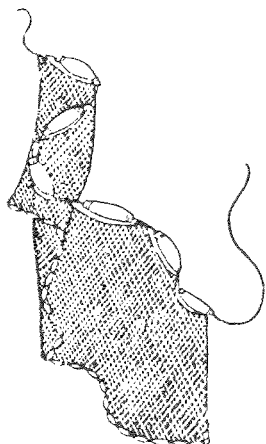
「：魚留滝、多摩川本瀬の瀬なり。高さ二間半、幅三間余、深さ不
知。広さ五間四方。鱒、鮎はここを限りとして留るゆえに名とす。こ
こに鱒の跳網という漁あり。四月のころ小麦の花盛んなる時分、南岸
の岩上に居て、日中この滝を諭え登らんと跳ねあがるを待ち居て網を
出し漁するなり。八、九寸より二尺程なる鱒を漁す。望み見て一興あ
り。：」（『武蔵名勝図会』）と記し、同書には、多摩川本流の魚留
瀧の傍らで、叉手網を用いて跳網漁を行っている土地の漁人二人が描
かれており、当時の漁法の模様が良く判る。

かつて多摩川が生命力にあふれて多くの魚族を育み、桜鱒のような
大形魚種が大挙して回帰した時代は、明治に入ると終焉を迎える。今
日では、到底信じられないような壮大な鱒の跳網漁法は、在りし日の
川の豊かさを物語る過去張に封じこまれてしまつて、それ以来、久し
い時が経つのである。

一八、刺網漁

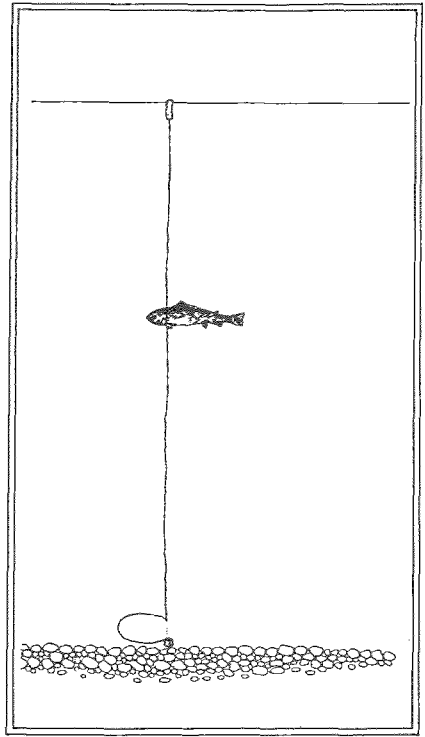
多摩川の中流から下流にかけて、魚が網目に刺さつた所を捕らえる
様々な刺網漁法が、古くから行われていた。刺網漁は、魚種や体形に
応じて網目の異なる刺網を用いるが、多摩川中流の上部水域で行われ
た鱒刺網から、下流は汽水域での白魚刺網に至るまで、それぞれの魚
種に見合った漁法が行われていた。

刺網は、細い絹糸を編んだ漁網の上下に浮子と錘を付けた横長の網
で、これを流れと直角もしくは斜めに、或いは川岸を半円状に取り囲
んだ状態で設置するな
ど、漁法に応じた様々
な張り方があり、また、
刺網を網目の大きさ順
に三段に張る技法もあ
る。刺網の浮子は桐や
檜、それに杉などで作
り、それを網の上部に
一尺前後の間隔で取り
付け、錘は鉛もしくは
鉄製の沈子を網の下部
に結着する。これによ
り浮子が水面に浮き、



江戸時代に発行の『魚獵手引』に描かれた
刺網図。同書では刺網を「めざし」と言い、
「：この網を川之横に張りおけば魚きたり
此あみへ鼻を入れ先へくぐらんと先へ行き
て見るに先へもゆかれぬゆへあとへさがら
んと思へばあごにいりてとれずあとへ
も先へもゆかれずして網にかゝりいるなり
：」と記している。

刺網に魚が刺さった図



錘が沈んで刺網が水中に張られる。

流れを遊弋する魚が仕掛けた網に直進すると、頭部が網の目に突き刺さり、胸鰭と背鰭が網目にさえ切れられ、また戻ろうとすれば網糸が鰓蓋に喰い込み、魚は網から逃れられない。こうした所を漁撈者は捕らえるが、刺網漁を行うのは職漁者が多かった。

多摩川水系では、古くから様々な刺網漁が行われてきたが、魚の捕採技法の点で二つに大別される。一つは、魚の行動習性を利用した刺網漁法である。魚族が流れの中を移動する場所に、予め刺網を設置しておき、流れを上下する魚が張られた網に刺さった所を捕える。これには「張網」をはじめ、「置網」、「ハヤ刺網」、「罾網」、「カマツカ網」、「鯉刺網」、それに「白魚刺網」などがある。これらの刺網漁法は、いずれも流れを移動する魚が、その行動習性によつて刺網に掛るもので、漁撈者は魚に対して追い威しなどの漁撈手段を一切用

いない。

一方、漁撈者が魚の集まる深場所や流れに刺網を設置し、包囲もしくは退路を断たれた魚を、叩き棒や投石による威しを仕掛け、逃げる魚が刺網に掛かるのを捕らえる漁法があり、これには「鮎刺網」をはじめ、「巻どり」、「巻網」、それに羽村地方で「刺網」と呼ぶ漁法などがある。これらの刺網漁は、いずれも漁撈者が魚の寄り場を熟知して行い、刺網で取り囲んだ魚群に突然烈しい威しをかけ、驚いて逃げる魚を網に掛ける。これらの漁法は、先きの定置刺網漁法に比べて積極的で、また攻撃的な漁法といえる。

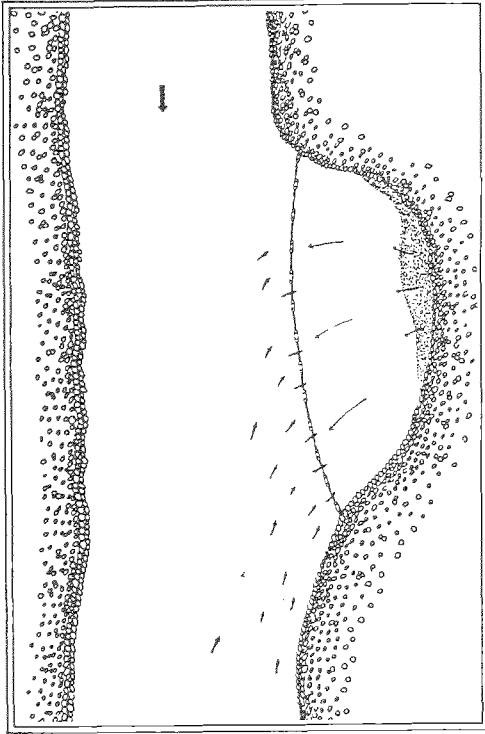
刺網漁法には、対象魚や川の状況などに応じて、魚の捕採方法には様々なヴァリエーションが見られる。

潮田鉄雄の『稲城・ものくらしⅢ』によると、稲城地方では、三月から四月にかけて、産卵期に入ったウグイを捕るのに、川幅いっぱいに絹製の刺網を張り、網に掛かる魚を捕り、この地方ではウグイの刺網漁を「目刺し」と呼んでいる。

また、立川市教育委員会の『多摩川と生活・魚と伝統漁法』では「置網」と「巻どり」が紹介されている。

多摩川中流域で、降雨により川が増水して濁ると、湧水のある川岸のえぐれに、濁りを避けて魚が寄ってくる。こうした魚を捕らえるために、えぐれた水域を横切つて刺網を張り、清水を求めて集まる魚を捕らえる漁法が行われ、立川地方では「置網」と呼んでいる。夜間に仕掛けて翌朝早くに網を引き上げるが、ウグイやオイカワなどの「ザ

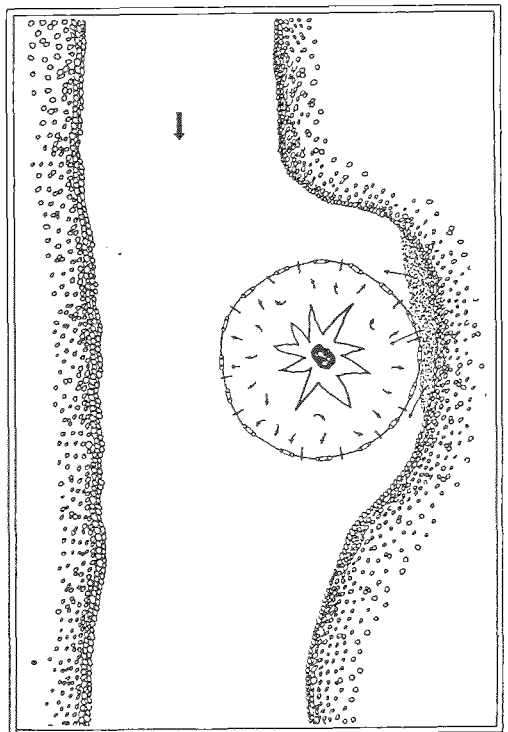
置網漁法図



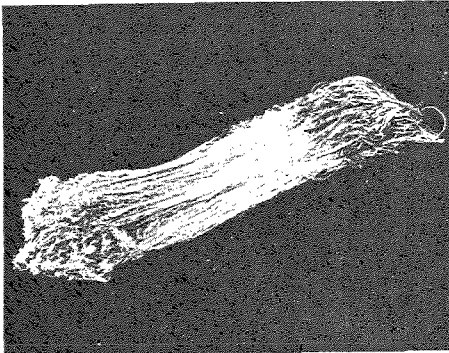
川が濁水の時、川のえぐれに湧水があると魚が寄るので、そこに刺網を張って捕る。

「ツッコ」が捕れる。
 同じく川の濁水時に行われた刺網漁法では、濁りを避けて湧水のあ
 る川岸に寄る魚を刺網で取り囲み、その中に石を投げ込んで魚を威し、
 逃げようとする魚を刺網で捕らえる「巻どり」と呼ばれる漁法もある。
 『羽村町の民具』によると、羽村地方の刺網漁は、多摩川本流で流
 れのない川岸の水溜りなどに刺網を仕掛け、ウグイやフナを捕る漁法
 が行われた。水辺から斜め下、約四五度の角度に刺網を張り、下手か
 ら竹棹で水面を叩いて魚を追い込み、網に刺さる魚を捕らえるなど、
 地域によって様々な内容の刺網漁法が見られる。

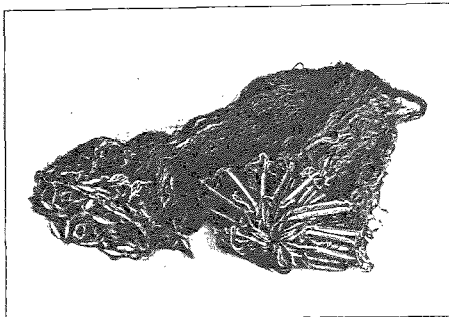
巻どり漁法図



魚を刺網で取り囲みいきなり石を投げ込み驚いて逃げる魚が網にかかる。

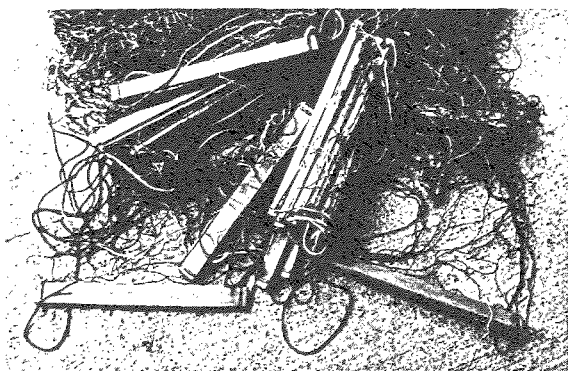


刺網／立川市教育委員会蔵

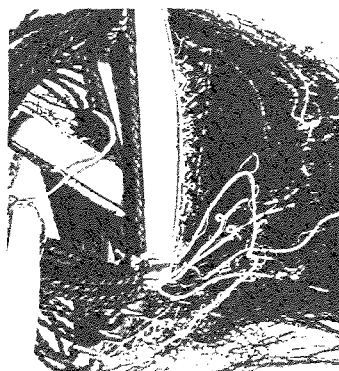


刺網／大田区立郷土博物館蔵

刺網の母子（檜製）／調布市郷土博物館蔵



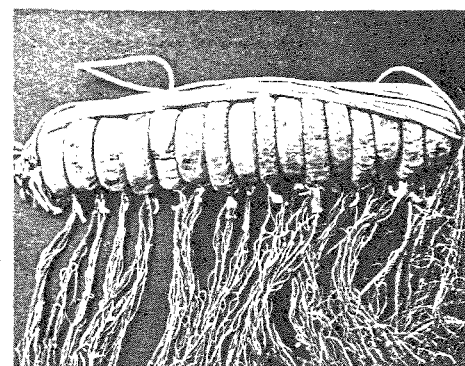
刺網の浮子（桐製）／立川市教育委員会蔵



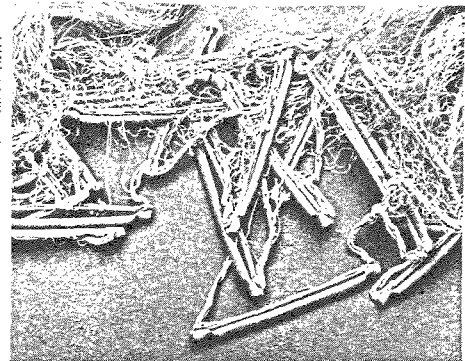
廃材を浮子に用いた刺網。浮子にはゴム製のスポンジの中空管を切って使用している。／大田区立郷土博物館蔵



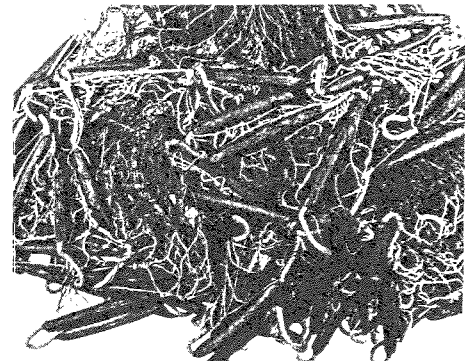
丸型穴空き浮子（桐製）の付いた刺網／青梅市郷土博物館蔵



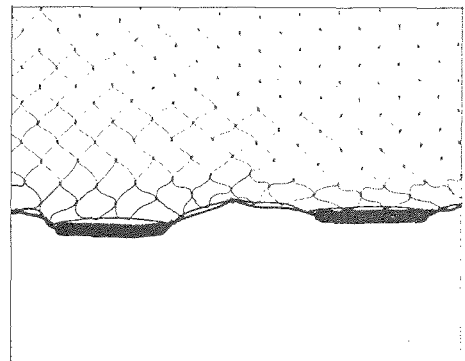
長蛭型錘の付いた刺網／青梅市郷土博物館蔵



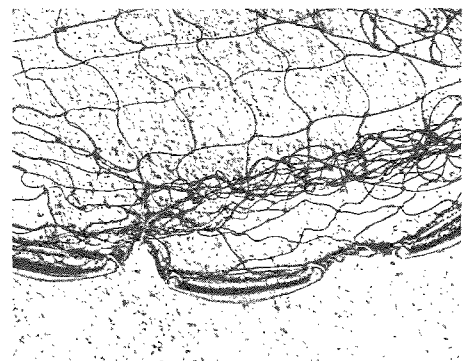
刺網の棒型錘／立川市教育委員会蔵

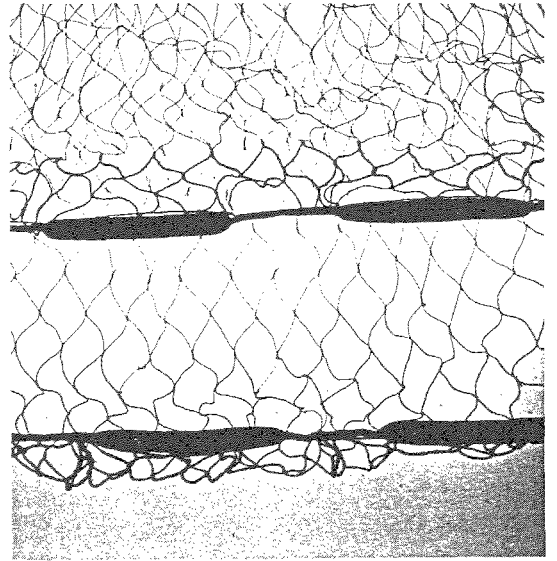


袋のない刺網下部と棒型錘／立川市教育委員会蔵



曲り長蛭型錘の付いた刺網／調布市郷土博物館蔵





棒型錘付き刺網のシルエット（袋付）立川市教育委員会蔵

一九、張網

多摩川の中流域で、職漁者が十一月から三月頃までに行つた刺網漁で、夜間に、深場所の上流、もしくは下流の開けた浅い水域の途中で網を張り、夜になって移動する魚を刺網で捕らえた。

秋の終りから春の彼岸頃までの間、冷水期の魚族は、日中は、沈床回りや大淵などの湧水のある所に寄り集まり、夜になると、魚たちは深場所を離れ、流れの上下にある瀬に餌を喰みに移動する。やがて撰餌を終えた魚は、再び元の深場所に戻り、日中はそこで過している。主にウグイやオイカワ、モツゴ、モロコなどの魚が、比較的狭い水域

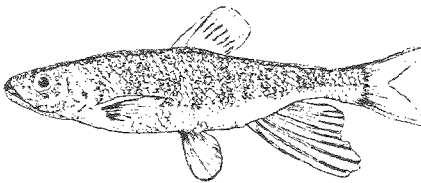
での移動を毎日繰り返している。

張網は、こうした魚の移動習性を利用した刺網漁で、日中、漁撈者は深場所での魚の生息状況を見て回り、その上流か下流で魚が撰餌でさるような広い瀬の有無を確かめておく。夜間、魚が淵から瀬に移動した撰餌の時刻を見計らい、その中間に刺網を仕掛けておく。やがて撰餌を終えた魚が元の深場所に戻ろうとして、通り道に張られた刺網に掛かる。

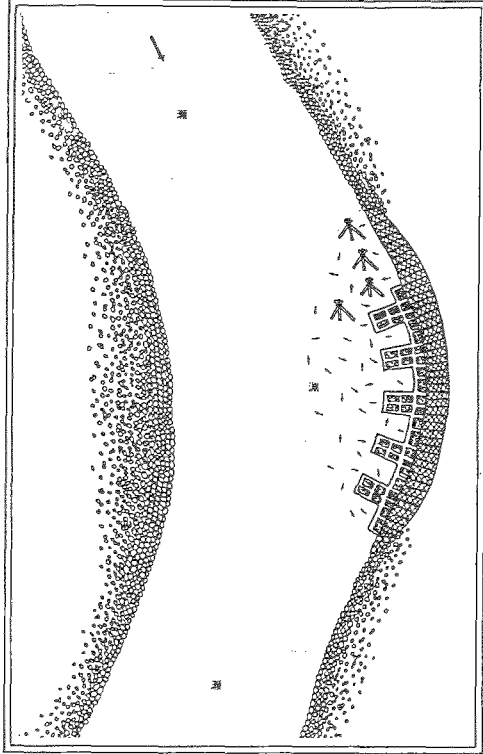
張網漁には刺網を六反用いる。深場所と上下の瀬との間にそれぞれ三反を一組にし、流れを横切つて網を設置する。三反の刺網は、網目の大きさが大、中、小とそれぞれに異なり、深場所寄りでは網目が小さく、次に中目の網、粗い網の順とし、網の間隔を三、四間ほど離して川幅いっぱいに張る。

刺網は網の上下に桐製浮子と棒型鉛錘を結着し、網の底には袋がある。張網漁のコツは、それぞれの刺網が淵に向けて凸状の曲線を描く様に張ることで、こうしておく、撰餌を終えた魚が淵に戻る際に、比較的

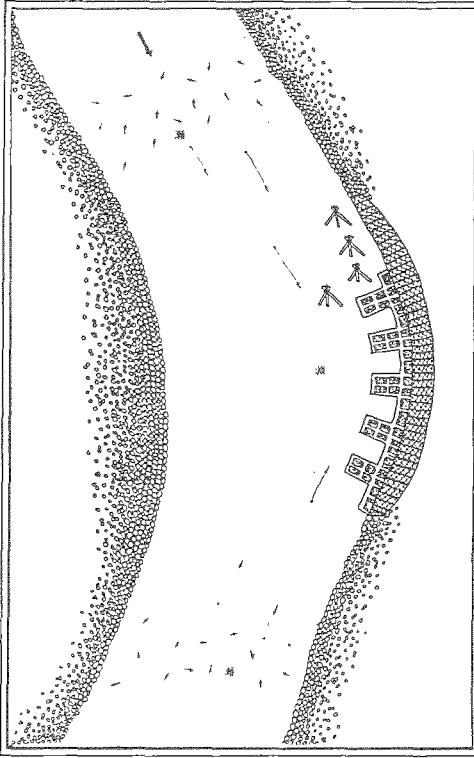
オイカワ（雄）
多摩川では、一般に「ヤマベ」と呼ばれ、別に「バカ」、「カッパヤ」、「オコゼツパヤ」、「オニツパヤ」、「ベカン」などの異称がある。網漁や釣りでも盛んに捕られた魚であるが、現在でも「ヤマベ釣り」は、多くの遊漁者に人気がある。



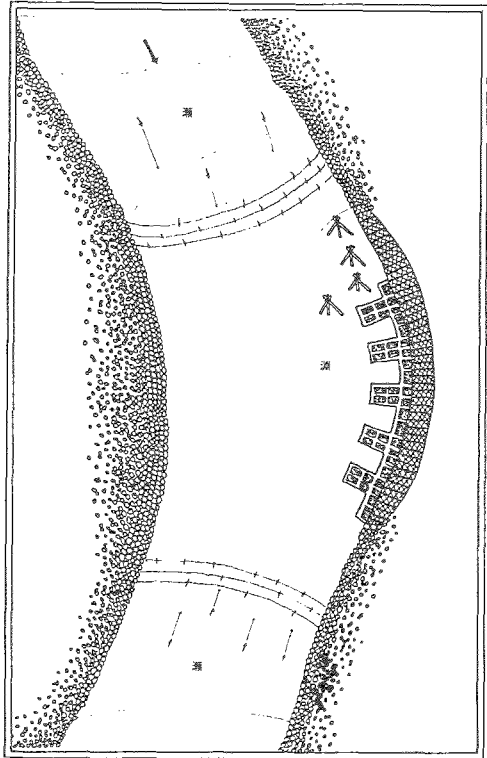
張網漁法図 (三一) 日中は、沈床や菱牛などの深みに魚が寄っている。



張網漁法図 (三一) 夜間になると、魚たちは深みを離れて上下の瀬で餌を摂る。



張網漁法図 (三一三) 魚の帰り道に三重の刺網を張っておくと、魚がかかる。

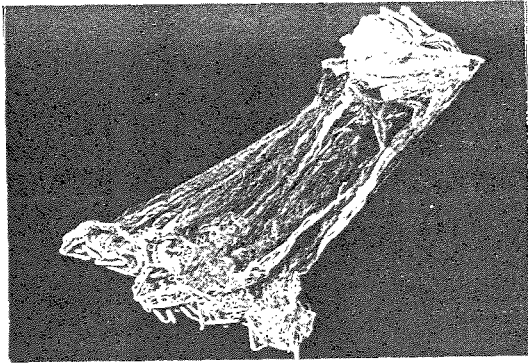
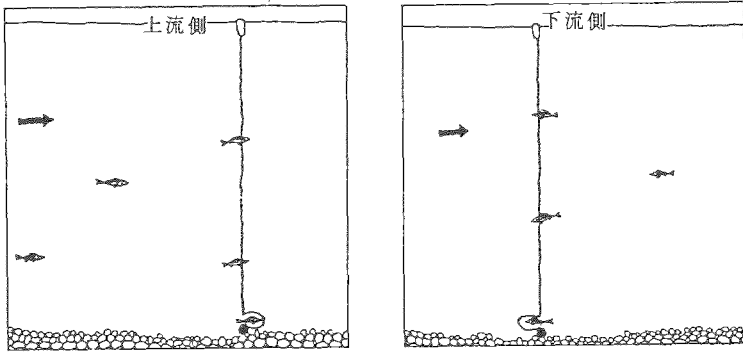


抵抗なく網に刺さる。

夜間、瀬に出て餌を喰んだウグイやオイカワが淵に戻る際、大形魚なら第一段の網に掛かり、小形魚は第一、第二の刺網を通り抜けても、第三の細かい目の刺網で捕らえられる。寒中の、しかも夜間に操業する張網漁は、職漁者たちにとって大変に辛い作業であるが、条件に恵まれると大量の魚が獲れる。

張網漁の歴史は新しく、多摩川では戦後から行われた刺網漁法で、昔は職漁者たちも、冬期には魚は餌を喰べないものとして、川漁を休んだ。だが、寒中でも魚族が摂餌の小移動を繰り返す事が判り、昭和二十一、二年頃から張網漁を行うようになった。そうした契機となっ

張網に魚がかかる図



刺網／立川市教育委員会蔵

たのは、終戦直後に立川飛行場に駐留した米軍の廃油汚染で、ガソリンなどの油が谷保下から多摩川に流れ込み、下流の魚に廃油の臭気が滲みついたため、職漁者たちの捕った魚が売れなくなった。だが同時に、それより上流水域で捕れる魚にも廃油臭があり、その時はじめて、冬期でも魚が移動する事が判った。昔の人が寒中に魚は移動しないとする説は否定され、積極的な川漁師たちは、それ以後、寒中の水

に浸かりながら張り網漁を行った。

二〇、置網

置網漁は、多摩川中流で、主に深場所を遊弋する鮎を刺網を用いて捕る漁法で、別に「刺網」とも呼び、職漁者たちが行った。置網漁では六月から十月まで鮎を捕るが、鮎の季節以外には、ウグイやオイカワを対象にすることもあり、この漁法は年中行っていた。

置網漁は、流れの緩かな水深五尺程の場所に、網目の異なる刺網を三段に用い、流れを横切って川幅いっぱい張る。刺網は五分目、六分目、八分目など、網目の異なる網を張っておき、体長の異なる魚がそれぞれの網目に掛かる様にする。置網漁は夜間に刺網を設置し、翌朝早くに見廻って網に刺さった魚を捕り上げる。

置網漁に用いる刺網は、上部に桐もしくは杉の浮子を取り付けるが、桐製浮子は杉よりも高価であったが軽くて取扱い易く、また網の下部には棒型鉛錘、又は鉄の蛭型錘を取り付ける。刺網には袋の有るものと無いのがあるが、置網漁には両方が使われた。袋の有ると、魚はこの袋でも捕れるが、網を引き上げた時に石が袋に入り、操業に余計な手間を要した。

前夜に仕掛けた刺網を早朝に引き上げるが、特に水温の上がる夏には、網に掛かった魚が死ぬと体が白色に変わり、分解酵素の作用で、腹部にガスが発生して膨れ上がる。こうした魚を職漁者たちは「ブク」と呼び、ブクは売り物にならない。

刺網漁ではブクを成る可く出さないようにするため、早朝に網を引

き上げ、魚が大量に掛かった時は網ごと持ち帰り、自宅で魚を外すこともある。特にギバチが刺網に掛かると、棘のような胸鰭が細い網にからみついてしまい、止むを得ず網の一部を切り取らざるを得なくなる。刺網漁を行う職漁者たちは、貴重な網を台なしにするギバチが掛かるのを大変に敬遠したものである。

刺網／立川市教育委員会蔵



二一、鮎刺網

鮎刺網漁は、六月から十月にかけて、多摩川中流域の職漁者が行った刺網漁法で、昭和十六年に東京府水産会刊行の『東京府島嶼及河川漁具図集』によれば、

— 漁撈は二人で一反の刺網を用いる。水深が二尺前後の急流で、流れを横切つてそれぞれ網の両端を持ち、同時に刺網を急流に投げ入れる。その瞬間に鉛錘が沈み、浮子が浮いて網が張られる。急流の勢いで刺網の上部は下流に寄せられるが、漁撈者はすかさず網の下流に石を投げて水中の鮎を威し、上流に逃げようとする魚が刺網に掛かる。— と述べ、かつて急流水域で行われた、迅速な鮎刺網漁の模様を伝えて

いる。

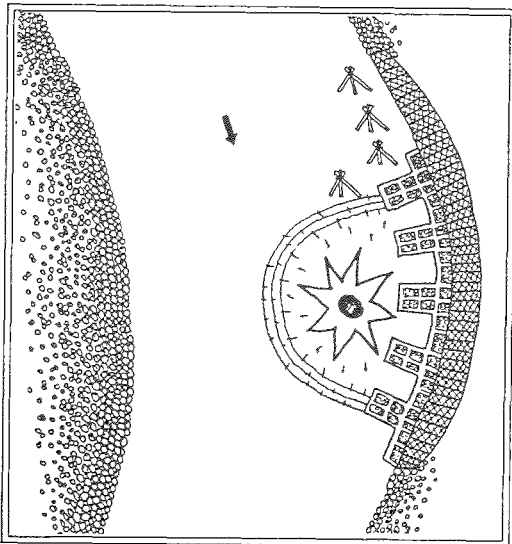
二二、巻網

巻網漁は、冬期に多摩川中流域の職漁者が行った刺網漁法で、日中の当る深場所に魚が集まるのを見定めて、網目の異なる三種の刺網で魚を取り囲み、そこに石を投げたり、或いは竹棒で水面を烈しく叩いて魚を威し、逃げた魚が刺網に掛かるのを捕らえた。

寒中の魚の寄り場所は、護岸水制のある沈床や流れの静かな大淵などで、昼間はこうした所に魚が寄り集まっている。巻網漁は、冬の日射しを浴びて安穩に過している魚を、いきなり襲う攻撃的な漁法であるが、夜とも

なれば、魚の摂餌習性を利用した「張網」が待ち構え、飽食した魚たちの帰りを狙っている。刺網漁法だけを考えて見ても、あの手この手で魚を追い求

巻網漁法図



める人間の奸智と行動力には、只々驚きの外はない。

二三、鯉刺網

多摩川の下流水域を中心に行われた鯉捕り用の刺網漁法で、明治二十年に多摩川下流沿岸の漁撈者たちが結成した漁業組合規約によると「鯉網 構造ハ長一尺巾拾五尋壹尺ニハッ目ノ網ヲ用ユ、季節無之」と述べ、細長い刺網を用いて鯉を捕っていたことが判る。

二四、カマツカ網

カマツカを捕る刺網漁で、前述の「張網」と技法上何ら異なる所がない。昭和の初期に、九州方面から多摩川にもたらされたもので、カマツカ網漁は一部の川漁師が行っていた。

カマツカは清冽な流れを好む底生魚で、川が綺麗だった頃、多摩川には沢山生息していた魚であるが、水質汚濁で消滅した。多摩川流域では、カマツカを「コト」もしくは「オコト」、「コトブシ」、「スナムグリ」などと呼び、川底の砂地などを好む魚で、水の清らかな流れにいた。カマツカは肉質が白身で味が軽く、ただ頭部や鱗は固いが、焼き魚や天ぷらに用いられ、一部の人たちに珍重された魚である。

カマツカ網は、夕方、五、六分目の刺網を流れに横切つて張り、翌朝に引き上げて網に刺さつたのを捕らえる。カマツカは比較的頭部の大きな魚で、水中を移動する際に頭部が網目に突き刺さる。カマツカ

網漁は年中行われ、もともと多摩川水系でカマツカ専用の漁法はなかったが、大き目の刺網を用い、カマツカなどの魚を捕る漁法をカマツカ網と称していた。

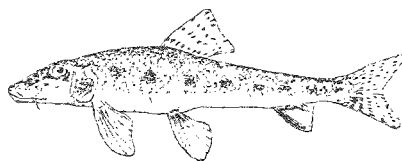
昭和の初期に、九州方面からの移住者によつて伝えられた多摩川のカマツカ網漁は、一部の川漁師が行っていたが、この遠地伝来の技法は、戦前までのわずか十数年の短かい歳月で消失した。

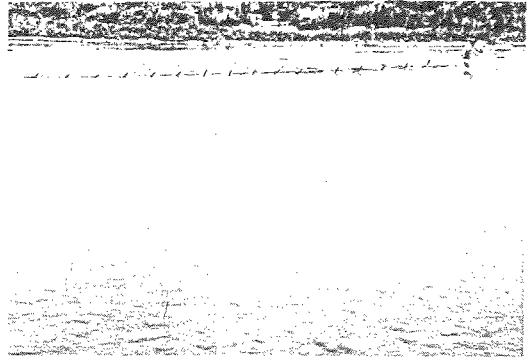
二五、ペラ網

ペラ網漁は、多摩川中流域で一部の職漁者が行つた追い寄せ網漁で、多摩川でこの漁法が行われたのは、大正末期以降である。ペラ網漁法は、西日本方面から伝来した技法と言われ、古い歴史を有する多摩川の伝統漁法の中では、比較的新しい漁法と言える。ペラ網漁は多摩川流域では、別に「ペラ」、「巻き網」、「朝鮮網」、或いは単に「朝鮮」とも呼んでおり、この漁法の発祥地を伺わせるかの名称もあるが、ペラ網漁が、韓国から伝えられた漁法であるとの確証はない。

カマツカ

コイ科カマツカ属の魚で、ユイモリスな相貌に似合わず、水質や川底など、河川環境変化には、極めて敏感な魚である。

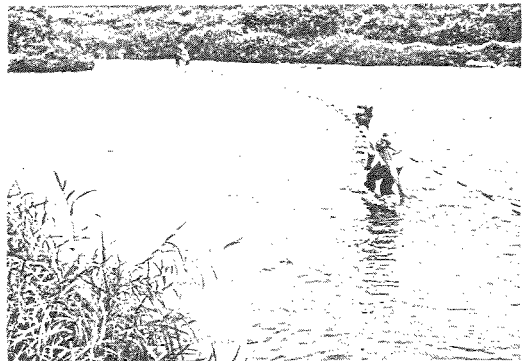




流れを走り、ペラを引く。／昭和五八年八月・多摩川・日野上宿地先水域での「伝統漁法実演」



小雨の中でペラを引く／昭和五五年八月・浅川・日野上田地先水域での「伝統漁法実演」



対岸の追い手は、これより此方に向けて大巻に魚を追いながら網に追い込む。／昭和五六年八月・多摩川・日野上宿地先水域



流れの魚を追いながら進むペラ

ペラ網漁は、ペラと称する多数の薄板片を棕櫚繩に結び付け、それを水面で引いて、水中の魚を網に追い寄せて捕らえる。同様の技法が隣接河川である荒川中流域にも見られ、薄板片を連結した追い寄せ具を「ガラ」と呼び、これを使う漁法を「ガラ引き」と称している。だが、魚の追い寄せの点で変りはないが、多摩川のペラ網漁では魚の捕採に罫み刺網を用いるのに対し、荒川のガラ引き漁は投網を使う。また東京湾の浦安で行われた巻網漁では、薄板を連結した用具で水面を引き、魚を追い寄せる「ガワ」と呼ぶ用具が使われている。多摩川や荒川それに東京湾の魚追い寄せ用具は、いずれもその機能に変りはない

いが、それぞれの形状に多少の差異が見られる。多摩川のペラは最も細身で、荒川のガラがこれに次ぎ、東京湾のガワは縦横比が約三対一で薄板の巾が最も広い。ともあれ、内湾漁法と近隣河川で共通する技法が見られる事は、漁法の系譜を考える上で、甚だ示唆に富むものと言えよう。

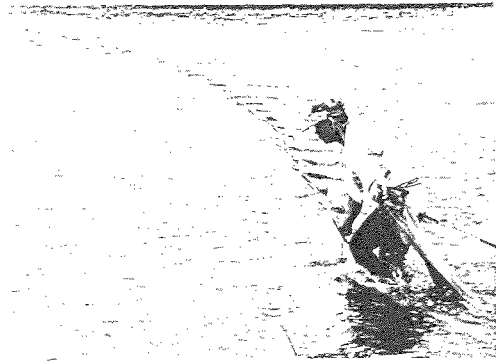
多摩川におけるペラ漁法は、ペラと呼ぶ先端が湾曲した細長い薄板を、棕櫚繩に等間隔に付け並べたものを用いて、漁撈者が水面を引くと、ペラを恐れた魚が網手の方に追い寄せられ、繰り出す刺網で捕ら

えられる。

ペラ網漁は年中行い、二人もしくは三人で操業する。但し、漁ができるのは川水が澄んでいる時に限り、川が薄濁りの時はペラを引いても集魚効果はない。ペラ漁法に適する漁場は、川巾が展げて広く、水深が二尺前後の流れが最も効果的であるが、時によっては水深が四尺以上の流れで行う場合もある。この漁法は川の地形的な条件に左右されるが、ペラ漁法の不能な場所では深淵と荒瀬で、それ以外では技術的に可能である。

ペラと呼ぶ集魚具を、普通は川下から上流に向けて引き、そうする事でペラの水勢抵抗が増し、しぶきを上げながら水切り音を発してペラが進み、魚追い寄せ

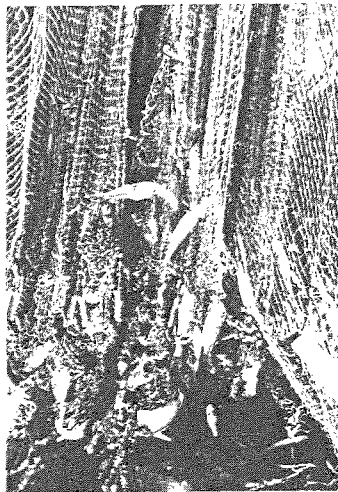
ペラ網の収穫／昭和52年8月・多摩川・日野地先水域・三田鶴吉撮影



網持ちは、右手でペラ網をたえず動かしながら魚を追い、左肩に背負った罫み網を繰り出して行く。／昭和五十六年八月・多摩川・日野上宿地先水域での「伝統漁法実演」

の威力を発揮する。二人で操業する場合には、追い手と網持ちに分かれ、追い手はペラ網の一端を持ち、此岸から対岸まで流れを一気に突っ走る。同時に網持ちはペラ網を繰り出しながら、ペラの先が等しく上流に向く様に操作する。それから、網持ちと追い手が共に上流に向けてペラ網を引くと、川面を横切って並ぶペラが一斉に水しぶきを立てながら、流れを掻き分けて進む。

時折、二人は魚威しの効果を高めるために、引き綱を小さきみに動かし、ペラの列に不規則な動きを与えると、魚は色をなして上流へと逃げる。透徹な流れを通して、魚たちの驚きあわてる様ははっきりと見え、二人は魚が逃げるのと同じ速さでペラ網を引き、対岸の追い手は魚を取り込むために、此岸の上流に向けて川の中を大巻に走る。その間、なおも

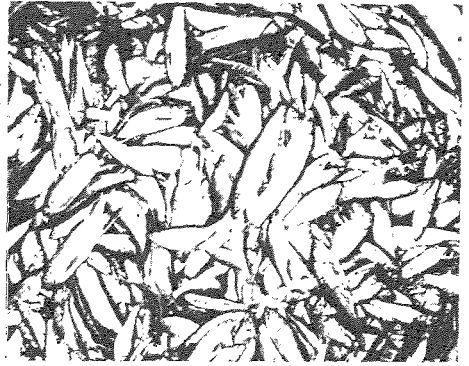


網にかかった魚。オイカワが多い。／昭和五十八年八月・多摩川



網目に刺さった魚を取り外す

ベラ網を小さきぎみに引いて魚を威し続け、同時に網持ちが肩に持った網を川岸から流れに繰り出し、寄せた魚を取り囲む。囲みの中で魚が驚き右往左往するが、巻いた網を絞り込んで行くと、魚は網目に突き刺さったり、網の袋に入って捕らえられる。この間の、ベラ網漁の一回の操業時間は、追い手が川の対岸に向けて走る時から、網による魚の採捕まで、五分とはかからない。

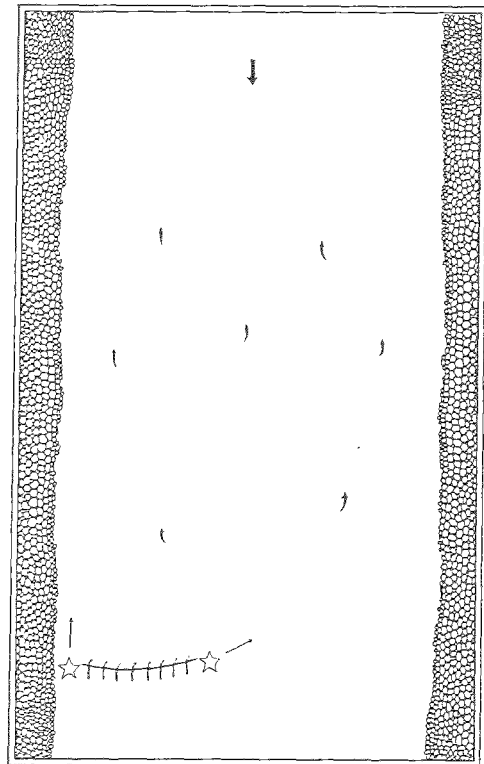


ベラで捕れた魚。オイカワ、ウグイにアユも混る。／昭和五二年八月・三田鶴吉撮影

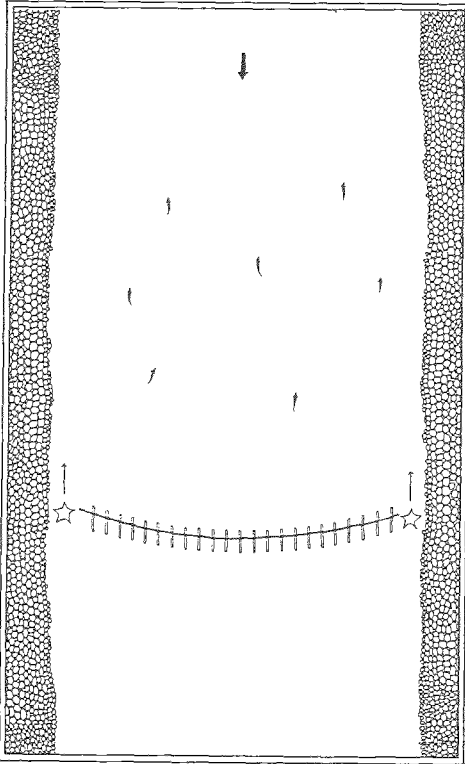
ベラ網漁法は、ベラで魚を威す一種の騙し漁法であり、騙しのからくりを魚に見破られたら漁にならない。そのため、ベラ網漁の操業は迅速である。この様な電撃的な漁法は、従来の多摩川の伝統漁法には見られぬ技法で、比較的広い水域をカバーすることが可能であり、また好条件の下でベラが威力を発揮すると、その区間の魚を根こそぎにしてしまう。漁獲効率の優れた漁法ではあるが、ベラ網漁の操業には、相当の体力と漁撈神経が要求される。そして、この漁法が四季を通じて行われたのは、その漁撈効率の高さ故であった。

冬期におけるベラの操業は、川になれた職漁者と云えども、大変に辛いものであり、寒中、川岸に張る薄氷を踏みながら対岸に走り、重

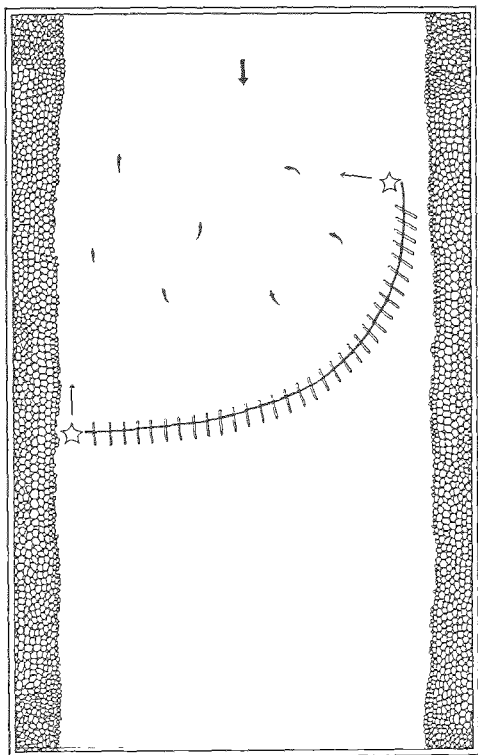
ベラ漁法図(五―一) 漁人(☆印)がベラを繰り出す



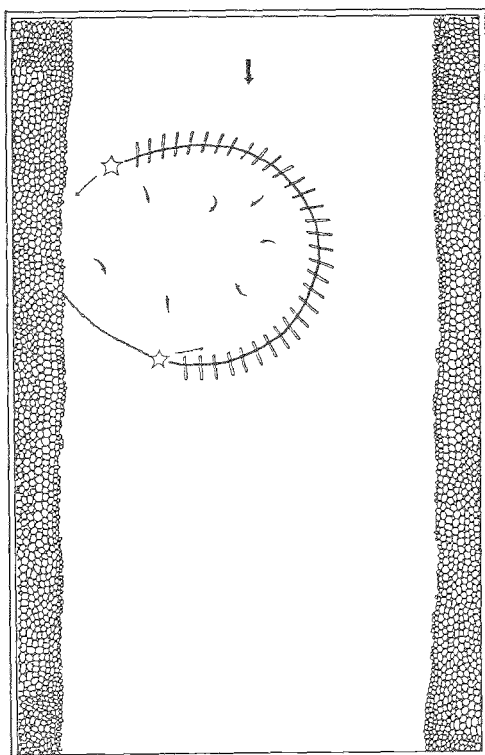
ベラ漁法図(五―二) 川巾いっぱいベラを張り、上流に魚を追う。



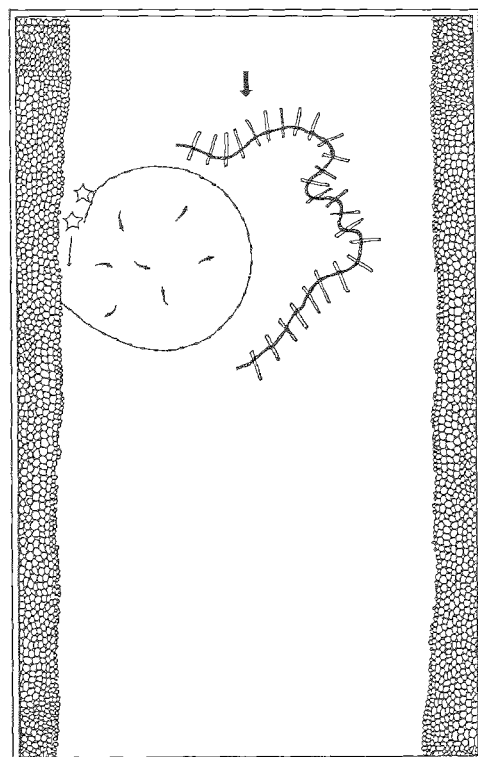
ペラ漁法図(五十三) 右の追い手(左岸側)は、大巻の行動を開始する。同時に、左の網持ち(右岸側)が網出しの準備にかかる。



ペラ漁法図(五十四) ペラで魚を寄せ、囲み網を繰り出して行く。



ペラ漁法図(五十五) 網で魚を取り囲む



いペラの網を引くので全身がずぶ濡れになるが、熱気で体からは湯気が立ち上る。さらに、職漁者は多摩川だけでなく、隣りの荒川や相模川の水系に、山越えの労をも厭わず出かけ、ペラ網漁を行っていた。

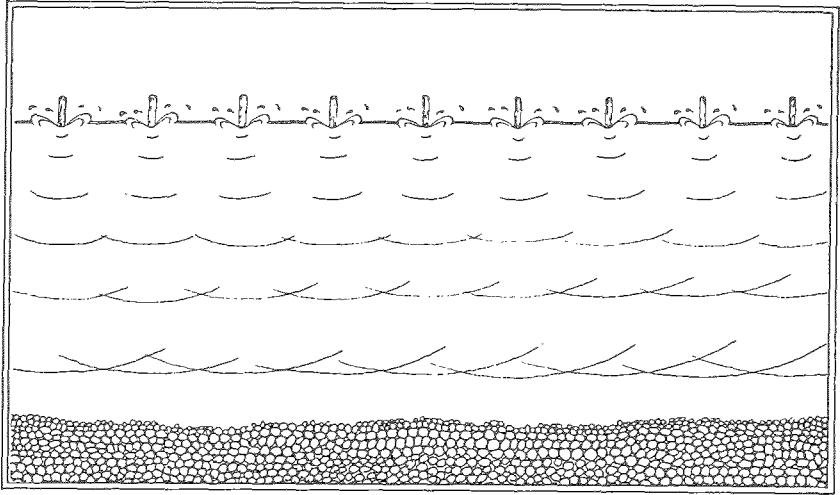
ペラ網漁法では鮎やウグイ、オイカワなどが捕れるが、鰻や鯰などの魚に対しては追い寄せが利かない。清冽な流れを遊弋する魚たちは、突然襲来した川面の異変に驚いて逃げまどい、網の方に易々と追い寄せられる。ペラの放つ水しぶきと異様な音、それに揺らめきながら襲いかかる黒い影など、ペラは魚たちにとって抗し難い恐怖を与える。ペラを引くと水中は突然のベニツク状態となり、困惑して逃げまどう魚の姿が川岸からはつきりと見て取れる。

多摩川水系の漁

法で、水中の魚に
威し具を用いる漁
法は、ベラ網漁の
他に、「瀬張」の
オカザリや「跳網」
のウラジロ、「寄せ
網」のシラタな
どがあるが、ベラ
ほど魚の追い寄せ
に優れた効果を発
揮する用具はない。
一説には、魚が水
面上のベラの動き
を、水鳥の襲来と
錯覚するのだと言
うが、ともあれ、
ベラのもつ威しの
効果は、魚の本能
的な忌避習性に強く訴える何かがある。

だが、この騙しの手法は、川魚たちに只の一度しか通用せず、その場で二度目に引いたベラに、先き程の魚たちは全く反応しない。初めてベラを引いた時、あれ程混乱の動きを見せた魚は、いずれもケロリ

ベラ追い模式図(2-1)水中を伝わる音と影

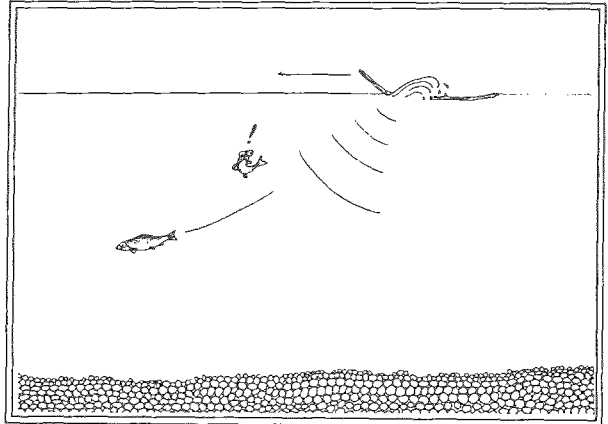


としており、先き程のバニックを忘れたかのよう
にのうのうと遊弋してい
る。職漁者たちがベラを
引いた水域では、少なく
とも一週間以上経過しな
いと、その場での漁を行
わない。一度ベラを引い
たことで魚の学習効果が
残り、ベラ漁では、川水
の濁り時とベラの二度引
きは、いずれも効果が期
待できない。

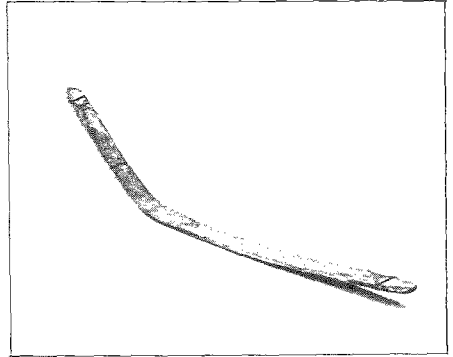
ベラ網漁に用いる薄板片のベラは、漁撈者が自製する。材料は檜又は杉の薄板で、材木店より求めて裁断し、水切りの湾曲部を作るには、銅壺に湯を沸かして板を浸し、木質を柔らかくにして先端より三寸程の所を曲げる。こうした板片を丈夫な棕櫚縄に約一尺間隔で取り付ける。魚の捕探部は刺網の一種で、上部に桐製の浮子を、下部には棒型鉛錘を取り付けた袋のある網で、細い絹糸で編んだ網に柿渋を塗っておく。この網を使って、ベラに追い寄せられた魚を取り囲んで捕らえる。

ベラ網漁はベラという集魚具と、捕探に巻き取り刺網を組み合わせた極めて単純な漁具であるが、漁撈技術と旨く噛み合うと、驚く可き成

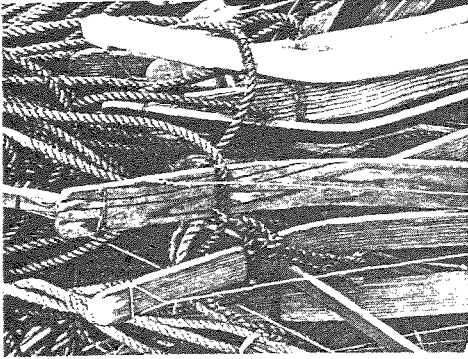
ベラ追い模式図(2-2)水中の魚をベラが追う



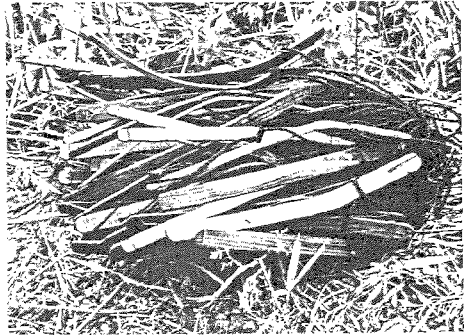
魚追い寄せ具・ベラ／鈴木由太郎蔵



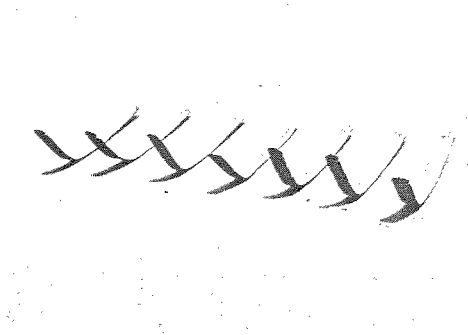
ベラ部分



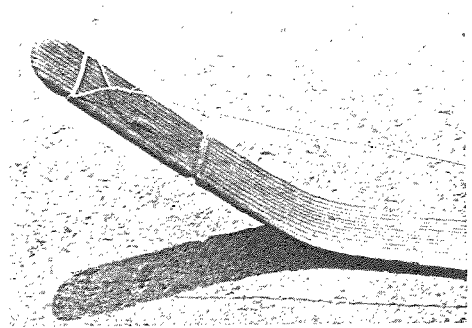
ベラ（檜製）／鈴木由太郎蔵



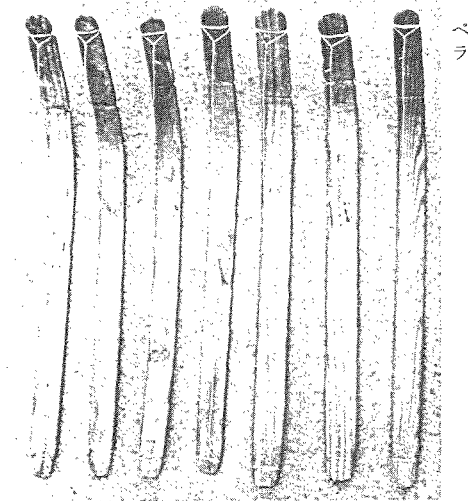
ベラ



ベラの頭部



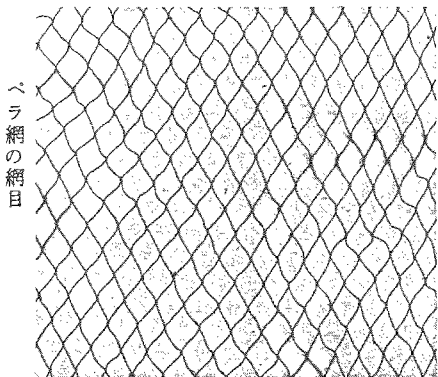
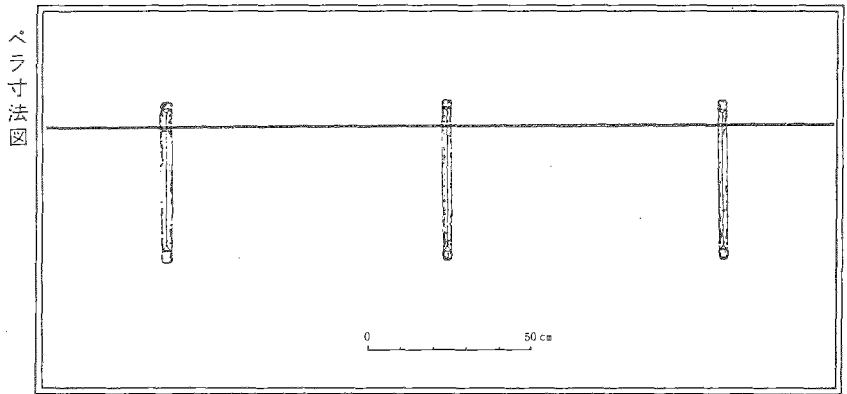
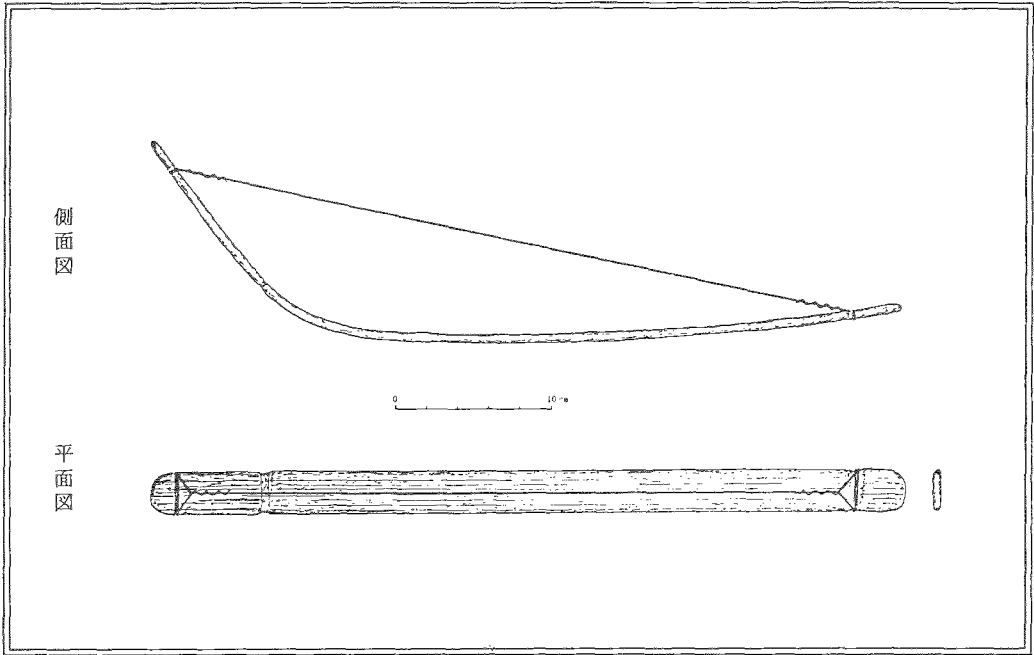
ベラ



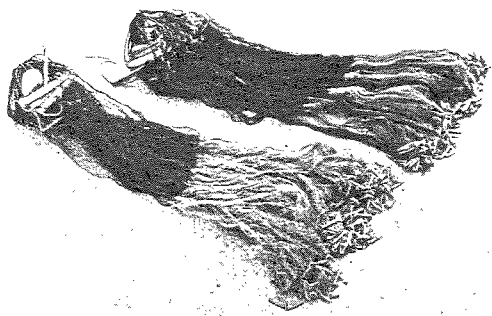
果を上げる。この様に積極的で且つ攻撃的な網漁は、従来の多摩川の伝統漁法には見られない。この漁法は大正の末に多摩川に伝えられ、昭和三十年頃まで行われたが、外来の優れた技法も、わずか数十年で終焉を迎え、多摩川の伝統漁法の歴史の末尾に、短い期間ではあるが、はつきりとした光彩を放っている。

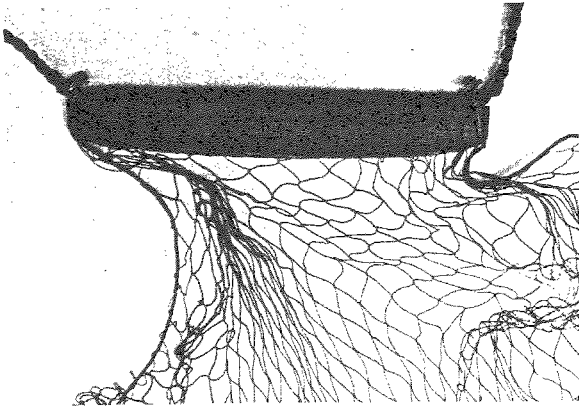


ペラ寸法図
 (鈴木由太郎蔵)



ペラ網 / 立川教育委員会蔵

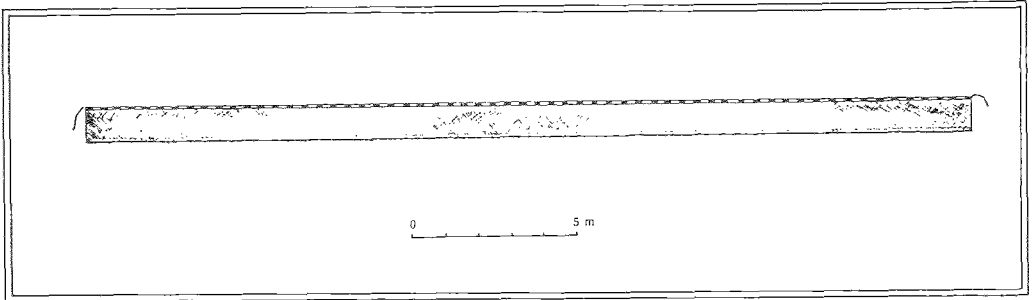




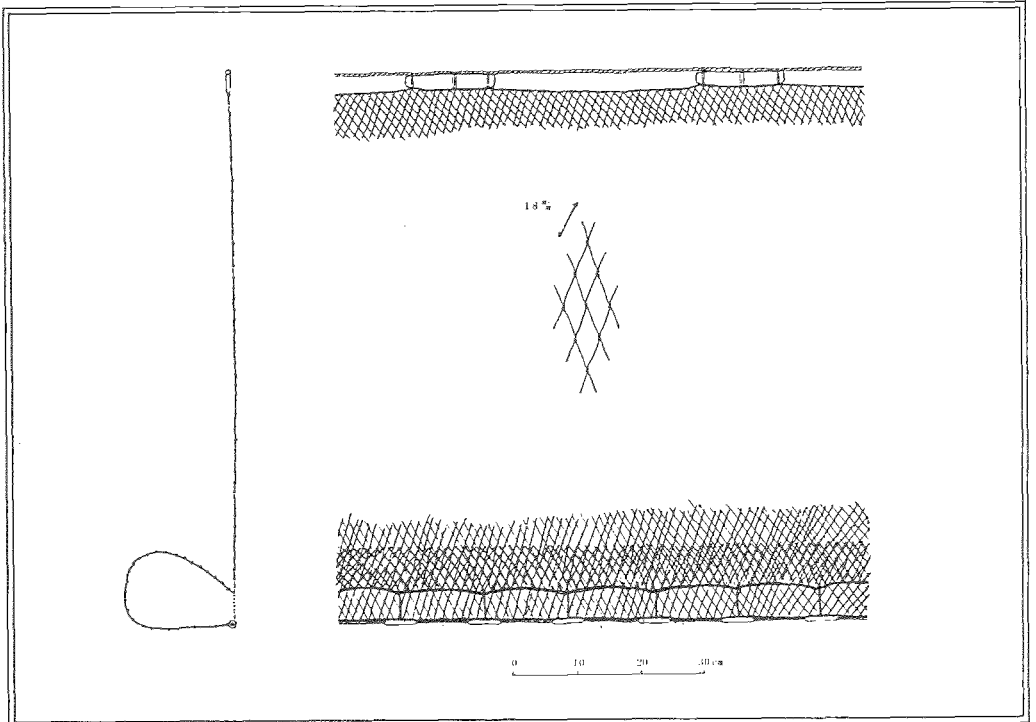
浮子部分(桐製)

※
※
※

ペラ網図
(立川市教育委員会蔵)



ペラ網寸法図



二六、投げ網

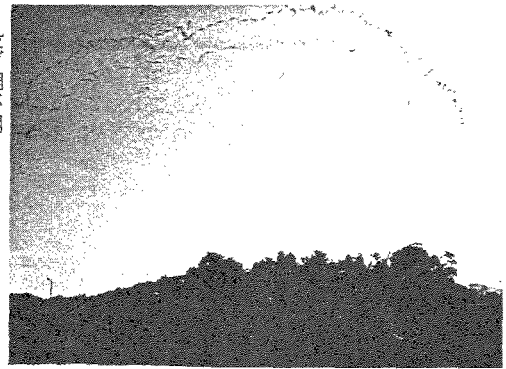
投げ網漁は、徒または舟から投げ網を打ち、石や棒で水中の魚を驚かせて網に追い込み、網に刺さる魚を捕獲する刺網漁の一種である。主に鮎を捕るために行われ、多摩川では明治以降に、一部の川漁師が行った漁法である。投げ網漁は四国地方から伝えられたと言われ、今でも仁淀川水系や錦川、それに琵琶湖などでは、投げ網漁が行われている。

投げ網は、高さが四尺、網巾三間前後の細長い網を用い、網目は三分目の細い絹糸を編んだ投げ刺網である。網の下部には袋と鉛錘を取り付け、上部に桐製の浮子が付いている。

漁撈者は深さ四尺前後の瀬の川岸から、水中の魚群を伺いながら静かに近づき、魚群の先に素早く網を投げる。網は空中に大きな弧を描いて水面に落ち、魚群を半円状に取り囲む。網の一方が錘で沈み、片方は浮子に支えられて刺網が水中に張られる。同時に、漁撈者は手にした竹や



投げ網を持つ漁人／昭和四二年一月・高知市鏡川河畔



投げ網が開く



投げ網(右)と投網／昭和四二年一月・高知市鏡川

木の棒で水面を手前から網の方へ激しく叩き、水中の魚を網の方へ追い寄せる。突然の事態に魚が驚いて逃げると、張られた刺網に突き刺さる。

投げ網漁は、網の投入から魚の追い上げと捕採の動作が非常に迅速で、水中の魚が突然の事態に驚き、躊躇する間に刺網で捕らえる。投げ網打ちの要領は、魚の退路を遮断する半円状に開いた網を、素早く水面に落とすことで、網投げの技術に熟練を要し、投げの要領如何が漁果を左右する。投げ網漁の対象魚は、刺網に掛かる魚は何でも捕れるが、多摩川では主に鮎を捕っていた。

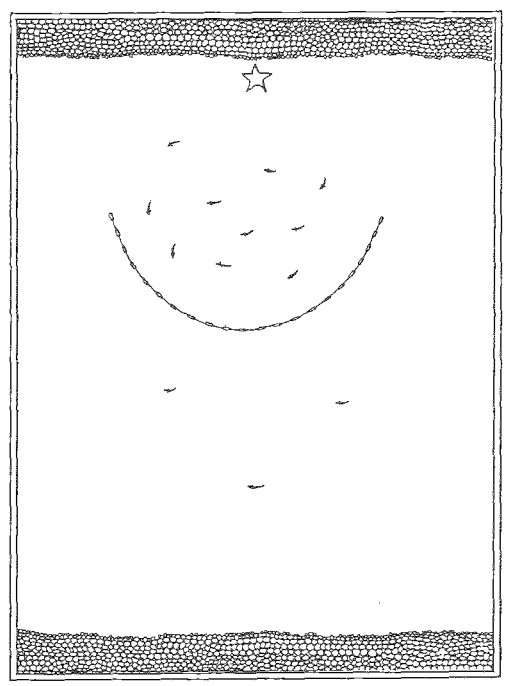
多摩川水系における投げ網漁は、操作に熟練を要するのと、漁法の伝来の歴史が浅いために、投網などの様に広く普及することなく、昭和の十年代で終った漁法である。投げ網の技法は、投網とは全くその内容を異にする独特の刺網漁法であり、四国地方の水系で行われた漁法が、中間の地域を飛び越えて彼の地より多摩川流域に伝えられた。内水面における漁撈技術の伝播に関しては、時の経過の中で、新しい技術が地域伝いに徐々に伝わって行くのが一般的に見られる現象であるが、多摩川の投げ網漁法の系譜については、四国から関東の一河川に一気に飛び火したが、そこで定着することなく終っている。

多摩川水系における伝統漁法を俯瞰的に見ると、今日まで判明した百余種の伝統漁法の中で、多摩川独自の漁法は何一つ見当たらないと言っても過言ではない。

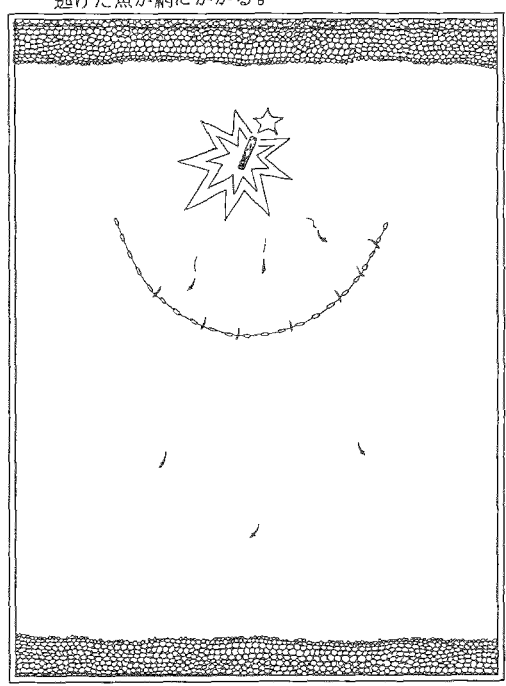
「瀬張」や「ひっかけ」、またその他諸々の多摩川の伝統漁法は、関東一円はおろか、遠く四国や九州、それに東北地方の諸河川においても、すでに伝統漁法として、昔から行われている技法である。それは、こうした技法のそれぞれが、すでに遠い昔の時代に伝播が終了し各河川の流域に定着した事を物語っている。かつては、山一つ隔てた水系間の漁撈技術の交流が、今日のわれわれが考える以上に緊密に行われていたことを思い知るべきであり、新しい技法は、水系から水系へと予想を超える速さで伝播して行ったのである。

はるか遠い昔に、一つの新しい漁法が考案され、それがその水域で十分な試行錯誤を繰返しながら有用な技法として確立された時、近隣

投げ網漁法(2-1)
投げ網で魚を半円状に取り囲む。



投げ網漁法(2-2)
漁人(☆印)が棒で水面を叩いて魚を威し、逃げた魚が網にかかる。



河川への伝播が始まる。時には新技法が近隣の河川を越えて、いきなり遠い水系にもたらされ、その河川でしっかりと根付く事例もある。多摩川の数ある漁法の中で、投げ網漁法は、或る時突然に遠隔の地より多摩川水系に移入され、わずかな期間ではあるが、そこで短い消長の足跡を残した技法と言えよう。

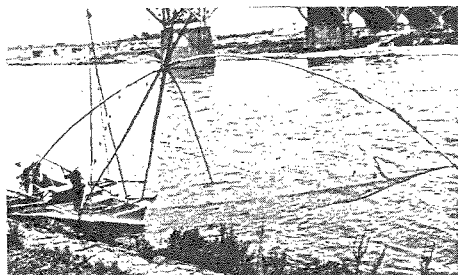
二七、四つ手網漁

四つ手網漁は、多摩川中流から下流域で行われたが、特に丸子橋から六郷にかけての水域が盛んであった。中流と下流とでは、使用する四つ手網の大きさや捕る魚に相違があるが、いずれも、交差させた竹竿の先に、正方形の網の四隅を張った四つ手網を用い、水中に浸して引き上げ、中に入る魚を捕らえる。

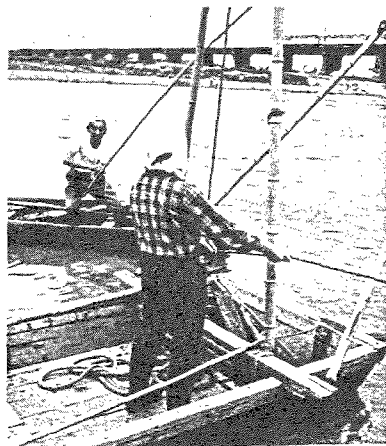
「羽村町の民具」によれば、多摩川の羽村では、夏から秋の降雨で川が濁った時、竹竿の柄の付いた四つ手網を川岸から流れに浸し、五分から十分間隔で引き上げて中に入ったカジカやウグイを捕る。四つ手網は一辺が一間半で四分目の絹網を使い、川が増水した時、流域住民が戦前まで行っていたとある。

一方、多摩川下流水域で行われた四つ手網漁は、一辺が三間半の大型網を用い、捕れる魚種も多い。対象魚は、アユをはじめマルタウグイ、ウグイ、コイ、フナ、シラウオ、ウナギなどの他に、潮汐の影響でボラやハゼも捕れる。

この地域の四つ手網漁は、舟から行うのと川岸からのものがある



四つ手網漁／多摩川丸子堰
下流二百米・昭和四三年九月
(増水時)

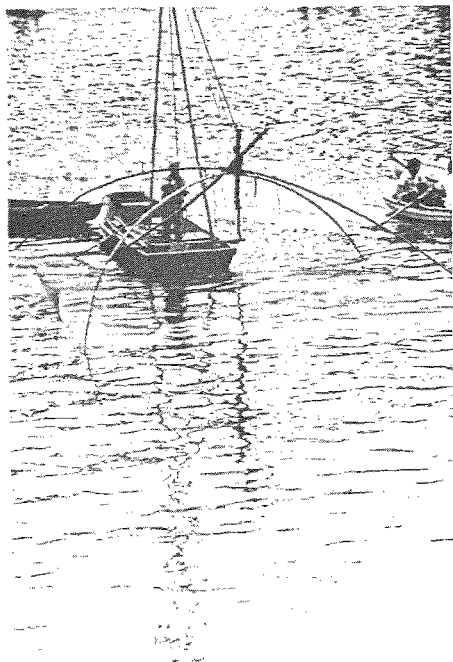


四つ手網漁／多摩川丸子堰下流二百米
昭和四三年九月(増水時)・漁撈者は、
川漁師の杉山夫妻(多摩川漁協川崎支
部会員)

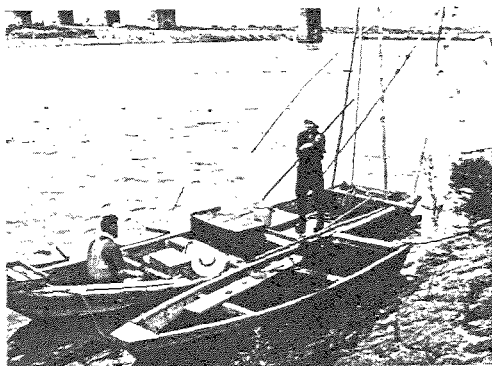
が、いずれも大型網の支え棒に滑車を取り付け、縄を手繰って網を操作する。網揚げの間隔は、その日の潮加減や風の状況にもよるが、十分前後で、揚げた四つ手網に入った魚を、柄の長い手網で掬い捕る。

一方、陸からの四つ手網漁では、川岸に簡素な四つ手小屋を設け、終日、または魚種によって、夜通し漁を行うことがある。

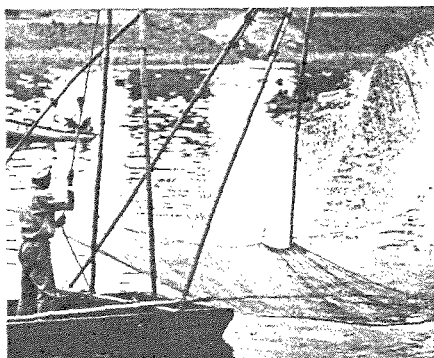
多摩川下流の四つ手網漁では、昭和三十五、六年頃まで行われた漁法に、白魚捕りの四つ手網漁がある。毎年、十二月中旬から五月下旬にかけて、丸子堰から下流の水域では、白魚漁が盛んになるが、刺網や地引網、それに叉手網を用いた漁法と共に、四つ手網による白魚捕りが行われた。捕れた白魚は大森の山田屋という魚問屋に売り渡すが、多摩川の白魚は型が大きく、四寸近いものもあった。二十四匹を「ひと



四つ手網漁／多摩川丸子橋下。昭和45年7月・漁撈者・杉山



四つ手網漁の杉山夫妻／昭和四三年九月



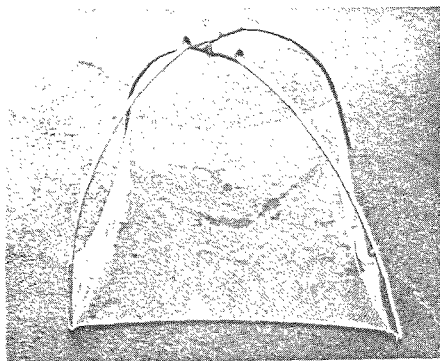
網の引き上げ。対象魚はコイ、フナ、モツゴなど。／昭和四五年七月



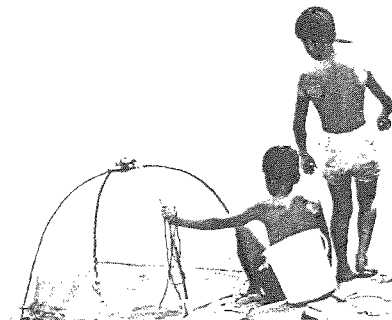
四つ手網で遊ぶ／多摩川二子橋上流・昭和四四年九月



四つ手網で遊ぶ／多摩川九子堰下流・昭和四五年八月



小型四つ手網／調布市郷土博物館蔵



四つ手網で遊ぶ少年／多摩川二子橋上流・昭和四四年九月

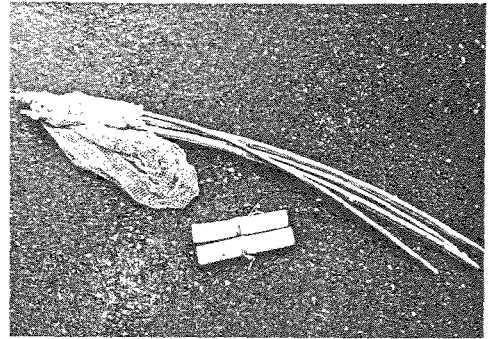
ちよぼ」と言い、昭和の初期で一ちよぼが十五銭から二十銭で取り引きされた。また戦後昭和二十六年頃まで、捕れた白魚を毎朝五時起きして築地の魚市場に卸した。

四つ手網には、職漁者が用いた大型網の他に、流域の少年たちが専ら遊び漁に使用した、網の一边が三尺ほどの四つ手網がある。この網は多摩川中、下流域の細流で子ブナやモツゴなどの魚を捕り、現在でも水温む頃になると、四つ手網で遊ぶ少年たちの姿が見られる。

二八、白魚網漁

毎年、十二月中旬から五月上旬にかけて、多摩川下流部の汽水域では河口から白魚が遡上し、この季節になると、河口から丸子橋一帯の水域では白魚網漁が活況を呈する。

白魚はシラウオ科に属し、体が白色透明で、内湾から汽水域に生息する、一年生の美味な魚として知られている。白魚は産卵期になると川を遡るので、それを捕るために様々な網漁が行われたが、特に隅田川の白魚漁は昔から有名である。隅田川の名声の陰にかくれ、多摩川



折りたたんだ小型四つ手網

の白魚捕りはあまり知られていないが、季節になると下流域では白魚漁が行われ、昭和三十年代まで続けられた。

多摩川の白魚漁法は「白魚四つ手網漁」をはじめ、「白魚引網漁」、「白魚刺網漁」、「白魚掬い網漁」などの網漁法があり、下流域の職漁者もしくは半漁民たちが、白魚漁を行っていた。なお白魚四つ手網については、別項の四つ手網で述べ、本項では、白魚網漁の「地引網漁」および「刺網漁」、「掬い網漁」について記すことにする。

白魚引網漁は、別に「ヒキアミ」

或いは「デビキ」、「白魚トリ」とも呼ばれる網漁法で、多摩川下流では古くから行われていた。明治二十年に多摩川下流で結成された漁業組合の規則にも、「…白魚網 構造スカ糸網ニテ長七尺巾三尺ヲ巻トシ両端ニ竹ヲ添、水中ノ浅瀬へ船老艘二十四張、網目ハ巻寸ニ七節ヲ用ヒ、季節ハ一月ヨリ六月迄ヲ限ル。」と記し、白魚引網漁に大量の漁網を用いていたことが判る。

白魚引網漁は、操業の舟が一艘と二艘の場合とがある。一艘舟の場合、六、七名で行う巻き捕り地引網漁で、舟に漁網を満載して此岸



シラウオ

暮れから翌春にかけて、多摩川の下流・丸子堰下までシラウオが遡上する。昭和二十六年頃まで白魚漁が盛んに行われたが、以後、水質汚濁の影響で徐々に衰退して行く。

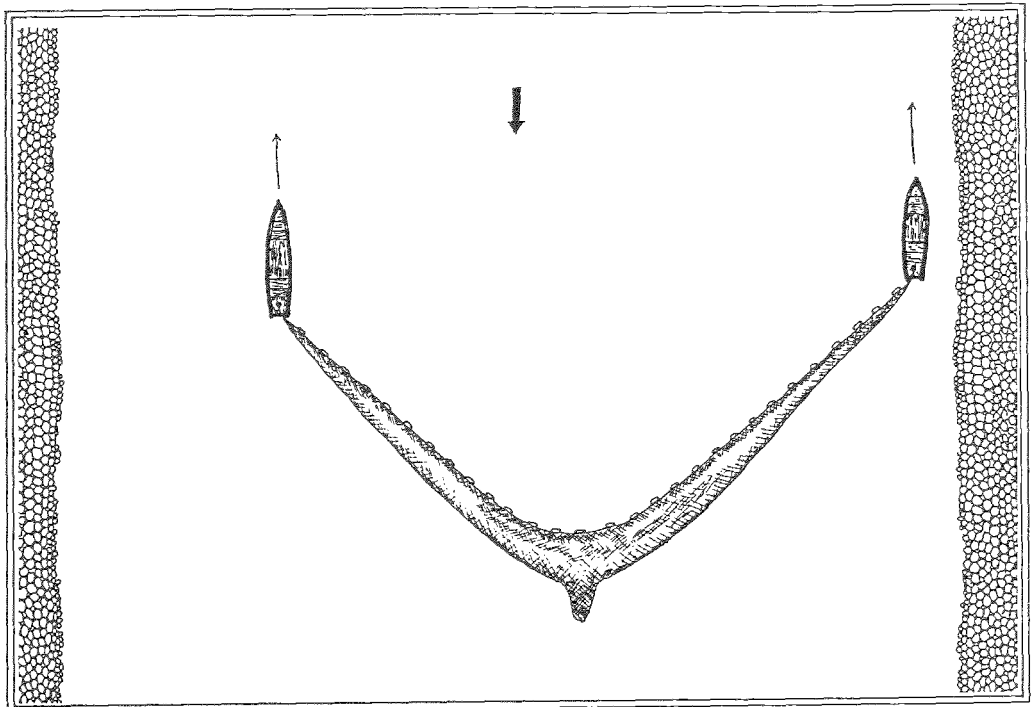
より対岸に向けて櫓を漕ぎ、その間に網を繰り出し、対岸近くより川の上流に向けて大巻きに舟を進め、それから、此方の川岸まで網で取り囲む。広い水域を網で囲み、網の両端に漁撈者が三人づつ付いて、網を手繰り寄せ、中に入った白魚を捕る。

白魚引き網漁は、上げ潮間ぢかの時刻を見計らって行い、潮とともに遡る白魚を捕るが、漁網は深さが十尺から十二尺、長さが六十間の大網を用いる。網目が一分の木綿もしくは麻糸の、細かい網に柿渋を塗ったもので、戦後は、北千住の網屋から購入したものを使っていた。網の上部に鯉節型の桐製浮子を付け、下部には陶製の錘が取り付けてある。

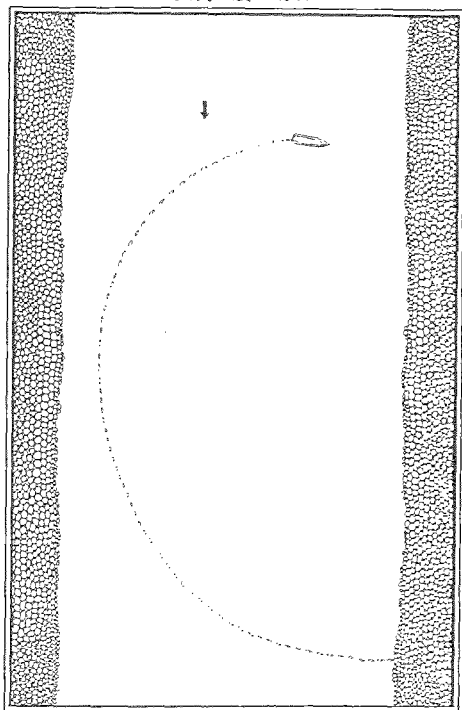
舟二艘による白魚引網漁法は、満潮近くに二艘の舟が川巾一つばいに引網を張り、上流に向けて舟を進める。引網が移動して白魚が網に掛かり、網の中心にある袋網に入るのを捕り上げる。

『東京都内水面漁業要覧』によると、白魚引網漁の網は、「…網目が三段〜四段に外から内に細かく、袋は布（荒目のもの）を使用し網糸は絹を用いる。網の上段は浮木（長方形）を付け、重石はなまり玉を以ってし、網は川底を引く。集められた魚は網袋（突出している）に入る。網の高さ七尺、長さ五十間、袋の長さ六尺、…この引網は一トン程の漁舟で両端を結び曳行し操業する。…多摩川下流には昭和三十三年頃まで三統〜六統操業していた。…」と記している。これら白魚引網漁も、昭和二十六、七年以降、多摩川の水質汚濁が進み、昔から続いた白魚漁は昭和三十五年に終焉する。

白魚引網漁法 図
漁舟二艘の場合

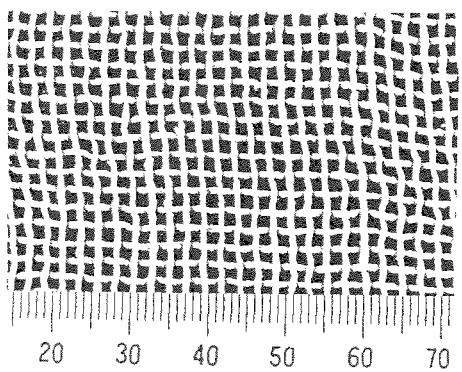


白魚引網漁法圖
漁舟1艘の場合



白魚刺網漁法は、川を遡る白魚の通り場所に、網目の細かい刺網を流れに対し縦又は横に張り、遊泳する白魚の頭部が網目に刺さった所を捕らえる。一艘の舟に一人或いは二人で操業するが、刺網は高さ三尺、長さが九尺ほどの絹製で、網の両端に竹竿を付け、潮の通りの良い流れに立てておくと、潮に乗って遡る白魚が刺網に掛かる。白魚刺網漁は、多摩川の丸子橋下から河口水域、さらに内湾にかけて行われた漁法である。

白魚掬い網漁は、別に「撫で網漁」とも呼ばれ、満潮時に、又手網を使い、舟又は川岸より水中の白魚を掬い上げる。掬い網は、長さ二間ほどの竹竿二本を手前で交差させ、網目の細かな絹糸製の網を取り付けたものを用いる。白魚掬い網は、流れの上手から下流に向けて、

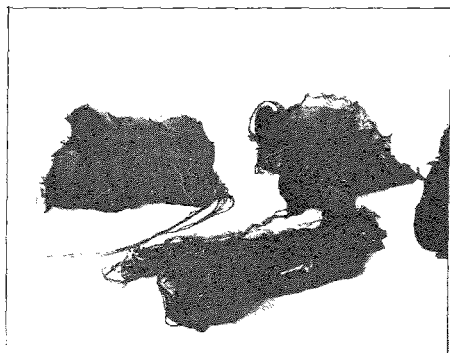


白魚地引網の網目（木綿製）/
島崎重治蔵

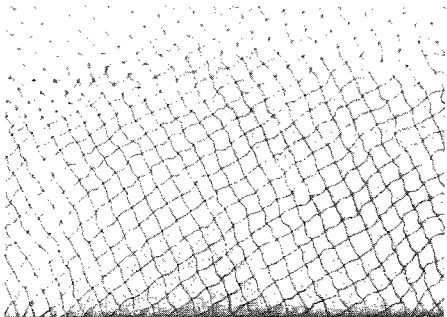
撫でる様に掬い捕ることから撫で網とも言いますが、降雨で川が増水した時に、アユやウグイ、フナ、コイなどを捕る「撫網漁」と掬い方は変らない。

「新編武蔵風土記稿」羽田獵師
町の項に、

「：社へ、ハツカー一間ニ二間、
南向ニ鳥居タテリ、幅一間、土人



白魚刺網／大田区立郷土博物館
蔵



白魚刺網の網目（絹製・柿波塗
り）／大田区立郷土博物館蔵

呼テ白魚稲荷ト云、漁人白魚ヲ取コロ、初テ得シ時ハ、マツ此社ニ供フル故ニカクイヘリ……」と、白魚を祀る白魚神社が紹介され、二月初午の日が神社の例祭になっている。また、多摩川下流の白魚漁が行われた昭和三十年代まで、漁撈者たちが、白魚供養を含めて水神講を毎年二月上旬に行ってきたが、こうした白魚漁撈の習俗は、内湾漁業の影響が色濃く反映されている。



第三章
釣
漁
法

一、多摩川水系の釣漁法

多摩川水系の釣漁法は、網漁法における石錘や土錘などの様に、考古品の出土が確認されていないが、他の漁法と同様に、可成り古い歴史を有する漁法である。

釣漁法が他の漁法と異なる特徴は、釣鉤を用いて水中の魚を捕捉する点で、それぞれの釣漁法では釣竿、及び釣糸、錘、浮子などの用具を組み合わせて使用する。釣漁法で重要な役割を果たす釣鉤は、対象魚に応じて、その型状は様々に分化、発達し、各々の釣漁法に見合う固有の釣鉤として完成されている。

多摩川水系で用いられた釣鉤は、型状と機能の点で、幾つかの種類に分けられる。その中で最も普遍的な釣鉤は、片U字型の、所謂、袖型釣鉤もしくはその変型で、餌鉤にはアゴと言われる返し付きの鉤が多く、また掛け鉤には返しがない。一方、袖型鉤に羽毛などを巻いた擬似鉤があり、その他に釣鉤の中で、唯一の直鉤である鰻の「穴釣り」用の地獄鉤がある。本来、釣漁法は釣鉤を用いて魚を釣る技法であるが、「数珠子釣り」や「ひっくくり」などでは、釣鉤を用いない特異な釣漁法もある。いずれも極めて簡易且つ原始的な漁法であるが、釣鉤を用いずとも、特定の魚に対しては十分に捕採の効果をあげている。

多摩川水系の職漁者たちが行った釣漁法と言えば、鰻捕りの「数珠子釣り」と「穴釣り」、それに鮎を掛け捕る「眼鏡釣り」と「友釣り」、

多摩川水系の釣漁法

釣 区 分		捕 採	漁 法	
釣 鉤	食 わ せ 鉤	餌 釣 り 鉤	・穴釣り——直針	
			誘引・合せ	・山女魚・岩魚釣り ・アンマ釣り ・ふっとばし ・ハヤ釣り ・鯰釣り ・小物釣り(フナ・タナゴ・モツゴ・モロコ) ・手長エビ釣り ・食用蛙釣り
		先掛り	・流し鉤 ・とびつき ・鯉釣り ・ぶっ込み釣り ・籠釣り	
	掛 け 鉤	擬餌鉤	誘引・合せ	・ドブ釣り ・打ち釣り ・くい鉤 ・瀬釣り ・山女魚・岩魚毛鉤釣り
		掛 け 鉤	合せ	・ひっかき ・さくり ・ころがし ・マルタ掛け釣り
			先掛り	・友釣り ・鮎の置き鉤
無 鉤		合せ	・数珠子釣り ・ひっくくり	

山女魚、岩魚の「溪流釣り」などがあり、その他の釣漁法は、流域の人たちが遊漁のために行った技法である。

多摩川の伝統漁法が相次いで消滅した中で、或る種の釣漁法は依然として行われている。網漁法や釜漁法、それに刺突や雑漁法の多くが、自然に消滅したり或いは禁止漁法に指定された中で、「友釣り」や「ドブ釣り」、「小物釣り」など、数種の釣漁法が、以前にも増して多摩川では盛んに行われている。

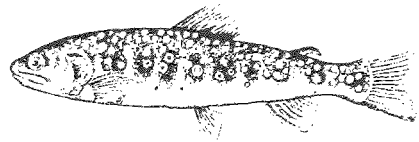
二、岩魚・山女魚釣り

多摩川水系の本流とその支流の上流や源流の水域には、サケ科のイワナやヤマメが生息している。特にイワナは水温が摂氏一五度以下の溪流に棲み、ヤマメはイワナより下流に生息している。共に美味な魚で、昔から山間部の人たちの貴重な蛋白質源になっていた。

イワナ、ヤマメは共に冷水性の魚類で、溶存酸素量の多い清冽な水域に生息し、彼等が棲む水域は、変化に富む溪谷の流れである。イワナ、ヤマメは溪流魚と呼ばれ、これらの魚を釣るために、春から秋にかけて溪流釣りが行われる。イワナとヤマメは、溪流魚としての共通性が見られ、釣技にほとんど差異がない。

イワナとヤマメは共に肉食性の魚で、主に溪流の水生昆虫を常食にしている。これらの魚に共通する性質は、両者とも極めて貪欲な食性を有し、時には蛇さえも襲うことがある。一方、物音や影には大変敏感で警戒心が強く、動作も俊敏で視力が優れている。こうした魚を釣る溪流釣りは、川釣りの中でも特に難しい技法とされている。

イワナ、ヤマメを釣る技法には、餌釣りと毛鉤釣りの二種がある。餌釣りは、長さ二間から二間半程の竹竿に、袖型鉤に鈎素糸を結び道糸を取り付けたもので、軽い鉛錘と山吹の芯の小片や水鳥の羽毛の目印を用いた脈釣り仕掛である。餌は生き餌を用い、溪流魚の常食であるカゲロウやカワゲラ、トビケラなどの水生昆虫の幼虫、或いは鱒の卵、それに夏期にはクモやトンボ、バッタ、蝶などの昆虫類を餌に



イワナ

多摩川水系の源流に生息する溪流魚で、乱獲のため、現在ではその数が激減している。

する。

山間の溪流で、一竿に腰魚籠という簡単な出で立ちで溪流魚を狙う。物音や影に敏感な魚に気取られぬ様に下流から忍び寄り、竿を静かに振り下ろす。

釣人は目印の動きと竿先に全神経を集中しながら、鉤に付けた餌が水の流れに沿って自然に流れる行く手を見守る。流れ込みの白泡尻や瀬で、上流からの餌を待つ溪流魚が一瞬流れに身をひるがえし、果敢



奥多摩の溪流釣りの世界を描いた『奔流釣魚』・川合玉堂筆/玉堂美術館蔵

な就餌行動に出る。

かすかな魚信が竿先に伝わり、目印が微妙にゆらぐ。間髪を入れずに釣り人が竿先をおおると、魚の強い引きに竿先がしばりこまれ、鉤を口にした魚が渾身の力をこめて水中を走り、道糸が小さきみに空を切る。そして、魚と人との烈しく短いやりとりの後、魚を引き上げ魚籠に収める。罾蓋をあえがせた大物は尺に近い。

その時、けたたましいカワセミの鳴き声が谷底を伝わったかと思うと、奥多摩の仙境は再び元の静けさに戻り、轟々と溪谷の音だけがこだまする。

岩魚の棲む溪流／日原川・唐松谷・昭和四二年五月



溪流釣りには、漁という直截な目的を離れた、溪谷と人と魚との幽邃な交わりがある。そのために、溪流釣りの魅力に引かれて、山奥の谷間に足を印す人は多い。一方、溪流釣りのもう一つの技法である毛鉤釣りは、餌の代りに水生昆虫に似せた擬餌鉤を用いて、イワナやヤマメを釣る。毛鉤釣りの竿は餌釣りの竿より短く、長さが一間半前後の釣竿を用い、目印や錘を付けず、道糸は馬の尻毛を撚った馬素ばすと呼ぶ釣り糸を使用する。

毛鉤は、鳥の羽毛で蓑毛や角の部分巻き、胴はゼンマイの綿毛などで自製する。毛鉤に用いる鳥の羽毛は、雉子や山鳥、軍鶏それにニワトリなどの頸の部分の羽を用いる。

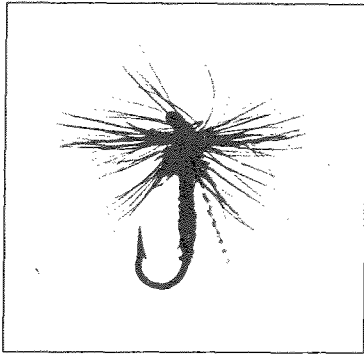
そうした毛鉤を使って、釣人はあたかも羽化したカゲロウが流れにおぼれているかの様に、又は羽虫が水面で飛び交うように竿先で操作する。こうした動きを目ざとく見付けた水中の魚が、擬餌鉤目がけて一気に襲いかかる。その瞬間、釣り人は間髪を入れずに、一気に魚を引き上げる。

視力が優れ、動作も俊敏なイ

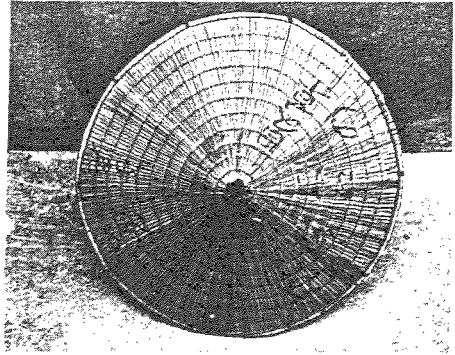
山女魚釣り／多摩川・青梅地先水域・昭和五六年八月



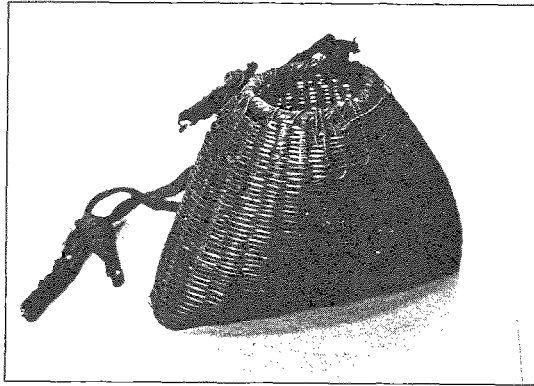
溪流釣り用の毛鉤



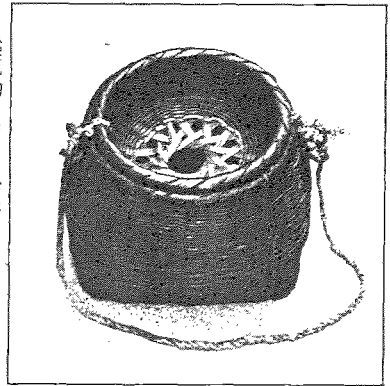
溪流釣りに被る笠／五日市町郷
土館蔵



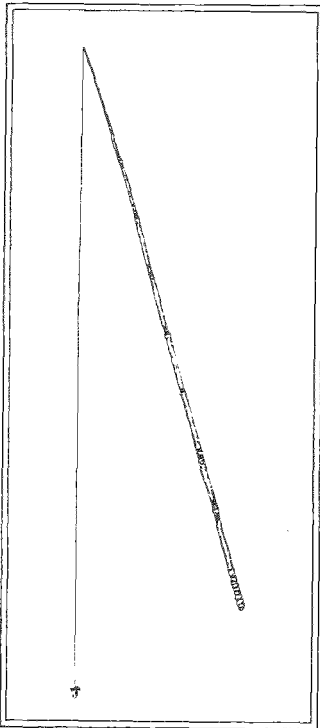
溪流釣り用の魚籠／奥多摩町教
育委員会蔵



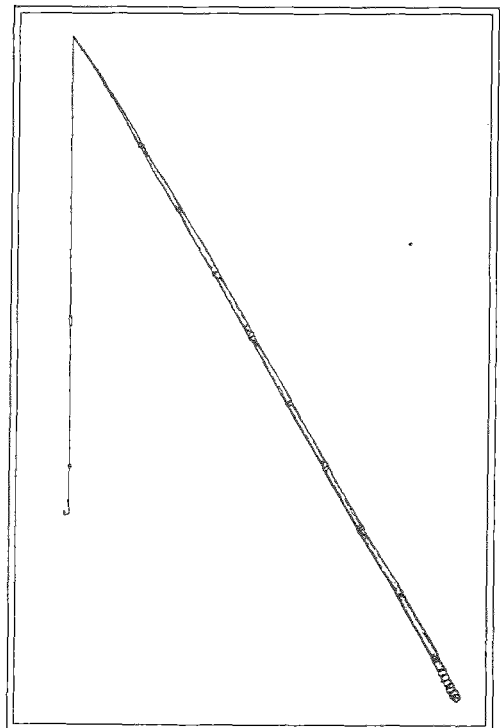
溪流釣り用の魚籠／五日市町郷
土館蔵



溪流釣り仕掛図（毛鉤釣り）



溪流釣り仕掛図（餌釣り）



ワナやヤマメを擬餌釣で釣り上げるには、それ相応の技術を要するが、溪流魚の毛鉤釣りは極めて単純な仕掛を用い、専ら釣り人の技術による釣法であるため、技術に自信のある職漁者や餌釣りに飽きた遊漁者たちが行った。

イワナやヤマメなどの溪流漁は、昔から山間の人たちが好んで食した魚である。昔の多摩川最奥部での食生活に、海産魚が食膳にのぼることは減多になく、魚といえは在地で捕れるイワナやヤマメ、それに鯽やウグイなど、魚種は極めて限られていた。

かつて多摩川水系の上流から源流部一帯の水域で、イワナやヤマメ釣りを生業とする人たちが、捕れた魚を旅館や近在の得意先に売って暮らしていた。彼等は溪流釣りの期間は魚を捕り、冬期などのオフ・シーズンには山仕事などに従事していた。昔は溪流釣り師として職漁が成り立つほど魚も捕れ、旅館などの求めに応じて、必要な数の魚を釣って納めていた。だが、山間で溪流釣りを生業にしていた職漁者たちは、奥部地域での材木搬出用の鉄砲流しが行われ、また植林害虫のための農薬の撒布、それに溪流魚の乱獲などで、イワナ、ヤマメは激減の一途をたどる。以後、溪流釣りが生業として成り立たなくなり、溪谷の職漁者たちは次々と廃転業し、多摩川水系では昭和三十年代以後、こうした人たちは見られなくなった。

三、流し鉤

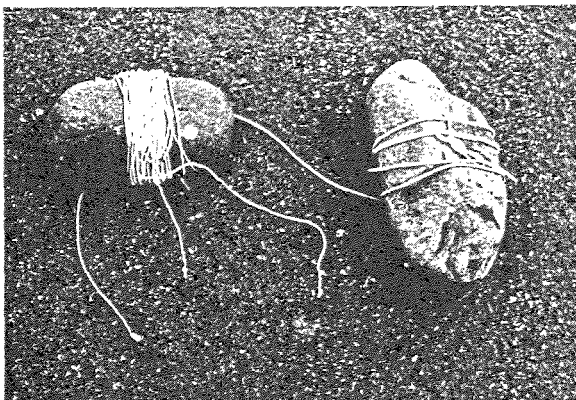
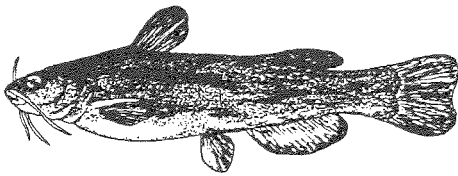
流し鉤は、前日の夕方に、装餌した釣鉤を川の中に浸しておき、夜の間、餌に誘われて喰い込んだ魚を、朝早くに引き上げる。流し鉤は、多摩川水系の上流から下流の全水域に亘って、古くから行われた漁法であり、流し鉤は、別名「置き鉤」、「千本鉤」、「鰻縄」、「長縄」、「ゴミ縄」などと呼んでいる。流し鉤は仕掛の違いによって、流し鉤

と置き鉤の二つの形式に分けられるが、対象魚ならびに設置する場所や使用する餌などの点で、両者に差異はない。さらに、多摩川水系におけるこれ等の定置式釣漁法の呼称については、流し鉤と置き鉤の名称が交錯しており、双方を区分する明確な基準がない。

流し鉤の仕掛には、大別すると二種の形があるが、その一つは木綿糸もしくは麻糸、水糸などの幹糸に、釣鉤を付けた枝鉤を、一尺程の間隔をおいて五、六本から十数本取付け、その両端に錘として石を結

ギバチ

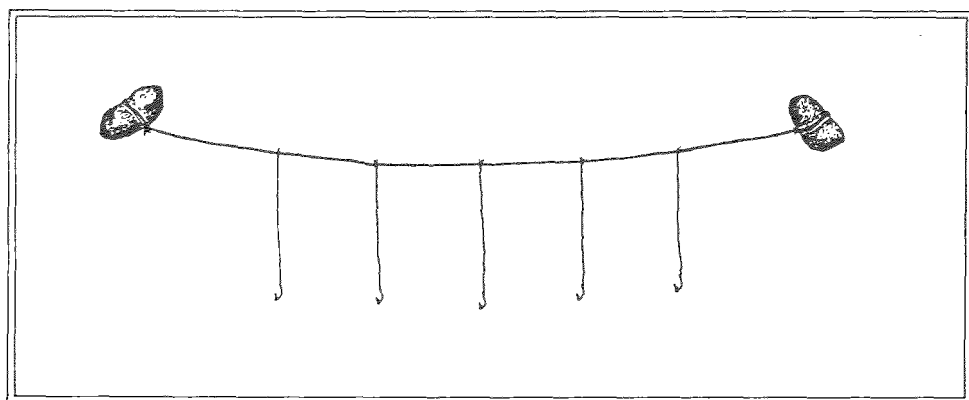
綺麗な水を好むギギ科の川魚で、胸と背鰭に棘があり、刺されると痛い。肉食性で性質は貪欲だが、食味は淡泊である。水質汚濁により消滅した。



流し鉤の仕掛／鈴木由太郎製作

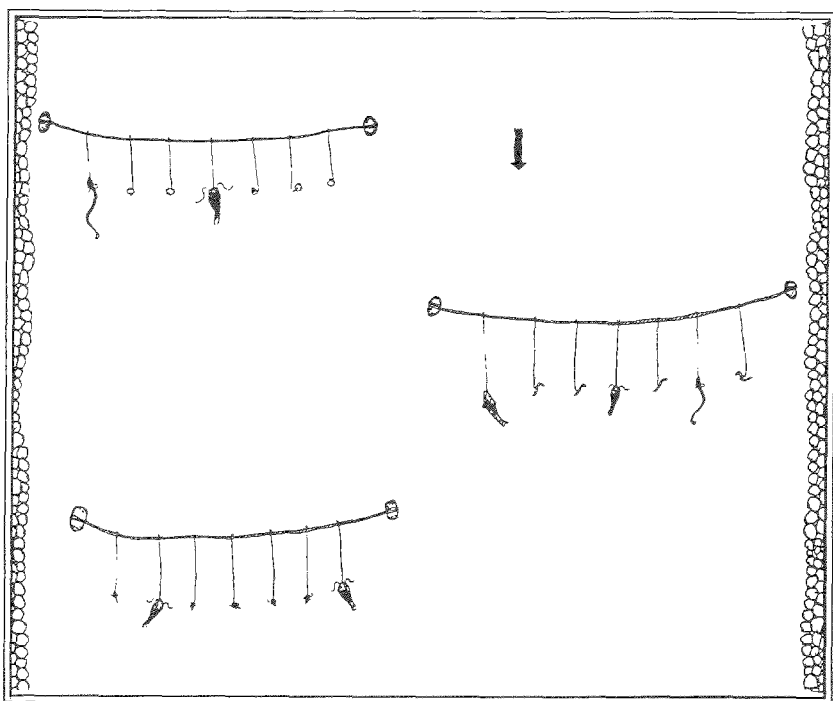
びつけたものである。こ
うした仕掛の鉤に装餌し
流れに設置するもので、
一種の延縄である。また
一方では、一本の釣鉤に
先きの材質と同様の釣り
糸を結び、反対側の糸先
を、長さ一、二尺の篠竹
などにくくり付け、仕掛
を設置する際に、篠竹を
川岸に挿し込んで固定す
る。この場合、仕掛を沈
ませるために、道糸に小
石の錘を取り付ける場合
もある。この仕掛は、地
方によって「一本流し」
とも呼ばれている。後者
は先きの延縄型の仕掛と
は異なり、あくまでも一
本仕掛の簡単な釣法であ
る。

流し 鉤 仕 掛 図



流し釣漁は冬期以外に行われた漁法で、その対象魚は鰻や鯰、ギバ

流し 鉤 設 置 模 式 図



チなど、夜行性の魚をはじめ、ウグイ、鯉、似鯉、マルタウグイなど
であり、上流水域では山女魚が流し鉤に掛かる。かつて、多摩川では
降海性の桜鱒が海から遡り、流域ではこの鱒をカワマスと呼び珍重
したが、昔は流し鉤でカワマスが捕れることもあった。

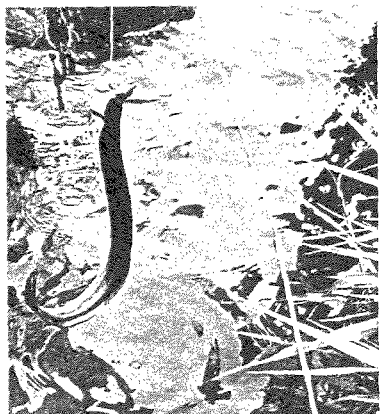
流し釣魚に使う餌は様々で、対象魚によつて餌も異なるが、流し釣に用いる餌にはシママミズ、ドバミズ、それに蛭などの環形動物類、トビケラなど水生昆虫の幼虫、巻貝のタニシ、それに魚類では鯀、泥鰌、オイカワ、モロコ、それに鮎の肉片などを餌に用いる。そうした餌を対象魚によつて使い分けるが、蛭や泥鰌は鮎の好む餌であり、鮎の肉片は鰻の好物で、それぞれの魚には自ずと好みの餌があつて、釣り手は対象魚が最も好む餌を用いる。

こうした餌を釣鉤に取り付け、流れに仕掛けるが、延縄式の流し釣では、大淵の上流の瀬などに川を横切る状態で仕掛を沈めておき、夜間から払暁にかけて魚が掛かるのを、早朝見廻つて捕り上げる。流し

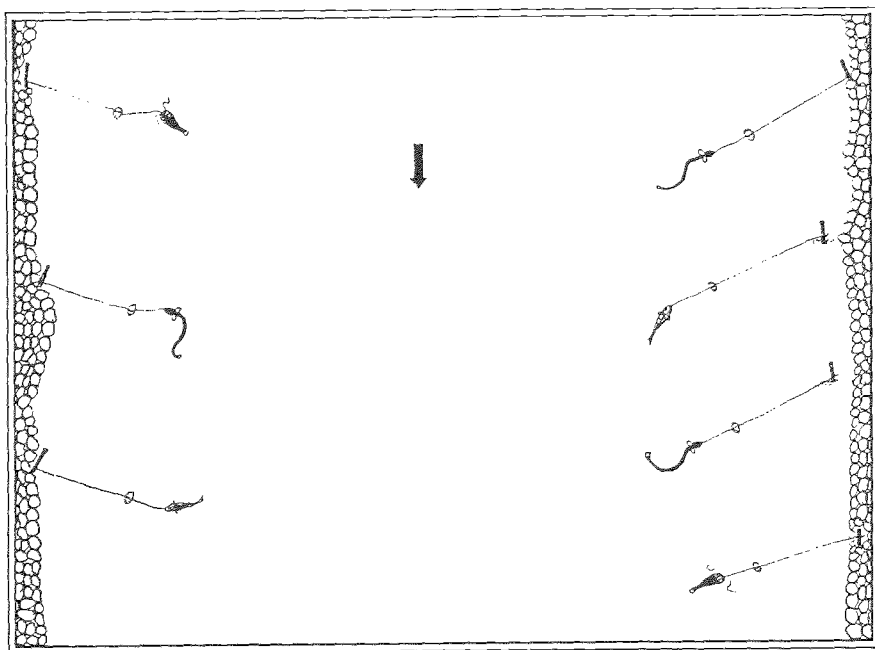


置き釣を引き上げ、掛かった鰻を捕る。／渡辺嘉平画・「多摩のふるさと」より

置き釣で鰻を捕る／昭和五七年八月・多摩川日野上宿地先水域での「伝統漁法実演」



置き釣設置模式図



釣の仕掛の設置数は、一晚で数ヶ所にも及ぶことが多く、稲城地方では、延縄一本を「一と掛け」と称し、職漁者は一回の漁で二、三〇掛けの仕掛を使い、素人でも五、六掛けは張る。一方、置き釣又は一本

流しと呼ばれる単鉤仕掛の流し鉤では、先きの延縄式流し鉤と同様に鉤に餌を取り付け、夜間に魚が徘徊しそうな場所に仕掛けておく。仕掛けを幾ヶ所にも設置しておき、先きの延縄式と同じく、翌朝早くに見廻り、鉤に掛かった魚を捕り上げる。

流し鉤の単鉤型と連鉤型仕掛の相違は、使用する水域の状況によって異なる。比較的

川巾の広い中、下流域では、延縄式の流し鉤が使われ、上流及びその支流水域で行われる流し鉤には、単鉤仕掛が多い。設置した仕掛に魚が掛る機会を多くするため、広い水域では線的に流れを横切るように設置し、山間部の細流などでは、流れの地形的な条件で、自ずから魚の通る場所が限定されるので、そうした場所では単一鉤によ



置き鉤仕掛／鈴木由太郎製作

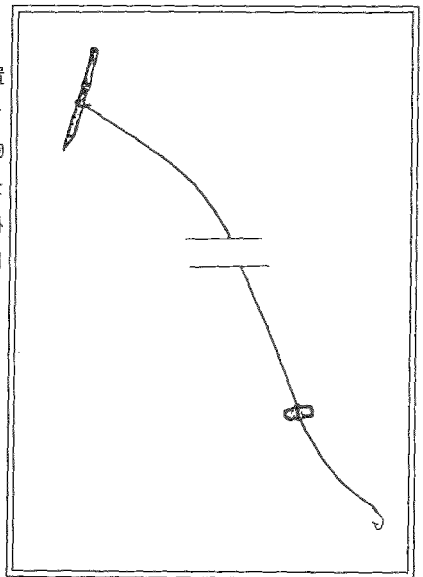


置き鉤・流し鉤の鉤部分

る仕掛で十分に釣漁の目的が達せられる。単鉤仕掛は、ここぞと思う流れの一点に設置するもので、細流に延縄式仕掛を使うことは、漁

撈効率の点で妥当ではない。

流し釣漁は、流域の少年たちが遊び漁の一環として行うものから、鰻などの比較的市場価値の高い魚種を専門に狙う職漁者や、半農半漁の人たちが行った漁法である。流し釣漁は、簡単な仕掛で手近かに得られる餌を用い、夕暮れ時、適所に仕掛を沈めて、掛かった魚を翌朝に捕り上げる極めて簡易な漁法で、この点は釜漁法と共通している。仕掛を定置して魚の掛かりを待つというのが流し釣の特徴で、手間の要らぬこの漁法は、昔から流域の人たちが行ってきた。

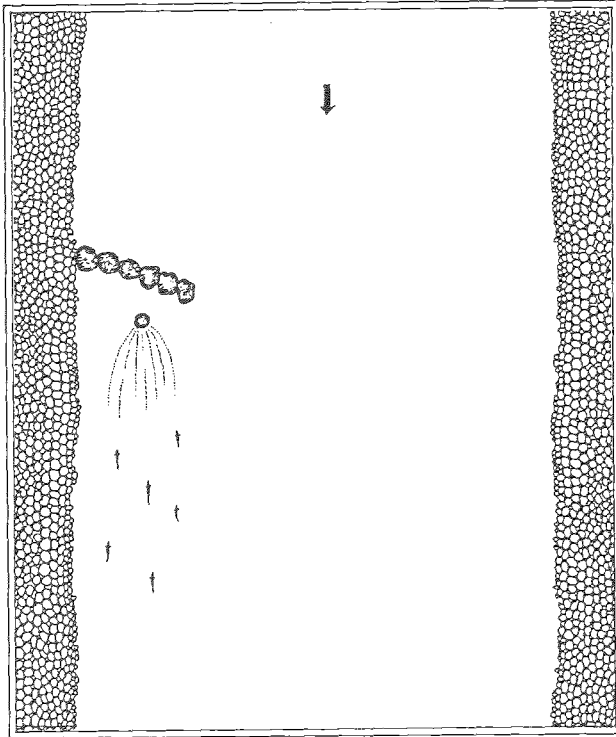


置き鉤仕掛図

四、打ち釣り

多摩川の中流域を中心に、ウグイの生息する上流を含む支流などで普遍的に行われた釣漁法で、ウグイを自製の擬餌鉤で釣るが、時には

打ち釣りで魚寄せの模式図



オイカワも釣れる。打ち釣りは、五月から九月頃にかけて、ウグイの摂餌行動が活発な時期に、主に流域の少年を含む遊漁者たちが、遊びと自家の菜料とりを兼ねて行った釣りである。昔、多摩川の中流では打ち釣りを楽しむ釣り人が多く、明治三十六、七年頃には、打ち釣り専用の「叩き鉤」が市販される程であった。

打ち釣りは、青梅地先の水域から調布辺りの多摩川本流筋と、支流の秋川や平井川、大栗川などでも行われた。ウグイを釣るための独特な釣り仕掛と釣法は、いずれの地域にも共通しているが、この釣漁法の名称については、地方によって様々な呼び名がある。一般的な呼称は

打ち釣りもしくは

「叩き釣り」と言

い、地域別の名称

については、「打

ち釣り」（立川、

日野、調布）、「叩

き釣り」（青梅、

羽村、戸倉、日野、

立川、調布）、「叩

き」（福生、立川、

日野）、「ベッチ

ヤンコ」（福生）、

「チョンチョン釣

り」（青梅）、な

どで、いづれも打

ち釣りの特徴を捉

えた呼称であり、

かつての多摩川水

系で、この釣漁法

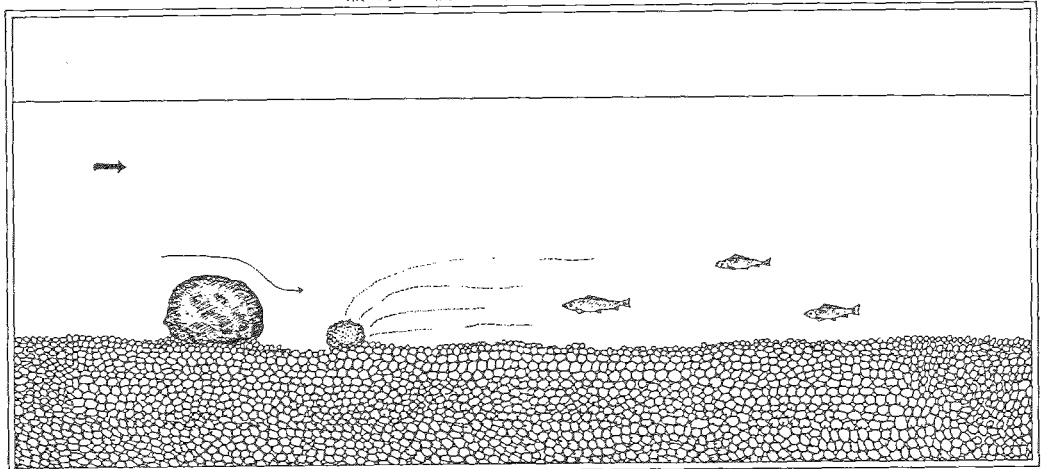
が盛んであったこ

とを物語る。

打ち釣りは、春

から秋までの早朝

魚寄せの模式断面図・打ち釣り



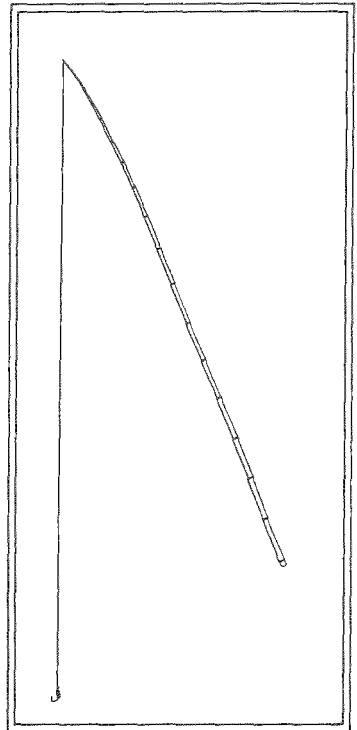
と夕方に行う釣りで、普通日中はやらない。ウグイやオイカワなど、川魚の摂餌行動が旺盛な時刻は朝と晩であり、擬餌鉤を用いる釣りは日中には釣果が期待できない。

打ち釣りの用具は、長さ一間前後の竹竿、それも野生の布袋竹であれば、弾力、強さの点で申し分がない。竿先に道糸を結び、糸は竿丈けと同じ、もしくはそれより五、六寸長めとし、糸の先に擬餌鉤を結び、道糸には浮子も錘も付けない。打ち釣りに用いる擬餌鉤は「叩き鉤」と言い、また、青梅では「空鉤(からばり)」と呼ぶ所もあるが、その多くは釣り人たちが自製した。

叩き鉤は、釣り人自身が木綿針や蒲団針を蠟燭の火で曲げて自製するか、専用の叩き鉤を購入して使う。昔、多摩川一帯で打ち釣りが盛んになると、打ち釣り専用の叩き鉤を製作して市販する店があった。特に羽村町の五ノ神の「鉤重」では、明治三十六、七年頃、渡辺重太郎(昭和二十八年没)が今までの叩き鉤を改良して市販し、その鉤の使い易さが評判となって、打ち釣り愛好者たちが競って買い求めた。また立川では、「ミヨシ屋」の老人が作った擬餌鉤を買い求めて使用するなど、明治から大正にかけて、多摩川水系の叩き釣りは活況を呈したものである。

叩き鉤はアゴ無しの鉤で、鉤の軸にゼンマイの綿毛を巻き付け、その上を細い絹糸で巻く。普通はこうした擬餌鉤を水面に浮かせて釣るが、大型のウグイを釣るには沈め釣りが効果的で、鉤の軸に予め板鉛を巻き込んでおき、その上にゼンマイの綿毛を巻きつけて用いること

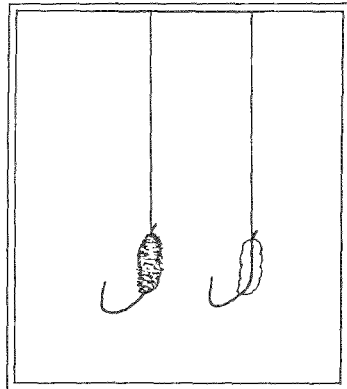
打ち釣り仕掛図



もある。竿と仕掛が揃うと、次は、魚寄せのための蚕の

蛹粉を用意する。乾燥蛹を木綿袋に入れて、木槌や石で叩いて砕き、少し粗目にしたものを撒き餌として用いる。

打ち釣りの擬餌鉤



打ち釣りに適した場所は、川底の礫が平坦に続く水深二尺前後の、流れの緩やかな場所が良く、釣り手は、座蒲団や米俵の両側に当てる。俵俵を川岸に敷いて、その上に座り込んで釣る。予め水流を加減するために、川の中に流れと直角に石を置き並べ、その下手に、蛹粉と土とを練り合せた団子を沈め、魚の寄せ餌にする。

こうした魚寄せの準備が整い、やがて、流れの下手からは、蛹の匂いに誘われた魚が集まってくる。頃合いを見計らい、釣り人は左手で

寄せ餌の縮粉を水面に撒き、同時に用意の竿を右手で操りながら、擬餌鉤を魚の群がる水面に投げ、魚信と共に魚を釣り上げる。左手で寄せ餌を撒き、右手は絶えず竿を上下しながら、擬餌鉤で魚を誘う。釣れた魚を一気に引き抜くと、アゴ無しの鉤が魚の口から直ぐ外れ、川原は見る間に魚で一杯になる。時には、予め川岸に石囲いの生簀を作っておき、釣れた魚を次々とその中に入れて生かしておく事もある。

打ち釣りは、鉤の打ち込みに微妙な技術を要する釣法であるが、熟練者の手にかかるると、竿先を軽く動かすだけで、あたかも水中の魚を拾う様に次々と釣り上げ、その軽妙な動作と釣技は、名人芸の域に達すると言われる。打ち釣りは、かつてウグイやオイカワが群れ泳ぎ、川の中を真っ黒に染める様に生息していた頃の釣漁法であるが、昔日の面影を留めぬ現在の多摩川の流れを前にして、こうした技法による釣果が、俄には信じ難い気持になる。

五、瀬釣り

瀬釣りは、主に多摩川中流域で行われた釣漁法であり、「毛鉤」を使いアエやウグイ、オイカワなどの魚を釣る。瀬釣りは、四月から八月頃にかけて、川の浅瀬に遊泳する魚を対象とし、水深が二尺前後の、比較的平坦な流れの瀬で行う。瀬釣りの名称は、こうした場所での釣法に由来している。

瀬釣りは、多摩川水系に毛鉤がもたらされた明治以降より行われたが、この釣りが盛んになったのは大正に入ってからで、瀬釣りの季節

になると、多摩川の各所で瀬釣りを行う人の姿が見られ、遊び釣りの中では大変に人気の高かった釣法である。

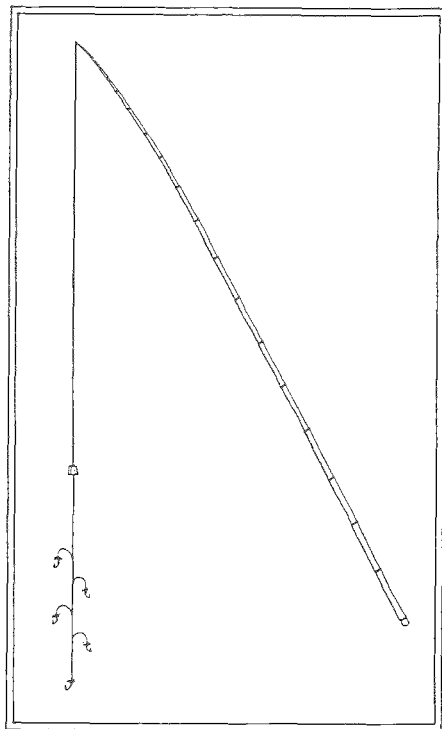
瀬釣りの用具は、長さ二間半から三間前後の竹竿に道糸を結び、その先に浮子を通した下に、擬餌鉤を交互に四本から六本取り付ける。桐製の浮子は六角錘型をしており、この型状は仕掛を水面に引き寄せて流す際、浮子の作用で水面が波立ち、それが水中の魚を誘うのに効果がある。浮子は使い古しの桐下駄などを利用して自製したが、同じ形の市販の浮子を用いることもあり、また玉浮子を使うこともある。

瀬釣り用の擬餌鉤は毛鉤或いは「蚊鉤」とも呼び、市販品を用いるが、蚊鉤の種類によって、鮎が掛かるものと、ウグイやオイカワしか釣れぬ鉤とがある。鮎蚊鉤は加賀鉤と言われ、当時は大変に高価であった。瀬釣りは夕方によく釣れ、蚊鉤を付けた仕掛を上手方向の流心に投じ、竿を手前に横引きしながら、その間に浮子が水面に小波を打たせる様に操作し、下流の川岸近くに寄せる。こうした手順を繰返し行い、その間に浮子の波紋が瀬に遊泳する魚を寄せ、仕掛の蚊鉤に魚が飛び付いてくる。

川面を靜かに吹き渡る微風が、銀色の縮細鮎を波立たせ、釣り人は無言のまま釣竿を打ち込んで流し、水面の微かな魚信に目を凝らす。時折、魚鱗が宙に光り、釣り人は獲物を魚籠に納める。暮れなずむ川辺には、落日の光芒が一際明るく輝いて、辺りは夏の宵の気配が徐々にしのび寄る。

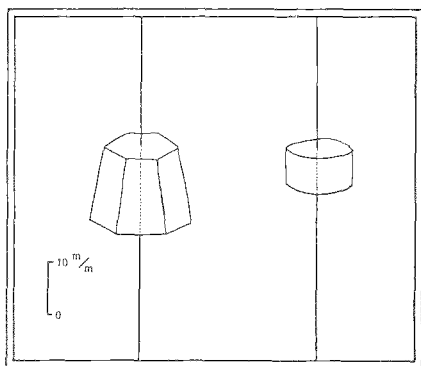
瀬釣りの叙情的な世界は、釣り人が靜かな川面の表情と清冽な流れ

瀬釣り仕掛図



に浸りながら、そこに生息する豊かな魚族との交歓を、心ゆくまで堪能するもので、多摩川が、かつて良き流れであった頃、瀬釣りを楽しむ人たちは、川が育んだ自然に対する敬虔な悦びを存分に享受していたのである。

瀬釣りに用浮子



その後多摩川は、関東大震災の帝都復興の影響を直接に受け、川の姿を大きく変えることになる。多摩川は東京に近い川砂利の供給地として、首都復興のために砂利が採掘され、その結果、川床が一米以上も下がり、川の相貌は見る影も

なく変様した。川は魚たちにとって生息の場であるが、川砂利採取で産卵場や餌場を奪われ、大正十二年頃を境に多摩川は荒廃し、そこに住む魚たちも徐々に減少する。かつてあれ程盛んであった瀬釣りも、この頃から昔日の様な釣果は望めなくなり、徐々に廃れてゆく。

六、ドブ釣り

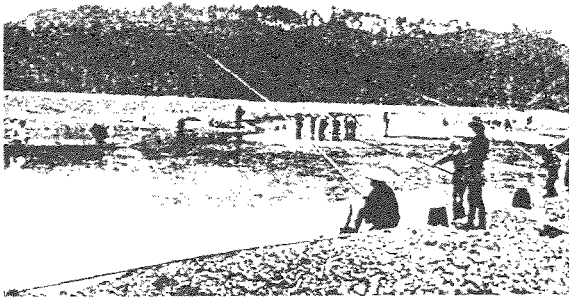
毎年六月、多摩川で鮎漁が解禁になると、上流から下流近くまで川辺に釣竿が林立する風景は、昭和の初期から十二、三年頃までに見られた多摩川の風物詩であった。これらの釣り人の殆どがドブ釣りで、用意した様々な毛鉤を用いて、水中に遊弋する若鮎釣りを競い合うのである。ドブ釣りは遊び釣りの中で、友釣りと並び称される鮎の二大釣法の一つであるが、多摩川水系で行われる様になったのは、明治以降と言われ、大正末期から昭和の十年頃が、多摩川のドブ釣りの最も盛んな時代であった。

多摩川水系では、ドブ釣りが普遍的な名称であるが、一部の地域では、ドブ釣りを「溜り釣り」或いは「鮎の毛鉤釣り」とも呼んでいる。ドブ釣りの「ドブ」とは、川の淵などで深さが一丈以上もある瀬場の名称で、ドブ釣りはそうした場所に生息する鮎を、毛鉤と称する擬餌鉤を用いて釣り上げる釣漁法である。ドブ釣りは、専ら素人が行った遊漁である。

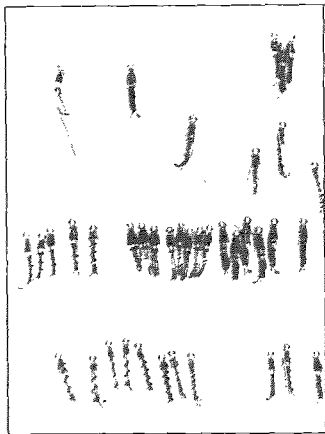
釣竿は、三間乃至四間半の延べ竿か継ぎ竿を用いる。竿先に道糸を結び、その近くに糸の伸縮を加減する調節具を取り付け、糸の先端に

七、八本の毛鉤を交互に結び、その下に鉛錘を取り付けた仕掛を用いる。そうした仕掛を鮎の居そうな深みに沈め、川底に錘が着いたら静かに竿を上げる。この動作を繰り返して行い、流れに毛鉤が揺れ動いて鮎の就餌欲を誘う。

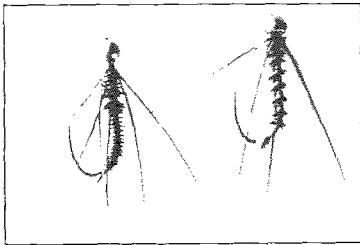
六月頃、未だ解禁間もない若鮎は、水生昆虫などの動物性の餌に積極的な摂餌行動を見せる。その後、成長するに及んで、所謂、水垢と称する岩に付着した藻類を食べる様になるが、六、七月頃は、水生昆虫の幼虫に似せた毛鉤に飛びついてくる。釣り人は一日中釣竿を倦むことなく上下させて、水中に揺れ動く毛鉤で鮎の就餌欲を誘う。友釣りの積極的な釣法に比べて、ドブ釣りは静的な釣り味を楽しむ技法で



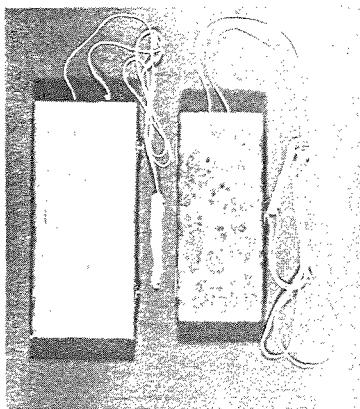
ドブ釣りをする釣り人も混る大正期の釣り風景／多摩川是政付近・『むかしの府中』より



ドブ釣り用の鮎毛鉤



精緻な鮎毛鉤



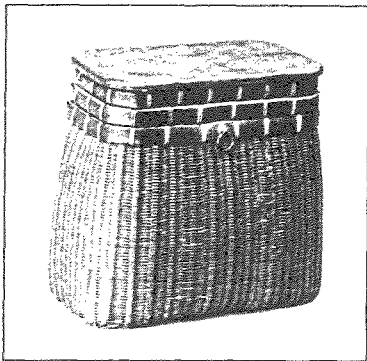
毛鉤収納ケース／鈴木由太郎蔵

あり、今日に至るまでドブ釣り愛好者たちを了魅し続けている。

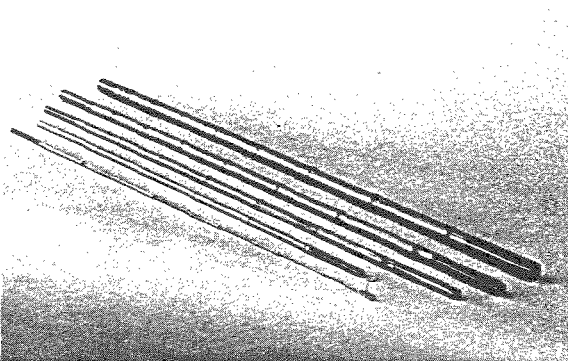
ドブ釣りは、本来鮎を釣る技法として発達してきたが、擬餌鉤には鮎ばかりでなくウグイやオイカワも掛かる。ドブ釣りに使う毛鉤は二種類を超えと言われ、それぞれが精緻を極めたものである。ドブ釣り用の毛鉤が擬餌鉤であり、釣果に優れた鉤を模索した結果、今日見られる様な多彩な毛鉤となった。毛鉤の一本一本が精緻にして優美であり、昔の毛鉤は主に加賀の金沢製で、明治の末頃でも、毛鉤一本が十銭という大変に高価なものであった。

毛鉤は、キジやヤマドリ、それにニワトリ、カモ、七面鳥などの様々な羽毛を鉤に巻き付け、胴巻や帯、それに蓑毛や角などの部分を作り上げ、鉤の頭部には漆の小玉に金粉を塗った精巧なものである。二種類以上に及ぶ毛鉤には、それぞれの名称があり、釣り人たちは所持

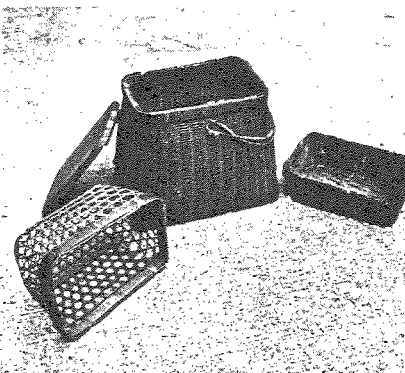
ドブ釣り用魚籠／立川市教育委員会蔵



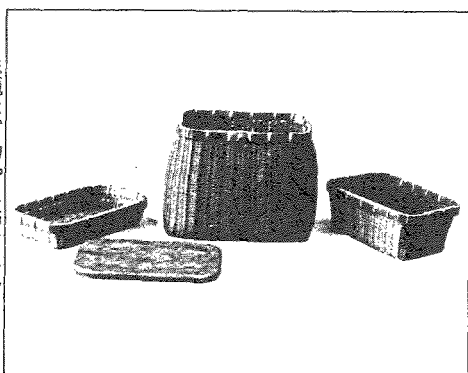
ドブ釣り竿／鈴木由太郎蔵



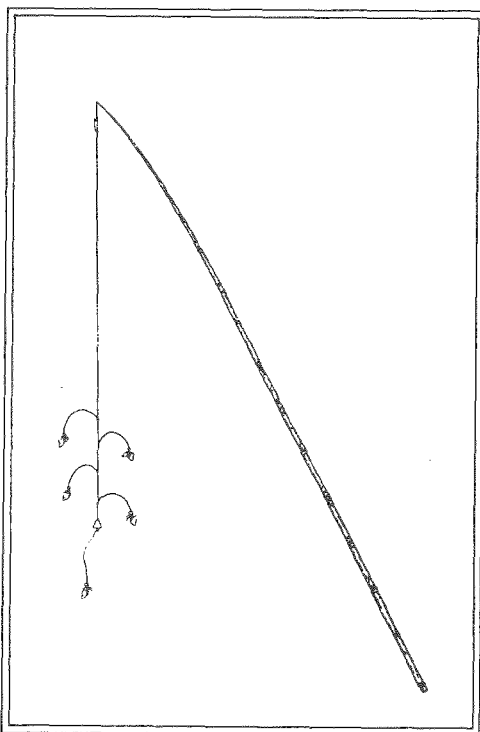
ドブ釣り用の魚籠／調布市郷土博物館蔵



魚籠は、釣った鮎を入れておく外に、釣り用の小物類などが収納できる。



ドブ釣り仕掛図



した数多の毛鉤の中から、天候や魚の動勢を判断しながら、最も鮎の掛かりそうな毛鉤を選んで用いる。

多摩川のドブ釣りに使われた代表的な毛鉤は数十種にのぼるが、その中で「八つ橋荒巻」、「お染二の字」、「桃ぼかし」、「青ライオン」、「青お染」、「五郎」などの銘柄鉤を多くの釣り人が用いていた。それらの一本一本が、当時では大変に高価なものであって、それ故、多摩川流域に住む人々たちの中で、鮎のドブ釣りに興じる様な人たちは極く一部に限られていた。ドブ釣りは、金と暇に恵まれた人たちの、所謂、何処そこのお大尽とか、金持ちのご隠居と言われる人たちの優雅な遊び釣りであった。当時、多摩川でドブ釣りをする人の多くは都会からの釣り人で、昭和の初期頃までのドブ釣りは、流域住民の誰しもが楽しめるという釣法ではなく、一般の流域住民たちは、ドブ

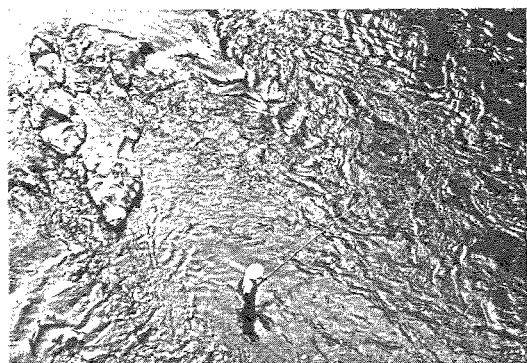
釣り以外の漁法で魚を捕っていたのである。

七、友釣り

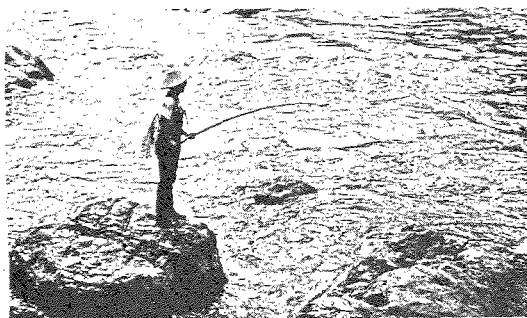
鮎の友釣りは、鮎の習性を巧みに利用した極めて独創的な釣漁法であるが、多摩川水系では可成り古くから行われ、明治初期には、多摩川の中流域で「友釣り」もしくは「廻釣り」の名で紹介されている。江戸時代には、この釣法に限って、庶民が行う事を許されず、友釣りは、専ら武士階級だけに許された釣法であったと言われている。

鮎は河口近くの礫底に産卵し、やがて孵化すると、そのまま下流の

友釣り／多摩川御岳地先
昭和五七年八月



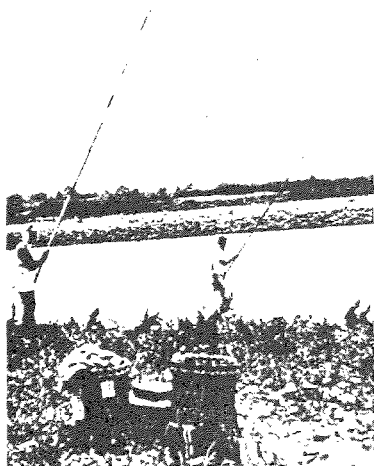
友釣り／多摩川御岳地先
昭和五七年八月



掛かった鮎を捕り上げる／多摩川・青梅地先・昭和五六年八月



友釣り風景／多摩川・関戸橋下流・昭和二六年夏「むかしの府中」より



内湾近くで越冬して稚魚になる。そして春になると、大挙して稚鮎が川を上り始める。仔鮎は、それまで動物質の餌を食べて生育するが、やがて、食性を変えて植物質を摂るようになり、それぞれの鮎は流れの一部に自分のテリトリーを持ち、これが所謂「縄張り鮎」と言われる。ごく普通に見られる鮎の縄張りは、川底の大石回りを中心とする一平方米余りの区域で、縄張りに居着いた鮎は、こうした川石に着生する藻類を食べて生長する。藻類は俗に「水垢」又は単に「垢」とも呼ばれ、この水垢の生育する区域は、縄張り鮎にとっては大切な生命線であり、縄張りに居着いた鮎の習性は、その場を占有する意識が極めて強い。他の鮎の侵入に対して、縄張り鮎は果敢な攻撃を行い、遂

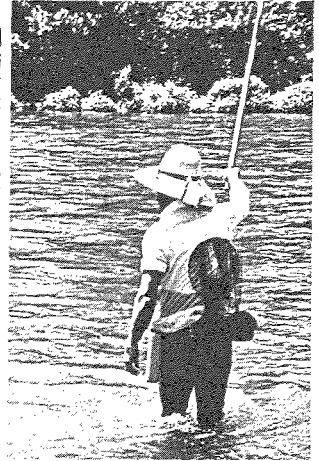
に侵入鮎を縄張りの外に
追い払ってしまふ。石垢
の付いた瀬にいる鮎の縄
張りを、昭島地方では「ジ
パン」又は「ジバ」など
と呼んでいる。

友釣りは、長い間の経
験から鮎の習性を知り、
逆にそれを利用した巧妙

な釣漁法で、縄張りに居付いた鮎に侵入鮎を意図的に操作し、縄張り
鮎がそれを追い払おうとする際、仕掛の鉤に掛かった所を釣り上げる。
多摩川は昔から鮎の川として名高く、様々な漁法で鮎を捕っていた
が、江戸期から明治にかけては、網や笠による漁法が主流を占めてい
た。だが大正以降、友釣りはドブ釣りと共に鮎の遊漁法として、多摩
川では大きな人気を呼ぶようになり、毎年六月の解禁以後にはドブ釣
りが盛んで、七、八月になると、居付き鮎を対象に友釣りが行われた。

友釣りの用具は、仕掛を付けた釣竿と、釣り上げた鮎を捕り込む手
網、それに釣人が漁場を移動する際に、紈鮎を生かして持ち歩く通い
筒や、簡易生簀のおかもちなどがある。友釣り竿は、普通四間前後の
竿を用いるが、川幅の狭い場所では三間、また川巾の大きな流れでは
五間以上の竿を用いることがある。

友釣り竿に道糸を結び、その先に、紈鮎を沈める鉛錘を取り付ける。

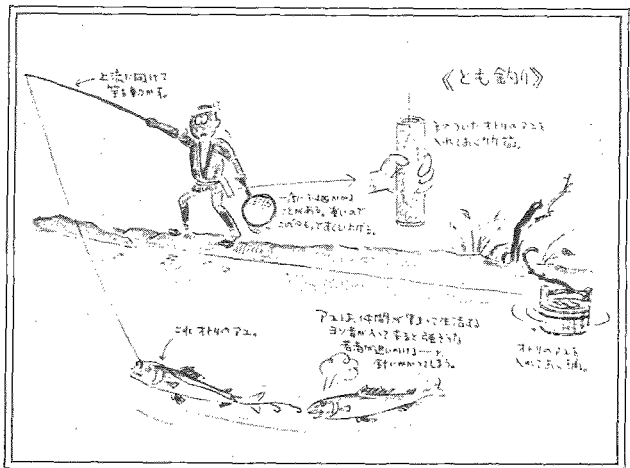


紈鮎を泳がせ縄張り鮎の掛かりを待つ
多摩川・青梅地先・昭和五六年八月

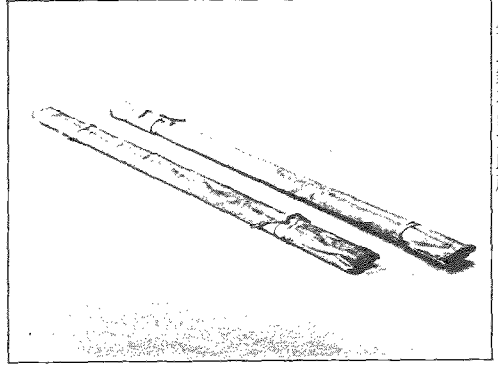
さらに先の鉤素糸には、紈鮎を仕掛に直結する鼻環を取り付け、そ
の先に一本の逆鉤を付け、それより二本の掛け鉤を付ける。こうし
た仕掛を用いて紈鮎に鼻環を通し、釣り人は鮎の居そうな瀬に紈鮎を
誘導する。紈鮎は、別名「種鮎」もしくは単に「種」とも言い、昔、
多摩川では一般に「タネアイ」と呼んでいた。多摩川流域の方言では
鮎を「アイ」と呼び、また鮎籠を「アイカゴ」、鮎釣りは「アイ釣り」
と呼んでいた。

鮎の友釣りは、大正以降、多摩川の夏の風物詩として親しまれ、季
節になると沢山の釣り人が都会から押し寄せた。焼けつく様な河原石

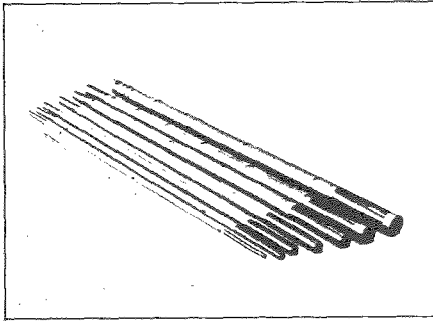
『友釣り説明パネル』／世田谷区立郷土館蔵



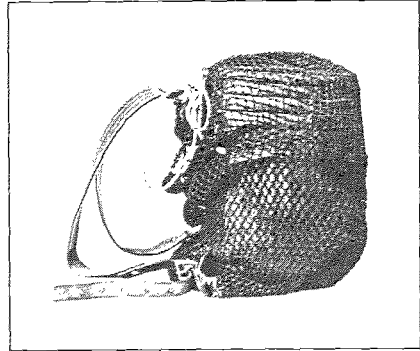
竿ケースに収められた友釣り
竿／鈴木由太郎蔵



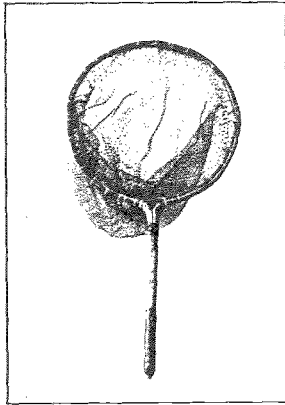
友釣り竿／鈴木由太郎蔵



友釣り用具を収納して背負う
網ザック／鈴木由太郎蔵



友釣り用の手網／立川市教育委
員会蔵

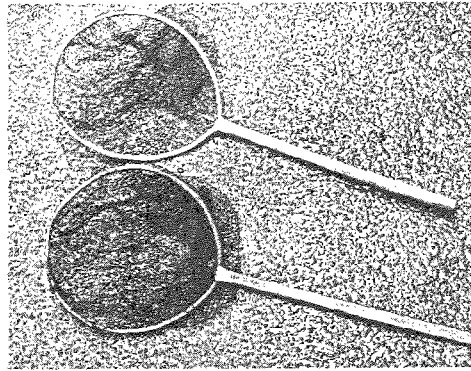


の照り返しを歩み、清流に立ち込んで竿させば、そこは清涼の気宇溢れる別世界である。

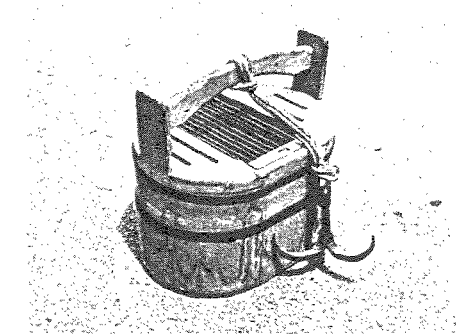
釣り人は静かに川底の気配を伺い、鮎の喰み跡を探る。滔々と流れる瀬に陽光がきらめき、川は豊饒に満ちあふれている。早速に、持参の罎を傷めぬよう鼻環を通し、流心に向けてそうと放してやる。釣り人は絶えず竿先に気を配り、罎鮎の動勢を見守る。元氣な罎鮎は流れを泳いで、やがて水中の縄張鮎に遭遇する。

自分の餌場を守ろうとする居付きの鮎が、侵入した罎鮎に向って積極的な攻撃を仕掛けてくる。そうした鮎同志の水中のやり取りが、竿を通して釣り人の手に細やかに伝わり、友釣りでも最も緊張する瞬間である。この釣りのえも言われぬ醍醐味であるが、三昧境の瞬間を

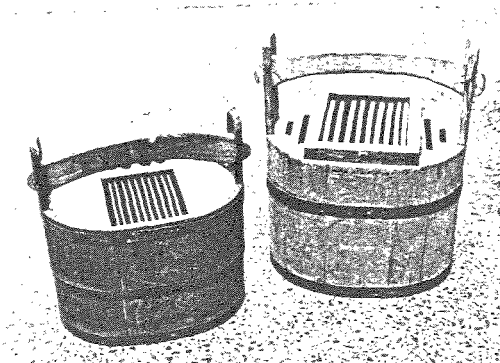
手網／青梅市郷土博物館蔵



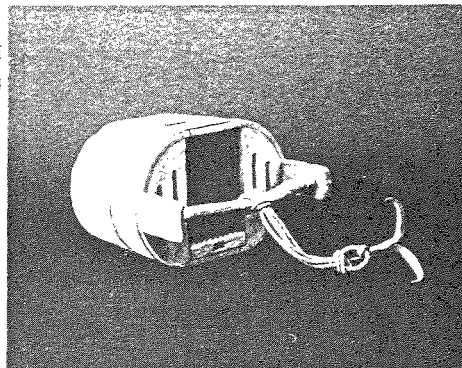
罎鮎用の生簀桶／立川市教育委
員会蔵



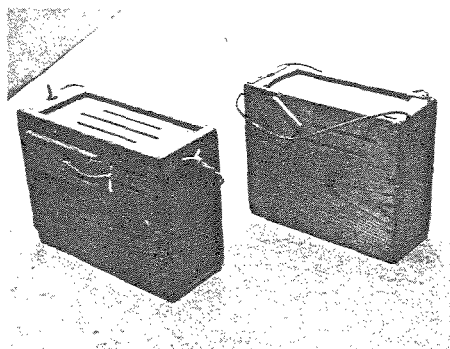
生簀桶／青梅市郷土博物館蔵



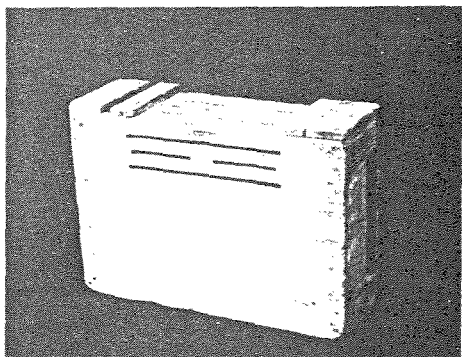
生簀桶と錨



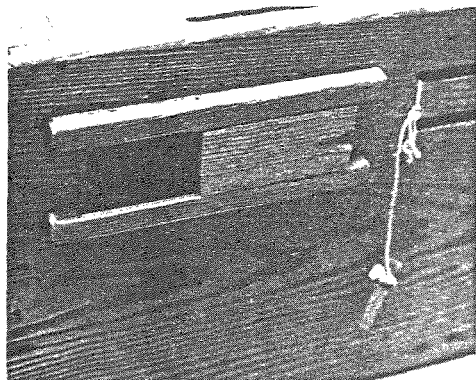
錨船用の生簀箱／五日市町郷土館蔵



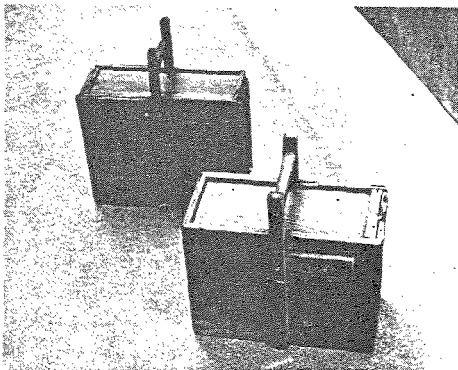
錨船用の生簀箱／立川市教育委員会蔵



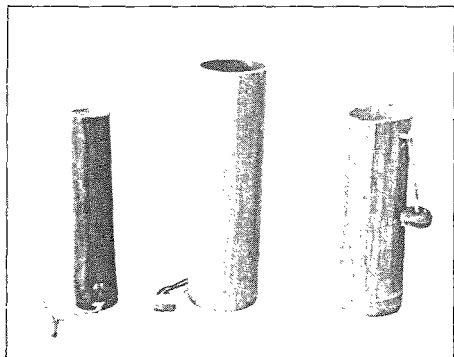
捕れた鮎を入れる窓口



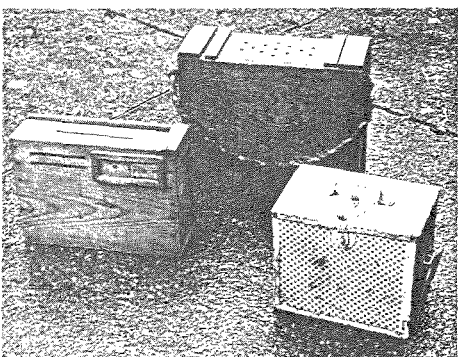
生簀箱「おかもち」とも言う／五日市町郷土館蔵



漁場を移動する時に錨船を入れる「通い筒」／立川市教育委員会蔵



錨船用の箱生簀。様々な型がある。／青梅市郷土博物館蔵

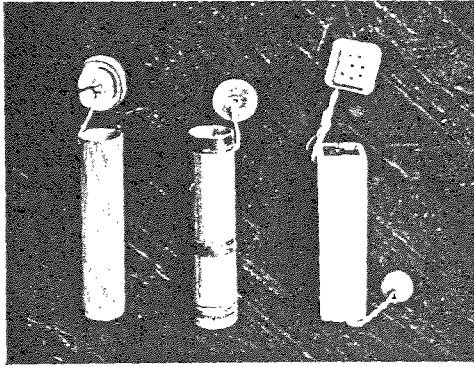


ける様に魚信が破る。

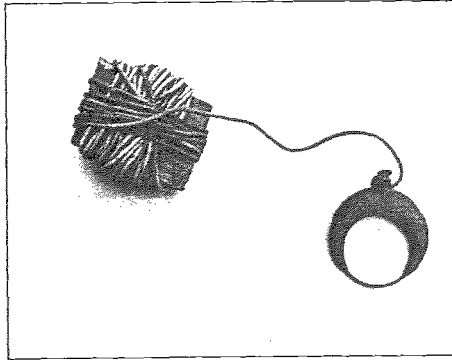
「掛かった」

掛り鮎がなおも深みに逃れようとするのを竿でいなしながら川岸に寄せ、銀色の体の馥郁とした香りを漂わせる鮎を手網に収める。

友釣りの対象は己れの縄張りを持つ鮎で、縄張りを持たずに生活する群れ鮎はこの釣りに掛からない。だが縄張り鮎を釣りあげると、直ぐに別の鮎が来てその場で縄張りを作り、石垢の生育の良い、所謂「良いジバン」は、良い鰻穴と同様に次々に鮎を定着させる。であるから友釣りは、俗に「鮎を釣るより川の石を釣れ」と言われる程で、川底の地形とそこに付着する藻類の如何が釣果に大きく影響する。

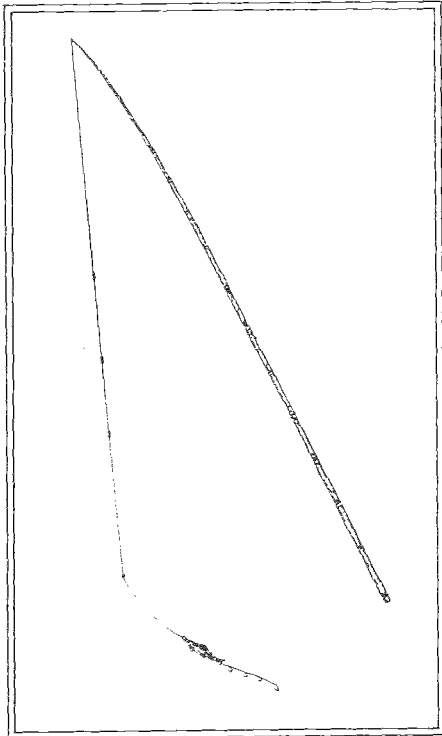


図鮎通い筒／青梅市郷土博物館蔵



鉤はずし。川底などに鉤掛かりした時に用いる。／青梅市郷土博物館蔵

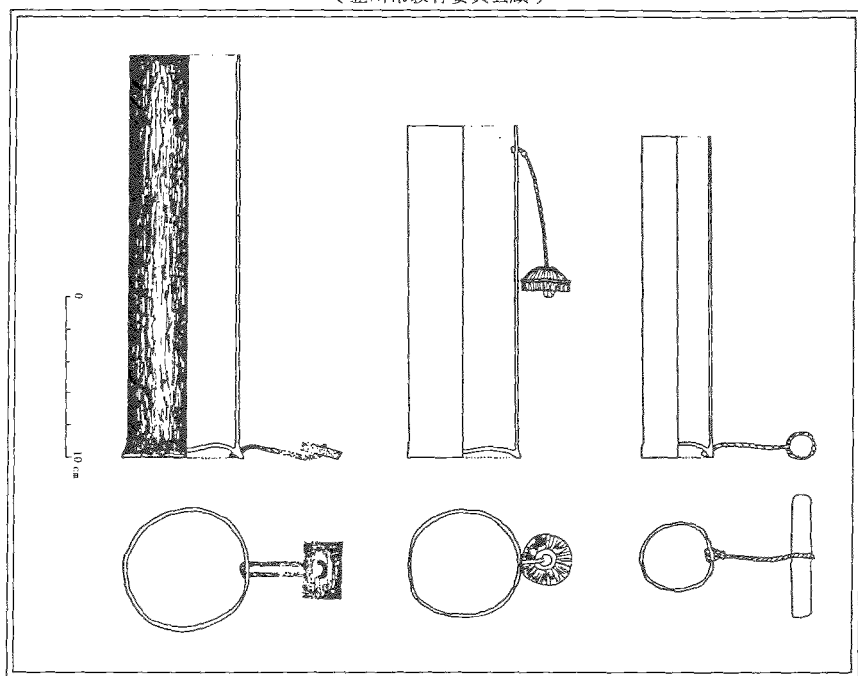
友釣り仕掛図



鮎が縄張りを作っているかどうかは、川底の石に付いている水垢の状態で判る。鮎張り鮎がいれば垢を喰んだ跡が幾つもあり、釣り人たちはこれを「鮎の喰み跡」と称し、そうした場所は友釣りの絶好の場所、釣り人は直ぐさま罎を泳がせて、縄張り鮎を誘い出す。清冽な流れと水中に射し込む太陽が藻類を育み、鮎の餌を豊富にするが、晴天が続くと、水中の垢が育ちすぎやがて枯死する。釣人は「水垢が腐った」と言い、縄張り鮎の追いが鈍くなって、釣果は上がらなくなる。やがて降雨で川が増水するが、再び流れは平静を取り戻す。川底には新たな水垢が生育して縄張りが形成され、鮎は盛んに水垢を喰べて大きくなる。

友釣りは、盛夏から秋の降り鮎の季節までの釣りであるが、熟練を要する技法と釣りの奥深い境地は、友釣り愛好者を了魅し、他の伝統漁法が消失した現在でも、友釣りは益々盛んである。

通い筒寸法図
(立川市教育委員会蔵)



鮎鮎用の通い筒は、別に「鮎鮎入れ」、「ツツッポ」とも言う。

八、さくり

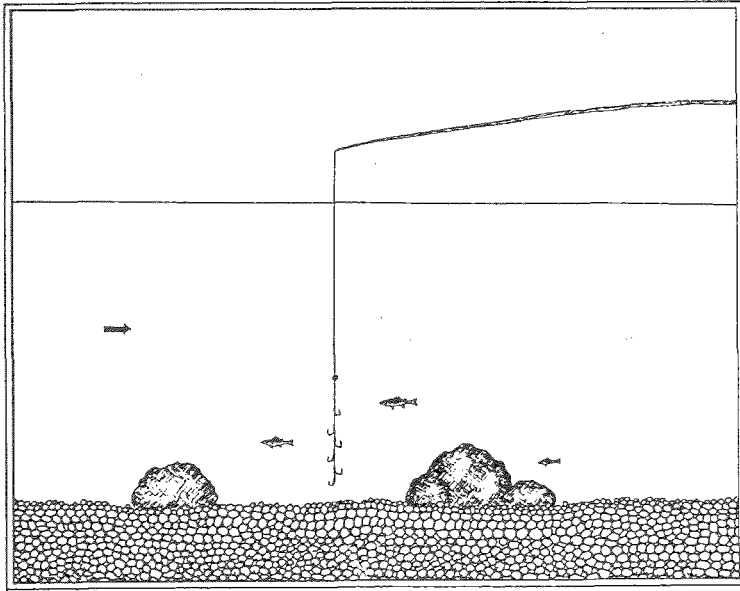
さくりは、多摩川の中流を中心に、初夏から十月の中旬頃にかけて、

水中を遊泳する鮎を、掛け鉤の付いた仕掛けを用いて釣り捕る技法で、江戸時代の資料にも見られる古い釣漁法である。多摩川では夏になると、中流域の川辺ではさくりが盛んに行われたが、この漁法もさくり技法に似た「コロガン」が普及したために、昭和十年以降、多摩川では見られなくなった。

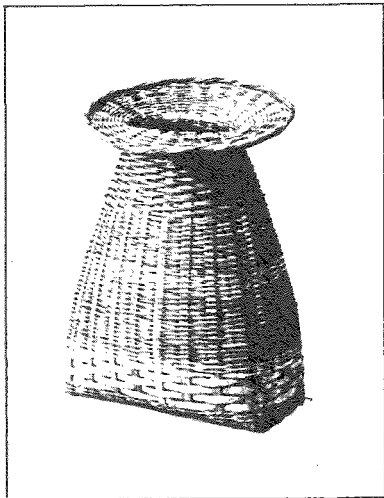
さくりは水中の魚を引き掛けて釣る漁法であるが、地域によって「しやくり」（府中）とか「引かけ」（同）、「見掛け」（羽村）、「テシカラ釣り」（稲城）などと呼び、淵や沈床回り、それに大石のある深場所などに遊弋する鮎を、掛け鉤で釣り捕る。普通、長さ三間以上の延べ竿を用い、道糸の端に錘を取り付け、その先に三、四本一組になった錨型の鉤を三、五本取り付ける。或いは錨鉤の代りに鮎掛け鉤を五、六本、多い場合には十本も取り付ける事がある。また掛け鉤が一本の場合もあり、別に重りを用いずに、三、四本一組の錨鉤に鉛や銅の錘がついた仕掛けを用いる。

釣り手は鮎のいそうな深場の川岸や流れに立ち込んで釣るが、場合によっては舟を使って鮎の居場所を探り、舟上で立ったまま竿を操作する事もある。さくりがコロガンと異なる点は、ポイントに鉤付きの錘を川底に沈め、頃合いを見計らって急速に引き上げ、その途中で掛かった魚を捕らえる。或いはさくりの別名が見掛けと言われる様に、水中の魚の挙動を見ながらここぞと思う時に引っ掛ける。さくり漁の引き掛け動作が水面に垂直に行うのに対し、コロガンは流れの上流に仕掛け投じて錘が川底の石の上を飛び渡る様に引き、仕掛け鉤に魚を掛け捕るものである。

さくり漁法模式図



即座師／渡辺嘉平画・「多摩のふるさと」より



魚籠／立川市教育委員会蔵

大正から昭和の初め頃にかけて、多摩川の鮎をさくり漁法で捕る人は一部の人たちに限られていた。流域周辺の農家は夏の農作業に忙しく、川釣りを楽しむ余裕はなかったが、養蚕農家から繭を仲買し、それを製糸会社の集繭所しゅうけんじょに卸すのを生業とする即座師と呼ばれる人たちがいた。

季節商人である彼等は、繭商売の暇を見ては調布や府中地先の川辺

でさくり釣りを行っていた。その恰好は手甲、脚絆、管笠のきりつとした釣り姿で、普通の者とは違った恰好をしているので、一見して即座師である事が判った。彼等は午後の三時頃から、流れのぶっつけでさくり釣りを始め、二、三時間で沢山の鮎を釣り上げ、捕れた鮎を府中界隈の料理屋や遊廓などに持ち込んで売り、良い日当を稼いでいた。当時の即座師たちの粹ないでたちとさくり技法の見事さは、今でも流域の人たちの語り草になっている。

さくり釣りは、江戸時代、秋川水系でも行われており、「瀬張」と並んでさくり漁の記録が見られる。また、文政六年（一八二三）に刊行された『武威名勝図会』によると、

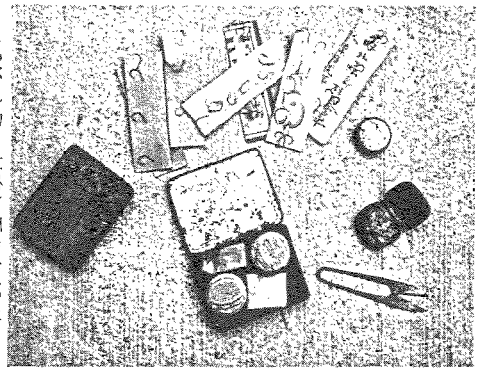
「…釣さく」 これも日野辺にてはなき漁なり。拜島辺にて専らなす。鮎は種々の漁になれて、深き淵か、または川瀬の荒き深きところにあるを捕る業なり。六月末よりの漁なり。鮎も小さき内は水底に住まず。六月末より深き水底の石について居るものなり。馬のスの丸く太きに一尺程ずつ置きて針を三本つけて、そのもとに鉛の重き鎖をつけて水底へ沈めて、鮎を釣するをサクリともいい、また引カケとも云。手練を要す。手易くは捕れず。…」と、さくりについて述べている。

さくりの技法が、掛け釣を垂直方向に引いて水中の鮎を掛け捕るのに対して、コロガシは川底を面的に探る釣法であり、多摩川にもたらされた新しいコロガシ釣りの技法は、釣果の面でさくりよりも優れていた。長い間多摩川で行われてきた古い漁法のさくりは、昭和に入り、コロガシが盛んになると共に衰退した。

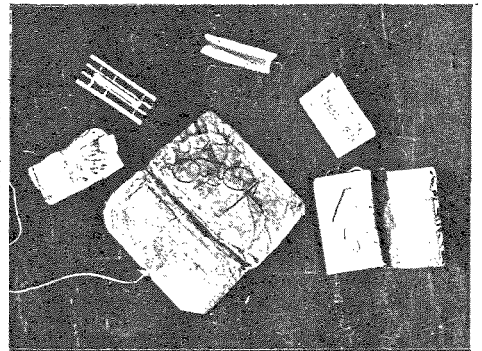
九、ころがし

ころがしは、水中の魚を釣で掛け捕る釣法で、多摩川水系では大正頃から行われ、長い伝統をもつ従来の「さくり」に代って、盛んになった。ころがしは、水中に遊泳する魚を選ばず掛け捕るが、主に鮎を捕るための釣法である。

ころがしは、魚を強制的に掛け捕る極めて積極的な釣法で、増水した川や濁り時など、友釣りが不可能な川の状況であっても鮎を釣ることができる。また友釣りの種鮎鮎を入手する際に、ころがし釣りをする。



ころがし釣り仕掛／調布市郷土博物館蔵

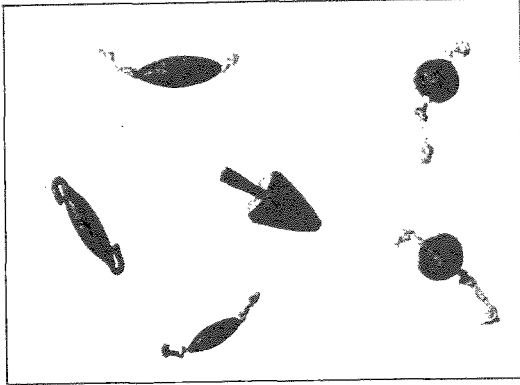


ころがし釣り仕掛／青梅市郷土博物館蔵

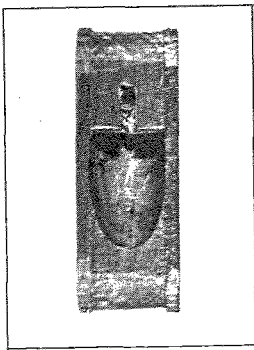
ころがしは盛夏から秋までの釣りで、投網などで追われてスレた鮎も掛け釣で捕ることができる。一方ころがしは、ともすれば乱獲の恐れのある釣法と言われるが、多摩川水系では中流を中心に鮎のころがし釣りが盛んで、別に「ゴロビキ」とか「引きかけ」、「瀬引き」などと呼ばれている。

鮎は周知のように、川底の石に付着した藻類を食べて生長し、この水垢の付いた石の周囲に定住しており、こうした川底近くの鮎を、釣を幾つも付けた仕掛を用いて、引掛けて釣る。ころがし釣りの主な漁場は、川底が石の多い瀬で、釣り人がこうした場所に仕掛を投じては引き、釣に掛かった鮎を捕り込み、ころがしの別称である瀬引きは、この漁法の特徴を良く伝えている。

ころがしに用いる竿は、一般には三間半程の竹竿で、道系の先に鈎素糸を結び、その間に玉通し型或いはソロボン型の鉛錘を取り付ける。ハリスには鮎の掛け鈎を幾本も結ぶ。鮎掛鈎には二種類あり、矢鳥型、狐型、人間型などの単鈎と、蝶鈎もしくは二股鈎と呼ばれる複鈎があり、釣り人はそれぞれの好みに応じた鈎を用いる。単鈎の場合には鈎素糸に八〇本結び、複鈎では六本前後の鈎を付ける。こうした掛鈎釣りの仕掛を水中で引くと、水の抵抗を受けた掛鈎は糸を軸に回転する。そうした仕掛に触れた魚体に、鋭い鈎先が瞬時に突き刺さる。ころがし釣りの要領は、川の上手に投じた錘が川底の石の頭を叩き、踊る様に川底を飛び、次々と下手の川石の上を叩く様に竿を操作する。そうすることで、錘の後に続く枝鈎が水中をヒラヒラと舞う様に回転



ころがし釣りの鉛製錘／立川市
教育委員会蔵



無用の台／立川市教育委員会蔵

し、それに触れた物に鋭く突き刺さる。釣り手は鮎のいそうな瀬に立ちこみ、掛け捕りの動作を繰り返す。釣り人は徐々に場所を移動しながら川を釣り下るが、秋の落鮎釣りでは、鮎も大きく成長して目方もあり、強引な引き味を楽しむ事ができる。

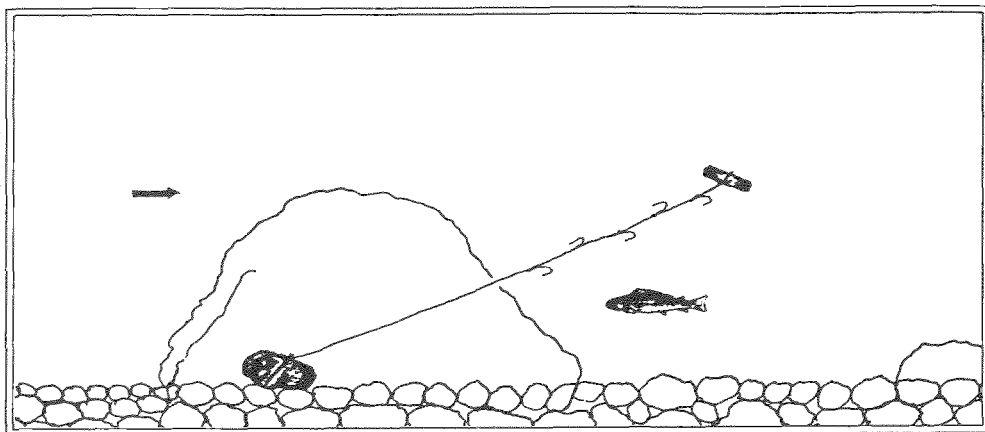
一〇、鮎の置き鈎

鮎の置き鈎は単に「置鈎」とも呼び、流れを遊泳する鮎を、仕掛けの掛け鈎で捕らえる釣漁法で、主として多摩川中流域で行われた。鮎は水中の石や岩に付着している、所謂、水垢と呼ばれる藻類を喰んで成長するが、多くの鮎は縄張りを持ち、鮎の置き鈎は、そうした居着き鮎を掛け捕る漁法である。

鮎の置き鈎漁の仕掛は、幹糸に五、六尺のテグスを用い、その間に鮎掛け鈎を六、七個所交互に取り付ける。幹糸の一方の先に石を結び付けて錘とし、また一方の先を、浮子用にトウモロコシの茎などを結び付けておく。そうした仕掛を鮎がいそうな岩の近くに沈めておく。仕掛の一方が石の重みで沈み浮子の付いた方が水に浮く。浮子が瀬の流れに揺れ動き、それによって、幹糸に取り付けてある掛け鈎も水中で動く。こうした状態で流れにゆらめく掛け鈎に、たまたま縄張りを回遊する鮎が掛かるのを捕り上げる。

鮎の置鈎は掛かり待ちの、大変に悠長な漁法である。この漁法では、流れの力で浮子が揺れ、時には回転したり、絶えず掛け鈎が揺れ動いて、掛け捕り動作を行っている。そうした仕掛に近づいた鮎が、鋭い

掛け鉤に触れ、一瞬鮎が驚いて逃げようとすると、錘り石に連結した仕掛の鉤先が、鮎の体深く突き刺さる。鮎の置き鉤漁法には、鮎のいそうな岩廻りに、仕掛を沈めて魚が掛かるのを待つ方法と、掛け鉤の付近に予め水垢の付いた大石を人為的に沈めておき、その水垢を鮎が食べにくるように仕向ける方法も行われた。鮎の置き鉤は、鮎が一定の場所に居着き、その範囲を絶えず遊泳する習性と、流水による浮子の浮動性を利用した点に、この漁法の創意がある。



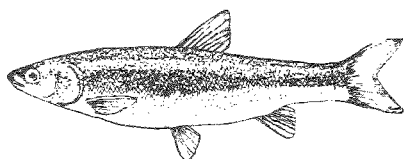
鮎の置き鉤模式図

一、マルタ釣り

四月の中旬頃、体長が二尺近いマルタウグイが産卵のために河口から大挙して遡上すると、多摩川の下流ではマルタ釣りが行われる。マルタ釣りが盛んなのは丸子堰下の水域一帯で、堰の魚道を遡上しようとして堰の下に遊泳するマルタウグイを、大竿の引き掛けで釣り上げる。

マルタ釣りの仕掛はすべてに大振りである。竿は長さ四間から五間の真竹の延べ竿を用い、道糸の先端に大型の掛け鉤を五、六本付け、六七号の鉛錘を鉤の上の道糸に取り付ける。竿の弾力を利用して遠くの水面に飛ばし、竿先をあおりながら水中のマルタウグイを探るのである。

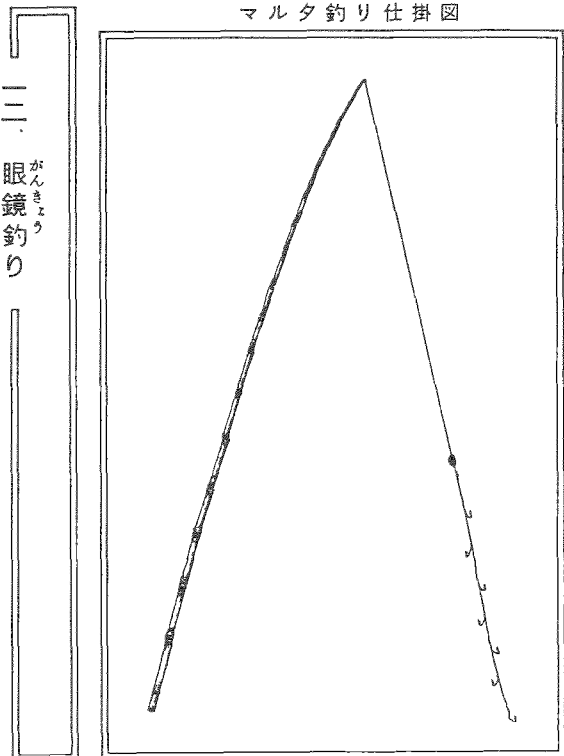
マルタ釣りの用具は、鮎の「コログシ」の仕掛を大振りにした様な釣り具で、水中を遊泳する大形魚を引き掛けるが、マルタウグイが掛かるとその引きは物凄い。何しろマルタウグイは大魚であり、特に魚体の尾部に鉤がかかった時などは、大変な力で竿先を引き込み、ともすれば釣



マルタウグイ

形状はウグイに良く似た魚であるが、マルタウグイは体長が二尺にも生長する大形魚で、春になると、産卵のために川を遡る。

マルタ釣り仕掛図



二、眼鏡釣り がんきょう

眼鏡釣りは、初夏から落鮎までの期間、多摩川中流域を中心に、主に職漁者たちが鮎を捕るために行った釣漁法であり、箱眼鏡はこめがねを用いて水中に遊泳する鮎を探索し、引き掛け用の竿を用いて鮎を掛け捕る。

この釣りは高度の技術を要する釣漁法で、多摩川の職漁者の中でも、

り人も竿ごと引き込まれてしまう。
釣り人たちは、マルタウグイの強烈な引き味を楽しむために掛け釣りをを行うが、釣り上げた魚を食用にはしない。マルタウグイは大形魚であるが、小骨が多く大味で、食味の点で敬遠された魚である。釣り上げたマルタウグイは即座に撲殺し、持ち帰ってブツ切りにして煮込み、鶏の餌にする程度であった。

眼鏡釣りを専門にするのは一部の人に限られていたが、かつて流域の各地には、眼鏡釣りの名人と言われる職漁者がいた。

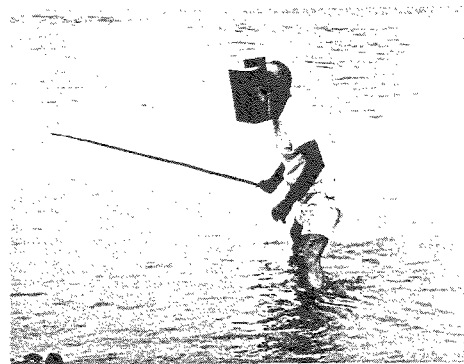
明治三十年の『水産に関する書類』に多摩川の眼鏡漁の説明があり、「眼鏡漁ハ方八寸位ノ硝子ヲ以テ箱ノ底トシ、之ヲ水中ニ入レ鮎魚ノ遊泳ヲ窮ヒ、竹竿ノ長サ九尺位ノ先ヘ針ヲ付シタルヲ持チ突キ捕フルモノトス。」と記している。

眼鏡釣りは各地で様々な呼び名があり、眼鏡釣りの他に、「眼鏡」、「眼鏡釣り」、「ひっかき」、「ひっかけ」、「ひっかけ釣り」、「かき出し」、「さくり」、「かぎばり」などと呼ばれている。

眼鏡釣りは、漁撈者の顔面に固定した箱眼鏡で、水中に遊泳する鮎

シラタで魚を追い寄せながらの眼鏡釣り／昭和十年代・多摩川中流・立川市教育委員会蔵

箱眼鏡を着け、ひっかき竿を手にした眼鏡釣り姿。／昭和五七年八月・浅川日野上田地区先水城での「伝統漁法実演」

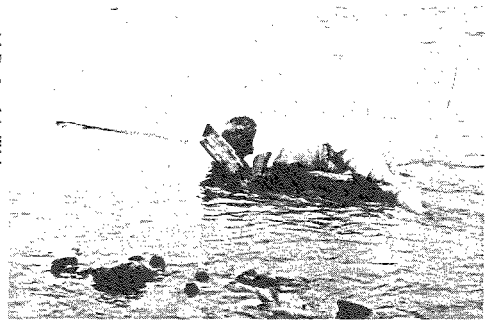


を見ながら、手にした「ひつかき竿」を用いて鮎を引き掛けるが、熟練した職漁者は百発百中の技を見せる。漁撈者は水中に体を浸したままひつかき竿を持って待ち構え、清流を遡る鮎や水垢の付いた岩回りの縄張鮎を瞬時に掛け捕る。鮎は流れと平行に遡るので、釣り手の体位を流れと直角の腹ばい状態にして、下流からの鮎を伺い、漁撈者は水中の鮎の側面を見ながら漁を行う。

滔々と流れる碧い視界の下手から鮎が遡る。

箱眼鏡のガラスを通して透明な水中に魚の姿が現れると、釣り手はひつかき竿を静かに繰り出して、鮎が眼前を通り過ぎるのを息をひそめて待つ。

やがて、鮎は流れを軽快に遡り、差し出す竿を恐れもせず、その下を通り過ぎようとする。釣り手はその僅かな瞬間に竿の手元を引くと、竿先に取付けた鉤が流れを遡る鮎の体に刺さり、固定した止め金が外れて道糸が伸びる。突然の事態に鮎は必死にもがいて水中を逃げ回るが、鉤が鮎の体に喰い込み、竿先きの弾力が鮎の力を吸収する。こうした手練の早業で流れの鮎を掛け捕り、眼鏡釣りの巧者が漁をした水域には、鮎が一匹もいなくなることさえある。



水中の魚を探す

釣り手は川の上流から下流に釣り下りながら、遡る鮎や縄張り鮎を掛け捕るが、鮎の姿が見られなくなった流れでも、一兩日を過ぎれば、再び鮎が遡り、縄張り鮎が居着いている。かつての豊饒な流れは、その程度のことでは少しも消耗することはなかったのである。そして碧い流れは、前にも増して水中の鮎を豊かに育み続ける。

鮎には他の魚に見られない特有の習性がある。鮎は己れの縄張りを定め、侵入してくる他の鮎に対して果敢な排斥行動を行うが、こうした鮎の習性が仇になり、逆に鮎の友釣りに利用されている。また、身に危険を感じた鮎が素早く物陰に潜むことも、それに、遊泳中の鮎が後戻りをしないことも、川漁経験の豊かな職漁者たちは良く知っている。

眼鏡釣りは、こうした鮎の性質を利用した漁法で、水中にひつかき竿を繰り出して流れを遡る鮎を待っていると、ウグイやオイカワなどの魚は、竿に恐れをなし反転して逃げ去ってしまう。だが、鮎ではこの様なことはなく、あくまでも流れを遡ろうとして、釣り竿の突き出した竿の下をくぐり抜けようとする。そうした習性故に、鮎は熟練者の鋭い鉤先に捕らえられる。

鮎がウグイやオイカワと同じ習性の魚であれば、眼鏡釣りは成り立たない。勇猛果敢な習性によるものか、とに角、鮎はそうしたもののへの忌避行動を見せず、猪武者の様に、ただ一筋に流れを遡ろうとして、引く事を知らない。

眼鏡釣りの達人は、いずれも鮎の引き掛けのタイミングに巧みな人

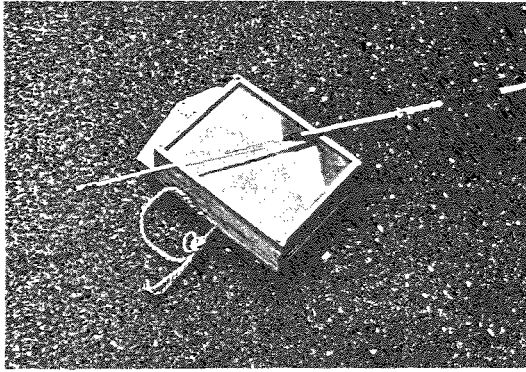
たちである。熟練者の掛かり鮎は、すべて背の後部にある脂鱧の辺に鉤が刺さっている。この部分ならば魚体の損傷が少なく、鉤が鮎の筋肉に喰い込んで取り逃しがない。或る老練な職漁師は言う。

「鉤を鮎の頭や腹に掛けるようじゃ、まだひっかきの一年生だあね。」と。

川の状況と眼鏡釣り

眼鏡釣りは水中を覗きながら行う釣りで、降水などで川が濁ると漁にならない。眼鏡釣りができる流れの状態は、職漁者たちが俗に言う、川が「せいすい」の時で、せいすいとは川の水が澄んだ状態である。

一方、さき濁りの川を彼等は「こまき」と呼び、職漁者は毎朝川に行



ひっかき竿と箱眼鏡
青梅市郷土博物館蔵

眼鏡釣りの許可証 / 鈴木由太郎蔵

二〇一八年二月

南多摩郡日野町日野二〇三二
小川五ノ下
大正十四年五月二十日
景存鏡期間五ヶ年許可
大正十四年五月六日
東京府知事 宇佐美 啓

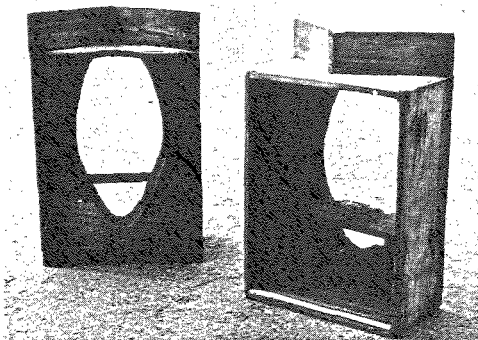
き、

「今日はせいすいだ。」「今日はこまきだ。」

と流れの状況を見て、その日の漁法の段取りを考えて川に出る。

眼鏡釣りの条件は、川がせいすいであるのと、漁場に鮎がいる事であるが、早瀬は眼鏡釣りに最も適した場所である。早瀬を遡る魚は、流れの抵抗を受けるため、あまり早く泳がず、こうした場所では面白い様に鮎が捕れる。だが、多摩川中流水域でも、瀬あり淵あり、川の状況は様々で、鮎はそうした場所にも沢山生息している。眼鏡釣りに、川の地形的な変化によって四つの漁法がある。それは、職漁者の間で「ゴロタ」と「テッポー」、「ナガレ」それに「メガネ」と言われる漁法で、いずれも川の状況に応じた眼鏡釣りの技法である。

箱眼鏡 / 鈴木由太郎蔵



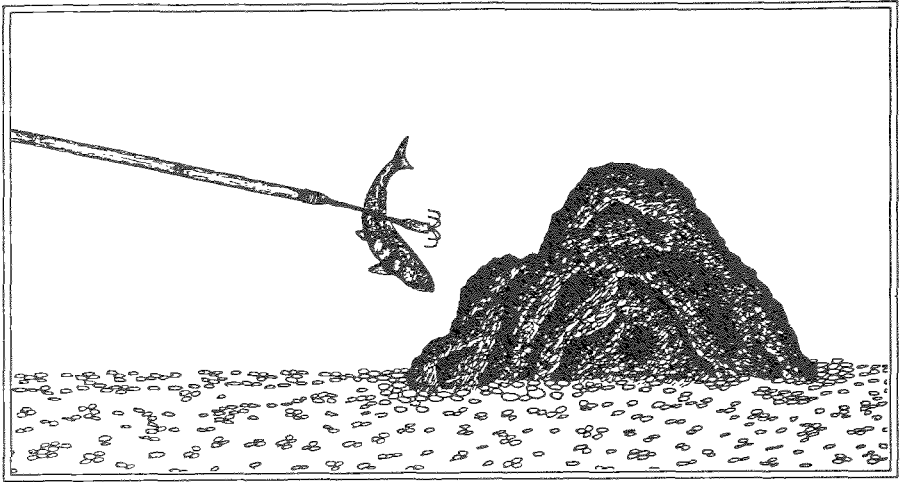
「ゴロタ」…急流が岩を噛む早瀬では、川底に大岩がゴロゴロしており、こうした場所を職漁者たちは「ゴロタ」と呼び、そこで行う眼鏡釣りもゴロタと称した。大岩のある、俗に言うガンガン流れの場所は、流れが逆巻き、水勢が轟々と渦を巻いている。こうした場所には縄張り鮎が多く、釣り手は上流から箱眼鏡を付けて泳ぎ下り、素早く鮎を掛け捕る漁法で、眼鏡釣りの中では最も技術

を要する。

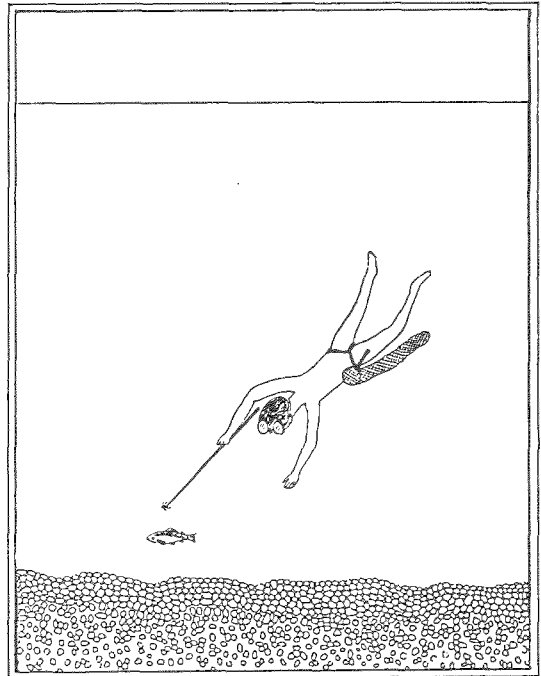
釣り手は荒瀬に
浮いたまま流れ、
変転極まりない激
流の中で、体位の
均衡を保つのは容
易な業ではない。
その間絶えず水中
に気を配り、鮎の
姿を見れば瞬時に
竿を繰り出して引
き掛け、波にもま
れながら再び次の
鮎を狙う。こうし
た激しい場所での
漁は危険も伴うが、
それを技能で切り
抜け、急流の鮎を
次々に掛け捕って
いく。

職漁者仲間でも、ゴロタができれば、眼鏡釣りは一人前とされてい
た。

縄張り鮎を狙う眼鏡釣り模式図



メガネ漁模式図



「テッポー」：川岸に蛇籠や沈床などがある場所は、水の勢いで深
い淵になっている。こうした岸寄りの場所で、淵の中に姿を見せる鮎
を、ひつかき竿で掛け捕る漁法をテッポーと呼んだ。テッポーに使う
ひつかき竿は、一間半から二間位の長竿を用い、川岸から箱眼鏡で淵
を覗き、鮎の来るのを待ちかまえて掛け捕る。

このような淵は、水深があるが流れはゆるい。淵や瀬場の鮎は、縄
張りを持たない群れ鮎がおり、時々群れを離れた鮎が川岸近くに遊び
にくる。テッポーはこうした鮎を待ちかまえて次々と掛け捕る。先きの
ゴロタの様に、激しい場所を泳いで掛け捕るのではなく、テッポー

は眼鏡釣りの中でも比較的簡単な漁法である。

「ナガレ」：テッポーが淵の岸寄りに待機して鮎を掛け捕るのに対し、ナガレは水深の深い淵や静場を、上流から泳ぎながら箱眼鏡で水中を覗き、遊泳中の鮎を掛け捕る漁法である。深さが二、三間の場所では、専らナガレによる眼鏡釣りを行った。

ひっかき竿は縫ぎ竿を用い、箱眼鏡を付けて、ゆるやかな流れを泳ぎながら下る。箱眼鏡が丁度浮袋の役目をして、釣り手は立ち泳ぎの姿勢で右手に竿を握り、左手で水を掻きながら流れに鮎を探す。

川底近くにいる鮎を掛けるのは、正確な距離を目測するのが難しく、引き掛けのタイミングは専ら漁撈者のカンに依る。こうした深場の鮎の多くが川底近くを泳ぎ回るため、ナガレは相当の修練が必要で、ゴロタとは別の難しさがある。多摩川のそうした深場所は、中流でも下の水域で、調布より下流に多かった。

「メガネ」：ナガレと同様に、深場所での漁法であり、漁撈者は水中眼鏡を用いて、潜水しながら鮎を掛け捕る。

ひっかき竿は、潜水時に操作し易い四尺程の短い竿を用いる。メガネの場合には六尺禪一つの裸で、潜水と浮上を繰り返しながら、その間に鮎を探して掛け捕るもので、一種の潜水漁法である。

川の状態による眼鏡釣りにには四種あるが、それぞれに漁期も異なる。

多摩川中流域の眼鏡釣りの漁期については、

○ゴロタ：…秋の成長した鮎を狙う。

○テッポー：六月上旬から七月下旬。

○ナガレ：…秋の降り鮎を捕る。

○メガネ：…六月上旬から七月中旬。

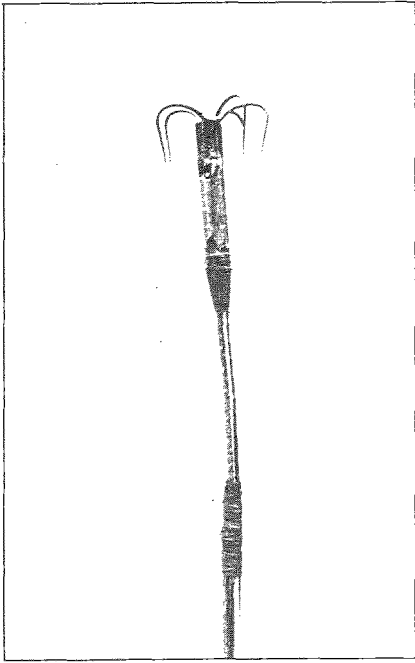
多摩川に鮎の季節が訪れると、この技法に熟練した職漁者は、他の漁法を行わず眼鏡釣り専門となる。それは、彼等にとって、この技法が最も良い収入になったからである。

ひっかき竿

眼鏡釣りに用いるひっかき竿は、すべて漁撈者が自製するが、普通の釣り竿とは異なつた機能の掛け竿である。竿の先端に仕込んだ鉤が鮎を捕捉するが、鉤はアゴの無い鋼製の掛け鉤で、その鉤先は鋭利である。ひっかき竿は鉤の数によつて一本鉤、二本鉤、三本鉤、五本鉤の四種があり、掛け鉤は買ひ求めるか、さもなければ自製する。

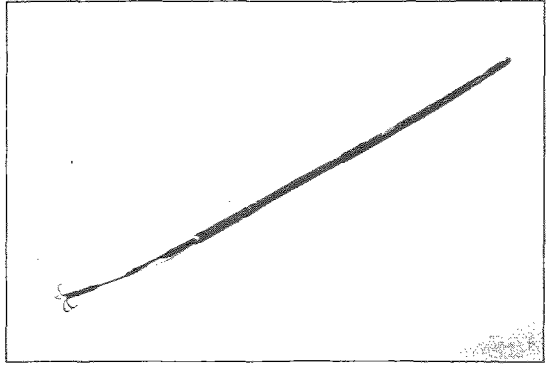
道糸には三絃琴用の糸を用い、撚りの利いた絹製の糸は強靱で、ひっかき竿用に適している。竿は篠竹の先に、洋傘の骨を五寸程取り付け、傘骨のU字状の凹みを外に少し湾曲させ、その溝に三絃琴糸を通す。洋傘の骨が竿の弾力部となり、鮎を掛けた時の抵抗を吸収する。そして足袋の小さなはぜや貝殻製のボタンなどの廃物を用いて、道糸を固定する仕掛を竿先の手前一尺程の所に取り付ける。鮎掛かりの際、固定した仕掛が外れて一尺程の道糸が伸び、同時に、竿先きに固定具が支えて糸の出を止める。

ひっかき竿は合理性、機能性に優れた掛け竿で、魚の捕採のからく

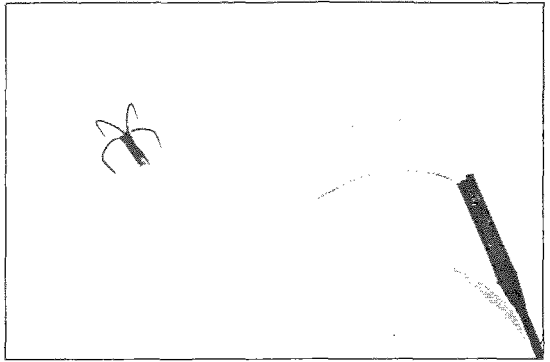


五本鉤のひっかき竿の先／鈴木由太郎蔵

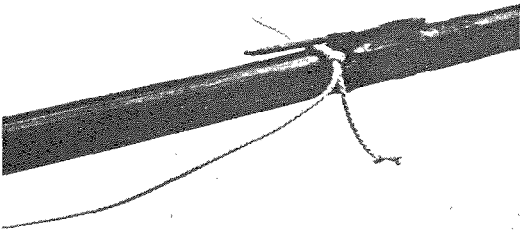
ひっかき竿（メガネ・潜水釣り用）／鈴木由太郎蔵



掛け鉤がひっかき竿から出た状態



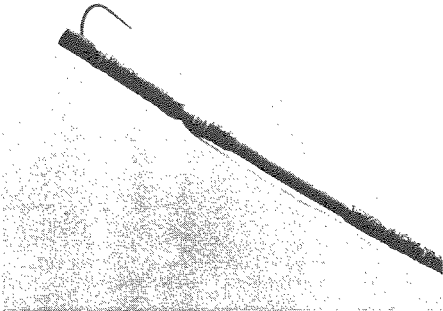
ひっかき竿の道糸止め具部分／鈴木由太郎蔵



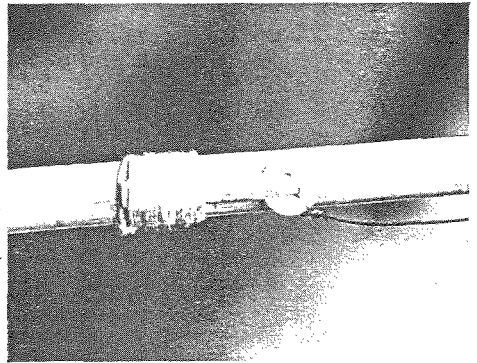
掛け鉤（五本鉤）



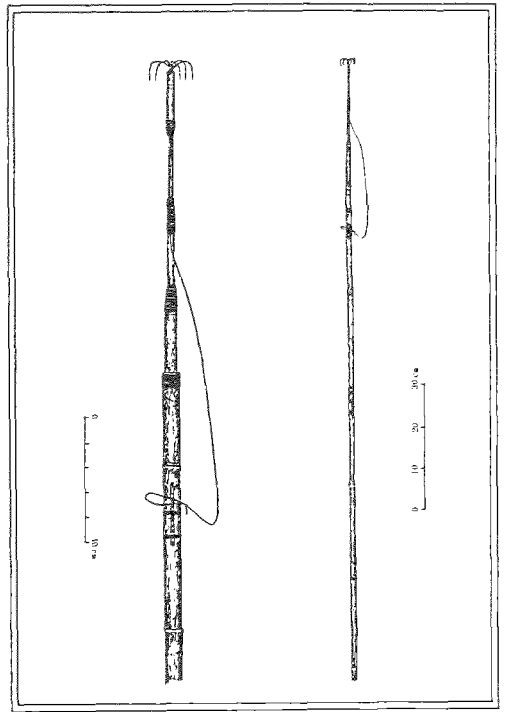
一本竿のひっかき竿の先／五日市郷土館蔵



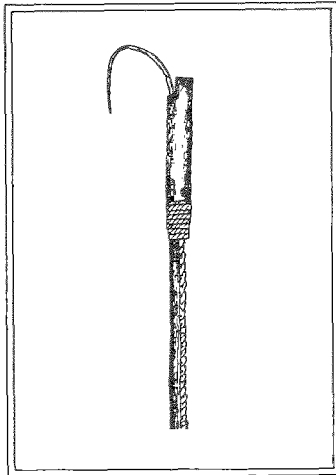
ポタンを用いた止め具／青梅市郷土博物館蔵



ひっかき竿寸法図・潜水釣り(メガネ)用
(鈴木由太郎蔵)



一本鉤竿先部分図



りには先人の英知が凝縮されている。ひっかき竿のもつ明快な構造と巧みな作動性能は、素早い瞬間動作を必要とする眼鏡釣りに相応しい。

こうした魚の掛け捕りに優れた働きをするひっかき竿は、鮎の眼鏡釣りばかりではなく、他の漁法の際に最終捕採具としても使われる。

「寄せ網」では、川岸近くに追い寄せた魚を捕り上げる場合に、また「石倉」では簀の中に囲んだ魚を捕り上げる際に、その他「堰漁」や

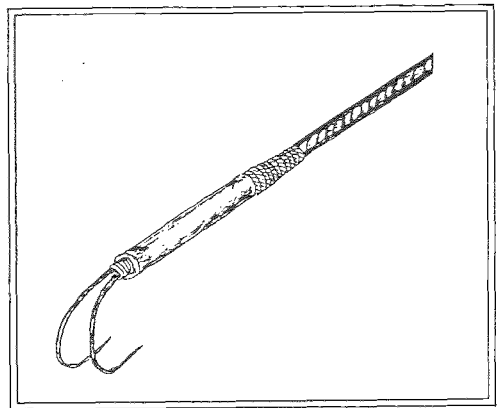
「伏漬け」でも、魚の捕採にひっかき竿が使われている。体表が粘液に覆われて直接に手掴みが難しい魚族に対し、ひっかきの鉤は如何なく性能を発揮する。またひっかき竿は眼鏡釣りにあつて、様々な川の状況に応じて、必要な長さに継ぎ足して使用されている。

あみ び 籠 く
網魚籠

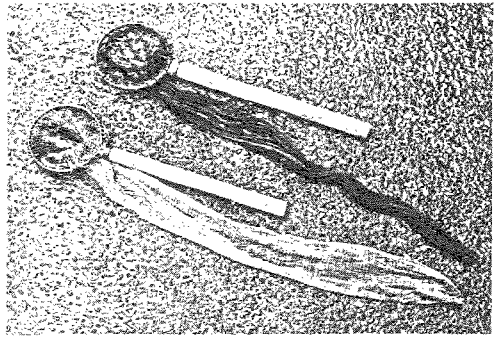
眼鏡釣りをを行う職漁者は、川の状況が異なる流れに様々な技法を駆使し、水中を遊泳する鮎を掛け捕るが、彼等は捕った鮎を一時入れておくために網魚籠を用いる。網魚籠は眼鏡釣り専用の魚入れて、水中に体を浸したまま掛け捕った鮎を入れておき、或る程度魚が溜まると川岸の魚籠に移しかえる。

眼鏡釣りは、水流の激しい所や水深のある淵などで、釣り手が泳ぎながら鮎を掛け捕るため、魚入れの魚籠は、軽快で水流の抵抗が少ない網製の用具が適している。眼鏡釣りにはこうした条件に見合う網魚籠が使われ、漁撈者は禪一つで網魚籠の柄を腰に挿し、眼鏡釣りに専念する。眼鏡釣りは、ひっかき竿と箱眼鏡、それに網魚籠による軽快

二本鉤竿先部分図



網魚籠／青梅市郷土博物館蔵



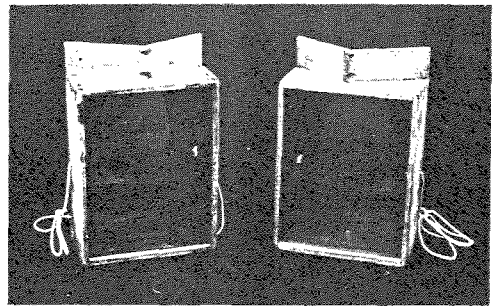
ないで立ちで、職漁者が鮎掛けの瞬時に総てを凝縮させる、技能至上の釣漁法なのである。

眼鏡釣りの箱眼鏡

眼鏡釣りに箱眼鏡が欠かせぬ用具であり、これによって、箱の前面に取り付けた板ガラスを通して、水中の透視が可能になる。多摩川水系では、箱眼鏡は他に「眼鏡」^{がんにょう}、「めがね」^{めがね}、「箱面」^{あはら}、「面」^{おもて}、「水眼鏡」^{みづめがね}、「箱マスク」などと呼ばれ、多くは大工や指物職人の手に成り、中には自製する人もいた。箱眼鏡は桐材が最高品で、軽くて感触も柔かて使いやすい。箱眼鏡は桐の他に、檜や榎、それに杉などで作られたものがある。

眼鏡釣りの箱眼鏡には、天の部分に波切りを取り付け、漁撈の際に波しぶきがかかるのを防ぐように工夫されている。また、漁撈者の顔面に箱眼鏡を固定する銜えの横木があり、この横木の部分を上下の顎で噛んで、箱眼鏡を顔に密着させる。それによって、漁人の両手が自由に操業できる。

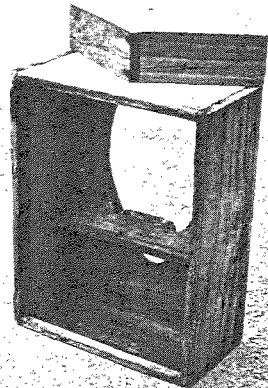
漁撈者の顔形は各人各様であり、新しい箱眼鏡を自分の顔の輪郭に合うよう刃物で削りながら調整し、それぞれの顔型に合った箱眼鏡に仕上げる。この仕上げ作業は、鏡を見ながら顔との接触面を調整する



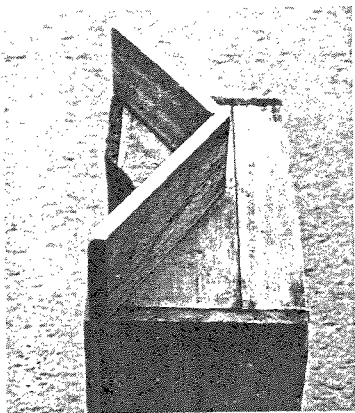
箱眼鏡／鈴木由太郎蔵

と、自分の顔型に合った箱眼鏡になるので、輪郭の違う他の人は使えない。こうした自分の顔型に合った箱眼鏡は、気密性に優れて水の浸入を防ぎ、深場では浮袋の役割をする。

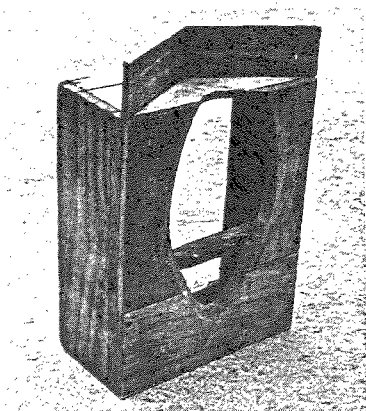
箱眼鏡正面／鈴木由太郎蔵



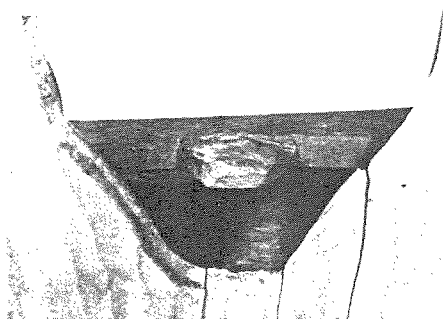
箱眼鏡は板ガラスを用いた水中覗き具で、多摩川水系で漁撈に板ガラスが用いられたのは、明治以降のことである。それ以前、裸眼による水中の覗き漁法と言えば、眼鏡釣りの他に、水中の魚を突く刺突漁法などがあつたが、板ガラスを利用することで、それらの漁法は飛躍的な発展を遂げる。板ガラスの出現で、水中覗き漁は、質的にも量的にも隆昌を極め、それは明治以前の多摩川には見られなかつた斬新な漁法として、またたく間に多摩川の流域一帯に広がつた。一つは職漁者の世界における、眼鏡釣りなどの漁法の進歩であり、他方では、流



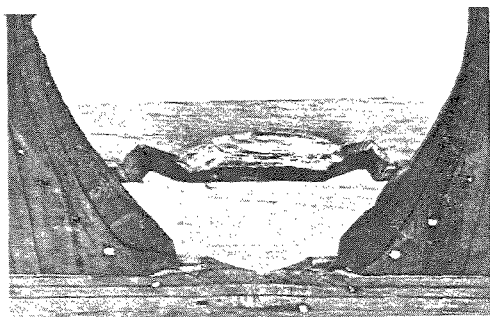
箱眼鏡天部の波切り



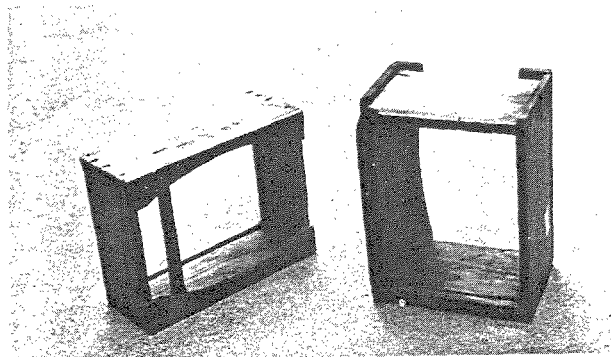
箱眼鏡の裏側



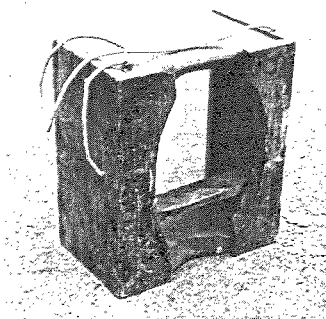
くわえの横木



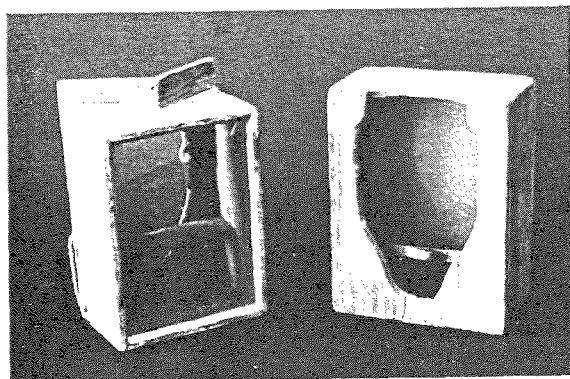
くわえの横木と歯型



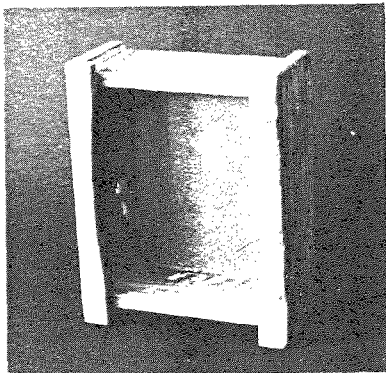
箱眼鏡／五日市町郷土館蔵



箱眼鏡／立川市教育委員会蔵

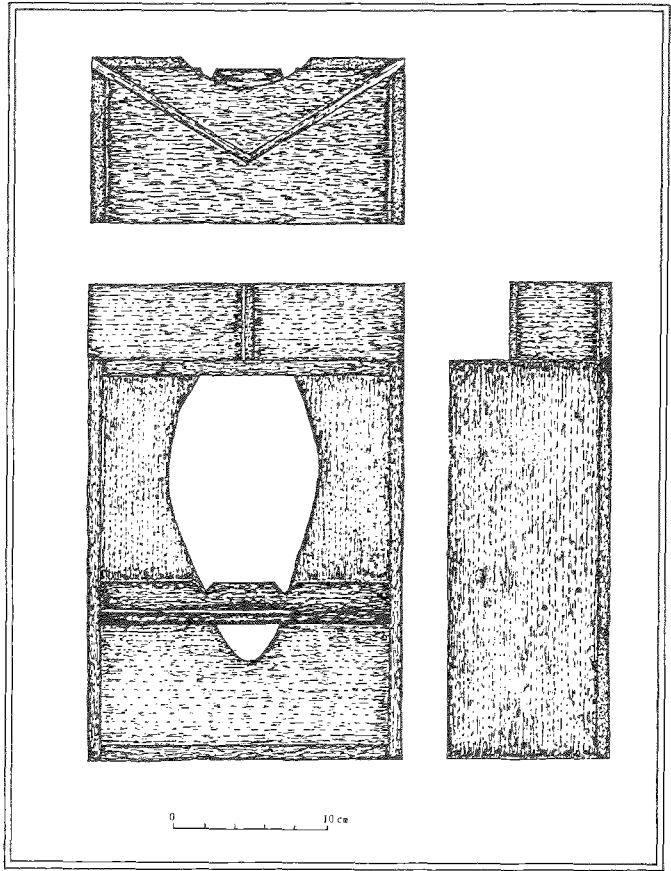


箱眼鏡／立川市教育委員会蔵



箱眼鏡／立川市教育委員会蔵

箱眼鏡寸法図
(鈴木由太郎蔵)



域の少年たちが箱眼鏡を用いて川中を覗き、鰻などの魚を捕る刺突漁として開花した。

箱眼鏡を用いる眼鏡釣りは、多摩川が結の川とは言え、この地で創案された漁法ではない。その起源は、九州或いは西日本の何処かの河川で行われた漁法が伝播し、その技法は有能で練達した多摩川の職漁者の採る所となり、さらに技術的な改良が加えられて、逆に近隣河川の同業者たちに技術指導するまでになった。多摩川中流の老練な漁師が、戦後、相模川の職漁者たちに対し、再三にわたって眼鏡釣り技法

の指導を行うなど、この外来の漁法は、他の河川よりも高度に発達した技術として、多摩川に定着したのである。

一三、按摩釣り

按摩釣りは、主に流域の少年たちが、夏の川遊びの一つとして行った釣漁法で、釣仕掛を持って瀬に立ち込んで、ウグイやオイカワを釣った。按摩釣りには餌釣りと擬餌釣りで釣るのがあり、餌の入手が容易な餌釣りは、多摩川の最も普遍的な釣漁法で、夏になると流れの各地に、少年たちの按摩釣り風景が見られた。この釣漁法は、多摩川の中流域を中心に、その上流と下流の一部の水域で行われ、現在でも、按摩釣りをする釣り人の姿を見かけることがある。

按摩釣りの餌釣りの仕掛は至極簡単なもので、三、四尺の竹竿の先に竿の長さほどの道糸を取り付け、アゴ付き袖型鉤に鈎素糸を結び、浮子も沈子も用いない。餌の付いた仕掛を持った釣り手は、水深が膝から腰ほどの瀬に立ち込んで、体を川下に向け、竿先を流れに浸けたまま竿を伸ばしたり引いたり、その動作を交互に繰り返す。そして、川底を踏む足を少しづつ下流に進めながら、川底の石を崩し続ける。そうすると、川底の石の間に潜む川虫が流れて寄せ餌になり、下流からはウグイやオイカワが誘われて集まってくる。竿を前方に繰り出し、

再び手前に引く動作を続けると、竿を繰り出した時に魚が餌を吸い込み、手前に引いた際、魚が鉤掛かりして釣れる。

按摩釣りの名称の起源は、この釣りの動作が、あたかも杖をつく盲人の道を歩む様に似ており、又一説には、大変簡単な釣法故に盲人でも釣れるという事から、按摩釣りと呼ばれたとする説がある。

按摩釣りで、擬餌鉤を用いて餌釣りと同様の方法で魚を釣る場合があるが、餌鉤の代りに蚊鉤を道糸の先に一本取り付ける。

按摩釣りに用いる餌は様々で、普通は川虫を使う。多摩川一帯でチヨロ、チヨロ虫、又はカメノコと呼ぶカゲロウや通称黒川虫とかイサ

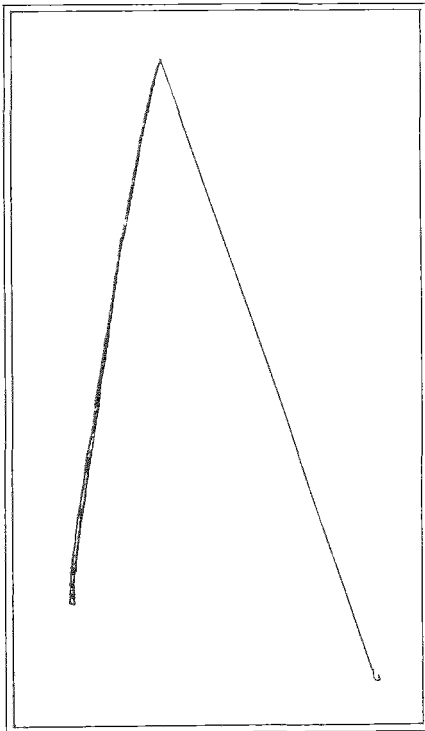


按摩釣り／昭和五五年八月、多摩川青梅地先



餌の取り換えは、左腕に貼り付けておいた川虫をはがして使う。

按摩釣り仕掛図・餌釣り

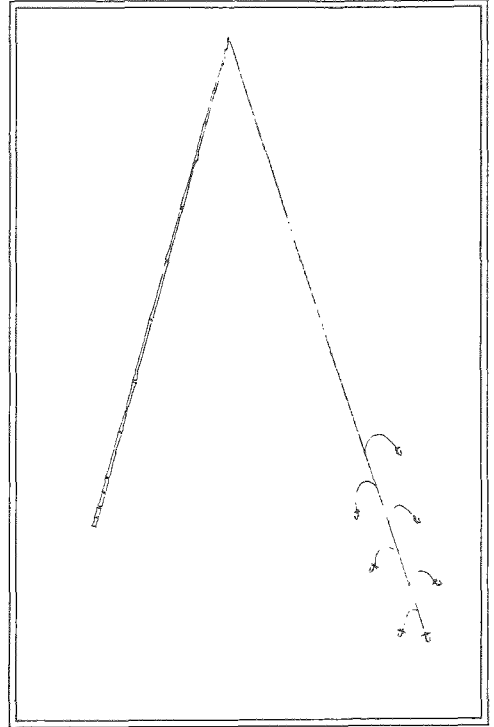


按摩釣りをする少年／昭和五五年八月・多摩川・青梅地先

ゴ虫と言われるトビケラなどは、瀬の底石の下にいる水生昆虫の幼虫である。カゲロウの幼虫は、流れの川石を拾うと幾らでも取れ、それを一匹づつ手の甲や腕などに付けておく。カゲロウの幼虫は体が扁平で人の肌にも良く付き、予め餌を十分に取っておいて腕にべた張りにする。そして餌取り換えの都度、腕に着けた餌の虫をはがして用いるので、この釣りには餌入れも要らない。

按摩釣りの餌は、川虫の他に「サシ」と呼ぶ蠅の蛆を用いたり、所に

按摩釣り仕掛図・毛釣り



よつてはミミズを餌にする地域もある。そうして釣り上げた魚は、笹の葉の付いた枝に鰹を通し魚籠代りにする。夏の日、少年たちが川遊びに鉤と釣り糸を持参し、水泳に飽きると川辺で適当な釣竿を作り、川底からは川虫を拾って按摩釣りを楽しむ光景は、かつての多摩川の随所に見られた。

一四、鯰釣り

多摩川流域の水田地帯で、農業用水路などの細流に鯰が生息し、ここでは鯰釣りが行われた。

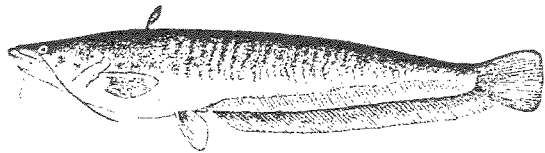
鯰釣りは、普通「鯰のポッカン釣り」、或いは単に「ポッカン釣り」とも呼ばれ、釣竿は十尺前後の野竹を用いる。道糸は絹糸の太然りも

しくは十号程のテグスを用い、その先に鯰鉤を付ける。鯰は地域によって付ける場合とそうでないのがあり、一様ではない。

ポッカン釣りの餌は、中形の蛙を用いる事が多いが、蛙の他に大形の泥鰌やドバミミズを付けることもある。蛙を餌に使うには、尻から釣鉤を刺して背中に抜き、

この仕掛を鯰の潜んでいそうな乱杭回りや川岸の草が茂った所で、蛙が水面を飛びはねている様に竿を操作して水中の鯰を誘う。鯰釣りは夏の早朝か夕方、それに夜が良く、また曇天や小雨の日も釣れるが、晴れた日は釣りにならない。鯰は物音や震動に大変敏感な魚なので、川岸伝いの鯰釣りは、足元に十分注意を払い細心の動作で行う。

鯰釣りは多摩川水系に限らず、鯰が生息する全国各地の水域に見られる釣漁法で、昔は梅雨期になると、水路の各地で鯰釣りをする光景



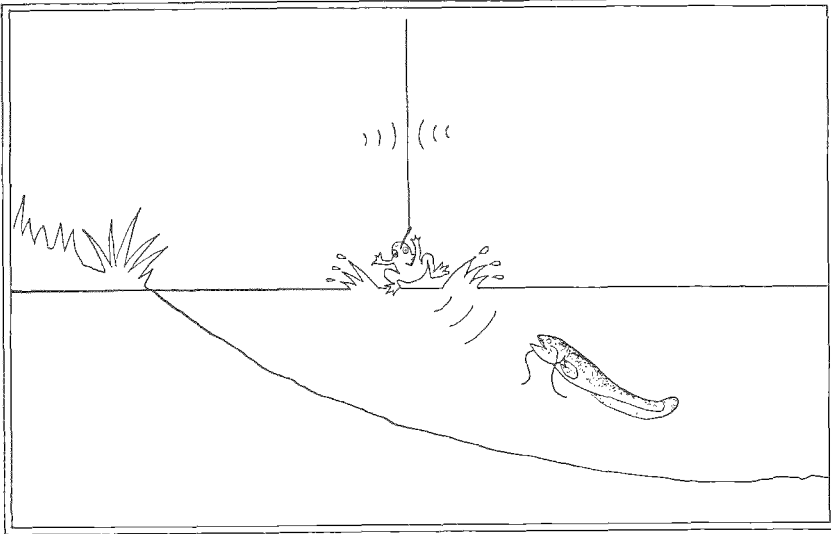
ナマズ
底が泥質の流れを好み、昼間は乱杭回りや石の間の罅に潜む。夜間に活動し、蛙や小魚などを捕えて食う。大変に貪欲な肉食性の淡水魚である。

が見られた。だが現在では、これらの水域に開発が進むとともに、鯰の生息場が失なわれて、牧歌的な鯰釣り風景は見られなくなった。

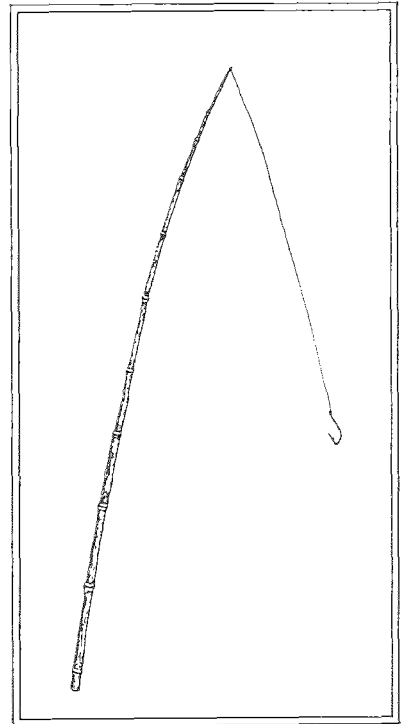
ポッカンドリ以外の鯰釣漁法には、「とびつき」や「ブツ込み釣り」などがある。

ブツ込み釣りはポッカンドリと異なり、餌鉤を水底に沈めて鯰の食いを待つ釣りで、竿先からの糸は竿と等分もしくはそれ以上にし、先に鯰鉤を取り付ける。そして仕掛を沈める錘を釣鉤から一尺程上に取り付け、餌は大形のシマミミズや小

鯰釣り模式図



鯰釣仕掛図



形のドジョウを用いる。

鯰のブツ込み釣りは、降雨の後に川が増水し水が濁った時に行う。出水の濁りがあれば鯰は日中でも求餌行動を行い、ブツ込み釣りで釣れるが、平水の状態では釣果も悪く、水が澄んでいる時は釣りにならない。鯰のブツ込み釣りと同様の仕掛でギバチが釣れる。多摩川の右岸、現在の川崎市多摩区菅では、ギバチ釣りと称して、夕立などの増水時にミミズの餌でギバチを釣った。

ブツ込み釣りは、昔は多摩川流域一帯の水域で広く行われた釣漁法であり、降雨で川が増水して濁ると、普段、日中は姿を見せない鯰や鰻、それにギバチなどが活動を始め、平常時では「流し鉤」や「置き鉤」など夜間の鉤に掛かる魚が、ブツ込み釣りで捕れた。

❁ ❁ ❁

一五、ふつとばし

水温五月になると、魚も旺盛な食欲を見せる様になり、餌を求めて活発に流れを往来する。特に気温が急が上がったりすると、魚たちは羽化した昆虫たちを捕獲するために、瀬などで盛んに跳躍する。こうした時期に、大形のウグイを狙って、多摩川中流では、ふつとばしと言う釣りが行われる。

仕掛は二間前後の竹の延べ竿に、竿と同じか少し長めの道糸を取り付け、その先に釣鉤を結ぶ。この仕掛には浮子も錘もない。釣り餌は羽化した水生昆虫の成虫や、クモ、それに翅を三分の二程切り取った蝶やトンボを用いる。餌を鉤に付け、瀬尻や深みなど大ウグイがいそうな水面に、竿の弾力を利用して餌を飛ばす。

水面を撫でる様に竿を操り、餌を動かして魚の注意を誘い、或いは餌を水面に落として、餌が自然に流れる様に操作する。こうした餌に掛かる魚を釣り上げるが、ふつとばしで釣れるのは大形のウグイが多い。

一方、多摩川の上流や水源地帯に生息する岩魚や山女魚を釣る際にも、同様の釣法が行われ、餌を水面に流したり、叩いたり、様々な技巧を凝らして水中の魚を誘う。ふつとばしは、単純な仕掛を用いる釣法であるが、操作に細心の技術が要る。

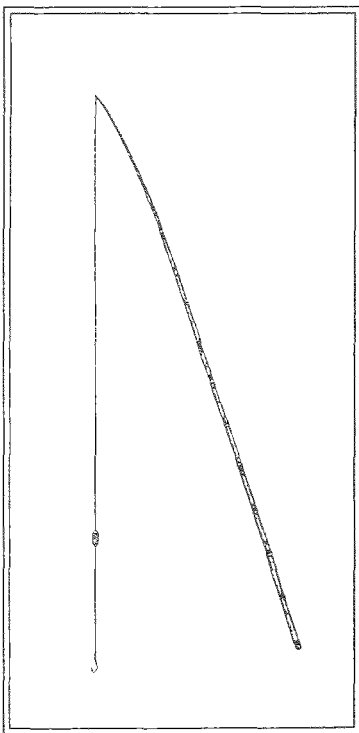
一六、籠釣り

籠釣りは、ハヤ釣りと呼ばれるウグイの遊び釣りの一種で、重りを兼ねた金属製の寄せ餌籠を付け、比較的流速のある場所で大形のハヤを狙う。この籠は金網と針金それに鉛で作られ、その中に鰹の臍などの臭気でウグイを誘う寄せ餌を入れる。さらにその先に釣鉤を装飾し、臭いに寄せられた魚が餌を吸い込んだ所を釣り上げる。

籠釣りは向う合せの釣りで、仕掛を流れに投入しておく、魚の方から掛かってくる合理的な釣法ともいえる。竿先に魚信をとるため小鈴を付け、釣り竿を固定しておいて魚信を待ち、釣り人は鈴が鳴ると竿を引き上げて釣鉤に掛かった魚を捕り上げる。

籠釣りの餌は鰹や鮪、それに豚の肝臓などを用いる。この仕掛を比較的速い流れの場所に投入するが、取り付けた餌が水勢で鉤から脱落するのを防ぐため、少量の真綿を巻いて餌を押える。こうして魚信

籠釣り仕掛図

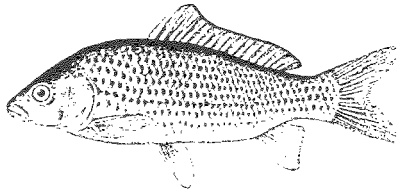


を待つが、籠釣りには比較的大形のウグイが掛かる。多摩川では今でも、時折、遊漁者の籠釣り姿が見られる。

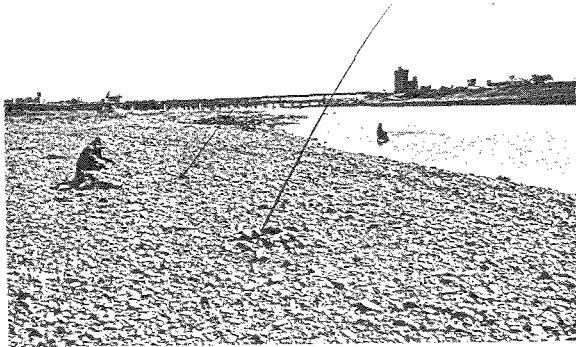
一七、鯉釣り

鯉は多摩川水系に生息する魚族の中で、最も大きな淡水魚である。だが、かつての多摩川本流は清流で石や礫の川底が多く、こうした川相は、鯉の生息環境に最適の場所と言えず、むしろ、鮎やウグイに適

寒中の鯉釣り／昭和五四年三月・
多摩川砧地先



コ
イ
昔は、多摩川の下流水域で多く見られた魚であるが、その後、放流などにより中流にも生息する様になった。遊び魚では大物釣りを代表する魚である。



した河川であった。戦前では、多摩川本流の中流水域で鯉の姿を見かける事は稀で、流域の人たちは、たまたま捕れた鯉を珍重した程である。

だが当時でも、多摩川下流の粗朶や乱杭、それに沈床など、護岸施設のある深みや流れの淵には大鯉が生息していて、時折、網や鉤に掛かる事があり、中でも大鯉になると、体重が三貫目を超すものもあった。

鯉釣りは、主に流域の鯉釣り愛好者が行った釣りで、専用の仕掛や用具を用い、竿や糸、それに鉤などは、他の釣りに比して可成り大型の用具を用いる。鯉釣りの方法は、浮子釣りと浮子を使わない沈め釣りがあるが、多摩川では後者が広く行われた。

一般に「ぶつ込み釣り」もしくは「打ち込み釣り」と呼ばれる沈め釣りは、深場に潜む鯉を狙う釣法で、釣竿は長さ二間半もしくはそれ以上の真竹の延べ竿を用い、道糸を釣竿より長く付け、鉤素糸を結び個所に鉛錘を通し、釣鉤は「吸い込み鉤」と称する鯉鉤を五、六本束ねた仕掛を用いる。

ぶつ込み釣り仕掛では、甘藷を蒸した練り団子に、吸い込み鉤を装着し、こうした仕掛を用いて、鯉が居そうな深みに投げ込み、魚信を待つ。魚信を取り易くするため、竿先に小鈴を付けたり、或いは道糸の繰り出しを容易にするため、リールを使用することもあるが、昔はこうしたものを用いず、極めて粗野で、大振りの仕掛を用いて鯉を釣っていた。

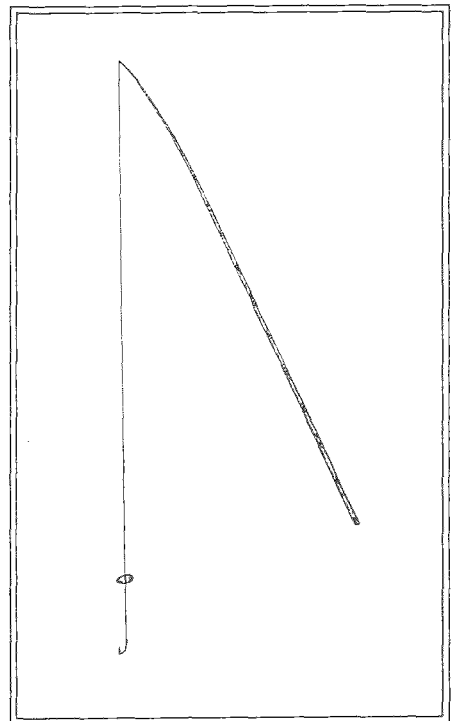
鯉釣りは年中行われたが、盛期は水が温む梅雨期後の朝と夕、それに夜間が良く釣れた。普段は減多に釣れない鯉も、出水の後などで川水が濁り、鯉の寄り場に当たると、思わぬ釣果に恵まれる事がある。また鯉が蚕の蛹を好む習性を利用して、前の日に蛹を入れたかます俵を流れに沈めておいて、翌日、その場所に集まる鯉を、浮釣り仕掛やぶつ込みで釣る方法も行われた。鯉の浮き釣りに用いる用具は、釣竿、釣糸、浮子、錘、それに鉤で、基本的には、一般の釣り仕掛を大振りにした用具を用い、餌は甘藷を蒸したのを角切りにしたものや、蚕の蛹を一匹づけにする。

大物釣りと言われる釣漁法の中で、鯉釣りは可成りの忍耐を要し、大鯉などは減多に釣れない。俗に「鯉は一日一寸」と言われ、一尺の鯉を釣るには、十日間その釣場に通わなければならない。それだけに、大物鯉の豪快な引きが忘れられず、釣り人たちは、一年中川辺にたがずんで好機の到来を待つ。

一八、ぶつ込み釣り

ぶつ込み釣りは、多摩川の本流および支流の各所で、主に少年たちが遊びに行った最も単純で原始的な釣漁法で、この釣りは、釣鉤さえあれば、釣竿や糸それに錘などは、手近に求められる素材を道具として利用する。ぶつ込み釣りはその名が示す通り、餌を付けた仕掛を流れて打ち込んで放置しておき、頃合いを見計らって引き上げ、鉤に掛

ぶつ込み釣り仕掛図



かった魚を捕る釣漁法である。

釣竿は、釣り場近くに自生する篠竹や川柳の小枝などを用い、道糸には竿先に木綿糸や尻糸、もしくは麻糸を取り付け、糸の先に釣鉤を結び、糸の途中には川原石を括り付けて錘とする。ぶつ込み釣りの仕掛は、釣鉤さえあれば道糸などは自家にあるものを利用し、また、竿や重り石は身近かに調達することができる。

釣り餌は、川底に生息する水生昆虫などの幼虫を用い、清冽な流れの底石を引っくり返すと、トビケラやカゲロウ、それにカワゲラなどの川虫が幾らでも捕れる。こうした餌を鉤先に付け、幾本かの仕掛を水中に投じて魚の掛かりを待つ。その間、少年たちは流れて泳いだり川遊びに時を過ごす。頃合いを見計らって釣竿を引き上げ、掛かった魚を捕り上げる。

かつて、多摩川の本、支流には、川底を生息場所とするカジカやカ

マツカなどの魚が沢山いて、この様な単純な仕掛でも魚が捕れ、時にはウグイも掛かる。そして釣り上げた魚を、川岸の石罅に生かしておいて帰りに捕り上げ、川柳や笹などの小枝を鰓に通して持ち帰り、自家の菜料にした。

また川が降雨などで濁ると、ミミズやドジョウを餌にしたぶつ込み釣りで、ギバチやウナギが釣れる。仕掛に用いる石の錘に代つて、少年達は鉄釘やナットなどの廢材を重りに利用した。当時、多摩川流域では、一般の暮らしは決して豊かなものではなかつたが、その時代に生きた子供たちは、様々な創意と工夫で川に親しんでいた。

一九、鮎釣り

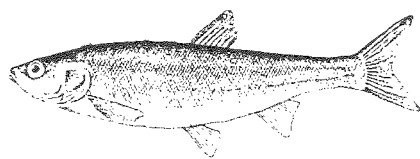
多摩川水系に生息する魚族の中で、ウグイほど広範囲な生息分布を示す魚はない。上流では山女魚と混生し、また下流では鮎や鯉と共に生息しており、中流域ではその数が最も多い魚である。多摩川流域では、ウグイのことを一般に「鮎(ハヤ)」と呼び、昔から様々な漁法でハヤを捕っていた。それに、釣漁法の中では、餌釣りによる技法は長い歴史がある。ハヤの餌釣りは、浮子を使用する「浮子釣り」と、浮子を用いない「脈釣り」とがあり、両者はいずれも竿と釣鉤、道糸と錘を用いるが、釣法上に若干の相違がある。

ハヤはコイ科に属し、温暖な清流を好む敏捷で貪欲な川魚である。食性は雑食性であるが、動物質の餌を好み、俗に川虫と呼ばれる水生

昆虫の幼虫は、彼等にとつて好餌である。こうしたハヤの食性を利用して、ハヤ釣りの餌には、一般に川虫が用いられる。川虫は川底の石の間に棲む水生昆虫の幼虫で、多摩川流域では黒川虫と呼ばれるトビケラの幼虫、それにピンチョロとかカメチョロと称するカゲロウの幼虫、また鬼チョロと呼ぶカワゲラの幼虫などを餌に用いる。また川虫の他に、カマエビもしくはエビズルムシと言うブドウスカンバの幼虫、俗にサシと称する銀蠅の幼虫、栗の実に生息する栗虫、イタドリに寄生するイタドリ虫や魚の臓腑などを餌に使うこともある。また、甘藷と小麦粉を材料にした練り餌などの植物性の釣り餌も使われている。

ハヤの餌釣り用の釣り竿は、長さ二間から二間半程の竹竿を用い、道糸の先に釣鉤と鉛の錘を取り付け、

浮子釣りではその中間に浮子を付ける。脈釣りは浮子に代つて、道糸の目印用に山吹きの芯や羽毛などを付ける。ハヤは摂餌習性が貪欲で、年中餌を追うが、特に、四月から五月にかけての産卵期には旺盛な食欲を見せ、活発に餌を追う。春から秋にかけて盛んに水中を遊ぎ回り、淵から浅瀬に出て餌を漁り、この時季には、ハヤ釣り愛好者たちが川辺で竿を



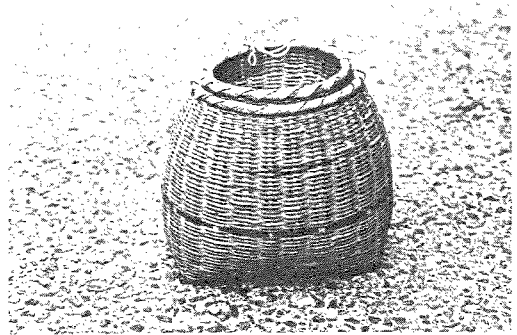
ウグイ
かっけての多摩川では、ウグイの生息数は鮎をはるかに上回っており、流域の人たちは、様々な漁法でこの魚を捕ってきた。



振る姿が見られる。「江戸名所図会、玉川鮎獵」にも、ハヤ釣りをする人の姿が描かれており、当時、遊漁にハヤ釣りを楽しむ人たちが多かった事を示している。

春から秋にかけて活発に活動していたハヤは、冬期、水温が低くなると、元々温暖な水を好む魚なので、湧水のある場所や深い淵に身を潜める。摂餌行動の鈍った時節のハヤを狙う「寒バヤ釣り」も、一部の愛好者たちには人気を呼んでいる。釣り上げる事の難かしい此の時期のハヤを、技巧を凝らして釣り上げる寒バヤ釣りは、凍て付いた川辺に黙々と糸を垂れて、釣人は唯ひたすらハヤの魚信を待つのである。

ハヤ釣りは、昔から関東地域の河川で盛んに行われ、早くから釣技



ハヤ釣り用の魚籠／青梅市郷土博物館蔵



六つ目編みのハヤ魚籠／国立市教育委員会蔵

が発達し、それに対する関西では、ハス釣りと言われているが、ハヤ釣りは、多摩川水系でも長い歴史を誇る釣漁法である。豊かな魚族に恵まれた流れには、かつてハヤが沢山生息し、流域の人たちは好んでハヤを捕ってきた。今まで多摩川で捕られてきたハヤは、数量的にも江戸時代より名高い多摩川鮎を凌いでいるが、鮎より味の劣る魚として「雑魚」の類に扱われてきた。かつて流域の人々の暮らしの中で、ハヤが占めた役割は無視できない。同じ清流に生息する鮎とハヤではあるが、その生息数は鮎に優り、ハヤは年中捕る事のできる川魚という点で、流域住民たちの日常の食生活に、大きく貢献してきたのである。多摩川の川魚の中で、鮎を「ハレ」の魚と言うならば、ハヤこそは、流域住民の暮らしの中で必要欠くべからざる「ケ」の川魚でありまた貴重な存在であったと言える。

二〇、とびつき

多摩川流域の農業用水路などの細流で行われた釣漁法で、対象は鮎と鰻であるが、鮎を捕ることが多かった。この漁法は、川辺に固定した竿の先に餌を付け、それに喰いついた魚を捕る固定式釣漁法で、主に夏期に行い、夕方に仕掛け、翌朝早く釣に掛かった魚を捕り上げる。

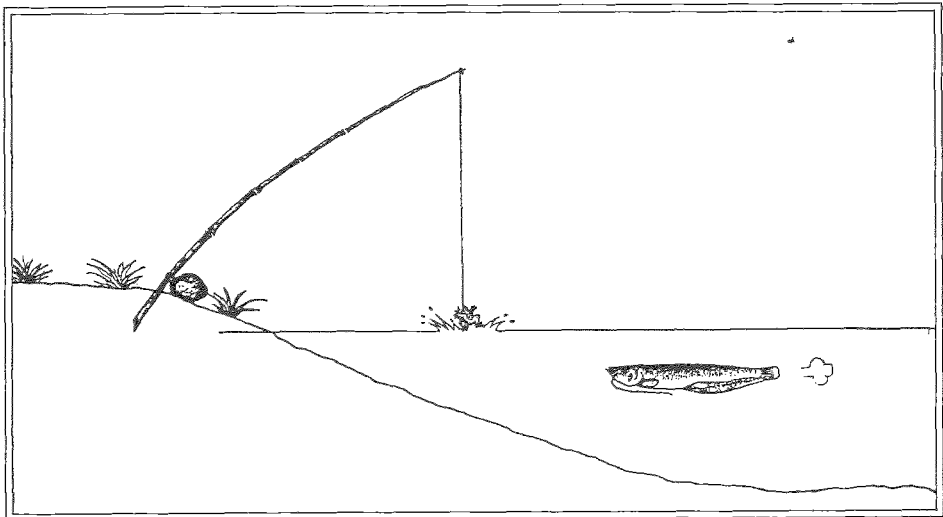
とびつきの仕掛けは至極く簡単なもので、三、四尺程の篠竹の先に麻糸もしくは風糸を結び、糸の先端に流し釣用の釣鉤を取り付け、餌は雨蛙や泥鰌、ドバミミズなどを用いる。

夜間、鮎が徘徊しそうな場所の川岸に篠竹竿を刺し込み、さらに竿

の根元に石などを積み上げて補強し、仕掛けの餌が、水面上をヒタヒタと叩く程度に竿の固定角度を調節しておく。こうして、竿の弾力で餌が水面に触れ動くことによつて、魚の就餌欲を誘う。

鮎や鰻は夜行性の魚であり、昼間は罅に潜み、夜になると、罅を後に餌を求めて流れを徘徊する。そして、水面に仕掛けられた餌に一気に飛び付く。竿の根元が大地上に固定されているので、魚が餌に喰いついた瞬間に釣が口中に刺

とびつき漁模式図



さり、逃げようとしても篠竹の弾力が魚の力を吸収してしまふ。

とびつきと言われる漁法は、水中の魚が、仕掛けた餌に喰い付く時に釣れる向う合せの釣法で、多摩川中流域の細流などでは、魚捕りの好きな農民や少年たちが昔から行っていた。とびつきで、時には二尺もある三歳鯰が捕れることがある。とびつき竿を仕掛ける場所は、深い淵より上手の瀬の川岸に釣り竿を刺し込み、淵に潜んでいる魚が夜間に瀬に出るのを狙う。

とびつき漁法は、多摩川の隣りの相模川でも昔から行われており、また、荒川の戸田地先の水域では、河口から遡るボラを捕るのに同様の仕掛を用い、いづれもとびつきと呼ばれていた。

二一、くいはり

擬餌鉤を使ってウグイを釣る遊び漁で、鮎のドブ釣りと同様の仕掛を用いる。魚の潜んでいそうな大石回りや瀬の深みに擬餌鉤を付けた仕掛を沈ませ、竿を上下して魚の食いを誘い、魚が掛かった所を釣り上げる。

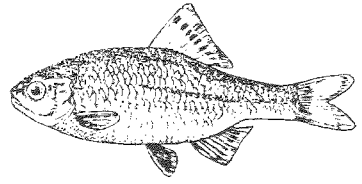
くいはりの釣法がドブ釣りと異なる点は、使用する毛鉤の種類が異なり、主に多摩川中流域で行われた釣法であるが、「瀬釣り」や「打ち釣り」のように一般的ではなかったが、くいはり釣りは一部の人が行っていたものである。

二二、多摩川水系の小物釣り

小鮎やタナゴ、それにモロコ、モツゴなどの小魚を対象とする、所謂、川の小物釣りは、多摩川でも古くから行われたが、それらは総て素人の遊び釣りで、職漁者が行いう釣漁法とは別に独自の発達を遂げた。多摩川水系の中、下流水域を流れる農業用水路や細流などには、昔から小鮎やタナゴなどが生息していたが、多摩川における小物釣りは、流域の子供を含む一部の釣り人たちによって行われた釣漁法であった。

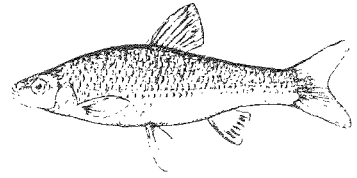
小物釣りの技法は、釣り道楽と呼ばれる人たちが長い歳月の間に細かい仕掛に工夫、改良を加え、以前、多摩川流域ではともすれば、釣りが遊び人や道楽者の世過ぎとして異端視される風潮の中で、営々として細緻な技法を守り伝え、それを発達させてきた。現在では、市民にとつて、魚釣りは健康的で好ましいレクリエーションとして認識される様になったが、昔は職漁にたずさわる者はさておき、一般の人が釣りで暇を過す事は、決して好ましい事とは見なされなかつたのである。かつての多摩川流域が、田園的な純農村であり、地域の農民たちが寸暇を惜しんで農事にはげむ中を、道楽人然として流れに釣り糸を垂れるには、釣り人としていささかの負い目があった訳である。

かつて、多摩川の伝統漁法がそれぞれに活況を呈する中で、当時の職漁者たちが見向きもしなかつた零細な釣漁法は、時が移り、伝統漁法が消失した現在、多摩川の中、下流水域では、小物釣りだけが以前にも増して盛んである。皮肉なことに、水質汚濁に比較的強いこれら



タナゴ

昔は多摩川及びその支流などに沢山生息しており、子鮒などと同様に、子供たちが網やブツタイを用いて掬って遊んだ小魚である。



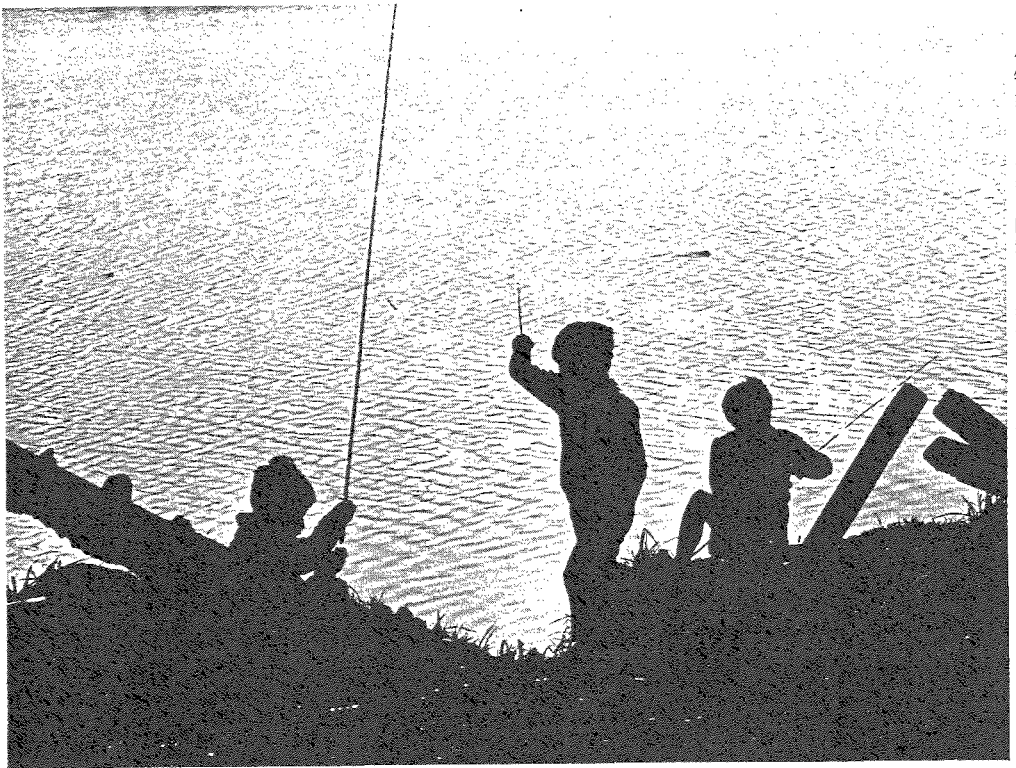
モツゴ

俗にクチボツと言ひ、戦後、多摩川の水質汚濁にともなうて急速に増えた魚である。今では小物釣りの代表魚になっている。

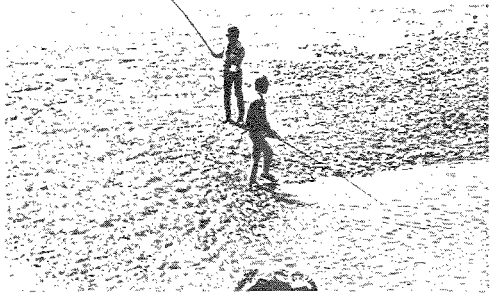
の魚は、多摩川中、下流の各地の水域に生息し、これからも市民の憩いの対象魚として、小物釣りはますます盛んになって行く。

鮒釣り

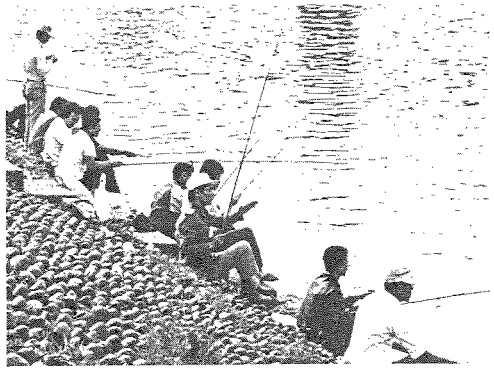
多摩川中、下流水域の支流や農業用水路には、昔から体色が金色のキンブナが多く生息していた。多摩川の中流辺りでは、この鮒を「ブンショウ」とか「ブンショウブナ」、「キンショウブナ」と呼んでいた。鮒釣りの用具は、竹竿と、それに結ぶ道糸や手製の桐の浮子、板



小物釣りの少年／昭和四四年十月・多摩川二子地先



小物釣りの少年／昭和五四年
三月・多摩川・砧地先



日曜釣り師たちで賑わう水辺／
昭和四九年十月・多摩川登戸地先

鉛の錘、袖型の釣鉤などの簡単な仕掛で釣っていた。鮒釣りの餌にミミズを用い、春の「乗っ込み」といわれる鮒の産卵期に始まり、冬期の「寒鮒釣り」など、年間を通じて遊漁者が行っていた。

タナゴ釣り

タナゴは鮒と同様に、多摩川の中、下流の水域に生息する魚で、昔は本流やそれに注ぐ支流、農業用水路に沢山見られ、別名「イタブナ」とか「ニガブナ」と呼ばれた魚である。

タナゴ釣りは、十二月から二月頃までの寒中が盛んで、沈床や粗朶回りの護岸の深みに群集している所が狙い場になる。釣りの仕掛は、

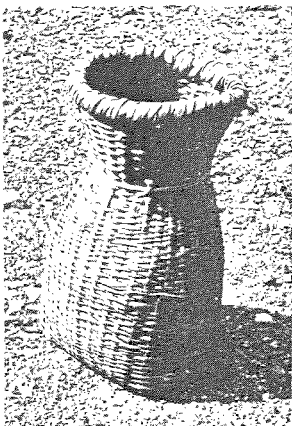
鮒釣りよりもすべてが小さく、繊細な用具を用いる。

タナゴ釣りの餌は、イラガの幼虫の中身を取り出し、その一部を鉤先に付けて釣るが、白黒模様の殻の中に入っているイラガの幼虫は、梅や柿の木などの小枝に取り付いているのを探し集めて使う。立川、日野辺りでは、この幼虫を「ビービー虫」と呼ぶが、幼虫を取り出した殻を、昔の子供たちが、口先で笛代りに吹いて遊んだことに由来している。

モロコ・クチボソ釣り

多摩川流域一帯でクチボソと呼ぶ小魚は、モロコと同じく、戦前には多摩川本流では見られなかった魚である。昭和の初期以降、旧河川敷で砂利を大量に採取した跡地の、所謂砂利穴と呼ばれた溜池が、多摩川の中、下流域の各所にあつて、そうした止水域には、モロコやクチボソが生息していた。クチボソはモツゴの地方名で、水質汚濁に強い魚種であるため、現在では、多摩川の中流以下の本流には沢山生息している。

クチボソやモロコ釣りは、魚体が小さいので、一般にはタナゴ釣りと同様の仕掛で釣られている。餌は、小麦粉と蛹粉の練り餌や、ユスリカの幼虫の「赤虫」と呼ばれる餌を用いるが、汚れた水域でも



小物釣り魚籠／府中市郷土館蔵

旺盛な繁殖力を見せ、現在、多摩川中、下流域での小物釣りといえ
ば、クチボン釣りが主流を占めている。

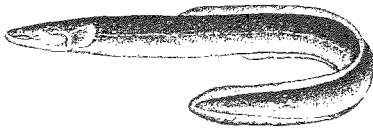
二三、穴釣り

昔、多摩川の上流から下流、それに支流などには、沢山の鰻が生息
していた。鰻たちは、石の下や川岸の蛇籠の間、或いは沈床などの障
害物を好み、それを罅にしており、こうした場所の穴に入っている鰻
を「穴鰻」と呼び、穴鰻を穴釣りという特殊な漁法で捕った。鰻の穴
釣りは多摩川水系に限らず、全国的
に見られる極めて普遍的な漁法であ
るが、釣技について特筆すべき点が
少なくない。

穴釣りは別称「鰻釣り」とも呼ば
れ、穴に潜む鰻を釣り上げるために
特殊な仕掛を用いる。竿は一問前後
の篠竹を用い、掛かり鉤にはアゴ付
きの鰻鉤も使われるが、穴釣りに
主として直鉤を用いる。穴釣り用の
直鉤は、木綿針や蒲団針を一寸程の
長さに切断し、針の中心に麻糸もし
くは木綿糸を結んで道糸にする。道
糸は鰻が掛かった際に、切れること

ウナギ

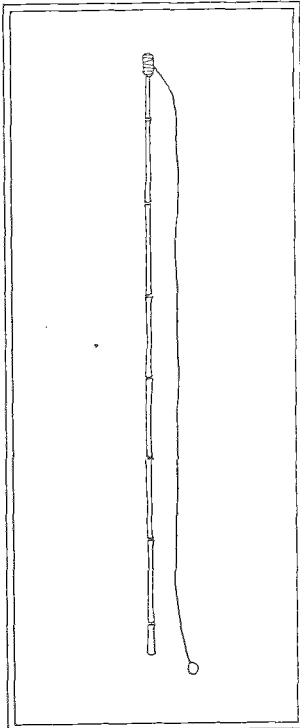
貪欲な肉食性の淡水魚であるが、
蒲焼の旨さは誰でも知っている。
そのため、昔から釣りや笠など
で捕られたが、今では、河口か
ら稚魚が遡ってこない。



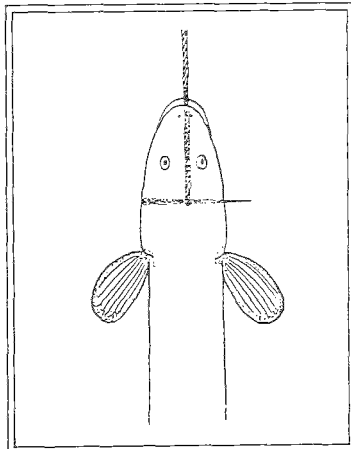
がない様に丈夫な糸
を用いる。穴釣り用
の仕掛はすべて漁撈
者が自製し、こうし
た簡単な仕掛を用い
て穴の中の鰻を釣る。

自製の穴釣り用の
直鉤には三種の型が
あり、一方の針先き
が鋭いものと、両端
を鋭く尖らせたもの
、それに両端とも切り
放しのいづれかの鉤
を用いる。これらの
直鉤を「地獄鉤」と
呼び、一度鰻が呑み

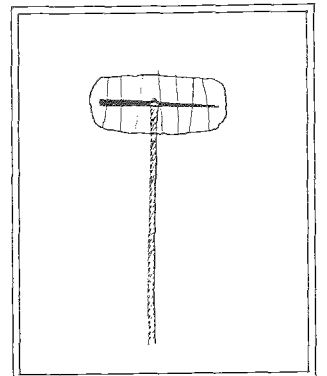
穴釣り仕掛図



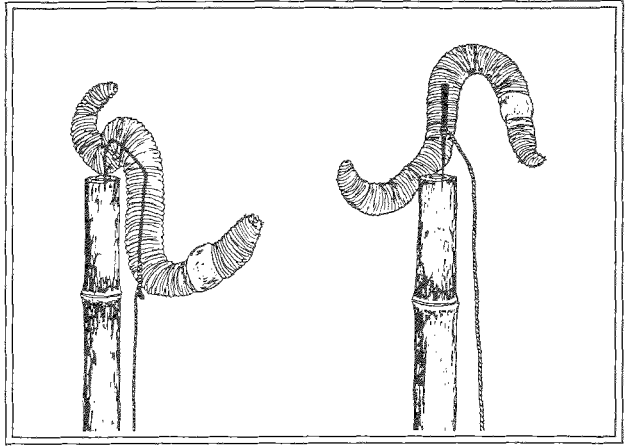
鰻に突き刺さる地獄鉤



鮎の肉片を地獄
鉤に装餌した図



ミミズを鉤に装餌した図
左は鰻鉤、右は地獄鉤

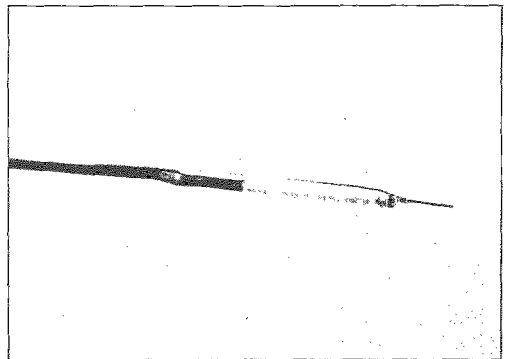
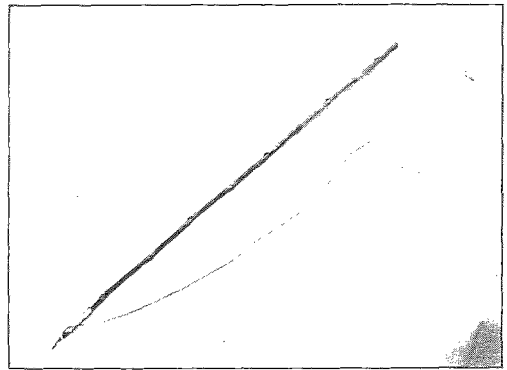


込んだら鉤は絶対に外れることがない。

地獄鉤に誘い餌を付けて穴鰻を誘うが、穴釣り用の餌はミミズが多く用いられ、またミミズの他に、小型のドジョウや鮎の切り身などを装餌することもある。特に、鮎の切り身は鰻が最も好む餌で、優れた釣果を発揮するが、鮎の切り身を用

いる時は、鉤に付けた餌が離れぬ様に絹糸や細テグスで、しっかりと結びつける。昼間、穴の中に潜む鰻を誘い出すために、木綿袋に鮎の臓腑や切り身を入れて鰻穴の入り口でもみ出すと、その匂いに誘い寄せられて、穴から鰻が一斉に頭を出した所を、引つ掛け竿や簞などを用以て捕る漁法もある位で、とに角、鰻は鮎の肉には目がない魚である。

一方、多摩川の下流域では、竹ヒゴの先にアゴ付きの鰻鉤を直接取り付け、装餌したものを、鰻穴に静かに挿し込んで釣り上げる漁法もあり、この釣法は「ヘゴ釣り」と呼ばれている。ヘゴはヒゴの訛り



で、漁撈者は竹を細かく裂いてヒゴを自製するが、竹ヒゴは弾力と張力に優れていて、穴釣りには十分な機能を発揮する。

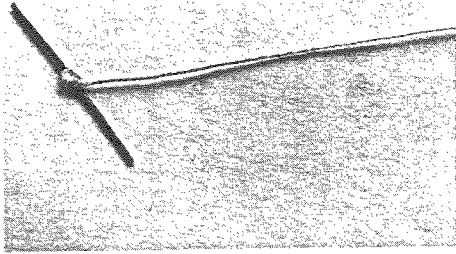
穴釣り漁は四季を通じて行うが、盛期は水温が上がる五、六月から十月頃までで、昔は鰻の穴釣り漁を専業にしていた川漁師がいたが、彼等は必ず単独で漁を行い、鰻穴の在り場所を決して他人に数えず、また、漁をしている姿を人に見られるのを極端に嫌っていた。自然の恵みゆたかな造形の産物である鰻穴は、鰻たちにとっては極めて住み心地のよい罅に相違なく、こうした場所は、鰻を釣り上げて空になった穴に、翌日にはもう別の鰻が潜んでいる。職漁師は、そうした鰻の入りが良い鰻穴を沢山知っていて、常に効果的な漁撈を営んでいるが、

鰻穴は、川漁師たちにとつての大切な財産であり、それは自分だけの秘密にしている。

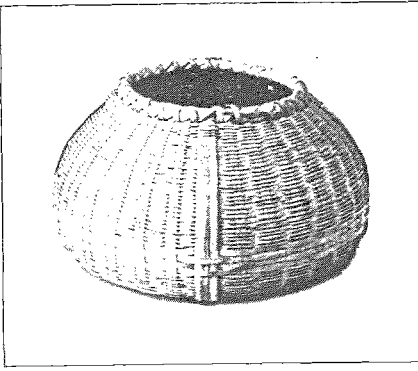
穴釣りはそうした鰻穴を探し、鰻がいそうな穴の入り口から餌を付けた竿先を静かに挿し込んで、穴鰻の魚信を待つ。穴の中に鰻がいれば、貪欲な鰻はすぐさま餌に喰いついてくる。魚信が竿尻に伝わり、そろりと篠竹を引き抜くと、餌の付いた地獄針が鰻の口先に残るが、鰻はなおも餌を呑み込もうとする。その間を見計らつて一呼吸おき、手許の道糸を一気に引くと、鰻の口や食道に呑み込まれた地獄鉤が直角に立つて、鰻の体内に深く突き刺さる。

穴の中の鰻が驚いて尾に力を集中し、引き抜かれまいとして穴の中で懸命にふんばるが、釣り手は道糸の力をゆるめずに引き続けると、

地獄鉤（両切型）



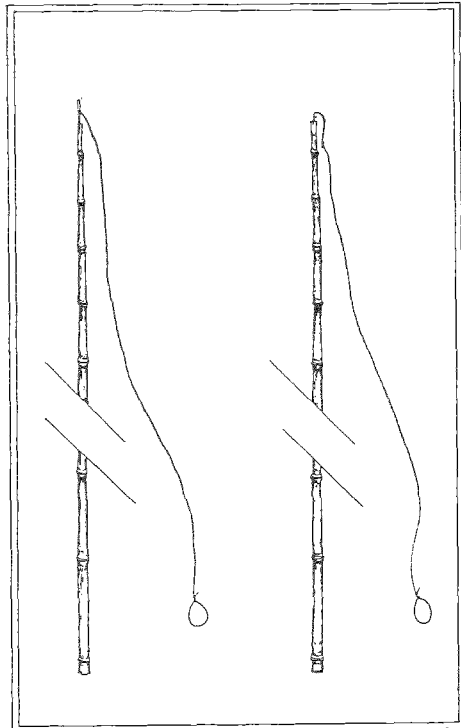
鰻用の魚籠。本来は魚籠の口に蓋が付く。／立川市教育委員会蔵



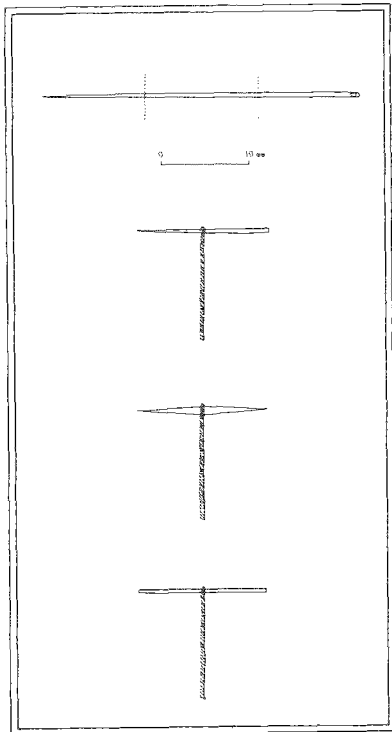
鰻も次第に弱まり、やがて鰻は穴の中から引き上げられる。

地獄鉤は、極めて原始的な構造を持つ釣り鉤であるが、鰻の穴釣り

穴釣り仕掛図



地獄鉤三種



には大変有効な釣である。鰻の穴釣りには、釣の軸の湾曲した、所謂鰻釣を用いて穴釣りをを行う場合もあるが、掛かりの完全さの点で、地獄釣には及ばない。地獄釣は、先史時代の魚釣りに用いられた「回転離頭銜」と同じ構造と機能を有し、穴釣り用の地獄釣の起源が、果たして遠い昔に使われた回転離頭銜の系譜であるか否かは、甚だ興味のある問題だと言える。

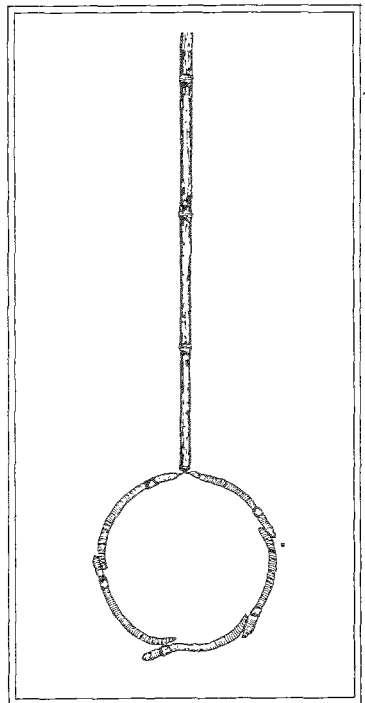
二四、数珠子釣り

数珠子釣りは、東京湾から多摩川河口部、および潮汐の影響を受ける田園調布地先の水域にかけて行われた鰻釣りの漁法で、水温の上がる夏が漁期である。数珠子釣りは専ら職漁者が行う漁法で、別名「ゾゴ釣り」、又は「ゾヅゴ」とも呼ばれ、鰻釣り独特の漁法である。

この釣漁法は、専用の仕掛を用いた餌釣りの一種で、まず、麻糸又は木綿糸に、ミミズ或いはゴカイを縦に何匹も通し、それを直径五、六寸の環にする。そうした環を一つないし数个を、二間前後の竹や木の柄の先に取付け、この仕掛で水中を探り、喰い付いた鰻を捕り上げる。数珠子釣りの名称は、糸通しの餌があたかも数珠に似ている事から名付けられたもので、鰻の貪欲な食性を利用した漁法である。

漁撈者は、舟又は陸から鰻のいそうな川底を数珠子で静かに探り、鰻が餌に喰いつくとはつきりとした魚信があるので、徐々に竿を手元に寄せて、水際の鰻を掬い網に収める。数珠子釣りは静かに注意深く行わないと、物音に敏感な鰻が逃げてしまうので、掬い上げは素早

数珠子釣り仕掛図
(ミミズ刺し通し環・一重)



く行う。

夏、水温が上がると、温水性の鰻の摂餌行動が旺盛になり、鰻は仕掛の数珠子に積極的に喰い付いてくる。鰻が餌を喰むうちに、餌の中を通した糸の繊維が、鰻の細かい歯の間からまっつてしまい、鰻はそのまま引き上げられる。数珠子釣りは、降水で川水が増水し、流れが濁った時に釣果が上がった。

数珠子釣りは、職漁者たちの間で行われてきた歴史の古い漁法で、簡単な仕掛を用いて、鰻の貪欲さを巧みに利用し、逆にその弱点につけ込んだ創意にあふれた技法である。他の釣漁法と異なり、数珠子釣りは、釣釣を用いない無釣釣りが特徴で、捕れた鰻には外傷がない。この釣技の要諦は、あくまでも鰻本来の貪欲さを利用した点にあり、『明治前日本漁業技術史』に、餌に喰い付いて引き上げられる鰻を、

「…これ（餌・数珠子）を口を含み而も嚙下し切れず、と云つて再び吐き出し難き状態で水際迄…」と記しており、鰻の食欲のすさまじ

さには苦笑させられる。また文政年間の書『釣客伝』には、数珠子釣りについて、

「此釣は竿を上る事なし、又合せるにてなし、前へ引込み玉の中へ鰻うつし込む心得也。」と記し、餌に喰いついた鰻を、静かに引き上げる事だとしている。

二五、ひっこくり

ひっこくりは、夏期に、川岸から水中を遊泳する魚を見ながら、輪にした仕掛を魚体に通し、とっさに仕掛を引いて魚をくくり捕ると言う、極めて簡易にして原始的な釣法で、多摩川流域の子供たちが遊びに行つた。魚を引き括る事から「ひっこくり」或いは「ひっこくり」とも呼び、主にウグイや鮎を狙う。

ひっこくりは、多摩川の中流及びそれよりやや下流の水域の、流れが川岸に当る所の沈床や乱杭、それに蛇籠などのある深みで、魚がそうした場所に藻を喰みにくるのを待ちかまえ、用意の仕掛で魚を括り捕るのである。

魚を括り捕る用具は子供たちが自製し、主に馬素と呼ぶ馬の尻毛を用いる。馬素の先端に直径五耗程の輪を作り、もう一方の端を通した引き括りの仕掛を、篠竹の先に取り付ける。出来た仕掛を持参して、深みの川岸で静かに魚が来るのを待つ。やがて、深みから鮎やウグイが藻を喰みに川岸に近づいた時、仕掛の馬素の輪を魚にそろりとくぐらせ、頃合いを見計らつて一気に引き抜く。魚は驚いて抵抗するが、

馬素の輪が、鰻や鯛をしめつけるので、魚は簡単に括られてしまう。

今から半世紀ほど前、夏の川辺には括り具を持った少年たちが、深みにいる魚の気配を伺いながら、ひっこくりを楽しんでいた。仕掛の馬素を手に入れるには、当時、何処にでも見られた馬から尾毛を抜いた。たまたま路で休んでいる荷馬車を見付けると、少年は馬の後部に静かに近づいて、尻毛

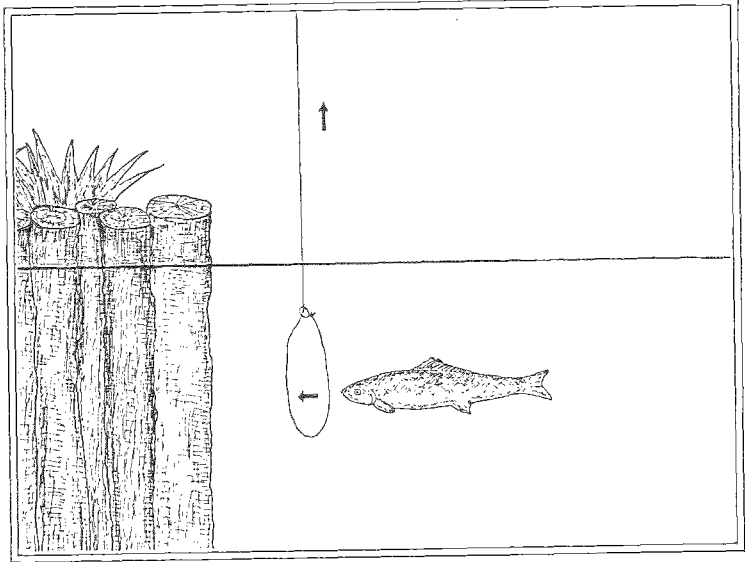
の二、三本を失敬するのである。

それ自体大変に勇気の

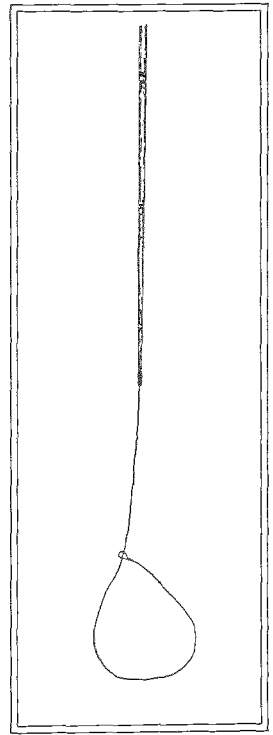
要る行為であるが、昔の子供たちは馬の性質を良く知つ

ており、馬に蹴られぬ様に用心して側面に回り、尻毛を

ひっこくり漁模式図



ひっくり仕掛図



一気に引き抜くのである。

また馬素の代りに、絹糸のように細い銅線や真鍮の針金で括り具を自製し、馬素と同様のひっくりを楽しむ者もいた。そうした針金を使用した人の話によれば、鮎という魚は光るものを好む習性があるらしく、ピカピカに磨いた真鍮の輪で良く捕れたと言う。真鍮の輪は銅のそれより弾力性に富んでおり、こうした真鍮の輪を光らせるために、着物の袖で引きこいて磨いたものである。

昔の子供たちが、極めて幼稚な手段で水中の鮎やウグイを容易に引き括るといふ技法は、かつての多摩川がわれわれの想像以上に豊かで、流れに沢山の魚が生息していたことの証であり、現在では到底思いもよらない。

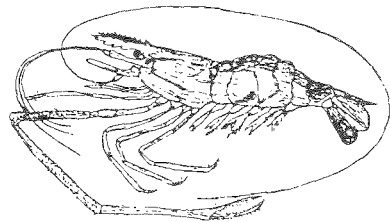
二六、手長蝦釣り

昔、多摩川流域一帯の池沼にテナガエビが生息しており、主に少年たちが、遊びにテナガエビ釣りを行っていた。当時、多摩川中、下流の周辺には多くの池や沼が散在しており、昭和の初期に砂利採取をし

た旧河床跡には、砂利穴と称する沢山の止水域があり、こうした池沼に淡水性のテナガエビが生息していた。

テナガエビ釣りは、水温の上がる五月頃から始まり、梅雨時がこの釣りの最盛期になる。釣りの仕掛は極く簡単なもので、エビ鉤もしくはタナゴ鉤に道糸を通し、板鉛の錘を取り付け、長さ五尺前後の竹竿を用いる。餌はミミズを細かく切つて鉤先に装餌し、テナガエビの生息していそうな乱杭回りや藻の間に投餌して魚信を待つ。餌に食いついたテナガエビが鉤先を口にした時、ソソソソとテナガエビ独特の微かな魚信を感じたら、静かに竿先を上げて捕り込む。

こうした獲物に薄塩をまぶして炭火で焼いた鬼殻焼や、砂糖と醤油で佃煮風に煮つけたり、また天婦羅に揚げて自家の菜料にした。テナガエビには蝦特有の風味があり、一部の人たちは好んでテナガエビを釣り、その食味を楽しんだ。だが、多摩川流域一帯の開発が進むにつれて、池や沼、それに砂利穴は次第に埋め立てられ、テナガエビの生息場も消失した。



テナガエビ

体長より長い第一触手を持ち、主に止水域に生息する甲殻類の一種で美味。開発によって池沼が埋立てられ、姿を消した。

二七、食用蛙捕り

ウシガエルの太股は、肉質が淡白で美味なことから食用にされ、この蛙は俗に食用蛙と呼ばれている。多摩川流域の水田地帯では、主に用水路などに生息しているウシガエルを、専用の掛け竿を用いて掛け捕る蛙捕りの人たちの姿が、戦後数年まで見られた。

ウシガエルを捕るのには、アゴ付きの大型の釣り鉤で引き掛ける。鉤はナマズのポカン釣りに用いる鉤を四本用い、鉤の軸の部分束ねたものに鉛錘を取り付けて掛け鉤とし、一尺ほどの長さの道糸を一間半前後の篠竹の先に結び付ける。こうした掛け竿の仕掛を用いて、水辺や用水路などに潜むウシガエルを掛け捕るのである。

食用蛙捕りは夜間に行い、照明具にカーバイド・ランプや懐中電燈を用いる。ウシガエルの生息する草の生い茂った水辺に、足音を忍ばせて近づき、素早く蛙に光を当てると、ウシガエルが突然の光に視野を奪われ、焦点を集中させようと身じろがぬ瞬間に、すかさず用意の掛け竿を振り込み、蛙を鉤で引き掛ける。



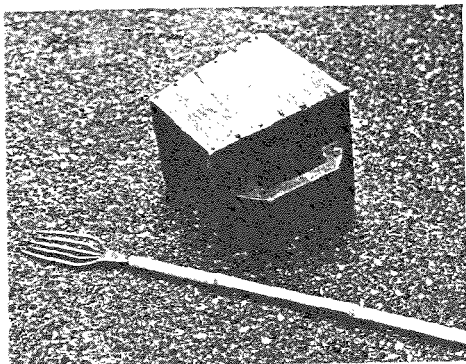
第四章
刺
突
漁
法

一、多摩川水系の刺突漁法

簞や銚などの刺突漁具を用い、水中の魚族を突き刺して捕る技法は、多摩川水系の各水域において古くから行われた漁法である。刺突漁法に見られる普遍的特徴は、他の漁法に比して、魚の捕採方法が極めて単純、直截で、また漁撈者の技能如何による原始的な漁法である。

多摩川水系の刺突漁の起源は、他の河川と同様、その長い時間的経過の中で、どのような用具による漁撈を行ったのかは確証がないが、水中の魚族を手にした刺突具で刺し捕るといふ刺突漁法本来の形態は、

箱眼鏡と簞／青梅市郷土博物館蔵



先史以来、あまりその形を変えることなく継続されて来たものと思われる。

流水を遊泳する魚を突き刺すために、はじめは木や竹の先を鋭利に削いだ簡単な刺突具を用い、やがて骨や石、さらに鉄製の用具に代っていったが、刺突技法の本質は、何ら変ることなく原始以来の手法を継承している。魚を捕らえるために、素手から用具を使う漁法へと、川漁の技法が多様な展開を見せ、発達して行った中で、独

り刺突漁法のみが、簡易な漁具で魚を突き捕るといふ、極めて簡明、直截な技法を変えることなく今日まで継承して来た理由は、漁法の原始性にもかかわらず、それ自体が漁撈における一つの技法として、すでに、遠い昔に完成されていたことを物語っている。

多摩川水系の簞は、対象魚によって形状が異なる。鯉やマルタウグイなどの大型魚には大型の簞を使い、鰻などの小型魚を捕る場合には、それに見合う小型の簞を用いる。多摩川水系で行われた刺突漁法は、徒や舟で行う他に、潜水漁や夜間漁などがあり、また刺突漁法においては、流れに遊泳する魚を探すために、水中を覗き見る箱眼鏡を用いる漁法が多い。水中を自由に覗くことのできる箱眼鏡の出現は、刺突漁法にとって画期的なものであり、多摩川水系では、明治中期頃から板ガラスが使われたが、それ以前には、漁撈者たちは裸眼により水中での刺突漁を行っていたのである。

一本の簞を携え、清流に潜りながら魚を求めて突くが、漁果は簞を使う己れの技量如何により、刺突漁は極めて積極的、かつ攻撃的な漁法であって、板ガラス利用の箱眼鏡が使われても、技法の原始性は以前と少しも変わらない。

二、岩魚・山女魚突き

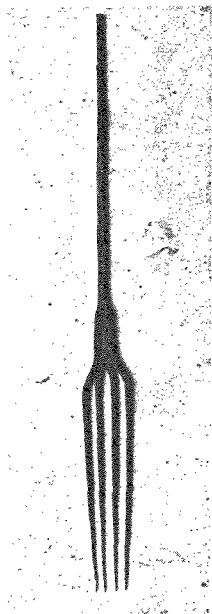
岩魚や山女魚はサケ科に属する冷水性の淡水魚で、多摩川の上流及び源流の水域に生息している。水温が上がる夏季を中心に、山間部の人



山女魚突き／渡辺嘉平画『多摩のふるさと』より

たちは、これらの魚を箒を用いて突き刺して捕っていた。山間の溪流での突き漁は、日中、岩魚や山女魚が潜む淵を箱眼鏡で探り、静かに近づいて突き捕る。魚を突くのは、俊敏な岩魚や山女魚が遊泳している所を突き刺すのではなく、淵の岩蔭や流れの岸寄りに潜んでいる魚族に対し、瞬時に箒を繰り出して突き刺すのである。

岩魚や山女魚を突き捕るには、狙い所は魚の鰓から腹部にかけてで、間髪を入れず素早く箒で突き刺す。魚の尾部に箒の穂先が当たった場合、魚はその瞬間に身をかわして逃げてしまう。また、使用する箒の穂先

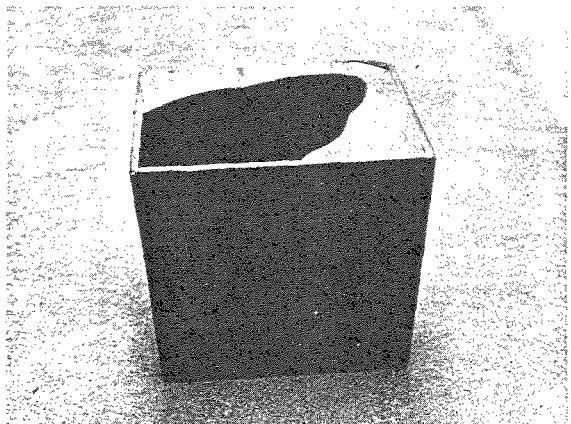


山女魚突き用の箒／青梅市郷土博物館蔵

の鋭さも、刺突の成果を左右するため、漁人は箒の穂先を十分に磨き、手入れを怠らない。

岩魚・山女魚突きは、半身を溪流に浸しての漁であり、時には素潜りで魚を探すなど、冷水による身体の冷え込みが激しい。そのため、時々川から上り、用意した焚火で体を温めながら魚突きを行った。

また、溪流での刺突漁は、夜間にも行われた。岩魚や山女魚は、光に対して鈍ほど敏感な反応を示さず、持参の照明具で照らした瞬間に、身じろぎもせずに休止している所を、素早く突き捕るのである。夜間



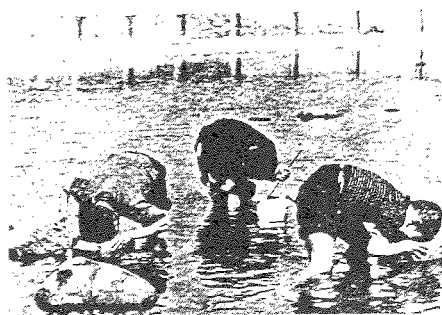
箱眼鏡／五日市町郷土館蔵

になると、大型の岩魚や山女魚が、淵尻や浅場などに出てくるので、日中に比べて大物を捕らえる機会が多い。夜間漁の照明具には、松明やカンテラを使用する。

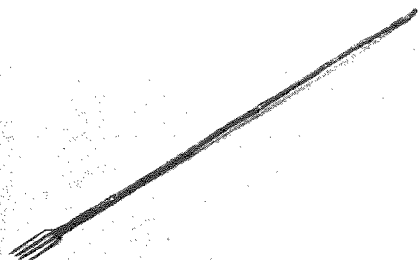
三、鰍突き

多摩川本流とその支流水域には、昔は鰍が沢山生息しており、そうした鰍を箱眼鏡で探し、川底にいるのを箒で突き捕る。鰍突きは、多摩川流域の少年たちが好んで行った、最も普遍的な漁法である。

多摩川中流の鰍突き／多摩
中央信用金庫多摩文化資料
室提供



箒／鈴木由太郎蔵



春の初め、鰍の雌が川石の下に産卵し、それを雌雄の親鰍が卵の孵化を見守っている。こうした鰍の卵を地方によっては「アッコ」と呼び、鰍突きは、早春の流れにアッコを探し、その傍らの親鰍を突き捕ることから始まる。

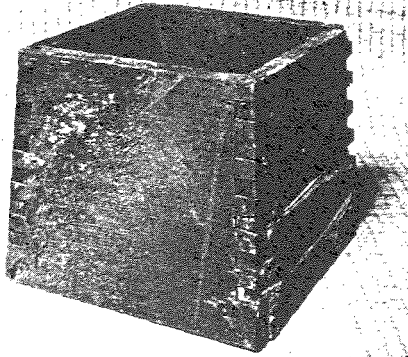
多摩川水系での鰍突き漁法は、「カジツカ突き」、或いは「カジツカ捕り」と呼び、夏になると、多摩川水系の何処の流れにも、鰍突きを楽しむ少年たちの姿が見られた。また、鰍突きは少年に限らず、大人たちも箱眼鏡に顔を突っ込んで、鰍を追ったものである。

鰍突きが、当時の多摩川で盛んに行われたのは、川の水が清冽であり、川底には砂礫を含む石が多く、また鰍の餌となる水生昆虫なども豊富であったために、鰍は、多摩川水系の上流から下流まで広く生息していた。鰍は川底を生息場所とする底生魚であり、その行動は鮎やウグイなどの魚に比して、決して素早いものではない。そのために、箱眼鏡を手にした少年たちが、箒を用いて容易に捕ることができた。

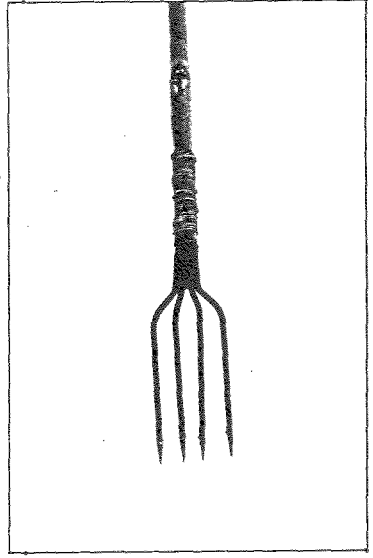
かくして、川に生息する数多の鰍と誰しもが行える簡易な技法は、夏の川遊びに恰好の演目となった。鰍突きは、箱眼鏡を用いて水中を覗く魚探しの魅力と、刺突における原始的な漁撈行為の喜びなど、当時の少年たちにとって、この漁法が恰好の遊び漁の対象となり、多摩川水系の鰍突きは、戦前には隆盛を極めた。

水中を覗き見するという行為は、普段では波の反射に遮られて、見る事の出来ない未知の世界を、箱眼鏡のガラス板を通して、川底までもはつきりと見る驚きと喜びは、それを体験した者にしか判らない。箱

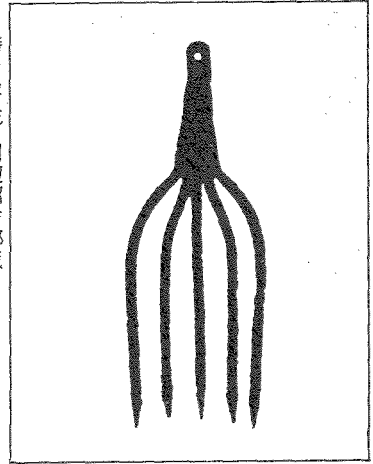
箱眼鏡／川辺昭吉郎蔵



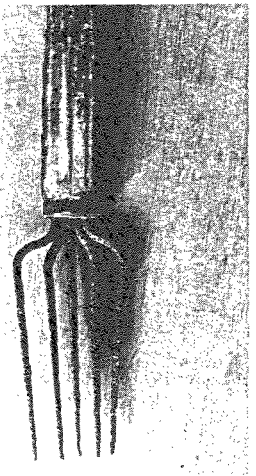
箒／鈴木由太郎蔵



箒の金具／川辺昭吉郎蔵



箒の刺突部／青梅市郷土博物館蔵



眼鏡を流れに浸した瞬間、眼前には水中の鮮やかな別世界が開けてくる。

透徹な流れの中に、川底がくっきりと映し出され、そこには

綺麗な小石が無数に敷き詰められており、その中に石や岩が点在している。ハッと驚く間もなく数匹の

ウグイがガラス越しに横切り、上流に遡る。岩の回りには、鮎が銀鱗をきらめかせながら、縄張り内を遊弋している。遠くの川底に蠢く黒い物は、良く見ると鰻だ。明るい川底にユラユラと日が射し込み、川石と同じような保護色の鰻が、川底のあちこちに散らばっている。

板ガラスを通して見る川の中の光景は、初めて水中を覗く者に大きな驚きを与える。鰻突きは、そうした別世界に遊ぶ漁であり、川辺の少年や大人たちをも魅了してしまう。

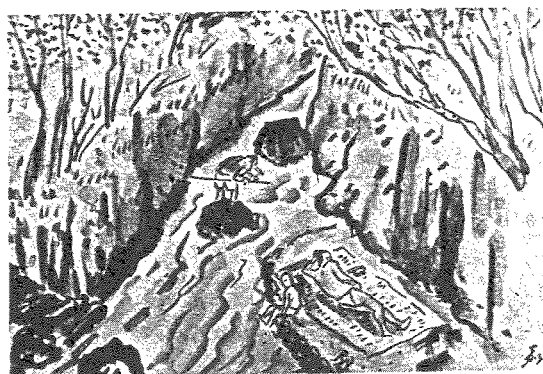
やがて夏が過ぎ、川水が冷たくなると、今まで盛んだった鰻突きも流域の限られた人たちの漁となる。冬期、川の水も減り、鰻は川底の石下に身を潜めじっとして動かない。漁人たちは鰻のいそうな石を取り除いて、その下にいる鰻を突いて捕る。冬は鰻の身も締まり、最も味の

良い季節であるため、多摩川水系の一部では、身を切るような寒期にも鯀突きが行われていた。

四、雑魚突き

多摩川水系で雑魚突きと呼ばれる刺突漁法は、箱と箱眼鏡を用いて水中の雑魚、即ちウグイやオイカワなどの魚族を突き刺して捕らえるが、別に「突き」或いは「銚突き」とも呼んでいる。

谷川での雑魚突き／渡辺嘉平画
「多摩のふるさと」より



雑魚突き漁は、多摩川水系の上流から下流とその支流など、かなり広い水域で行われたが、水中に立ち込む漁法であるため、五月から十月頃までの期間で、特に七、八月は雑魚突きの最も盛んな時期であった。

雑魚突きは、少年たちが川遊びの一環として行う場合が多く、その他に流域の大人たちも行ったが、川漁を専業とする職漁者はいない。雑魚を対象にしていたのでは職漁としての生計が立つかず、雑魚突きはあくまでも素人の遊び漁であったが、鯀突き

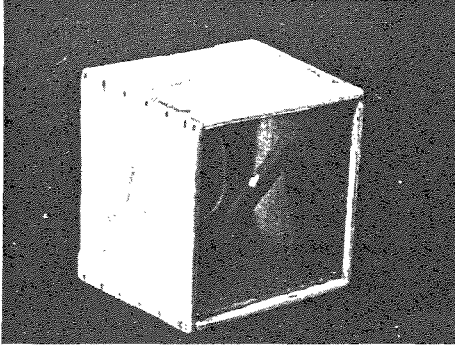
などと同様に、多摩川水系で盛んに行われた漁法である。

多摩川水系における雑魚突きの呼称は、或る特定の魚種を対象にした場合に限らず、あらゆる川魚の突き漁法を意味する場合にも用いられている。地域によっては、岩魚や山女魚を突くのも雑魚突きと言い、鰻や鯉、それに鮒、鯰、ギバチ、カマツカ、ニゴイ、それに鱒などを突くことも雑魚突きと称している。川魚の総てを包含する雑魚、即ち雑多な魚を突き行為の対象とする刺突漁の性格上、多摩川水系では魚種区分の甚だ曖昧な、且つ総括的な呼称が慣行化している。

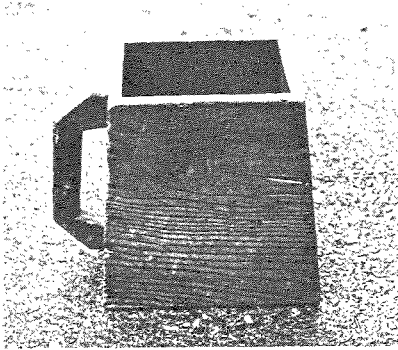
川漁の技法の多くが伝統漁法としての長い歴史を有するが、雑魚突きははじめとする刺突漁法は、それらの中でも最も原始的な漁法である。網や釜、それに釣漁具などを用いた漁法においては、水中の魚と漁撈者との間に時間的、距離的な存在としての漁具が介在するが、刺突漁法の場合には、極めて直截な刺突具だけがあり、魚の捕採については漁撈者の技能如何に依るものである。

素手による手摺み漁を別にして、漁具を用いた漁法の中で、最も漁撈者の資質が問われる漁法と言え、刺突漁法において他にない。流れに魚を求め、全力を傾注して瞬発の機会に仕止めた爽快感は、突き漁の真髄である。それ故、刺突漁法の直截な技法とその行為は、人間の内なるものに潜む原始的な欲求を、十分に満足させてくれる。その昔、夏ともなれば、清流の各所に突き漁を楽しむ人々の姿が見られた。所以、刺突漁への本能的な疼きと、突き行為の醍醐味に魅せられたからなのであろう。

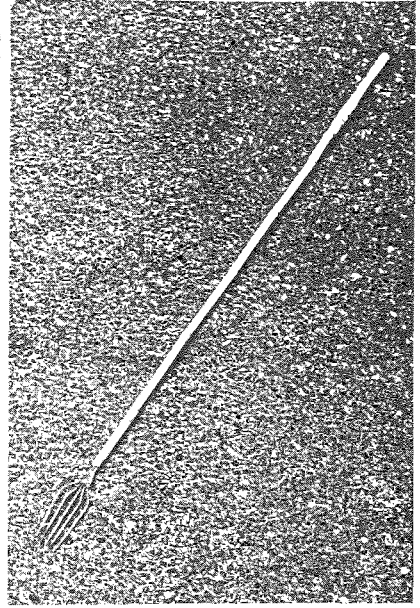
箱眼鏡／立川市教育委員会蔵



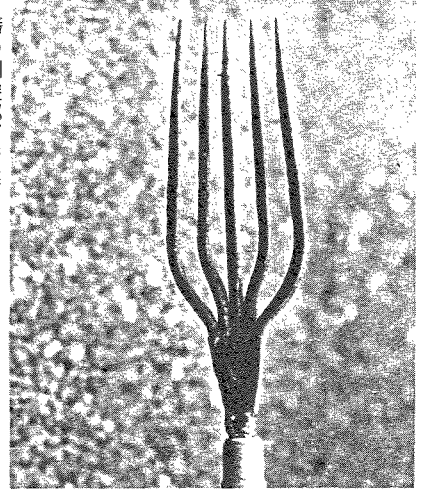
箱眼鏡／青梅市郷土博物館蔵



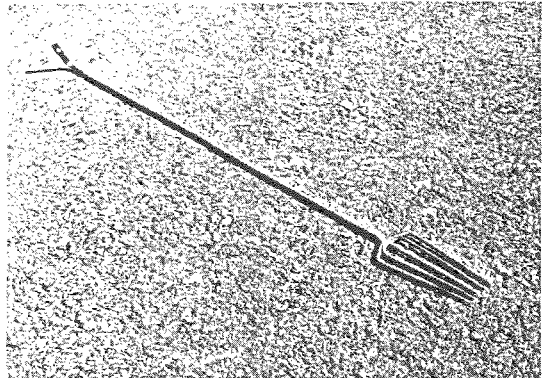
箒／青梅市郷土博物館蔵



箒の刺突部／青梅市郷土博物館蔵



柄も鍛鉄製の箒。柄尻の曲りは川底の石を取り除くのに都合よく出来ている。／福生市教育委員会蔵



五、鯉突き・マルタ突き

多摩川水系で行われた鯉突き及びマルタ突きは、いずれも大形の鯉もしくはマルタウグイを、大型箒を用いて突き刺して捕らえる技法で、いずれも水深のある場所で漁を行うため、川舟を利用する。

この魚の対象魚である鯉やマルタウグイには、体長が二尺近くの大魚もあり、それを突き刺す箒も大型で、取り付ける柄の長さが一間半から二間に及ぶ。水中の鯉やマルタウグイを突く技法は、主に多摩川

の下流水域の職漁者たちが行っていた漁法で、舟の上から水中の魚の姿を見つけ、間一髪で仕止めるという、大変に熟練を要する技法である。

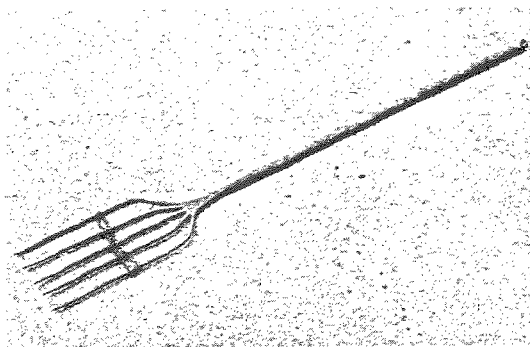
この刺突漁法は、「見突き」又は「覗き突き」と呼び、刺突の際には箱眼鏡を用いないで魚を仕止めるが、舟から魚を探すために胴長箱型の箱眼鏡を用いる事もある。こうして川漁師たちは四季を通じて見突き漁を行い、大鯉やマルタウグイを捕っていた。

春になると、河口からはマルタウグイが大挙して川を遡り、魚を突

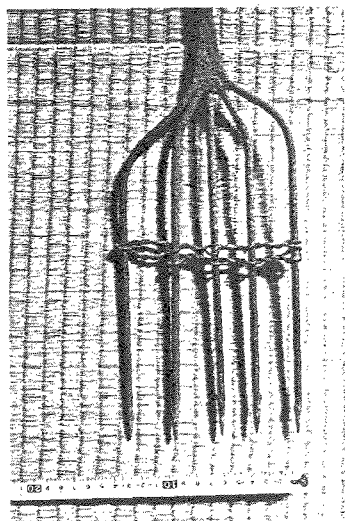
くために、舟を繰り出して魚影を追う。深さが一間以上もある川底が透けて見え、水中に大魚の影が走る。突き手は大型の箒をかざして舟の舳先に立ち、漕ぎ手は臚で静かに舟を操る。

川辺は朝もやが明け初め、櫓を漕ぐ音が水面を渡って行く。

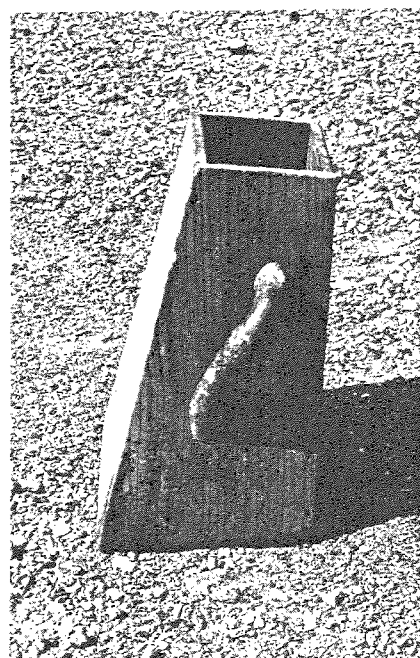
漕ぎ手は、絶えず突き手の気配を伺い、そのかすかな動作を感知しながら、右に左に静かに舟を進める。舳先に魚影が走ると見るや、空を切って箒が飛ぶ。箒の柄が水中に踊り、水面にしぶきが散る。マルタウグイが仕止められた。背鰭の辺りに箒が喰い込み、大型魚は臚蓋をあえがせながら舟に引き上げられる。



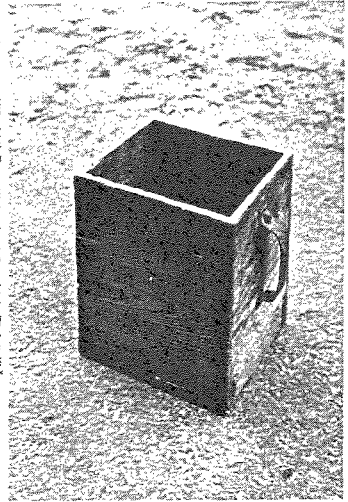
コイやマルタウグイなどの大形魚を突く箒／川辺昭吉郎蔵



大型箒の刺突部／川辺昭吉郎蔵



舟で用いる箱眼鏡。普通より丈が高く作られている。／府中市立郷土館蔵



舟用の箱眼鏡／調布市郷土博物館蔵

勇壮な刺突漁は、世田谷砧地先の水域で、昭和二十年代まで行われていた。まだ多摩川の水も清く、水中を

走る魚影が良く見えた頃のことである。

水中を遊泳するマルタウグイや鯉を

仕止めるには、魚体を狙って箝を打つと必ず外れる。魚の頭より少し上を狙うことが見突きのコツだ、と老練な川漁師が語った。それらからの漁で、しかも間一髪の勝負だけに、漕ぎ手と突き手の呼吸が合わないと言われない。また、見突きは壮快で楽しい漁だと彼は言う。マルタウグイの味について尋ねると、

「マルタほど不美味しい魚はない。だが、奴を突く時ほど面白いものはない。俺は今まで、それが楽しみでマルタ突きをやってきた。」と、日焼した顔をほころばせる。

世田谷地区の砧や川崎地区の菅では、大型箝のことを「モリ」と呼んでいる。五本の太い鉾の先はそれぞれ返しがあり、突き刺した時、大型魚の体に喰い込んで、捕り逃がしのない様になっている。この大型の刺突具でも、時には突き刺さった魚の力で曲ると言うから、見突きの豪快さは相当なものである。

冬になると川の水が少なくなり、大鯉は水深のある淵に集まってくる。冬期の川水は澄み切って、深い川底まで手に取るように見える。鯉突きは、こうした深場で休止している大鯉を狙い、大型箝で突き捕るのである。緊迫した獲物狙いの静と水面を揺るがす仕止めの動とがこの漁にはある。多摩川水系では数少ない大型魚の刺突漁は、職漁者ならずとも、血を湧き立たせずにはおかない。

六、潜り突き

潜り突きは、主に多摩川の中、下流水域の水深のある淵や瀬などで、漁撈者が潜水して魚を突き捕る漁法である。箝を手にした漁人は、素潜りをして水中で眼を開けながら魚を探し求め、せいぜい一分程度の潜水を何度も繰り返して、魚を見付けると静かに近づき、箝で一気に突き刺す。

水中眼鏡が市販されるようになると、今までのように裸眼で水中の魚を探すことがなくなり、水中眼鏡は潜り突きに積極的に採り入れられ、多摩川の潜水刺突漁は、主に流域の少年たちが夏の川遊びとして、潜水漁に興じていたものである。職漁者が潜水漁を行うのは、釣漁法の「ひっかき」で、通称「メガネ」と言われる深場の鮎を掛け捕る際、水中眼鏡をつけて潜水漁を行っていた。

潜り突きでは雑多な魚を突き捕り、仕止めた魚体の損傷も著しい。また、鮎の専用漁法などに比して経済性が低く、潜水刺突漁法は、職漁者にとって決して魅力的な漁法ではなかった。遊び漁的性格の濃厚

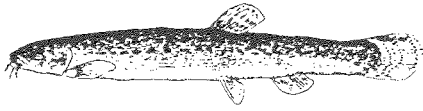
な潜り突きは、その漁法に魅力を感じた流域の一部の人たちが、夏季を中心に、主にコイやフナ、それにウグイやナマズなどの魚を捕って楽しんでいたものである。

七、泥鰌刺し

田植え前後から初夏にかけて、多摩川流域の水田地帯では、田圃や小川の泥鰌を突き刺して捕る泥鰌刺しが行われた。泥鰌刺しは夕方から夜間にかけての漁で、突刺漁具

ドジョウウ

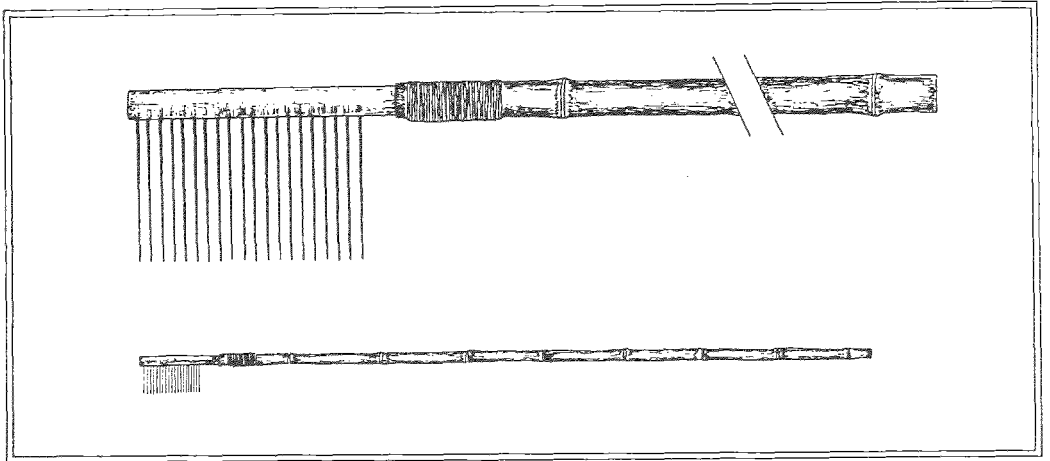
昔、水田や用水路などの細流には、芥で容易に捕れるほどドジョウが沢山生息していた。流域の農民たちの食生活に貢献した川魚は、鮎よりも、むしろドジョウであった。



の他に照明具を用いる。泥鰌刺しは火振り漁法の一つであり、かつての水田地帯では、季節になると盛んに行われた、極めて土俗的性格の濃厚な夜間漁である。

地域によって、泥鰌刺し漁は様々な名称で呼ばれている。青梅、羽村地方では「ドジョウツキ」、日野では「ドジョウブッサン」、稲城では「ドジョウブチ」、調布では「ブットシ」、又は「シブリ」、世田谷地区では「火振り」、また多摩川中流域では一般に「ドジョウ打ち」と呼んでいる。いずれも

泥鰌刺し用具



早苗が植えられた時期に、水田や水路に生息する泥鰌を、刺突具で突き捕る漁法である。泥鰌刺しの漁期は、稲が分けつして水田一面を覆う前まで続く。

泥鰌刺し用の刺突漁具を「泥鰌突き」と言い、用具はほとんど自製した。泥鰌突きは太目の木綿針、もしくは蒲団針を十数本、篠竹や杉板の先に櫛状に打ち込み、針が外れない様に木綿糸で幾重にも巻いて固定する。或いは、ブリキ板に刺した針をハンダ付けにした刺突部を雑貨屋などで買い求めてきて、

それに四、五尺の篠竹の柄を取り付けて用いる。一列に刺し針の並んだ泥鰌突きは、実によく刺さる。刺突具と照明具、それに魚籠を持ち、一人もしくは二人で、夕闇せまる田圃に泥鰌を突きに行く。

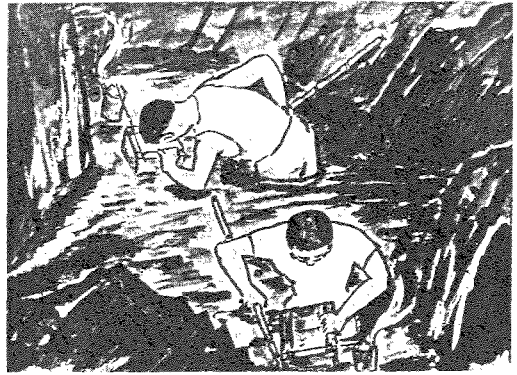
水を張った田圃は、植えたばかりの早苗が整然と並び、浅い水深の泥の底に、泥鰌が三々五々「く」の字になって眠っており、明りを近づけても動かない。また、近くの水路の浅場にも泥鰌がいる。そうした泥鰌を畦伝いに次々と刺し捕り、時には鰻や鯰、鮒なども捕れる。こうした農事の合い間を見ての夜間漁ではあるが、二時間ほどで魚籠が一杯になることもある。蛙声に満ちた暗闇の中に、火振りの明りが水田や水路の各所にゆらめき、幻想的な田圃の風物詩が終る頃、やがて水田地帯には、笠を用いた泥鰌笈漁の季節がやってくる。

泥鰌突きに用いる照明具は、様々である。松明をはじめ、龕燈がんどう、それにカンテラ、古土瓶を利用した夜灯よとだし、石油ランプ、カーバイド・ランプ、それに懐中電燈などが使われた。

八、火振り

夜間に行う刺突漁で、籍の他に照明具を用い、多摩川水系の火振り漁は本流、及び支流を含む全水域に亘って行われ、この漁法は、地域によって「夜振り」或いは「しぶり」、「ぶっとし」、「火ぼり」、「夜とぼし」などと呼ばれた。

火振り漁は、主に夏の夜に行う漁で、照明には各種の照明具を用い



火振り／渡辺嘉平画『多摩のふるさと』より

夜ともなればその姿を水辺に現わし、また流れに休止しているので容易に突き捕る事ができる。鰻や鯰、それにギバチなどの夜行性の魚たちは、川岸近くまで餌を探し求めて徘徊するので、静かに近づき手にした籍で一気に突き刺す。

夜間漁は川の地理に暗いと危険であるが、流域の人たちは、十分に勝手を知った水域で火振りを行っていた。川底の石は水垢が付いて滑り易く、そのため、火振り漁に足半やわらじを覆いて漁に出た。

闇の中に明りが揺れ、川伝いに上ったり、或いは下りながら、水面の上に照明をかざして魚を探る。闇夜のしじまを縫って水音のみが響

た。照明具はヒデと呼ぶ松明をはじめ、龕燈がんどう、古土瓶を利用した夜灯よとだし、石油カンテラ、カーバイド・ランプ、それに懐中電燈など様々である。こうした照明具を携えて川に入り、川面を照らしながら、水中の魚を探して突き捕る。火振り漁では、突き捕ることのできる漁であれば何でも突いた。鯰、鰻、ギバチをはじめ、鯉、鮒、ウグイ、ニゴイ、カマツカなどの魚も対象にした。日中は姿を潜めている魚や動きの早い魚たちも、

き渡り、川風のそよぎが心持よい。川岸の底に鰻がゆらいでいる。障害物の蔭には鯉がじっと動かない。そうした魚を次々に突き捕り、腰の魚籠は雑多な魚でずっしりと重く、深夜に家路を急ぐ。

火振り漁は、主に流域の農民たちが夏の夜の徒然に行った漁で、昼間の激しい労働の合い間に、遊びと実益を兼ねて魚を捕ってきた。夏の宵から夜にかけて、川面に漁火が揺らめく光景は、毎年、夏の闇中に見ることのできた、田園の風趣にあふれた歳時記であった。

九、鉄砲 銚

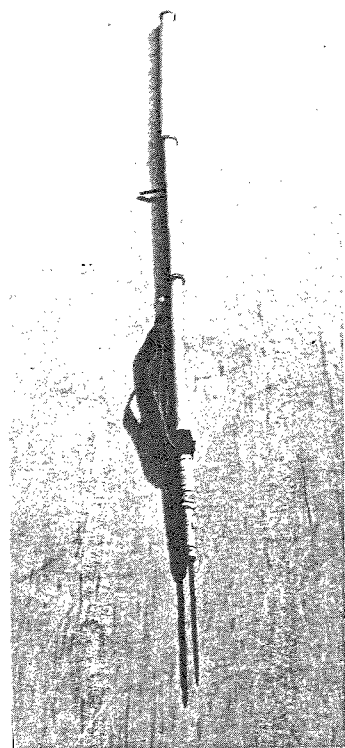
鉄砲銚漁は、多摩川の中流から下流域にかけての漁法で、水中眼鏡を付けて潜水し、川の中の鯉やウグイ、鮎、鮒などを探し、魚を見付けると、至近距離まで近づいて、手にした鉄砲銚で撃ち捕る。流域の少年たちが夏期に行った遊び漁である。

鉄砲銚は刺突漁法の一つで、銚などの用具はすべて自製し、材料は当時の生活に使われていた廃材を工夫して用いた。鉄砲銚で刺突銚の部分は、雨戸の古レールなどを用い、銚の先を鉄鑊で研ぎ上げ、また鉄砲銚の刺突駆動部には自転車の古チェーンを利用するなど、新案の刺突漁具は、甚だ創意に満ちている。

鉄砲銚が多摩川で使われたのは大正以降であるが、ゴムの弾力を利用した素朴な駆動装置付きの刺突漁具は、多摩川流域の少年たちの間にたちまち流行した。

鉄砲銚の多くは、発射された銚がそのまま手許に留まる構造で、刺

鉄砲銚／府中市立郷土館蔵



突銚の到達距離はわずかに一尺程度であり、水中の獲物を仕止めるためには、それだけ魚に近づかねばならなかった。現在の水中銃は、銚自体が飛び出して獲物を捕捉するのに対し、昔の鉄砲銚は射撃性能の点で、大変に幼稚なものではあったが、今までの簞とは違った機能を持った刺突漁具の出現は、当時の川遊びの少年たちにとって、垂涎して止まない道具であった。

一〇、多摩川水系の簞

多摩川水系で広範囲に使用された鍛鉄製の刺突漁具は、「簞」又は「銚」、一部の地域では「ヤハズ」と呼んでいる。また、同一地域内において、一つの刺突具に対して、簞と銚との混称が見受けられる。かつて盛況を呈した突き漁法にもかかわらず、その漁具に関しては、

本来は箒である筈の刺突具に明確な呼称の統一性を欠き、多摩川流域は「もり・やす」混称地帯になっている。「日本水産捕採誌」にも、「……凡そ鋒鉈を有する鉄具を掉頭に施し、之を以て水族を突きて以て捕獲するものその数多し。随て名称一ならず。然れども之を概称するの正名なし……」

と述べ、混称への当惑が見られるが、多摩川水系で用いられた鉄製刺突具の標準名は、箒であり、型の大小と形態に多少の違いが見られるものの、並列した数条の鉄鉈がそれを物語っている。多摩川流域における鉈の呼称は、多分に内湾漁業の影響が見られる。

箒は、先端の刺突部とそれを装着する柄から成り、先端に着装する刺突部は鍛鉄製で、漁撈者が鍛冶屋に製作を依頼したり、街の雑貨屋などで買い求めたものである。

刺突具として箒の機能は、水中の魚を突き刺し、魚を捕獲する事にある。多摩川水系でごく普通に見られる箒は鍛鉄製で、その根元から分れて並ぶ三本ないし五、六本の鉈があり、先端はいずれも鋭い穂先を具えている。

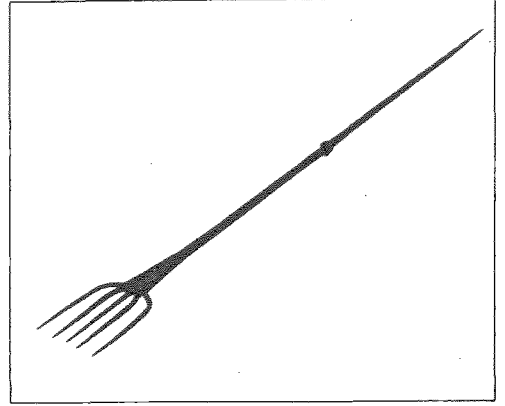
箒の中には、魚を突き刺した時、魚が箒から外れぬための「アゴ」と呼ばれる返しを持つ箒もある。一方、鯿突きなどに使う小型の箒や、動作の俊敏な山女魚を突き捕る箒にはアゴ無し型が多い。

箒は、一般に、鉄製の刺突部を竹や木の柄の先に取付けたものが多く、一部では柄も同一鉄材で作られており、反対の柄尻が彎曲した鈎部になっており、川底の石を掻き起すのに都合のよい構造の箒もある。

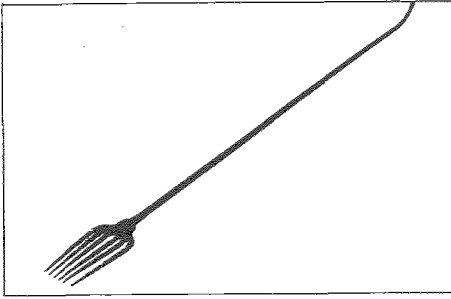
多摩川水系の箒



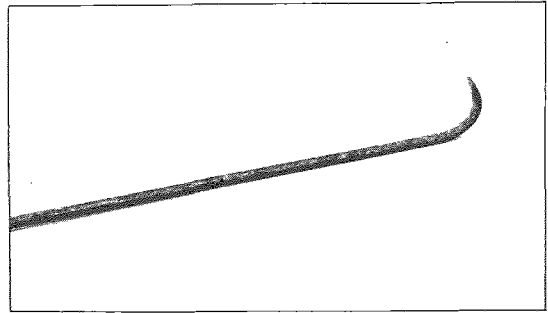
箒／立川市教育委員会蔵



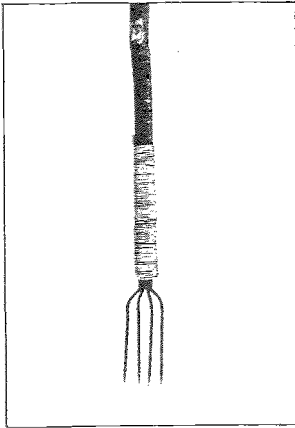
箒／立川市教育委員会蔵



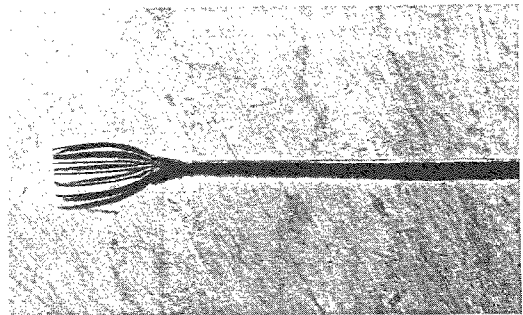
柄も鍛鉄で作られた箒の柄尻曲りは刺突漁の際、川底の石を除くのに都合が良い。



箒／鈴木由太郎蔵



鮎投網用の箒。網の中の鮎を逃さぬため、突き刺して捕るのに用いる。／府中市立郷土館蔵



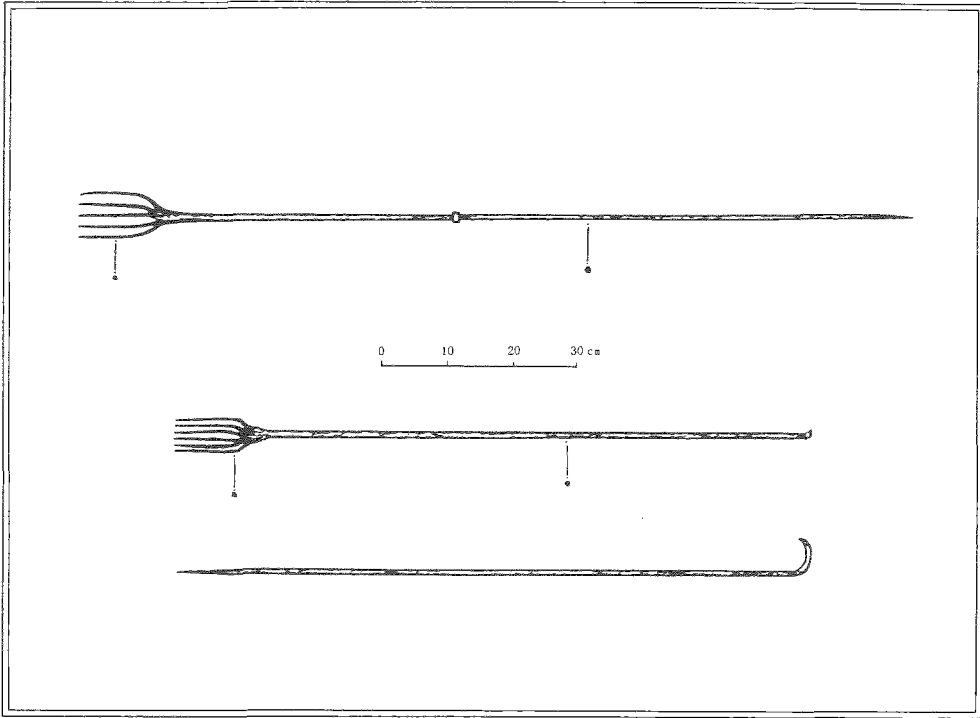
鮎投網用の魚籠と箒／調布市郷土博物館蔵



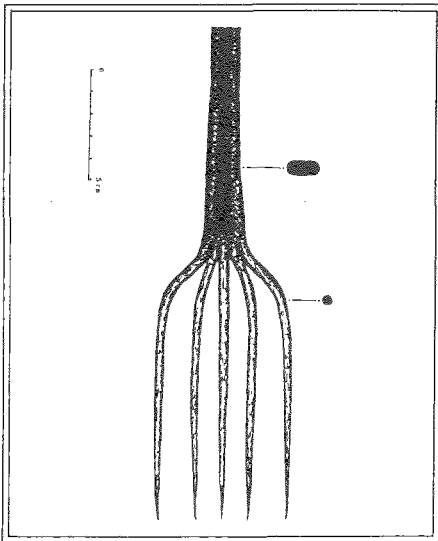
これは水中の魚が、川底の石の隙間に身を潜めた際、周りの石を鈎部で取り除き、反対側の穂先で突き捕るものである。刺突部の穂先が鈍化した時には、大型箒では鋼鑪で磨き上げ、また小型の箒では、刺突漁の際に川石などで磨き、刺突を行う漁人たちは、常に箒の穂先を鋭く保つように心懸けていた。

箒の柄の長さは、対象魚や漁場によって差異がある。鮎漁などでは三尺前後で、火振り用の箒は五尺、また鯉やマルタウグイなどの大型魚用の柄には、十尺以上の真竹や木の柄が使われている。箒を

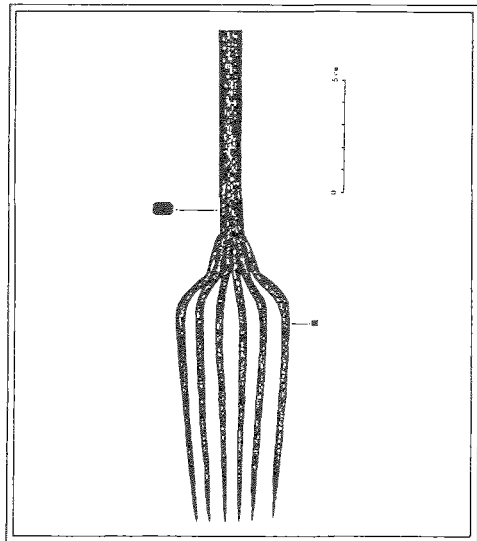
寸法図（立川市教育委員会蔵）



簀・刺突部（立川市教育委員会蔵）

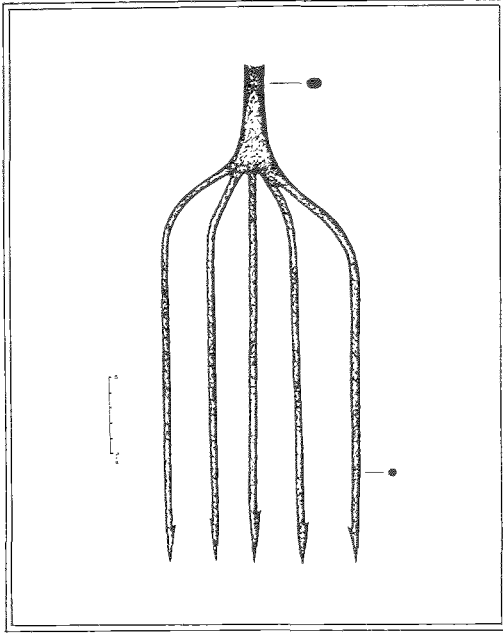


簀・刺突部（立川教育委員会蔵）

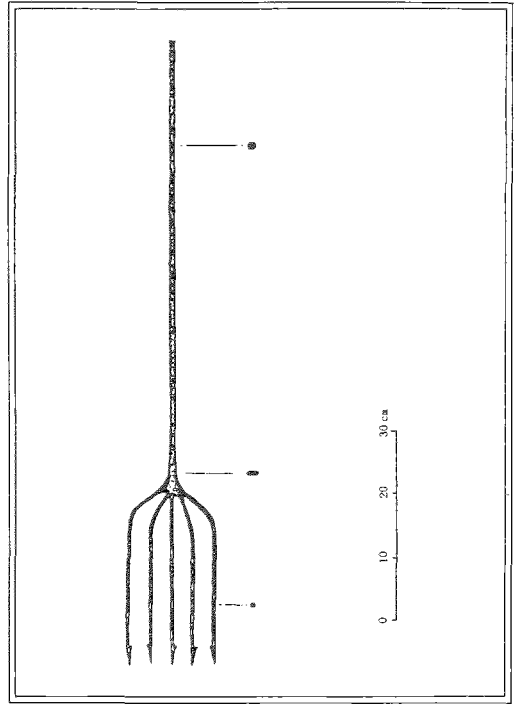


取り付ける柄の長さに規準はなく、使用者の判断で適当に決められる。簀は漁撈の際に、手の延長としての機能を要求される捕採具であり、使用時には、敏速性と軽便性に叶うものでなければならぬ。長すぎず短かからず、その上軽くて取り扱い易いことが刺突具としての簀の必須条件である。

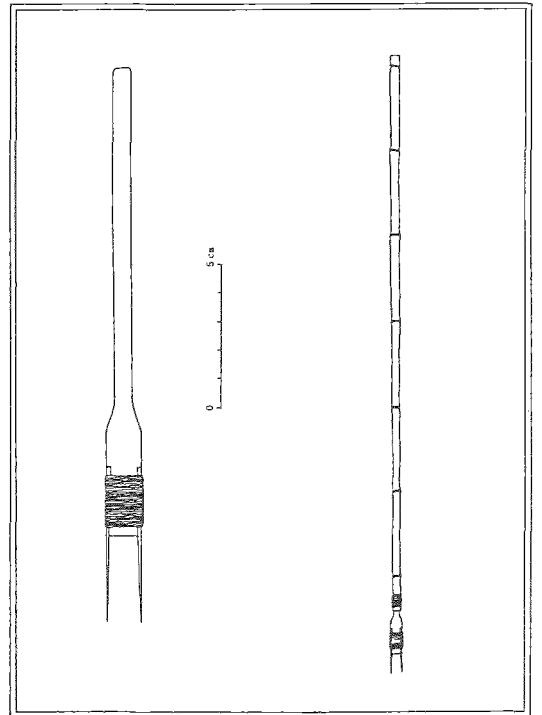
鯉・マルタ用箒・刺突部



鯉・マルタ用箒 (川辺阪吉郎蔵)



竹材利用の自製箒



多摩川水系では、鍛鉄製の箒の他に、竹製の箒も使われた。刺突部を竹で自製し、それを木片板などに木綿糸で結着したものを、流域の児童たちが鰻突きなどに使用した。魚を突き刺す部分の竹は、真竹を用いて先を鋭く仕上げ、さらに刺突部の強度を増すために、煮立った食用油に浸して焼き入れしてから使用する。だが、材質が竹では、如何様に焼き入れをしたとしても、その強度には限界があった。

また竹製箒以外に、刺突部に木綿針や蒲団針を取り付けた箒、或いは自転車のスポークや針金を用いた箒など、自製箒は生活の廢材を利用したものが多し。そうした手製の刺突漁具の中でも、泥鰌刺しに使われた突き刺し具などは、優れた刺突性能を誇るものがある。古より多摩川水系では、漁撈者それぞれが、極めて創意工夫にあふれた刺突

具を用い、川遊びに、或いは自家の菜料に魚を捕っていた。

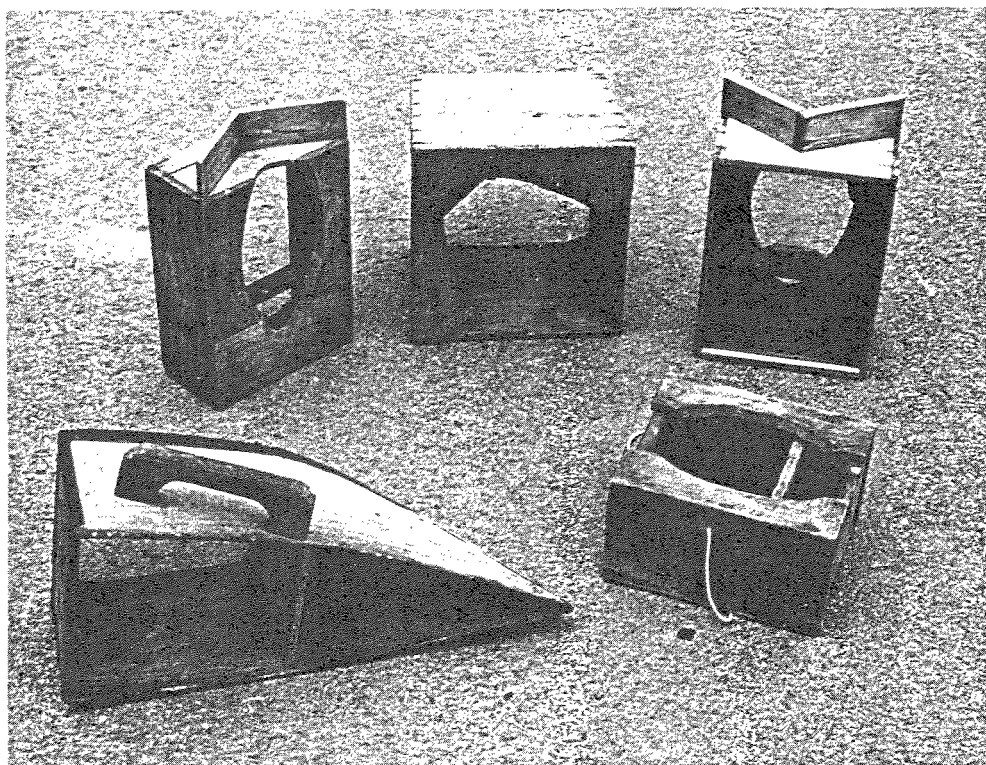
一一、刺突漁と箱眼鏡

刺突漁では、水中を見るための用具を使う場合が多い。この用具は箱型の底面に板ガラスを張ったもので、ガラス面を流れに浸けることにより水面の乱反射を消し、漁人は水中を透して見ることが出来る。

多摩川水系で用いられた水中覗き具には、様々な種類があるが、いずれも水中を覗いて魚を捕る漁法に使用され、刺突漁や釣漁法の「ひっかき」などに使われる。多摩川水系の水中覗き用具の呼称については、「箱眼鏡」をはじめ、「眼鏡」、「箱面」、「面」、「水眼鏡」、「水中眼鏡」、「ガラス箱」、「箱マスク」など、その名称は多彩である。それらの中で、ひっかき漁専用を使う水中覗き具は、特殊な形態と機能を有し、それらについてはひっかき漁で述べてあるので、ここでは、刺突漁に使われた水中覗き具について述べてみる。

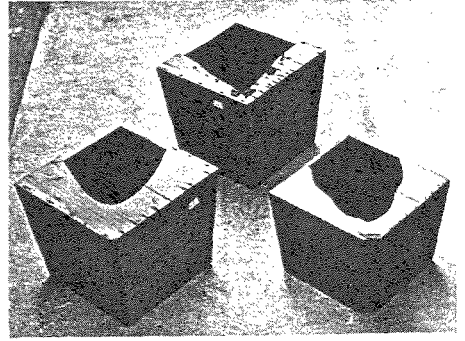
刺突漁の水中覗き具は、徒や舟、或いは潜水漁の際に用いるが、それぞれの漁法に適応した用具として機能が分化している。

多摩川の上流地域など、比較的の流れが速く水面の波立つ水域では波を切るのに都合のよい波切り構造のものや舟型が用いられ、箱の高さも水の浸入を防ぐために高く作られたものが多い。また、多摩川の中、下流域などでは、箱の高さも上流のものに比して低く、軽便な構造になっている。

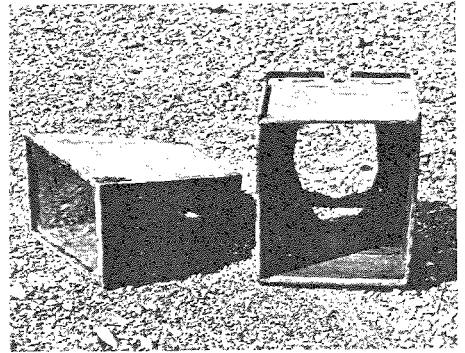


様々な形の箱眼鏡

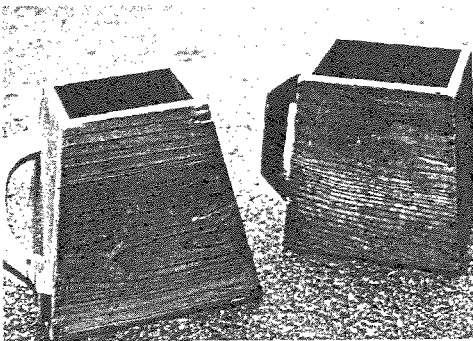
箱眼鏡／五日市町郷土館蔵



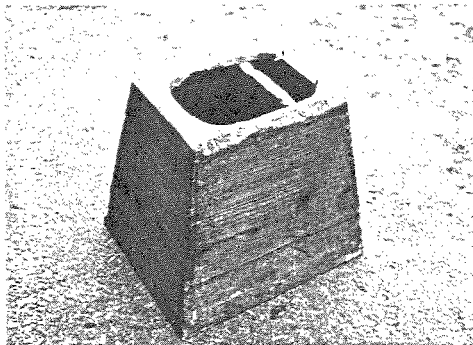
箱眼鏡／府中市立郷土館蔵



箱眼鏡／青梅市郷土博物館蔵



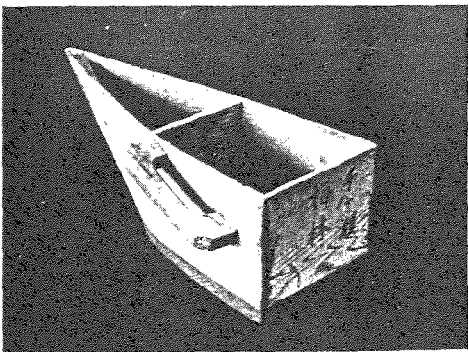
箱眼鏡／調布市郷土博物館蔵



水中覗き具の中で、銜え木のあるものとそうでないものがあるが、箱眼鏡の銜えは、箱の一部に横木を取付け、そこを漁撈者が噛み支えることで顔面に固定される。それにより漁撈者の両手が開放されて自由になり、水中での魚の探索や刺突の動作が容易になる。また、横木のない箱眼鏡でも、箱の側板を噛むことで、顔に固定することができる。

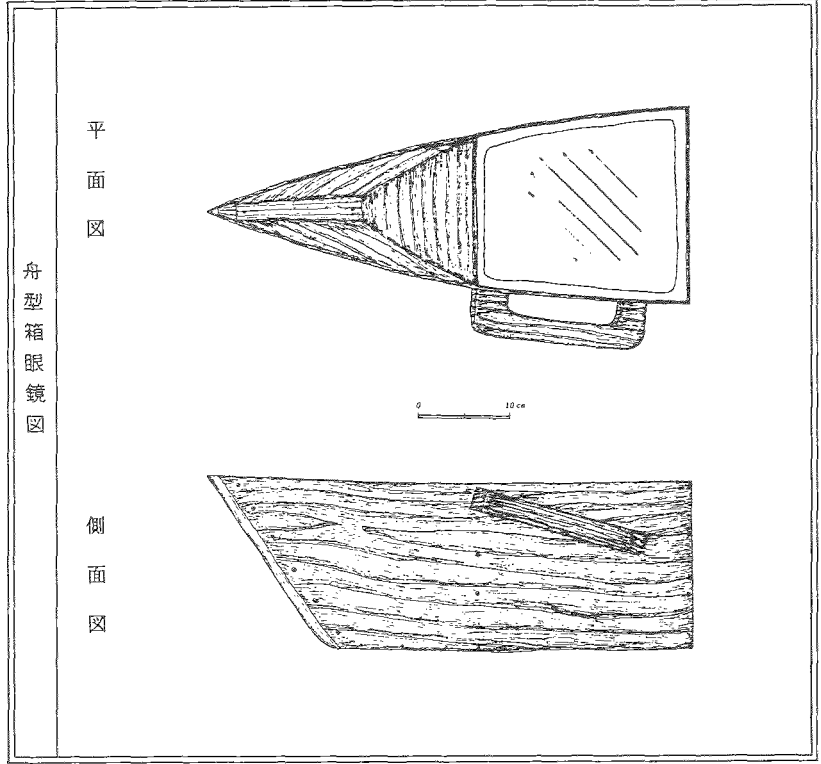
舟で使用する水中覗き具は、舟べりからの操作を考慮して、箱の高さが高く作られている。箱眼鏡の中には、箱の一部に捕った魚を貯めておく区画を設けるなど、創意にあふれたものもあり、こうしたさまざまな型式の箱眼鏡類は、主に流域の木工職人の手で作られたが、中には自製の箱眼鏡を用いて漁する人もいた。

波切り構造の舟型箱眼鏡／立川市教育委員会蔵



箱眼鏡の使用中に、自分の吐息でガラスの内側が曇る事があり、これを防止するために、予めヨモギの葉汁をガラスの内面に塗って曇りを防ぐ事は、職漁者をはじめ、箱眼鏡を使う者は、皆行っていた。また、最も簡単な材料で水中を覗く方法は、流れの水面に板ガラスの切片を斜めにかざすと、水中の透視ができる。かつて流域の少

年たちが、手製の箒とガラス片で川の魚を突いて遊んでいた。当時の少年たちが、生活廃材を巧みに利用しての創意と、川遊びに対する無垢な情熱は、様々な創作漁具を生み出している。

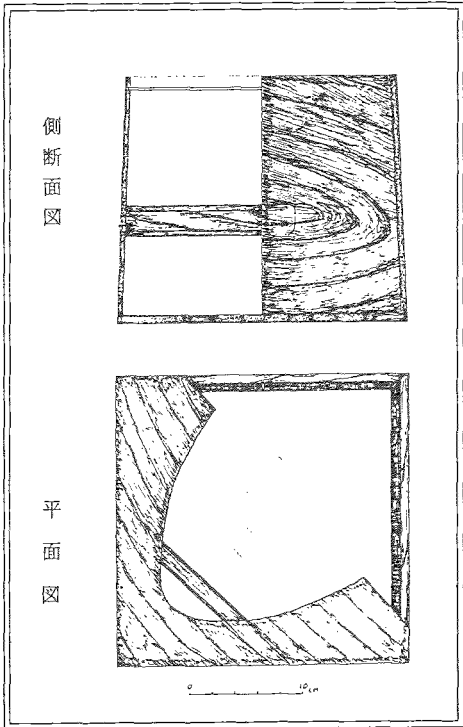


舟型箱眼鏡図

平面図

側面図

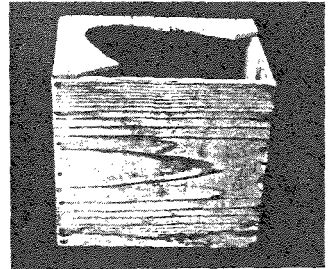
箱眼鏡



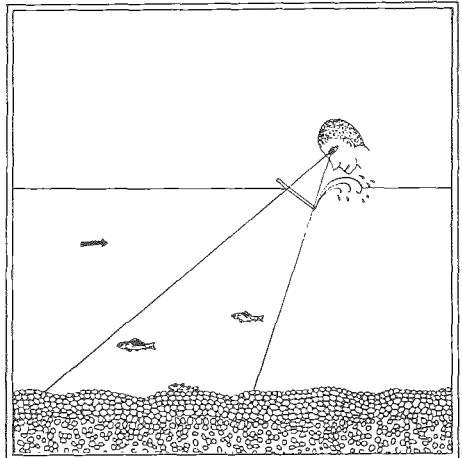
側断面図

平面図

箱眼鏡 / 立川市教育委員会蔵



ガラスの破片で水中を覗く
 かつて、流域の少年たちが廃物を利
 用して川遊びを楽しんだ。



一二、火振り漁の照明具

夜間の刺突漁には照明具が必要で、かつて多摩川水系で行われた火振り漁には、各種の照明具が使われていた。最も原始的で、しかも広く用いられた松明をはじめ、昭和に入ってから懐中電燈など、火振りには様々な照明具がある。

松明^{なまご} 〓 多摩川の流域では、「ヒデ」とも呼んでいた。流域の各地に植生する赤松の切株根や折れ枝の元には、松の樹脂が蝋色になって蓄積されている。そうした部分を切り取り、細木状に割った上で束ねて松明にする。一方、金網を編み、竹の柄を付けた用具を用いた松明も使われた。松明の光は明るく、しかも火の持ちが良いため、昔から広く用いられた照明具で、その歴史は大変に古い。灯油が普及する以前、多摩川流域で火振り漁に用いる照明具と言えば、そのほとんどが松明であった。

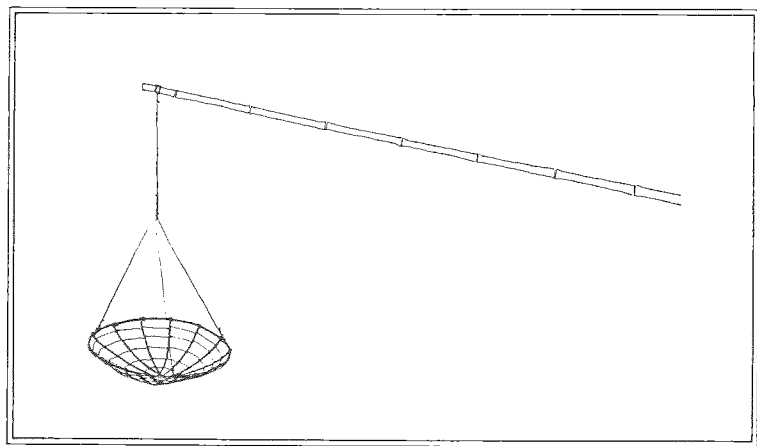
龕燈^{がんどう} 〓 光源に蠟燭を用いた照明具で、火振り漁に十分な明るさとは言えなかったが、龕燈の携帯性と照明の方向性に優れているため、一部の地域で用いられていた。龕燈は先きの松明と同様に、昔から使われた照明具である。

カンテラ 〓 蠟燭を用いるカンテラと灯油を用いる石油カンテラと

があり、中には簡単な風防を備えたものもあり、ブリキ製の照明具で、夜間漁に使用するにはあまり明るいものではなかった。また、当時、家庭で使われていた石油ランプを持ち出して、火振り漁の照明に使うこともあった。

古土瓶の夜灯^{よせぢ} 〓 明治から大正にかけて、多摩川流域一帯に電燈が普及する以前は、何処の家庭でも夜間には石油ランプを用いていた。

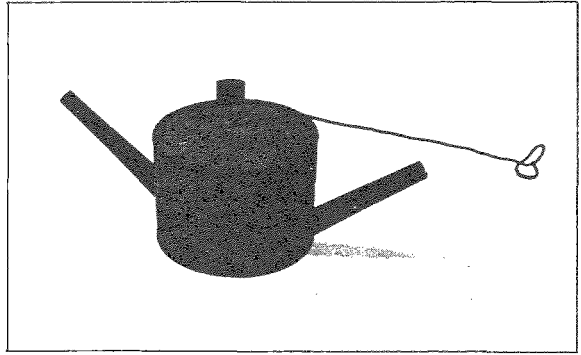
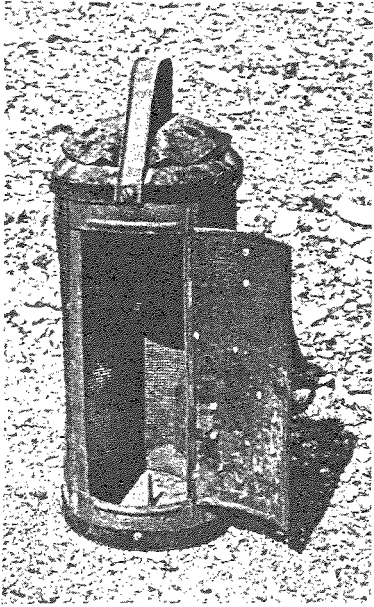
松明を燃やす用具



灯油は農家の常備品であり、これを燃料に用いる古土瓶の夜灯を自製し、火振りに使用した。木綿布を土瓶の口に通し、中に灯油を満たせば立派な照明具となる。夜灯は多摩川水系に限らず、この創意に満ちた照明具は、各地の水系で火振り漁に用いられていた。

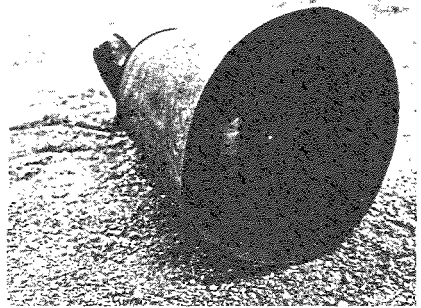
カーバイド・ランプ 〓 多摩川水系で、カーバイド・ランプが使われたのは比較的に新しく、

ローソク用のカンテラ／府中市立郷土館蔵

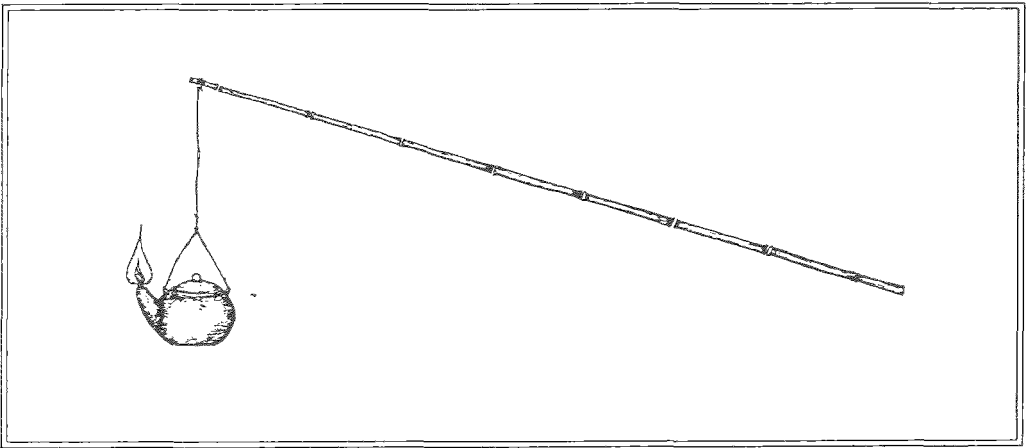


石油カンテラ／調布市郷土博物館蔵

龕燈／国立市教育委員会蔵



古土瓶を用いた夜灯



大正以降のことである。カーバイドに水を加え、そこから発生するアセチレン・ガスを燃焼させて、その光を照明にするが、大変に明るく、夜間漁に好都合の照明具であった。しかも、ランプそのものが携行に便利で、火振り漁に広く使われていた。

第五章
雜
漁
法

一、多摩川水系の雑漁法

雑漁法は、水中の魚を捕るための使用漁具や捕採原理の点で、釜漁法や網漁法、釣漁法、それに刺突漁法以外に包含される漁法の総称である。雑漁法と言われる様に、それぞれの漁法は雑多な内容を持ち、変化に富んでいる。雑漁法に見られる特徴は、それぞれの漁法の歴史が古く、「築」や「鵜飼」などの漁法を除けば大変に素朴で、また原始的な漁法が多い。

多摩川水系の雑漁法の多くが、遙か遠い先史時代からの技法を伝承して現代に至っており、他の漁法と異なり魚の捕採方法も多様で、またそれぞれに個性的である。雑漁法のいずれもが魚の習性を良く見極め、それを巧みに利用した点に先人たちの自然観察の確かさがあり、様々な雑漁法の一つ一つに経験的な英知が凝縮されている。また雑漁法の中には、他の漁法に見られる様な専用の漁具に依らず、日常の生活用具を利用した漁法も多く、こうした技法の特異性は、それぞれの漁法の中で如何なく発揮されている。

雑漁法の中には、「手掴み」や「瀬押し」の如く、全く漁具を用いず専ら素手による漁があり、また、川石を岩に叩きつけてその下に潜む魚を捕らえる「石ぶち」など、極めて原始的な漁法もある。また一方では鵜の飼育に手間のかかる鵜飼漁や多額の経費を要する築漁などがあり、雑漁法は多彩にして雑多である。

多摩川水系における雑漁法は、築や鵜飼などの特殊な漁法を除き、流域の人たちが昔からそれぞれに体験してきた漁法が多い。それは、雑漁法の多くに見られる技法の原始性と簡易性に由るもので、長い年月を通じて行われてきた雑漁法は、多摩川水系の数ある伝統漁法の中で、最も土俗的な技法と言える。

二、鵜飼

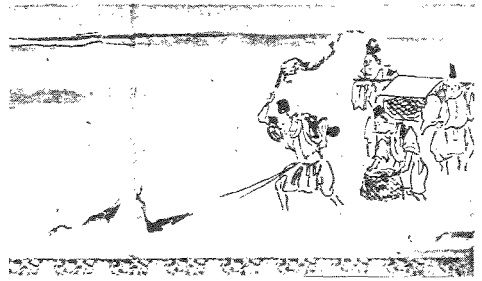
鵜飼は鵜を飼い馴らし、その働きで水中の魚を捕らえる大変に特異な漁法で、この点では鷹狩りと一脈通じるものがある。

鵜飼漁における魚の採捕は鵜が行い、漁撈者は鵜の採捕行動を助け、管理するにとどまる。川漁の技法の多くが人間の主体的な行動によるが、鵜飼では漁撈の主体が鵜であり、この点でも類のない漁法と言える。

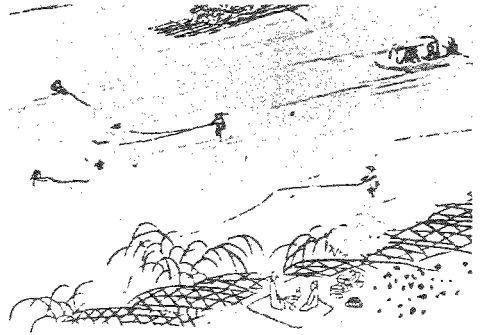
わが国における鵜飼の歴史は大変に古く、すでに七世紀の初めに鵜飼が行われていた事を、中国の地理書『隋書倭国伝』が伝えている。この様に極めて古い歴史を有する鵜飼が、何時頃から多摩川で行われたかは判



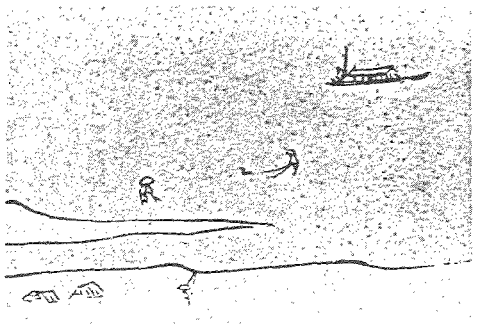
広重が描いた多摩川の鵜飼／『江戸近郊八景之内玉川秋月』部分



「鶺鴒神事」(八月)の絵／阿伎留神社「年中十二祭絵巻」より



鶺鴒の絵／『玉川遊漁の図』部分



絵図に描かれている鶺鴒／『調布玉川絵図』部分

の鶺鴒漁に接したものと思われる。この歌は、明らかに多摩川で行われた鶺鴒を詠んだもので、しかも、篝火をかざしての夜川鶺鴒の情景を描写している。

篝火を点しつつ舟を繰り出す幽邃な鶺鴒絵巻は、長良川に今でも伝わる夏の風物詩である。それは宮廷をはじめ、有力大名たちの手厚い庇護の下に、その長い伝統を継承してきた鶺鴒であるが、多摩川で行われた鶺鴒は、それとは異なる系譜の技法である。長良川などの鶺鴒を伝統的、貴族的と云うならば、多摩川のそれは極めて土俗的であり、また常民的なものとして対比される。

らぬが、少なくとも十一世紀の中頃に、多摩川で鶺鴒が行われていた形跡がある。延慶三年(一一三〇)に撰集された歌集、「夫木和歌抄」巻八の「鶺鴒河」に

かがり火の影にぞしるき玉川の

鮎ふす瀬にはひかりそひつつ

武蔵

とあり、詠歌には「裸子内親王家歌合鶺鴒川」の詞書がある。この歌合は、平安中期の治暦三年(一〇六七)と翌年の二度行われた。歌人の武蔵とあるのは、武蔵の国守と血縁のあった宮廷女官で、少女時代を武蔵の国府、即ち今の府中市に在住した経験があり、その折に多摩川

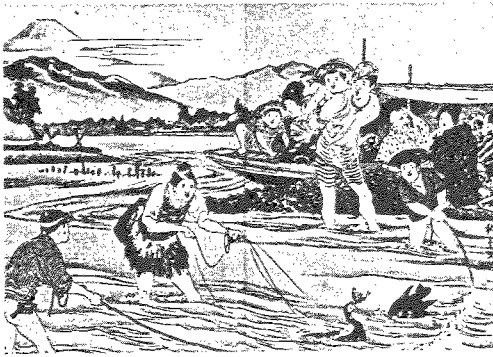
明治以前に行われた多摩川の鶺鴒については、残された資料により、おおよその輪郭を掴むことができる。

多摩川鶺鴒の実体は、長良川などに見られる伝統様式をふまえた、

所謂、「ハレ」の鶺鴒ではなく、あくまでも、「ケ」としての鶺鴒であった。多摩川流域の常民、主として半農半漁を生業とする土着民たちが数羽の鶺鴒を飼い馴らし、流れの中で細々と鶺鴒を行っていたのである。それは、他の網漁や釜漁などと同様に、鶺鴒は多摩川で行われた漁法の一つであり、漁の伝統様式として完成された長良川型の鶺鴒とは異り、中世以降、両者が似て非なる系譜の歴史を歩んできた技法で

あって、あえて双方の共通点を見い出すとすれば、鵜が魚を捕る事だけである。

同じ鵜飼とは言いながら、「ハレ」と「ケ」とではその内容に大きな違いがある。だが常民による徒鵜飼が、多摩川水系だけに限らず、古くから全国各地で行われていた。こうした地域は、北は雄物川から南は四国、九州の諸河川に及んでいる。舟鵜飼より徒鵜飼が圧倒的に多かった事実は、鵜飼漁を好む常民が行うには、様式的な舟鵜飼に比して、徒鵜飼が技術的、経済的にも簡易である事と、当時の漁撈制度を考慮する必要がある。



「多摩川鮎漁之図」／明治三十一年八月発行『風俗画報第一七五号』より

明治以前の多摩川鵜飼は、二、三羽の鵜を飼う流域の人たちが、それぞれの地先で鵜飼を行っていた。漁期が鮎の季節に限られる鵜飼は、所謂、半漁民とも言うべき人たちによって行われ、鵜の飼育や維持管理にはそれ相応の手間と費用を必要とし、鵜飼それ自体決して収益性の高い漁撈と言えるものではない。そうした点で、鵜飼は極めて遊漁的性格の強い漁撈であるが、鵜飼には採算を越えた楽しみがあり、その魅力に引かれて鵜を扱う人が多かったのである。

鵜飼は主に鮎を捕るための漁法で、多摩川の上流から下流まで広く行われた。上流水域では、羽村、秋川の五日市、浅川の日野などから下流では丸子や小杉辺りまで鵜飼が行われ、中でも立川や府中地先の水域は、最も鵜飼漁の盛んな地域であった。

多摩川で行われた鵜飼の多くが、徒による昼川であったが、一部では夜の鵜飼も行われていた。先きの『夫木和歌抄』に詠まれた平安中期の多摩川鵜飼は、まぎれもなく夜川であり、降って文政六年（一八二二）の『武蔵名勝図会』に、秋川の鵜飼について、

「……夜陰に火を焚きて鵜を使う。……」とあり、その後、一八年を経て刊行された『玉川沂源日記』（天保一三年・一八四一）にも、羽村地先での夜川鵜飼について、

「……闇の夜をも厭はずなん。又、鵜飼男が手廻をさげけるわざも、目もあやなり。……」と、夜川鵜飼の見聞をしたためている。

また浮世絵作家、安藤広重の名作、『玉川秋月』（天保八年・一八三七）に、多摩川中流域の川辺で、月夜に鵜飼をする人の姿が描かれている。こうして見ると、多摩川の鵜飼は、昼川に限らなかったことが判る。

かつて鮎の季節になると、流れに数羽の鵜を放ち、鮎を捕る光景が多摩川の各所に見られ、当時の川漁の模様を描いた絵画や図絵の中に在りし日の「ケ」の鵜飼姿を見る事ができる。

明治以降の鵜飼漁

多摩川の鵜飼は、先きにも述べた様に、長良川などの伝統的鵜匠制



多摩川の徒鵜飼。鵜使いは関戸橋南詰の料理屋、「井上亭」の主人。対岸は現在府中市の四谷あたり／大正初期「むかしの府中」より



鵜飼。手前の鵜先きが、鮎追いのシラタを引く。／多摩川・立川地先水域、板谷幸吉蔵



鵜飼漁見物の屋形船（丸芝館）／多摩川・立川地先水域、板谷幸吉蔵

度を継承した鵜飼とは、その系譜を異にしている。

だが、長い歴史を辿った多摩川の「ケ」の鵜飼が、時には將軍上覧の鵜飼漁を行ったり、また明治になって、天皇や皇族方の御前で鵜飼漁を上演することもあった。それは、多摩川鵜飼の最も華やいだ一瞬であったが、明治二十二年、新宿・立川間に甲武鉄道が開通すると、時の貴顕や多くの市民たちが、遊楽のため多摩の川辺を訪れるようになった。江戸から明治への過渡期に、一時下火になった多摩川の鵜飼は、以前にも増して盛んになり、清冽な流れと人との交りの黄金期を迎え、その隆昌は大正から昭和の初期まで続いた。

昔から、多摩川の流域で、常民の手になり細々と営まれてきた「ケ」の鵜飼は、明治後半期には、そのままの姿で見せ鵜飼に変わって行く。鵜飼をする人たちが料亭の属下に繰り込まれ、一日の清遊を楽しむ人たちの前で鵜飼漁の手さばきを披露することになり、このことが広く宣伝され、多摩川の鵜飼は天下に知られる様になった。川辺には料亭が建ち並び、都会からの客は清流で捕れた鮎料理を賞味した。昭和に入って、鮎の水揚げが年を追って少なくなり、長い伝統を誇る多摩川の鵜飼も、昭和十年頃には廃絶したのである。

多摩川の鵜飼漁

明治以後、多摩川で行われた標準的な鵜飼は、三人を一組とし、一組が二羽の鵜を使った。二羽の鵜を操る「鵜使い」がいわば鵜匠格に当たるが、多摩川ではこれを鵜匠と言わず、鵜使いと呼んだ。また鵜使いの助手を務め、鮎の追い寄せ網を持つ二名を「鵜先き」或いは「網引き」、「網持ち」、又は単に「勢子」と呼んでいる。

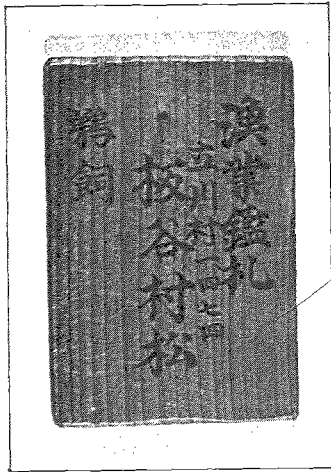
鵜使いのいで立ちは、簡単な木綿の肌着一枚を着け、六尺禪をしめる。腰には鮎用の鵜飼魚籠を下げて、日除け用に麦藁帽などを被り、両腕にはそれぞれ一羽の鵜を止まらせる。そして、足にわらじを履き脛当ての脚絆を着ける。これが当時の鵜使いの一般的な姿であるが、

料亭などでの見せ鵜飼漁では、屋号を染めぬいた印半纏をまとうこともある。

鵜使いは、鵜飼に際し、長さ七、八間、巾一尺程の細長い木綿の網の真中を、脚絆のふくらはぎの部分にくくりつけ、その両端を川の兩岸に展開した鵜先きが持っている。鵜使いは流れに入って、下流に向けて二羽の鵜を放つ。鵜使いが下流に向けて足を交互に出し、網の端を持つ鵜先きは、鵜使いの足の動きに合わせて網を徐々に下流に移動させ、シラタで流れの鮎を追い込んでいく。鵜使いが流れの上流側の頂点にあり、鵜先きはそれぞれ下流の両側に散開し、シラタは、丁度下流に向けて八の字に開いた形になる。こうして、下流に追い寄せ網を移動しながら、流れの中の鮎を追い込んだ所を鵜に捕らえさせる。鵜使いは二羽の鵜の動静を絶えず見守り、鵜が最も働き易い様に手網を操り、時には、働く鵜に元気づけの掛け声をかける。

鵜の働きを見守る鵜

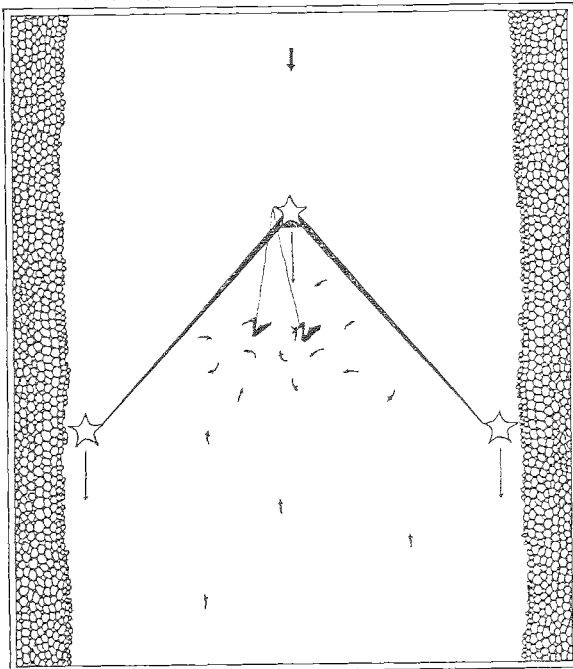
使いは、鮎を五、六匹呑み込んだ所で鵜を引き寄せ、鵜呑みにした鮎を吐き出させて、腰の魚籠に捕り入れる。鵜飼で捕れた鮎には、いずれも鵜の嘴の跡が残っている。嘴跡のあ



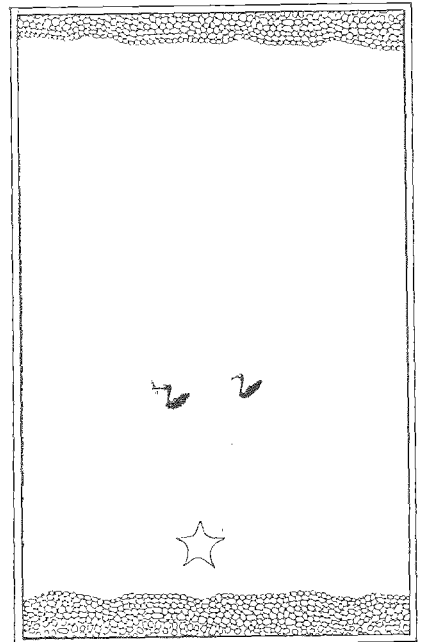
鵜飼密札 / 立川市教育委員会蔵

鵜飼漁模式図

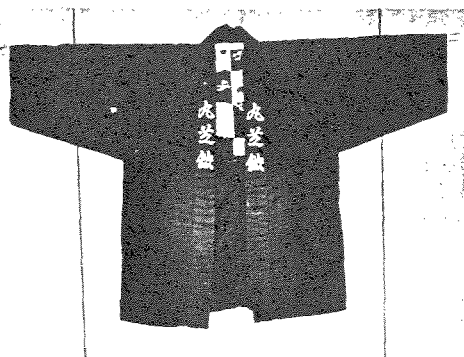
流れの中央の鵜使いが二羽の鵜を操り、川の兩岸の鵜先きが鮎追いのシラタを引く。



鵜飼漁模式図（独り使い）



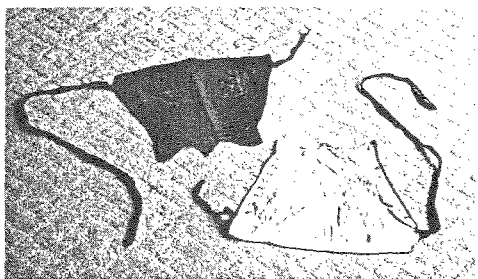
☆は漁者（鵜使い）



鵜飼漁に用いた印半纏。丸山喜右衛門の染め抜きがある。／三田鶴吉蔵



鵜飼漁の印半纏／同



鵜使いが鵜飼漁に着用した脚絆／立川市教育委員会蔵



鵜飼用の魚籠。鵜使いの腰に付ける。／府中市立郷土館蔵

鮎は、かつて貴人の食膳に供するのをはばかられたものだが、一般には、鵜が呑み込んだ鮎は即死するので、体の脂が抜けず美味であるとして珍重された。

鵜飼を行う場所は川の形状にもよるが、普通、鵜使いの膝から腰ほどの流れで行われ、時には、深さが胸まである場所で鵜飼を行う事もある。明治以降に行われた多摩川の鵜飼は、鵜使いが二人の鵜先きを伴って、シラタと言われる鮎の追い寄せ網を使う漁法が一般的に行われていた。

寛政八年（一七九六）、丸山喜右衛門の筆になる『玉川鮎獵図』に

は、多摩川中流で鵜先きを使った二組の鵜飼が描かれている。流れの下手には、川を横切って木杭を打ち並べ、杭の間に魚の行く手を遮る障害物があり、この構造物は、「堰漁」に見られる堰に大変良く似ている。これは追い寄せた魚の退路を遮断するために、葉付きの青竹や枝葉の雑木等を木杭の間に編み込んで、降り鮎の行方を遮断し、堰に留まる鮎を鵜で捕らえさせた貴重な資料である。

一方、江戸中期以降の絵図や絵画の中で、鵜先きを使わない、所謂独り使いの鵜飼漁の姿が描かれたものも多く、この時代の鵜飼の形態を伺いしめる一つの手がかりを提供している。思うに、多摩川におけ

る鵜飼の発生と伝承の中で、昼川、夜川を問わず、徒による独り鵜飼こそ、長い間に互ってこの流域で行われた「ケ」の姿であった。

鵜使いと鵜

鵜飼に用いる用具は、独り使いの場合、鵜と魚を入れる魚籠があれば足りる。明治以降、鵜使いが行う見せ鵜飼では、一人の鵜先きが鵜籠に鵜を入れて天秤棒で振り分けて担ぎ、もう一人の鵜先きが、鮎の追い寄せ網であるシラタなどの漁具を運んだ。

多摩川の鵜飼における鵜使いと鵜先きとでは、漁撈者としての格付けに厳然とした区分がある。鵜使いは、

鵜飼い漁におけるい
わば棟梁格であり、

鵜先きはその助手に
すぎない。従って、

鵜先きはいくまでも

鵜使いの指示に従い、

鵜先きの手助けのため

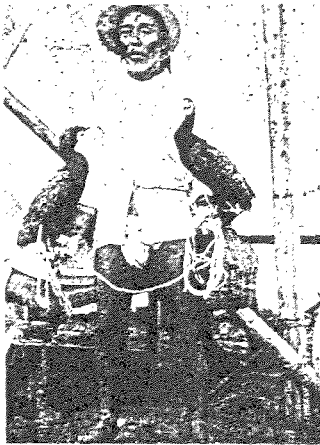
に働く。鵜先きは

素人にも務まる比較的

簡単な作業内容で

あるが、鵜使いは、

半漁民的な生業を営



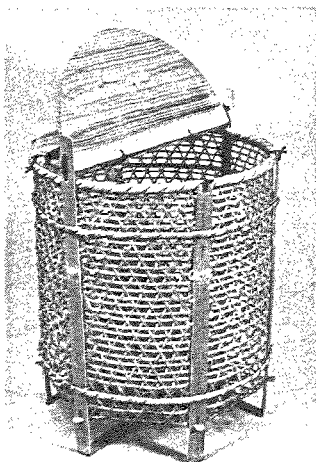
是政の老鵜使い、川辺万衛門。／
大正八年頃「むかしの府中」より

日野・玉川亭に備わっていた鵜使い(中央)と鵜先き、それに鵜の一行。／大正初期・原田重久蔵



む鵜飼の技能者であった。それら鵜使いの多くは、明治以降、料亭などの季節専従者として雇われることになり、客のある料亭からの要請により、その都度鵜を持参し、観客の前で鵜飼を行っていた。

鮎の季節が終ると、翌年の鵜飼の時季まで鵜を他所に預ける、所謂、里子に出すことが行われ、半年以上の間、鵜に里子料を付けて、神奈川や埼玉それに千葉、茨城などの地方に鵜の養育を任せていた。これは、鵜の飼育に手間を要するのと、また、鵜使いたちの多くが、料亭と契約した季節専従者であったためである。多摩川で古くから行われ



鵜を入れて運ぶ鵜籠／埼玉県立博物館蔵

※ ※ ※

ていた独り使いの鵜飼では、鵜を使う者が子飼いからの鵜を飼育し、鮎漁が終わった後は鵜を休ませ、翌年の鮎の季節まで手許において愛育していたのである。

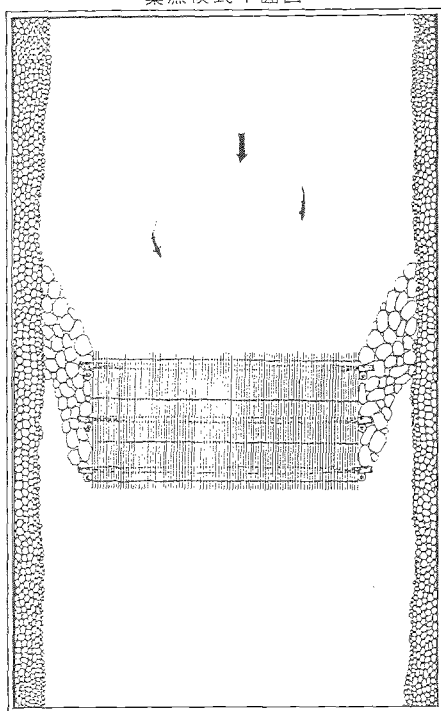
多摩川の鵜飼に使われた鵜は、カワウとウミウの二種がある。カワウはウミウに比べ、体は小さくとも利口で、鵜飼には立派に役立つが、ウミウは体も大きく、漁獲量はカワウに優るが気性が荒い。カワウ、ウミウのいずれを用いるかは、鵜を使う者の好みによる。カワウとウミウは、いずれも鵜を使う者たちが、天然の鵜を捕らえて供給する専門の業者から買い入れて、良く飼い馴らして鵜飼に使用した。

三、 築

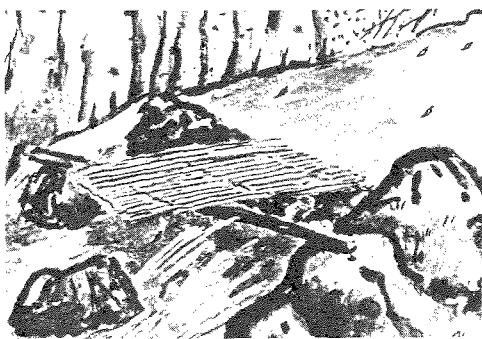
築漁は、古くから行われた漁法で、多摩川の上流及び中流、それに支流や用水路などの流れに竹簀を張り、流勢によって押し上げられた魚を捕っていた。

築の構造は、川の流れの大小や地形により様々であるが、本流に架設される築は規模が大きく、多摩川で行われた築法の中では最も大きな漁獲施設である。このため、築の架設

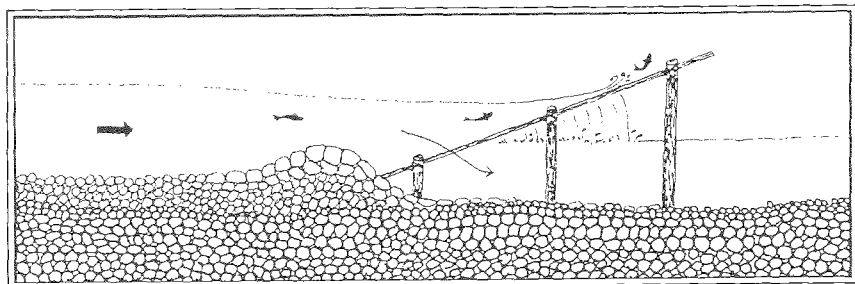
築漁模式平面図



山間部の細流に仕掛けた築
『多摩のふるさと』より



築漁断面図



には多額の費用を必要とし、また出水による流失のリスクを伴うため、有志の共同出資によって築を架けている。一方、山間の細流や中流の用水路などでは、流れの中も狭いため、個人或いは少数者が共同で架設する場合が多い。

築は、丸太杭を流れに何本も打ち並べて横木を渡し、水勢に十分耐え得る頑強な木組みを作り、さらに川石を詰めた蛇籠などで構造物の基礎を固める。同時に、川の流れを逆八の字状に窄めた先に魚の捕捉部を設け、竹簧に川水を落とし込む。簧の手前が急流となるように落差をつけると、しぼられた大量の水が一気に簧の上に落下して、竹の編み目から流れ落ちる。こうして大量の川水が濾され、流速に抗しかねた魚は竹簧の泡尻に踊り出る。

築による魚の捕捉原理は、甚だ簡単な仕掛けであるが、川水の集水構造と魚の陥穽機能を備えた築を設けるには、他の漁法とは比較にならない莫大な費用が要る。架設した築が大出水で一夜の中に流失し、出資者が大損害を蒙ったことにより、次の築架設への出資意欲も失せて、以来、その流れに築漁が跡絶えたという場合もある。

築は、夏から秋にかけて適度の出水があれば、川を降る魚を捕り尽すほど威力のある漁獲装置である。多摩川上流では、細流に簡単な築を仕掛けて岩魚や山女魚などを捕り、中流の各河川では、鮎をはじめ、ウグイやウナギ、ナマズ、コイなど、簧上の魚を総捕りにした。だが大正以降、規模の大きな築は、多摩川の本流では行われていない。一

方、農業用水路や玉川上水などの水路、それに山間の細流などの小規模な築は、ごく最近まで行われていた。数本の杭を打ち並べて簧を張り、その先に巾一尺程の陥穽用の板を設ければ、細流の築が簡単にでき上がる。

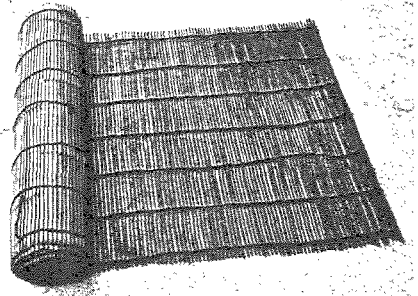
築は、流れの規模と地形などの制約によって、その形は様々である。大規模な築は、鮎の大量捕獲を前提に設けられた漁撈施設であり、川の鮎が少なくなれば、築漁は自然に消滅する。明治から大正にかけて、多摩川から次第に築が見られなくなり、かつて秋川の五日市、青梅、羽村、日野、府中地先の水域で築漁が盛んであったが、鮎をはじめとする魚が減り、また多獲が目的の築漁が規制されたことにより、この漁法は多摩川から姿を消した。

かつて、多摩川の中流域で築漁が盛んであった事が、古い記録に見られる。

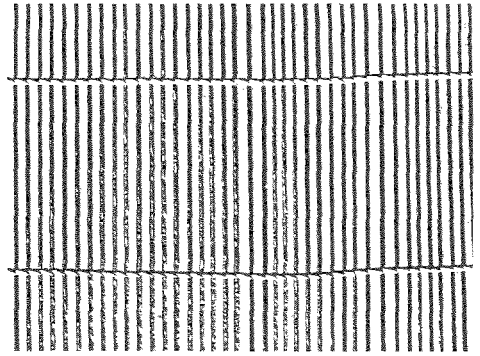
「……築、大漁なり。このことを構うるには、大河にては雑費かかりて、漁人ばかりの力及ばざるゆえ、村中一体にてこれを作る。八月に至りて洪水を待ちて、魚を捕ること夥し。鮎に限らず、川中の魚類悉く得るなり。……」 『武蔵名勝図会』文政六年（一八二三）。

「……有明の日のさやかなるに押立（府中市押立）の渡しに出でてみるに、玉川に魚築打渡して夜すがら漁れるが、桶のうちに鮎あまたあり。……」 『玉川沂源日記』寛政三年（一七九一）。

また多摩川本流で、洲に分流された瀬で行われた小規模な築については、



竹簀／調布市郷土博物館蔵



竹簀の編み目／福生市教育委員会蔵

「……又、川倉といふをはじめ、袋網、瀬干築など、目路のかぎり河づらに設けて、鮎とるわざの限りをつくしたり。……」 『玉川遊記』天保三年（一八三二・多摩川瀬田地先水域）と記している。この瀬干築は川干上げの一種である「瀬干し漁」を指すものでなく、竹簀を使って、川瀬に設けた小規模な定置築であつたと思われる。

四、堰 漁

秋の中頃になると、鮎は産卵のために川を降る。こうした落鮎を捕

るために、川に仮りの堰を設け、堰の上流部に溜った鮎を投網で捕る漁法が堰漁法で、通称「せき」と呼んでいた。堰漁法は、多摩川上流水域の青梅地区日向和田から万年橋に至る多摩川本流で、昭和三三年頃まで、降り鮎の季節になると毎年行われた。

堰漁法は、先ず、降り鮎の進路を断つ堰作りが始まる。鮎が降る頃、川岸から対岸まで、流れと直角に三、四尺間隔に丸太杭を川底に打ち込む。それから、伐り出したばかりの葉の付いた真竹を、杭の間に交互に編み込んでいく。こうして水面下の二、三寸まで竹をめぐらして、川を遮断する堰に似た構造物を作る。堰を作ると、青梅地方では「堰を入れる」という。この堰の竹は粗く編み組まれているので、川水が堰の間から流下し滞流することはない。川を仕切った緑の堰は竹の葉が流れにゆらめき、これが川を降る鮎に対し威しの効果を発揮するのである。

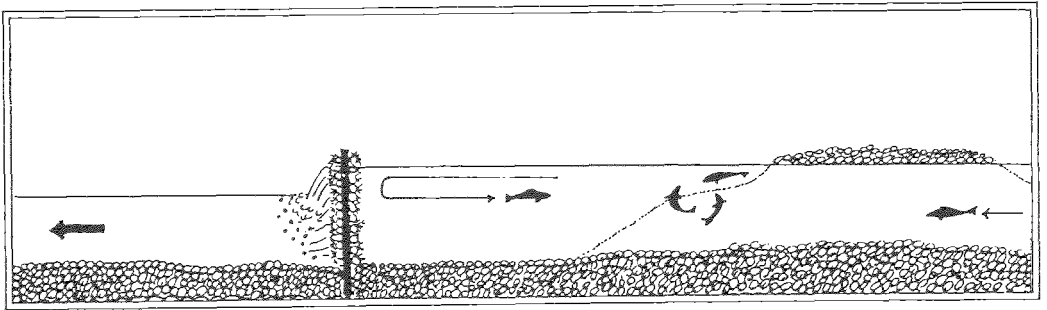
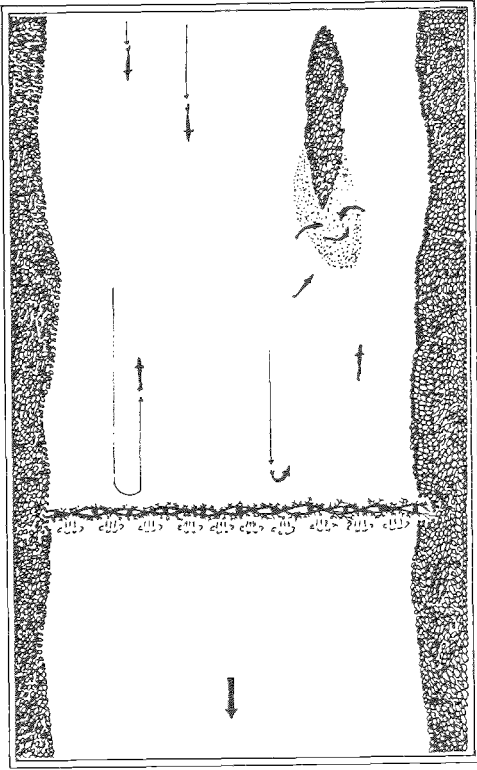
周知のように、鮎は、別称、年魚と言われる川魚で、秋に抱卵し川を降る。この時期の鮎は腹の卵を気づかい、川中の障害物を極度に避けようとする。また鮎は、本来、葦や笹などの水中で銀白色に輝く物に敏感に反応し、とっさに回避行動をとる習性がある。

産卵のため、腹仔を気づかいながら川を降る鮎にとって、堰の存在は大変な脅威である。行く手に枝葉の付いた真竹の壁が立ちほだかり、流れの中で鈍い光を放ちながらゆらめいている。鮎の下降本能も堰への恐怖には抗し難く、これを見た鮎は恐れをなして反転し、堰上の水域を回遊することになり、中には早くも浅瀬で産卵を始める鮎もいる。

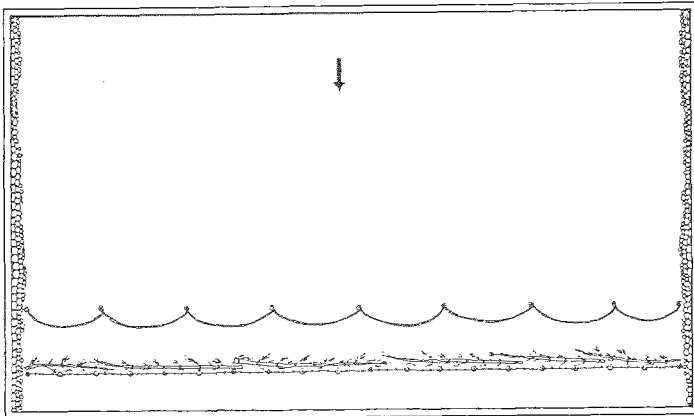
こうした溜り鮎が群れながら川岸の物蔭伝いに上下するが、そうした所を「投網」を打って捕らえ、或いは掛け鉤による「さくり」で釣り上げたり、又は「ひっかき竿」で掛け捕る。こうした堰漁は、落ち鮎の季節が終るまで続く。

堰漁法は、多摩川中流の中で比較的下流域に属する菅でも行われたが、堰漁法の漁場は多摩川本流ではなく、二ヶ領用水で行われていた。「菅の魚」によると、堰に驚いた鮎は川のへりに寄り、これを陸から投網で捕るとある。用水路で堰漁が行われたのは、多摩川本流では川幅が広く、水深も深いために堰を設けるのが難しく、支流の用水路であれば、容易に堰を設けることができたためであろう。

堰漁模式平面図（青梅地先水域）

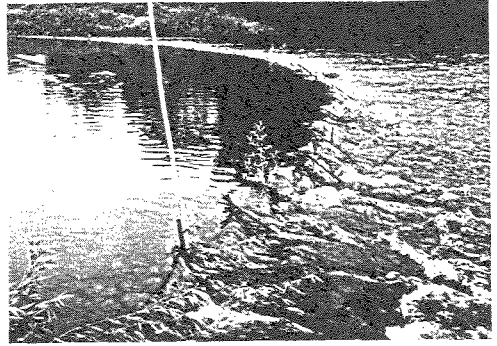


堰漁断面図

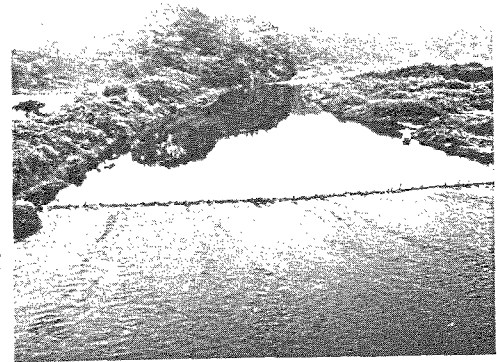


川底に木杭を打ち、仕切網を川巾いっぱい張る。直ぐ上手に葉付きの青竹を渡し、落鮎への威しを徹底させるために、上流側に木杭を打って、そこに荒縄の威し網を張っておく。

堰漁模式平面図
秋川水系・五日市地先水域



葉付きの真竹を杭に編み渡し
て落鮎を罫す／那珂川水系
・荒川 昭和五三年十月、南
那須町大里地先



多摩川の堰漁と同じ漁法
が、現在、関東の他水系
で行われている。那珂川
水系の荒川では、「鮎の
縄張り漁」とい、毎年、
落鮎の時に始まる。／
昭和五三年十月・南那須
町森田地先

二ヶ領用水では、堰漁法のことを「ズリブチ」又は「セキのズリブチ」と呼んでいた。川岸沿いのへづりに寄っている鮎に投網をぶつ事から、ズリブチと呼ばれたものである。府中や立川地先の水域で、堰漁が行われていた形跡は見当たらないが、互いに隔る上下の地域で、同様の漁法が行われていた事は大変に興味深い。

栃木県下の那珂川水系荒川では、現在でも堰漁法が毎年秋になると

盛んである。この地では、かつて多摩川で行われ、現在では過去の伝統漁法として消滅した漁法が生きている。荒川では堰漁法を「鮎の縄張り」又は「瀬張り」と呼び、鮎を捕るのに舟から投網を打つ。堰の作り方や漁撈の方法など、多摩川の場合と変りはないが、一方では過去に消滅し、他方は現在でも盛んに行われている。

五、手摺み漁

人間が流れに生息する魚を捕らえる技法の中で、最も簡単な漁法と言えば、道具を用いずに素手で行うものである。こうした手摺み漁は各河川で見られるが、太古以来、変る事なく続けられてきた最も古い漁である。多摩川水系の手摺み漁は、水域の各所で行われ、徒漁や素潜りによる潜水漁などがあり、また、対象魚別による漁法にも、多少の差異が認められる。

多摩川上流地域では、手摺みで山女魚やウグイ、鰻などを素手で捕り、この漁法を「ガマ握り」と呼んでいる。岩の下などに潜む魚を探り当てて手摺みするが、ガマとは流れの岩の下のえぐれを指す地方名である。一方、鰻の手摺みも行われ、春先に石の下に産みつけられた「アーコ」と称する鰻の卵を探し、その近くに卵を見守る親鰻を手摺みにする。

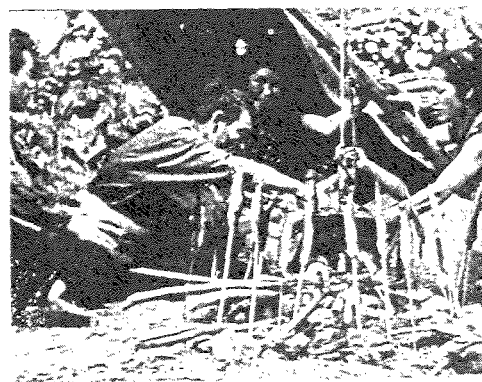
多摩川の中流域では、鮎を中心とする手摺み漁が盛んであり、この漁法は「鮎押し」、「瀬押し」と呼ばれ、また総て魚を手摺みにする

のを「探り」とも「手探り」とも呼んでいる。

鮎の手摺み漁は、真夏の蒸し暑い夜に行われる。この頃は川の水温が上るため、鮎などの魚が川岸の浅瀬に沢山集まり涼んでいる。そうした所を、数名が川の流心側から近づき、両手で水の中を探りながら魚を掴み捕る。中には麦藁を束ねたもので、瀬の鮎を捕りおさえることもある。鮎の手摺み漁は、闇夜や川水が濁り気味の時がよく捕れる。また「探り」は、川岸の石の間や草の下に入り込んでいる魚を探り、鯉や鮒、鰻、鮓、ギバチなどを素手で捕らえる。この手摺み漁では、ギバチに注意しないとひどい目に会う。ギバチの胸と背には角質化した



奥多摩の秋川溪谷で山女魚やウグイを手摺みする山窩／『サンカの社会資料篇』より



手摺みで捕った川魚を焼く山窩／『サンカの社会資料篇』より

棘鱗があり、強くおさえるとギバチが鱗を立て、それが手に突き刺さって怪我をする。

手摺みの要領は、魚の潜む場所を手で探り、両手で魚の頭と腹にそろりと手を押し、頃合いを見計らって一気に掴み捕る。微妙な技術を要する手摺み漁は、技能の巧拙による個人差が大きい。昔、多摩川流域の各地には、手摺み漁に天賦の才能を発揮した、探りの名人といわれる人たちが何人もいた。

また、潜水による手摺み漁も、特異な技能を必要とするが、多摩川の中流から下流水域では、素潜りで魚を捕っていた。寒中でも水に潜って鯉などの魚を捕り、それを生業にする者があり、冷水に耐えるため、彼等は赤犬の肉を食べて体を温めたと言われる。

素潜りといい、手摺みといい、水中の魚を捕らえるには、それなりの技能が必要で、誰しもが行える漁法ではない。素手の漁は最も原始的な漁法であり、そうした技能は漁撈者個人の資質如何にある。自然の生活を続けてきた山窩などには、そうした資質が濃厚に継承されており、彼等は水中の魚を易々と掴み捕る。

六、川干し漁

多摩川の本流及び支流、さらに農業用水路などでは、流れの一部を堰止め、その区域の水を干し上げたり、掻き出して、中の魚を捕る漁法が古くから行われていた。川干しは年中行われたが、夏から秋にか



かい掘り。水田地帯を流れる水路を堰止めて、中の水を汲み出して魚を捕る。昭和二十七年・八王子市小宮地区。「写真でつづる八王子の歴史」より

多摩川での川干し漁法はおよそ二種に大別される。一つは多摩川本流での川干しと、別に本流以外の支流や用水路など、細流での干し上げ漁がある。両者は、流れの水を干して魚を捕る事に変わりはないが、それぞれに水域の形状が異なるため、干し上げ漁の内容に相違が見られる。

多摩川の支流水域における川干し漁法は「干上げ」とか「干かす」、「かい掘り」、「けー掘り」、「川狩り」と様々な呼称があるが、いずれも支流水域の比較的小さな流れで行われるものである。この漁法

けてが多く、この漁法は、主に流域の農民や子供たちが、遊びを兼ねて行っていた。

川干し漁に適した場所は流れの状況に左右され、また、堰止めた上流の水を迂回できるような場所が選ばれる。川干し漁で捕れる魚は、多摩川水系に生息する殆どの魚種を対象にしており、最上流部のイワナをはじめ、ヤマメ、カジカ、アユ、ウグイ、カマツカ、ニゴイ、ウナギ、ナマズ、ギバチ、コイ、フナ、ドジョウなど多彩である。

の行われた地域は、水路の通じる水田地帯の平野部や山間地の細流などで、地形的にも、またそこに生息する魚も様々である。

魚の居そうな場所の上手を堰止め、下流の水をバケツや桶などで汲み出し中の魚を捕り上げるが、予め上流の水を導く回し堀を掘り、唐楯やジョレンなどで堰を設けて流れを遮断する。水田地帯ではドジョウやナマズ、ウナギ、フナなどが捕れ、上流の山間部ではイワナ、ヤマメ、カジカなどが捕れる。

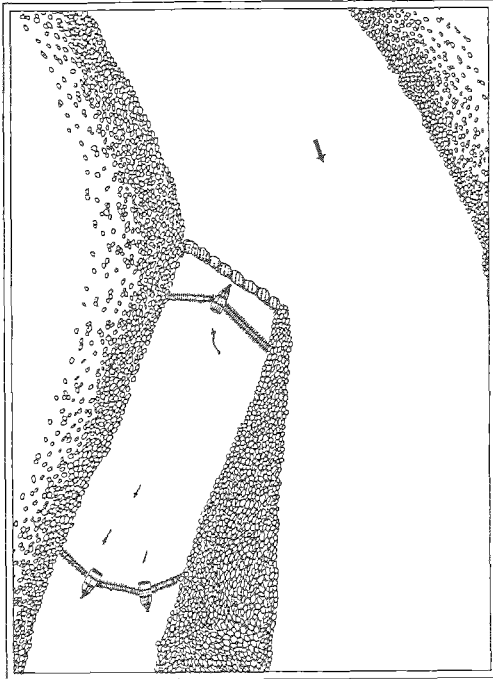
一方、多摩川本流では、主として中流の水域を中心に行われた川干し漁があり、「瀬干し」と呼ばれている。瀬干しは、流れが二分され、川に中洲などがある場所で行われる。洲の一方の上手から川岸にかけて堰止め、その下流を干し上げて中の魚を捕る。

堰を設けるには、ジョレンなどで砂礫を掻き集め、砂礫を入れたカマスで流れを塞いだり、或いは木杭と大板を用いて水を遮断し、細部を砂礫で塞ぐなど、身近な材料を用いて、手早やく水を止める。瀬の水を断つとたちまち水が引き、魚が下手の溜りに集まってくるのを網で掬い捕る。また予め雑魚笥を設置しておき、その中に入る魚を引きあげる。

瀬干しにおける魚の捕り上げは、地域によって様々で、簀や雑魚笥それに網などの用具が用いられる。瀬干しでは主に瀬に生息する魚が捕れ、ウグイをはじめ、カジカ、ウナギ、ギバチ、アユなどである。瀬干し漁は、流域の農民や少年たちが数人で行い、捕れた魚を等分にした。

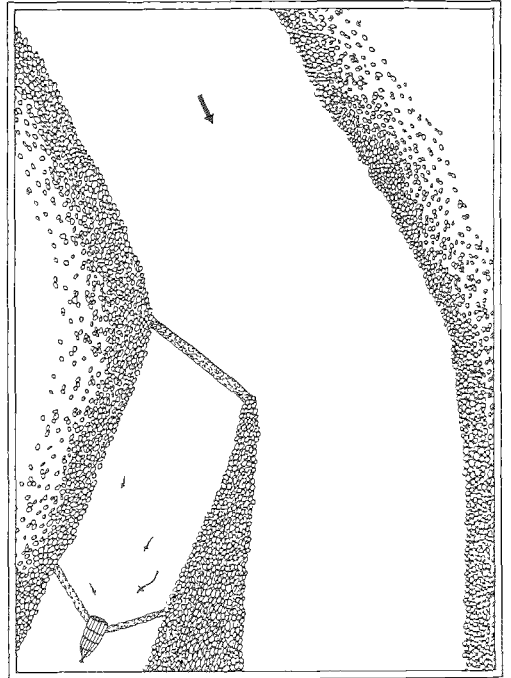
瀬干し図(その2)

上手を土や砂利を入れたカマス俵で止め、下流は竹藪で囲い雑魚笥を仕掛ける。



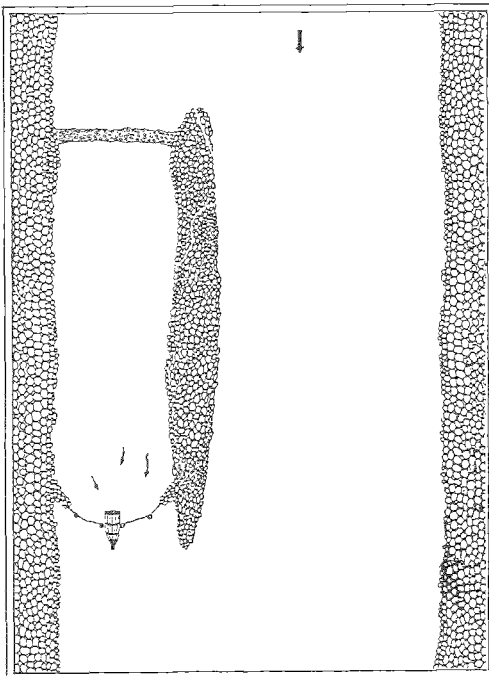
瀬干し図(その1)

上手を砂利で止め、下流に雑魚笥を仕掛ける。



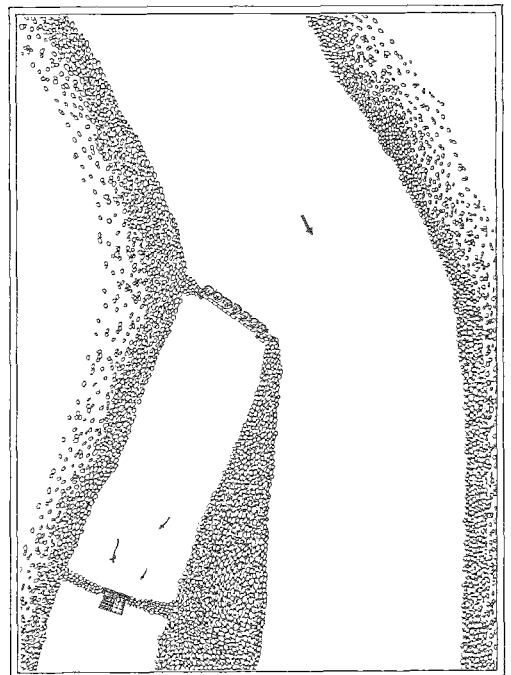
瀬干し図(その4)

上手を砂利で止め、下流に網を張って雑魚笥を仕掛ける。

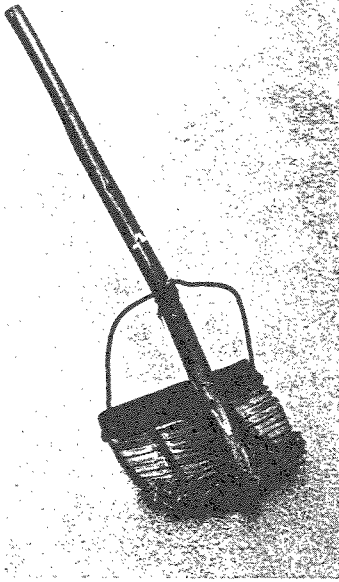


瀬干し図(その3)

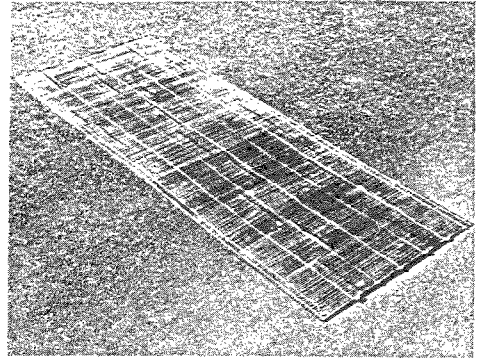
上手に梯子を渡し、石入りの背負い籠を並べ、下流に金網を仕掛ける。



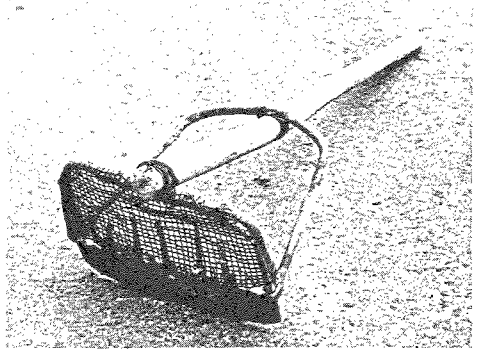
シ・レン／五日市町郷土館蔵



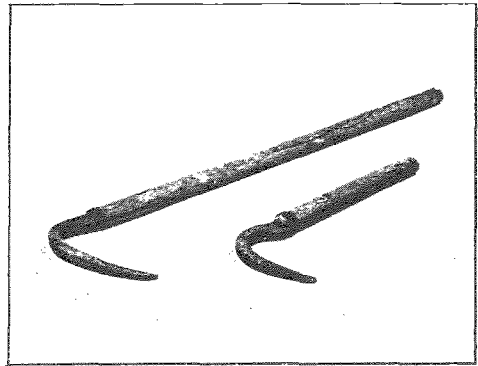
竹簀／福生市教育委員会蔵



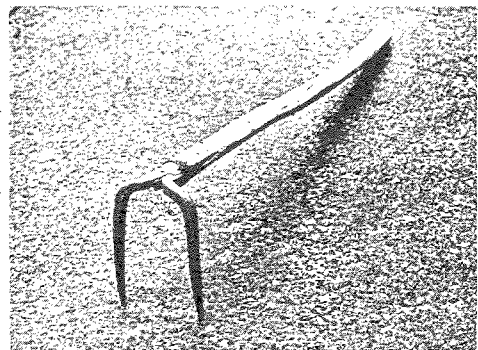
シ・レン／鈴木由太郎蔵



川原などでの石掘りに使
利な砂利鎌（一本爪）／
鈴木由太郎蔵



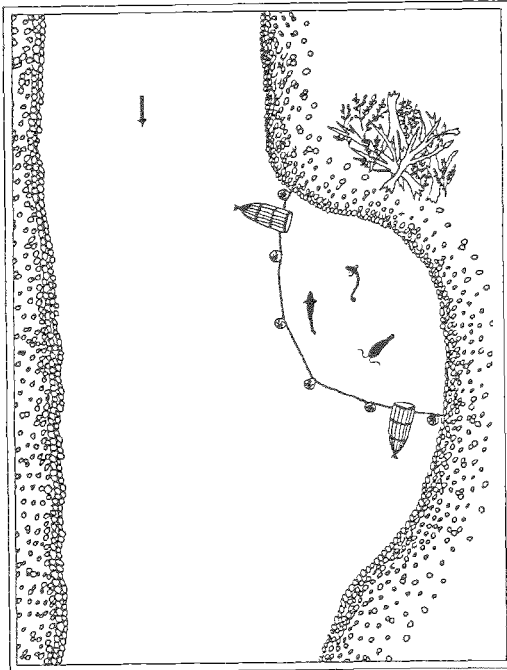
砂利鎌（二本爪）／青梅市
郷土博物館蔵



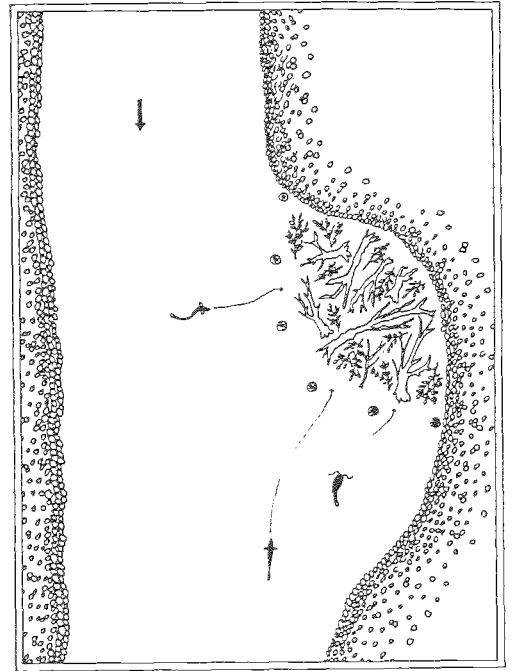
原始的な漁法である川干し漁は、古くから多摩川流域で行われていた。川干し漁は刺突漁や手摺み漁と同じく、先史時代から継承された、化石的漁法の一つである。

七、柴漬け

魚は変温動物であり、体温が外界の影響を直接に受けるため、厳冬期には活動が鈍くなる。川の水温が下がると、魚たちは岩や障害物の間に身を潜めようとするが、魚たちのこうした習性を利用して、多摩川では柴漬け漁が行われた。柴漬け漁は、別称「漬け柴」とか「かり



周りを竹簀や網で囲み、そこに雑魚などを仕掛け、材料を取り除いて魚を捕る。



魚の罠になる材料を投入して入りを待つ。

こみ」、「伏漬け」、「かいつけ」、「笹ぶて」などと呼び、いずれも水域の或る個所に人為的な魚の罠を設け、そこに入った魚を捕り上げる漁法で、極めて歴史の古い原始的な漁法である。

柴漬け漁は、多摩川中、下流域の本、支流を問わず、流れの静かな水深五、六尺前後の場所で行われる。そこに枝付きの雑木や竹、笹などを幾重にも水中に投入し、水面まで積み上げて魚の罠を作り、そのまま一ヶ月ほど放置しておく。そうすると、魚がその間に潜り込むので、時機を見て中の魚を捕り上げる。

柴漬け漁では主にコイ、フナ、ウグイ、ウナギ、ナマズ、ギバチなどが捕れ、小向地方の用水路では、椎の枝を伏せてテナガエビなどを捕っている。いずれも十二月から二月までの漁で、主に多摩川中流から下流水域で行われた漁法である。

柴漬け漁における魚の捕り上げは、魚が潜入している粗朶や竹、笹類の周りを竹簀もしくは網で取り囲み、所によっては囲みの一部に雑魚などを仕掛ける。次に、投げ込んだ材料を取り除き、中に潜っている魚を手網で掬い上げたり、或いは簀で突くか、ひっかき竿などで掛け捕る。そして前に沈めた物を取り除く際、一部の魚が仕掛けた雑魚筈に入る。また投入した沈積物の周りを囲うのに刺し網を使い、逃げようとする魚を網に掛けるなど、捕採の方法も様々である。

漬け漁の中で最も簡単な漁法は、葉の付いた竹や笹の枝を束ねて、水中に浸しておき、その下に集まるスジエビやモエビなどの川海老類

を叉手網で掬い捕る漁法があり、多摩川中、下流域の池沼や止水域では、四季を通じて行われた。

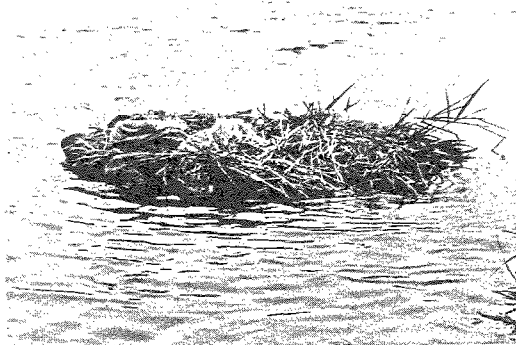
羽村周辺では、冬期、流れが入り込んだワンドなどの入口に木杭を打ち、それに横棒を渡して、魚寄せのために、水面に笹を浮かべて水面を暗くしておく。さらにこの淀みに、流心に対して八の字状に笹を張り、その先に雑魚笈を仕掛けておく。こうした仕掛により魚を誘引し、筥に入ったのを捕る「冬川倉」と呼ぶ漁法がある。最終捕採の点から考えれば、筥漁法の範疇に入るかも知れぬが、漬け漁的な技法を併せもつ漁法といえよう。

寒期の魚たちが、少しでも水温の高い場所を求め、その中に潜もうとする習性を利用した柴漬け漁は、「石倉」と共通する点が多い。漬け漁には粗朶類が使われ、石倉漁では石を用いるが、いずれも寒中に、魚が物の中に潜む習性を利用した点に変わりはない。

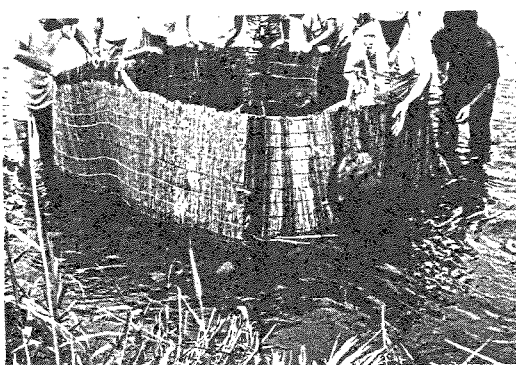
八、石倉

石倉漁は、川の中に石積み塚を作り、その中に入る魚を捕らえる陷阱漁法である。多摩川では上流から中流域にかけて行われ、夏期の漁法を「石倉」と呼び、冬期のそれを「川倉」と称している。また漁期に関わりなく、石倉もしくは「石川倉」とも呼び、必ずしも石積み漁法の呼称は一定していない。石倉や川倉の倉は、石を積み上げた恰好が、蔵に似ている事から名付けられたものである。

石倉漁は、素朴、且つ大変に原始的な漁法であり、多摩川水系では



草などで覆った石倉の頂部／昭和五六年八月・多摩川日野地先水域での「伝統漁法実演」



石倉を竹簀で囲み、石を取り除く。／昭和五八年八月

古くから行われていた。天保三年（一八三二）の『玉川遊記』には、「川倉」と記された漁法が世田谷地先の水域で行われていたと記述が見られるが、多摩川における石倉漁の歴史は、これより遙かに古く、漁法の特徴からして、その起源は先史時代に遡るものであろう。

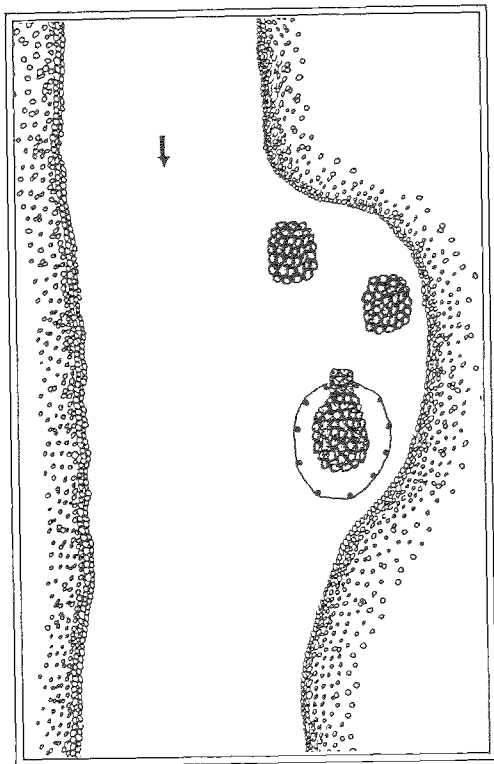
石倉漁を行う場所は、多摩川が湾曲した場所の、水流の緩やかな深さ三、四尺の水域で行う。石倉作りは、先づ砂礫の川底を少し掘り下げ、一坪程の長方形もしくは正方形に定めた川底から水面まで、大石を積

み上げる。これが石倉で、石の積み方や手順の点では、夏も冬も変らない。

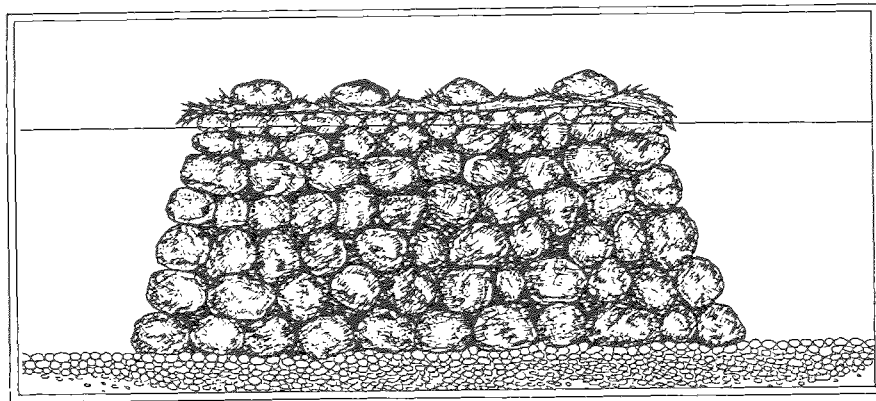
こうした石積みの上を、草や藁などで覆って中を暗くしておき、二、三週間そのままの状態で放置しておくと、その間に、様々な魚族が大石の間に身を潜める。石倉漁は、四季を通じて魚が好んで石の間に入り込む習性を利用した漁法であり、大石と大石の狭い所には、雑多な魚が棲み着いている。

石や障害物などの隙間に身を潜める習性は、多くの川魚に見られるもので、鰻をはじめ鯰、ギバチ、カジカ、ウグイ、コイ、フナ、オイカワ、それに山女魚などの魚族は、好んで石の間に潜もうとする。時には大石に水垢が付着すると、鮎さえも石積みの隙間に入り込んでい

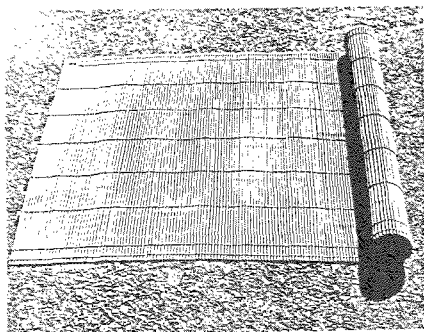
石倉漁様式平面図



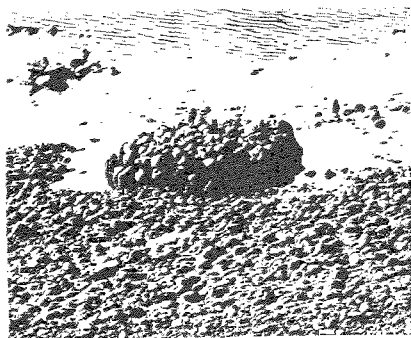
石倉側面図



竹簀／福生市教育委員会蔵



現在でも九州各地の河川に見られる石倉漁法。現地ではこの漁法を「鱧塚」と呼んでいる。昭和五七年三月・川棚川・長崎県川棚町



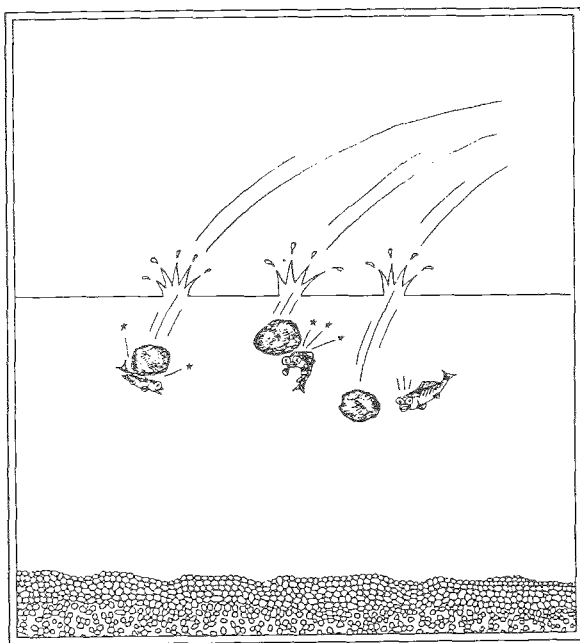
る事がある。また地方によっては、予め藁束にサナギ粉を入れたものを積み石の中に埋め込んでおき、これが発する匂いで流れの魚を誘う方法も行われていた。

魚の捕り上げは、石積みの設置後、数週間及至一ヶ月程で、石倉に魚が居着いた頃を見計らって行う。先ず石倉の周囲に竹簧を張りめぐらし、中の魚が逃げないようにする。或いは石積みと網で囲む場合もある。そして、囲みの一方に石をつめた背負い籠、もしくは雑魚笥などを仕掛けておく。次に、その反対側から石倉の大石を一つ一つ取り除いて行き、中の魚を捕り上げる。魚の捕り上げには、ひっかき竿で掛けたり、簀で突いたり、また掬い網を使うなど様々である。その間に、鰻などが大石の隙間を伝って、石を入れた背負い籠や雑魚笥に入るのを捕り上げる。

九、石ぶち

石ぶちはその名の示す如く、水中の魚に石を投げて捕るという大変原始的な漁法で、多摩川水系では広く行われていた。石ぶちの対象魚は、ウグイ、オイカワ、アユ、カジカ、フナ、タナゴなどで、主に流域の子供たちが遊びに行い、石ぶちは地域によって「石打ち」とも、「石ぶつつけ」とも呼ばれていた。多摩川流域で石ぶちと言われる漁法には、三つの異なる技法がある。

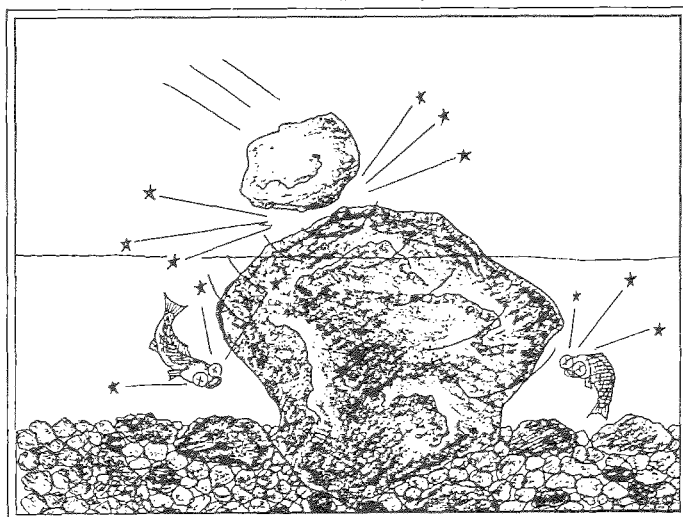
石を投げて魚を捕る図



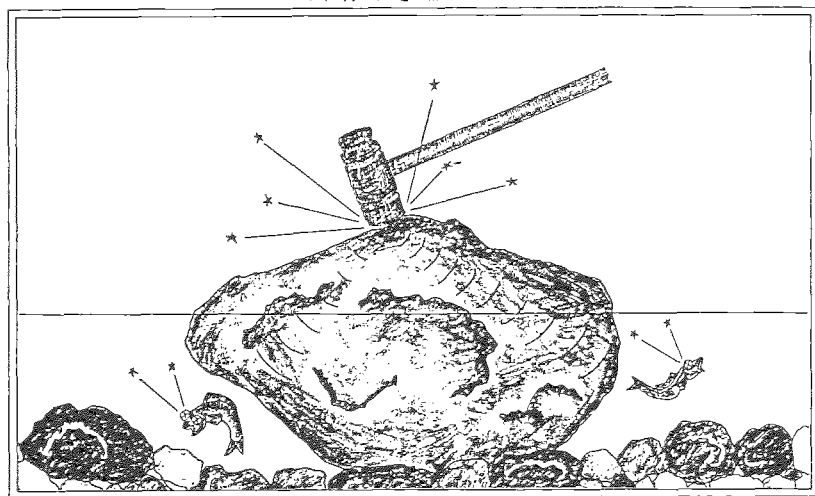
先ず第一の石ぶちでは、水中を遊泳する魚に石や礫を投げつけ、それが魚を直撃して浮き上る所を捕らえる。この石ぶちは、流域の子供達が川遊びに行っていたもので、漁法と言うには甚だ他愛もないが、昔はこうした方法でも魚が捕れたのである。石ぶちは多摩川の全水域に及び、夏は浅瀬の魚に石を投げ、冬期は魚の集まる日だまりの深みに石を投げ、石ぶちは季節を問わず行われた。

第二の石ぶち漁は、冬の渇水期に行われる。その頃は川水が減り、魚は流れの大石や岩の隙間に潜んで、静かに春を待っている。こうし

石ぶち漁模式図



玄翁叩き漁模式図



た岩蔭には魚が寄り集まっているが、魚の動きも夏と違って大変に鈍い。そうした魚の潜む岩を目がけて、大石を思い切り叩きつけるのである。強烈な衝撃波が岩を伝って水中に抜けると、岩蔭の魚は突然のショックで仮死状態となり、腹を上にして水面に浮き上がってくる。

そうした魚を用意の蕎麦搦いや手網で捕り上げるが、程なく魚は生気を取り戻す。寒中、薄氷の張った川の中で行う石ぶち漁は、水しぶきを浴びて全身濡れねずみとなるが、石を叩きつける動作の繰り返しで体が温まり、それ程の寒さを感じない。

第三の石ぶちは、先きの石叩きと原理的には同じであるが、大石の代りに大玄翁を用いる。この漁法も石ぶちと言い、別に「玄翁ぶち」、「玄翁はたき」とも呼んでいる。魚の潜む大石に、大型のハンマーを思いきり振り下し、その衝撃で魚が浮き上がる点は、先きの大石の場合と変りはない。

大石や大玄翁による石ぶち漁は、冬期、日の出直後の寒い日が最も効果的で、その頃は、岩の下に潜む魚たちもじっとして動かない。そうした場所を次々と叩き、浮き上がった魚を掬い捕るのである。

多摩川水系の伝統漁法には、簡単な技法でしかも原始的なものが少なくないが、この石ぶち漁法は手摺み

漁と同様に、最も原始的な漁法である。水中の魚を捕らえるために石を用いる石ぶち漁には、かつて漁具を持たなかった人間が、とっさに魚に対処した本能的な原始行為の名残りを見ることが出来る。

一〇、ブツタイ

編んだ竹簧の一方の端を交錯させ、それに真竹の柄を取り付けた掬い具で、多摩川流域では古くから使われた漁具である。ブツタイは、地域によって「ブツテ」或いは「ブツテエ」、「ブツター」、「ブツテアミ」、「サデ」とも呼ばれ、これを用いて魚を捕る事を「ブツテ掬い」と称している。

ブツタイは、主に多摩川流域を流れる小川や水田地帯の農用水路、それに池や沼での魚掬いなどに用いたが、ブツタイの使用区域は多摩川の全水域に及んでいる。従って、ブツタイで捕る魚は、上流から下流に生息する魚族を含み、ヤマメ、カジカ、ウグイを始め、アユ、ウナギ、ギバチ、ナマズ、フナ、タナゴ、ドジョウなどがあり、他にスジエビやモエビもブツタイで掬う。

小川などの掬い漁では、子供たちがブツタイを用いて遊び漁を行い、流れに向かってブツタイを仕掛け、少し上手より足で追い寄せて中に入った魚を捕り上げる。魚掬いに比べて竹簧のブツタイは多少水切れが悪いが、こうした用具で昔は沢山の魚が捕れた。この竹簧製のブツタイに代り、後年、網や金網を用いた掬い具が使われる様になった。



ブツタイで魚を捕る。谷川では杉丸太を擬子に大石を動かすと、下に潜む山女魚やウグイが驚いてブツタイに入る。／渡辺嘉平画『多摩のふるさと』より

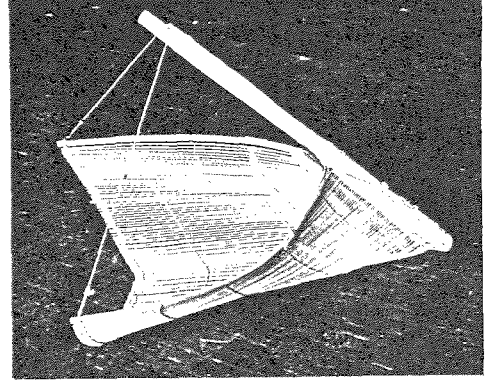
竹の柄が長いブツタイも使われ、この用具は、池や沼などのエビ掬いに便利であった。また川水が増水した時、水勢を避けて川岸近くに寄ってきた魚をブツタイで掬い捕り、この作業は大変に危険であるが、増水時には魚が良く捕れることから、流域の人たちが行っていたものである。

竹簧ブツタイは、真竹を細かく割いたものを細い棕櫚縄で編んで簧を作り、二つ折りにした一方の端を組み合せ、その部分に竹の柄を当

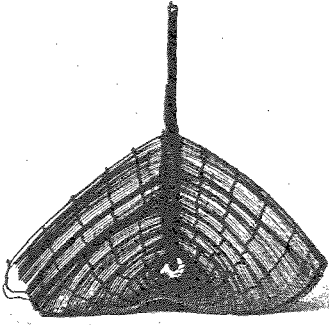


ブツタイを使った魚掬い。水田地帯を流れる水路では、昔からブツタイが使われた。上手から魚を追込み、ブツタイに入った所を掬い上げるが、良く捕れる。／漁人は筆者・岡部利和撮影

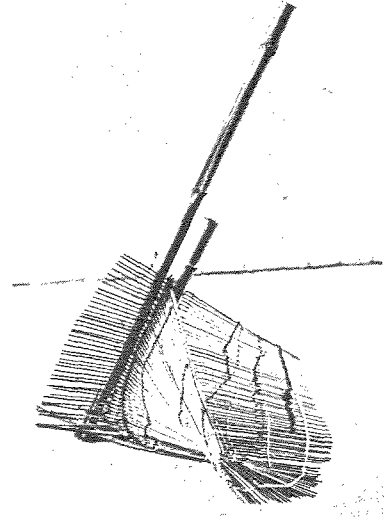
ブツタイ／青州市郷土博物館蔵



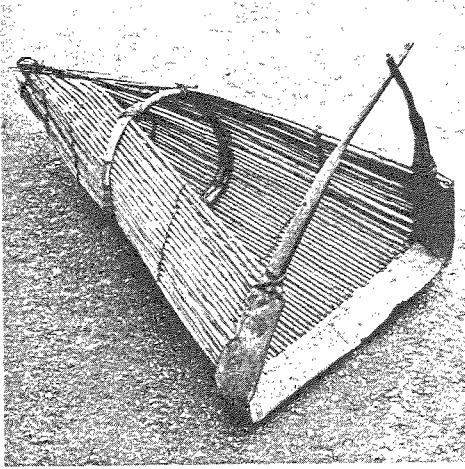
ブツタイ／大田区立郷土館蔵



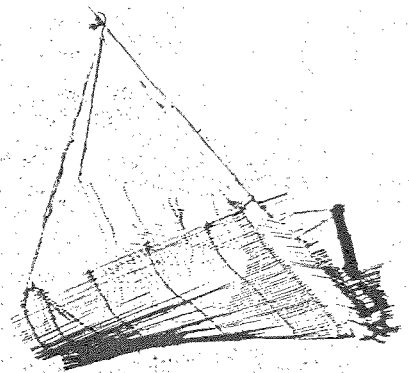
ブツタイ／五日市町郷土館蔵



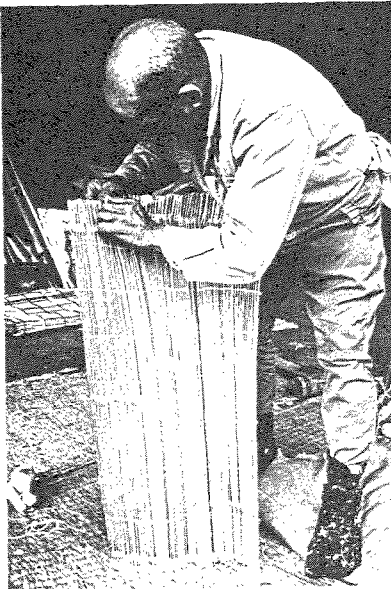
篠丸竹を編んだ掬い具。入り口の縁は薄鉄板を取り付け、荒い掬い動作にも耐える頑丈な構造になっている。
／調布市郷土博物館

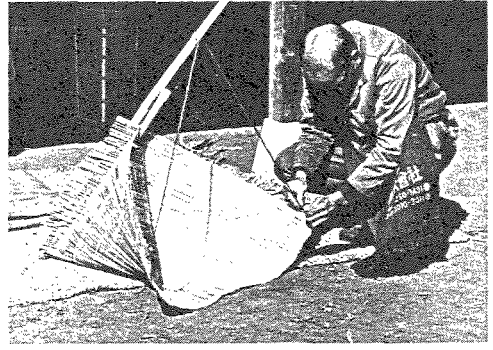


ブツタイ／福生市教育委員会蔵

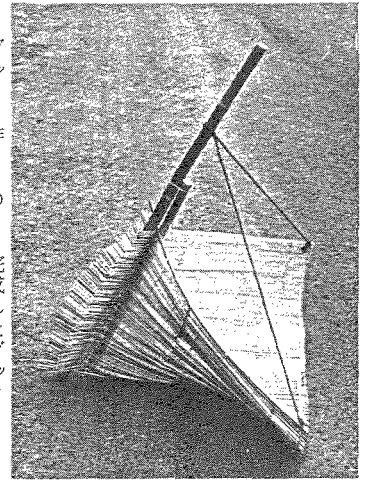


ブツタイ作り3の1 編み上げた竹簧の一方の端を交互に組み込む／昭和五年三月 製作者・小林勝太郎





ブツタイ作り3の2 支えの棕櫚繩を張りブツタイ作りが完了



ブツタイ作り3の3 完成したブツタイ

てがい竹簧の両端に棕櫚繩を張る。漁撈者たちはブツタイを自製するが、籠職人が作ったのを購入して用いた。この種の竹簧製掬い具は、多摩川水系に限らず、昔は何処でも魚捕りに使われた。当時、撚糸を一目一目編んで作る網は貴重であり、それに比べて、竹製の掬い具は入手の容易な漁具であり、ブツタイは多摩川水系で魚の掬い捕りに広く使われていた。

一一、泥鰌掘り

秋になると多摩川流域の水田地帯では、農用水路の堰を抜き、今

まで田圃に張られた水を落す。春から夏の終りにかけて、水田や用水路に生息していた子鰻や泥鰌は、一斉に水路の深みに集まってくる。水路の溜りも次第に水が引いて、泥鰌は泥土の中に潜り、子鰻がヒタヒタ水にあえいでいる。そうした所を農民や少年たちが目ざとく見つけて、掬い網や笊などで捕り尽すが、人目に触れない場所では、浅い泥水の中で一塊りとなって蠢いている小魚たちは、やがて水鳥や鳥の餌になる。

こうした水路の泥土に潜んだ泥鰌を、鍬やシャベルで掘りおこせば簡単に捕れるが、泥鰌掘りは用具を必要としない程で、両手の指先で泥土を掘り返しても容易に捕れる。泥鰌は有機質の腐蝕土を好む魚で、そうした場所にわずかな水が残っていれば、その区域を中心に泥の中には泥鰌がいる。

水が引いた泥土の表面には小さな穴が点在し、その下に泥鰌が潜んでいる。表面の小穴は泥中に潜んだ泥鰌の呼吸孔で、そうした小穴を探し、泥の中にいる泥鰌の見当をつけて掘り捕るのである。

泥土の中に潜む泥鰌を掘るという極めて原始的な漁法は、用具を必要とせず、また誰でも簡単にできる。そのため、水路の水が落ちると、農民や子供たちが鍬や素手で泥底を掘り返す光景が各所で見られた。この素材な魚は秋の終りから初冬にかけて行われ、掘り捕った泥鰌を自家の菜料にしたものである。

この時季の泥鰌は、体に脂肪がのって美味であり、泥鰌鍋や泥鰌汁、

それに丸ごと串刺にして囲炉裏の火で焼き、生醬油で食べたりした。この泥鰌掘りは、泥土の表面を次々と掘り起し、その中の泥鰌を拾い上げるので、別名「泥鰌拾い」とも呼んでいた。

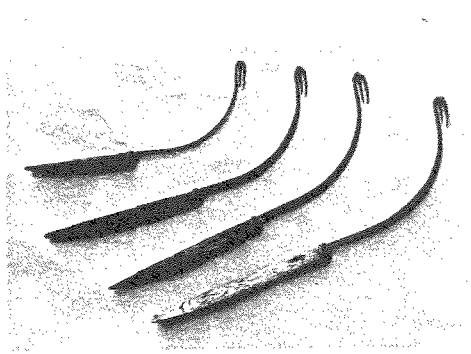
一一一、 鰻 搔 ぎ

鰻搔きは、多摩川の中、下流などの水域で、川底の泥中に潜む鰻を、「鰻鎌」と呼ぶ漁具を用いて搔き捕る漁法である。

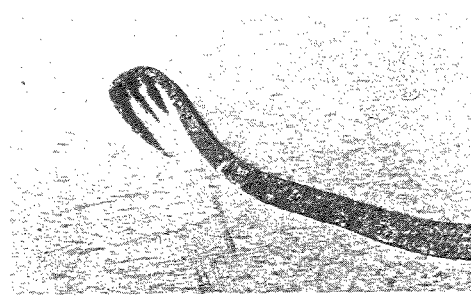
昔、多摩川本流の川底は石や礫が多く、支流や農業用水路などでは、流れの一部に泥質の川底があり、そうした場所に鰻が潜んでいた。鰻搔きの季節は春の彼岸から十月頃までで、立川から下流の水域で行われたが、さらに河口から内湾に及び、下流ほど鰻搔きが盛んであった。鰻搔きに用いる鰻鎌は、別に「鰻掛け」、或いは「爪」と呼ぶ地域もあり、普通には彎曲した先に三本の鋭い掛け鉤があり、この部分で泥中の鰻を搔き捕るのである。鍛鉄製の鰻鎌の端に木製の柄を取り付け、使用する場所によって、柄の長さは三尺から二間半までのものが



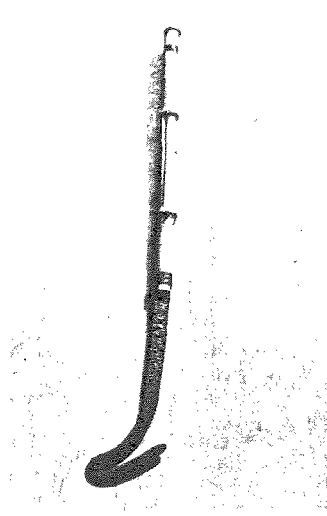
江戸時代の鰻搔きの様子を
描いた絵／国芳筆『東都宮
戸川の図』部分



鰻鎌／大田区立郷土博物館蔵



中爪が二本の鰻鎌。普通は
中爪が一本の鰻鎌が多く見
られる中で、複爪構造は多
摩川水系でも珍らしい。／
府中市立郷土館蔵

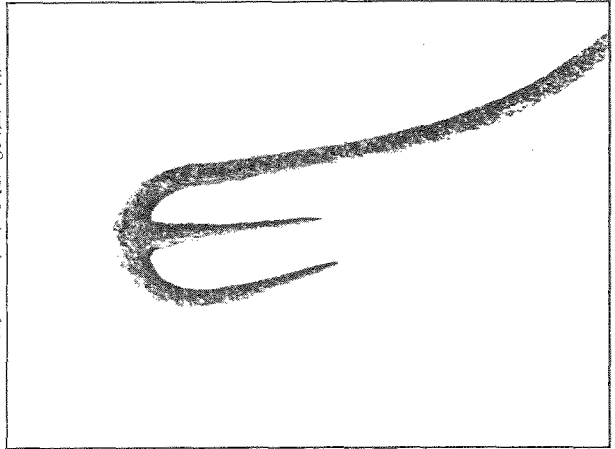


中爪のない扁平型の鰻鎌。礫掘りの川底
を搔くのに適した構造になっている。／
府中市立郷土館蔵

ある。

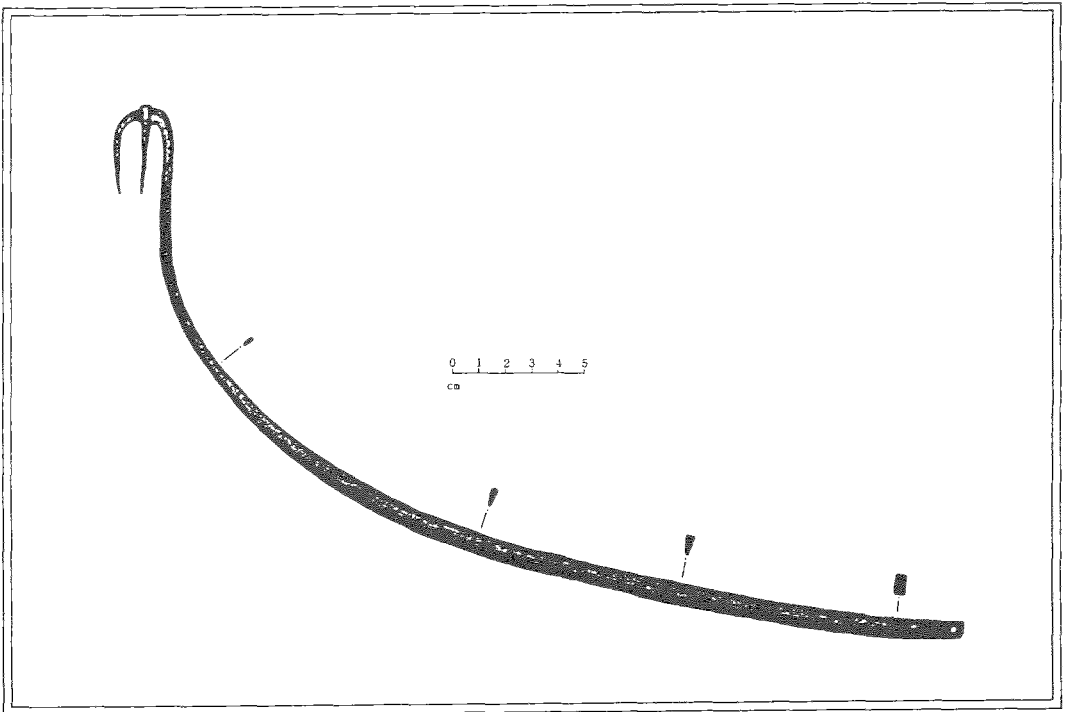
鰻搔きは、徒による「徒搔き」と舟からの「いざり搔き」の二種があるが、徒搔きの場合には、胸まで浸る深場所搔く事もあり、多摩川水系ではないが、国芳の筆になる「東都宮戸川之図」の鰻搔き漁は、そうした模様を伝えている。

鰻搔きは鰻のいそいな川底に見当をつけて搔くが、百回搔いても捕れぬ場合があり、また十回搔いて数匹の鰻を得る事もある。漁果は必ずしも一定してはいないが、昔、多摩川の汽水域一帯の川底に鰻が沢山生息していた頃、季節になると、川漁師は鰻搔きだけで生計を立てている人もいた。



鰻の頭部。鋭い外爪と中爪が泥中の鰻を刺し捕らえる。／立川市教育委員会蔵

鰻 図 (立川市教育委員会蔵)



一三、 蜆 漁

多摩川中、下流域の細流には、泥質の川底に蜆が沢山生息していた。蜆は昔から身体に良いとされ、川辺の人たちは蜆を捕って蜆汁にして食べていた。

こうした蜆を捕るのに、蕎麦箆で掬ったり、ジョレンで川底を掻いて蜆を捕り、所によっては、「カイホリ」と呼ぶ五本爪の鉄製の貝掘り用具を用いた。多摩川の蜆捕りは、流域の人たちが自家の菜料にするためと、職漁者が生業として蜆捕りを行う場合とがあった。

職漁者が行う蜆漁は、主に「腰巻漁」と呼ばれる漁法で大量の蜆を捕っていた。腰巻漁は、大正末期頃まで多摩川下流水域で行われ、蜆が潜む川底を掻き捕るために、多数の鉄爪を取り付けた金網籠型の用具を用いて、漁撈者が川の中に立ち込んで引き、泥土と一緒に掻き捕った蜆を篩で選別した。

「新修世田谷区史」によると、明治二十年頃の職漁者が行った蜆捕りは、

「……構造二尺程ノ丸キ籠ヲ造リ四尺位ノ鉄爪ヲ付ケ歩行ニテ曳、又ハ手ニテ掘取ル。……」、と記している。また、「蜆ジョレン」を使つての蜆漁も行われていた。

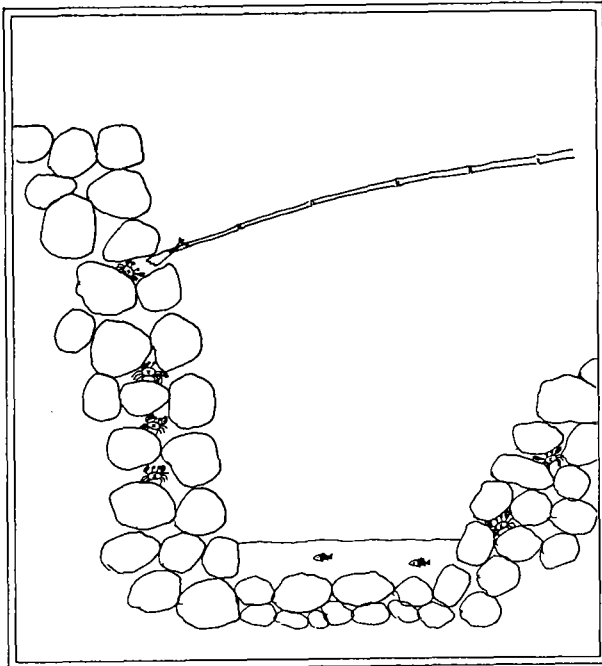
一四、 沢蟹捕り

昔、多摩川の上、中流域一帯には、水路の傍の石垣回りなどには沢

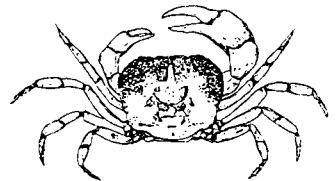
蟹が沢山生息しており、こうした沢蟹を捕るために、少年たちが遊びに沢蟹捕りをした。

沢蟹は、水辺近くの石の多い場所に棲み、石の蔭やその間に穴を掘り、そこを罅にしている。そうした蟹の潜む場所へ、

沢蟹捕り模式断面図

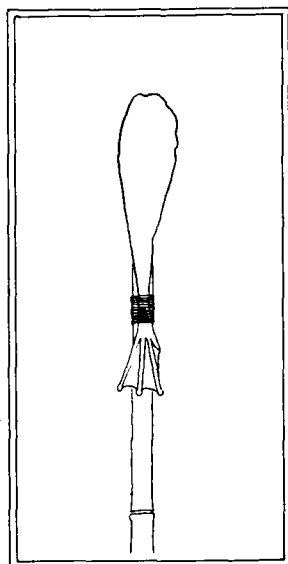


サワガニ



沢など石の多い水の綺麗な細流に生息し、夜間に餌をあさる。昔は多摩川の中流域でも、湧水がある所に見られたが、農業の使用や水質汚濁で消滅し、現在では、上流の一部に生息している。

沢蟹捕り仕掛け



篠竿の先に蛙の太股のむき身をくくり付ける

誘いの餌を付けた篠の棒を挿し込んで、それに喰いついてきた蟹を捕り上げる。

沢蟹捕りに使う餌は、雨蛙など小型の蛙の股肉を使う。蛙の脚の皮を剥ぎ、篠竹の先にささ身色の肉を木綿糸で結び、これを使って石と石との間に潜んでいる蟹を探るのである。

餌に寄せられた蟹が、両方の缺で肉片に喰いついて離れない。そうした蟹を篠竹を静かに寄せて捕り上げる。「ひっこくり」と同様に、子供たちが行った童謡的世界の遊び漁であり、かつての古き良き時代を髣髴させる。



一五、毒魚

毒魚は、多摩川上流地域の支流などで、人知れず密やかに行われた非合法の漁法である。毒魚は別に「毒もみ」、或いは「毒流し」とも言い、魚毒を用いるため、川の中に生息する魚を根こそぎに捕り尽し

てしまう。

多摩川で毒魚の行われた水域は、支流などの比較的に流水量の少ない山間部の細流である。本流は水量が多いために、毒材も莫大な量が必要で、到底その確保はおぼつかない。それに本流周辺は人家が多く、毒魚の現場は人目につきやすい。そうしたことから、毒魚の行われる場所は、決して人里離れた山間の細流である。

毒魚は、上流から毒の素を流れて溶かし、有毒成分を含む水が下流の魚を麻痺させたり、また毒で死亡して浮き上がった所を捕り上げる。

毒魚は禁止漁法であるため、例え山間の細流であっても、漁撈者は人目を避けながら迅速に行う。

毒魚に使われる材料は、山椒の実や樹皮が用いられ、川石で細かく砕いてその液汁を川に流す。また、山椒の他に藁灰や石灰、それにエゴの実、クルミの皮なども使われた。

魚は微量の毒にもすぐ浮き上がり、これを捕り上げて綺麗な水に放しておく、間もなく蘇生する。浮いた魚の捕り上げには、手網や掬い網、ブツタイなどを用い、また予め下流の流れに簀を張っておき、毒に当って流れた魚を捕ることもある。毒魚に用いる毒材は、昭和になって、苛性ソーダや青酸加里なども用いられている。

毒魚で捕れる魚は、主に山女魚や鰻、ウグイなどの細流に生息する魚族で、毒水は成魚はおろか、稚魚や魚の餌である水生昆虫なども根こそぎ死滅させる。毒魚が行われた流れは生態系が破壊され、再び元

の状態に戻るには数年以上の年月がかかると言われている。

毒漁とは異なるが、電気や爆薬を用いて川の魚を捕る事も、一部の水域で行われた。電気漁はバッテリーを持参して水中に放電し、その水域の魚が浮上したのを捕り上げるが、また、ダイナマイト等の爆薬を淵に投げ込み、魚捕りをする者もいた。爆薬による漁法は、奥多摩ダムの建設当時、上流水域に多く見られたものである。



附 編 多摩川水系漁法一覽表

※ 筌 漁 法

7	6	5	4	3	2	1	
鮫	追い込み漁	雑魚鮫	鵜縄もじとり	追い込みもじ漁	しら	瀬張	漁法
		上りどう 下りどう		上り 下り	鮎しら漁 堰止め網漁	もじ、もじ漁、ア いどう、瀬張網、 網漁、瀬張網、も じつめつ、しめつ き、鮎瀬張網、 縄漁	漁法の別称
ナマズ	ウグイ、オイカワ、 フナなど	川魚の総てを対象	アユ	アユ	アユ	アユ	対象魚
中流域の水田地帯の 用水路	ワンド (浅川水系)	全水域	中流域	中流域 深場の前後の瀬	中流域の瀬 秋川水系では五日市 まで行われた	中流を中心にして 下傾斜のゆるい瀬	漁場
五月から七 月	年間	年間 (但し各漁法 別に漁期が 異なる)	六月から九 月	六月から九 月	七月下旬か ら十一月	六月上旬か ら十月	漁期
大型の雑魚 (単舌)	雑魚筌 (単舌)	雑魚筌 (単舌・一 部に複舌)	もじ(無舌)	もじ(無舌)	もじ(無舌)	もじ(無舌)	捕採
竹簀	竹簀 シ・レン	竹簀など	仕切網 魚追いの 鵜縄	仕切網 魚追いの叩 き棒	しら 部屋網	おかざり 威し縄 部屋網	その他
主に農民	主に農民	職漁者から 一般漁撈者 まで	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民	漁撈者
仕掛けは下りどう		汎用性の高い雑魚鮫 は様々な漁法に使わ れている	強制的陥穽漁法 江戸期	強制的陥穽漁法	瀬張と同じく上納鮎 の漁法	上納鮎の漁法・江戸 期多摩川水系で最も発 達した	摘要

15	14	13	12	11	10	9	8	
泥 鱒 笊	鮒 笊	鰻 笊	山 女 魚 笊	桶 笊	天 王 笊	ド ン ド ン	鰈 笊	漁 法
		鰻もじ もじり	へら、どう、オケ、 ヨリオケ	鉢伏せ 桶伏せ 樽伏せ	箱伏せ		カジツカどう	漁法の別称
ドジョウ	フナ、タナゴなど	ウナギ	降りヤマメ	主にウグイで、オイ カワも捕る	主にウグイ、他にオ イカワ、カジカ、コ イ、ナマズなど	シマドジョウ	カジカ	対象魚
中、下流の水田地帯 の水田と用水路	中、下流域の水田地 帯を流れる用水路	上、中、下流及び支 流の瀬	上流とその支流	中流との上、下 瀬などの深場の上 手の瀬	中流との上、下 瀬の上手の瀬	中流域 瀬	中流域との上、下 の川底が礫の瀬	漁場
五月から十 月、八月が 盛期	三月から十 月	五月から十 月、八月が 盛期	十月中旬か ら十一月上 旬	八月から十 二月	八月から十 二月	四月から五 月	年間 特に三月か ら十一月	漁期
泥罎笊 (単舌)	鮒笊又は雑 魚笊 (単舌)	鰻笊 簞編み一復舌 筥編み一単舌	山女魚笊 (無舌)	桶笊 (単舌)	箱笊 (単舌)	雑魚笊 (単舌)	鰈笊又は雑 魚笊 (単舌)	捕 採 使用 漁具
誘引装餌	誘引に装餌 する事もある	誘引装餌が 多い		誘引装餌	誘引装餌	一尺×六尺 の長板		その他
農民や流域 住民、子供	主に農民や 老人、子供	職漁者 半漁民 一般漁撈者	上流域の住 民	職漁者 半漁民 一般漁撈者	職漁者 半漁民 一般漁撈者	半漁民 農民	主に一般漁 撈者及び少 年	漁撈者
容易な漁法、広域的 に行われた	容易な漁法	広域的な漁法	竹筒笊に次ぐ簡単な 筥構造	笊が桶や樽からブリ キ製に変わる		人工急流に魚を寄せ る	容易な漁法	摘 要

網漁法

2	1	
山女魚投網	鮎投網	漁法
	網ぶち、投げ網、網打ち、打ち網、提網	漁法の別称
ヤマメ イワナ	アユ	対象魚
源流、上流水域の瀬と淵	中流とその上、下	漁場
三月から十月	六月から十月	漁期
投網	投網	捕採
	箱眼鏡と舟も使う	その他
上流域の住民及び半漁民	職漁者 半漁民 一般漁撈者	漁撈者
	徒打、舟打、昼投網、夜網、追い川、向え打ち、見打ち、めっぼう、などがある。	摘要

19	18	17	16
ビン 絞	蟹 絞	竹 筒 魚	鯉 絞
ガラス絞		鮠筒 筒っぼ ポーポー	
小ブナ、モロコ、タナゴ、モツゴ、ウグイ、スジエビなど	モクズガニ	ウナギ	コイ
中、下流域の用水路や池、沼	下流水域の瀬	下流から汽水域、さらに内湾	下流水域
春から秋	十一月	五月から八月	四月から十月
ガラス釜 (単舌)	蟹釜 (無舌)	竹筒釜 (無舌)	鯉用蟹釜 (単舌)
誘引装餌		舟	誘引装餌
流域の少年	職漁者	職漁者	職漁者
安易な漁法で、昭和初期以後、遊び漁として行われた	産卵に降海するカニを釜で捕る	最も単純な構造の釜	

10	9	8	7	6	5	4	3	漁法	
白魚地引網	鱒地引網	寄せ網	ヨリオケ	瀬付き	マルタ投網	鯉投網	雑魚投網	漁法	
引網、地曳き、白魚とり		寄せ川、巻網、廻し網、地曳網、大漁（おおりょう）	ヨリオケ漁	リッキン、ツッキン、ツッキン、瀬付け	のクキ、ハヤ、クキ、ハヤ、クキ、ハヤ、クキ、ハヤ、クキ、ハヤ		網ぶち、投げ網、網打ち、打ち網、提網	漁法の別称	
シラウオ	サクラマス	アユ、ウグイ、オイカワ、コイ、フナなど、江戸期にはサクラマス	ウグイ	ウグイ、マルタウグイ（下流）	マルタウグイ	コイ	ウグイ、オイカワ、モツゴ、ニゴイなど	対象魚	
下流水域	下流水域	中流水域 水深三、四尺の瀬	中流水域の瀬に作つた人工産卵床	中流とその上、下の人工産卵床（瀬）	下流水域	中、下流水域	中、下流水域	漁場	
十二月中旬から五月下旬満潮時	五月から六月	六月から九月	四月下旬から五月上旬	三月下旬から五月上旬	四月中旬から五月	年間	年間	漁期	
白魚地引網	地引網	雑魚釜、投網、罟み刺網、ひつかき竿	掬い手網	投網	投網	投網	投網	捕採	使用漁具
舟一艘又は二艘の場合がある		シラタ仕切網、竹簀	巻き蓆	シロレン砂利鎌、砂利篩い	舟	舟	舟も使う	その他	
職漁者 半漁民	職漁者 半漁民	主に農民	半漁民	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民 一般漁撈者	漁撈者	
丸子から河口		共同漁撈 二、三十人で行なう	青梅地先水域	技術を要する漁法	粗目の投網	粗目の投網	徒打、舟打、追い川、見打、向え打ち、めっぽう、などがある。	摘要	

19	18	17	16	15	14	13	12	11
張 網	跳 網	掬 い 網	海 老 掬 い	板 も み	ゴ リ 網 漁	ペ ラ 網 漁	追 羽 根 棹 漁	鵜 繩
	飛び網、 ね込み、 跳ねかし、 受け網	ザッコ網		カジツカ掬い		朝鮮網、 朝鮮 ペラ	ハヤ追い	鵜繩漁、 鮎鵜繩漁、 ハネッピキ
ウグイ、 オイカワな ど	アユ	魚	モエビ、 スジエビな どの川エビ類	カジカ	ゴリ。ヨシノボリな どハゼ科の魚	アユ、ウグイ、 オイ カワなど	ウグイ	アユ、ウグイ、 コイ、 ニゴイなど
中流域の淵など深場 所の上、下	中流水域、 前後の瀬、 水深三尺	上流から下流域の支 流や用水路、池、沼 など本流を除く全水 域	中、下流域の細流や 用水路、池、沼など	上、中流の瀬	下流水域の瀬	中流とその上、下の 水域	中流とその上、下 水深二、三尺の瀬	中流とその上、下の 水深二、三尺の瀬
十一月から 三月 夜間漁(夜 がけ朝あげ)	七月から 十月	冬期以外	年間 十二月から 二月が盛期	年間	五月から十 月	年間	三月から十 一月	三月から十 一月
刺網、網目 の異なる三 反の刺網を 用いる	掬い受け網 (大型の叉 手網)	掬い網	掬い網、 ブ ツタイ	掬い網、 ブ ツタイ	太米布地の 掬い具	巻き捕り刺 網	又手網、半 円型掬い網	又手網、半 円型掬い網、 投網
	ウラジロな どの追い寄 せ具			追い寄せの 揉み板	石付きの追 い寄せ縄	ペラ	追羽根棹	鵜繩
職漁者	主に農民	流域の一般 住民、少年	農民の一般 流域の一般 住民	流域住民	職漁者 半漁民	職漁者	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民
魚の摂餌習性と行動 を利用した漁法	共同漁、十人前後 で行なう				大正末期まで、砂利 採取で川底が変り廃 絶	大正末に多摩川に渡 来	魚追いに技術を要す	魚追いに技術を要す

27	26	25	24	23	22	21	20	
ハヤ刺網	鱒刺網	鮎刺網	刺網	巻網	巻どり	(置濁り時)網	置網	漁法
目刺し							刺網	漁法の別称
産卵期のウグイ	サクラマス	アユ	ウグイ、フナ	ウグイ、オイカワなど の深場に集まる魚を対象	ウグイ、オイカワ	ウグイ、オイカワ	アユ、ウグイ、オイカワ	対象魚
中流の瀬	上流水域及びその少し下流	中流水域の水深が二尺前後の急流	中流水域の瀬	中流水域、沈床や淵などの深場に集まる魚を対象	中流水域、湧水のある川岸	中流の川岸に湧水のあるえぐれ	中流域の流れのゆるい水深五尺前後	漁場
三月から四月	五月から六月(夜がけ朝あげ)	六月から十月		冬期	降雨による濁水時	降雨による濁水時、秋に多い	アユは六月から十月、(夜がけ朝あげ)	漁期
刺網	刺網	刺網	刺網	刺網、網目の異なる三反の刺網を使用	刺網	刺網	刺網、網目の異なる三反の刺網を使用	捕採
		下流から投石で威す	竹棹で威す	投石や竹棹で威す	投石で威す			その他
職漁者 半漁民	職漁者 半漁民 一般漁撈者	職漁者	一般漁撈者	職漁者	職漁者 半漁民 一般漁撈者	職漁者 半漁民 一般漁撈者	職漁者	漁撈者
稲城地先水域			羽村地先水域		立川地先水域	立川地先水域		摘要

36	35	34	33	32	31	30	29	28
白魚掬い網	撫網	待網	受け網	鱒の跳網漁	投げ網	白魚刺網	鯉刺網	カマツカ網
なで網	なぜ網、なざ網、に ごり掬い			踊網				
シラウオ	アユ、ウグイ、コイ、 フナ、オイカワ、ウ ナギなど	ウグイ、アユ、フナ、 コイ、オイカワ、ウ ナギ、ギバチ、カジ カなど	アユ、サクラマス	サクラマス	アユ、ウグイ、オイ カワなど	シラウオ	コイ	カマツカなど
下流の汽水域	中流とその上、下、 川岸又は舟から	中流とその上、下、 川岸で行う	上流と中流の一部、 滝や堰の下	上流の滝や堰の下	中流水域とその上、 下	下流の汽水域、丸子 から河口	下流水域	中流の瀬
十二月中旬 から五月下旬 満潮時	増水時、夏 から秋が盛 ん	増水時、秋 の台風期が 盛ん	五月から十 月	五月から六 月	年間、但し アユは六月 から十月	十二月中旬 から五月下旬 満潮時	年間	年間
叉手網	又手網、長 柄の大型 網の丸い掬い	又手網、半 円型の掬い 網	又手網、四 つ手網	又手網	刺網	刺網	刺網	刺網
舟	舟からも行 なう				叩き棒で威 す	舟		
職漁者 半漁民	職漁者 半漁民 一般漁撈者	半漁民 流域住民	半漁民 農民	半漁民 農民	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民	職漁者	職漁者
	危険なこともある	危険な漁法	江戸時代に盛んに行 われた	江戸期	四国地方から移入し た漁法			昭和の初め九州から 移入した漁法

釣 漁 法

2	1	
毛鉤釣り	(溪流釣り) (餌釣り)	漁法
テンカラ	沢釣り	漁法の別称
イワナ、ヤマメ	イワナ、ヤマメ	対象魚
源流、上流水域	源流、上流水域	漁場
五月頃から九月	三月から九月	漁期
擬餌鉤 (毛鉤)	餌鉤	使用漁具
釣竿	釣竿	その他
半漁民 釣遊者	半漁民 釣遊者	漁撈者
		摘 要

39	38	37	
(遊手網) 四つ手網	白魚四つ手網	四つ手網 漁	漁法
			漁法の別称
エビなど	シラウオ	中流ではウグイ、カマ、マ、コイ、ユイ、ゼア、ボシ、ラ、ナ、フル、タ、ウ、グ、オウ、ナイ、ハギ、	対象魚
中、下流部の細流や用水路、溜りなど	下流の汽水域	中、下流水域、特に下流では盛ん	漁場
春から秋、夏が盛ん	十二月中旬から五月上旬、夜間も行なう	年間、但し中流では夏の増水期	漁期
小型四つ手網	白魚四つ手網	四つ手網、下流では大型網を使用	使用漁具
	舟、四つ手網、漁人小屋	舟も用いる	その他
流域の少年	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民 中流では一般の漁撈者	漁撈者
遊び漁	陸と舟		摘 要

11	10	9	8	7	6	5	4	3
さ く り	友 釣 り	ド ブ 釣 り	く い ば り	瀬 釣 り	打 ち 釣 り	置 鉤	流 し 鉤	ふ っ と ば し (溪 流)
見 掛 け、 テ ン カ ラ 釣 り	佃 釣 り	溜 り 釣 り、 鮎 の 毛 鉤			叩 き 釣 り、 叩 き、 ベ ッ チ ャ ン コ、 チ ロ ン チ ン 釣 り	一 本 流 し	千 本 鉤、 長 縄、 ゴ ミ 縄、 鱧 縄	
ア ユ	ア ユ	ア ユ	ウ グ イ	グ イ、 オ イ カ ワ、 ウ	ウ グ イ、 オ イ カ ワ	ウ ナ ギ、 ナ マ ズ、 ギ バ チ、 ウ グ イ、 コ イ、 ヤ マ メ、 イ ワ ナ な ど	ウ ナ ギ、 ナ マ ズ、 ギ バ チ、 ウ グ イ、 コ イ、 ニ ゴ イ、 マ ル タ ウ グ イ、 サ ク ラ マ ス	イ ワ ナ、 ヤ マ メ
中 流 と そ の 上、 下、 深 場 所	中 流 と そ の 上、 下 の 水 域、 瀬	中 流 と そ の 上、 下 の 淵	中 流 の 淵 や 沈 床 回 り の 深 場	中 流 と そ の 上、 下 の 水 域、 瀬	中 流 と そ の 上、 下 の 水 域、 瀬	上 流 か ら 下 流 の 本 支 流 水 域	上 流 か ら 下 流 の 本 支 流 水 域	源 流、 上 流 水 域
六 月 か ら 十 月 中 旬	六 月 か ら 九 月	六 月 か ら 八 月	五 月 か ら 十 月	四 月 か ら 八 月	五 月 か ら 九 月 早 朝 と 夕 方	春 か ら 秋	春 か ら 秋	五 月 か ら 八 月
さ く り 掛 け 鉤	掛 け 鉤	擬 餌 鉤 (鮎 毛 鉤)	擬 餌 鉤	擬 餌 鉤 (蚊 鉤)	擬 餌 鉤	餌 鉤	多 数 装 着 し た 餌 鉤	餌 鉤
釣 竿	友 釣 り 竿、 佃 ア ユ 使 用	ど ぶ 釣 り 竿	釣 竿	釣 竿	釣 竿		下 流 で は 舟 も 使 う	釣 竿
半 漁 民 流 域 住 民	一 部 の 流 域 住 民 及 び 都 会 か ら の 遊 漁 者	一 部 の 流 域 住 民 及 び 都 会 か ら の 遊 漁 者	流 域 住 民	流 域 住 民	流 域 住 民	流 域 住 民 と 少 年	職 漁 者 半 漁 民 流 域 住 民 及 び 少 年	半 漁 民 遊 者
	遊 漁	遊 漁、 大 正 末 頃 か ら 盛 ん に な る	遊 漁	遊 漁、 大 正 以 降 か ら 盛 ん に 行 わ れ た	遊 漁	餌 鉤 の 一 本 仕 掛 け	延 縄 式 餌 鉤 漁	

19	18	17	16	15	14	13	12	
籠釣り	(ふつとばし) (清流)	鮎釣り	按摩釣り	眼鏡釣り	マルタ釣り	鮎の置き鉤	ころがし	漁法
		浮子釣りと脈釣りが ある		眼鏡(がんきょう) めがね釣り、ひっか き、ひっかけ、ひっ かけ釣り、かき出し、 さくり、かぎばり		置鉤	ゴロビキ、引きかけ 類引き	漁法の別称
ウグイ	大型ウグイ	ウグイ	ウグイ、オイカワ	アユ	マルタウグイ	アユ	アユ	対象魚
中、下流水域、比較 的流速のある流れ	中流とその上、下、 深み手前の瀬尻	上流から下流の水域 ・瀬・淵	中流とその上、下の 瀬	中流とその上、下の 水域、瀬や淵	丸子堰下	中流の瀬	中流とその上、下の 水域、瀬および淵	漁場
春から秋	五月から九 月	年間	夏期	六月から十 月	四月中旬か ら五月上旬	六月から九 月	盛夏から秋	漁期
餌鉤	餌鉤	餌鉤	餌鉤もしくは 擬餌鉤	掛け鉤	掛け鉤	掛け鉤	掛け鉤	捕採
釣竿 寄せ餌籠、 釣竿	釣竿	釣竿	釣竿	箱眼鏡 ひっかき竿	釣竿		ころがし竿	その他
流域住民	流域住民	流域住民	流域住民、 少年	職漁者 半漁民	流域住民	流域住民と 少年	半漁民 遊漁者	漁撈者
遊漁	遊漁	遊漁	遊漁	漁場によりゴロタ、 テッポウ、ナガレ、 メガネなどの漁法が ある				摘 要

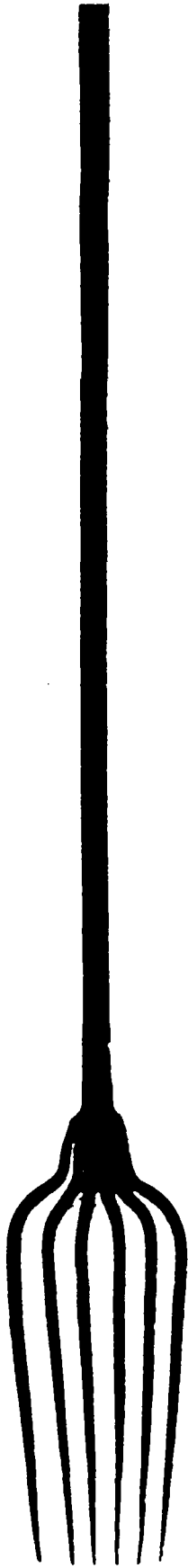
28	27	26	25	24	23	22	21	20
数珠子釣り	ひっこくり	穴釣り	小物釣り	とびつき	鯰釣り	鯰釣り (叩き漁法)	ぶっこみ釣り	鯉釣り
ツッコ釣り、ツッコ	ひっこくり	鰻釣り、ヘゴ釣り	ヤマベ釣り、タナゴ釣り、フナ釣り、クチボソ釣り、モロコ釣り		ぶっこみ釣り	ポッカカン釣り、鯰の		ぶっこみ釣り、打ち込み釣り
ウナギ	ウグイ、アユ	ウナギ (穴ウナギ)	オイカワ、タナゴ、フナ、モツゴ、モロコなど	ナマズ、ウナギ	ナマズ、ギバチ	ナマズ	カジカ、カマツカナ	コイ
下流の汽水域から内湾	中流とその上、下、沈床回りなどの深場所	上流から下流の全域、沈床、蛇籠などの石の間	中、下流域の細流、池、沼	中、下流域の細流、用水路	中、下流域、水田地帯の用水路	中、下流域の水田地帯の用水路	中流とその上、下の水域	中、下流域の深場
夏期	夏期	年間、但し五月から十月が盛期	年間、春から秋が盛ん	夏期	六月から八月、降雨の濁水時	六月から八月、早朝から夕方、夜間	夏期	年間、梅雨期の朝夕が盛期、夜間も行う
装飾した数珠子 (無鉤)	くくり用の馬素など (無鉤)	餌鉤	餌鉤	餌鉤	餌鉤	餌鉤	餌鉤	餌鉤
舟も用いる		穴釣り竿	竹竿	固定竿	竹竿	竹竿	竹竿、或は無竿	釣竿
職漁者	少年	職漁者 半漁民 少年 流域住民	少年 流域住民	少年 農民 流域住民	少年 農民 流域住民	少年 農民 流域住民	流域の少年	流域住民
	遊漁	地獄鉤、又は鰻鉤	遊漁	遊漁	遊漁	遊漁	川遊びの一環として行った遊び漁	遊漁
						日中では降雨後の濁水時、遊漁		

刺突漁法

3	2	1		
雑魚突き	鯀突き	岩山女魚突き魚	漁法	
突き、銚突き	カジツカ突き、カジツカ捕り	突き	漁法の別称	
ウグイ、オイカワ、フナなど	カジカ	イワナ、ヤマメ	対象魚	
上流から下流とその支流、主に瀬	上、中流及び下流の一部、川石の瀬	源流、上流とその支流水域	漁場	
五月から十月、夏が盛期	年間、盛期は夏	夏期とその前後、夜間も行う	漁期	
簞	簞	簞	捕	使用漁具
箱眼鏡	箱眼鏡	箱眼鏡、夜は松明、カテラ	採	その他
流域住民	主に流域の少年、流域住民	源流及び上流域の住民	漁撈者	
	簡単な漁法		摘要	

30	29		
食用蛙捕り	手長蝦釣り	漁法	
		漁法の別称	
ウシガエル	テナガエビ	対象魚	
中、下流の用水路	中、下流の止水域、池、沼、砂利穴	漁場	
五月から九月	五月から六月、盛期は梅雨期	漁期	
掛け鉤	餌鉤	捕	使用漁具
竹竿	竹竿	採	その他
職漁者半漁民	流域住民及び少年	漁撈者	
	遊漁	摘要	

9	8	7	6	5	4
鉄 砲 鉋	火 振 り	泥 鰯 刺 し	潜 り 突 き	マル タ 突 き	鯉 突 き
	夜振り、しぶり、ぶつ とし、火ほり、夜とほ	ドリ、ウツキ、ドジ、 ウブツ、サシ、ドジ、 ウブチ、ブツトシ、シ ウ、火振り、ドジ、ウ 打ち		見突き、のぞき突き	見突き、のぞき突き
コイ、フナ、ナマ ズ、ウグイなど	ウナギ、ナマズ、 ギバチ、フナ、コ イ、ウグイ、ニゴ イ、カマツカなど	ドジ、ウ	コイ、フナ、ウグイ、 ナマズなど	マルタウグイ	コイ
中、下流水域	上流から下流及び支 流など全水域	中、下流域の水田地 帯、早苗田	中、下流域の深場	下流水域	下流水域
夏期	夏期とその 前後	五月から六 月、夕方か ら夜	夏期とその 前後	四月から五 月	年間、特に 冬
鉄砲鉋	箆	ドジ、ウ突 き	箆	大型箆	大型箆
水中眼鏡	照明具	照明具	水中眼鏡、 但し昔は裸 眼	舟、箱眼鏡 を用いる場 合もある	舟、箱眼鏡 を用いる場 合もある
流域の少年	農民、流域 住民	農民及び流 域住民	流域住民	職漁者	職漁者
遊漁			遊漁	技術を要する	技術を要する



7	6	5	4	3	2	1	
柴 漬 け	か い 掘 り	瀬 干 し	手 摺 み 魚	堰 魚	築	鶉 飼	漁 法
漬け柴、かりこみ、 かいつけ、笹びて、 笹ぶて	川符、ケー掘り、干 かす、干上げ		ガマ掘り、鮎押し、 瀬押し、探り、手探 り	せき、ズリづけ、せ きのズリづけ			漁法の別称
コイ、フナ、ウグイ、 ナギ、ズ、テナガエビ、 スジエビ、モエビなど	シワナ、ヤマメ、カ ジカ、ウグイ、ウ グイ、フナ、ドジ コイ、フナ、ドジ ウなど	カジカ、ウグイ、ウ ナギ、アユ	ヤマメ、ウグイ、ウ ナギ、アユ、コイ、 フナ、ナマズ、ギバ チなど	降りアユ	イワナ、ヤマメ、ア ユ、ウグイ、ウナギ、 ナマズ、コイなど	アユ	対 象 魚
中、下流域の本支流 及び用水路、池、沼、 流れのゆるやかな水 域	上流から下流域の支 流や用水路	上流及び中流の州で 二分された瀬	上流から下流の本支 流の全水域	中流とその後の本 流及び支流	上、中流及びその支 流	中流とその上、下の 水域	漁 場
冬期	年間、春か ら秋が盛ん	年間、春か ら秋が盛ん	年間、夏期 とその前後 が盛ん	十月から十 一月	九月から十 一月	六月から十 月	漁 期
掬い網、雑 魚釜、刺網、 箆、ひっか き竿	掬い網、雑 魚釜	掬い網、雑 魚釜	素手	投網、又は さくり鉤、 ひっかき竿	築、規模に 大小あり	鶉	捕 採
竹簀	竹簀、桶、 バケツ、ジ ャレン、鍬、 シャベルなど	竹簀、桶、 バケツ、ジ ャレン、鍬、 シャベルなど		堰を設置	竹簀、丸太	シラタを用 いる場合も ある	使 用 漁 具 そ の 他
職漁者 半漁民 農民 流域住民	農民 流域住民 少年	農民 流域住民	職漁者 半漁民 少年 流域住民	職漁者 半漁民	半漁民	半漁民	漁 撈 者
		協同で行う場合が多 い	極めて原始的な漁法、 但し技術を要す			昼川、夜川の徒使い	摘 要

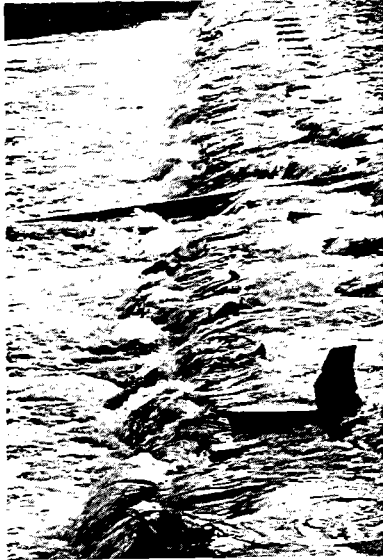
16	15	14	13	12	11	10	9	8
毒 魚	沢 蟹 捕 り	蜆 魚	鰻 搔 き	泥 鰻 掘 り	ブ ッ タイ	石 叩 き	石 ぶ ち	石 倉
毒もみ、毒流し		腰巻		ドジョウ拾い	ブツタイ掬い、掬い、 ブツテ	石ぶち、玄翁ぶち、 玄翁はたき	石打ち、石ぶつけ	川倉、石川倉
ヤマメ、カジカ、ウ グイなど	サワガニ	シジミ	ウナギ	ドジョウ	ヤマメ、ウグイ、オ イカワ、フナ、川エ ビ、カジカなど	ウグイ、オイカワ、 カジカなど	ウグイ、オイカワ、 アユ、タナゴ、フナ	ウナギ、ナマズ、ギ バチ、カジカ、ウグ イ、コイ、フナ、オ イカワ、ヤマメ、ア ユなど
主に上流域の細流	上、中流域の細流、 水路側の石積みなど	中、下流及び支流の 川底が泥質の水域、 下流が盛ん	中、下流水域、川底 が泥土の所、下流か ら河口、内湾が盛ん	中、下流域の水田地 帯の田圃と用水路	上流から下流の支流 や用水路、池、沼な ど	上、中流及び支流の 石のある瀬	中流とその上、下の 水域、夏は瀬、冬は 深みの日だまり	上、中流水域の流れ のゆるい場所
年間	五月から十 月	年間、特に 冬期	三月から十 月	十月から二 月、用水を 落した時期	年間	十二月から 二月	年間	年間
手網、掬い 網、ブツタイ ど、竹簀など	篠竹の先に 付けた蛙の むき身	貝掘り	鰻鎌	素手、又は 鍬	ブツタイ	掬い手網、 そば掬いな ど	石及び磔	雑魚釜、背 負い籠、ひ っかき竿、 籬、掬い網
毒材、サン シンの実と 樹皮、エゴ の实、薬灰			舟も使う			大石、大玄 翁		竹簀
流域住民 他所者	少年	職漁者 半漁民 流域住民	職漁者 半漁民	少年 農民	少年 流域住民	職漁者 半漁民 流域住民	少年 流域住民	職漁者 半漁民 流域住民
毒材は他に石灰、ク ルミ皮、昭和に入り 荷性ソーダ、青酸加 里など	遊漁		徒掻きと舟掻き		竹簀編みの掬い具		極めて原始的な漁法	

おわりに

かつて、多摩川の清冽な流れが沢山の魚族を育み、流域の人びとは様々な漁法で魚を捕らえ、鮎の川として知られる多摩川では、鮎漁を中心に多くの漁法が行われていた。豊かな魚族と発達した漁法に支えられた多摩川の漁撈文化は、明治とその後を含む時代に大きく開花して、長い漁撈の歴史の中に華やかな光彩を放つことになる。

その昔、田園地帯を縫いつつ流れる恵み豊かな多摩川は、生命力に溢れる流れとして、流域の人びとに計り知れない恩恵をもたらしてきた。中でも川漁に関わり合った人たちは、その恵みを存分に享受してきたが、川と流域の開発が進むにつれて、流れと人との緊密な連帯が徐々に断ち切られ、そうした崩壊の過程の中で流域一帯は変貌の速度を早め、長い歴史を誇る多摩川の伝統漁法は終焉を迎えることになる。

多摩川における川漁の終焉については、様々な理由があるが、かつてあれほど旺盛な生命力に満ち溢れていた流れに凋落の影を落したのは、先ず、治水の名の下に多摩川の生態系を無視した堰堤や護岸施設の構築である。これによって



その昔、清冽さを讃えられた多摩川であるが、今ではその面影すら伺うことはできない。／二子橋下・昭和四五年九月



川は自然の流れとしての機能を失ない、流れに生息する魚族は致命的な打撃を蒙ることになった。川は魚たちの生息場であると共に通路であり、流れを往來して生きねばならない宿命にある魚族にとって、堰の存在は決定的な影響を及ぼし、季節毎に流れを往還する魚種は、人工堰の出現でその数を激減させて行く。

一方、広大な流域の都市化は膨大な人口の出現であり、そのために

絶えず生活用水の確保が問題にされ、昔から清冽をもって知られる多摩川がそのままであろう筈がなかった。利水の名の下に流れから水を収奪し、多摩川は昔日の様相を変えて涸渇して行く。加えて流域からの生活排水の流入が、氣息えんえんと流れる多摩川の息の根を止めたのである。

だが多摩川は今を遡ること五十余年前に、すでにその相貌を大きく変えていた。関東大震災後、帝都の復興の名の下に、多摩川の砂利が大きく貢献したが、中流から下流にかけて至る所で搬出された砂利採掘のために、川床は一米以上も下がり、そこに生息する魚たちの生活の場と産床を破壊した。

こうした多摩川水域における環境の変化に加えて、漁撈の面では相も変わらず乱獲による魚族の収奪が続けられていたのである。その代表的なものには網漁法における「瀬付き漁」で、春に産卵期のウグイを捕るために人工産床を作り、そこに集まる魚群に一網打尽の投網を打って捕らえるもので、如何に多摩川が豊かであったとはいえ、こうした漁法が盛んに行われれば、次第に魚の数が減少することは当然の帰結であった。

かくして、長い伝統漁法の歴史とその輝かしい漁撈文化の足跡を秘めた多摩川は、現在では昔日の面影を留めぬ見るも無惨な姿になった。そこには、対応の遅れた河川行政と川離れた流域住民があるばかりで、汚濁にまみれた現在の流れからは、その昔、魚群を追う縄文人の雄叫びも、鵜飼に興じた川遊びの人たちの爽やかな笑顔も伺い知ることができない。

かつて流域の人びとにとって、母なる川としての多摩川は、今やコンクリートの護岸に固められた水路に成り果て、昔日の横溢した面影を偲ばせるものは何一つない。多摩川の生命をかくまで奪い、現実に見る呪わしい流れにしたのは、われわれ流域住民であり、今こそ責任と自覚が厳しく問い正されねばならない。かつて流域に生きた祖先たちが、代々に互って伝えた多摩川の伝統漁法の一つ一つが、今まで収奪を続けてきたわれわれの贖罪に対する様々な示唆を与えている。

多摩川水系の伝統漁法について調査するに当たり、多くの人々からの指導、援助を受け、ようやく報告書を上梓する運びとなったが、本書はそうした数多の人々の好意の賜であり、それなくして多摩川の伝統漁法の説明はあり得なかった。

調査にあたって、或る人は漁法について、また或る人は漁具について、説明の労を厭わずに心ゆくまで語って呉れた。だがそうした言葉の端々に、昔日の多摩川に対する思慕の念と現実の流れに対する諦念にも似た憤りが感じられた。皆一様に「昔の多摩川は良かった」と言い、昔を語る人々の表情は生き生きとして熱気を帯び、瞳は遙か遠い時代を探し求めるかの様であった。

そうした川へのロマンを模索しながら、多摩川の伝統漁法の一つ一つを調査したが、漁法の解説に当っては、現存する資料も極力利用した。だがそれでも、個々の漁法に関する疎密は免れ得なかった。文献資料にも残されず、また漁撈体験者が物故するなど、記録されずに消失した漁法も有るかと思われるが、今となっては如何ともなし難い。

願わくは、本書に記されていない多摩川の伝統漁法があれば、是非ともお知らせ頂く様お願いする次第である。

終りに、多摩川の伝統漁法の調査と研究に当り、深いご理解を示された財団法人とうきゅう環境浄化財団、並びにフィールドでの調査に際して、数多のご好意を寄せられた下記の方々並びに関係機関に対しては、心からなる御礼を申し上げる。

安 斎 忠 雄

協 力 者

(敬称略・五十音順)

天野タツ・新井俊夫・阿留多伎弘・石井道郎・伊藤潤一・稲葉松三郎・内山勇之助・大久根茂・岡部利和・岡部善重・神野善治・川辺昭吉郎・梶川謙三・北村敏・木村緑・小林勝太郎・小林茂・小坂広志・小森隆吉・坂本傳吉・島崎重治・鈴木由太郎・関口宣明・樽井千春・西村和久・橋爪隆尚・馬場憲一・羽生福次・原嘉文・藤塚悦司・古谷梅雄・町田清・三田鶴吉・宮田満・諸井敏・渡辺嘉平

協 力 機 関

(五十音順)

阿伎留神社・五日市町郷土館・奥多摩漁業協同組合・奥多摩町教育委員会・青梅市郷土博物館・大田区立郷土博物館・川崎市教育委員会・国立市教育委員会・群馬県立歴史博物館・埼玉県立博物館・下諏訪町立博物館・世田谷区立郷土資料館・台東区教育委員会・立川市教育委員会・多摩川漁業協同組合・多摩川漁業協同組合日野支部・多摩中央信用金庫多摩文化資料室・調布市郷土博物館・東京都水産試験場・羽田神社・府中市立郷土館・福生市教育委員会・日本テトラポッド株式会社・沼津市歴史民俗資料館

以 上

参 考 文 献

- 植田孟緒『武蔵名勝図会』慶友社版 昭和四二年
山田早苗『玉川泝源日記』慶友社版 昭和五〇年
蘆田伊人編『新編武蔵風土記稿』雄山閣版 昭和三二年
斎藤月岑・長谷川雪且『江戸名所図会』天保七年
相沢伴主『調布玉川絵図』隣人社
——『村鏡』・『青梅市史料第一号』青梅市教育委員会 昭和五五年
成島司直『玉川遊記』・『世田谷第一三号』世田谷区誌研究会 昭和
三七年
江口忠房『頼田之記』・『世田谷第一三号』世田谷区誌研究会 昭和
三七年
津田大浄『遊歴雜記』江戸叢書刊行会 大正五年
城東漁父『魚猟手引』・『釣魚秘伝集』渡辺書店 昭和四七年
* * * * *
多摩町誌編さん委員会『多摩町誌』多摩町役場 昭和四五年
奥多摩町教育委員会『奥多摩郷土小誌』 同所 昭和三九年
原島芳雄編『日原風土記』奥多摩町第六地区 昭和四三年
東京市役所『小河内貯水池郷土小誌』 昭和一三年
泉昌彦『奥多摩のたべもの』・『多摩のあゆみ第二二号』多摩中央信
用金庫 昭和五六年
瓜生卓造『多摩源流を行く』東京書籍 昭和五六年
戸倉村誌編纂委員会『戸倉』戸倉村 昭和四三年
石井道郎『近世の秋川鮎物語』・『研究紀要第六』東京都立五日市高
校 昭和四八年
五日市町史編さん委員会『五日市町史』五日市 昭和五一年
都立五日市高校『東京都立五日市高校出土石錘調査報告書』同校
瓜生卓造『檜原村紀聞』東京書籍 昭和五二年
鈴木哲太郎『西多摩郷土夜話』八潮書店 昭和五五年
渡辺嘉平『多摩のふるさと』ブックワールド鉄生堂 昭和五〇年
日野史談会『日野の歴史と文化・第一四号』昭和五五年
日野市平山小学校『つくし・第二五号』 昭和四九年
潮田鉄雄『川漁』・『青梅市の民俗Ⅰ』青梅市教育委員会 昭和四七
年
宮本常一・神保教子『青梅の民俗』・『青梅市の民俗Ⅱ』青梅市教育
委員会 昭和四七年
宮本常一・潮田鉄雄『生活の構造』柴田書店 昭和五三年
青梅小学校郷土誌編輯部『青梅郷土誌』西多摩郡青梅小学校 昭和一
六年
潮田鉄雄『羽村町の民具』羽村町教育委員会 昭和五四年
羽村町史編さん委員会『羽村町史』羽村町 昭和四九年
沼島市史編さん委員会『沼島市史附篇』沼島市 昭和五三年
木村龍生『序章のフョークロア』木村龍生論文集刊行委員会 昭和五
五年
福生町誌編集委員会『福生町誌』福生町役場 昭和三五年

福生市教育委員会『福生市文化財総合報告12・福生市の民俗・生業・

諸職』福生市 昭和五五年

福生市教育委員会『福生市の遺跡』福生市 昭和五二年

宮沢光顕『三多摩物語』有峰書店 昭和五〇年

立川市教育委員会『立川民俗シリーズⅣ 多摩川と生活―魚と伝統漁

法』立川市 昭和五五年

立川市史編纂委員会『立川市下巻』立川市 昭和五三年

立川市教育委員会『立川市史資料集第一集』立川市 昭和三八年

三田鶴吉「多摩川の記」・『多摩のあゆみ・創刊号』多摩中央信用金庫

昭和五〇年

立川市教育委員会『今昔写真集・たちかわ』立川市 昭和五〇年

同『立川民俗シリーズⅠ 立川のむかし話』立川市 昭和五二年

同『立川民俗シリーズⅢ 立川のわらべ遊び・わらべ唄』立川市 昭

和五四年

国立市民具調査団『国立第一小学校収蔵の民具』国立市教育委員会

昭和五五年

府中市『府中市史 下巻』東京都府中市 昭和四九年

同『府中市の現存民具調査集』東京都府中市 昭和四五年

同『統府中の風土誌』東京都府中市 昭和五一年

同『写真集・むかしの府中』東京都府中市 昭和五五年

三年

潮田鉄雄『稲城のものとくらし 第三集』稲城市教育委員会 昭和五

年

小塚信一『菅渡船場回顧録』菅町会 昭和四九年

小金井市誌編さん委員会『小金井市誌Ⅵ 今昔ばなし篇』小金井市

昭和五三年

世田谷区『新修世田谷区史・下巻』東京都世田谷区 昭和三二年

同『せたがやの歴史』東京都世田谷区 昭和五一年

同『世田谷の河川と用水』世田谷区教育委員会 昭和五二年

東京都世田谷区民俗調査団『せたがやの民俗』世田谷区教育委員会

昭和五四年

中村亮雄「菅の漁」・『川崎市文化財調査集録第八集』川崎市教育委

員会 昭和四八年

同「小向の漁」・『同第七集』 昭和四七年

同「大師の漁」・『同第三集』 昭和四二年

北村敏「多摩川河口の白魚漁」・『史誌第一六号』大田区史編さん委

員会 昭和五六年

同「漁業」・『大田区史・民俗篇』大田区史編さん室 昭和五八年

東京都大田区『大田区史』東京都大田区役所 昭和二六年

東京都大森区『大森区史』大森区役所 昭和一四年

亀山慶一「大森地区の漁撈伝承」・『史誌』大田区史編纂室 昭和五

二年

橋爪隆尚『羽田史誌』羽田神社 昭和五〇年

東京都大田区立羽田小学校『羽田郷土誌』羽田小学校 昭和二九年

小塚光治『川崎史話 下巻』多摩史談会 昭和五二年

* * *

安斎忠雄『多摩川中流域の漁撈具』立川市教育委員会 昭和六〇年

同「漁撈」・『多摩川誌』共著・建設省京浜工事事務所 昭和六〇年

同「竹筒漁について・綾瀬川水系の漁撈Ⅲ」・『埼玉民俗一二号』埼玉

市民俗の会 昭和五八年

同「槩」・『みずのわ二号』昭和四三年、「或る鶴匠」・『同四号』

四四年、「白魚」・『同八号』四五年、「溪流釣り」・『同七号』

四七年、「笠笠」・『同二四号』四九年、「鮎苗」・『同二七号』

五〇年、「手摺み漁」・『同三四号』五二年、「鰻捕り」・『同三

九号』五四年、「多摩川鮎」・『同四五号』五六年、「川漁」・『同

五〇号』五八年、「アイソ漁」・『同五四号』五九年——前澤工業

(株) みずのわ発行委員会

潮田鉄雄「民具の地域研究・笠漁」・『民具マンスリー六巻五・六号』

日本常民文化研究所 昭和四八年

日本常民文化研究所篇「多摩川の笠」・『民具マンスリー三巻四号』

日本常民文化研究所 昭和四五年

竹内秀雄「玉川の鮎猟」・『世田谷第一六号』世田谷区誌研究会 昭

和三九年

宮田満「多摩川における上ヶ鮎について」・『多摩郷土研究の会 第

四七号』多摩郷土研究の会 昭和五〇年

原嘉文「公私日記に見る玉川御用鮎について」・『公私日記 第一一

冊』立川市教育委員会 昭和五四年

中島恵子「多摩川聞書—川漁のことなど—」・(一)・(二)『西郊民俗第六八

・六九号』西郊民俗 昭和四九年

——『多摩風物詩』

原育夫『多摩川の水泳五十年』調布史談会 昭和四六年

石井作平『多摩のむかし話』有峰書店 昭和五一年

武蔵野郷土史刊行会『多摩の人物史』同所 昭和五二年

東京府水産試験場『東京府下内水面に於ける水産の概況』同所 昭和

一五年

東京府水産会『東京府島嶼及河川漁具図集』同所 昭和一六年

梶川謙三『東京都内水面漁業要覧』東京都内水面漁業協同組合連合会

昭和四三年

多摩聖蹟記念会『多摩の聖蹟』同所 昭和五六年

東京都内湾漁業興亡史編集委員会『東京都内湾漁業興亡史』同刊行会

昭和四六年

菊地利夫『東京湾史』大日本図書 昭和四九年

東京百年史編集委員会『東京百年史 第二・三巻』東京都 昭和四七

年

加藤迪『都市が減ぼした川』中央公論社 昭和四八年

滝井孝作「魚釣り」・『文学に見る日本の川・多摩川』日本週報社

昭和三五年

東陽堂編『風俗画報 第一七五号』東陽堂 明治三十一年

* * *

農商務省水産局『日本水産捕採誌』水産社 大正元年

日本学士院篇『明治前日本漁業技術史』日本學術振興會 昭和三四年
金田賴之『日本漁具・漁法図説』成山堂 昭和五二年

最上孝敏『原始漁法の民俗』岩崎美術社 昭和四二年

可兒弘明『鵜飼』中央公論社 昭和四一年

本山桂川『日本民俗図誌 第五卷』村田書店 昭和一八年

三角寛『サンカの社会資料篇』母念寺出版 昭和四六年

川崎房五郎『佃島と白魚漁業—その漁場紛争史』東京都 昭和五三年

栃木県立郷土資料館『下野の漁撈習俗』栃木県教育委員会 昭和五〇年

埼玉県農林部蚕糸特産課水産係篇『埼玉県の漁具漁法』同所

小林茂『戸田市の伝統漁法』埼玉県戸田市教育委員会 昭和四九年

同「鰻掻と鰻鎌(一)、(二)」・『民具マンスリー八巻三・四号』日本常民文化研究所 昭和五〇、五一年

同「荒川水系の筥」・『埼玉の文化財 第一六号』埼玉県文化財保護協会 昭和五一年

千葉県民俗総合調査団『東京湾の漁撈と人生』隣人社 昭和四二年

平塚市博物館『相模川の魚と漁』平塚市書籍商組合 昭和五三年

神野善治『筥漁の研究上・下』・『紀要六、七』沼津市歴史民俗資料館 昭和五七、五八年

同「浮島沼周辺の生産用具」・『紀要三』沼津市歴史民俗資料館 昭和五四年

日本常民文化研究所篇「鵜飼調査資料1〜7」・『民具マンスリー二巻四号〜一〇号』同所 昭和五〇〜五四年

武藤鉄城『秋田郡邑魚譚』アチックミューセウム 昭和一五年
Samuel Melner・Hermann Kessler『GREAT FISHING TACKLE CATALOGS of the golden age』Crown Publishers, N. Y. 1972

* * *

中村守純「魚類」・『多摩川流域自然環境保全調査報告書』観光資源保護財団 昭和四八年

同「多摩川水系魚類調査」・『多摩川流域自然環境保全調査報告書 第二、三次』とうきゅう環境浄化財団 昭和五一、五三年

中島富治「多摩川の魚」・『多摩のあゆみ第一九号』多摩中央信用金庫 昭和五五年

中村守純『原色淡水魚類検索図鑑』北隆館 昭和三八年

宮地伝三郎・川那部浩哉・水野信彦『原色日本淡水魚類図鑑』保育社 昭和五一年

井上実『魚の行動と漁法』恒星社厚生閣 昭和五三年

宮地伝三郎『アユの話』岩波書店 昭和三五年

小山長雄『アユの生態』中央公論社 昭和五三年

松井魁『うなぎの本』丸の内出版 昭和四六年

福田紫汀『毛鉤の話』丸の内出版 昭和四八年

建設省河川局監修『一九八一年河川ハンドブック』(社)日本河川協会 昭和五六年

著者略歴

1932年東京に生る。横浜市立大学商学部経済学科卒。
少年期を福島・栃木両県で過し清流の遊び漁を体験。現在は
余暇に内水面漁撈の調査・研究を行う。安斎宣伝研究室代表・
日本民俗学会々員・日本民具学会々員。

著書-『多摩川中流域の漁撈具』（立川市教育委員会）・
『多摩川誌』共著（建設省京浜工事事務所）、その他に論文、
ルポルタージュなど。

住所 埼玉県岩槻市鉤上新田514

『多摩川水系における川漁の技法と習俗』

発行日 昭和六十年一月十五日

著者 安斎忠雄

原発行所 財団法人とうきゅう環境浄化財団

増刷発行所 安斎宣伝研究室

埼玉県川口市東川ローの二三の一

ツネインビル

電話 ○四八二（九六）五二六六